杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群

出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年

出雲市教育委員会



出雲斐川中央工業団地の開発に伴う埋蔵文化財調査は、平成11年 (1999)、斐川町土地開発公社から委託を受けた斐川町教育委員会により着手されました。当時の調査では、杉沢遺跡を中心に、弥生時代中期の遺跡が良好な状態で残っていることが確認され注目を集めましたが、平成16年 (2004) の造成計画延期とともに発掘調査も中断することとなりました。

7年後の平成23年(2011),出雲市と斐川町が合併し,産業振興政策の一環として工業団地開発の再開に踏み切ることになります。そして,これに伴う埋蔵文化財調査も,平成24年(2012)から本格的に開始しました。平成26年(2014)まで続いた約3ヵ年の調査では,国指定史跡荒神谷遺跡と同時期の弥生時代集落をはじめ,古墳時代終末期の横穴墓群,さらには丘陵尾根を通る奈良時代前半の稀有な道路遺構を発見するなど,斐川地域の歴史,ひいては2033年に編纂1300年を迎える『出雲国風土記』時代の出雲地域を考える上で,大変貴重な資料を得ることができました。

本書では、合併前の調査を含めた杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横 穴墓群の発掘調査成果を報告します。本書にまとめた成果が出雲市 の埋蔵文化財に対する理解と関心を高め、また歴史学習の一助とな れば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり多大なるご理解とご協力を賜りました地元住民の皆様、指導者の皆様をはじめ、各方面の方々に対し心からお礼申し上げます。

平成28年3月

出雲市教育委員会 教育長 槇 野 信 幸

例 言

- 1. 本書は、出雲斐川中央工業団地の造成工事に伴い、斐川町教育委員会が平成11~16年度、出雲市が平成24~26年度に実施した杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の試掘調査および発掘調査の報告書である。
- 2. 「出雲斐川中央工業団地」の名称は平成27年6月に正式決定したものである。決定前の名称の変遷は以下のとおりである。本書では、基本的に正式決定後の名称を用いる。

平成11~24年度···················斐川中央工業団地 平成25年度~平成27年5月······(仮称)出雲斐川中央工業団地

3. 試掘調査・発掘調査は、下記の期間において実施した。
 斐川町 調 査 平成11年(1999)2月~平成16年(2004)3月
 出雲市 試掘調査 平成24年(2012)7月2日~同年10月10日
 発掘調査 平成24年(2012)10月29日~平成26年(2014)8月29日

- 4. 発掘調査を実施した地番は、次の通りである。 島根県出雲市斐川町直江3801番外
- 5. 調査は下記の体制で実施した。 ※カッコ内の数字は年度 出雲市文化環境部 (平成24~26), 市民文化部 (平成27~)

学芸訓	爾整官	花谷 浩 (平成24~27)
同文化財課	課長	福間 浩 (平成24)
闰	課長	玉木良夫 (平成25~27.6)
闰	課長	佐藤隆夫 (平成27.7~)
闰	課長補佐	宍道年弘 (平成24~27)
闰	係長	景山真二 (平成24~27, 調査員)
闰	主任	岸 道三 (平成24,調査員)
同	主任	江角 健(平成24~27,調査員)
同	主任	佐々木歩美 (平成26・27、調査員)
同	主事	幡中光輔(平成24~27,調査員)
同	主事	景山このみ (平成25~27, 調査員)
闰	臨時職員	大田晴美(平成24~27,調査補助員)
同	臨時職員	樋野千晴(平成24~27,調査補助員)

同文化財課 臨時職員 足立敏郎 (平成24~26, 調査補助員)

同 臨時職員 今若豊実(平成24・25,調査補助員)

同 臨時職員 糸賀伸文(平成27,調査補助員)

同 臨時職員 小松原智明(平成27,調査補助員)

同 室内整理作業員 前島浩子, 吉村香織, 鵜口令子

荒木恵理子, 飯國陽子 (平成24~27)

6. 報告書作成にあたって、下記の方々から玉稿を賜った(敬称略、順不同)。

渡邉 正巳 (文化財コンサルタント株式会社)

畠山 唯達 (岡山理科大学情報処理センター)

田村 朋美 (奈良文化財研究所)

井上 貴央 (医療法人真誠会 老健ゆうとぴあ施設長, 鳥取大学名誉教授)

7. 調査,整理作業にあたっては、下記の方々及び機関からご指導・ご協力をいただいた(敬称略,順不同)。

文化庁文化財部記念物課,島根県教育庁文化財課,島根県教育庁埋蔵文化財調査センター,鳥取 県埋蔵文化財センター

今岡一三(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査第1課長), 角田徳幸(島根県立古代出雲歴史博物館交流普及課長), 椿真治(島根県教育庁文化財課調整監), 深田浩(島根県教育庁文化財課主幹), 渡邊貞幸(島根大学法文学部名誉教授, 出雲弥生の森博物館館長), 松本岩雄(島根県立八雲立つ風土記の丘所長), 小寺智津子(日本学術振興会特別研究員), 原田敏照(島根県教育庁文化財課企画員), 西尾克己(大田市教育委員会石見銀山課特任講師), 大谷晃二(島根県立松江北高等学校教諭), 勝部昭(島根県文化財保護審議会委員), 大橋泰夫(島根大学法文学部教授), 大日方克己(島根大学法文学部教授), 木本雅康(長崎外国語大学外国語学部教授), 近江俊秀(文化庁文化財部記念物課文化財調査官), 澤田正明(島根県立古代出雲歴史博物館主任学芸員), 池橋達雄(出雲市文化財保護審議委員), 平野芳英(荒神谷博物館副館長), 坪内実加(荒神谷博物館学芸員), 三宅博士(松江市立出雲玉作資料館館長), 中村唯史(島根県立三瓶自然館学芸員)

- 8. 発掘作業 (安全管理, 発掘作業員の雇用, 機材等の借上) については, 平成24年度から26年度にかけて, 株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
- 9. 自然科学分析および保存処理については、下記の通り外部委託により実施した。

炭化物サンプル、人骨の年代鑑定、石材鑑定………文化財調査コンサルタント株式会社

鉄製品の保存処理………………フジテクノ有限会社

ガラス小玉の自然科学分析……………奈良文化財研究所

- 10. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示す。レベル高は海抜高を示す。
- 11. 本書では、世界測地系第Ⅲ系および出雲市都市計画図に基づいて作成した出雲市グリッド(iv頁 掲載)を使用し、遺構等の位置を示す。
- 12. 本書における横穴墓の部分名称については、iv頁掲載の模式図に示したとおりである。
- 13. 本書掲載の遺物実測図については、調査員および調査補助員の大田、樋野、今若、足立が作成した。
- 14. 遺物の写真撮影は、坂本豊治(出雲市文化財課主任)の指導のもと、幡中、景山こが行った。
- 15. 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の出土遺物及び実測図,写真は出雲市文化財課で保管している。
- 16. 本書を作成するにあたり、編年および過去の調査について下記の参考文献を利用した。本文引用時には、略称(カッコ内が略称)を用いた。

【編年参考文献】

弥生土器(松本編年)

松本岩雄・正岡睦夫編 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

須恵器 (大谷編年)

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11号 島根考古学会 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調 査報告第8集 平田市教育委員会

【工業団地関連の既刊報告書】

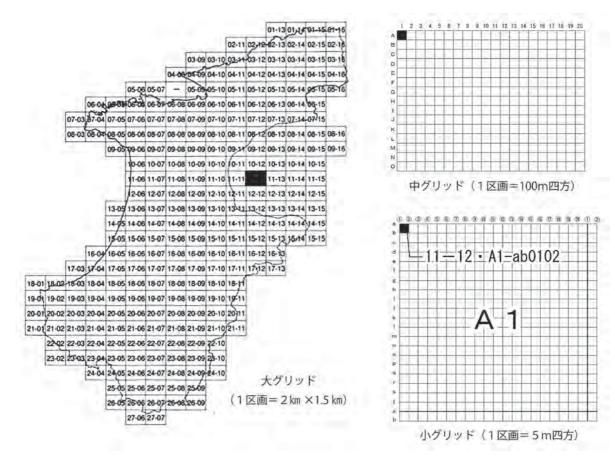
(斐川13)『町道杉沢線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』斐川町文化財調査13, 1992年

(斐川24)『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』斐川町文化財調査24, 2001年

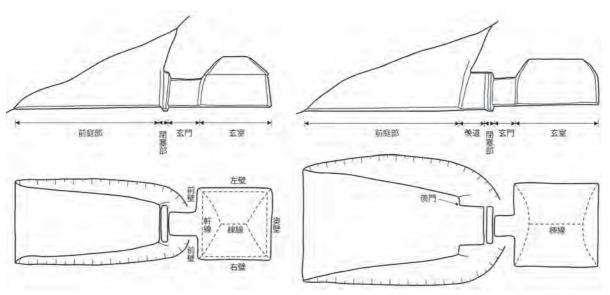
(斐川26)『杉沢Ⅲ遺跡』斐川町埋蔵文化財調査報告26,2001年

また、風土記関連の記載(地名等)については、島根県古代文化センター編2014『解説 出雲国風土記』による。

17. 本書の作成は、花谷の指導のもと、景山真、江角、幡中、景山この協議に基づいて行い、全体の編集は景山こが行った。



グリッド図



横穴墓模式図と部分名称

目 次

第1	章	調査	:に至る経緯 ······	• 1
第2	章	遺跡	ぶの位置と環境	. 7
第3	章	範囲	確認調査および試掘調査	13
第 4	章	杉沢	遺跡の調査	37
	第1	節	A 丘陵北斜面の調査 ·······	38
	第2	節	B 丘陵の調査	41
	第3	節	C 丘陵の調査 ····································	77
	第 4	節	D丘陵の調査	17
第5	章	杉沢	!Ⅱ 遺跡の調査	41
第6	章	杉沢	横穴墓群の調査	71
第7	章	自然	科学分析	27
	第1	節	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群における放射性炭素年代測定	27
	第2	節	杉沢遺跡建物跡の古地磁気測定とその意味	239
	第3	節	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の自然科学的調査	:46
	第4	節	杉沢横穴墓群 4 号横穴墓における閉塞石の石材鑑定	252
	第5	節	杉沢横穴墓群12号横穴墓出土の人骨について2	259
第8	章	総括	; ····································	263
	第1	節	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群調査の総括2	263
	第2	節	出雲地域における弥生集落遺跡と杉沢集落 2	269
	第3	節	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の流入経路2	281
	第4	節	出雲西部の意字型横穴墓からみた古墳時代終末期の様相2	287
	第5	節	古代山陰道の推定ルート復元3	80 6
第9	章	結語	; 3	311
付論	Ξ	井Ⅱ	遺跡の瓦窯と瓦について	313
遺物	観察	表…	3	349
写真	図版	į	3	69
報告	書抄	海…	4	43

挿 図 目 次

【第1章	調査の経過】	第26図	谷部・平	^区 地試掘トレンチの位置 ······32
第1図	平成24年度調査前(北から)1	第27図	谷部・平	产地試掘トレンチ柱状図33
第2図	調査地周辺の遺跡と関連調査区配置図…2	第28図	谷部4・	7 トレンチ出土遺物34
第3図	現地説明会6			
第4図	古代山陰道シンポジウム6	【第4章	杉沢遺跡	亦の調査】
		第29図	調査地西	2置図37
【第2章	遺跡の位置と環境】	第30図	杉沢遺跡	FA 丘陵北斜面のトレンチ
第5図	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・		配置	38
	杉沢横穴墓群の位置7	第31図	杉沢遺跡	FA丘陵北斜面の遺構 ⋯⋯⋯39
第6図	調査地の位置と周辺の遺跡①10	第32図	А 3 トレ	・ンチ遺構出土遺物 · · · · · · 40
第7図	調査地の位置と周辺の遺跡②11	第33図	杉沢遺跡	B丘陵調査区全体図 ·····42
		第34図	B 1区	加工段SX201 ······43
【第3章	範囲確認調査および試掘調査】	第35図	B 2区	加工段SX202······43
第8図	範囲確認調査・試掘調査対象範囲13	第36図	B 2区	加工段SX203······44
第9図	杉沢遺跡B丘陵範囲確認トレンチ	第37図	B 2区	加工段SX204~SX206······45
	配置図14	第38図	B 2区	溝 SD221 ······46
第10図	杉沢遺跡B丘陵試掘トレンチ土層図①…15	第39図	B 3区	加工段SX207······47
第11図	杉沢遺跡B丘陵試掘トレンチ土層図②…16	第40図	B 3区	加工段SX208・溝SD222・
第12図	杉沢遺跡B丘陵試掘トレンチ土層図③…17		土坑SK2	23148
第13図	杉沢遺跡B丘陵試掘トレンチ出土遺物…18	第41図	В3区	加工段SX209·····49
第14図	杉沢遺跡C丘陵トレンチ配置図19	第42図	В3区	溝 SD223 ······50
第15図	杉沢遺跡C丘陵試掘トレンチ土層図①…20	第43図	В3区	溝 SD224 ·····50
第16図	杉沢遺跡C丘陵試掘トレンチ土層図②…21	第44図	B 3区	溝 SD225 ·····51
第17図	杉沢遺跡C丘陵試掘トレンチ土層図③…22	第45図	B 4 ⊠	加工段SX210·溝SD226······52
第18図	杉沢遺跡C丘陵試掘トレンチ出土遺物…23	第46図	B 5区	加工段SX211 ·····53
第19図	杉沢遺跡D丘陵試掘トレンチ配置図24	第47図	B 5区	加工段SX211
第20図	杉沢遺跡D丘陵試掘トレンチ土層図 … 26		東端土器	异 出土状況 · · · · · · · 53
第21図	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ配置図27	第48図	B 5区	加工段SX212·
第22図	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図①28		溝 SD227	7 · SD228 ·····55
第23図	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図②29	第49図	В5区	加工段SX213·溝SD230······55
第24図	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図③30	第50図	B 5区	加工段SX214·溝SD229······56
第25図	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ出土遺物31	第51図	B 5 区	溝 SD229 ······57

第52図	B 1区	加工段SX201出土遺物 ······58	第80図	C 2区	土坑SK331·SK332······84
第53図	B 2区	加工段SX202出土遺物 ······58	第81図	C 2 ⊠	タコ壺群85
第54図	B 2区	加工段SX203出土遺物 ······59	第82図	タコ壺の	方向と周辺地形および
第55図	B 2 ⊠	加工段SX204·SX205		関連施設	t ······86
	出土遺物	勿60	第83図	C 3 ⊠	加工段SX314 ピット断面 87
第56図	B 2区	加工段SX206・溝SD221	第84図	C 3区	竪穴建物 SI304 ピット断面 … 88
	出土遺物	勿61	第85図	C 3区	加工段SX315・溝SD321
第57図	B 3区	加工段SX207·SX208出土遺物…62		ピット樹	f面89
第58図	В3⊠	溝 SD222 出土遺物 ·····63	第86図	C 3区	竪穴建物 SI305 ピット断面 …91
第59図	B 4区	加工段SX210出土遺物 ······63	第87図	C 3区	竪穴建物 SI305 被熱部断面 ···· 92
第60図	B5区	加工段SX211東端部土器溜まり	第88図	C 3区	加工段SX316 ······93
	出土遺物	勿65	第89図	C 4区の)遺構94
第61図	B5区	加工段SX211西半部土器溜まり	第90図	C 4 ⊠	加工段SX317・溝SD322
	出土遺物	勿66		ピット樹	f面 ······95
第62図	B 5区	加工段SX211出土遺物 ······67	第91図	C 4 ⊠	加工段SX318 ······96
第63図	B5区	加工段SX212出土遺物 ······67	第92図	C 4 ⊠	加工段SX319 ······97
第64図	B 5区	加工段SX213出土遺物① ······69	第93図	C 4 ⊠	加工段SX320·溝SD325······98
第65図	B5区	加工段SX213出土遺物② ······70	第94図	C 4 ⊠	加工段SX320 ピット99
第66図	B 5区	加工段SX214·溝SD229	第95図	C 2区	竪穴建物 SI301 出土遺物 100
	出土遺物	勿70	第96図	C 2区	加工段SX312出土遺物 ······· 100
第67図	B 1区	包含層出土遺物72	第97図	C 3区	竪穴建物 SI304 出土遺物 102
第68図	B 2区	包含層出土遺物72	第98図	C 3区	竪穴建物 SI305 出土遺物 103
第69図	B3区	包含層出土遺物72	第99図	C 3区	加工段SX314出土遺物 ······· 104
第70図	B 4区	包含層出土遺物74	第100図	C 3区	加工段SX315出土遺物 104
第71図	B 5区	包含層出土遺物75	第101図	C 3区	加工段SX316出土遺物 105
第72図	杉沢遺跡	旅B丘陵と	第102図	C 4 ⊠	加工段SX317~SX319
	平成4年	年度調査区の遺構配置76		出土遺	物106
第73図	杉沢遺跡	亦C丘陵調査区全体図 ·····77	第103図	C 4 ⊠	加工段SX320出土遺物 108
第74図	C 1 区组	全体図78	第104図	C 4 ⊠	溝SD322出土遺物 ·····109
第75図	C 2区	竪穴建物 SI30179	第105図	C 1 ⊠	包含層出土遺物①110
第76図	C 2区	掘立柱建物 SB302・SB303 ····· 80	第106図	C 1 ⊠	包含層出土遺物②111
第77図	C 2区	掘立柱建物 SB302 復元案 ······81	第107図	C 2区	包含層出土遺物112
第78図	C 2区	加工段SX311·SX312,	第108図	C 3区	包含層出土遺物①113
	ピットタ	∬SP346∼SP357·····82	第109図	C 3区	包含層出土遺物②114
第79図	C 2区	加工段SX313 ······83	第110図	C 4区	包含層出土遺物115

第111図	杉沢遺跡 D 丘陵調査区全体図117	【第5章	杉沢Ⅱ遺跡の調査】
第112図	D 1 · D 2 区調査区全体図 ······118	第139図	杉沢Ⅱ遺跡調査区全体図141
第113図	D1区 西壁土層図118	第140図	E1区 加工段SX511······142
第114図	D3 · D4区調査区全体図 ······119	第141図	E 1 区 溝 SD521·土坑 SK531······143
第115図	D1区 西壁土層図	第142図	E 2区 加工段SX512······144
	道路側溝部拡大図119	第143図	E 2区 土坑SK532······145
第116図	D 2 トレンチ東壁土層図 · · · · · · · · 120	第144図	E 3 区 竪穴建物 SI501·溝 SD522···146
第117図	D 3 トレンチ東壁・拡張部土層図 … 120	第145図	E 3 区 竪穴建物 SI501 ······147
第118図	D 4 トレンチ東壁土層図 · · · · · · · 121	第146図	E4区 加工段SX513·SX514
第119図	道路遺構 切土·盛土工法模式図121		遺物出土状況 · · · · · · 149
第120図	道路側溝及び溝断面図 … 122	第147図	E5区 加工段SX515·SX516······150
第121図	D1区 道路側溝 (西から)123	第148図	E6区 加工段SX517·SX518······151
第122図	波板状凹凸面模式図 … 123	第149図	E 1 区 遺構出土遺物 ·······153
第123図	D1区 波板状凹凸面	第150図	E 2 区 遺構出土遺物 ·······154
	詳細図及び断面図・土層図124	第151図	E 3 区 竪穴建物 SI501 出土遺物① ··· 155
第124図	東西大溝 SD401 · 溝 SD403 土層図 · · · · 125	第152図	E 3 区 竪穴建物 SI501 出土遺物② ··· 156
第125図	D4区東壁土層図・拡大図 ······126	第153図	E 3 区 溝 SD522 出土遺物158
第126図	東西大溝SD401	第154図	E 4 区 加工段SX513出土遺物 ······ 160
	左: 土層写真 (東から)	第155図	E 4 区 加工段 SX514 出土遺物 161
	右:ラミナ状堆積 (20層)126	第156図	E 5 · E 6 区 遺構出土遺物 · · · · · · · 163
第127図	D5 · D6区調査区全体図 ······127	第157図	E 1 区 包含層出土遺物 ············ 164
第128図	D5区の遺構 ······128	第158図	E 2区 包含層出土遺物 ······165
第129図	D6区 炭焼土坑SK423129	第159図	E 3 区 包含層出土遺物 ·······166
第130図	炭焼土坑SK423	第160図	$E4 \cdot E5 \cdot E6 \boxtimes$
	調査状況 (南東から)129		包含層出土遺物167
第131図	D7区調査区全体図 ······130		
第132図	溝 SD412 調査状況 (北西から)130	【第6章	杉沢横穴墓群の調査】
第133図	D7区 溝SD411·SD412断面図·····131	第161図	杉沢横穴墓群全体図172
第134図	D7区 土坑SK424·SK425······131	第162図	杉沢横穴墓群正面図 (オルソ画像) … 173
第135図	D丘陵 遺構出土遺物 ······133	第163図	1号横穴墓 遺構・土層図174
第136図	D1~D4区 包含層出土遺物 ······134	第164図	1号横穴墓 出土遺物実測図175
第137図	D 5 · D 6 区 包含層出土遺物 ······136	第165図	2号横穴墓 遺構・土層図 ·······176
第138図	D 7 区 包含層出土遺物 ······137	第166図	2号横穴墓 出土遺物実測図177
		第167図	3号横穴墓 遺構・土層図178
		第168図	3号横穴墓 出土遺物実測図179

第169図	4号横穴墓	遺構・土層図181	第202図	小浜山横穴墓群・尾崎横穴墓群の
第170図	4号横穴墓	閉塞石・遺物出土状況 … 182		アーチ形・アーチ系テント形の
第171図	4号横穴墓	出土遺物実測図183		天井形態を持つ横穴墓223
第172図	5号横穴墓	遺構図① · · · · · · · · 185	第203図	4号・14号横穴墓 前庭部・
第173図	5号横穴墓	遺構図②・土層図186		羨道出土須恵器と接合関係224
第174図	5号横穴墓	遺物出土状況186		
第175図	5号横穴墓	出土遺物実測図187	【第7章	自然科学分析】
第176図	6号横穴墓	遺構・土層図188	第1節	
第177図	7号横穴墓	遺構・土層図190	第204図	調査区平面図及び試料採取地点
第178図	7号横穴墓	出土遺物実測図191		(杉沢横穴墓群, A丘陵) ······227
第179図	8号横穴墓	遺構・土層図193	第205図	杉沢横穴墓群 試料採取層準 … 228
第180図	8号横穴墓	出土遺物実測図194	第206図	試料採取層準(杉沢横穴墓群上) 228
第181図	9号横穴墓	遺構・土層図195	第207図	資料採取地点・層準
第182図	10号横穴墓	遺構図①197		(杉沢遺跡 C 丘陵) ······229
第183図	10号横穴墓	遺構図②·土層図198	第208図	調査区平面図および試料採取地点
第184図	10・13号横方	穴墓 出土遺物実測図····199		(杉沢遺跡D丘陵) ······229
第185図	11号横穴墓	遺構・土層図200	第209図	試料採取層準(杉沢遺跡D丘陵)230
第186図	12号横穴墓	遺構・土層図202	第210図	試料採取地点・層準 (杉沢Ⅱ遺跡) … 230
第187図	12号横穴墓	人骨出土状況203	第211図	暦年較正結果① · · · · · · · 232
第188図	12号横穴墓	出土人骨部位203	第212図	暦年較正結果② 233
第189図	13号横穴墓	遺構・土層図205	第213図	軟 X 線写真観察結果 · · · · · · 234
第190図	14号横穴墓	遺構・土層図207	第214図	暦年較正結果の分布 (杉沢横穴墓群) … 236
第191図	14号横穴墓	閉塞石·遺物出土状況 ··· 208	第215図	暦年較正結果の分布(杉沢遺跡D丘陵)…237
第192図	14号横穴墓	出土遺物実測図209	第2節	
第193図	15号横穴墓	遺構図①	第216図	被熱床面試料および非被熱床面試料に
第194図	15号横穴墓	遺構図②·土層図212		ついての消磁前の自然残留磁化 (NRM)
第195図	15号横穴墓	遺物出土状況212		方位240
第196図	15号横穴墓	出土遺物実測図213	第217図	(A)被熱および非被熱床面の15mT 交流
第197図	丘陵上東西·	丘陵南北土層の位置214		消磁後の方位 (B) 段階交流消磁後の主
第198図	丘陵上東西土	上層図215		成分分析による特徴的方位241
第199図	丘陵南北土層	喜図216	第218図	本研究による安定古地磁気方位と過去の
第200図	杉沢横穴墓郡	羊周辺の出土遺物217		研究, および地磁気変動モデルの比較
第201図	安部谷横穴墓	喜群		······241
	第 T 支群 1 。	3 是壹		

第219図	竪穴建物SI305・加工段SX320の焼土部	第239図	12号横穴墓 出土人骨写真(上腕骨・左
	と非焼土床面から採取した試料の熱磁気		脛骨・右大腿骨・左大腿骨)261
	分析結果 · · · · · · 243		
第3節		【第8章	総括】
第220図	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の	第1節	
	顕微鏡写真248	第240図	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群
第221図	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の		主要遺構配置図263
	CR 画像249	第241図	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の
第222図	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の		消長264
	AR 画像 ······249	第242図	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡の
第223図	カリガラスの		器種別割合266
	Al ₂ O ₃ -CaO 含有量による分類250	第2節	
第224図	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の	第243図	出雲平野の主な弥生時代遺跡269
	可視分光スペクトル250	第244図	斐伊川東岸南部 (斐川地域) の
第225図	(左) 福岡県井原ヤリミゾ遺跡16号甕棺		弥生時代遺跡271
	墓出土品 (右)兵庫県東山1号墓出土品	第245図	地域区分271
	251	第246図	集落遺跡の地域別立地 274
第4節		第247図	中期後葉の竪穴建物規模比較276
第226図	調査地点252	第248図	中期後葉段階の搬入品と出土地域・・・・277
第227図	杉沢横穴墓群 4 号横穴墓玄門部	第3節	
	断面252	第249図	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉281
第228図	石材比較試料採取地点の	第250図	弥生時代各期におけるガラス玉類
	ルートマップ252		出土遺跡数と地域の変遷 (西日本) … 283
第229図	石材比較試料採取地点 (St. 1) ······253	第251図	弥生時代各期におけるガラス玉類
第230図	石材比較試料採取地点(St. 2) ······253		出土遺構数 (左) と出土点数 (右)283
第231図	西側閉塞石顕微鏡写真254	第252図	中国地方のガラス玉出土遺跡284
第232図	東側閉塞石顕微鏡写真255	第253図	島根県内の弥生時代ガラス製品
第233図	St. 1 - 1 顕微鏡写真256		出土遺跡285
第234図	St. 1 - 2 顕微鏡写真256	第4節	
第235図	St. 2 - 1 顕微鏡写真257	第254図	杉沢横穴墓群 (中央) と東西出雲の横穴
第236図	St. 2 - 2 顕微鏡写真257		墓群(左 小浜山横穴墓群, 右 安部谷
第237図	St. 2-3 顕微鏡写真258		横穴墓群)287
第5節		第255図	杉沢横穴墓群と斐川町周辺の
第238図	12号横穴墓 出土人骨写真 (頭蓋骨・下		横穴墓(群)・横穴式石室289
	顎骨)と歯の部位模式図261		

第256図	岩海横穴墓群1号穴(左)と	【付論 三	፲井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について】
	海の平横穴墓群 2 号穴 (右)289	第270図	三井Ⅱ遺跡1号瓦窯跡関係の
第257図	平野横穴墓群の立地 (上) と		試掘調査位置図313
	西支群 (左下)・東支群 (右下)290	第271図	1号瓦窯跡実測図と
第258図	平野横穴墓群と杉沢横穴墓群の		磁気探査成果の合成図 314
	形態・時期の比較一覧 291	第272図	三井Ⅱ遺跡調査区配置図および26・32・
第259図	平野横穴墓群西支群5号横穴墓(左)と		33トレンチ平面図, 土層図317
	東支群10号横穴墓(右)292	第273図	軒丸瓦319
第260図	上塩冶横穴墓群第6・22支群における	第274図	丸瓦321
	羨道・玄門を持つ横穴墓······294	第275図	平瓦①322
第261図	上塩冶横穴墓群第23・36支群・山根横穴	第276図	平瓦② · · · · · · 323
	墓・尾崎横穴墓群の羨道・玄門を持つ横	第277図	平瓦③324
	穴墓295	第278図	鴟尾①326
第262図	東西出雲における石棺式石室と	第279図	鴟尾② およびその他の瓦磚327
	意宇型横穴墓の分布状況297	第280図	鴟尾③328
第263図	石棺式石室・意宇型横穴墓の	第281図	須恵器330
	分布状況と時系列的変遷 298	第282図	神門寺境内廃寺出土軒瓦一覧331
第5節		第283図	神門寺境内廃寺出土1型式軒丸瓦①…332
第264図	下直江村の絵図 右図拡大(上が南)…306	第284図	神門寺境内廃寺出土1型式軒丸瓦②…333
第265図	尾根上ルート想定図307	第285図	神門寺境内廃寺出土
第266図	推定路線の空中写真308		2型式~4型式軒丸瓦と鬼瓦334
第267図	香取神社切通し309	第286図	神門寺境内廃寺出土軒平瓦 · · · · · · 335
第268図	造成工事計画変更図 · · · · · · · 309	第287図	壱丁田遺跡の軒丸瓦(1)と
第269図	埋戻状況・シート養生 (西から)310		稲城・小野遺跡の軒丸瓦(2~8)…336
		第288図	神門寺境内廃寺調査区配置図338
		第289図	神門寺境内廃寺塔基壇推定復元図…339
		第290図	神門寺境内廃寺における
			型式別軒瓦分布図 · · · · · · · 340
		第291図	奈良時代前半までの瓦当紋様にみる
			出雲の東西342

挿 表 目 次

【第1章	調査の経過】	【第8章	総括】
第1表	平成24~27年度の調査スケジュール4	第2節	
第2表	調査の経過5	第13表	田中 (1996) における
			出雲平野の弥生集落群区分270
【第3章	範囲確認調査および試掘調査】	第14表	各集落群にみえる「拠点集落」的性格 … 270
第3表	杉沢遺跡B丘陵試掘トレンチの	第15表	出雲平野の弥生集落 (斐伊川西岸)272
	調査概要14	第16表	出雲平野の弥生集落 (斐伊川東岸) 273
第4表	杉沢遺跡C丘陵試掘トレンチの	第17表	出雲平野の竪穴建物跡比較275
	調査概要20	第3節	
第5表	杉沢遺跡D丘陵試掘トレンチの	第18表	ガラス小玉の法量281
	調査概要25	第19表	島根県内の弥生時代ガラス製品一覧…285
第6表	杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチの調査概要28	第4節	
第7表	谷部試掘トレンチの調査概要33	第20表	出雲西部における羨道・玄門を持つ
			横穴墓の玄室形態と時期295
【第6章	杉沢横穴墓群の調査】		
第8表	杉沢横穴墓群の法量・形態一覧220	【付論 三	Ξ井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について】
		第21表	三井Ⅱ遺跡試掘調査出土瓦数量表315
【第7章	自然科学分析】	第22表	26・32・33トレンチの瓦集計表318
第1節		第23表	神門寺境内廃寺出土軒瓦型式別一覧…331
第9表	AMS 年代測定結果 · · · · · · 231		
第2節			
第10表	古地磁気方位と弥生時代中期後葉の		
	地磁気方位241		
第3節			
第11表	杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の		
	蛍光X線分析結果 ······249		
第4節			
第12表	鑑定結果254		

図 版 目 次

VI			1.00 H. J H. W. O. E. H. J H. (4.00 F. 64.)
巻頭カラ	・一図版 杉沢Ⅱ遺跡から	図版30	
	仏経山を望む (北西から)		5~9号横穴墓第2次調査前(2003年)
図版 1	調査地全景	図版31	杉沢横穴墓群第3次調査前(2012年)
図版2	弥生時代の竪穴建物跡 (杉沢遺跡 C 丘陵)	図版32	杉沢横穴墓群 4 号横穴墓
図版3	弥生土器出土状況 (杉沢遺跡 C 丘陵)	図版33	杉沢横穴墓群 5 号横穴墓
図版4	弥生時代の竪穴建物跡と	図版34	杉沢横穴墓群 6 号横穴墓
	出土遺物(杉沢Ⅱ遺跡)	図版35	杉沢横穴墓群7号横穴墓
図版5	弥生時代中期の土器・土製品	図版36	杉沢横穴墓群8号横穴墓
図版 6	弥生時代の出土遺物①	図版37	杉沢横穴墓群 9 号横穴墓
図版7	弥生時代の出土遺物②	図版38	杉沢横穴墓群10号横穴墓
図版 8	杉沢横穴墓群全景①	図版39	杉沢横穴墓群11号横穴墓
図版 9	杉沢横穴墓群全景②	図版40	杉沢横穴墓群12号横穴墓
図版10	杉沢横穴墓群の出土土器とオルソ画像	図版41	杉沢横穴墓群13号横穴墓
図版11	古代道路遺構①	図版42	杉沢横穴墓群14号横穴墓①
図版12	古代道路遺構②	図版43	杉沢横穴墓群14号横穴墓②
図版13	古代道路遺構③	図版44	杉沢横穴墓群15号横穴墓
図版14	古代道路遺構④	図版45	杉沢横穴墓群丘陵南北・東西土層断面と
図版15	杉沢遺跡C丘陵の戦争遺構		調査指導の様子
図版16	三井Ⅱ遺跡出土瓦・鴟尾	図版46	杉沢遺跡D丘陵 (D5・D6区) の遺構
図版17	杉沢遺跡B丘陵の遺構①	図版47	試掘・範囲確認調査の出土遺物
図版18	杉沢遺跡B丘陵の遺構②	図版48	杉沢遺跡B丘陵の弥生土器①
図版19	杉沢遺跡B丘陵の遺構③	図版49	杉沢遺跡B丘陵の弥生土器②
図版20	杉沢遺跡B丘陵の遺構④	図版50	杉沢遺跡B丘陵の弥生土器②・
図版21	杉沢遺跡C丘陵の遺構①		土製品・石製品①
図版22	杉沢遺跡C丘陵の遺構②	図版51	杉沢遺跡B丘陵の石製品②
図版23	杉沢遺跡C丘陵の遺構③	図版52	杉沢遺跡C丘陵の弥生土器①
図版24	杉沢遺跡C丘陵の遺構④	図版53	杉沢遺跡 C 丘陵の弥生土器②
図版25	杉沢遺跡C丘陵の遺構⑤	図版54	杉沢遺跡C丘陵の弥生土器③・石製品①
図版26	杉沢Ⅱ遺跡の遺構①	図版55	杉沢遺跡C丘陵の石製品②
図版27	杉沢Ⅱ遺跡の遺構②	図版56	杉沢Ⅱ遺跡の土器①
図版28	杉沢横穴墓群 1~3号横穴墓 (1995年)	図版57	杉沢Ⅱ遺跡の土器②
図版29	杉沢横穴墓群 1 · 2号横穴墓 (1995年)	図版58	杉沢Ⅱ遺跡の土器③

図版59	杉沢Ⅱ遺跡の土器④・石製品①	図版66	杉沢遺跡D丘陵の遺物①
図版60	杉沢Ⅱ遺跡の石製品②	図版67	杉沢遺跡D丘陵の遺物②
図版61	杉沢横穴墓群1~4号横穴墓の出土遺物	図版68	三井Ⅱ遺跡の瓦①
図版62	杉沢横穴墓群5~13号横穴墓の出土遺物	図版69	三井Ⅱ遺跡の瓦②
図版63	杉沢横穴墓群14・15号横穴墓の出土遺物	図版70	三井Ⅱ遺跡の鴟尾
図版64	杉沢横穴墓群周辺の出土遺物	図版71	三井Ⅱ遺跡の不明瓦製品・
図版65	鉄製品X線写真		瓦窯関連資料・須恵器

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成9年(1997)4月,斐川町(平成23年10月合併により出雲市)は、山陰自動車道斐川インターチェンジ開設に伴う工業団地の需要拡大を見込んで、直江南部丘陵地域に工業用地を開発する「斐川中央工業団地整備計画」を策定した。この計画に基づき、翌平成10年(1998)4月,工業団地の計画及び用地取得にかかる一切の業務を斐川町土地開発公社(当時)に委託した。その後、同年12月に東工区・南工区の25.9ha、平成15年(2003)6月に西工区として島根県畜産試験場斐川分場跡地6.5ha、平成18年(2006)3月には3haを取得し、全取得面積が35.4haとなった(第2図)。この計画区域には、周知の遺跡である杉沢遺跡、杉沢Ⅱ遺跡、杉沢横穴墓群、三井Ⅱ遺跡等が存在している。斐川町教育委員会は、平成10年9月に斐川町土地開発公社から埋蔵文化財の調査依頼を受け、翌平成11年(1999)2月から平成16年(2004)3月まで調査を実施した。その結果、弥生時代の建物跡、古墳時代の横穴墓群、奈良時代の神社と想定される建物跡、瓦窯、炭窯等が広範囲にわたり発見され、開発にはさらに広範な調査が必要とされたため、平成16年5月に埋蔵文化財調査を中断することとなった。

平成23年(2011),東日本大震災やタイの大洪水といった未曾有の大災害を受け、企業は国内外へ生産拠点を分散化させ、自然災害の少ない地域への移転を進めていた。島根県は東日本大震災後、地震や大雨による洪水が少ない地域として生産拠点の移転を検討する企業に注目され、本市においても、企業誘致により地域経済の活性化や雇用の創出に大きく貢献するものであることから、産業振興の重要施策と位置づけ、島根県畜産試験場斐川分場跡地の6.5ha を工業団地として造成し整備する方向で検討に入った。

平成23年10月,工業団地の開発をいち早く進めるため、開発に向けた諸課題の抽出、検討を行うため出雲市役所の関係部署からなる「斐川中央工業団地プロジェクト会議」を立ち上げ、数回にわたって会議を行った結果、工業団地の完成を平成27年1月、埋蔵文化財調査の終了を平成26年8月末日と決定した。いち早く進めるためには、文化財課の現有体制の中では埋蔵文化財専門職員が足りないことから、急遽募集が決定し、平成24年(2012)4月1日付けで1名採用した。西工区では遺跡

の規模や内容について十分に把握できていなかったので、まずは造成予定地 5 ha の遺跡の有無確認調査と範囲確認調査を平成24年7月2日から10月10日まで行った。その結果、丘陵部分7,000㎡を本調査対象地(第4章第29図)とし、同年10月29日から平成26年(2014)8月29日までの期間で調査を行った。

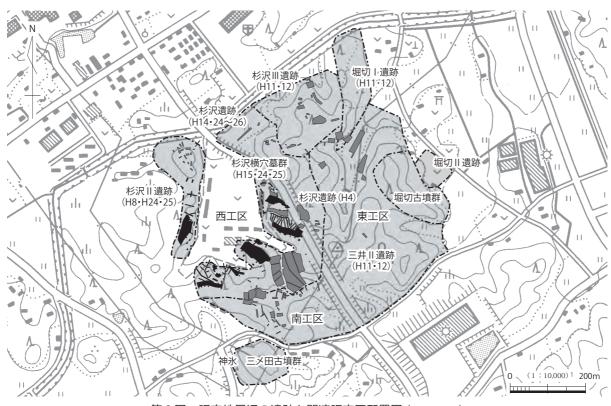


(景山真二)

第1図 平成24年度調査前(北から)

第2節 過去の調査

第1項 平成10年以前の調査



第2図 調査地周辺の遺跡と関連調査区配置図(1:10,000)

出雲斐川中央工業団地の造成予定地周辺では、工業団地の開発が計画される以前の平成4年(1992)に、町道杉沢線の工事に伴う杉沢遺跡の埋蔵文化財調査が行われた。この際に、古墳時代前期の土壙墓5基、加工段・土器棺墓各1基、直径約10mを測る弥生時代中期の竪穴建物1棟が見つかったが、概報での成果報告に留まる(斐川13)。この調査後に行われた町道杉沢線の工事中に横穴墓が3基見つかった。これについては後述する(第6章)。

また、平成8年には、造成予定地外ではあるが、北西の丘陵において工場建設に伴う試掘調査が行われ、須恵器等が出土したため杉沢Ⅱ遺跡とした。その後、工場の建設は撤回となった。

第2項 平成11年 (1999) ~ 15年 (2003) の調査概要

「斐川中央工業団地造成工事」に伴う埋蔵文化財調査は、平成11年(1999)~15年(2003)に斐川町教育委員会が行い、平成11・12年度に調査を実施した杉沢Ⅲ遺跡、堀切 I 遺跡、三井Ⅱ遺跡の一部については報告書を刊行している(斐川24、斐川26)。

杉沢遺跡 平成24年度以降の調査でB丘陵・C丘陵と称した丘陵部(第3章第8図)について、それぞ

れ丘陵を横断する数ヵ所のトレンチを設けて試掘調査を実施した。詳細については、第3章で報告 する。

三井Ⅱ遺跡 既報告分に加えて, 瓦窯跡の範囲確認調査が行われた。三井Ⅱ遺跡の範囲確認調査では, 瓦窯1基の存在については報告済であるが(斐川24), 複数基で操業されるケースが多いことから周辺部のトレンチ調査と磁気探査が行われた。その結果, 灰原の広がり及び地磁気の変化地点はなく, この付近では1基のみと考えられる。寺町廃寺(広島県三次市)と同紋同笵の「水切瓦」と呼ばれる軒丸瓦, 鴟尾をはじめ, 平瓦, 丸瓦, 須恵器等が出土した(巻末付論)。

また、三井II遺跡および杉沢遺跡の一部は、文政 6 年(1823)の『漆沼郷下直江村絵図』の中で「筑紫海 (街) 道」が通過する地点として描かれており、この周辺に道路遺構が存在する可能性が浮上した。平成 $11\cdot12$ 年度の調査では、ルート上と考えられる地点に設けたトレンチで路面と推定される硬化面が確認されており、池橋達雄や木本雅康が天平5 年(733)の『出雲国風土記』にある「正西道」、つまり古代山陰道が通過する可能性を挙げている(斐川24)。

杉沢横穴墓群 町道杉沢線の工事中に発見された杉沢横穴墓群の調査が行われた。古墳時代終末期 (7世紀中頃~末)の横穴墓12基を新たに発見し、既に見つかっていた3基と合わせて15基の横穴墓群 となることを確認した。これらは、平成24年度 (2012) から詳細調査を実施しているため、第6章に おいて改めて報告する。また、杉沢横穴墓群がある丘陵の北斜面の土坑中から、弥生時代中期後葉から後期初頭の土器とともに鉄製の鎌や繋が出土した (第4章第1節)。

平成13年~15年の調査については、平成16年当初に「斐川中央工業団地造成事業」が中断したことにより、埋蔵文化財調査も中断し、その後再開されぬまま今回の調査に至っている。

第3節 調査の経過と概要

(1) 平成24年度以降の調査経過

平成23年10月の出雲市・斐川町の合併後、出雲市文化財課は平成24年7月から同年10月まで造成 区域内の遺跡の範囲確認調査および試掘調査を行った。なお、各調査区の名称、位置、面積について は第4章第29図を参照されたい。

杉沢横穴墓群を除く各丘陵部では計92本のトレンチ調査により、遺構の範囲を確認した。また、 平坦部は重機により堆積状況と遺構面の存否を確認した。その結果、丘陵部について約7,000㎡の範 囲で本調査を行うこととなった。なお、平坦部の大部分は、昭和48年(1973)から島根県畜産試験場 斐川分場として造成された場所であり、遺構面・包含層は確認できなかったため、調査対象から除外 した。試掘調査の詳細な結果は第3章に示している。

平成24年10月下旬より,造成工事の工程に合わせ3班体制でA丘陵とD丘陵から本調査を開始し, 平成26年8月まで実施した。第1表には,平成24年度以降の調査スケジュールを,第2表には調査 の経過をまとめている。このうち, D丘陵尾根上で見つかった古代道路遺構については,文化庁,島 根県教育庁文化財課と保存に向け協議し,平成25年(2013)12月の市議会において保存を決定した。

(2)調査の概要

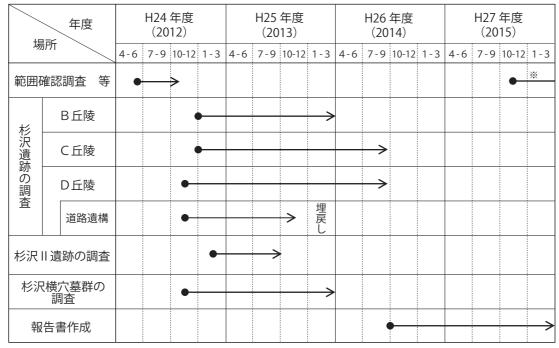
トレンチ調査を主体とする合併前の調査では、丘陵部において弥生時代から古代の建物跡、埋葬施設、横穴墓、瓦窯等が発見され、調査地周辺には約2,000年前から活発に人々の往来があったことが想定できる調査結果を得ていた。合併後の調査では、トレンチ調査によって遺構の広がりが予想される丘陵部を本格的に発掘調査することもあって、さらに多くの遺構・遺物の発見が期待された。

平成24年度から約3ヵ年をかけて実施した発掘調査では、弥生時代中期後葉から後期初頭に営まれた集落跡、15基の横穴墓からなる横穴墓群、そして尾根を縦走する古代道路遺構を確認した。

弥生時代の集落跡は、杉沢遺跡(A丘陵北斜面、B丘陵南斜面、C丘陵)、杉沢Ⅱ遺跡に広がることが 分かった。出土遺物から、短期間のうちに営まれ、廃絶した集落であることが推定できる(第4・5 章)。杉沢横穴墓群は、東西出雲に見られる形態的特徴を併せ持つ横穴墓であり、横穴墓の地域的な 分布を考える上で重要な情報を有している。また、奈良時代前半期まで下る年代の須恵器が出土して いることから、後述する古代道路遺構が築かれた時代まで利用されていたことが明らかとなった(第 6章)。

さらに、杉沢遺跡 D 丘陵で発見された道路遺構は、立地の特異性、遺構の残存状況の良さ等が評価されており、『出雲国風土記』に記された「正西道」にあたる可能性が極めて高くなった。

以上のように、出雲斐川中央工業団地の開発に伴う発掘調査では、斐川地域だけでなく、出雲市全体の歴史を考える上で重要な成果を得ることができた。



第1表 平成24~27年度の調査スケジュール

※道路遺構については、別事業により範囲確認調査を実施、継続中

第2表 調査の経過

年	月	日	内容 ※カッコ内肩書は当時
H24	4	2	埋蔵文化財事前調査依頼
(2012)			県教委へ文化財保護法第99条第1項通知(試掘調査 杉沢・三井川遺跡)
(===,	7	2	試掘・範囲確認調査開始
		17	今岡一三氏(県文化財課)調査指導
	9	3	今岡一三氏(県文化財課)調査指導
	10	6	本調査支援業務契約
	10	_	武掘・範囲確認調査 終了
		10	
		1.5	中村唯史氏(県立三瓶自然館)調査指導
		15	県教委より調査の勧告
			県教委より文化財保護法第 94 条第 1 項通知(杉沢・杉沢 遺跡,杉沢横穴墓群)
			H24 年度調査 開始
H25	1	4	具教委へ文化財保護法第99条第1項通知(杉沢Ⅱ遺跡)
(2013)		22	中村唯史氏(県立三瓶自然館)調査指導
	2	20	今岡一三氏(県文化財課)調査指導
		28	H24 年度調査 終了
	5	1	県教委へ文化財保護法第99条第1項通知(杉沢Ⅱ遺跡)
		7	H25 年度調査 開始
		10	角田徳幸氏(県文化財課),原田敏照氏(県埋文センター),西尾克己氏(大田市教委)調査指導
	7	3	大橋泰夫氏(島根大学)調査指導
	8	1	井上貴央氏(鳥取大学名誉教授)調査指導
		4	木本雅康氏(長崎外国語大学),西別府元日氏(広島大学),大橋泰夫氏他 視察
		<u> </u>	井上貴央氏 調査指導
			第1回速報展『斐川中央工業団地 平成 24・25 年度の調査成果』開催(~ 2014.1.6 出雲弥生の森博物館
		20	深澤芳樹氏(奈良文化財研究所),三宅博士氏(松江市立出雲玉作資料館)視察
,	9	10	
	9	_	角田徳幸氏 調査指導
		_	池橋達雄氏(出雲市文化財保護審議会委員)調査指導
		_	第1回 現地説明会(杉沢遺跡D丘陵, 杉沢川遺跡, 杉沢横穴墓群)
	10	-	県教委より遺跡の取扱い回答(杉沢 遺跡)
		7	道路遺構保存に関する市長協議
		11	角田徳幸氏,原田敏照氏,西尾克己氏,大谷晃二氏(松江北高)調査指導
		19	近江俊秀調査官(文化庁)調査指導
		30	出雲市議会全員協議会で道路遺構の説明
	11	20	文化庁にて道路遺構保存協議
	12	19	道路遺構保存方針を議会報告(工業団地変更計画)
		24	平野卓治氏(横浜市歴史博物館),川島芙美子氏(山陰万葉を歩く会) 視察
		26	坂井秀弥氏(奈良大学),田中哲雄氏(日本城郭研究センター)視察
H26	1	27	杉沢遺跡道路遺構保存のための埋戻し開始(~2月初旬)
(2014)	2	13	角田徳幸氏 調査指導
		21	井上貴央氏 調査指導
1	3		H25 年度調査 終了
			県教委より遺跡の取扱い回答(杉沢横穴墓群)
			県教委より遺跡の取扱い回答(杉沢遺跡 B・D丘陵)
[4		宗教安より遺跡の収扱が回告(杉川遺跡 B・D丘陵) 県教委へ文化財保護法第99条第1項通知(杉沢遺跡 C丘陵・D丘陵谷部)
	-		H26 年度調査 開始
	6		Tab 中長調宜 開始 第2回速報展『杉沢横穴墓群発掘調査速報展』開催(~2014.9.1 出雲弥生の森博物館)
	0		
			出雲弥生の森博物館職員リレー講座「斐川中央工業団地の発掘調査について」開催
	7	-	第1回 出雲市杉沢遺跡等古代道路遺構調査委員会 開催
	8		深田浩氏(県文化財課)調査指導
			第2回 現地説明会(杉沢遺跡B・C丘陵)
		29	H26 年度調査 終了
			畠山唯達氏(岡山理科大学)調査指導および古地磁気年代測定
	L		松本岩雄氏(県文化財課)視察
	9	2	県教委より遺跡の取扱い回答 杉沢遺跡 (C丘陵・D丘陵谷部)
		9	小寺智津子氏(日本学術振興会)調査指導
	12	3	第3回速報展『平成26年度杉沢遺跡発掘調査速報展』開催(~2015.4.20出雲弥生の森博物館)
		_	木本雅康氏 調查指導
H27	2		シンポジウム「『古代山陰道』を考える - 杉沢遺跡道路遺構発見の意義 - 」開催(アクティーひかわ)
(2015)		<u> </u>	プンボンプム
(2013)	8	4	开工具大式 祠宜有等
	0	_	
	11	_	井上貴央氏・調査指導
	11		近江俊秀調査官(文化庁)調査指導 第3日、川原本大公内等財策十分首席等構図本系号会、開催
	12	15	第3回 出雲市杉沢遺跡等古代道路遺構調査委員会 開催

(3)調査成果の公開

調査期間中,現地説明会を計2回開催し,平成25年9月21日(土)は130人,平成26年8月23日(土)には90人の参加があった。また,出雲弥生の森博物館では速報展を3回開催しタイムリーな情報提供に努めた。

また、市民向け年間講座の一つとして、平成26年6月7日(土)には、『斐川中央工業団地の発掘調査について』と題し、調査員による発掘成果の説明を出雲弥生の森博物館で行った。

古代道路遺構については、平成26年7月23日に、第1回「出雲市杉沢遺跡等古代道路遺構調査委員会」を開催し、保存に向けた周辺調査の方法などを諮った。また、平成27年2月15日(日)には、『「古代山陰道」を考える一杉沢遺跡道路遺構発見の意義―』と題し、アクティーひかわにおいてシンポジウムを開催した。当日は、会場の定員の200名を超える参加者があり、県内外からの関心の高さがうかがえた。平成28年3月には、シンポジウム記録集を刊行している。

(江角 健)



杉沢横穴墓群の説明風景(平成25年度)



杉沢遺跡 C 丘陵の説明風景 (平成26年度)

第3図 現地説明会



宣伝ポスター



パネルディスカッションの様子

第4図 古代山陰道シンポジウム

第2章 遺跡の位置と環境

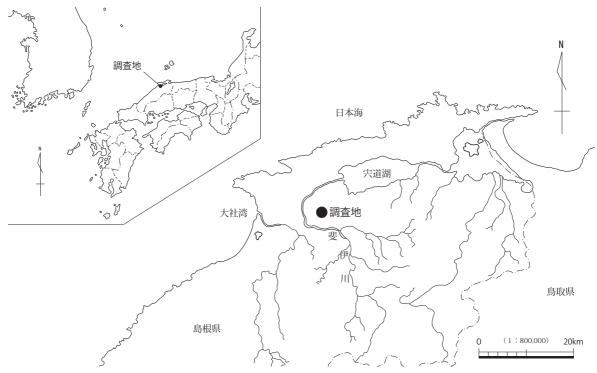
第1節 遺跡の地理的環境

杉沢遺跡,杉沢Ⅱ遺跡,杉沢横穴墓群は島根県出雲市斐川町直江に所在し,『出雲国風土記』出雲郡条に「神名火山」と記された仏経山 (標高366 m) の北麓に位置する。

遺跡の所在する出雲市は島根県東部に位置し、北は島根半島、南は中国山地に囲まれ、東は宍道湖に、西は日本海に面している。出雲市の中心市街地を含む出雲平野は、中国山地に源を発し宍道湖に流れ込む斐伊川と、日本海に注ぐ神戸川の二大河川の沖積作用で形成された県内最大の平野である。

平野は、東西約20km、南北約5kmの範囲に及ぶが、現在の地形となるまでには大きな変遷を経ている。約6000年前の縄文海進時には、出雲平野にあたる部分には大きく海が入り込み、島根半島と中国山地とは水域で隔てられていた。その後、海退が進むとともに、約4000年前の三瓶山の火山活動による火山噴出物が流れ込むようになり、西部での平野形成が進む。堆積作用を進めたのは神戸川と当時西流していた斐伊川である。斐伊川は、寛永年間(1624~1645)の大洪水により流路を東向きに変えた。この江戸時代の斐伊川の流路の変化以降、下流域となった宍道湖西岸域では、上流域で盛んであったたたら製鉄に伴う「かんな流し」により排出された大量の土砂が流入するようになる。この土砂の堆積により平野が拡大し、現在の地形が形成されていった。

このように形成された平野東部の南側丘陵上に調査地は位置する。



第5図 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の位置(1:800,000)

第2節 遺跡の歴史的環境

このたびの調査では、杉沢遺跡、杉沢Ⅱ遺跡、杉沢横穴墓群(1)で、弥生時代中期の集落跡、古墳時代終末期の横穴墓群、『出雲国風土記』に記された「正西道」と推定される道路遺構、更に太平洋戦争末期のタコ壺を確認した。遺跡周辺では、縄文時代から人々の営みの痕跡が確認されており、現代に至るまで、時代を超えて人々の活動の痕跡が認められる地域である。

杉沢遺跡等が所在する斐川地域、つまり出雲平野東部の宍道湖西岸域では、数多くの遺跡が確認されているが、それらは仏経山から延びる平野南部の丘陵地帯とその縁辺部、また谷合に立地する。以下、縄文時代から近代にかけての出雲平野東部を中心に主要遺跡を概観する。

縄文時代 出雲平野での遺跡の出現は、縄文時代早期で、大社湾に位置する上長浜貝塚 (54) や、北山山麓に所在する菱根遺跡 (55)、山持遺跡 (62) が知られる。

縄文海進時(前期頃)には、海面上昇の影響により、人々の生活の場は標高が高い丘陵部や縁辺部に限られる。早期末から前期初頭の土器が出土した結遺跡(15)は、杉沢遺跡の西1.5kmの丘陵上にあり、中期の上ヶ谷遺跡(20)や三井Ⅱ遺跡(17)は杉沢遺跡と同じ丘陵の谷奥に展開する。

海退が進む後期から晩期になると、標高の低い場所でも人々の活動痕跡が確認できる。晩期の竪穴建物内から打製石斧が多数見つかった後谷遺跡 (24) をはじめ、武部遺跡 (12)、三田谷 I 遺跡 (40) など丘陵縁辺部や谷の入り口付近に遺跡立地が拡大し、更に、矢野遺跡 (30) 等、平野部微高地にも集落が展開するようになる。

弥生時代 弥生時代になると、斐伊川や神戸川の沖積作用により形成された平野部の微高地や丘陵縁 辺部で集落が営まれるようになる。

前期の遺跡としては、縄文時代から継続して営まれてきた矢野遺跡や三田谷 I 遺跡、後谷遺跡のほか、新たに形成された遺跡として古志本郷遺跡 (43) や青木遺跡 (63) などがある。

出雲を代表する遺跡として、杉沢遺跡の東約2kmには、銅剣358本、銅矛16本、銅鐸6個が出土した荒神谷遺跡(8)がある。青銅器が埋納された中期末頃、出雲平野西部では、周囲に環濠を巡らせた古志本郷遺跡や下古志遺跡(44)、天神遺跡(34)のほか、姫原西遺跡(31)、白枝荒神遺跡(33)など、大規模集落遺跡を中心として多数の遺跡が確認されている。平野東部でも宮谷遺跡(16)や氷室Ⅳ遺跡(21)などが確認されていたが、いずれも小規模で人間活動を示す資料は希薄であった。今回の杉沢遺跡と杉沢Ⅱ遺跡の調査で多量の遺物を伴う複数の建物跡が発見されたことにより、荒神谷遺跡に近い平野東部でもまとまった集落が営まれていたことが明らかとなった。

墓制についても近年,多くの成果がある。前期の配石墓が確認された原山遺跡(57)をはじめ、中期中葉には中野美保遺跡(28)で方形貼石墓が築かれる。中期後葉になると、青木遺跡(63)に出現期の四隅突出型墳丘墓(青木4号墓)が築造される。「王墓」と考えられる大型の四隅突出型墳丘墓が西谷墳墓群(25)で築造されるのは、後期後葉である。西谷3号墓からは、吉備地方から搬入された土器や、丹後や北陸地方の影響を受けた土器が出土し、他地域との広域交流があったことを示す。同じ

時期には平地の中野美保遺跡でも四隅突出型墳丘墓が築かれている(中野美保1号墓)。

古墳時代 弥生時代に大型の四隅突出型墳丘墓が築造された出雲平野であるが、古墳の出現は前期末まで待つことになる。前期の集落としては、弥生時代から継続する古志本郷遺跡や下古志遺跡、矢野遺跡、山持遺跡などがあるが、弥生時代に平野西部で大規模に営まれていた遺跡が、古墳時代に入ると急激に衰退していく。平野東部でも、三井Ⅱ遺跡や大倉Ⅳ遺跡(4)、西谷遺跡(9)などがあるが、大倉Ⅳ遺跡、西谷遺跡では中期の土器は発見されていない。

前期末に築造された出雲平野最古の古墳は北山山麓の丘陵上に築かれた大寺 1 号墳 (64,前方後円墳) と神西湖東岸の丘陵に築かれた山地古墳 (52,円墳) である。中期になると平野東部の丘陵にも古墳が築かれるようになり、神庭岩船山古墳 (5,前方後円墳) や小丸子山古墳 (6,円墳) などが造られた。中期後半から後期中頃にかけては、一辺10 m前後の古墳が群集して造られるが、杉沢遺跡に近い結遺跡には、方墳14基と円墳20基が築かれ、11号墳からは蛇行状鉄剣が出土している。また、西古墳群 (13) の1号墳からは、全長108 cmの直刀が出土している。

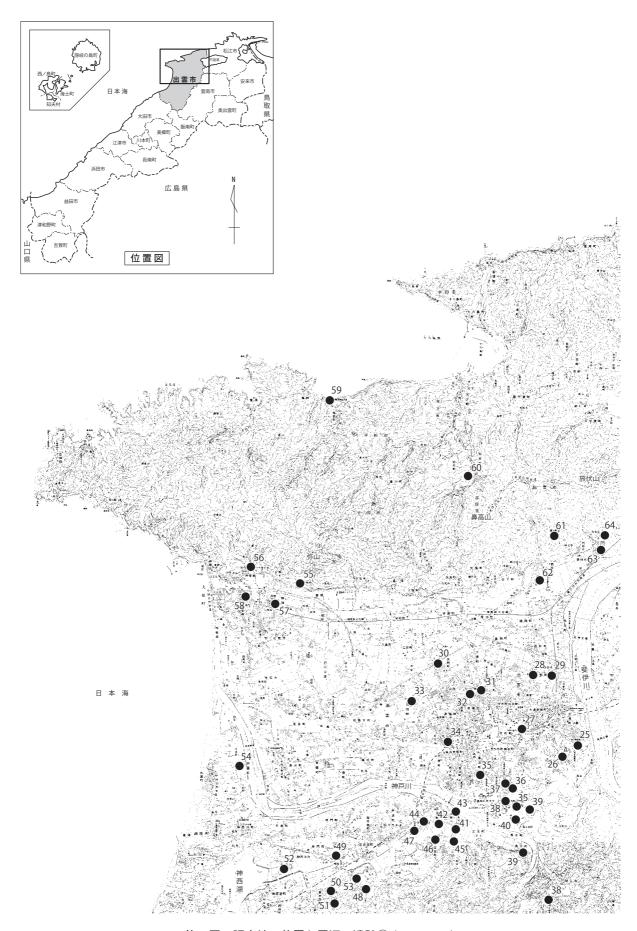
後期には、佐利保谷遺跡(7)や尾田瀬田遺跡(10)のほか、前期で一度途絶えた西谷遺跡や大倉IV 遺跡でも土器が確認できるようになるなど、平野東部での集落遺跡が増加する。この頃、平野西部 の神戸川右岸には、今市大念寺古墳(27)や上塩冶築山古墳(37)、上塩冶地蔵山古墳(38)といった有 力首長墳が築かれ、神戸川左岸には、首長墳に続く位置付けとして妙蓮寺山古墳(46)や放む山古墳 (45)などが連続して築かれる。また、後期以降は、横穴墓が盛んに造られた。上塩冶横穴墓群(39) や神門横穴墓群(49)などには規模こそ及ばないものの、平野東部でも、平野横穴墓群(19)や大倉横 穴墓群(3)などが確認されている。

奈良・平安時代 『出雲国風土記』の記述から、この時代の出雲国の様子を知ることができる。それによると、現在の出雲市域は、4つの郡(出雲郡、神門郡、楯縫郡、秋鹿郡)にまたがる。出雲郡の郡家(役所)は出雲郷に置かれ、道度条によると、その位置は、「正西道」と「在北道」との合流地の西側にあたる。そして、正西道を更に西へ向かい斐伊川と神戸川を超えた先で神門郡家に至る。

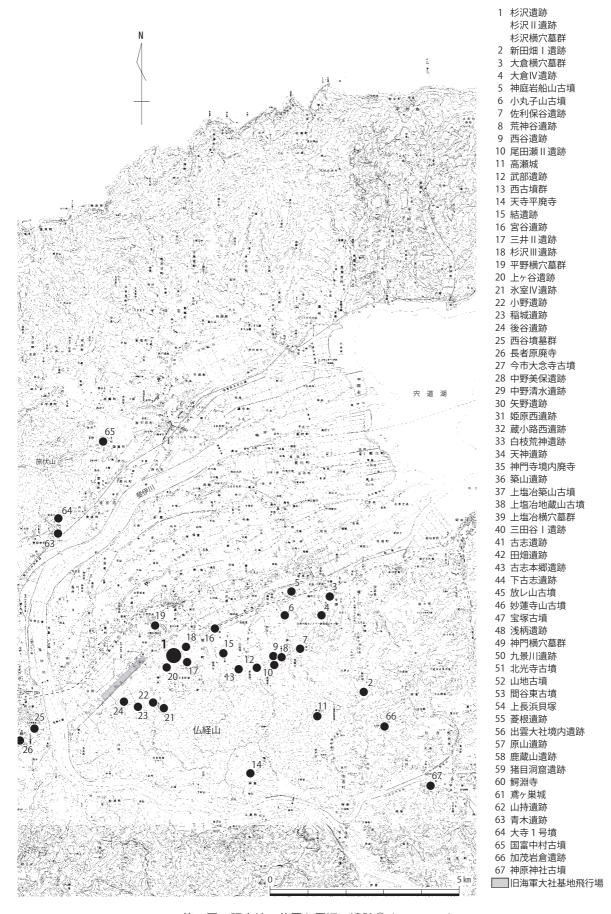
杉沢遺跡など今回の調査地は、出雲郡漆治郷に所在することになる。杉沢遺跡周辺には、瓦窯跡や横口式炭窯、大型建物跡が発見された三井Ⅱ遺跡のほか、9本柱建物跡が見つかった杉沢Ⅲ遺跡(18)や『出雲国風土記』に記された神社が点在する。また、杉沢遺跡の南西約2kmには、大きな礎石を伴う建物跡や大量の炭化米が出土し、出雲郡の郡家に付属する正倉跡と考えられている後谷遺跡がある。その近くには、瓦や転用視が出土した小野遺跡(22)や稲城遺跡(23)が所在し、郡家関連遺跡として注目される。

一方,平野西部,神戸川左岸には、多数の大型建物が確認され、神門郡家推定地とされる古志本郷遺跡がある。また、三田谷 I 遺跡や鹿蔵山遺跡 (58)、青木遺跡からは官衙施設関連の遺構や遺物が見つかっている。このほか、古代寺院跡の長者原廃寺 (26) や神門寺境内廃寺 (35)、天寺平廃寺 (14) では、瓦の出土や基壇等が確認されている。

中世 中世は鰐淵寺と出雲大社が神仏習合思想の中で連携を強めていった時代である。荘園制の進展のなか、両者の勢力が平野部で拡大し、康元元年(1256)には、出雲平野東部にも北島村や千家村と



第6図 調査地の位置と周辺の遺跡①(1:100,000)



第7図 調査地の位置と周辺の遺跡②(1:100,000)

いった出雲大社領が成立している。一方、平安時代に延暦寺の末寺となった鰐淵寺は、鎌倉時代に勢力を拡大し、南北朝時代に飛躍的に所領を拡大させる。このうち、杉沢遺跡等が所在する漆治郷は、鰐淵寺領の中核をなす重要な位置を占めた所領であった。現在の「直江」という地名は、永享5年(1433)、漆治郷内に直江村として初見され、天文12年(1542)以降は、漆治郷から直江郷へと呼び方がかわる。漆治郷が鰐淵寺領となった起源は不明であるが、鎌倉時代初期までには延暦寺守護社である近江国日吉社へ寄進されている。鰐淵寺が実質的な支配を続けるが、漆治郷への地頭の押妨は激しく、永仁4年(1296)には領家と地頭との間に下地中分の和与が成立する。しかし、その後も国衙と結びついた地頭の押妨が続き、正安3年(1301)、後宇多院の院宣によって日吉社領として安堵される。貞和5年(1349)に光厳上皇の院宣により鰐淵寺北院千手根本堂修造料所にあてられると、漆治郷は日吉社から離れ、鰐淵寺による一元的支配が確立する。戦国時代になると、鰐淵寺は毛利氏と関係を緊密にし、知行を安堵された一方で、惣国検地により寺領が削減される。天正19年(1591)の毛利家の書状で、鰐淵寺領の中に直江郷が見られなくなることから、これにより漆治(直江)郷と鰐淵寺との関係が途絶えたことが伺える。

戦国大名尼子氏と毛利氏の登場は、鰐淵寺と出雲大社との関係を変化させた。両者の攻防は出雲平野でもたびたび繰り広げられ、標高314mの山頂上には尼子氏の高瀬城(11)、北山山脈には毛利氏が尼子氏攻略の拠点とした鳶ヶ巣城(61)など多くの山城が戦いの拠点として築かれている。

近世・近代 斐伊川の東流は、出雲平野東部の平野の拡大を進めた。しかし、湿地帯が多く、大量の土砂の流入は河川の氾濫を頻発させたため、堤防工事や川の付け替え(川違え)などの治水工事や新田開発が進む。このうち、現在の出雲市斐川町出西から宍道湖へ向け開削が始まった新川は、幅約200 m、長さ約10kmにも及ぶ斐伊川の分流である。天保2年(1831)に開削が始まり天保7年(1836)に完成すると、洪水が減り、宍道湖西岸域での新田開発が進む。しかし、斐伊川上流からの土砂の流入が続き、次第に川底が高くなった新川で洪水が頻発するようになったため、昭和14年(1939)年に廃川となった。新川の跡地には、太平洋戦争末期に旧海軍大社基地の滑走路(第7回網掛け部分)が造られたほか、周辺には関連施設が多数造られた。戦後70年が過ぎ、滑走路跡地での開発が徐々に進むものの、今なお当時の状況を留めており、近くのJR山陰本線段原鉄橋に残る銃弾痕とともに、戦時中の記憶を今に伝える。

【参考文献】

池田敏雄 1999『斐川の地名散歩』斐川町役場

井上寛司編 1997 『出雲國浮浪山鰐淵寺』 「出雲國浮浪山鰐淵寺」 刊行事務局

出雲市教育委員会 1997 『遺跡が語る古代の出雲―出雲平野の遺跡を中心として』

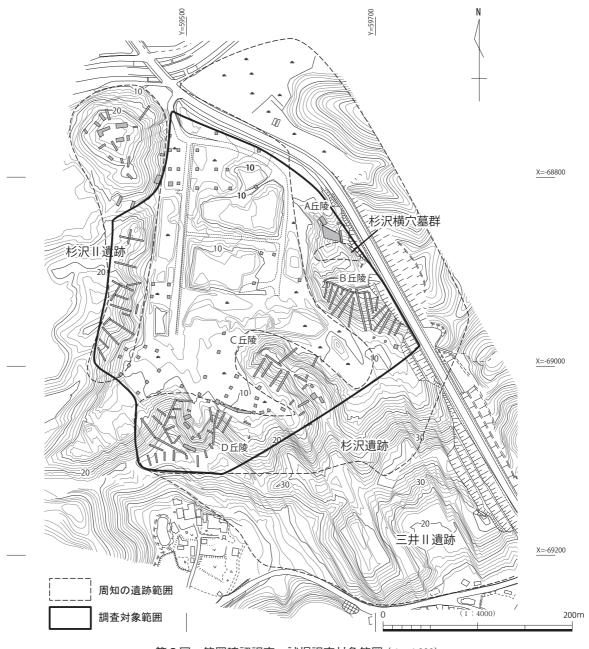
斐川町教育委員会 1972『斐川町史』斐川町

斐川町教育委員会 2011『わたしたちの斐川町』

松尾寿ほか 2005『島根県の歴史』山川出版社

第3章 範囲確認調査および試掘調査

工業団地の造成予定地内には、仏経山北麓から伸びる丘陵部に周知の埋蔵文化財包蔵地(杉沢遺跡・杉沢耳遺跡・杉沢横穴墓群)が存在することが分かっていたが、遺跡の正確な範囲は明らかになっていなかった。さらに、丘陵に囲まれた中央の平地、丘陵間の谷部に関しては、遺構の有無すら不明であったことから、本調査に先立って、丘陵部の範囲確認調査および平地・谷部の試掘調査を実施することとした。その結果、遺跡が広がるのは丘陵部のみと分かり、後続する本調査の対象範囲設定につながった。以下、範囲確認調査および試掘調査の結果を示す。なお、丘陵部のトレンチで確認した遺構については、第4・5章で示す遺構名を表示した。



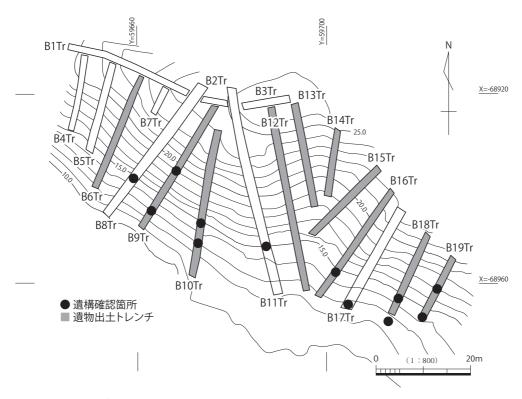
第8図 範囲確認調査・試掘調査対象範囲(1:4,000)

第1節 丘陵部の調査

第1項 杉沢遺跡 B丘陵

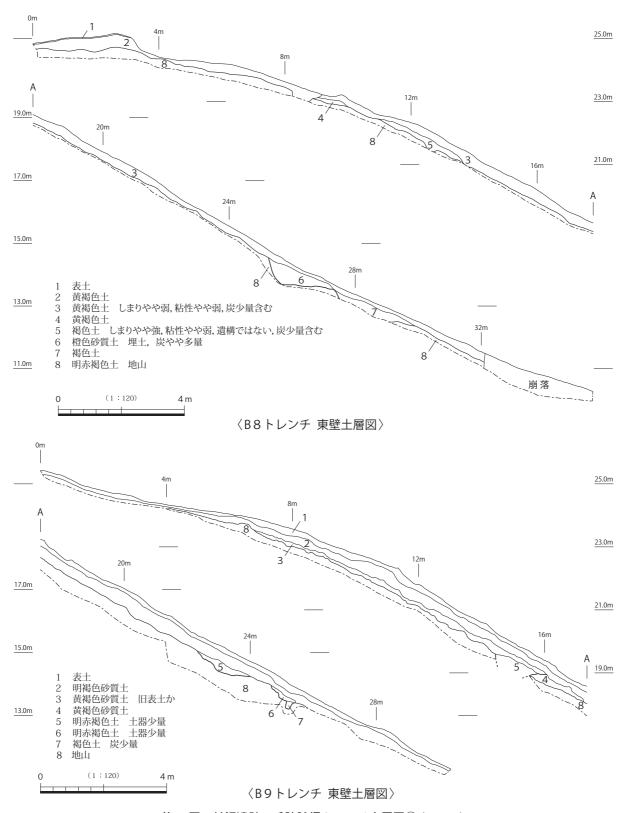
笠っ 丰	ナゲンロノ市 ロチ ロ	トレンチの調査概要
# 37	♪/ヘン/仄 1目 iJ// K	トレッナの間合物等

トレンチ名称	遺構	遺物	調査時名称
B1			1
B2			2
В3			3
B4			4
B5			5
В6		須恵器	6
В7			7
B8	加工段1基		斐川町 1
В9	加工段1基	土師器,弥生土器	8
B10	加工段1基,溝1条	須恵器, 弥生土器	9
B11	溝?2条,土坑1基		斐川町 2
B12		弥生土器	10
B13		弥生土器	11
B14		須恵器, 弥生土器	12
B15		弥生土器	13
B16	加工段1基	須恵器,弥生土器	14
B17	加工段1基		斐川町 3
B18	加工段2基	弥生土器	15
B19	加工段2基	弥生土器	16



第9図 杉沢遺跡 B 丘陵範囲確認トレンチ配置図 (1:800)

B丘陵は、南東から北西方向に伸びる丘陵で、市道杉沢線の新設に伴って平成4年(1992)に南東の一部が調査され、弥生時代の大型竪穴建物跡が1棟見つかっている。その後、平成16年(2004)の工業団地開発事業の中で斐川町教育委員会により3ヵ所の範囲確認トレンチ(斐川町トレンチと呼称)が設けられていたが、さらに範囲を広げて新たなトレンチを16ヵ所設けた。その調査概要は第3表のとおりである。

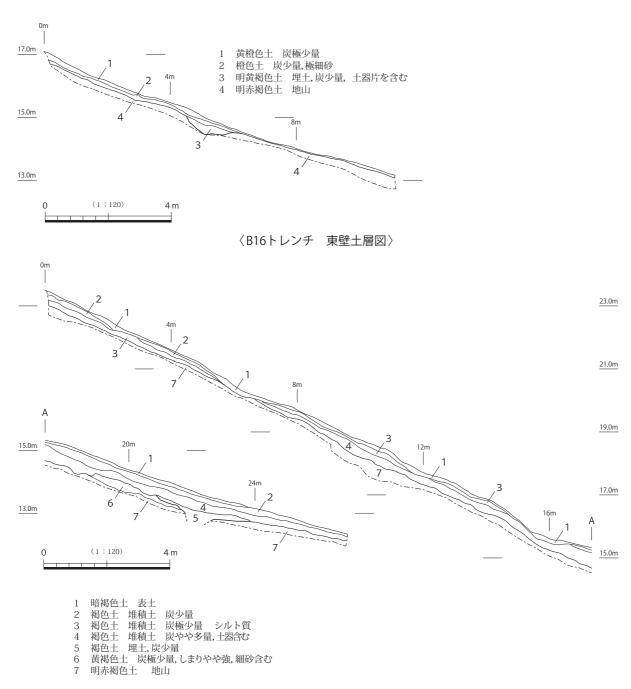


第10図 杉沢遺跡 B 丘陵試掘トレンチ土層図① (1:120)

調査の結果,南斜面の東半分を中心として加工段・溝と考えられる遺構が複数認められた。確認した遺構の位置は丘陵裾部の標高10~15mに集中しており、比較的密集して遺構が築かれている可能性が高いと考えられる。

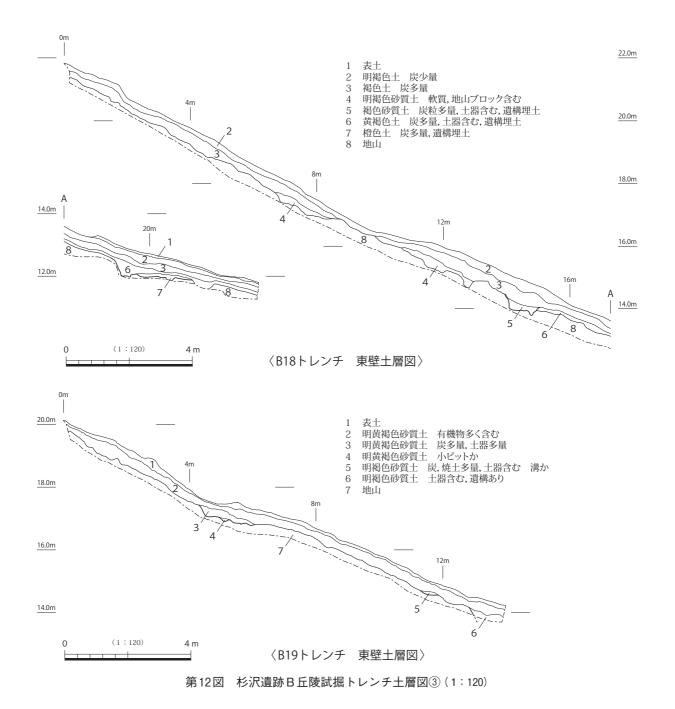
なお、丘陵北斜面は杉沢横穴墓群が築かれた杉沢遺跡A丘陵に面しているため、横穴墓の存在を想 定して重機による表土掘削を行ったが、横穴墓をはじめ、遺構・遺物は見つかっていない。

遺物は、弥生土器、須恵器、石器が出土した。そのうちの9割近くは弥生土器で、遺構形成の時期と密接に関係すると考えられる。ここでは、状態の良い弥生土器13点を図化し、詳細を報告する。

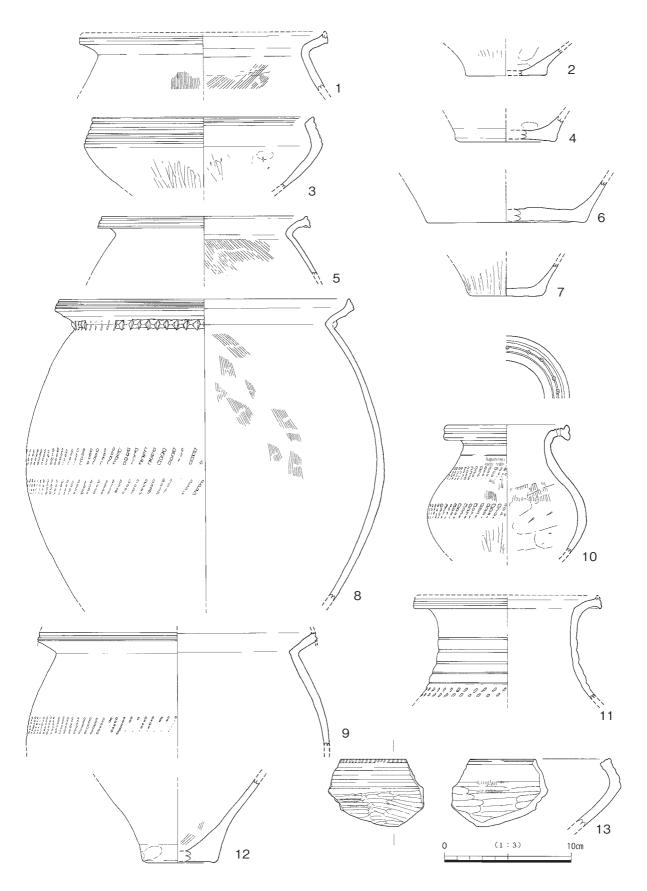


〈B17トレンチ 東壁土層図〉

第11図 杉沢遺跡 B 丘陵試掘トレンチ土層図② (1:120)



第13図1~3はB10トレンチから出土した弥生土器である。1は甕の口縁部,2は壺の底部と考えられる。3は高坏の坏部で、口縁部がくの字状に立ち上がる。4はB12トレンチ出土の弥生土器底部である。やや上げ底になっており、底部外面の稜線が明瞭に作り出されている。5・6はB13トレンチから出土した。いずれも甕で、5は弥生時代中期の特徴を有した口縁部である。また6は大型品に復元される底部である。7はB18トレンチから出土した弥生土器の底部である。摩滅が著しいものの、外面にはミガキが施されていることが分かる。8~13はB19トレンチからの出土である。B19トレンチでは3ヵ所の遺構が確認されており、それに比例して遺物量も最も多い。8・9は甕である。8は胴部下半まで残存する中型の甕で、頸部には貼付突帯、胴部には列点文2条が巡る。内面は頸部までハケメが残り、弥生時代中期の特徴を有する。9も胴部に小ぶりな列点文が1列巡る。10・11は

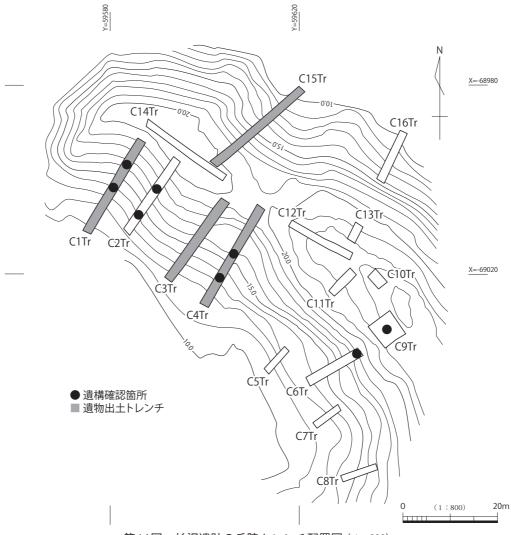


第13図 杉沢遺跡 B 丘陵試掘トレンチ出土遺物 (1:3)

壺である。10は小型の壺で、口縁部には凹線や穿孔、胴部には2条の列点文を密に施すなど、全体的に丁寧な造形である。11は広口壺で、復元口径が約13cmの小型品である。口縁部の広がりはあまり大きくなく、器壁は頸部から胴部に向かって緩やかに広がる。頸部外面には凹線と列点文が施されている。2点の壺はいずれも弥生時代中期後葉の資料と考えられる。12は甕または壺の底部である。13は高坏の口縁部で、くの字状の口縁を持つ弥生時代中期の資料である。口縁部外面に刻目が施される。

第2項 杉沢遺跡 C丘陵

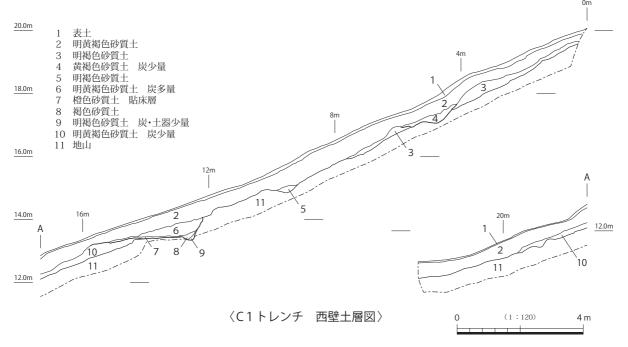
C丘陵は、先述したB丘陵の南に位置し、ほぼ同じ北西方向に伸びる。丘陵先端部は畜産試験場が置かれた際に削平されており、排水溝や電柱が残されていたため、調査範囲からは除外した。なお、C丘陵においても、斐川町教育委員会による試掘トレンチが丘陵部に4ヵ所設けられている。範囲確認調査では、それに加えて12ヵ所のトレンチを丘陵頂部、南北斜面に設定した。



第14図 杉沢遺跡 C 丘陵トレンチ配置図 (1:800)

トレンチ名称	遺構	遺物	調査時名称
C1	加工段3基	弥生土器,陶器	6
C2	加工段1基		5
C3	溝?1条	弥生土器	4
C4	加工段2基	弥生土器	3
C5			10
C6	加工段1基		斐川町 4
C7			11
C8	落ち込み1?		12
C9	加工段1基、柱穴群		斐川町 3
C10			斐川町 2
C11			斐川町 1
C12	タコ壺1基		2
C13			9
C14	タコ壺2基		1
C15		弥生土器	7
C16			8

第4表 杉沢遺跡 C 丘陵試掘トレンチの調査概要

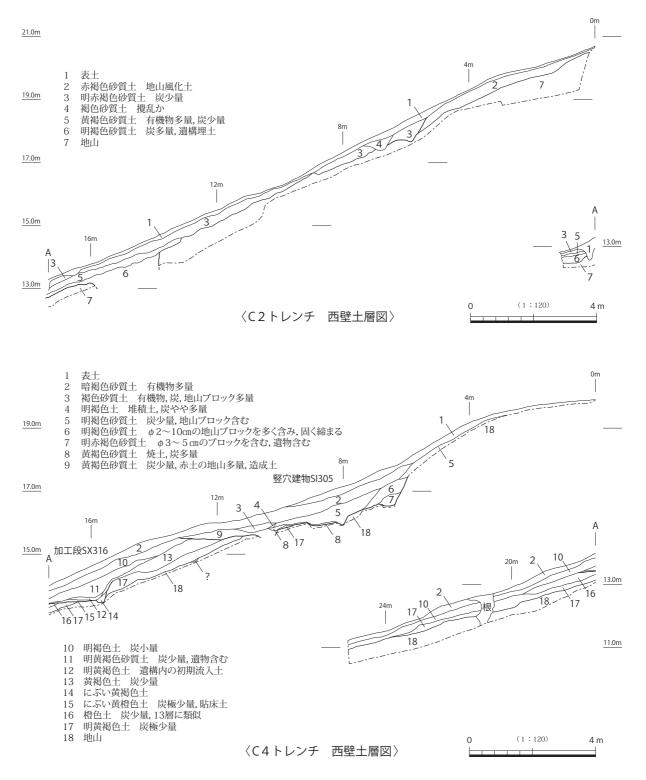


第15図 杉沢遺跡 C 丘陵試掘トレンチ土層図① (1:120)

C丘陵は尾根も広く、緩斜面も多いため、遺構が確実に存在していることが予想された。第4表に まとめたとおり、遺構は丘陵頂部および南斜面に広がることが分かった。

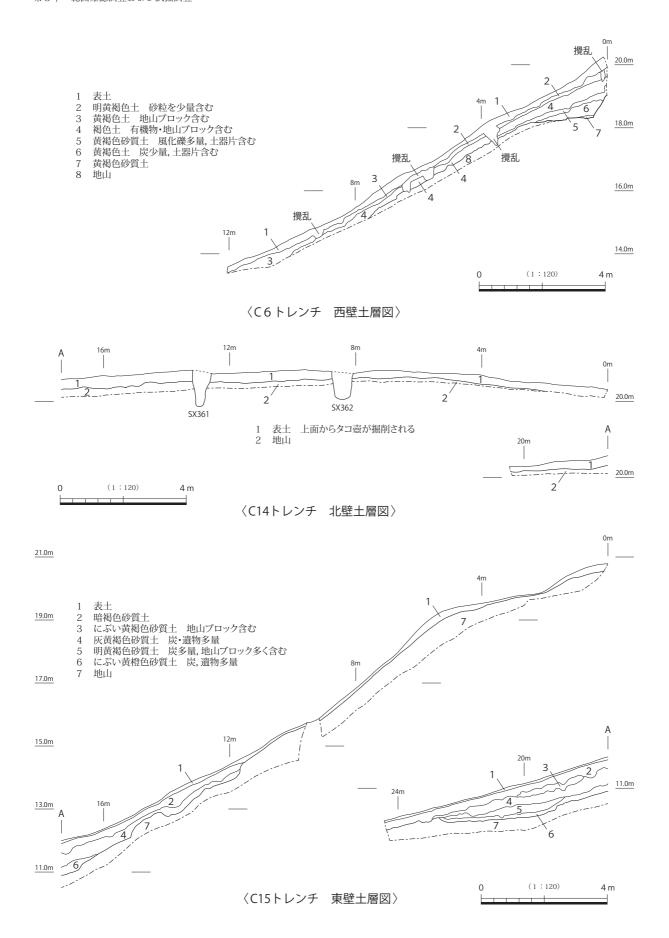
南斜面では、 $C1 \cdot C4$ トレンチで大型の加工段を確認した。特に、C4トレンチ上段で見つかった大型加工段は、斜面の岩盤を1 m近く掘り込んで壁面・床面を造り出しているほか、加工段内部には数条の溝を掘り込み、床面には厚さ数cmの貼床を施していることが分かった。

丘陵頂部では、南東部に設けられたC9トレンチ(斐川町調査)で柱穴がまとまって発見されていた。また、 $C12 \cdot C14$ トレンチ付近および南斜面では、戦時中に掘削されたタコ壺(一人用の塹壕)の存在が表土の落ち込みによって確認でき、詳細調査は本発掘調査に委ねることとした。

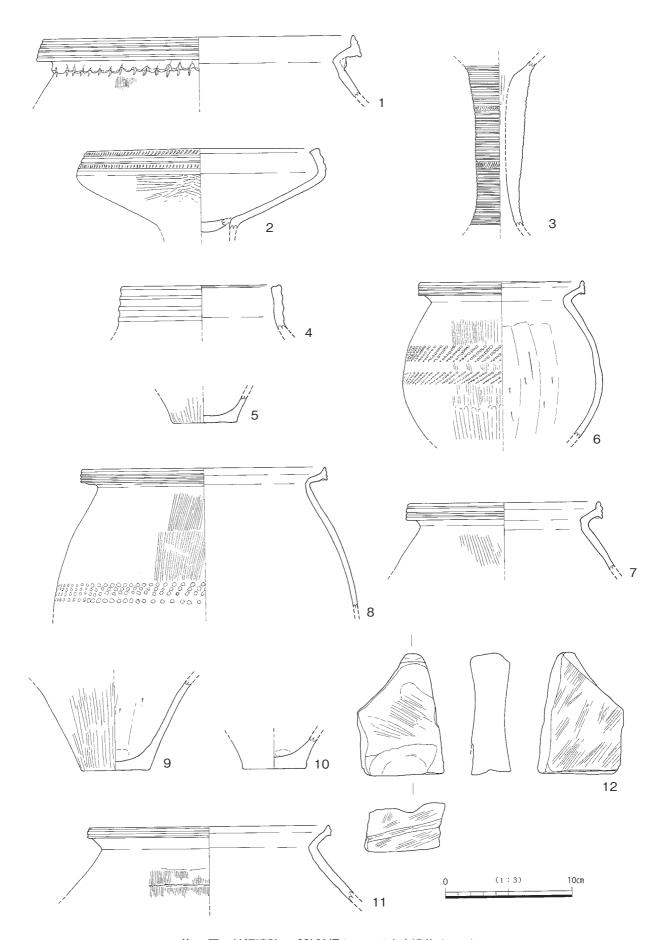


第16図 杉沢遺跡 C 丘陵試掘トレンチ土層図② (1:120)

北斜面に設けたC15トレンチでは遺物がまとまって出土したが、明確な遺構は確認できず、すべて 包含層からの出土であった。これらの遺物は、丘陵頂部から転落したもので、北斜面裾部にできたわ ずかな谷部に落ち込んで集積したものであると判断した。



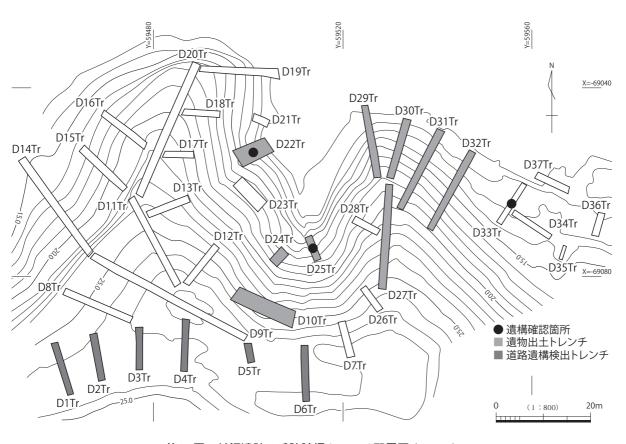
第17図 杉沢遺跡 C 丘陵試掘トレンチ土層図③ (1:120)



第18図 杉沢遺跡 C 丘陵試掘トレンチ出土遺物 (1:3)

出土遺物には、弥生土器、石器がある。第18図1・2はC1トレンチで出土した。1は大きく拡張した口縁端部が4条の凹線文で飾られ、頸部には刻目が施された貼付突帯が巡る。2は高坏の坏部である。弥生時代中期後葉によく見られる形態の資料で、口縁部外面は凹線文と刻目で飾られる。脚部以下を欠くものの、坏部についてはほぼ完形の状態で出土している。3・4は丘陵南斜面の西端部に設けたC4トレンチから出土した。いずれも小片で、4は短頸壺の口縁部、5は甕または壺の底部である。C3トレンチ出土の3は高坏の脚柱部である。外面は、細い凹線文で埋められているが、約15条間隔で刻目を施した装飾帯を挟んでいる。また、丘陵南斜面の中でもD丘陵に近い谷奥に設けたトレンチのうち、最奥に位置するC8トレンチで遺物が出土した。6・7はいずれも小型の甕で、口縁端部は上方に拡張して外面に凹線文が施される。胴部下半まで残る6は、丸みの強い胴部で、ハケメとヘラミガキで調整した器面に列点文を2条巡らせる。8~10は落ち込みから出土した弥生土器である。8は甕の上半部で、上下に短く拡張した口縁部には凹線文、胴部には列点文が巡るという、弥生時代中期後葉に一般的にみられる装飾が施されている。9は底部片で、外面はヘラミガキで密に調整される。さらにC16トレンチから出土した11は、残存状況はあまり良くないものの、口縁部には凹線文が引かれ、外面をハケメで調整していることが分かる。また、試掘トレンチ内ではないが、北斜面では調査前に砥石(12)を採集している。砥面は4面で、使用痕と考えられる擦痕がある。

第3項 杉沢遺跡 D丘陵



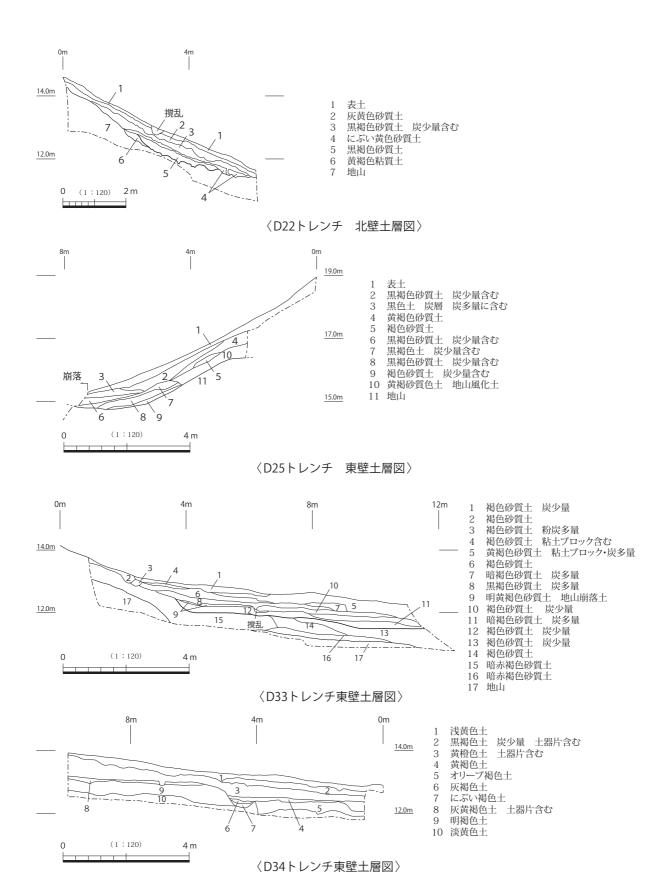
第19図 杉沢遺跡 D 丘陵試掘トレンチ配置図 (1:800)

第5表 杉沢遺跡 D 丘陵試掘トレンチの調査概要

トレンチ名称	遺構	遺物	調査時名称
D1	溝	須恵器, 土師器, 磁器	4
D2	溝	須恵器, 土師器	5
D3	溝	須恵器,磁器	6
D4	溝		7
D5	溝		8
D6	溝	土製品(近世)	9
D7			10
D8			3
D9			1
D10		陶磁器,弥生土器,石製品	27
D11			2
D12			26
D13			25
D14			19
D15			20
D16			21
D17			24
D18			23
D19			18
D20			22
D21			32
D22	大型被熱土坑1基	陶磁器,瓦,炭化物	31
D23			30
D24		陶器,弥生土器	29
D25	大型被熱土坑1基	陶器,瓦,炭化物	28
D26			11
D27		磁器, 瓦	12
D28			13
D29		土師器	14
D30		陶磁器	15
D31		陶磁器	16
D32		土師器	17
D33	溝? 1条		33
D34			34
D35			35
D36			36
D37			37

D丘陵は、杉沢遺跡の周知の範囲からは外れていたが、範囲内に位置する他の丘陵と一連であり、同様な遺構の存在が想定された。文政6年(1823)に描かれた『漆沼郷下直江村絵図』によると、この付近には「筑紫海(街)道」が通るとされ、D丘陵の尾根付近がその推定ルートと考えられる。尾根上には平坦面が広がり、中近世の道路遺構の発見が期待された。そこで、尾根から裾部にかけて37本の試掘トレンチを設けて調査を行ったところ、尾根上、北斜面中央、北東裾部において遺構・遺物を確認した(第5表)。

尾根上の調査では、 $D1\sim D7$ トレンチで一連と考えらえる大溝を確認した。これに加えて、西側の $D1\sim D4$ トレンチでは砂質土の硬化面が確認され、絵図にある道路遺構が残存している可能性が高まった。ただし、出土遺物は古墳時代以降、特に古墳時代後期から奈良時代の須恵器・土師器等が中心で、中近世の遺物は少ないことから、さらに古い時代の道路遺構が存在する可能性が高まった。



第20図 杉沢遺跡 D 丘陵試掘トレンチ土層図 (1:120)

本調査の結果,「古代山陰道」と推定される遺構と判明したため, 試掘調査の成果は第4章第4節で一括して示す。

北斜面中央では、大型の土坑内に炭化物が堆積していることが分かり、炭焼土坑の可能性が浮上した。また丘陵裾部では、溝と考えられる遺構のほか、古墳時代の土師器を中心に弥生時代から古代までの土器小片が出土しており、当該期の遺構が残存している可能性がある。

北斜面および裾部出土の遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦、陶磁器等、古代から近世に至る

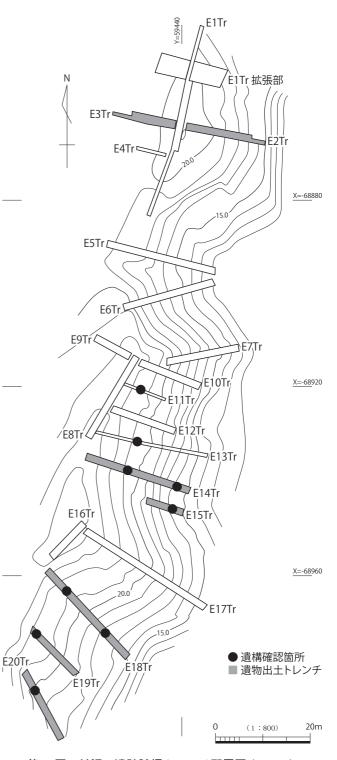
幅広い年代を示す。中心を占める須恵器・土師器は古墳時代後期から奈良時代前半に収まるものが多い。また,D丘陵は他丘陵と比較して陶磁器の出土が多く,その年代は幕末~近代が中心となる。なお,これらの遺物については,いずれも小片であるため図化には至らなかったが,確認できる器種には,須恵器の坏,甕,土師器の坏,皿,甕等が確認できる。また,陶磁器は碗や皿,甕等が確認できる。

第4項 杉沢Ⅱ遺跡

杉沢Ⅱ遺跡は工業団地造成予定地の北に位置し、周知の遺跡範囲は調査範囲には含まれていなかった。しかし、遺跡が位置する丘陵の南側の一部が造成予定地に含まれたため、杉沢Ⅱ遺跡が周知の範囲から南へ広がる可能性を想定し、東斜面に19ヵ所の試掘トレンチを設定した。第6表にその調査概要を示す。

調査の結果, 試掘調査範囲の南半分で新たに遺構が発見され, 本調査範囲として設定するとともに, 周知の遺跡の範囲を南へ広げる必要性が生じた。試掘トレンチで確認した遺構は小規模なものが多いが, E14トレンチでは, 加工段の床面で複数個体の弥生土器の破片が集積した状態で出土するなど, まとまった量の遺物が得られた。

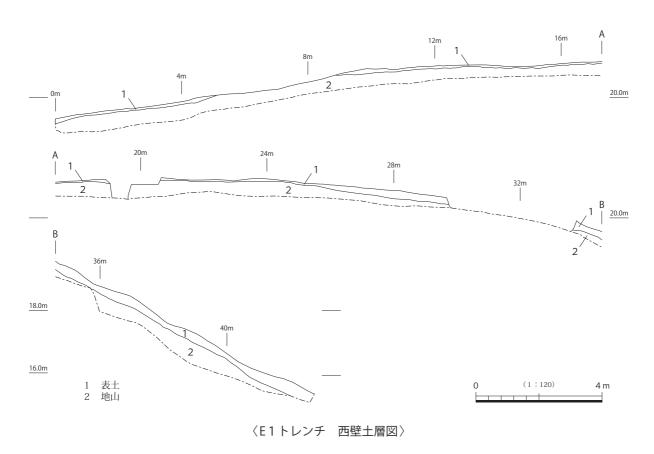
なお、北半分については、古墳と想定される高まりがあることからE1~E4トレンチ



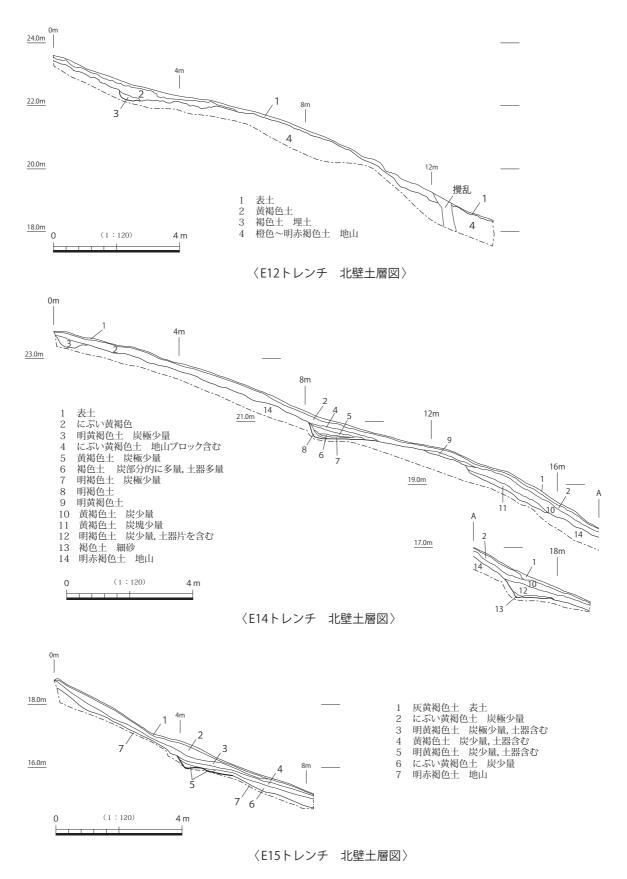
第21図 杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ配置図(1:800)

笠 6 末	松沢工造跡計場	トレンチの調査概要	
弗 D 农	イクバ 11 1貝 1小式化	トレノナい調宜城安	

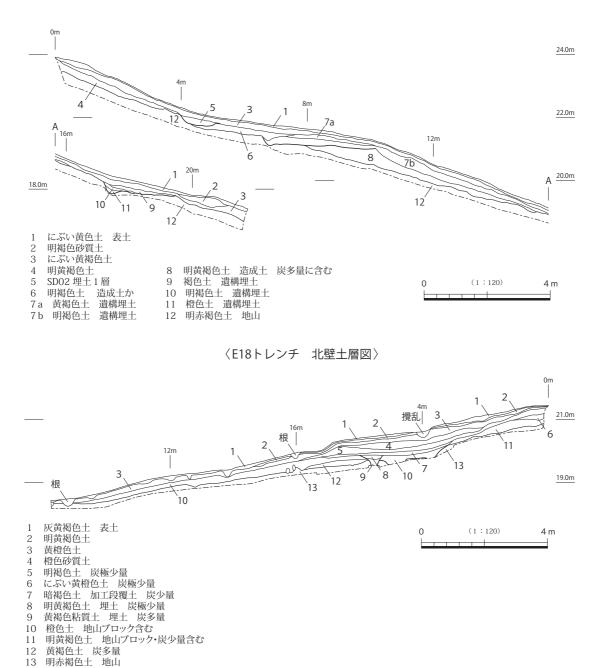
トレンチ名称	遺構	遺物	調査時名称
E1			1
E2		須恵器, 陶器	2
E3		須恵器, 陶器	3-1
E4			3-2
E5			4
E6			17
E7			18
E8			5
E9			7
E10			6-1
E11	加工段1基		6-2
E12			8-1
E13	加工段1基		8-2
E14	加工段1基(土器溜まり)	須恵器, 弥生土器	9
E15	加工段1基	弥生土器	16
E16			10
E17			11
E18	加工段1基 , 溝1条	弥生土器	12
E19	溝?1条	弥生土器	13
E20	加工段1基	須恵器, 土師器, 弥生土器, 石製品	14



第22図 杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図① (1:120)



第23図 杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図② (1:120)

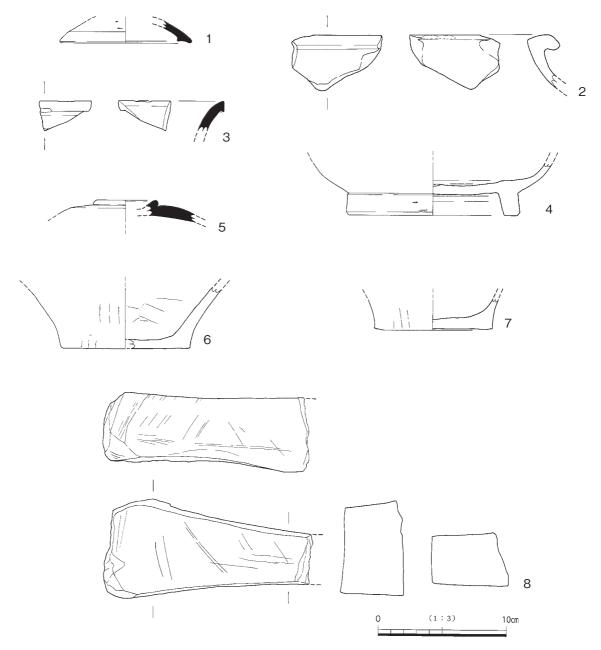


〈E20トレンチ 南壁土層図〉

第24図 杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ土層図③ (1:120)

を設定して調査を行ったが、トレンチの土層断面には古墳の存在を示す状況はみられず、自然地形と 判断した。

出土遺物の大半は弥生土器が占め、その器種には甕、壺、高坏がある。このほか、須恵器の坏蓋や陶磁器の碗類、石器がわずかながら出土している。いずれも小片が多く、図化できたのは次頁の8点である。なお、E14・E15トレンチにまたがって検出された加工段では、前述したとおり土器集積を確認している。試掘調査時には土器の上面のみ検出したが、本格的な掘削と遺物の取り上げは遺構掘削時に実施したため、本調査の報告で詳細を述べることとする。



第25図 杉沢Ⅱ遺跡試掘トレンチ出土遺物(1:3)

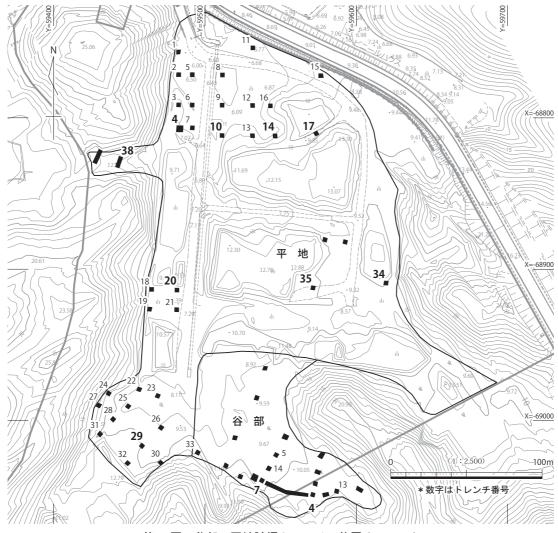
第25図1・2はE1トレンチから出土した。1は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部の特徴から出雲6期に属するものである。2は土師質土器で、甕または鍋の口縁部と考えられる。3はE2トレンチ出土の須恵器の壺である。4はE3トレンチ出土の陶器片で、鉢の底部と考えられる。近世以降の資料である。7はE15トレンチ出土の弥生土器の底部である。5・6はE18トレンチからの出土である。5は環状つまみが付く須恵器の坏蓋。6は弥生土器の底部で、底径は10cmを測る大型品である。器面にはヘラミガキが施されている。8は調査区南端に設定したE20トレンチから出土した砥石である。両端部が欠損しているものの、全面に研面が観察できる。

第2節 谷部・平地の調査

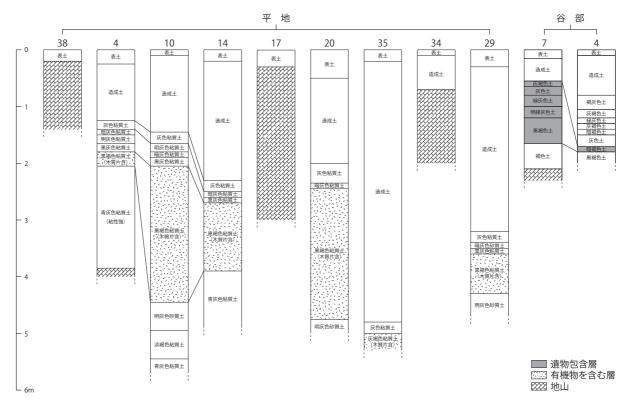
丘陵に囲まれた平坦面および谷部について、C丘陵とD丘陵の間に位置する南側最深部を谷部として15ヵ所、それ以外を平地として39ヵ所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した(第26・27図)。なお、平地の中央部付近には島根県畜産試験場斐川分場造成時の盛土(高さ3~5m)が残っており、調査対象から除外した。

第1項 谷部の試掘調査

杉沢遺跡 $C \cdot D$ 丘陵裾部付近のトレンチでは表土から 2 m前後で地山に到達したが、谷の中央部では $3 \sim 4$ m、もしくはそれ以上の深さがあり、またどのトレンチにも $50 \sim 150$ cm程度の厚さで造成土が堆積している。元来は現状よりもさらに深い谷状地形であったことが推定される。いずれのトレンチにおいても、明確な遺構は確認できず、遺物についても D 丘陵の裾部付近に設定した $4 \cdot 7$ トレンチのみで土器がまとまって出土した。第28図に、4 トレンチから出土した 4 点の土師器および土師



第26図 谷部・平地試掘トレンチの位置(1:2,500)



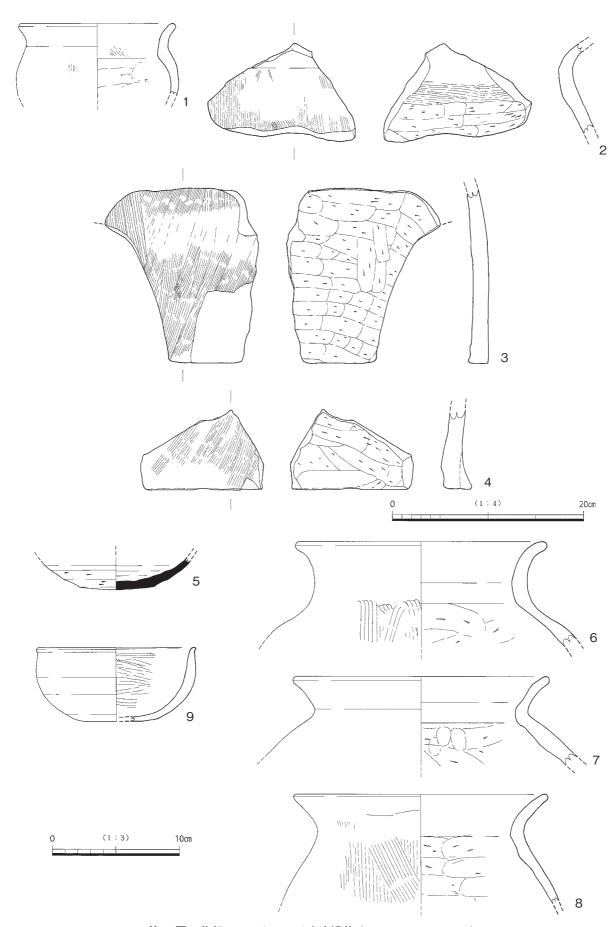
第27図 谷部・平地試掘トレンチ柱状図

	ì	遺 構		遺物							
	検出面	種類	数	検出層	弥生土器	須恵器	土師器	古代瓦	近世・近代 陶磁器	石 器	備考
4 tr	-	-	-	暗褐色粘質土	-	9点	50点	-	-	-	移動式竈破片
5 tr	-	-	-	排土	-	-	-	-	0	-	-
				排土	-	2点	40点	-	0	-	坏蓋1点/古墳後期
7 tr	-	-	-	灰色土	-	-	2点	-	-	-	-
				黒色土	-	-	1点	-	-	-	-
13 tr	-	-	-	黒色粘質土	-	-	1点	-	0	-	-
14 tr	-	-	-	排土	-	-	-	-	0	-	-

第7表 谷部試掘トレンチの調査概要

質土製品を掲げた。1は土師器の小型甕である。底部を欠くが、全形を復元しても器高は10cm前後と考えられる。口縁部は外反して立ち上がり、頸部内面は強く屈曲する。器形の特徴から古墳時代後期に帰属する資料と考えられる。

また、 $2\sim4$ は移動式竈である。 2 は掛口の頸部から肩部、 3 は焚口、 4 は基部の破片で、いずれも外面をハケメ、内面を粗いヘラケズリで調整している。内面には一面に煤が付着する。形態的特徴として、1 の口縁(掛口)端部は如意状を呈し、体部はやや直線的である。 3 の焚口片も体部は直線的で、基部はあまり厚い作りではない。焚口部には庇の痕跡が見られず、焚口横に明確な剥離痕がないため、庇は上部に付くものと推定されるが、詳細については不明である。また基部片 4 は、直立して立ち上がる体部の外側にもう一枚粘土板を貼り付けて肥厚させている。 $2\sim4$ の移動式竈片は接合面を持たないものの、色調や胎土、体部の立ち上がり等に共通点が見られることから同一個体の可能性が高い。加藤裕一による山陰両県の移動式竈の分類および編年 1 によると、 $2\sim4$ は出雲 3 期以降に出現する C 類に属し、島根県内では出雲 $4\sim5$ 期以降、つまり古墳時代後期以降に主体となるタイ



第28図 谷部4・7トレンチ出土遺物(1:3, 2~4は1:4)

プにあたる。同じトレンチの同一層から出土した土師器 1 が古墳時代後期に帰属するものと考えられることとも整合する。 4 トレンチから西へ35 mの位置に設けた 7 トレンチでは,須恵器,土師器が出土している。 5 は須恵器で,坏身の底部と考えられる。口縁部を欠くため正確な年代を求めることはできないが,底部外面は回転ヘラケズリによって丸底気味に成形され,高台も付かないことから,出雲 6 期を下ることはないと考えられる。 6 ~ 8 は土師器の甕である。いずれも口縁部から肩部までの破片で,全形を伺うことはできなかった。 3 点の口縁部は全て如意状を呈し,古墳時代後期に属するものと考えられる。また 9 は土師器の椀である。口縁端部がわずかに外反し,内面をヘラミガキで仕上げる。これも古墳時代後期の資料であり, D 丘陵裾の谷部においては,古墳時代後期を上限として遺物が流入していることが分かる。

また、図化には至らなかったが、7トレンチでは陶磁器類が一定量出土している。器種には、碗、甕、皿等があり、年代としては明治時代以降と比較的新しい。近接したD丘陵(丘陵部)の試掘調査で出土した陶磁器とは帰属時期が異なっており、丘陵部と平坦部では土地利用に時期差があることが分かる。

第2項 平地の試掘調査

丘陵の裾部付近では、地表から2m程度の厚さで造成土が堆積し、その直下で地山を確認した。一方、平地の中央部では造成土の下から木質片を多く含んだ黒褐色土層、さらにその下にシルトを主体とする青灰色粘質土層が厚く堆積していた。よって平地は造成前には沼地のような環境であったと考えられる。

また、平地の調査では遺構・遺物ともに出土せず、本調査の対象範囲を丘陵部のみとした。

第3節 範囲確認調査・試掘調査の成果

調査の結果,調査対象地約50,000㎡のうち,5つの丘陵の合計7,000㎡で弥生時代以降の遺構・遺物が検出され,本調査の必要性が生じた。杉沢遺跡については,かねてより存在が分かっていた杉沢横穴墓群(A丘陵)に加え,B丘陵南斜面,C丘陵南北斜面と尾根上,D丘陵尾根上から裾部を本調査対象とした。また杉沢Ⅱ遺跡は,周知の遺跡範囲を南に拡大し,丘陵の基部に近い東斜面で本調査を実施することとした。各遺跡の本調査結果については,次章以降で詳細を報告する。

(景山このみ)

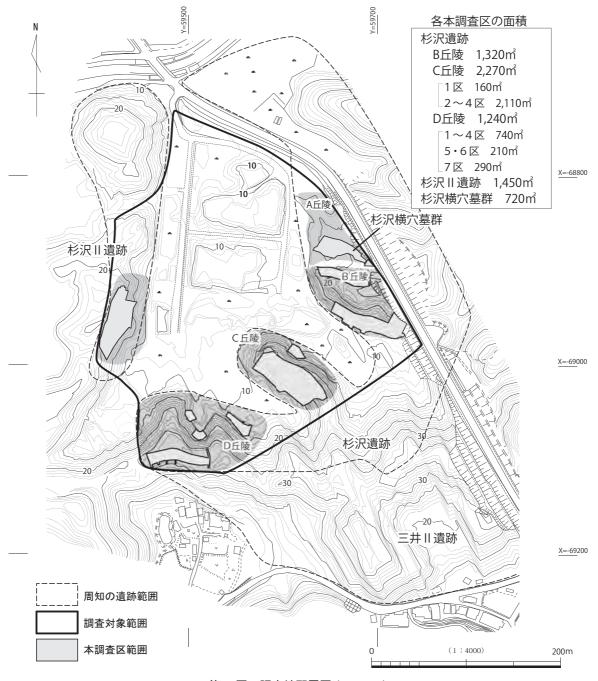
【註】

1) 加藤裕一 2005「第5章まとめ 2. 移動式竈について」『名和中畝遺跡』鳥取県教育文化財団調査室報告 書103 財団法人鳥取県教育文化財団

第4章 杉沢遺跡の調査

杉沢遺跡は、工業団地造成予定地の東側から南側にかけて位置し、複数の丘陵に展開する遺跡である。そのうち、4カ所の丘陵が今回の調査対象範囲に入っている。4カ所の丘陵は、北に位置するものからA丘陵、B丘陵、C丘陵、そして最も南に位置するものをD丘陵と呼称し、それぞれの丘陵について発掘調査を実施した。本章でもその名称に即して丘陵ごとに節を区切って調査成果を述べる。

なお、A丘陵南斜面に存在する杉沢横穴墓群の調査成果は、第6章において詳細を報告する。



第29図 調査地配置図(1:4,000)

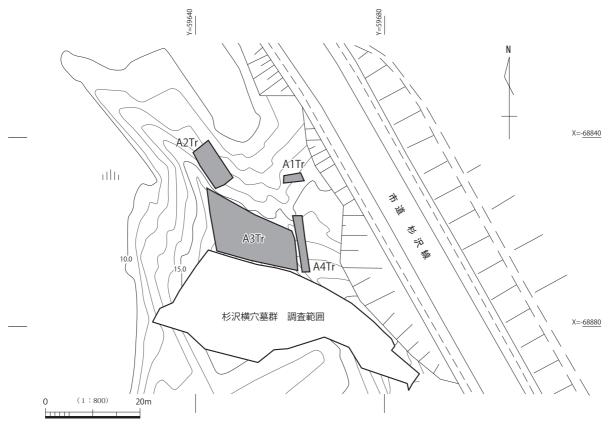
第1節 A丘陵北斜面の調査

杉沢遺跡 A 丘陵の北斜面では、平成 14年(2004)に斐川町教育委員会による範囲確認調査が実施された。当時の調査では、北斜面に大小 4ヵ所のトレンチが設けられ、そのうち丘陵頂部付近に設定された A 3トレンチ(17.4 m×10 m)で遺構が、A 1 ~ 3 トレンチで遺物が確認されている 1 。

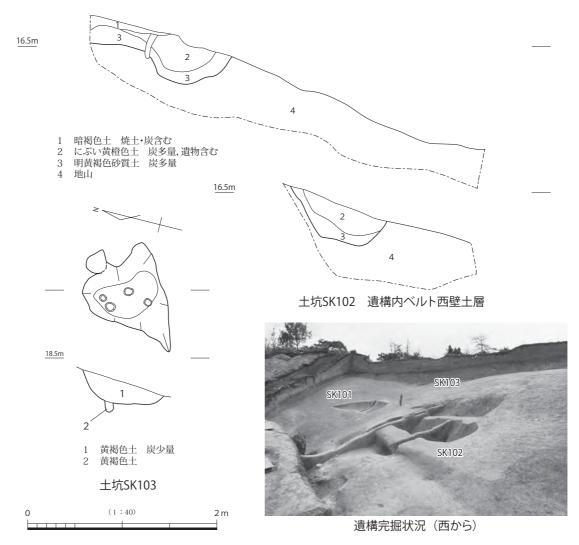
第1項 遺構(第30:31図)

A3トレンチでは、大型土坑2基、小型土坑1基を確認した。前者は、いずれも長軸約2m、短軸約1mを測る。遺構の断面は浅いU字状になっており、加工段とは判断できなかったため大型土坑とした。トレンチの中央付近で近接して検出されている。このうち、中央やや西寄りに位置する大型土坑SK102では、遺構の南西肩部にかかるように被熱部が検出されており、遺構に伴う可能性があるが、詳細は不明である。また、底面から弥生土器と鉄器2点が出土している。

小型の土坑SK103は、調査区南端にあたる頂部において、単独で検出された。直径1 mの範囲に 広がる不定形の土坑で、深さはおよそ30cm程度である。特徴として、底面で直径10cm・深さ15cm程 度の小ピットが4基確認されている。



第30図 杉沢遺跡 A 丘陵北斜面のトレンチ配置 (1:800)



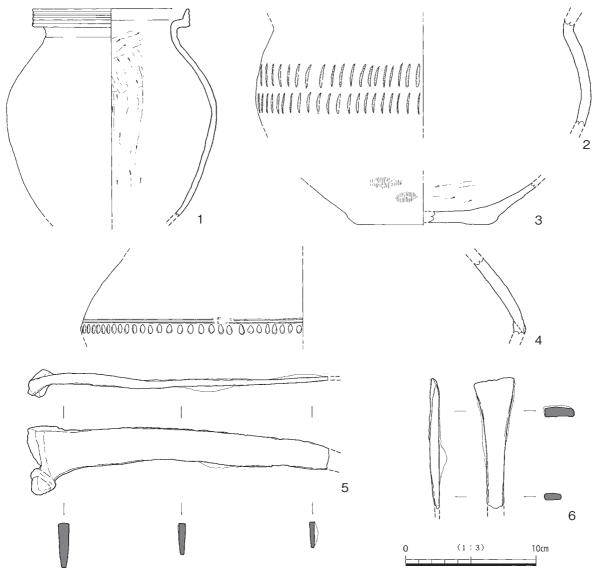
第31図 杉沢遺跡A丘陵北斜面の遺構(1:40)

第2項 遺物(第32図)

ここでは、まとまって出土したA3トレンチの遺物について報告する。

A3トレンチでは、土坑SK102から弥生土器の甕、高坏と鉄器が出土した。このうち、弥生土器3点、鉄器2点を図化した。1~3は弥生土器の甕である。1は口縁端部が上方に拡張し、口縁外面に凹線文、胴部外面に列点文1条が巡る。一方、内面は頸部までヘラケズリが施され後期の特徴を有していることから、後期初頭に帰属する資料と考えられる。2は胴部にハケ状工具による刺突文が巡り、3は大型の底部片である。4は大型の壺の胴部上半で、最大径部分を1条の沈線と楕円形の刺突文で飾る。残念ながら全形は不明だが、玉葱形の器形が想定できる。

5は中型の鉄製鎌である。折り返し部分の一部と先端を欠くものの、現状で長さ23cmを測る。折り返し部の刃部側は、X線写真によると根元に金属製の環を巻いた状態が確認できるが、錆に覆われ詳細は不明である。刃部は、折り返しから5cmの幅で刃潰し加工が施される。6は鉄製鑿である。撥状に開く幅広の刃部で、その先端は使用によるものか片側が擦り減っている。



第32図 A3トレンチ遺構出土遺物(1:3)

第3項 小結

A丘陵北斜面では、弥生時代中期後葉~後期前半に位置づけられる遺構・遺物を確認した。明確な建物跡等の遺構は確認できなかったが、A3トレンチの大型土坑2で鉄器が出土した点は特筆すべきことである²⁾。出土した土坑については、住居跡とも埋葬施設ともとれず、用途をはじめ不明な点が多く残されているが、杉沢遺跡が広がる谷に流入初期の鉄器を入手するほどの力を持った集団が存在していたことを示す資料として捉えることができよう。

【註】

- 1) A丘陵北斜面の遺構平面図は、調査当時の測量データが失われたため図示できなかった。
- 2) 出土当時,池淵俊一氏(島根県埋蔵文化財調査センター)にご教示いただいた。鎌としては厚みがあることから,素環頭鉄刀の転用品である可能性を示唆されている。

第2節 B丘陵の調査

杉沢遺跡 B 丘陵は、杉沢横穴墓群が築かれた A 丘陵の南に位置する。市道杉沢線の道路改良工事に伴って丘陵の東側の一部が発掘調査され、弥生時代中期の大型竪穴建物跡や古墳時代前期の土壙墓 6 基が確認された(斐川13)。

今回の調査では、丘陵南斜面の約1,350㎡の範囲に調査区を設け、発掘調査を行った。調査区は、便宜的に西端をB1区、東端をB5区とした。調査の結果、建物跡に復元される加工段6基、加工段8基、溝10条、そして性格不明の土坑1基を確認した。帰属時期は、いずれも弥生時代中期である。以下、遺構、遺構出土遺物、包含層出土遺物の順に詳細を述べる。

第1項 遺構

(1) B1区の遺構(第34図 図版17)

調査区西端に位置するB1区では、加工段を1基確認した。

加工段SX201 (第34図 図版17)

B1区は調査区の西端にあり、検出された遺構は加工段SX201のみである。試掘B8トレンチの掘削により一部失われているものの、遺構の東半分と西側端部は残存している。平面形はいびつな楕円形で、東西方向に約4.4m、南北方向に約2.5mを測り、壁体の高さは約60cmである。壁体溝や柱穴等、平坦面に付随する遺構は確認できなかった。

埋土は3層である。2・3層は地山の土質に類似しており、遺構の上部からの崩落土と考えられる。 1・2層から弥生土器が数点出土しており、いずれも弥生時代中期後葉の特徴を示す。

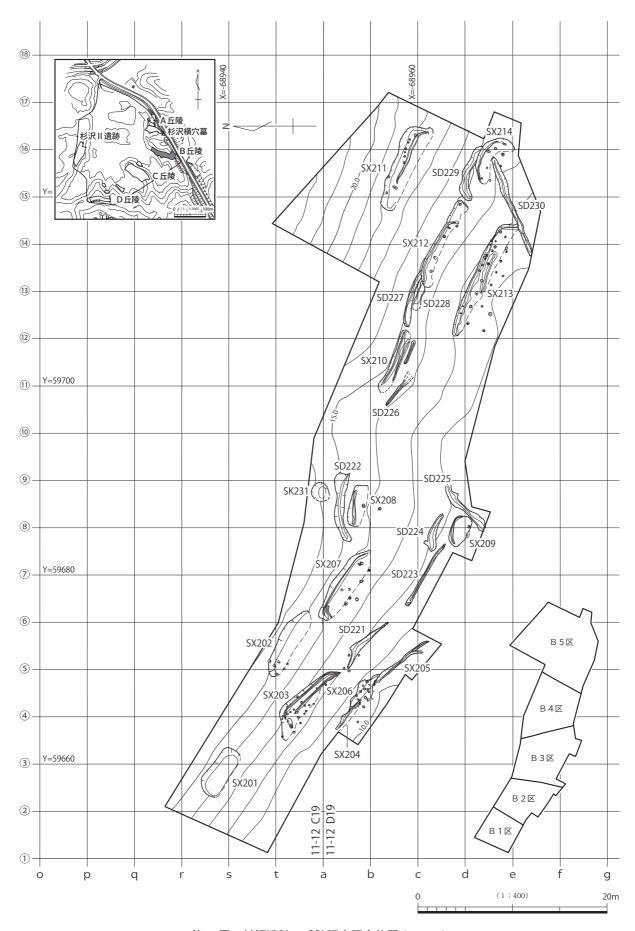
(2) B 2 区の遺構 (第35~38図 図版17)

B2区と隣接するB3区では、南北約 $15\,\mathrm{m}$ 、東西約 $30\,\mathrm{m}$ の斜面に14基の遺構が密集して築かれている。いずれも標高 $10\sim15\,\mathrm{m}$ の範囲におさまり、このうちB2区では、斜面の標高 $15\,\mathrm{m}$ 、 $13\,\mathrm{m}$ 、 $10\,\mathrm{m}$ 付近で上下3段に分かれて遺構が築かれていた。

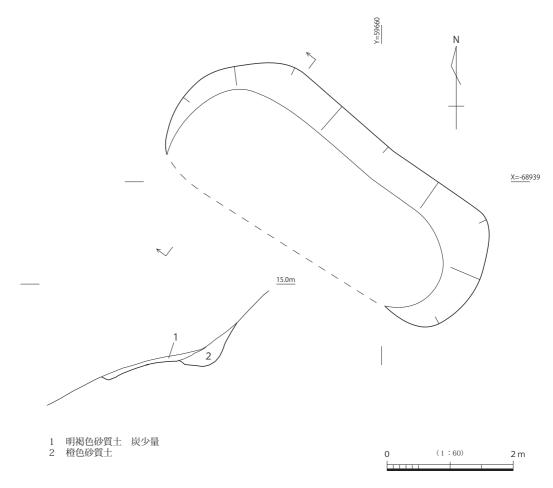
加工段SX202 (第35図 図版17)

B2区上部で検出された加工段SX202はB10トレンチで検出した遺構である。平面形は長楕円形で、長軸約7.5 m、短軸約2.2 m、壁体の高さは最大で約85 cmを測る。壁体の立ち上がりは緩やかで、壁体溝は伴わない。西端の壁面および平坦面で計6基のピットを検出したが、柱穴と断定するには小さく、配置もまばらであるため性格は不明である。

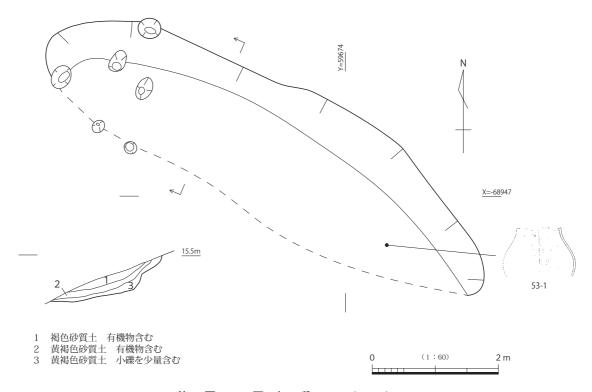
埋土は3層あり、1・2層から短頸壺などの弥生土器が少量ながら出土している。遺物の特徴から、 弥生時代中期後葉に位置づけられる。



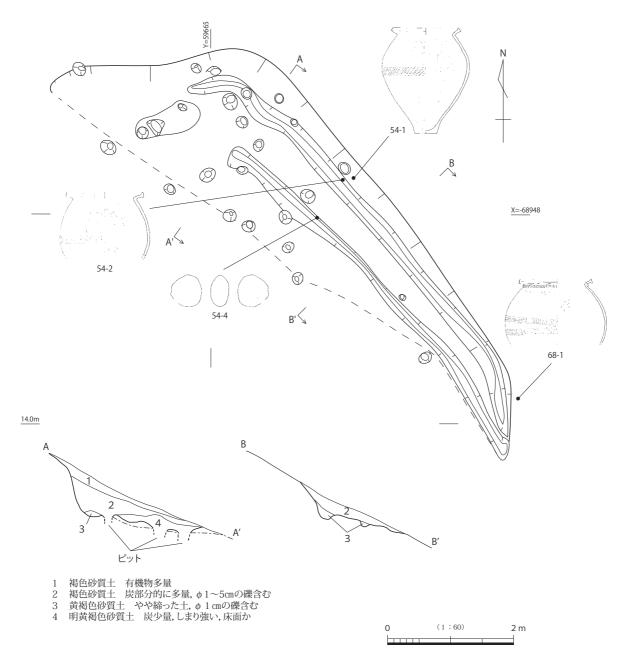
第33図 杉沢遺跡B丘陵調査区全体図(1:400)



第34図 B1区 加工段SX201(1:60)



第35図 B2区 加工段SX202(1:60)

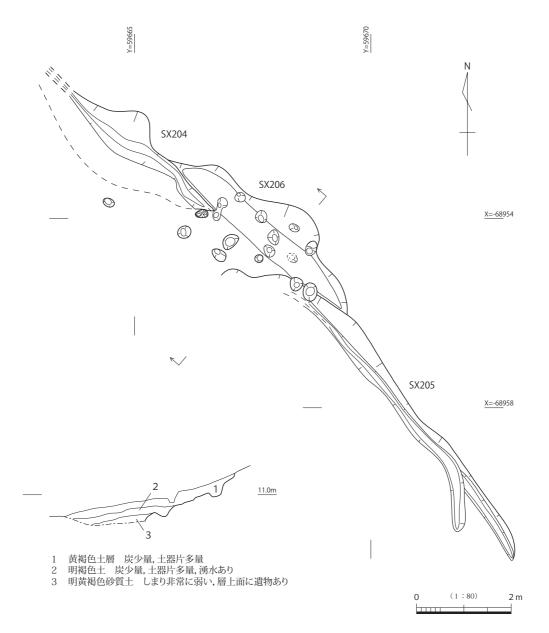


第36図 B2区 加工段SX203(1:60)

加工段SX203 (第36図 図版17)

加工段SX203は、B2区中央に位置する。長軸は約9.4 m、短軸は約2.2 mを測る。壁体は、西半分では約1 m、東半分では70 cmと高さは一定ではないが、垂直に近い角度で立ち上がる。また、壁体溝を伴い、その幅は20~30 cmである。平坦面は大部分が崩落したと考えられ、平面形は扁平な三角形である。確認できた最大幅は約1.7 mを測る。残存状態の良い西半分を中心として、床面では壁体溝に平行する溝1条、1基の土坑、22基のピットを検出した。ピットはいずれも直径20 cm前後と小さいながら、一部に規則的な配列がみられることから、掘立柱建物が建てられていた可能性がある。

埋土は4層に分けられる。このうち、最下層(4層)は上面が水平を指向していることから貼床層と考えられる。地山を削り出した上面には凹凸があり、生活面としては不適当であることからも貼床

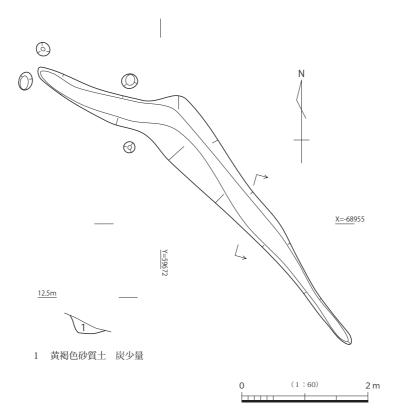


第37図 B2区 加工段SX204~SX206(1:80)

層の存在を推測できる。また出土遺物としては、埋土2層、4層上面を中心に弥生土器、石鏃、自然 石が出土している。弥生土器の特徴から、遺構の時期は弥生時代中期後葉である。

加工段SX204~SX206(第37図)

加工段SX204~SX206は、B2区の最下段に位置する。3基の遺構は重複関係にあり、加工段SX206の上に加工段SX204・SX205が築かれている。加工段SX204の西端から加工段SX205の東端までは約13.5mを測る。一方、丘陵裾部という立地と湧水等の影響によって平坦面がほぼ失われているため、短軸は加工段SX204・SX205で約1m、加工段SX206で約2mが残存するにすぎない。加工段SX204・SX205の壁体沿いには溝が掘削されており、特に加工段SX205では東側へ一度拡張した痕跡が認められる。加工段SX206については、平坦面に伴う溝は確認できなかったが、平坦面や壁体に



第38図 B2区 溝SD221(1:60)

合計16基のピットが掘りこまれていた。ただし、配列に規則性はみられず、加工段SX204・SX205 に伴う可能性のあるピットもあることから、建物等が建てられていたかどうかは定かではない。

埋土はいずれの遺構も $1\sim2$ 層である。層中には磨滅の少ない土器片が比較的多く含まれていたことから、上部の遺構からの流出土が堆積したものと推定できる。

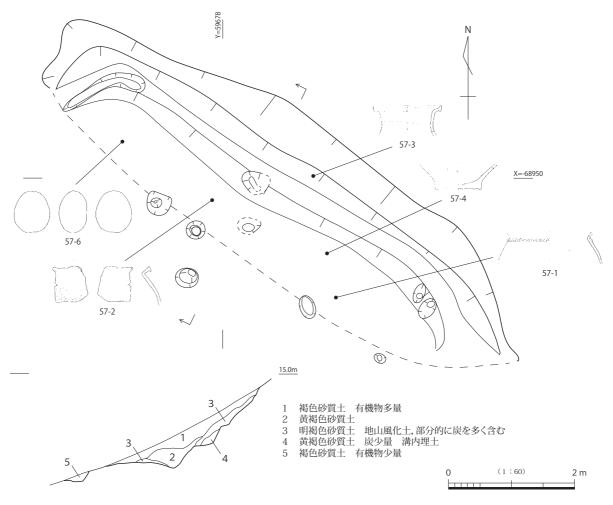
遺構内からは、弥生土器が多量に出土している。前述したように残存状態の良い大型の破片も含まれている。器種の大半は甕で、弥生時代中期後葉の特徴をもつ。

溝SD221 (第38図)

溝SD221は、長さは約 $6.8\,\mathrm{m}$ 、幅は $0.2\sim1\,\mathrm{m}$ で、平面形は三日月状である。深さは $20\,\mathrm{cm}$ 程度と浅く、遺構の断面形はL字状で、一般的にV字ないしU字状の断面となる溝とは異なり、加工段の壁体溝に近い形状である。西端では、遺構の南北にピットが2基ずつ掘りこまれており、溝SD221と同じ土で埋没していた。溝の埋土中からは弥生時代中期後葉の土器が数点出土しているものの、ピットでは遺物が確認できなかった。

(3) B3区の遺構(第39~44図 図版18)

B 3 区は、先述したB 2 区より密度は低く、標高 $15\,\mathrm{m}$ 、 $12\,\mathrm{m}$ 付近でそれぞれ $3\sim4$ 基の遺構がまとまって築かれていた。



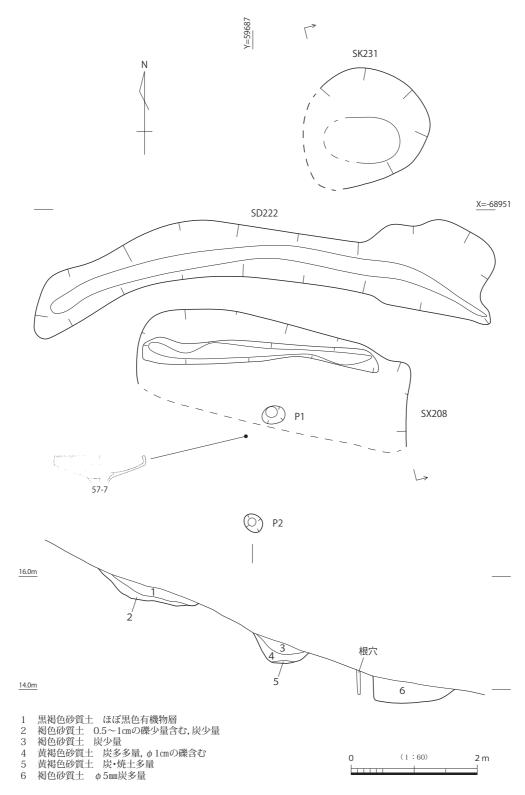
第39図 B3区 加工段SX207(1:60)

加工段SX207 (第39図)

B 3 区のほぼ中央に位置する加工段 SX207 は,B 2 区の加工段 SX202・SX203 とほぼ同規模の遺構である。平面形はいびつな楕円形で,長軸は約8.8 m,短軸は現状で約2.4 m,壁体の高さは約1.2 mを測る。壁体の立ち上がりは緩やかで,斜面の中ほどに1段,テラス状の狭い平坦面が形成されている。また,床面と考えられる平坦面との境に幅20~40 cmの壁体溝がある。この壁体溝の内側には平坦面が約1 m幅で残っており,加えて,遺構に伴うと考えられるピットを9基確認した。このピットの配置に明らかな規則性は認められない。壁面にテラス状の段をもつ加工段は,後述する杉沢遺跡 C 丘陵でも確認できる(竪穴建物 SI304,第4章第3節)。そのため,加工段 SX207 は竪穴建物跡に復元できる可能性がある。

遺構の埋土は5層ある。このうち、3層は平坦面に対して比較的水平に堆積していることから、貼床層の一部とも考えられるが、残存幅が狭く、貼床層と断定することはできない。

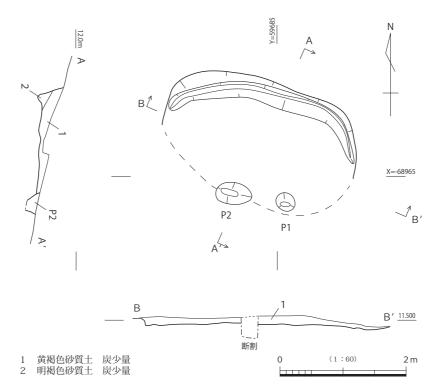
壁体溝から南の平坦面を中心に弥生土器が出土した。多くの土器片は1・2層に含まれていたが、 壁体溝埋土である4層や地山直上からの出土も認められる。すべて弥生時代中期後葉である。



第40回 B3区 加工段SX208·溝SD222·土坑SK231(1:60)

加工段SX208 (第40図 図版18)

B11トレンチで確認されていた遺構のひとつである。平面形は隅丸方形で、長軸は約 $4.3\,\mathrm{m}$ 、短軸は約 $1.6\,\mathrm{m}$ を測る。壁体は垂直に近い角度で立ち上がっており、その高さは現状で $40\,\mathrm{cm}$ 程度である。壁体沿いには $30\sim40\,\mathrm{cm}$ 幅の直線的な溝が掘られている。また、平坦面でピット2基を検出した。ピッ



第41図 B3区 加工段SX209(1:60)

ト内からは弥生土器の小片が出土している。

加工段およびピット2基の埋土は炭化物を多く含む6層である。層中には比較的まとまって遺物が 包含され、遺構付近でも小型の装飾壺が出土している。遺物の多くは丘陵上部からの落ち込みによる ものと考えられる。

加工段SX209 (第41図)

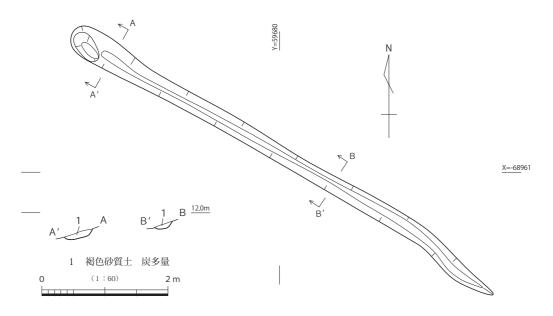
B3区の南東隅に位置し、後述する溝SD224に近接する。平面形はややいびつな楕円形である。長軸は約3.4m、短軸は約2.9mを測る。壁体の立ち上がりは垂直に近く、高さは現状で約40cmである。壁体に沿うように溝が掘られ、平坦面に2基のピットが並んでいた。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

溝SD222 (第40図 図版18)

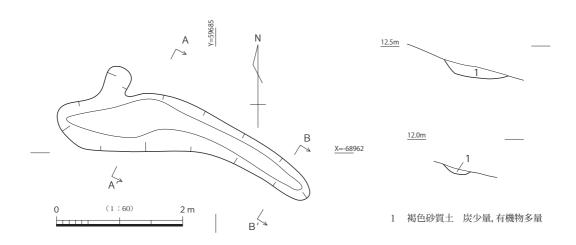
溝SD222は、加工段SX208の北に位置し、加工段を取り囲むように近接して掘り込まれている。 長さは約 $7\,\mathrm{m}$ 、幅は約 $80\,\mathrm{cm}$ であるが、東端は拡張され、 $1.4\,\mathrm{m}$ 程度を測る。深さは約 $45\,\mathrm{cm}$ である。

埋土は3層で、溝状遺構の最下層にあたる5層は炭化物および焼土を密に含み、部分的に被熱痕跡が確認できる。遺物が含まれるのは4・5層で、中期後葉の特徴を有する弥生土器のほか、黒曜石の剥片が2点出土している。

溝SD222は、遺構の配置と出土遺物の時期から加工段SX208に伴う溝と考えられる。ただし、加工段SX208で検出されなかった焼土を含み、単に加工段を囲むだけの溝ではないことがうかがえる。



第42図 B3区 溝SD223(1:60)



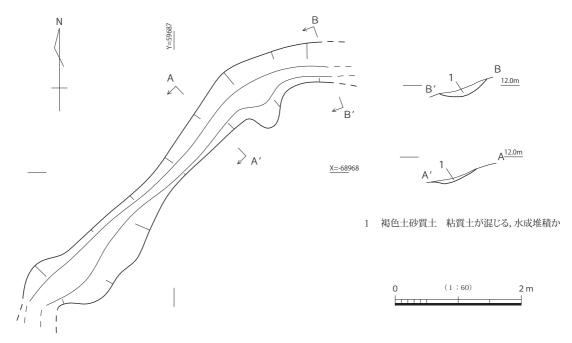
第43図 B3区 溝SD224(1:60)

溝SD223 (第42図)

B3区南端に位置する,長さ約8mに及ぶ溝状遺構である。幅が $30\sim40$ cmと狭く,深さは10cm程度しかない。埋土は1層で,出土遺物もなく時期・性格ともに不明である。

溝SD224 (第43図)

溝SD223の北東に位置する,弧状に湾曲した溝である。長さ約4.2 m,幅約80 cm,深さ約25 cmを測る。西側の一部が北に飛び出す形状を呈するが,ピット等,明確に付随する遺構は確認できなかったため,撹乱の可能性もある。埋土は1層で,弥生土器と須恵器の小片が出土した。遺構に伴うものではなく,流入したものと考えられる。



第44図 B3区 溝SD225(1:60)

溝 SD225 (第44図)

B11トレンチ南端から調査区外に伸びる溝である。現状で長さ約 $6\,\mathrm{m}$,幅約 $1\,\mathrm{m}$,深さは $10\,\mathrm{cm}$ 程度である。遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明である。

土坑 SK231 (第40図 図版 18)

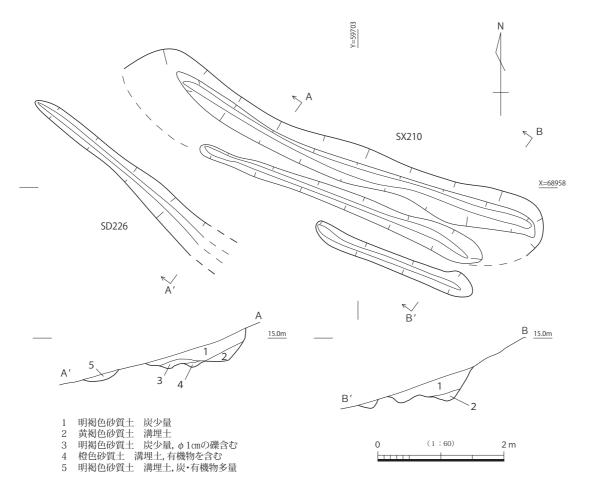
B 3 区と B 4 区の間で検出した大型の土坑で、加工段 SX208、溝 SD222 に近接する。平面形は円形で、B11 トレンチによって遺構の西端部が失われている。直径は約 $1.8\,\mathrm{m}$ で、深さは約 $30\,\mathrm{cm}$ である。埋土は $2\,\mathrm{m}$ あり、 $1\,\mathrm{m}$ には有機物が多く含まれていた。遺物が出土していないため、時期や機能は不明である。

(4) B 4 区の遺構 (第45図)

B4区は、調査区となった南斜面でもやや奥まった地形に位置している。遺構は3基と少なく、調査区の大半はなだらかな斜面であった。斜面の堆積土には多量の遺物が包含されており、周辺からの転落・混入と考えられる。

加工段SX210

B4区東半に位置する小型の加工段で、B16トレンチで検出されている。現状で、長軸約7m、短軸約1mを測る。壁体の高さは約50cmで、比較的緩やかな立ち上がりである。壁体溝は明確ではないが、壁沿いは溝状のくぼみが認められる。また、平坦面にあたる場所に2状の溝が掘削されており、いずれも加工段SX210の長軸に平行しているため、加工段に伴うものと判断した。柱穴は確認できていない。埋土は5層ある。遺物の出土が多いのは最も厚く堆積している1層で、弥生時代中期後葉



第45図 B4区 加工段SX210·溝SD226(1:60)

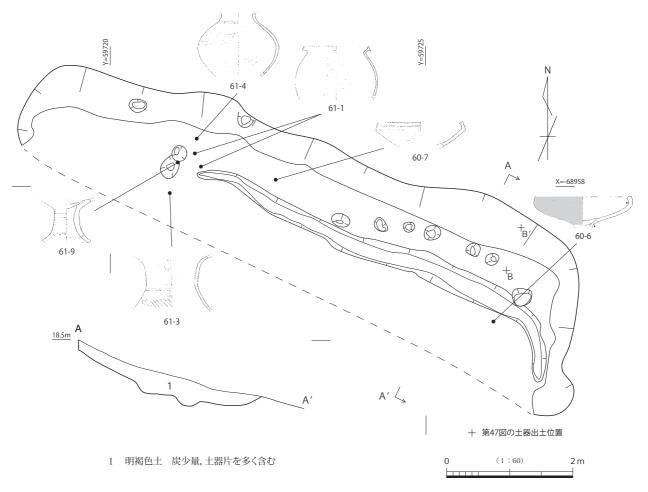
の土器片がまとまって出土している。また、地山直上の3層、5層からも同じ時期の弥生土器が出土 していることから、当遺構も弥生時代中期後葉に帰属するものと考えられる。

溝SD226

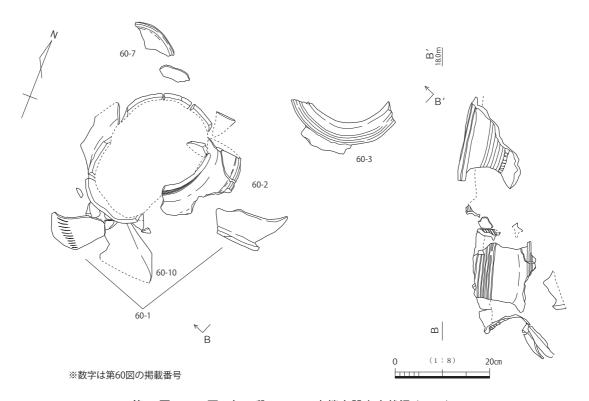
加工段SX210に近接する。B16トレンチの中で遺構の東端が消滅しており、正確な規模は不明だが、長さ4m程度、幅 $40\sim50$ cmの溝状遺構に復元される。埋土は1層で、炭化物を多く含む。埋土から弥生土器の甕の小片が数点出土しているが、明確な時期の特定はできない。

(5) B5区の遺構(第46~51図 図版18~20)

B5区は、B2・B3区と同様に遺構密度が高く、B4区東半部を含めると南北20m、東西30mの範囲に10基の遺構がある。遺構は標高12~18mの斜面に3段にわたって築かれ、このうち標高15m前後には約50cm間隔で加工段や溝が掘削されている。またB丘陵の中でも大型の遺構が集まっており、遺物も多い。



第46図 B5区 加工段SX211(1:60)



第47回 B5区 加工段SX211 東端土器出土状況(1:8)

加工段SX211 (第46·47図 図版18·19)

B5区北東部に位置する大型の加工段である。平面形はほぼ方形で、北西・北東の端部は多少の丸みを帯びるもののコの字形を呈している。長軸は約9.4m,短軸は約2.6mを測り、壁体は約35cmが残存している。壁体の立ち上がりは緩やかだが、平坦面との境界は明確である。平坦面には、約6.3mの溝状遺構と11基のピットが掘削されている。溝状遺構は東半分の壁面に平行しており、ピットも東半分で等間隔に並ぶ様子が認められるため、建物跡の可能性が高い。

遺構の埋土は2層で、いずれの層からも弥生時代中期後葉の土器が多量に出土している。特に、遺構北東隅の地山直上では、大型の広口壺や高坏、甕、鉢などが集積した状態で出土し、建物跡あるいは加工段の廃絶に伴って建物内に廃棄された可能性がある¹⁾。

加工段SX212 (第48図 図版19)

加工段SX211から南東に約3m下がった斜面に位置する。B18トレンチで把握していた遺構で,調査の結果,加工段であることがわかり,東側に拡張した痕跡も確認した。拡張前の加工段は,長軸が8m程度で,平面形は方形である。壁体の高さは $40\sim50\,\mathrm{cm}$ を測る。平坦面は大部分が崩落しており,約 $1\,\mathrm{m}$ 幅のみ残存しているが,壁沿いに溝と $5\,\mathrm{\bar{k}}$ のピットが掘削されている。また拡張部は東側に約 $1.8\,\mathrm{m}$ 伸び,その端部の平面形は方形に近い。拡張部には壁体溝はなく,壁沿いの平坦面にピットが $1\,\mathrm{\bar{k}}$ 掘られている。計 $6\,\mathrm{\bar{k}}$ のピットは列状に並んでおり,掘立柱建物の柱穴として機能していた可能性もある。

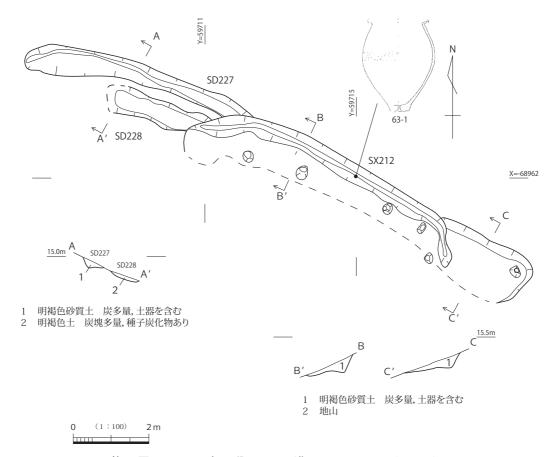
埋土は1層のみで、平坦面付近から弥生土器片が比較的多量に出土した。中にはほぼ完形を保った状態の甕もあり、前述した加工段SX211同様、建物の廃絶時に廃棄されたと考えられる。ただし、当遺構からは加工段SX211の広口壺と接合する破片も出土しており、遺物は上部から転落してきたものが多いとみられる。なお、出土遺物の特徴からみた拡張前後の時期差はほぼない。

溝 SD227 · SD228 (第48図 図版19)

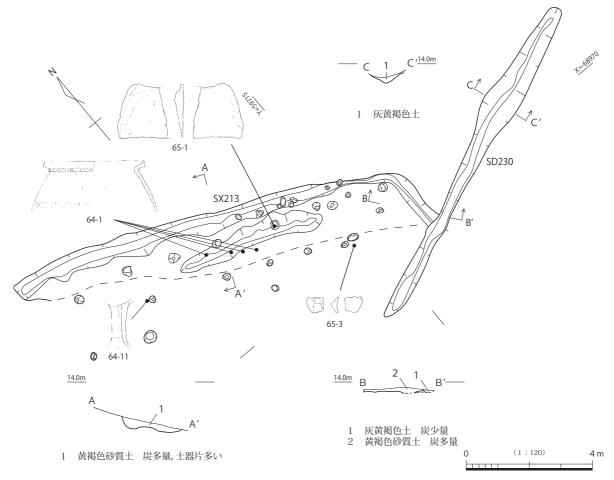
加工段SX212の西端に接して検出された 2条の溝である。東端は加工段SX212と重複しており、その前後関係から溝SD227・SD228の方が古い。正確な規模は不明だが、現状では溝SD227が長さ約 6 m、幅 $40\sim75$ cm、深さ約25 cm、溝SD228 が長さ約2.5 m、幅約70 cm、深さは約10 cmを測る。埋土はいずれも 1 層で、溝SD227 からは弥生土器片が出土しているが詳細な時期は不明である。

加工段SX213 (第49図 図版20)

B5区の最下段にある,最も大型の加工段である。B17トレンチで遺構の西端が確認されたのみで全容はわからなかったが,本調査時,それにつながると推定される加工段状の落ち込みが確認された。検出された加工段は,残りの良い東端の壁体の形状から,平面形は方形と考えられる。長軸は約13.8m,短軸は約2mが残存しており,壁体の高さは約50cmを測る。壁体溝があり,東半部の溝底面には8基のピットが並ぶ。また平坦面には,5m弱の溝状遺構と19基のピットが伴う。ピットの



第48図 B5区 加工段SX212·溝SD227·SD228(1:100)



第49図 B5区 加工段SX213・溝SD230(1:120)

配置をみると、壁体の長軸に平行して2~3列のピット列を復元することができる。これは壁体溝内のピットも同様であり、何らかの建物が建てられていた可能性が高い。遺構内からも弥生時代中期後葉の土器、石器が多く出土しており、加工段SX213に建物が建てられていた可能性を裏付ける資料となる。ただし、現状では平坦面の大部分が失われ、焼土痕等の生活痕跡は確認できない。

加工段SX214 (第50図 図版20)

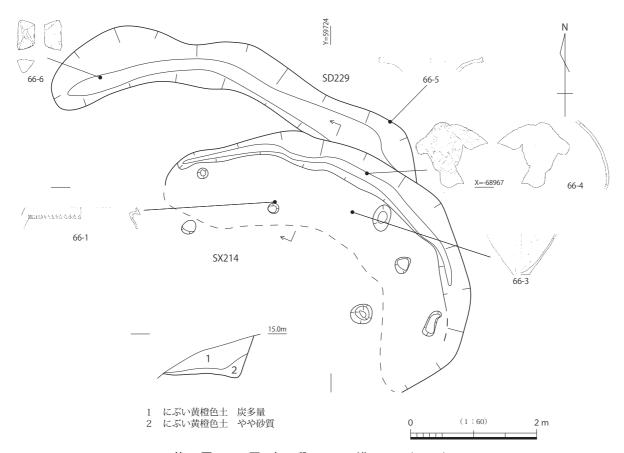
加工段SX212の東に位置し、B19トレンチの南端で確認されていた遺構である。

平面形は弧状だが,B丘陵の加工段の中では最も円形に近い。現状で長軸は約5 m,短軸は $2\sim25$ m程度を測る。垂直に近い角度で立ち上がる壁体は高さ70 cm弱である。遺構内では,幅30 cm程度の壁体溝と7 基のピットが確認された。ピットについては,列状配置は認められないが,方形に復元できそうな配置が見られることから,建物が建てられていた可能性がある。

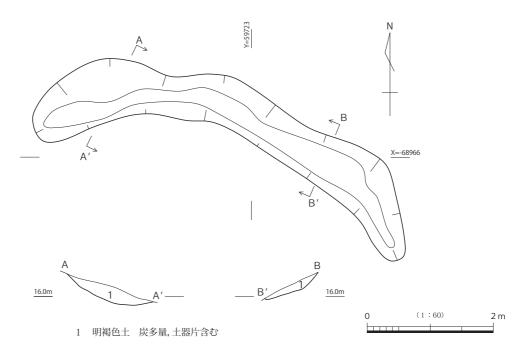
埋土は2層あり、いずれの層中にも弥生時代中期後葉の土器が含まれていた。また、ピット内から も同時期の土器片が出土しており、短期間で埋没したものと考えられる。

溝SD229 (第50·51図 図版20)

加工段SX214の北西に位置する弧状の溝である。加工段SX214の埋没後に掘削されたものだが、埋土からはほぼ同じ時期の弥生土器が出土している。土器片の残存状況はあまり良くないため、上方



第50図 B5区 加工段SX214·溝SD229(1:60)



第51図 B5区 溝SD229(1:60)

から転落してきたものである可能性が高い。ただし、弥生土器より明らかに新しい遺物を含まないので、加工段SX214の埋没後、ほどなくして掘削された溝であろう。

溝SD230 (第49図)

加工段SX214の平坦面中央から南西に向かって調査区外へと延びる幅1m弱の溝状遺構で、加工段SX213の東端を切るように掘られている。現状で長さは約11mを測り、遺構の断面はVないしU字状、最深部で約30cmの深さがある。

出土遺物は弥生中期の土器小片1点のみで、しかも混入した可能性が高い。したがって遺構の掘削時期は不明であり、現用道に伴う溝である可能性もある。

第2項 遺構出土遺物

(1) B1区の遺構出土遺物 (第52図)

加工段SX201 (第52図)

加工段SX201からは弥生土器の甕が出土した。図化したのは胴部下半2点である。1 は底部が直径5cmと小さいが、胴部は大きく膨らんで立ち上がり、肩部やや下に列点文が巡る。外面はミガキ、内面にヘラケズリが見える。2は外面にミガキ、内面にハケメが施された、安定感のある平底である。

(2) B 2 区の遺構出土遺物 (第53~56図 図版48·49·51)

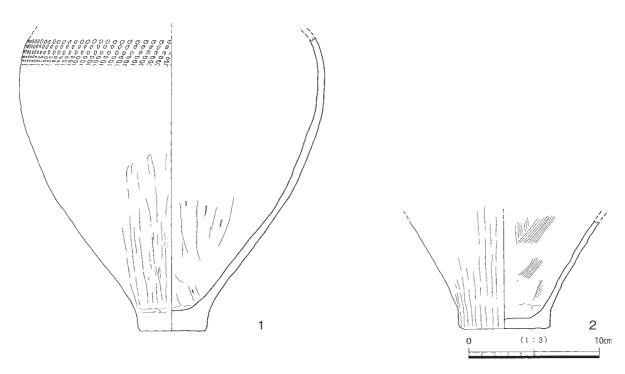
加工段SX202 (第53図 図版49)

弥生土器の甕, 壺が出土した。図化したのは無頸壺1点のみである(1)。口縁部から胴部半ばまで

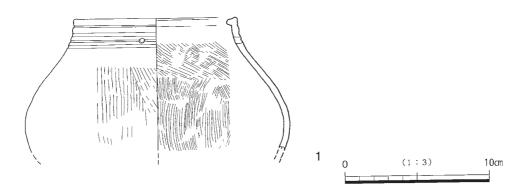
が残存しており、口縁部外面に凹線と円孔が施されている。円孔は1ヵ所しか残っていないが、複数 穿たれていた可能性もある。口縁端部は内側に肥厚し、2条の凹線が引かれる。調整は内外面ともに ハケメが密に施される。弥生時代中期の特徴をもつ。

加工段SX203 (第54図 図版48)

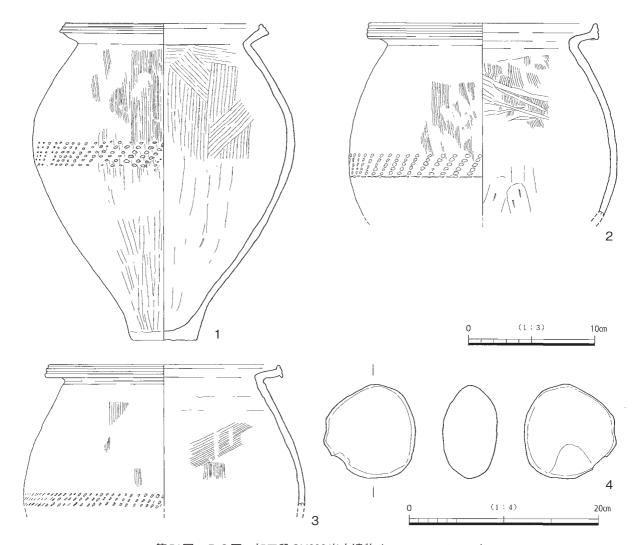
加工段SX203からは、弥生土器と円礫が出土した。弥生土器はすべて甕で、3点を図化した。1~3はいずれも口縁端部の拡張が小さく、外面上半をハケメ、下半をミガキ、内面上半をハケメ、下半をヘラケズリで調整する。口縁端部を2条の凹線文、胴部を1列の列点文で飾られ、弥生時代中期後葉。4は加工段の床面にめり込んだ状態で出土した石である。加工した痕跡はないが、地山由来の円礫とは異なる石材で、他所から持ち込まれた可能性が高い。用途は不明である。



第52図 B1区 加工段SX201出土遺物(1:3)



第53図 B2区 加工段SX202出土遺物(1:3)



第54図 B2区 加工段SX203出土遺物(1:3, 4のみ1:4)

加工段SX204~SX206(第55·56図 図版48·51)

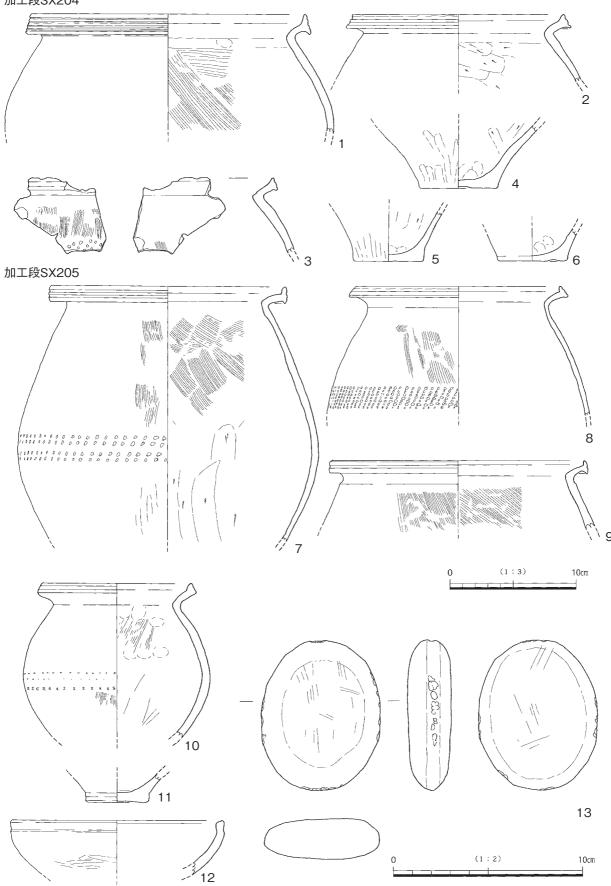
加工段SX204~SX206は調査区の丘陵裾部に位置するため、遺構埋土中には上部から転落した遺物が数多く包含されていた。出土した土器は、弥生時代中期後葉から後期前葉の特徴を持った甕、壺、高坏が確認できた。狭い範囲で遺構が重複していることもあって遺物も混在していたが、出土地点をもとに帰属する遺構を特定し、整理をおこなった。

加工段SX204では、遺構東半部に遺物が集中する。図化したのは甕3点、甕または壺の底部3点である。1・2は口縁部から胴部上半が残存している。口縁端部が上下に拡張し、凹線が施される。

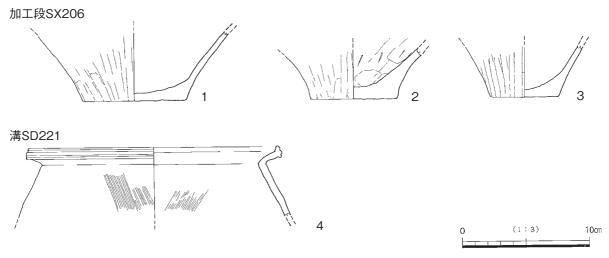
外面調整はいずれもナデで、内面は1がハケメ、2がケズリにより調整されており、2がやや新しい様相を示す。底部片3点については、いずれも外面にはミガキが見られる。

加工段SX205は、中央から西半部にかけて遺物量が多い。7~10は甕である。いずれも口縁部が短く上下に拡張し、凹線文が巡る。内外面はハケメ調整が主体で、外面には列点文1列が巡る。胴部下半まで残る7は、最大径が低い位置にあり、胴部があまり張らない。10は小型品で、摩滅により不明瞭だが、外面は全面にハケメを施した後に列点文1列で飾る。11は小型の底部で、器壁の広がりが大きいため壺の可能性がある。12は高坏の口縁部である。杉沢遺跡で出土する高坏は、外面に

加工段SX204



第55図 B2区 加工段SX204・SX205出土遺物(1:3,13のみ1:2)



第56図 B2区 加工段SX206・溝SD221出土遺物(1:3)

凹線を巡らせたくの字状の口縁部と浅い坏部を持つ弥生時代中期後葉(松本編年Ⅳ-2様式)の特徴にあてはまる個体が多いが、12は口縁部が直立する椀形の坏部で、多数を占める資料よりやや古相の特徴を持つ。また、13は磨石と敲石の機能を併せ持っている。円礫を加工せず使用し、摩滅面は表裏の2面、敲打面は上下左右の4面ある。

加工段SX206は、加工段 $SX204 \cdot SX205$ の構築時に削平され一部しか残っておらず、図化できたのは3点に留まった。 $1 \sim 3$ はいずれも甕または壺の底部である。ヘラミガキにより丁寧に仕上げる。

溝SD221 (第56図)

埋土中から弥生土器片が出土している。図化した4は、口縁部がくの字状に短く外反する。端部の 拡張は小さく、外面に凹線が引かれる。形態から弥生時代中期後葉頃のものとみられる。

(3) 3区の遺構出土遺物

加工段SX207 (第57図 図版49·50)

加工段SX207では、埋土下半から遺物が多く出土した。甕、壺、高坏があり、甕が大半を占める。 図化したのは6点で、弥生土器5点と自然礫1点である。1・2は甕の口縁部で、いずれも全形は復元できなかった。3は広口壺である。小型のため、口縁部はあまり大きく開かず、頸部も短めである。口縁端部と頸部外面に凹線が施される。また、5の底部は、外面を丁寧に磨いて仕上げる。3と色調や胎土が類似しており、同一個体の可能性もある。4は大型の底部である。器壁の立ち上がりが緩やかで、器高の低い甕または壺に伴うものであろう。さらに、6は加工段の床面に置かれたような状態で出土した円礫で、加工痕がみられないため自然礫と判断した。出土状況からは単なる混入ではなく、故意に置かれた可能性もあるが、遺構内でどのように機能していたかは不明である。

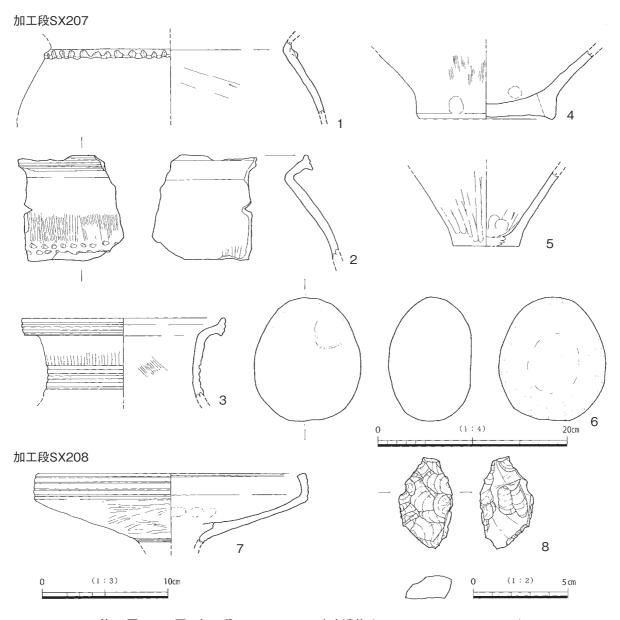
加工段SX208 (第57図)

遺物は主に埋土中から出土しているが点数は少なく、図化に耐える資料も2点に留まった。7は高

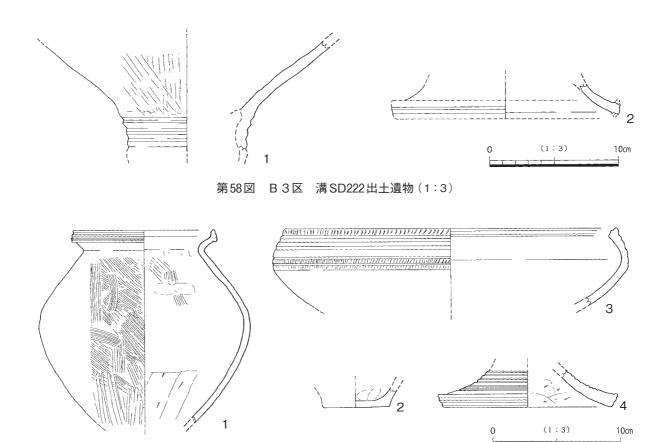
坏の坏部で、出土時は口縁部を下にして伏せたような状態であった。口縁部外面と頸部に凹線文を施し、外面をミガキで丁寧に仕上げている。また、8は黒曜石の石核で、遺構内で出土した2点が接合した。表面には複数の剥離痕がある上、剥片とするには厚いため石核と判断したが、背面の縁辺部にも細かい剥離が見られることから、スクレイパーのような機能を持っていた可能性もある。

溝SD222 (第58図)

溝SD222の埋土中からは、弥生土器の甕、壺、高坏が出土した。図化できた遺物は次の2点である。 1は大型の高坏である。坏部下半から頸部のみが残存し、外面にはヘラミガキ調整と凹線文が施される。底部は円盤充填により成形されており、現状では剥離して欠損している。また、2は高坏の脚端部である。1とは胎土や色調が異なっているため、同一個体ではない。



第57図 B3区 加工段SX207・SX208出土遺物(1:3, 6は1:4, 8は1:2)



第59図 B4区 加工段SX210出土遺物(1:3)

(4) B 4 区の遺構出土遺物 (第59図 図版50)

加工段SX210

B4区は丘陵上部からの遺物の転落が多くみられる地区である。加工段SX210の埋土中にも、転落してきたとみられる弥生土器の甕、壺、高坏等の小片が包含されていた。1は小型の甕である。底部を欠くもののそれ以外は残存し、全形が復元できる資料である。製作時に生じたと考えられる器壁の歪みにより、器形はややいびつだが、内外面ともにハケメで調整し、外面はミガキを加えて丁寧に仕上げている。2は底部片で、小型の甕または壺に付属するものである。3・4は高坏である。3は大型の坏部で、口縁部の屈曲は緩く、外面には凹線文と刻目が丁寧に施されている。また4は脚端部で、外面は凹線で飾られる。

(5) B 5 区の遺構出土遺物 (第60~66図 図版48~51)

加工段SX211 (第60~62図 図版48~51)

加工段SX211では、他の遺構と比較して状態のよい遺物が多量に出土した。遺構内部では、東端部と西半分の2ヵ所で土器溜まりを確認し、弥生土器の甕、壺、高坏、鉢に加え、石鏃、石錘、砥石等の石器が含まれていた。

第60図1~10は、遺構東端部の土器溜まりの一群である。1は小型の甕で、胴部半ばまで残る。 口縁部には凹線文が施されるが、端部はあまり拡張せず、胴部外面には列点文がめぐる。内面は頸部 付近までヘラケズリが残り、弥生時代中期後葉でも新しい様相を持つ。2・3は大型の広口壺である。2は口縁部から胴部上半まで残っており、口径は約33cmを測る。外面は全面に縦方向の精緻なハケメが施されたのち、凹線文、列点文、羽状文で器面を飾る。3は、2よりもひと回り小振りな広口壺で、口径26.5cm、口縁部の外反は大きくない。口縁端部と頸部に凹線文が引かれ、頸部と肩部の境界に巡る突帯には大ぶりの刻目が施されている。壺の頸部に指頭圧痕文帯がめぐるのは弥生時代中期中葉に多い特徴だが、3は後葉に入ってから多くなる凹線文も施されていることから、中期後葉でも古い段階に位置づけられよう。

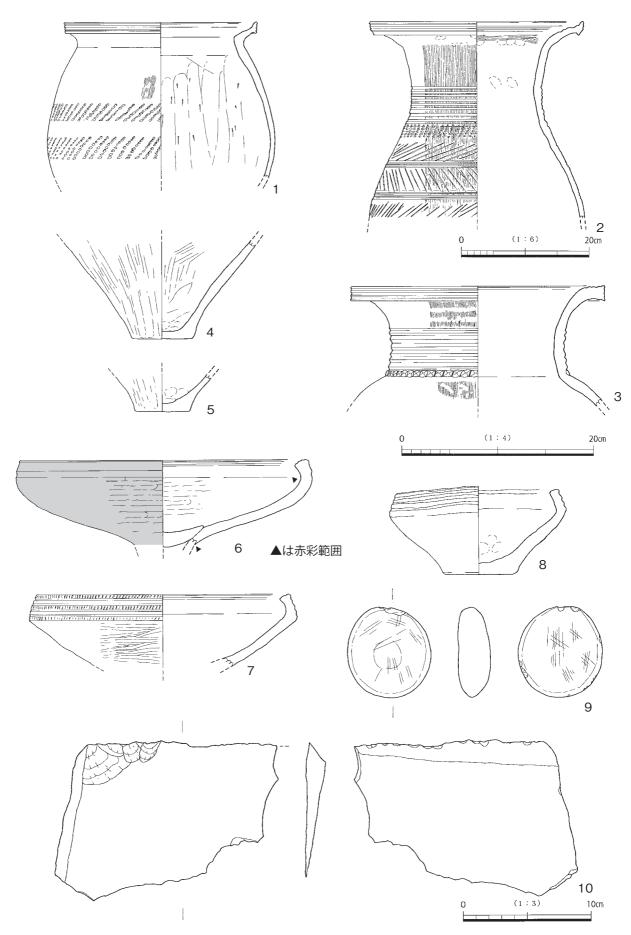
4・5は甕または壺の底部で、外面には仕上げのヘラミガキがよく残る。いずれも中型品の底部である。6・7は高坏の坏部である。口縁部がくの字状に立ち上がり、端部の上端にそれぞれ3条、4条の凹線文が引かれている。7のように口縁部外面に凹線文や刻み目を施すものは、杉沢遺跡をはじめ出雲平野の弥生時代遺跡でよくみられる。一方6は、椀状の坏部で口縁部外面は太い凹線を引くことによって端部に段が形成されるもので、類似資料は少ない。なお、6については外面に赤色顔料が塗彩されている。また、8は鉢である。口縁部はくの字状に立ち上がり、外面に凹線文が施される。口縁部あたりに歪みが生じており、やや粗雑な印象を受ける。

9は磨石で、側面には敲石としての使用痕も残る。円礫を加工せず使用し、摩滅面は片面のみである。また10は大型石包丁の可能性がある。片方の端部は欠損しているとみられ、横幅は少なくとも18cm以上になる。目立った使用痕や加工痕は見られない。

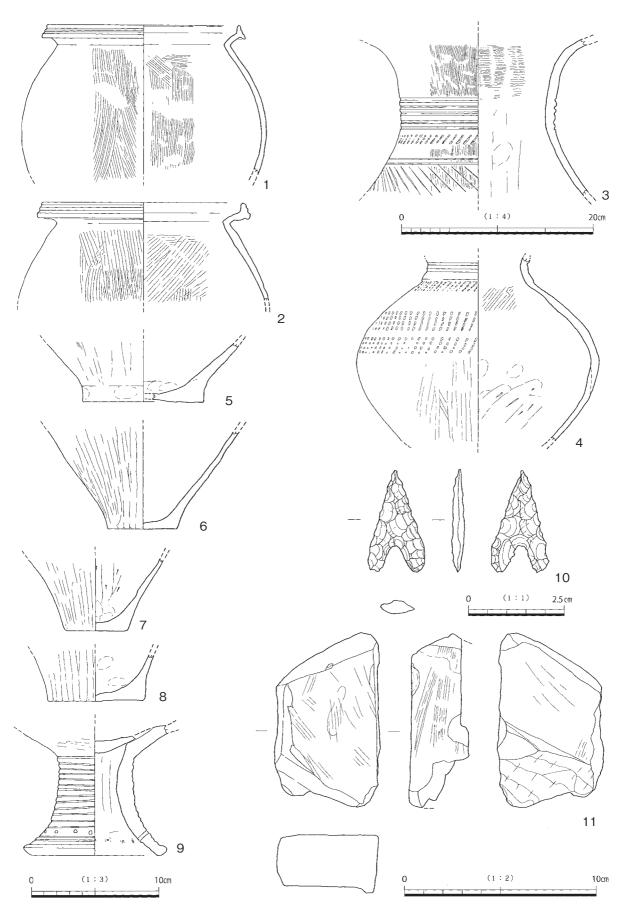
遺構西半分では、東端部の土器溜まりに比べると遺物は散在していた。しかし、遺物の大半が埋土下部の地山に近い高さから出土しており、一括性は高いと言える。第61図1・2は小型の甕である。口縁端部は上下に拡張され、外面に凹線が巡る。内外面は頸部までハケメで調整される。3は広口壺の頸部である。口縁部を欠くが、口径は30cmを超えることはないと考えられるため、東端部の土器溜まりで出土した第60図2より小さい資料であろう。外面は縦方向のハケメを施した後、凹線文、列点文、羽状文で飾っており、第60図2と共通した文様構成である。4は短頸壺である。口縁端部を欠くが、おそらく直口口縁と考えられる。頸部には凹線文、肩部から胴部上半にかけて列点文を巡らせ、下半はヘラミガキで整えている。また、5~8は甕または壺の底部で中~大型品に伴うと考えられる。基本的に外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、オサエ、ナデが施される。

9は高坏である。坏部上半を欠き全形は不明だが、脚部は小型ながら安定感のある作りである。脚部外面は一面に凹線文が巡るのに加え、脚端部付近には直径2mm程度の円孔が約1cm間隔で穿たれており、装飾性が高い。坏部底面は円盤充填による。10は黒曜石製の石鏃である。凹基無茎式鏃で、基部にV字状の深い抉りがつく。11は砥石である。砥面1面のみで、その他の面は未使用もしくは破断面である。

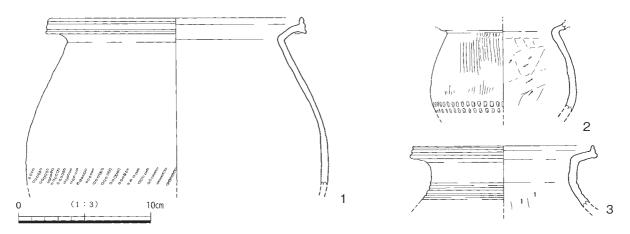
第62回は、土器溜まり以外の加工段SX211出土遺物である。1は中型の甕で、T字状に拡張した口縁端部に凹線文、胴部中央に列点文が巡る。2は小型の甕である。口縁部を欠くが、おそらくT字状の口縁部が付くものと考えられる。外面はハケメと列点文、内面はヘラケズリとオサエ、ナデが施され、作りは丁寧である。3は小型壺の口縁部。口縁端部と頸部に凹線文が巡る。



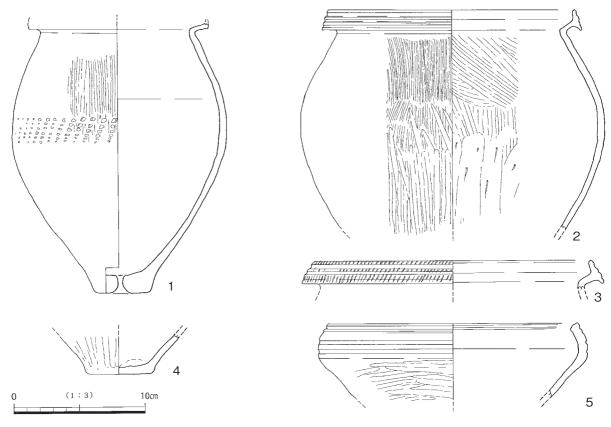
第60図 B5区 加工段SX211東端部土器溜まり出土遺物(1:3, 2は1:6, 3は1:4)



第61図 B5区 加工段SX211西半部土器溜まり出土遺物 (1:3,3は1:4,10は1:1,11は1:2)



第62図 B5区 加工段SX211出土遺物(1:3)



第63図 B5区 加工段SX212出土遺物(1:3)

加工段SX211から出土した遺物は、全てが弥生時代中期後葉に帰属する資料である。大型の広口 壺や、赤色顔料が塗彩された高坏等、他の遺構にはない特徴の土器があることが注目される。

加工段SX212 (第63図 図版48·50)

加工段SX212では、遺構東半を中心に、甕や広口壺等の弥生土器が出土した。出土した土器は弥 生時代中期後葉の特徴を持つ。

1は、ほぼ完形を保って出土した小型の甕である。口縁端部を欠くが、上方にわずかに拡張した L

字あるいはT字状の口縁部が想定される。胴部はハケメやナデで器面調整を施した後、列点文を巡らせる。さらに、底部は焼成後に穿孔されている。2・3は中型の甕。口縁部はT字状に大きく拡張し、凹線文を巡らせている。3はその上に斜線を引き、装飾性を高めている。2は、胴部内外面によく調整が残っており、ハケメ、ヘラミガキ等の調整を丁寧に施していることが分かる。4は底部である。底径は小さいが、器壁の立ち上がりからふくらみを持った胴部が復元できるため、中型の甕または壺の可能性がある。5は高坏の坏部あるいは鉢と考えられる。口縁部外面には凹線文が引かれ、下半にはヘラミガキが丁寧に施される。

加工段SX213 (第64·65図 図版48·50·51)

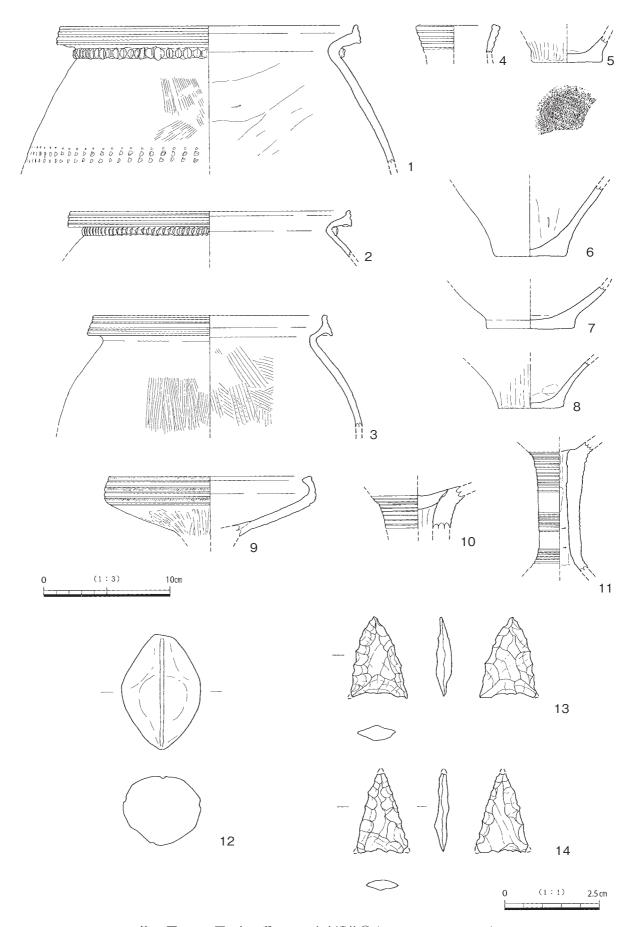
B5区の斜面最下部に位置する加工段SX213は、遺構規模が大きいこともあり、埋土中には多量の遺物が包含されていた。器種構成は弥生土器の甕、壺、高坏、土錘と、石鏃、大型石包丁等の石器からなる。時期が判断できる遺物は、全て弥生時代中期後葉から後期初頭までに収まる。

1~3は甕である。いずれも口縁部から肩部付近までの破片である。1・2は口縁端部が上方に拡張し、下方はあまり拡張しない。頸部には突帯が貼り付けられ、工具による刺突が施される。頸部の貼付突帯文は弥生時代中期に盛行する装飾だが、1は内面のヘラケズリが頸部まで及ぶので、後期初頭まで時期が下る可能性がある。3は、T字状の口縁部に凹線文が巡り、胴部内外面はハケメを密に施す。4は短頸壺の口縁部で、外面に凹線文が巡る。口径6㎝の小型品である。5~8は甕または壺の底部で、器壁の立ち上がりから5・6は直線的、7は膨らみのある胴部が復元される。また5は、底面に簀子状の圧痕があり、土器製作時の敷物痕跡と考えられる。9~11は高坏である。坏部(9)、脚部(10・11)があり、外面が凹線文等で飾られ、底部は全て円盤充填による。9・11は小型品、10は中型品で、いずれも弥生時代中期後葉の資料である。12は有溝土錘である。菱形に近い平面形で、縦方向に4本の溝がある。表面はナデやオサエによって整形される。

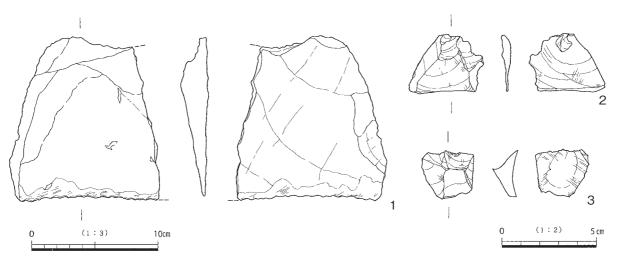
13・14は安山岩製の石鏃である。いずれも無茎式鏃で、13は若干の抉りが作り出される。14は風化しているためと考えられるが、全体が摩滅・剥離している。第65図1は大型石包丁の破片である。板石の片面を加工し、刃部を作り出しており、先端部には使用痕と考えられる擦痕が観察できる。柱穴と考えられるピットの中から弥生土器とともに出土した。また2・3は黒曜石の剥片である。製品に加工された痕跡はない。

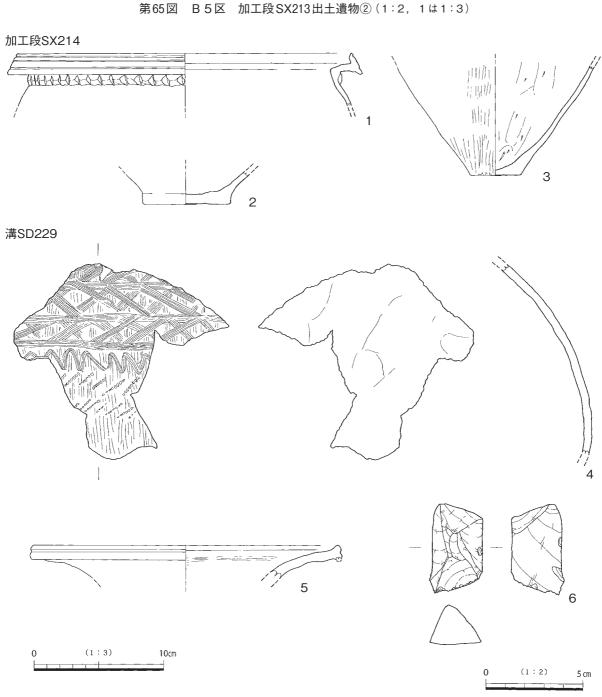
加工段SX214 (第66図)

加工段SX214の出土遺物は小片が多い。確認できた器種は甕,壺,高坏である。図化できたのは3点に限られる。1は甕の口縁部で、T字状に大きく拡張した端部には凹線文、頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けられている。弥生時代中期後葉の資料である。2・3は底部である。3は中型の甕または壺の底部で、全体的に器厚が薄く、外面は緻密なヘラミガキを施して仕上げている。また2は、器壁がやや広がって立ち上がっており、3よりも膨らみのある胴部が想定される。



第64図 B5区 加工段SX213出土遺物①(1:3,12~14は1:1)





第66図 B5区 加工段SX214・溝SD229出土遺物(1:3,6は1:2)

溝SD229 (第66図 図版50)

出土遺物は少なく、図化したのは3点である。4は壺の肩部から胴部上半の破片である。外面に縦方向の丁寧なハケメを施した後、櫛描きの斜格子文、波状文と列点文で飾られている。5は広口壺の口縁部と考えられ、口縁端部が水平に近い角度で広がっている。6は黒曜石の石核で、剥離痕は片面に集中する。

遺物の時期については、華美な装飾を施した壺4は、弥生時代中期中葉(松本編年第Ⅲ様式)に遡る可能性もある、比較的古い段階の資料と考えられる。ただし、溝SD229は加工段SX214の埋没後に掘削された遺構であり、中期後葉の遺物が出土した加工段SX214より新しい。古い段階の特徴を持つ4は、遺構から出土したものの破片も少なく、付近の遺構でも中期中葉に遡りうる遺物が出土していないことから遺構埋没時に混入した可能性が高い。

第3項 包含層出土遺物

(1) B1区の包含層出土遺物(第67図 図版50)

B1区は検出遺構が1基のみということもあり、包含層中から出土した遺物もわずかだった。須恵器、弥生土器、石器が出土し、そのうち2点を図化した。

弥生土器 1 は甕である。くの字状に湾曲した口縁部は、端部が上下に拡張し外面に凹線文が施される。弥生時代中期後葉に帰属する資料である。

石器 凹基無茎式の石鏃で、石材は黒曜石である。

(2) B 2 区の包含層出土遺物 (第68図 図版49·50)

B2区は、B1区に比べ遺構数は多いが包含層中の出土遺物は少なく、図化した遺物も2点に留まる。

弥生土器 1は、加工段SX203下の斜面で出土した甕である。口縁部には凹線文、頸部には指頭圧 痕文帯が貼り付けられている。胴部は球形に近く、2列の列点文が施される。器形自体に歪みは少な いが、頸部の貼付突帯や胴部の列点文は蛇行した部分が多く、やや雑な仕上がりといえる。弥生時代 中期後葉に帰属。

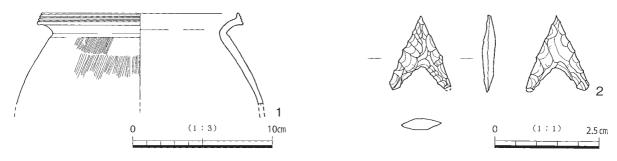
石器 2は大型の石鏃あるいはスクレイパーと考えられる石器で、黒曜石製である。

(3) B 3 区の包含層出土遺物 (第69図 図版49)

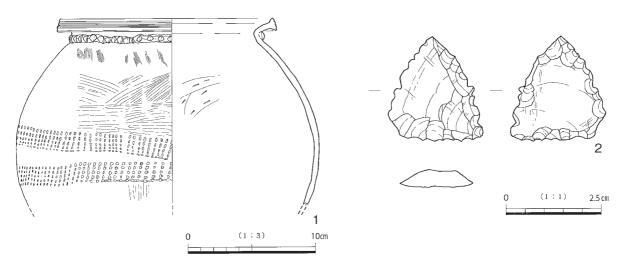
B3区の包含層では、弥生時代の遺物に加えて古墳時代以降の遺物も散見された。

須恵器 1・2は坏身である。1は口縁部にかえりが付く小ぶりの坏身で、大谷編年の出雲6期に相当する。底部を欠くが、残存部は回転ナデで仕上げる。2は奈良時代前半の坏身である。底部は回転糸切り後、ヘラで整形した痕跡が残る。

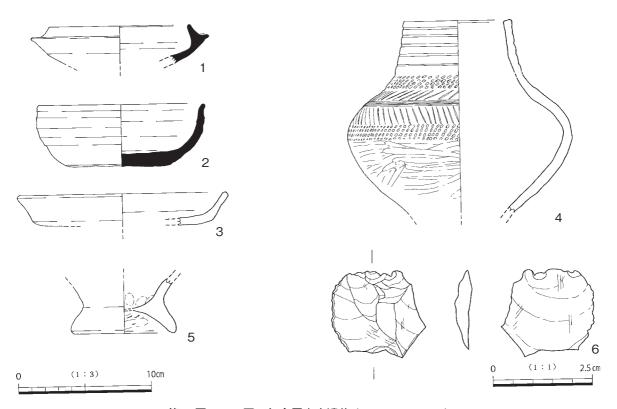
土師器 3は皿である。器壁を鈍角に立ち上げ、端部を丸くおさめるもので、内外面には赤色顔料が



第67図 B1区 包含層出土遺物(1は1:3,2は1:1)



第68図 B2区 包含層出土遺物(1は1:3,2は1:1)



第69図 B3区 包含層出土遺物(1:3,6は1:1)

塗布されている。奈良時代前半期のものと考えられる。

弥生土器 4は短頸壺である。口縁部はやや内傾しながら垂直に立ち上がり、玉葱状に膨らんだ胴部に列点文、羽状文、櫛描き文を施す。胴部下半には丁寧なミガキが施されている。底部を欠くが、脚台付きの可能性もある。なお、杉沢遺跡では他にも同様の短頸壺が出土しているが、4はその中でも最も頸部が長い資料である。5は台付壺等の底部だが、脚台付きの可能性も考えられる4とは別個体である。底部は現状で2mm程度とかなり薄く、実用に耐えないものと思われ、焼成後に穿孔されていた可能性もある。

石器 6は黒曜石の剥片で、使用痕跡はない。

(4) B4区の包含層出土遺物(第70図 図版50)

B4区では、丘陵上部から転落した遺物が多量に出土した。その多くは小片だが、形状が復元できた資料を中心に11点を図化した。

弥生土器 1は細身の甕で、上下に拡張した口縁端部には凹線文が施される。3は鉢と考えられる口縁部で、脚台が付く可能性もある。口縁部には凹線文が引かれるが、胴部には文様はない。2・3は甕または壺の底部。2は底部中央に穿孔された可能性がある。5・6は高坏である。坏部(5)は、内傾して立ち上がる口縁部で、外面には凹線文、端部には刻目が施される。坏部下半は、内外面ともにヘラミガキで仕上げる。また脚端部(6)は、外面が緻密な凹線文で飾られる。

縄文土器 7 は縄文土器の深鉢と考えられる。外面には縄文状の凹凸が見られるのに加え、共伴した 弥生土器に比べて胎土が粗く、砂粒を多く含むことから縄文土器と判断した。小片のため器形は不明 だが、おそらく深鉢であろう。杉沢遺跡では、縄文時代の遺物と認められるのはこの1点に限られる。 ただし、隣接する三井 II 遺跡や上ヶ谷遺跡等では後期以降の縄文土器が出土しており²⁾、杉沢遺跡が 位置する丘陵も縄文時代の生活圏に含まれていたことが分かる。

石器 8~11 は石鏃である。すべて安山岩製で、平基無茎式 2 点、凹基無茎式 2 点である。 $9\cdot 10$ は風化が著しい。 11 は鏃身と翼が長く伸びるタイプである。

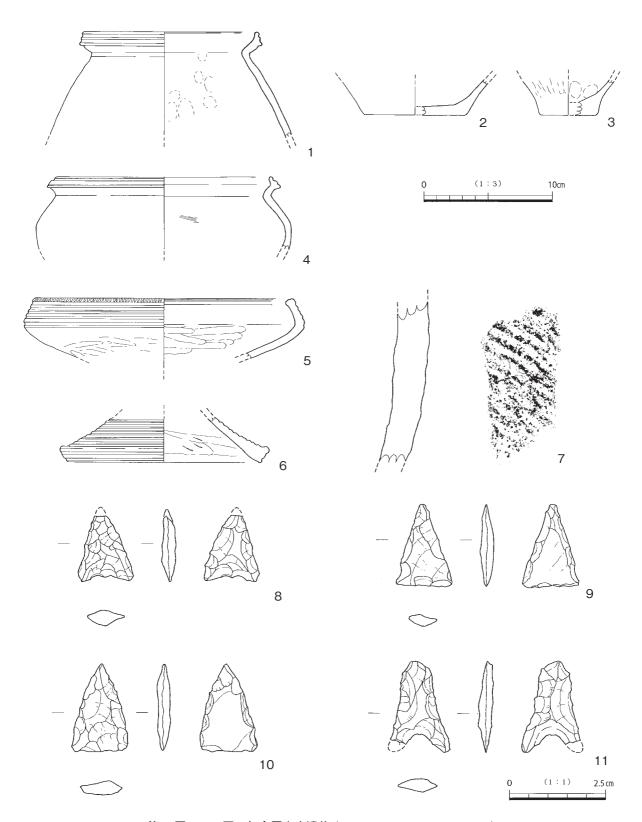
(5) B 5 区の包含層出土遺物 (第71図 図版50·51)

B5区は、最も遺物がまとまって出土した地区である。その8割近くを遺構出土遺物が占めているが、包含層からも保存状態の良い遺物が出土している。

弥生土器 1 は甕の上半部である。口縁端部はあまり拡張されず、凹線文は引かれない。胴部には列 点文が施され、弥生時代中期後葉の資料と考えられる。2 は広口壺の頸部で、器面には縦方向のハケ メが丁寧に施された後、胴部との境目に凹線文と円孔が穿たれている。内面には製作時のオサエの痕 跡がよく残る。

3~7は甕または壺の底部である。3は胴部下半まで残る資料で、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが観察できる。4も同じく胴部下半まで残る資料である。底部は充填部分が全て剥離し、接合部の様子がよく分かる資料である。また、5は底部中央、7は中央からやや外れた位置に穿孔があり、

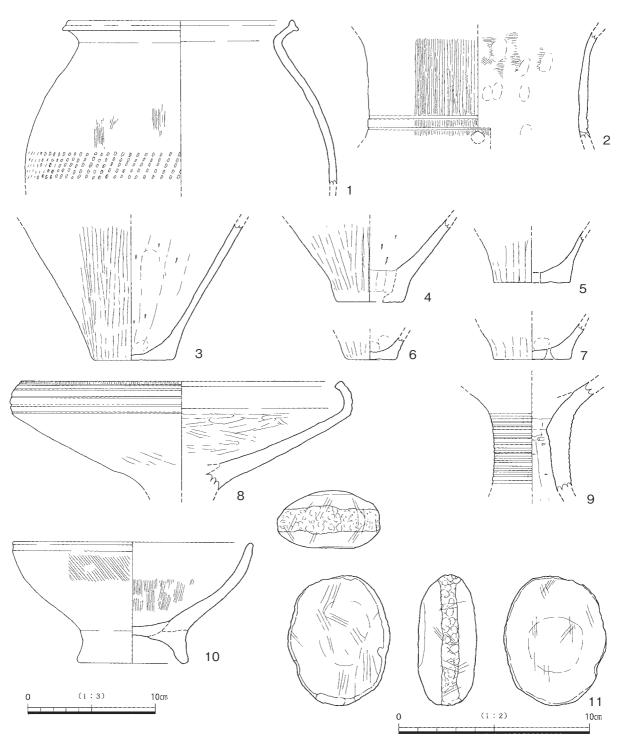
いずれも焼成後の加工と考えられる。10は鉢である。椀形の胴部で、口縁部は肥厚することなく丸くおさめられる。底部は台付で、胴部を作った後に台部を貼りつけた様子が破断面からうかがえる。8・9は高坏である。8は大型で、坏部のみ残存していた。杉沢遺跡で一般的にみられる弥生時代中



第70図 B4区 包含層出土遺物(1~6は1:3, 7~11は1:1)

期後葉の高坏で、口縁部外面には凹線文と刻目が施される。坏底部は充填によるが、剥離して欠損している。9は大型高坏の脚部である。坏底部の接合部が残り、円盤充填による成形痕がよく分かる。また外面には緻密な凹線文、内面にはヘラケズリの痕跡が残る。

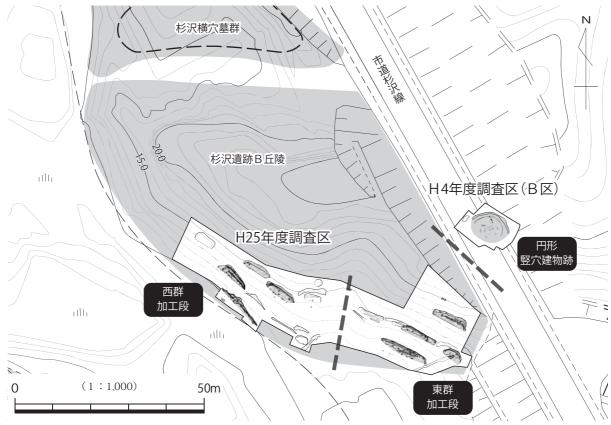
石器 11 は敲石である。円礫の側面を一周するように敲打痕がある。また、正面および裏面には擦痕があるものの、円礫の凹凸が残っており磨石としての使用は想定できない。



第71図 B5区 包含層出土遺物(1:3, 11は1:2)

第4項 小結

杉沢遺跡 B 丘陵の調査では、丘陵南斜面のほぼ全面に弥生時代の遺跡が広がることを確認した。調査区内では、やや奥まった B 4 区を境として東西に遺構の集中が認められ、いずれも南北20 m、東西30 m、標高10~15 mの範囲に収まった。また、市道杉沢線改良に伴う調査では、B 丘陵に続く尾根上で大型の円形竪穴建物跡が発見されており(斐川13)、図上で位置を復元すると、B 丘陵と一連の集落として営まれていた可能性が高いことが分かる(第72図)。これを踏まえて全体の遺構配置をみると、丘陵の最高所に円形の竪穴建物が位置し、南斜面に加工段や溝、土坑などの遺構が分布する。なお、今回の調査で加工段として報告した遺構のうち、床面にピットを伴うものを建物跡であるとし、かつ同時併存していたと考えた場合、西側の一群には6棟、東側の一群には4棟の建物が密集して建っていたことになる。年代については、大半の遺物の帰属年代は弥生時代中期後葉で、中期中葉以前または後期以降の特徴をもつ遺物は極めて少なかった。出土遺物の特徴からは、B 丘陵の弥生集落が短期間のうちに構築され、廃絶に至ったことが分かる。



第72図 杉沢遺跡 B 丘陵と平成 4 年度調査区の遺構配置 (1:1,000)

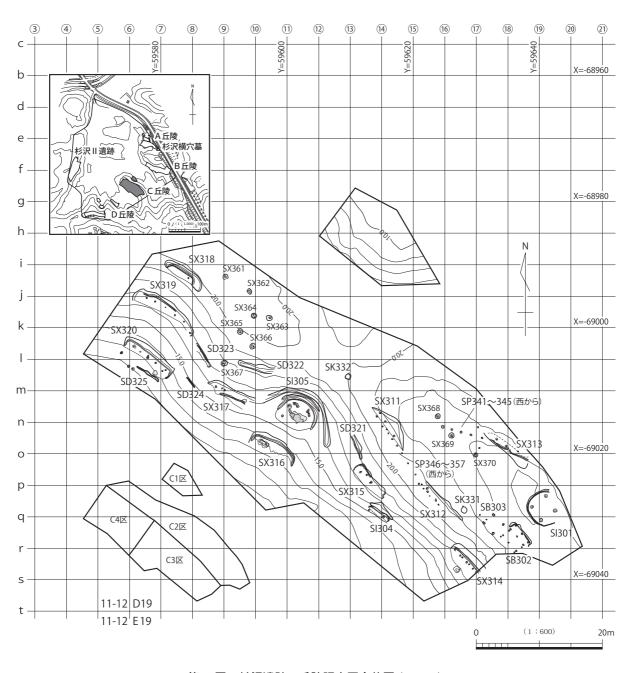
【註】

- 1) 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡では、加工段SX211のように複数個体の土器片が多量に集積している遺構は少なく、 同規模の集積は杉沢Ⅱ遺跡の加工段SX504が確認できる程度である。
- 2) 上ヶ谷遺跡、三井Ⅱ遺跡では縄文時代後期の土器が出土している。斐川24参照。

第3節 C丘陵の調査

杉沢遺跡C丘陵は、前節で示したB丘陵の南西に位置し、北西方向に伸びる舌状丘陵である。

範囲確認調査の結果を受け、北斜面に約180 ㎡、南斜面に約1,700 ㎡の調査区を設けて、発掘調査を行った。北斜面調査区をC 1 区、丘陵頂部調査区をC 2 区、さらに南斜面東半をC 3 区、西半をC 4 区とした。調査の結果、C 2 \sim C 4 区において弥生時代の建物跡や加工段を検出し、B 丘陵と同時期の集落跡が広がることを確認した。加えて、C 2 区では太平洋戦争末期に掘削されたタコ壺(1 人用の塹壕)を調査した。



第73図 杉沢遺跡 C 丘陵調査区全体図(1:600)

第1項 遺構

(1) C1区(第74図 図版3)

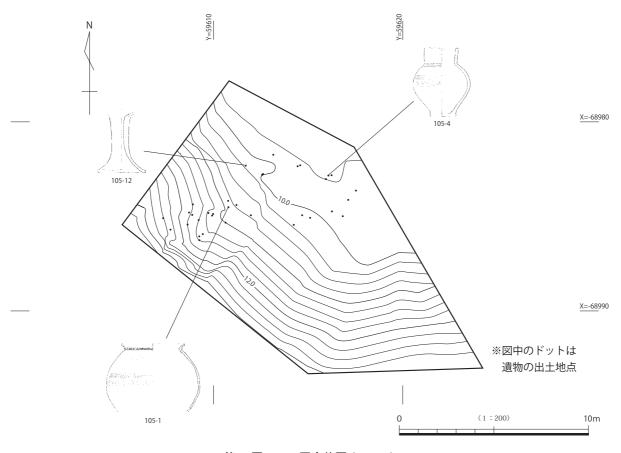
丘陵北斜面裾に設けたC1区では、範囲確認調査の段階で遺物が比較的多く出土したため遺構の存在が期待されたが、谷状の落ち込みが確認されたのみで遺構は見られなかった。ただし、谷裾では完形の弥生土器をはじめ、多量の遺物が包含されており、これらの遺物の存在から、頂部の遺構から転落した可能性のほか、北斜面にも遺構が存在し、斜面の崩落によって消滅した可能性もあると考えられる。

(2) C 2 区の遺構(第75~82図 図版22)

C2区は丘陵尾根に位置する。東西に長い調査区のうち、丘陵先端部に近い西半部では太平洋戦争中のタコ壺群、丘陵基部に近い東半部では弥生時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、加工段、柱穴列、 土坑を確認した。

竪穴建物 SI301 (第75図 図版 22)

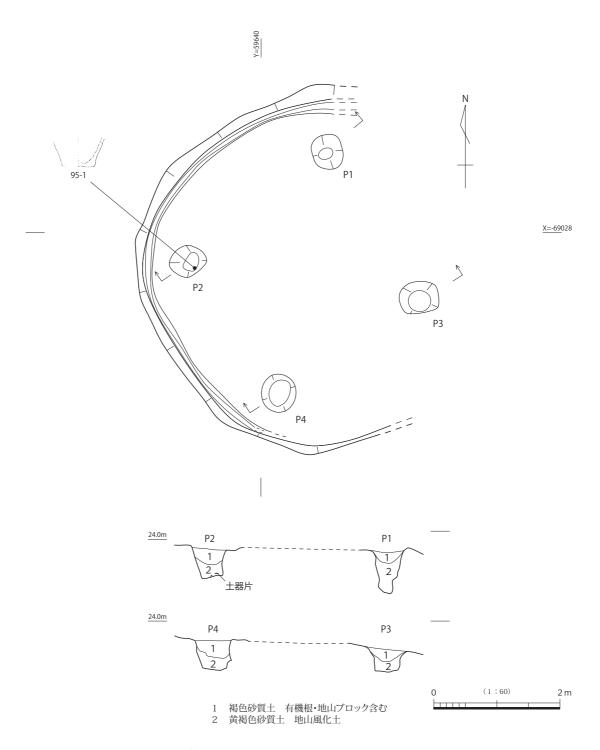
竪穴建物 SI301 は、調査区東端の標高 24 mに位置し、C 丘陵の調査区の中でもひときわ小高い場所にある。C 丘陵の頂部は岩盤を地山とし、その上に風化砂質土が厚く堆積するが、竪穴建物 SI301 は



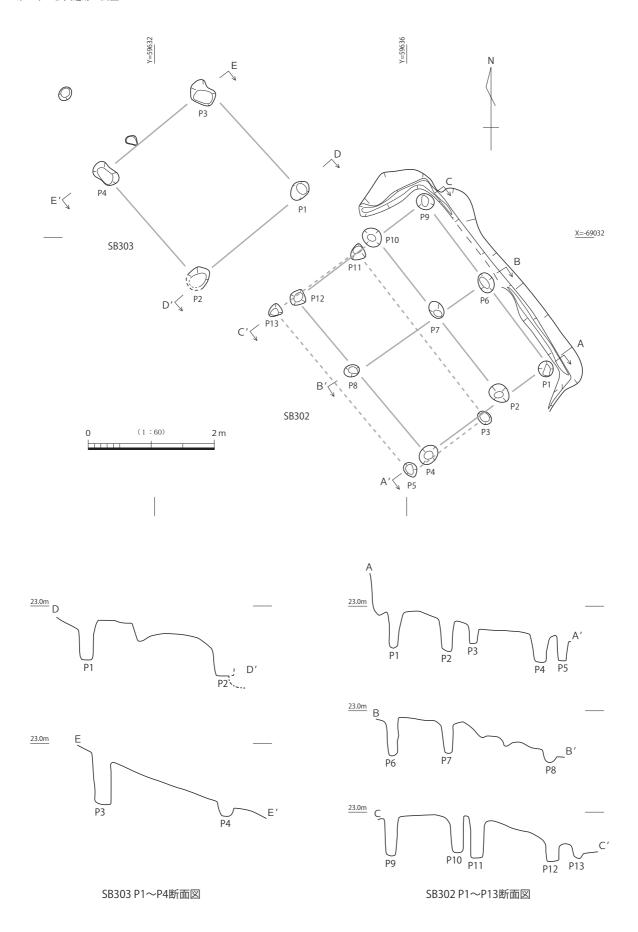
第74図 C1区全体図(1:200)

地山の岩盤を深さ20cm程度削り取って築造されていた。

建物跡の平面形は円形で、直径約5.5mを測る。床面に4基の柱穴を持ち、壁際には溝が巡り、一般的な竪穴建物の構造と共通する。残念ながら、貼床や焼土痕は確認できず、出土遺物も柱穴からわずかに弥生土器片が出土したのみであった¹⁾。年代については、出土土器の特徴から弥生時代中期から後期前半頃に帰属するものと考えられる。



第75図 C2区 竪穴建物SI301(1:60)



第76回 C2区 掘立柱建物 SB302・SB303 (1:60)

掘立柱建物 SB302 · SB303 (第76 · 77 図 図版 22)

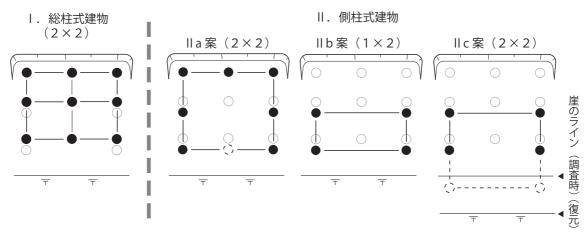
2棟の掘立柱建物跡は、竪穴建物SI301の南西斜面の上部、標高22~23mに位置する。柱穴と壁体が確認できた掘立柱建物SB302と、柱穴のみの掘立柱建物SB303である。

掘立柱建物 SB302 は、北東に高さ約60 cmの壁体が立ち上がり、壁体溝を伴う。床面で検出された柱穴跡は13基あり、その配置から、総柱式掘立柱建物(建物 I)と側柱式掘立柱建物(建物 II)が時期を違えて建てられていたと判断した。建物 I は、 2×2 間、幅3.3 m、奥行2.6 mを測る。壁際の柱穴列 $(P1\cdot P6\cdot P9)$ と中央の柱穴列 $(P2\cdot P7\cdot P10)$ は1.1 m間隔,中央と斜面側の柱穴列 $(P4\cdot P8\cdot P12)$ は1.5 m間隔となっており、柱の間隔は均等ではない。一方、建物 II にはいくつかの復元案 $(IIa\sim IIc)$ がある。 IIa 案は、 $P1\cdot P3\cdot P5\cdot P6\cdot P9\cdot P13$ を柱穴とした 2×2 間の建物で、 $P1\cdot P6\cdot P9$ は建物 I と重複する。幅3.3 m、奥行2.9 m。次に IIb 案は、 $P3\cdot P5\cdot P11\cdot P13$ を柱穴とした 1×2 間の建物で、幅3.3 m、奥行1.6 mを測る。これは、後述する掘立柱建物 SB303の北側柱穴と同一線上にあり、意識的に建物の背面が揃えられた可能性がある。さらに IIc 案は、本来はもう少し南西側に斜面が広かったと想定した場合であり、IIb 案を南に拡張し 2×2 間の建物を復元したものである。この場合、幅3.3 m、奥行3.2 mとなる。問題となるのは建て替えの前後関係だが、当遺構でも、過去の調査によって埋土の大半が失われていた上、出土遺物もなく、堆積状況や出土遺物から判断することができなかった。

また掘立柱建物 SB303 は、南東に隣接する掘立柱建物 SB302 と同じ地山上面に位置するが、柱穴が検出されたのみで、壁体や壁体溝は伴わない。柱穴は 4 本で、現状では 1×1 間の側柱式掘立柱建物に復元される。 1 間は約 2.2 mを測り、正方形の平面形を呈する。こちらでも、出土遺物はみられなかった。

加工段SX311·SX312 (第78図 図版22)

SX311はC2区の中央からやや東の緩斜面で、SX312はその南東約7mで検出された加工段である。SX311は長軸8.5m、短軸約2mを測り、岩盤からなる地山を削って成形されている。完掘時の

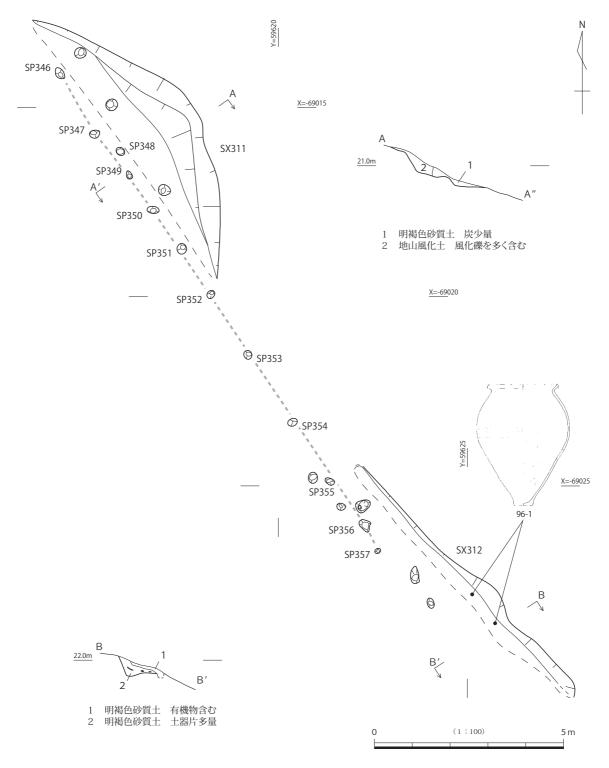


※●は使用する柱穴、○は使用しない柱穴、○は復元柱穴を示す。

第77図 C2区 掘立柱建物SB302復元案

床面は凹凸が激しく、貼床層は確認できなかった。しかし加工段内では直径30cm前後のピットが4 基検出されている。遺構内からは遺物の出土がなく、時期は不明である。

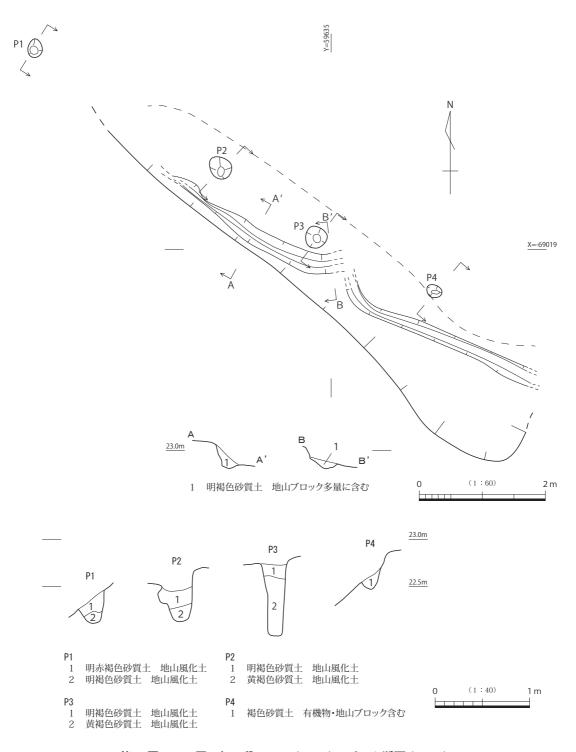
SX312は長軸8.5 m, 短軸30~80 cm, 深さ60 cmを測る。遺構西半では柱穴が伴う。遺構内からは 弥生時代中期後葉の土器がまとまって出土した。



第78図 C2区 加工段SX311・SX312, ピット列SP346~SP357 (1:100)

ピット列SP346~SP357 (第78図)

加工段SX311と加工段SX312の南側に連なって検出されたピット列である。直径 $20\sim30\,\mathrm{cm}$ のピット11基が、 $1.5\sim2\,\mathrm{m}$ 間隔で約 $16\,\mathrm{m}$ にわたって直線的に並ぶ。ピットは深さ $10\sim64\,\mathrm{cm}$ と差があるが、 $30\,\mathrm{cm}$ 前後のものが多く、細い柱あるいは杭が立てられていた可能性がある。立地を見ると、崖状に切り立った斜面の上端に位置しており、杭列あるいは柵列のような施設が想定できる。ただし、ピットは風化砂質土で埋没しており、抜き取り痕等は確認できなかった。



第79図 C2区 加工段SX313(1:60) ピット断面(1:40)

加工段SX313 (第79図 図版22)

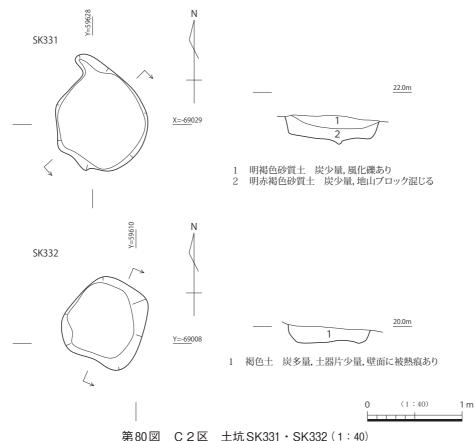
C2区北側の緩斜面で確認された遺構である。岩盤を約8.6 mにわたって段状に掘りくぼめた内側に、溝とピット4基が伴う。溝は2条確認できるので、加工段SX313内に2組の遺構が併存する可能性はあるが、平坦面のほとんどを失い、遺構面の風化も激しいことからその判断は難しい。また、ピットは深いもので80 cm近くある。埋土は2層あるが、いずれも地山が風化した砂質土で柱の抜き取り痕を判別することは難しい。埋土中より弥生土器の小片が2点出土している。

土坑 SK331 (第80図)

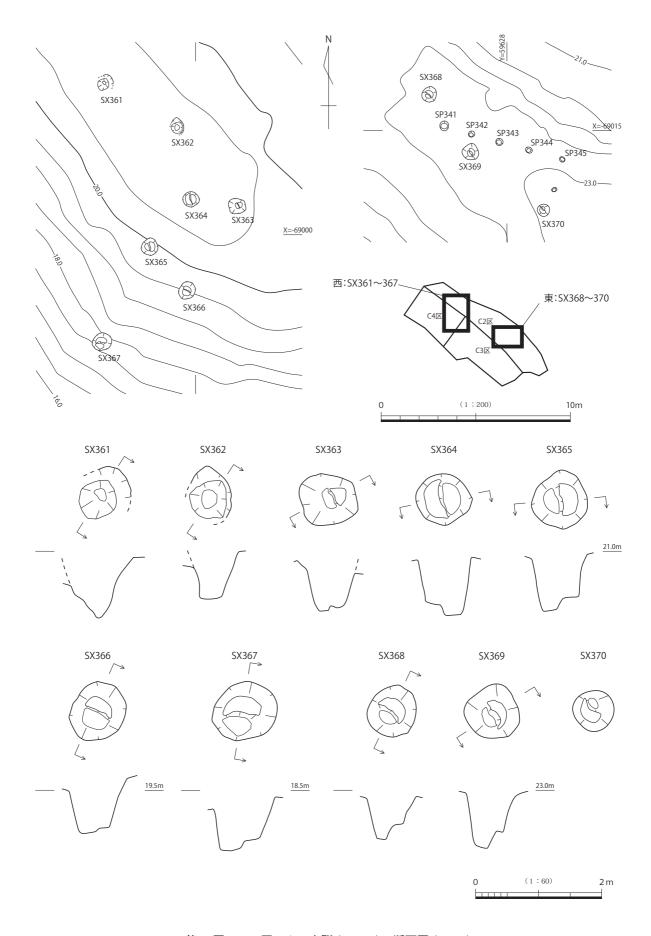
C2区東端部付近の、加工段SX312に近接して見つかった円形土坑である。直径約1mを測る円形平面のため、後述するタコ壺の可能性も考えられたが、深さが30cm弱と浅く、タコ壺底面に見られる段状の加工も認められないため、タコ壺ではないと判断した。埋土は2層あり、C2区の他遺構と同様、地山上には風化砂質土が堆積していた。1層中より弥生土器の小片が出土しているが、混入の可能性が高く、遺構が掘削された時期は不明である。

土坑 SK332 (第80図)

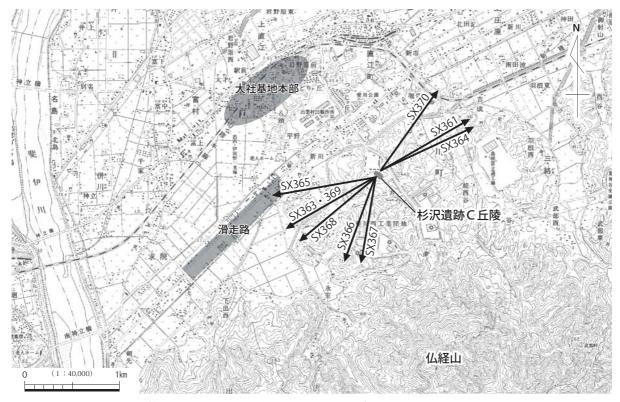
C2区のほぼ中央に位置する,方形に近い不定形の土坑である。一辺90cm,深さ20cmを測り,埋土は単一層である。北西壁面の一部が被熱により赤く変色し,埋土中にも炭化物が多量に含まれていた。遺物は検出されず、時期は不明である。



第00凶 C Z 区 工机 S N 301 * S N 302 (1 · 4



第81図 C2区 タコ壺群(1:200) 断面図(1:60)



第82図 タコ壺の方向と周辺地形および関連施設(1:40,000)

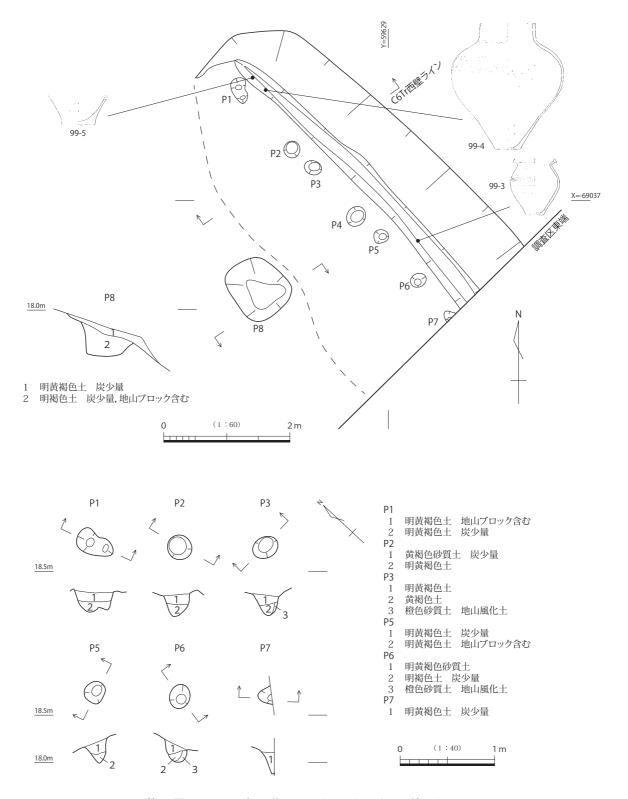
タコ壺 SX361~SX370 (第81・82図 図版 15・25)

タコ壺は、兵士一人用の塹壕である。 C 丘陵では、標高20 m 前後を測る丘陵頂部および南斜面で太平洋戦争末期に掘られた計10基のタコ壺が検出された。タコ壺は西端の一群と東端の一群に分かれて分布しており、西群で7基、東群で3基を確認した。丘陵南斜面では、台状に突出した部分に集中して掘られていた。台座の造成を想定したが、台状部分の土層からは地山に人工的な加工の痕はないと判断され、突出した部分にタコ壺が掘られた可能性が高い。タコ壺は、直径約1 m、深さ約1 mで底が狭くなる円柱形の土坑で、底面に腰掛け用の段を作るのが標準的な形態である。ただし、その規模、壁面や底面の掘り方など、細部の個体差は大きい。これは、使用する兵士が自身の体格に合わせて掘削したためと考えられる。また、底面の腰掛けの位置から、兵士がどの方向を向いて監視していたかを推測することができる。西群では、南西方向を向くものが4基、北東方向を向くものが2基、不明が1基ある。東群は南西方向2基と北東方向1基で、全体の3分の2以上が南西方向を向く。

なお,周辺には旧帝国海軍大社基地がおかれ,滑走路等の遺構が残る。これについては後述する(本 節第4項)。

(3) C 3 区の遺構 (第83~88図 図版 2・23・24)

丘陵南斜面のうち、東半分をC3区とした。南北10m、東西40mの範囲の、斜面の標高14~19mに6基の遺構が築かれており、C丘陵の中では遺構密度が低いが、竪穴建物跡2棟をはじめ、大型の遺構が築かれる。遺構配置は東側の一群、中央の一群、西側の一群に大きく分けられ、それぞれ1~3基の遺構が含まれている。



第83図 C3区 加工段SX314(1:60) ピット断面(1:40)

加工段SX314 (第83図 図版23)

3区東端で確認された遺構で、遺構は調査区外に延びる。平面楕円形で、確認できた規模は長軸約5.7m、短軸約3.5mを測る。大型の加工段で、全体の3分の2程度を検出したと推測される。壁体は地山である岩盤を大きく加工しており、壁面は垂直に近い角度で立ち上がる。地山を加工して築造し

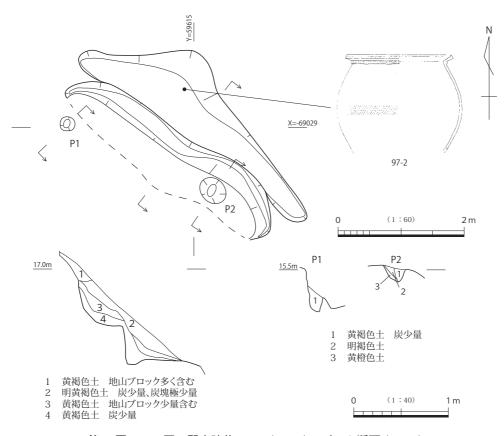
た2 m幅程度の床面は残存しているが、それより南西の、斜面に盛土して造成したと考えられる床面は失われている。床面では、30 cm幅の壁体溝と、溝に平行するように並んだ7基のピットを確認した。ピットは直径 $30\sim40$ cm、深さは30 cm程度である。 $P3\cdot P6$ については、柱の痕跡が土層からうかがえるものの、それ以外のピットについては単一の埋土ないし水平に土が堆積しており、柱の痕跡を直接的に伺うことはできない。また、盛土による床面が築かれていたと考えられる。壁体から3 m程度南西の位置では直径約1 mの土坑を検出した。土坑内からは遺物の出土がなく、被熱痕等も確認できなかったため性格については不明である。

加工段SX315からの出土遺物は、中期後葉の弥生土器のみに限られる。地山に近い埋土層から集中して出土しているため、当遺構も同じ時期のものと考えられる。

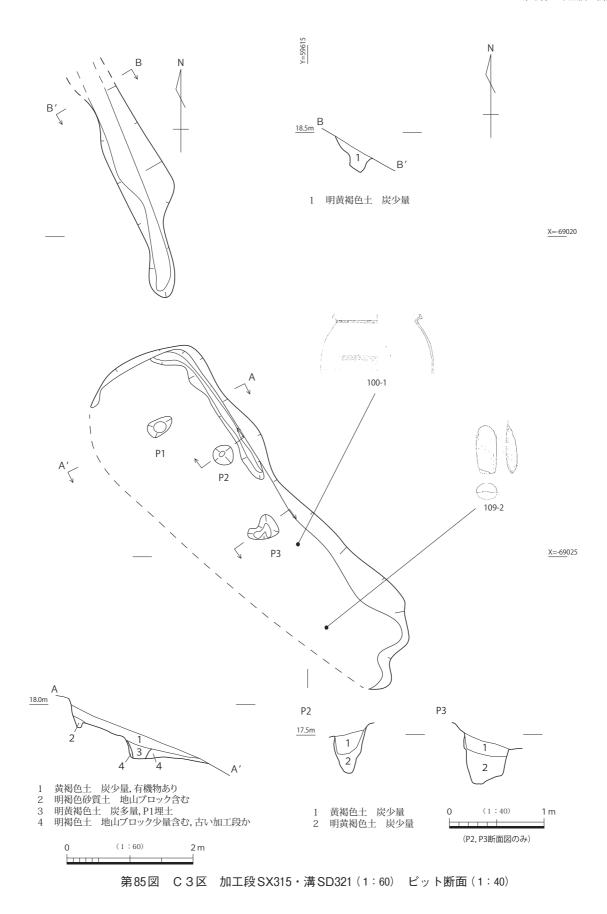
竪穴建物 SI304 (第84図 図版 23)

C3区の中央からやや東寄りの、標高15~17mの斜面にある建物跡。本遺構が位置する斜面は、標高15mの等高線に沿って地山の岩盤が一部崩れており、その影響で竪穴建物SI304は大半が失われ、壁面と床面のごく一部が残存するのみであった。

遺構は上下2段で構成されている。検出時は別遺構と考えたが、上下に一連の埋土(4層)が堆積していたことから一連のものと判断した。平坦面はともに壁が円弧状で、下段のほうが円形に近い。壁は上下段ともほぼ垂直に立ち上がり、壁際には壁体溝がともなう。下段の平坦面には2基のピットがある。



第84図 C3区 竪穴建物 SI304(1:60) ピット断面(1:40)



今回の調査で確認された円形の竪穴建物跡には、斜面上部に1条ないし数条の溝が伴うものが大半で、竪穴建物SX304のように上にテラスをともなうものはない。類似した構造ないし断面形をもつ

資料には、竪穴建物2棟が重複して発見された安来市塩津山遺跡の事例²⁾があげられるが、SI304では上下段が同時に利用されていた可能性が高いため、竪穴建物の重複とも言いきれない。

SI304については、新しい建物(下段)を掘削した際に、古い遺構の床面(上段)を、屋根材を立て受けるテラスとして利用した可能性を考えたいが、これも推測の域を出ない。

なお、上下段ともに弥生土器が出土しているが、いずれも弥生時代中期後葉におさまるものである。

加工段SX315 (第85図)

加工段SX315は、C3区中央の標高18~19mに位置する。長軸約6.2m、短軸2.3mを測る加工段である。地山の岩盤を削って築かれたもので、深さは最深部でも50cmと浅い。平面形はいびつな隅丸長方形で、西半分は壁体が垂直に立ち上がり、壁体溝とピット3基も伴うが、東半分はピット等がなく、壁体の立ち上がりも緩やかなので、同じ遺構の東西で使い分けがあった可能性が考えられる。遺物の出土は少ないものの、埋土中から甕や高坏等の弥生土器が出土している。

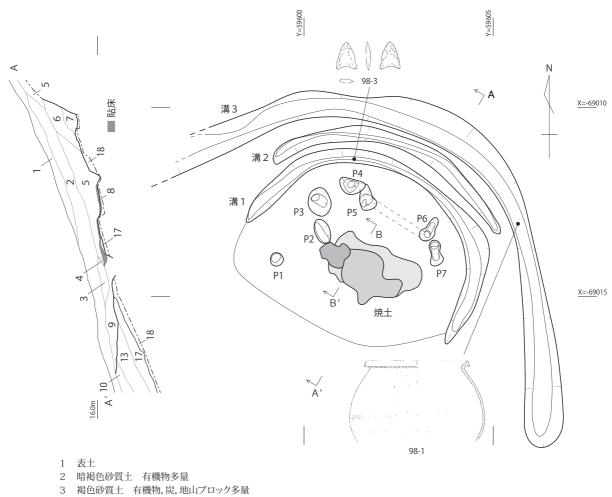
溝SD321 (第85図)

C 3 区の加工段SX315の西側に位置する溝で、長さ3.3 m、幅50~80 cm、深さは最深部で約30 cm を測る。急傾斜の斜面に掘削されており、埋土2 層はいずれも岩盤が風化した砂質土である。遺物の出土はなく、時期・用途ともに不明である。

竪穴建物 SI305 (第86·87図 図版2)

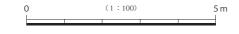
竪穴建物 SI305 は、C 3 区西端にあり、C 丘陵南斜面のほぼ中央に位置する最も規模の大きい遺構である。標高15~17 mの斜面を約10 mにわたって削り取った上、斜面下に盛土をおこなってほぼ円形の平坦面を造成し、上の斜面にはそれを取り囲む弧状の溝3条を掘削している。平坦面は、東西6 m、南北4.5 mの楕円形である。平坦面を囲う溝の存在から、東西幅は完全に残っていると考えられ、本来は直径6 mの平坦面に建物が建っていたと推測される。中央には2.5 m×1.5 mの焼土面と、焼土面の周囲に掘られた7 基のピットを伴う。焼土面は、後述するように中心部が土坑状に深くなり、多量の炭化物が堆積していた。この炭化物については放射性炭素年代測定をおこなった(第7章第1節)。溝は、内側から溝1、溝2、溝3と呼称する。竪穴建物が築かれた平坦面は、背後の斜面を扇状に大きく切り取って造り出したもので、溝を3条掘削することで建物敷地内への雨水の流入を防いでいることが分かる。外側に位置する溝3は、深さ20cm前後と深い上、端部が東西に大きく開き、建物に影響のない位置で排水できる構造となっている。なお、保存状態の良い土器が溝2・3からわずかに出土している。

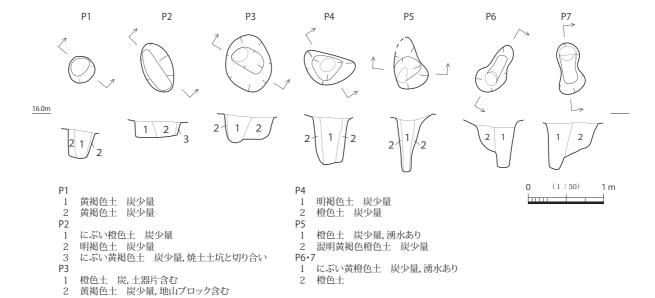
ピットは、直径 $40\sim60\,\mathrm{cm}$ 、深さ $20\sim70\,\mathrm{cm}$ とばらつきが大きいが、土層を見ると柱が据えられていた痕跡および抜き取られた痕跡がある。平坦面での配置は規則性に乏しいが、 $P4\cdot P5$ と $P6\cdot P7$ はそれぞれが近接して掘られていることからP4とP6、P5とP7がセット関係にあると考えられ、少なくとも1回は建て替えられた可能性がある。また、ピットの配置から4本柱の建物と推測さ



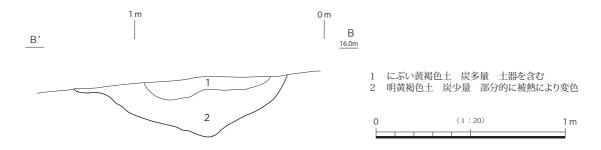
- 4 明褐色土 堆積土,炭やや多量
- 5 明褐色砂質土 炭少量,地山ブロック含む
- 6 明褐色砂質土 $\phi 2\sim 10$ cmの地山ブロックを多く含み、固く締まる
- 明赤褐色砂質土 ϕ 3~5 cmのブロックを含む,遺物含む
- 8 黄褐色砂質土 焼土,炭多量 9 黄褐色砂質土 炭少量,赤土の地山多量,造成土
- 10 明褐色土 炭小量

- 13 黄褐色土 炭少量(造成前の堆積土)
- 17 明黄褐色土 炭極少量(造成前の堆積度)
- 18 地山





第86図 C3区 竪穴建物 SI305 (1:100) ピット断面 (1:50)



第87図 C3区 竪穴建物 SI305 被熱部断面 (1:20)

れ、尾根側の柱の間隔は約 $2.5\,\text{m}$ となる。また奥行きは、P $4\cdot$ P 6 と南端のP 1 が同じ建物の柱穴であるとすると $3\,\text{m}$ 弱を測る。竪穴建物SI305のすぐ下の斜面には加工段SX315があり、盛土した斜面が崩壊して南側のピットが消失したとは考えにくいので、竪穴建物SI305の平坦面には一辺 $3\,\text{m}$ の柱を配した円形の建物が建てられていたと推測できる。

出土遺物は遺構規模に比例せず希薄で、土器・石器ともに小片が中心である。土器はすべて弥生時代中期後葉の特徴をもつものである。なお、焼土面から得られた炭化物の年代測定の結果は1800~1900年前であり、土器の年代とおおよそ整合的である(第7章第1節)。

加工段SX316 (第88図 図版24)

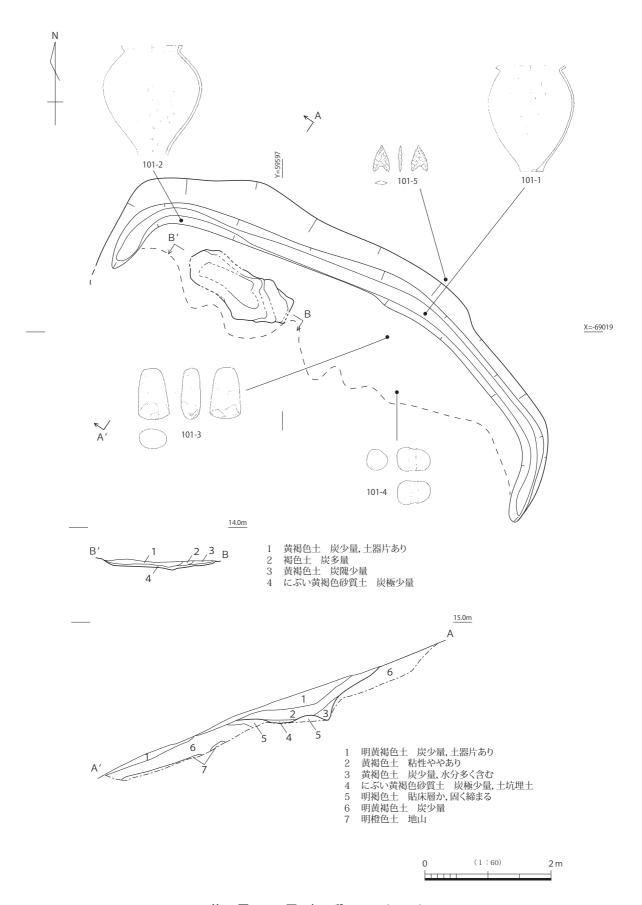
加工段SX316は、C3区中央、竪穴建物SI305の真下に位置する大型の加工段である。竪穴建物とは約2mの標高差がある。加工段の西南部は地山に盛られた盛土の崩落により失われているが、平面形は隅丸方形で長軸約8m、短軸約2.3mを測る。壁面は比較的状態良く残っており、高い所で約90cmを測る。壁面沿いには幅30~50cm、深さ20cm弱の壁体溝が掘削され、埋土中からは弥生土器が出土している。また、現存する平坦面は固く叩き締めたような状態であった。遺構の土層断面からは、盛土(6層)の上に貼床層(5層)が施されていたことが分かる。さらに、遺構の西北隅には大型の土坑を伴う。長軸1.8m、短軸0.7mを測るいびつな楕円形の土坑で、深さは15cm程度しかないが、3回掘り直した痕跡が認められる。埋土中からは部分的に多量の炭化物が検出されており、炉跡の可能性を考えたが、明確な被熱痕跡は認められなかった。

(4) C 4 区の遺構 (第89~94図 図版3·24)

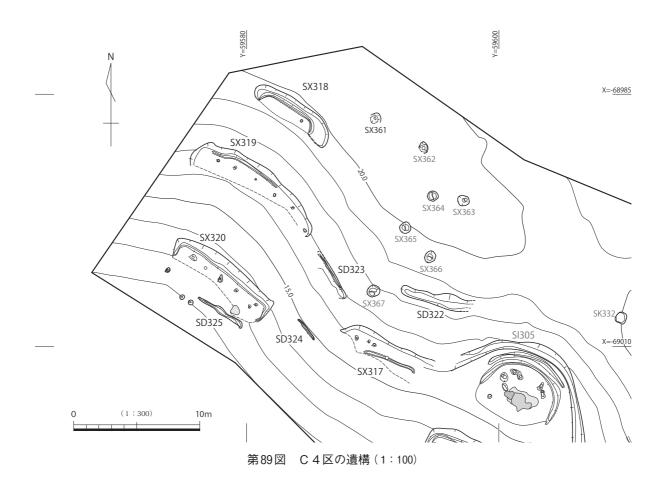
丘陵南斜面の西半部をC4区として調査した。この調査区は最も遺構密度が高く、南北20m、東西28m、標高12~15mの範囲に8基の遺構が築かれている。C4区の西半部には加工段3基が上下に高さ2mの間隔をもって並ぶ。一方東半部は小規模な加工段、溝で構成されている。

加工段SX317 (第90図)

加工段SX317はC4区東半部の中段に位置する。遺構の東側端部は試掘トレンチの掘削により失われているが、長軸約7.3m、短軸約2.3m、壁面の高さ約80cmを測る。他の加工段と同様に、平坦面



第88図 C3区 加工段SX316(1:60)

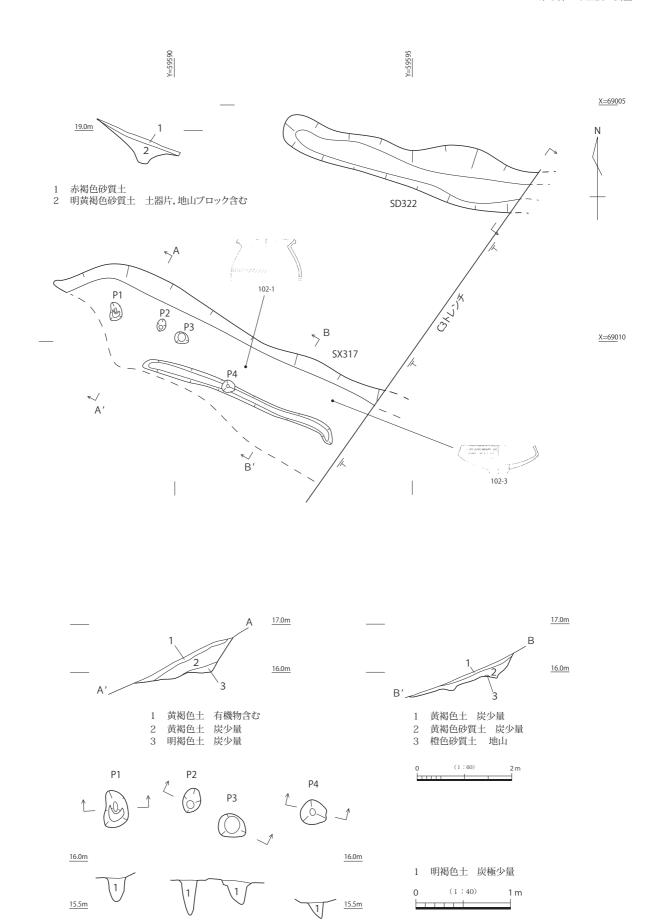


造成のため斜面下に盛られた土の崩落に伴い、遺構下半は原形を留めていないと考えられる。唯一形状が分かる北西隅からは、隅丸方形の平面形であったことが推測される。また、遺構西側は壁面も高くしっかりとした造りで、床面には柱穴と考えられるピットを検出しているのに対し、東側は壁面が緩やかでピット等も伴わないため、3 区の加工段SX315 と同様に、同一遺構内でスペースが使い分けられていた可能性がある。西半のピットについては、直径約 $30\sim40$ cm、深さ $20\sim40$ cmとばらつきがある。埋土はいずれも1 層で、遺構埋土3 層と同じ土で埋没している。なお、遺構中央の平坦面に長さ4 m、幅30 cm程度の溝が伸びるが、加工段SX317 に伴うということ以外は不明である。

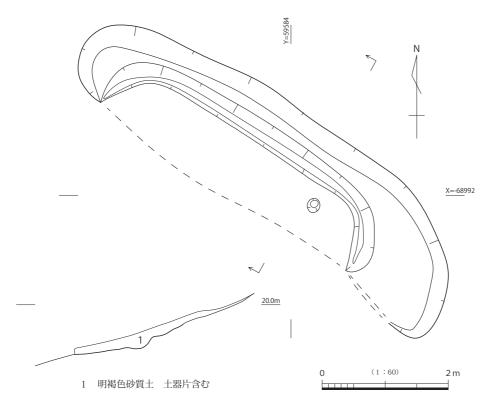
溝SD322 (第90図)

加工段SX317の上2mに位置する溝である。これも試掘トレンチによって東端部が失われており、 C3区側には伸びない。残存規模は長軸約5.5m, 短軸約1.3m, 深さは最深部で約70cmである。本 来は長軸6mを超える遺構であったと推測される。埋土は1層で、地山の風化土で埋没している。加 工段SX317~SX319など、丘陵南斜面の中腹以上に位置する遺構は、そのほとんどが風化砂質土で 埋没しており、丘陵上部から相当量の風化土が流れ込んだことが分かる。

遺構中からは、弥生土器が出土しており、いずれも弥生時代中期後葉の特徴を持つ。



第90図 C4区 加工段SX317・溝SD322(1:60) ピット断面(1:40)



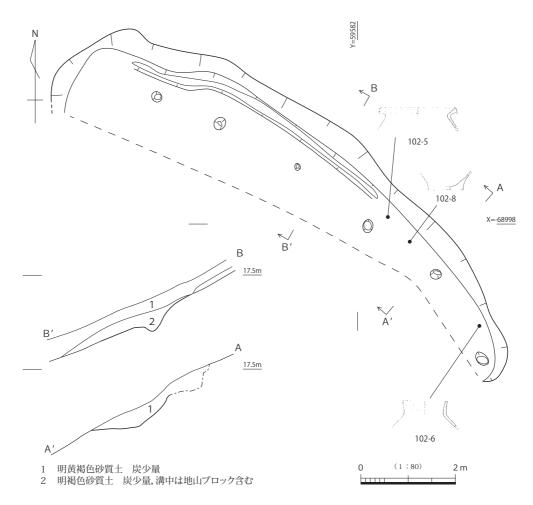
第91図 C4区 加工段SX318(1:60)

加工段SX318 (第91図)

C4区西半部斜面の最上段に位置する加工段である。遺構の深さは最大で30cm程度だが、遺構内部は2段構造になっており、内側に掘られた弧状の溝の背面に幅15~120cmのテラス状平坦面が形成されている。上段は長軸約7.1 m、短軸約1.8 mを測る長楕円形、下段は長軸約5 m、短軸約1.2 m、深さ約25cmを測る長楕円形の加工段で、上段のほぼ中央に位置する。平坦面では、直径約20cmのピットを1基確認したが、同様のピットは他にない。遺構埋土は1層のみで、層中から弥生時代中期土器の小片が出土した。

加工段SX319 (第92図)

C4区西半部斜面の中段、加工段SX318から斜面を約3m下った位置にある。長軸11.5m、短軸2.5mを測り、平面形は緩く弧を描く。遺構の南半分は崩落している。壁面は高さ1m弱で、地山を深く削り込んで成形する。壁面沿いには幅30cm前後の溝が掘られているが、遺構の西端から3分の2に限られる。また柱穴と考えられる小ピットを6基検出している。ピットはほぼ等間隔で、ほぼ一直線に並んで検出された。直径10~20cm、深さ20cm程度の小型のピット群であり、しかも遺構と同じ埋土で埋まっていたため、建物が建てられていたとしてもピット全でを用いたのか、一部を用いたのかは不明である。ただし、斜面下3mに位置する加工段SX320では、覆土・埋土ともに厚く堆積し、遺物も比較的多く含まれていたため、加工段SX319の構築に伴う盛土が大きく崩れたことが分かる。したがって、加工段SX319には大型の建物が建てられていた可能性があると言える。遺物は、弥生時代中期の土器片が少量出土している。



第92図 C4区 加工段SX319(1:80)

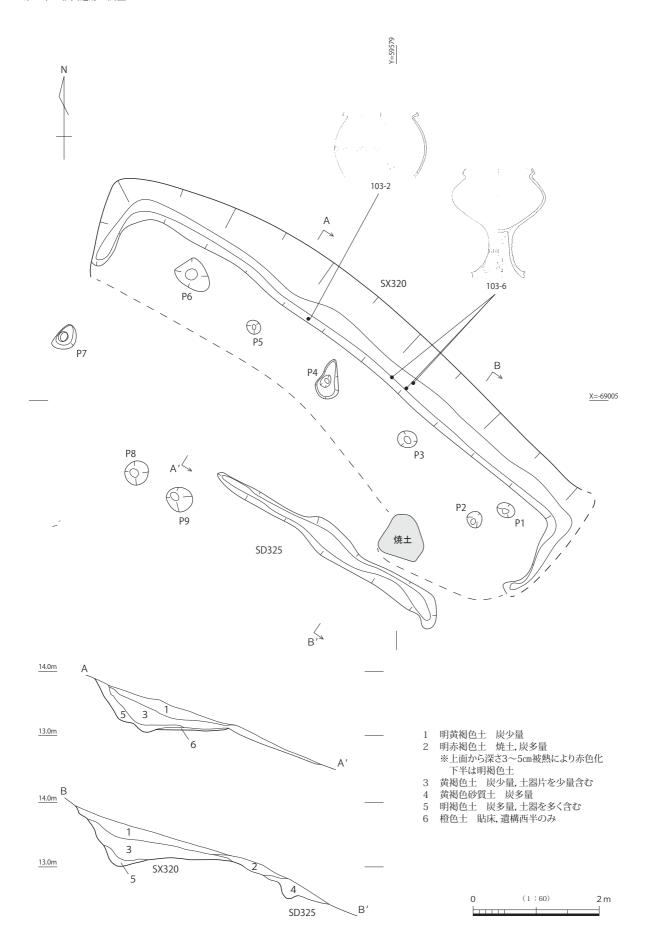
溝SD323·SD324 (第89図)

SD323は加工段SX319の東、同じ標高で検出された溝である。長軸4.3 m、短軸60 cm、深さは最大で60 cm近くあり、地山面に深くV字状に掘り込まれている。埋土は2層で、いずれも地山が風化した砂質土である。遺物や炭化物等が出土せず、時期は不明である。

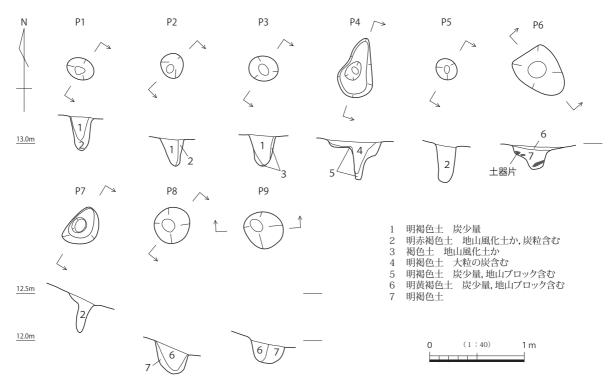
またSD324は、加工段SX317と加工段SX320の間で検出された溝である。おおよそ、加工段SX320の上端と同じ標高に掘られている。長軸 $2.1\,\mathrm{m}$ 、短軸 $20\,\mathrm{cm}$ と小規模で、深さも最大で $15\,\mathrm{cm}$ 程度で、遺物は出土しなかった。

加工段SX320 (第93·94図 図版3·24)

C4区最下段で検出された大型の加工段である。長軸約9.2m, 南半が崩落しているが,最大で短軸約3.0mが残る。平面形は長方形で,壁面に沿ってコの字状の壁体溝が検出された。現存する平坦面には貼床が施され,柱穴と考えられるピット5基が列状に並ぶ。ピットは残存する平坦面の外でも3基検出されており,これらも加工段SX320に伴うものと考えられる。また,平坦面の東側床面では焼土痕を確認した。直径約70cmの範囲が熱により赤く変色し,周囲に炭化物が比較的多量に堆積していた。焼土部分の土層断面には、床面を掘りくぼめた様子が見られなかったため、直に火を焚い



第93図 C4区 加工段SX320·溝SD325(1:60)



第94図 C4区 加工段SX320 ピット(1:40)

ていたと推定される。

遺物は、斜面の最下段に位置しているため、上部からの流れ込みが多かった。さらに、台付鉢のように、出雲地域には少ない器形の土器がある点も注目できる。遺物の年代は、すべて弥生時代中期後葉である。

溝SD325 (第93図)

加工段SX320の下で検出された小規模な溝状遺構である。加工段SX320は遺構下半の盛土が崩落し原形を留めていないが、土層断面を観察したところ、溝SD325はSX320の焼土面(2層)が形成されるより前に掘削されており、SX320築造以前の溝である可能性がある。残念ながら、遺物が出土しなかったため、詳細な時期については不明である。

第2項 遺構出土遺物

(1) C 2 区の遺構出土遺物 (第95・96図 図版52・54)

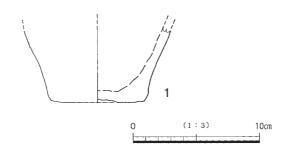
竪穴建物 SI301 (第95図)

竪穴建物 SI301 は、過去の調査時に埋土の大半が掘り上げられていたため遺物はほとんど出土しなかった $^{1)}$ 。 1 は埋土が比較的良好に残っていた柱穴 P 2 の底面付近から出土した弥生土器の底部である。摩滅が著しいため器面調整等は不明で、内面は大半が剥離している。細身の甕または壺の底部と考えられる。

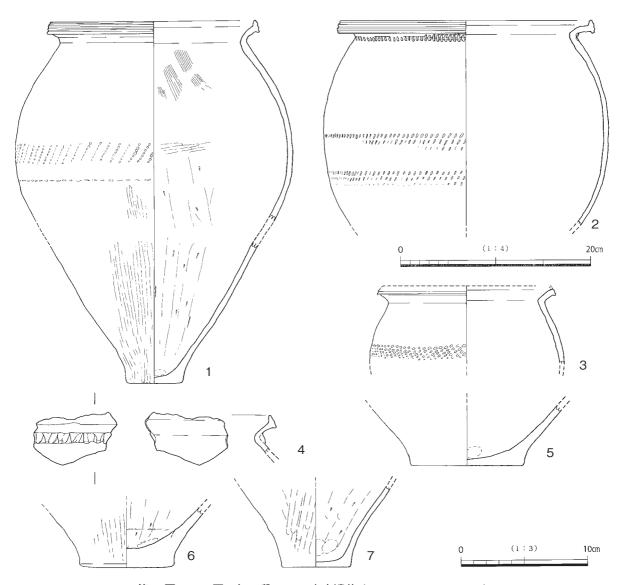
加工段SX312 (第96図 図版52·54)

加工段SX312からは、弥生土器が出土した。確認できる器種には甕・壺がある。ここでは、完形に復元できるものを含め、7点を図化した。摩滅が少なく、良好な残存状態を保ったものが多い。

1は完形に復元できる甕である。器高38cmを測る大型の甕で、やや胴長の印象を受ける。2も、1と類似した甕である。ともに凹線文、列点文で口縁部や胴部を飾り、2は頸部に紐状の突帯を貼り



第95図 C2区 竪穴建物SI301出土遺物(1:3)



第96図 C2区 加工段SX312出土遺物(1:3, 1・2のみ1:4)

つけ、刻目を施す。中型の甕3も上記の2点と同様の特徴を持つ。甕の小片4はやや大きい刻目突帯が巡る。5~7は大型の底部である。いずれも、弥生時代中期後葉の資料である。

加工段SX313, 土坑SK331

弥生土器の小片が出土したが、図化できなかった。確認できる器種には甕がある。

(2) C 3区の遺構出土遺物 (第97~101図 図版52~54)

竪穴建物 SI304 (第97図 図版 52·54)

竪穴建物 SI304 では弥生土器の甕,壺,高坏が出土した。遺物は下段に集中し、少なくとも 3 個体の中~大型の甕 (第97図1~3) がある。中型の甕 1 は、肩部を欠くものの、全形を復元することができる。外面下半には丁寧なヘラミガキ調整が施される。 3 は、1 よりやや大きく、調整はハケメが主体である。 T字状に拡張した口縁端部には沈線 1 条が引かれる。

また大型品の2は口径24cmを測り,復元高は30cmを超えるものと考えられる。頸部には大ぶりな刻目が入った突帯が貼り付けられ,胴部には幅広の列点文が1列巡る。 $4\sim6$ は甕の底部である。4は胴部下半が残る資料で,中型品である。5は,4より大きい甕に伴う底部であろう。6は器壁が外反せずに立ち上がるもので,本調査区における底部の中では類例のない形態である。また,7は小型壺の肩部である。外面が羽状文と円形浮文で飾られ,装飾性が高い。

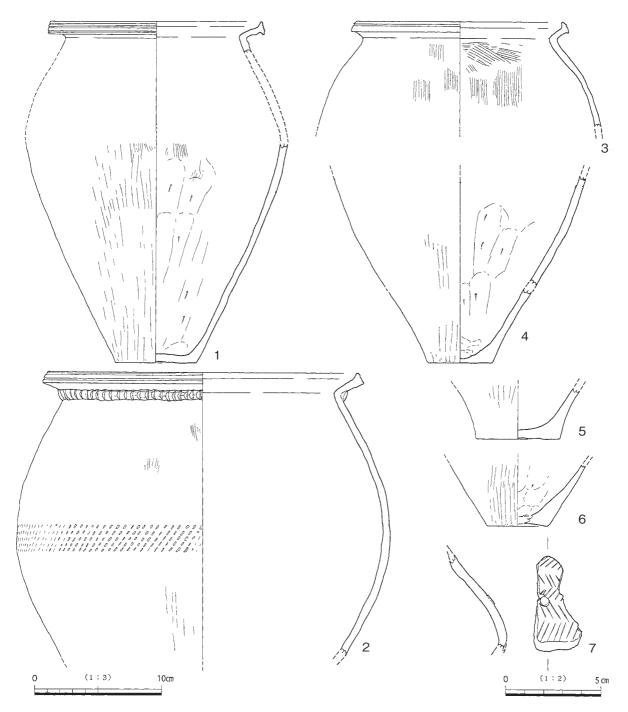
遺物の時期は弥生時代中期後葉が中心だが、装飾性の高い7のみ、中期後葉より若干古い様相を示す。

竪穴建物 SI305 (第98図, 図版52)

竪穴建物 SI305からは弥生土器の甕,壺,高坏と石鏃が出土したが,小片が中心である。ここでは以下の4点を図化した。第98図1は、建物を取り囲む外側の溝3内に横たわった状態で出土した(図版2左下)。復元できたのは胴部上半だけだが、口径は24cm弱、復元器高は30cmを超える大型の甕である。口縁端部は大きく上下に拡張され、外面に凹線文が巡る。また頸部には細い刻目突帯が貼り付けられる。胴部はややずんぐりとした印象で、胴部中程に2列の列点文が巡る。外面は全面ハケメ調整、内面は胴部中程からやや上までヘラケズリ調整が及んでいる。典型的な弥生時代中期後葉の資料である。3は安山岩製の石鏃である。また4は黒曜石の剥片で、表裏に4カ所の剥離痕があるため石核の可能性もある。

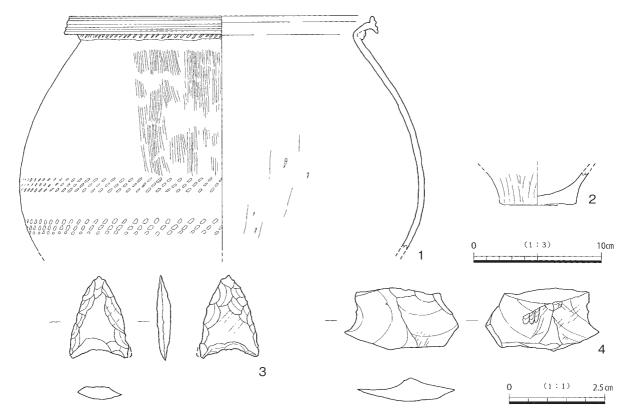
加工段SX314(第99図 図版52~54)

加工段SX314では、地山に近い埋土中から甕、壺、高坏が出土している。第99図1~3は甕である。 1は、丁字状に張り出した口縁部に凹線文、頸部に刻目の施された貼付突帯が巡る。内外面ともに密なハケメ調整が施され、弥生時代中期後葉の古相に位置付けられる。2は口縁部が上方のみに拡張し、 1より新しい。3は器高15cm弱の小型甕で、胴部の中位が強く張り、幅広の列点文が巡る。口縁部は



第97図 C3区 竪穴建物 Sl304 出土遺物 (1:3, 7のみ1:2)

上方に拡張し、凹線文が施される。4は短頸壺。口縁部から胴部半ばの部分と、底部とに分かれて出土した。直接接合することはできなかったが、図上で復元すると、器高29.5cmを測る大型の壺である。口縁部は垂直に立ち上がり、凹線文で飾られる。また、頸部・肩部に3条の列点文を巡らせる。内面はハケメののち、胴部半ば以下にヘラケズリ調整を加える。短頸壺としては胴部が長く、広口壺に近い形態をもち、今回の調査では類似の短頸壺は他に確認できていない。また、5は甕または壺の底部で、外面をヘラミガキで整える。6は高坏の坏部である。内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げられ、口縁部外面は凹線文と刻目で飾られる。出土遺物の時期は、弥生時代中期後葉に収まるものである。



第98図 C3区 竪穴建物 Sl305 出土遺物 (1:3, 3・4は1:1)

加工段SX315 (第100図 図版53)

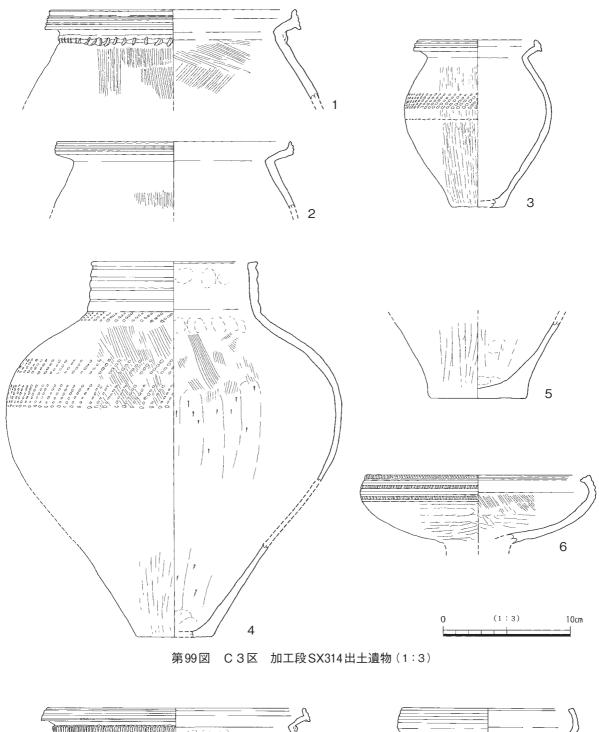
加工段SX315は出土遺物が少ないが、やや大型の甕と高坏がある。第100図1は口径27cmを測る中~大型の甕で、胴部上半が復元できた。口縁部は、端部に凹線文、頸部に長楕円形の刻目を持つ貼付突帯、さらに胴部に列点文2列が巡る。内面のヘラケズリは、頸部に達していないものの、胴部上半にまで及んでおり、弥生時代中期後葉でもやや新しい要素が伺える。2は高坏で、やや深い坏部を持つ。わずかに内傾する口縁部は、凹線文で飾られる。また、底面は円盤充填による。2も、1と同時期とみられる。

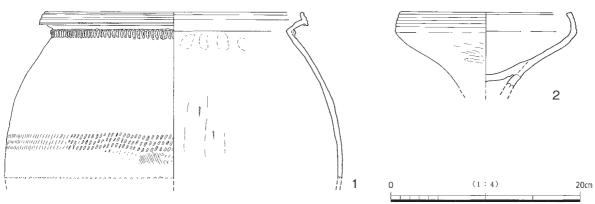
加工段SX316 (第101図 図版52~54)

加工段SX316では、弥生土器の甕、壺、高坏と石器が出土した。図化したのは壁体溝内から出土した土器2点と、床面から出土した石器3点である。

第101図1・2は弥生土器である。1は甕で、口縁端部を欠くものの、ほぼ完形に復元できる。口縁端部は上方にのみ拡張し、外面に凹線文が施される。胴部は無文だが、胴部半ばまでヘラミガキで調整される。内面は、頸部近くまでヘラケズリ調整され、後期に近い様相を示す。2は短頸壺である。肥厚した端部が内傾するという、特徴的な口縁部をもつ。外面は1と同様に無文、内面は下半にヘラケズリ、上半にハケメ調整を施しており、1に比べると中期的な内面調整手法で製作されている。

3は石斧の転用石製品である。刃部および基部の位置に摩滅面が観察できることから、磨石として 再利用された可能性がある。4は有溝石錘で、自然石の中央に敲打を加えて幅広の溝を作りだしてい

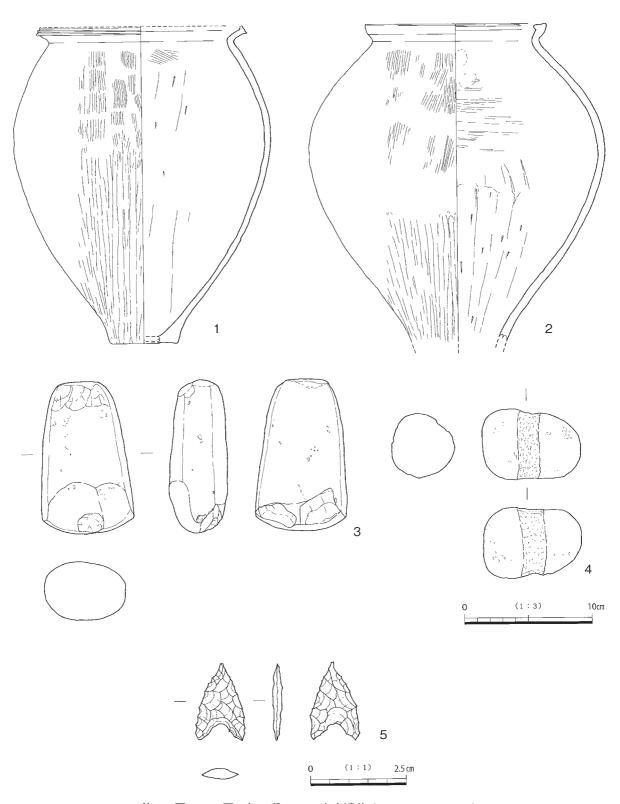




第100図 C3区 加工段SX315出土遺物(1:4)

る。また5は黒曜石製の石鏃である。凹基無茎式で、抉りは比較的深い。

出土土器の特徴はいずれも弥生時代中期後葉を示すものだが、1・2の内面調整には若干の時期差が認められる。



第101図 C3区 加工段SX316出土遺物(1:3, 5のみ1:1)

(3) C 4 区の遺構出土遺物 (第102~104図 図版7・49・53・54)

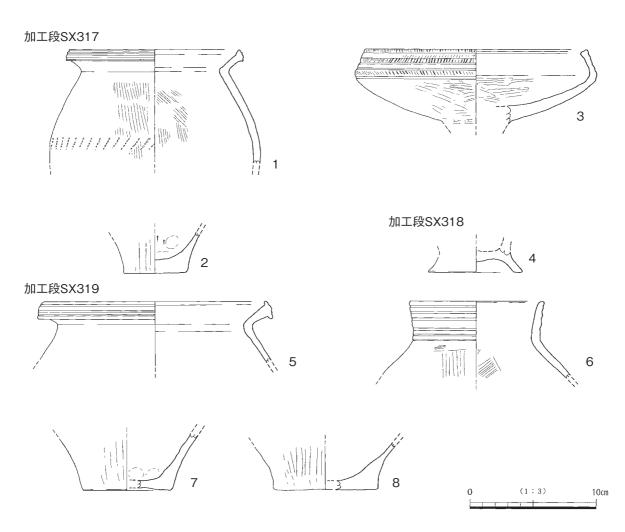
加工段SX317 (第102図1~3 図版53)

加工段SX317では、小片ながらも弥生土器の甕、高坏が出土している。そのうち、部分的に復元できた資料3点を図化した。

1は小型の甕である。胴部があまり張らない細身の甕で、口縁端部も上下にわずかに拡張するのみである。口縁部には凹線文、胴部上半には列点文が巡る。2は甕の底部と考えられる。1と同一個体の可能性もある資料である。3は高坏の坏部。口縁部は凹線文と刻目で飾られ、坏部下半は内外面ともにヘラミガキ調整で仕上げられる。これらはいずれも弥生時代中期後葉の特徴をもつ。

加工段SX318 (第102図4)

加工段SX318では弥生土器が少量出土している。小片ばかりで、確認できる器種は甕と壺に限られ、図化できたのも1点のみに留まった。4は脚台部である。小型の壺に付属するものと考えられ、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。



第102図 C4区 加工段SX317~SX319出土遺物(1:3)

加工段SX319 (第102図5~8 図版54)

加工段SX319でも、加工段SX318と同様に小片のみの出土で、器種が特定できるものは甕、壺に限られたが、比較的残りの良い4点が図化できた。5は甕の口縁部である。中型品で、しっかりとした口縁部を持つ。口縁部は端部に向かって肥厚し、端部は上下に拡張して凹線文で飾られる。6は短頸壺である。口縁部はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。内外面はハケメ調整である。7・8は甕または壺の底部である。器壁の立ち上がり角度から、7は細身、8は膨らみのある胴部が復元できる。

加工段SX320 (第103図 図版7・49・55)

C4区の最下段に位置する加工段SX320は、C丘陵の中で最も多量の遺物が出土した遺構である。 その中には上部に位置する遺構から転落した遺物も含まれると考えられるが、遺物の多くは床面に近い埋土中からの出土で、遺構の廃絶年代を示す資料と位置づけてよい。出土遺物は弥生土器の甕が大半で、壺、高坏、鉢等も認められ、石器も確認している。

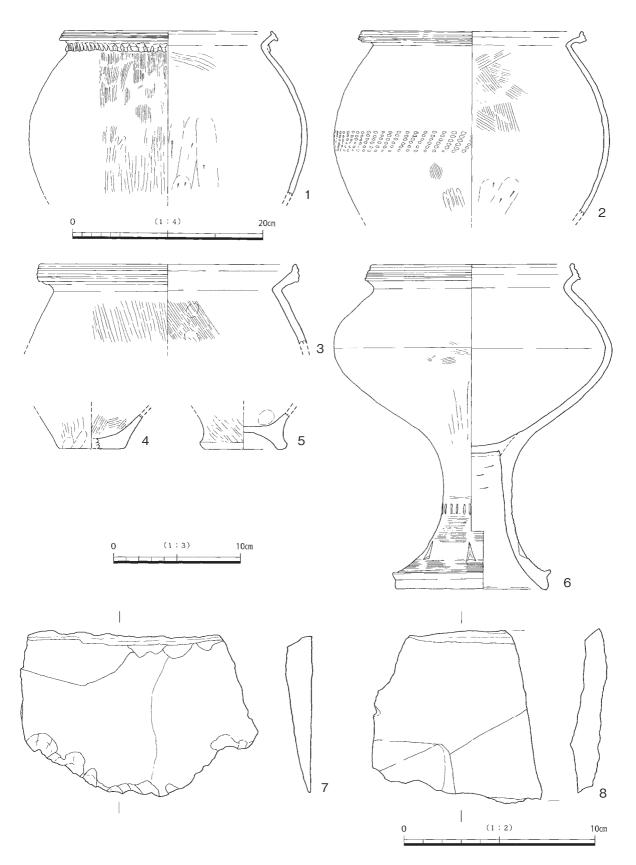
第103図1~3は甕である。1は柱穴P6から出土した、頸部突帯を持つ甕である。同一個体がまとまっており、破断面の磨滅も少なかったため、ピット内へ故意に廃棄された可能性もある。2・3は口縁端部が上方に拡張する甕で、端部外面にはいずれも凹線文が巡る。内外面はハケメを中心に調整が施される。4は甕、5は台付壺または台付甕の底部である。また、6は壁体溝内から出土した完形の台付鉢である。鉢部は、凹線文で飾られた口縁部と、大きく張った玉葱状の胴部からなり、底面は円盤充填による。器面は磨滅しており調整等は不鮮明だが、文様はなく、ハケメとヘラミガキで仕上げている。一方、台部は、高坏の脚部と極めて類似しており、凹線文、長楕円形・三角形の刺突文で飾られる。なお、器面全体の厚さは5mm前後に整えられており、丁寧に作られたことが分かる。6のような長い脚台が付く台付鉢は出雲地域では類例の少ない形態の土器で、近隣では備後北部地域の塩町式土器などに類例が確認できる4)。備後北部地域との関連性を想起させる資料として重要だが、脚端部付近の未貫通の三角形刺突は出雲地域でよく見られる特徴なので、単純に搬入品として捉えられるわけではなさそうだ。

石器は2点を図化した。7・8はいずれも大型の石包丁と考えられる。7は、明確な使用痕は認められないが、刃部は鋭く加工されている。8は7と類似した石だが、端部が欠損しているのか、刃部を加工した痕跡はうかがえないため、未成品と考えられる。

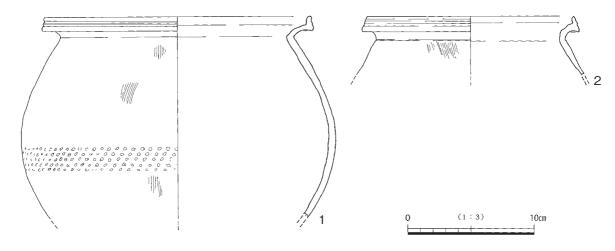
加工段SX320出土土器の様相から、当遺構の年代は弥生時代中期後葉に位置付けられる。

溝SD322 (第104図)

加工段SX317の上方に位置する溝SD322では、弥生土器の甕が出土し、2点を図化した。第104図 1は丸みの強い胴部に列点文が巡り、口縁部は垂直に上に伸びる。2も、口縁部の形態は1と類似している。いずれも弥生時代中期後葉の資料である。



第103図 C4区 加工段SX320出土遺物(1・2は1:4,3~6は1:3,7・8は1:2)



第104図 C4区 溝SD322出土遺物(1:3)

第3項 包含層出土遺物

(1) C1区の包含層出土遺物 (第105·106図 図版7·53·55)

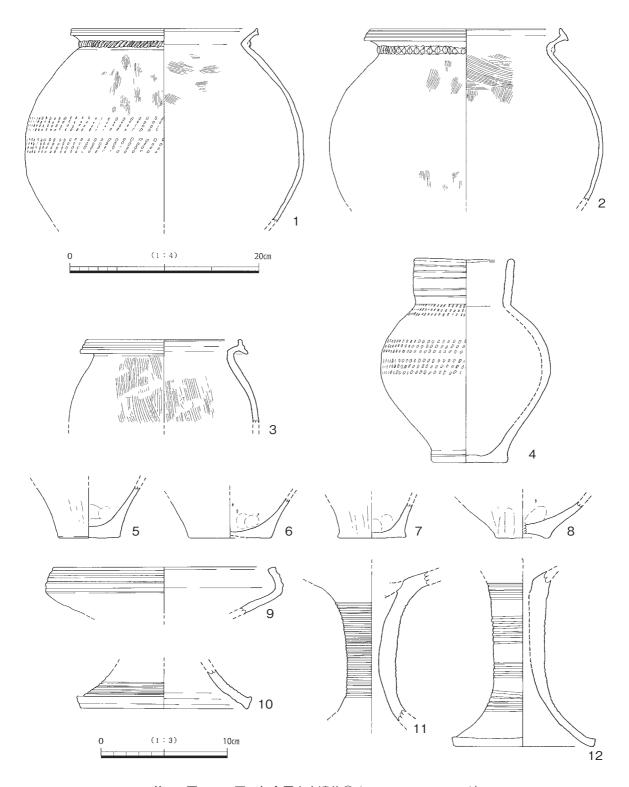
丘陵北斜面の中腹から裾にかけて設定したC1区では、明確な遺構は存在しなかったが、緩斜面で 比較的多量の遺物が出土した。

弥生土器 第105図1~3は甕である。1・2は中型で、いずれも胴部の丸みが強いのが特徴である。 頸部に刻目を持つ貼付突帯が巡るもので、1は細い刻目、2は菱形の大ぶりな刻目が施される。また 1の胴部には2列の列点文が巡る。3は小型で、口縁端部が大きく上下に拡張し、胴部の内外面を全 面ハケメで調整している。4は完形の直口壺である。地山に近い包含層中からほぼ原形を保ったまま 出土した。口縁部はほぼ直立し、端部は丸くおさめられる。口縁部外面と底部外面に凹線文、頸部と 胴部最大径の部分に列点文を巡らせて加飾している。出雲地域では、4に類似した器形の小型壺が確 認できないが、凹線文と列点文を多用する点は塩町式土器の特徴といえる。ただし胎土は在地の土器 と似ているため、加工段SX320の台付鉢(第103図6)と同様に、単純に搬入品と見ないほうがよいだ ろう。5~8は甕・壺の底部である。5~7は細身の胴部に伴うものだが、8は器壁が大きく開いて 立ち上がっており、胴部の丸い壺に伴うものと考えられる。9~12は小型~中型の高坏である。装 飾はいずれも凹線文のみで、刺突文等は見られない。12は坏部を欠くが、脚部は完全な形で残存し ていた。脚端部が摩滅しているものの、一般的な端部が拡張した脚部(10)と比較すると全体的に細 く薄い作りである。胎土についても、他の資料に比べて赤みが強く砂粒の細かい土であり、比較的大 きい砂粒が混入する胎土をもつ他の高坏とは製作地が異なる可能性がある。

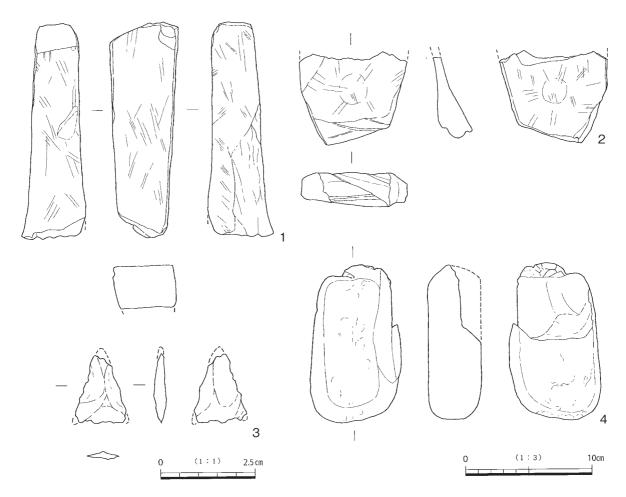
C1区の包含層出土土器は、大半が弥生時代中期後葉の特徴をもつ。

石器 第106図1・2は砥石である。1は1面を欠き、砥面は3面が残存している。細かな擦痕が観察できる。また、2は不定形の礫を使用した砥石である。おそらく半分近くが欠損しているが、中央は研面としたため窪んでいる。また、下端部には3条の細い溝が認められ、いずれの溝にも擦痕が観察できた。細い溝を伴う砥石は、玉作りや矢柄研磨等に使用されることが多い。今回の調査では石鏃

が比較的多く出土しており、矢柄研磨に用いられた可能性がある。3は安山岩製石鏃である。凹基無茎式だが、風化により端部、面のいずれも欠損部分が多い。また、4は用途不明の石器である。硬質な石材で、表裏面は非常に平滑である。砥石あるいは磨石とも考えられるが、使用に伴う擦痕は観察できない。



第105図 C1区 包含層出土遺物①(1:3, 1・2は1:4))



第106図 C1区 包含層出土遺物②(1:3, 3のみ1:1)

(2) C 2 区の包含層出土遺物 (第107図 図版55)

C2区では、北側の一部を除いて遺物の出土は極めて少なかったが、須恵器、弥生土器、石器が出土している。ここでは、主な遺物9点を図化した。

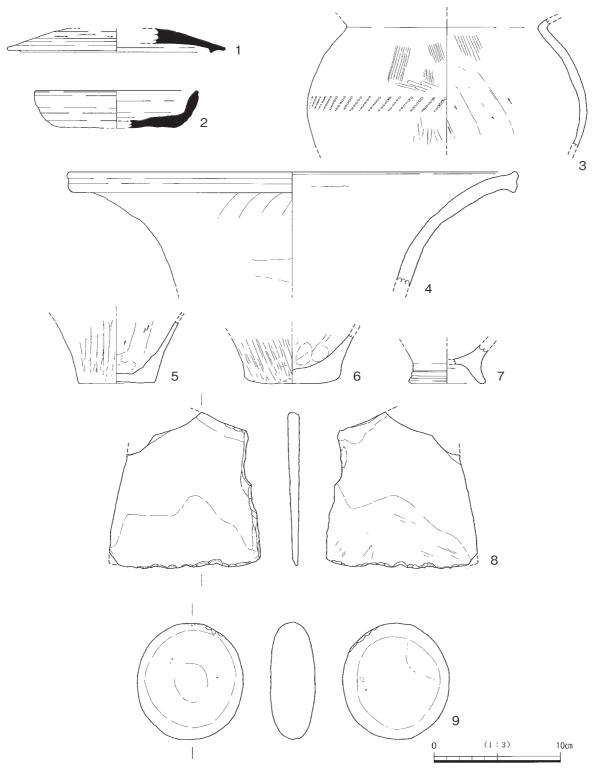
須恵器 第107図1は坏蓋である。中心部が失われているが、輪状つまみが付く出雲6期の資料と考えられる。2は坏身である。口縁部は、わずかに内湾・外傾して立ち上がり、端部が若干すぼまるのみで高台はない。底部に糸切り痕が残ることから、出雲8期の資料と考えられる。

弥生土器 3は甕の頸部~胴部上半で,胴部は強い丸みを帯び,胴部最大径の部分に列点文が1条巡る。内面を見ると,頸部近くまでヘラケズリが伸びるが,頸部にはハケメ調整が施されている。4は 朝顔形に大きく広がる広口壺の口縁部片である。全体的に磨滅が激しく,調整は不明瞭だが,外面は ナデ調整によって仕上げられているようである。また,5・6は甕の底部である。いずれも外面はハケメ,内面はヘラケズリとオサエ調整が認められる。7は中型の甕または壺の脚台部である。脚端部 に凹線文を施す。弥生土器はいずれも中期後葉に位置付けられる。

石器 8は石包丁である。薄く割られた平滑な板石の下半をさらに研磨して薄くした上、端部に細かく剥離を加えて刃部を作り出す。また持ち手側の端部にも研磨痕が認められる。9は上端部に部分的に敲打痕があり、敲石と考えられる。表裏面には平坦面があり磨石のような形状だが、使用痕はない。

(3) C 3区の包含層出土遺物 (第108·109図 図版52~55)

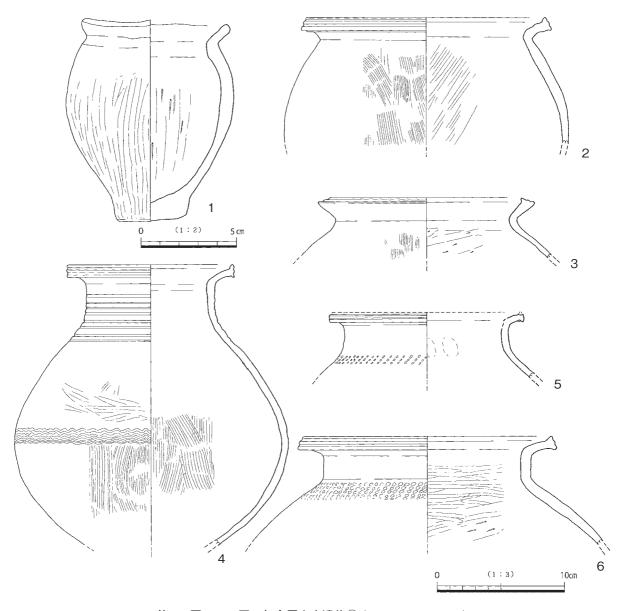
C3区では、竪穴建物SI305などの大型遺構が築かれた調査区西半分の包含層に遺物が集中しており、加工段SX316の斜面下では、地山に近い層中で弥生土器の小規模な集積も認められた。ここでは、土器集積および付近の包含層から出土した土器・石器10点を図化した。



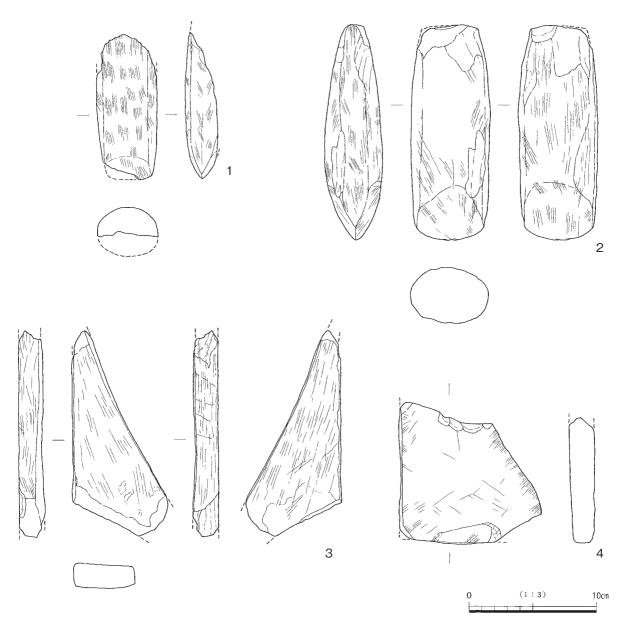
第107回 C2区 包含層出土遺物(1:3)

弥生土器 第108図1は高さ11cmほどのミニチュアの甕で、回転台を用いず手捏ねで製作されている。外面は全面にヘラミガキ、内面はヘラケズリとナデで仕上げる。また外面に炭素を吸着させ黒色化させている。2・3は中型の甕である。2は口縁端部に凹線文が引かれるが、端部の拡張が小さい。一方、3は口縁端部がやや外傾しながらも水平に拡張する。内面調整を見ると、頸部までヘラケズリが達している。4~6は壺である。4はほぼ完形に復元できた小型の広口壺で、口縁端部は上方に拡張し、端部および頸部にしっかりとした凹線文、胴部半ばには櫛描の波状文が引かれる。内面はハケメ調整が主だが、外面は全面にハケメを施した後、上半のみヘラミガキで整える。5・6は4より頸部が短く、口縁端部の拡張も小さい。いずれも頸部が列点文で飾られ、器面は丁寧なナデやヘラミガキで仕上げられる。

土器の特徴を見ると、集積部 $(1 \sim 4)$ には後期初頭の特徴をもつ甕 (3) が含まれ、少なくとも後期初頭まで土器を用いていたことが分かる。ただし、C3 区では集積部以外で後期初頭の特徴をもつ



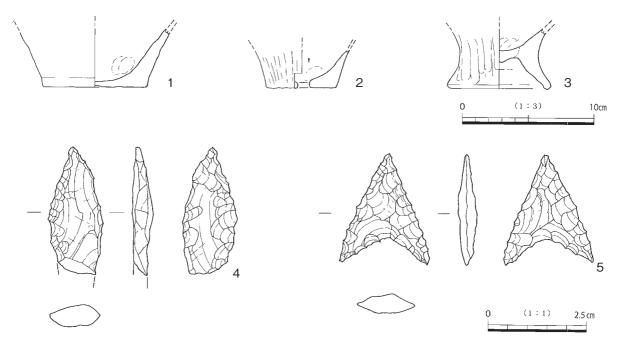
第108図 C3区 包含層出土遺物①(1:3, 1のみ1:2)



第109図 C3区 包含層出土遺物②(1:3)

土器は確認できなかった。

石器 第109図1・2は太型蛤刃石斧である。いずれも頂部に近い斜面の砂質土層中から出土した。 1 は小型品で、欠損部分が多いものの、刃部の稜線がはっきりと作り出されている。刃部先端には、使用痕と考えられる擦痕がわずかに観察できる。2は中型品。基部が部分的に欠損しているがほぼ完形で、表面には製作時または使用時の擦痕が密に残っている。磨製石斧はその形状や大きさ、重量に応じた使い分けが想定されており 5)、1・2はいずれも細木の伐採や枝打ち等に用いられたものと考えられる。3・4は砥石である。3は端部が欠けているものの、三角形をした板状の砥石である。平滑な面は4面だが、実際に砥面として使用されたのは表裏2面である。4も同じく板石を利用した砥石で、砥面は1面である。砥面は非常に平滑で擦痕も少ないことから、あまり使用されないうちに廃棄された可能性が高い。



第110図 С4区 包含層出土遺物(1~3は1:3, 4・5は1:1)

(4) C 4 区の包含層出土遺物 (第110図 図版54)

C4区出土の遺物は、大半が遺構内で出土した上、包含層出土遺物は小片が多く図化が難しかった。 ここでは、図化できた5点を掲載する。

弥生土器 第110図1・2は甕の底部である。1は中~大型の甕の底部と考えられる。2は底面に焼成前穿孔が加えられている。3は台付壺の底部で、おそらく、弥生時代中期後葉に見られる玉葱状の胴部を持つ台付壺に伴うものと考えられる。これら3点は外面をヘラミガキ、内面をナデやオサエ、ヘラケズリによって整える。

石器 4・5は黒曜石製の石鏃である。4は基部を欠くものの、柳葉状の鏃身部を持つ凸基有茎式と 考えらえる。剥片の主剥離面が残っており、わずかな加工で鏃に仕上げている。5は大型の凹基無茎 式鏃である。全体が丁寧な剥離痕で覆われている。

第4項 小結

C丘陵では、丘陵頂部東半部および南斜面の全面に弥生時代中期後葉の集落遺跡が、丘陵頂部の東西に太平洋戦争中の遺構が残ることを確認した。

まず、弥生時代遺跡の状況について、隣接するB丘陵と比較してみる。C丘陵の遺構配置は、丘陵 基部の尾根上に竪穴建物跡と掘立柱建物跡、南斜面に竪穴建物跡や加工段、溝などが築かれるもので、 前節第4項で示したB丘陵の遺構配置と共通していることがわかる(第73図)。次に具体的な遺構の 配置状況をみると、最も大型の竪穴建物SI305を中心とし、丘陵先端部(C4区)から竪穴建物SI304 までの範囲を一群として捉えることができそうである。このうち、近接するため併存したか定かでな い竪穴建物 SI304 と加工段 SX315 を除くと、最大 6 棟の建物が建っていた可能性があり、これも B 丘陵と同じ傾向にある。ただし、 C 丘陵では明確な掘立柱建物跡やピット列のように、他丘陵では見られない特徴がある点には注目したい。

また遺物は、後期初頭のものも若干数含まれるが、大半は中期後葉に位置づけられ、これもB丘陵の遺物と共通する。一方C丘陵に特徴的な要素として、C4区加工段SX320の壁体溝内部から出土した完形の台付鉢(第103図6)、C1区包含層で検出された小型壺(第105図4)のように、当遺跡周辺では類例の少ない形態の弥生土器の存在がある。これらは器形や文様の特徴から広島県北地域の塩町式土器との関連が伺え、当該地域との交流を伺わせる資料である。

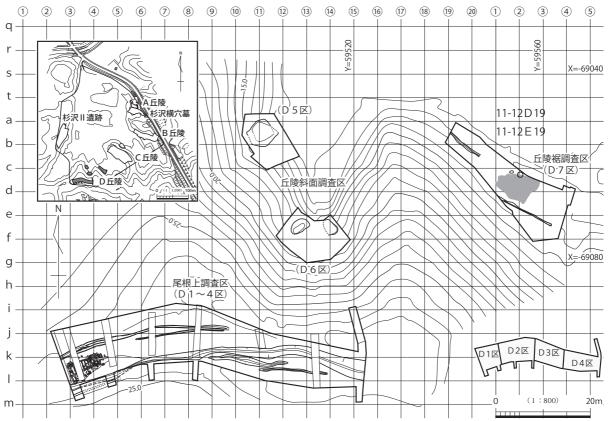
さらに、もう一つの特徴として、戦争遺構であるタコ壺群が残されていたことが挙げられる。太平洋戦争末期、調査地周辺には旧帝国海軍大社基地が置かれ、斐川地域に飛行場をはじめとする軍事関連施設が多数設けられた。戦後、残された資料や元兵士・住民への聞き取り調査により、調査地周辺には兵舎、機銃機群等の施設があったことが分かっている⁶⁾。 C 丘陵で検出されたタコ壺群は、腰掛位置から南西を向くものが多く確認された(第82図)。戦時中を知る方の証言の中には、「敵機が仏経山の西を回って飛んできた」という、昭和20年7月28日に直江を襲った空襲に関するものがある。仏経山は当遺跡の南にそびえており、敵機が飛来する南西の上空を監視するための施設としてタコ壺が設けられたのだろう。同様のタコ壺は、市道杉沢線を挟んで東側に位置する杉沢Ⅲ遺跡でも検出されており、今後も資料増加が期待されるところである。

(景山このみ)

【註】

- 1) 斐川町教育委員会により調査された丘陵頂部と一部の北斜面では、トレンチが埋め戻されないまま10年が 経過していた。そのため、竪穴建物SI301、掘立柱建物SB302等の埋土は風化し失われていた。さらに、遺 構内埋土の堆積状況、床面の状況、当時の出土遺物等に関しては多くが不明である。
- 2) 安来市塩津丘陵に広がる遺跡群に属する塩津山遺跡では、斜面に展開する弥生後~終末期の集落跡が確認されている。類例に挙げた遺構は東側斜面調査区のSIO2・03で、SIO2が弥生時代終末期、SIO3がこれよりわずかに先行する。SIO2利用時には、廃絶されたSIO3がテラス状に残り、SIO2廃絶と同時に埋没している。遺構内埋土はSIO2・03に一連に堆積しており、杉沢遺跡C丘陵の竪穴建物SI304と共通する特徴がある。
- 3) 短頸の甕とも考えたが、頸部が甕と比較してすぼまっている点から壺と判断した。
- 4) 備後北部第Ⅳ様式期に,第103図6と同形の鉢,台付鉢が認められる。 (伊藤実 1992「備後北部」 正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』木耳社)
- 5) 町田章 1997「4 木器の生産」金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』5 雄山閣,30~31頁
- 6) 槙原吉則・岡実智子編著 2012 『川の中の飛行場 西日本の前進基地・新川基地』(増補改訂版) による。

第4節 D丘陵の調査



第111図 杉沢遺跡 D 丘陵調査区全体図 (1:800)

杉沢遺跡D丘陵は、杉沢遺跡の西側にあり、造成予定地の南西の角に位置する。調査前には、尾根 上を幅1mの里道が走り、地元ではこの里道が筑紫街道であったとの伝承が残る。

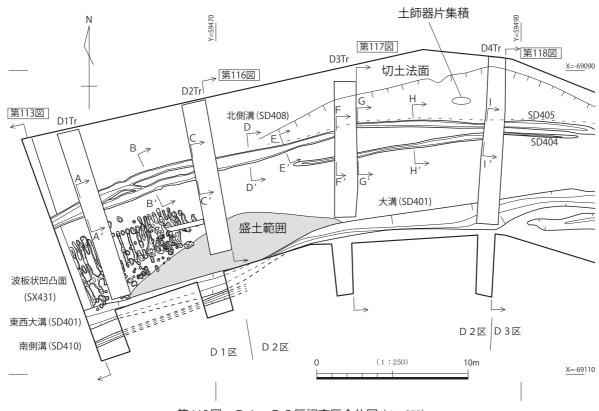
今回の調査では、丘陵の北斜面と尾根上について範囲確認調査を実施した。尾根上からは盛土・切 土を行った造成面が見つかり、また北側斜面からは炭の集積、裾部分の平坦面では土師器等を採取し たため、4ヵ所に調査区を設け発掘調査を行った。調査区は、丘陵尾根部分をD1~D4区、北側斜 面にD5, D6区, 裾部平坦面をD7区とした。調査総面積は1,240㎡である。

調査の結果、両側側溝、波板状凹凸面を備える幅約9mの古代道路遺構、炭焼土坑3基などを検 出した。以下、遺構、遺構出土遺物、包含層出土遺物の順に詳細を述べる。

第1項 遺構

(1)丘陵尾根D1~D4区の遺構(第111図~126図 図版11~14)

両側に側溝を備え、側溝の心々間約9mを測る古代の道路遺構と、尾根上の調査区を貫く上面最大 幅5mの大溝を検出した。

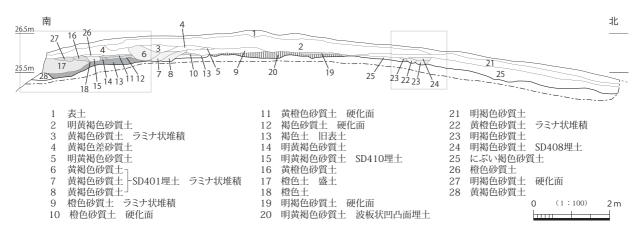


第112図 D1・D2区調査区全体図(1:250)

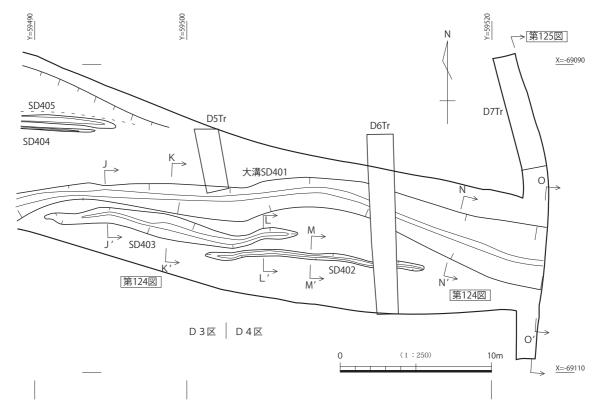
道路遺構(第112~123図 図版11~14)

尾根上のD1区西壁からD3区までの約37mの区間で、東西方向に延びる道路遺構を確認した(第112:114図)。

道路遺構は、東西方向に走る尾根の頂部を切土と盛土によって平坦に造成し、路面の南北に東西方向の側溝SD408・410を掘削している。さらに、D1区の東西幅約10mの範囲で路面上に波板状凹凸面SX431を検出した。道路はD1区・D2区では、西南西 – 東北東方向に走っているが、D2区からD3区北部にある切土法面のあたりから方位を変え、D3・D4区では、ほぼ西北西 – 東南東方向を向いているようである。ただしD3・D4区では、道路側溝を確定できていない。



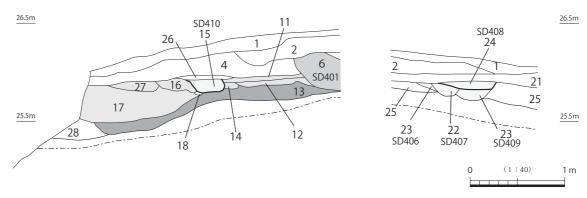
第113図 D1区西壁土層図(1:100)



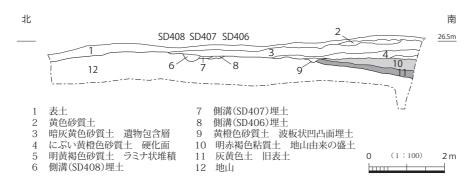
第114図 D3·D4区調査区全体図(1:250)

土層堆積の状況 まず, 道路遺構の造成状況を断面によって述べる。

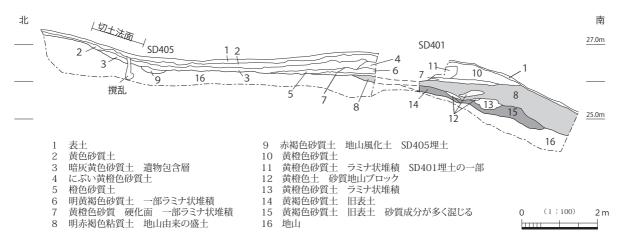
調査区西辺のD1区西壁では、旧地形とそれを埋めた盛土、およびその上に掘削された南北両側溝 SD408・SD410、さらに路面造成の波板状凹凸面 SX431など道路遺構の構成要素を確認できる。南北 両側溝 SD408と SD410は心々間距離が 9 mある。南側溝 SD410の下層には、旧表土層(第13層)と盛 土層(第17層)がある。路面のほぼ中央には、幅約 3 mにわたって波板状凹凸面 SX431の埋土(第20層)が広がっている。この上面には路面と推定される硬化面(第10~12・19・27層)を確認した。また、北 側溝 SD408の下層には 3 条の溝 SD406・407・409があるが、これについては後述する。



第115図 D1区西壁土層図 道路側溝部拡大図



第116図 D2トレンチ東壁土層図(1:100)

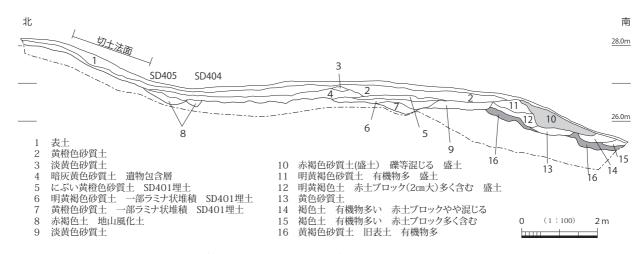


第117図 D3トレンチ東壁・拡張部土層図(1:100)

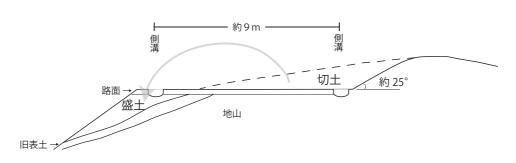
D1区東辺 (D2トレンチ東壁) は、道路造成の盛土が一番厚い部分であり、盛土・旧表土の状態が明確にわかる (第116図)。地山の上に厚さ20cmの旧表土 (第11層) があり、その上に明赤褐色粘質土の盛土 (第10層) を積んでいる。トレンチ南端での厚さは約30cmある。盛土範囲の北辺、地山との境界部には、波板状凹凸面と同じ埋土を積んで路盤を強化している (第9層)。第6~8層は北側溝の断面であり、溝SD406~408に対応している。

D2区中央部 (D3トレンチ東壁と南拡張部)では、盛土部分と北側の切土法面をつなぐ形で堆積状況を確認した (第117図)。北側斜面は切通し面でその裾部に北側溝SD405が通る。南側は、旧表土 (第14・15層) 上に地山赤土の混じる盛土 (第8・12・13層) が積まれ谷部へ造成されている。第7層は砂質土で、非常に固く締まっていることから、路面と想定されるが、北側溝SD405から南へ9mの地点では南側溝を検出していない。

D3区東辺 (D4トレンチ東壁) でも、北側斜面は切通し面で、南側は盛土により造成されている (第118図)。北側切土面の裾には、北側側溝 2条 (SD405・404) が並走しているが、対応する南側側溝は第10層盛土上にあると想定されたが確認できなかった。



第118図 D4トレンチ東壁土層図(1:100)



第119図 道路遺構 切土・盛土工法模式図

以上の状況を踏まえて、以下、①道路の造成、②道路側溝、③波板状凹凸面にわけて述べる。

①道路の造成 杉沢遺跡では道路造成にあたり、切土・盛土工法が用いられている(第119図)。

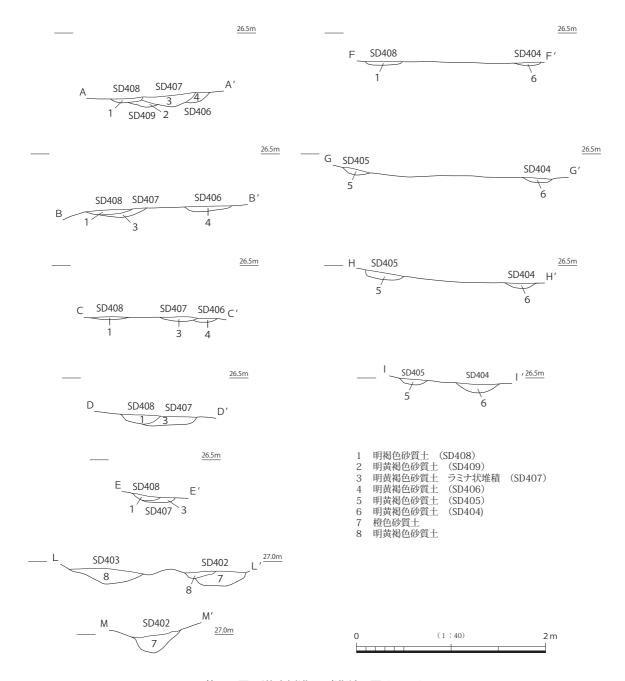
切土部分はD2・D3区の北側にあり、東西30mに及んでいる。法面の角度は25°前後で赤土の地山を掘削している。切土法面の裾部には法面排水及び道路北側の境を示すためと考えられる北側溝 SD404・SD405が掘られている。D3トレンチの掘削により不明な部分はあるが、SD405とSD408は一連となる可能性がある。なお、切土法面では、土師器片の集積を確認した(第112図)。

盛土範囲については、D1・D2区の南側に広がり、調査区内で確認できる規模は東西15m、南北3mであり、切土部の赤土と同様の土を盛り造成している(第117・118図)。盛土上面は固く締まっており、路面形成の際に締固めたものと考えられる。

D1区南側拡張部では路面と想定される硬化面を検出した。層の厚さは約10cmで、砂質土と地山 赤土を混合し締固めたものと考えられる。

側溝については、D1区では複数の北側溝(SD406~SD409)と、1本の南側溝(SD410)を検出した。北側溝はいずれも深さは<math>10cm~20cmと浅く、重複関係にある。それぞれの側溝が造られた時期は、 年代を示す遺物がないため不明であるが、道路使用時期内と考えられる。

南側溝はD1区南側拡張部の2か所のトレンチから検出し、トレンチ間隔が5m離れているが、位置等から同一のものと判断した。



第120図 道路側溝及び溝断面図(1:40)

②道路側溝 (第121図) $D1 \sim D4$ 区では、複数の溝を確認した。このうち $SD404 \sim SD410$ は道路遺構の側溝と考えられる。勾配は、すべて東が高く西へ下がる。

北側溝 SD404 D $2 \sim$ D 3 区にあり、切土裾の地山に掘られ、幅0.4 m、長さは19 m。D 4 トレンチ内で曲がり、SD405 と並走する。

北側溝 SD405 D $2 \sim$ D 3 区にあり、切土裾の地山に掘られ、幅0.5 m、長さは17 m。D 3 トレンチ内で途切れているが、SD408へ繋がる可能性がある。

北側溝 SD406 D1区にあり、D2トレンチ内で収束する。重複関係にあるSD407・SD408よりも古く、初期の側溝と考えられる。延長線上にSD404がありこれに繋がる可能性が高い。

北側溝 SD407 D 1 区 \sim 2 区にあり、SD408 と重複しそれより古い。幅 $0.4\,\mathrm{m}$ 、調査区内での長さ約 $18\,\mathrm{m}$ を確認した。SD406 \sim 409 で唯一水性堆積の埋土をもつ。直線でD 2 区の切土面へ向かうが、D 3 トレンチ西側でSD408 に重なる。

北側溝SD408 D1区 \sim 2区にあり、幅 $0.5\sim0.7\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.2\,\mathrm{m}$ 、 $SD406\sim SD409\,\mathrm{m}$ のいずれより新しい。D3トレンチによって分断されているが $SD405\,\mathrm{m}$ につながる可能性がある。北側 \sim 1膨らみ、やや蛇行しているなど、他の北側溝と形状が異なる。

北側溝 SD409 D1区にあるが、断面B-B'の東側で SD408に収束する。幅、深さともに不明。

北側溝SD406~409は、古い順に



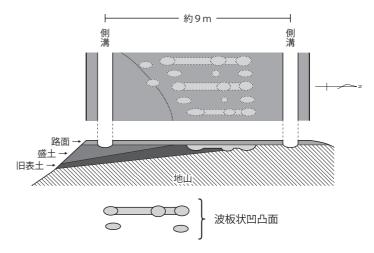
第121図 D1区 道路側溝(西から)

南側溝 SD410 D1区にあり、拡張トレンチ2ヵ所で検出し、南側側溝に想定される。幅 $0.3\,\mathrm{m}$ 、深 さ $0.2\,\mathrm{m}$ で盛土上の硬化面に掘り込まれている。埋土は砂質土で締まりはない。D2区では延長上を 調査したが確認できなかった。

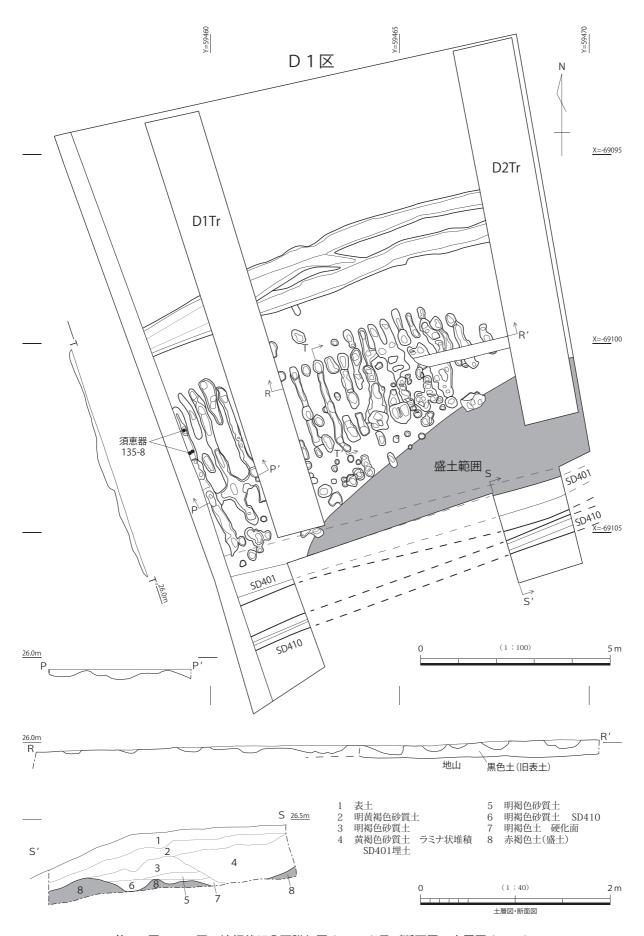
③波板状凹凸面 SX431 (第122・123図) D1区の路面中央部にあり、西から約10mの範囲で検出した。道路の主軸と直交方向に浅い溝状の遺構が連なる。深さは一定ではなく、楕円形のピットを浅く細長い溝で連結したような形で掘削されている。D1区西側の一部では、道路主軸方向へも連結させているところがある。

埋土は, きめ細かい黄色の砂質土 で, 灰色のシルト成分と酸化した鉄分 がマーブル状に混じる。

配置をみると,西側は整然とピット と波板状凹凸面が並んでいるのに対 し,東側は,施工範囲が縮小するのに あわせピットの配列が乱れており,断 面の形状にも違いがある。



第122図 波板状凹凸面模式図



第123図 D1区 波板状凹凸面詳細図(1:100)及び断面図・土層図(1:40)

溝 (第120図)

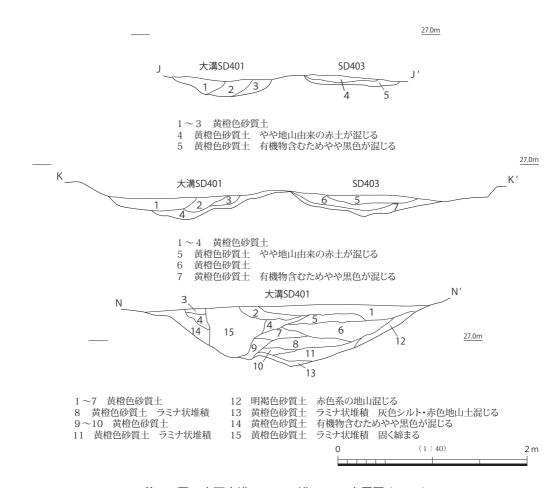
道路遺構に伴わない東西方向の溝が2条ある。

溝SD402 $D3\sim D4$ 区にあり、地山に掘られ、他の溝とは断面形状が異なり深い。上面 $0.5\,\mathrm{m}$ 、下幅 $0.2\,\mathrm{m}$ 、深さは $0.3\,\mathrm{m}$ あり、延長は $15\,\mathrm{m}$ である。前述の道路遺構とは時期の異なる道路側溝である可能性がある。

溝SD403 D 3 区にあり、地山に掘られ、幅 $0.6\,\mathrm{m}$ 、延長は約 $17\,\mathrm{m}$ で深さは浅い。蛇行していることから、自然流路の可能性もある。

東西大溝 SD401 (第124~127図 図版14)

D4区からD1区の調査区を東から西へ貫く東西大溝SD401は、道路遺構と重複関係にあり、D4区東壁から北西へ向かい、約15m先より西へ向きを変え、尾根の南側をD1区西壁まで途切れることなく続いている。上流部となる東端では地表から深さ0.8m、幅4.0mと大規模であるが、西端では深さ0.4m、幅1.6mである。勾配は東から西へ下がっており、完掘後の雨天時には、雨水が滞りなく流れた。D4区東壁付近は何度か掘り起こされ、上流(東側)からの勾配を確保するため、深く広く掘り込まれた形跡がある。溝底部の埋土は、地下水の影響か青灰色シルト質土が非常に固く締まっている。その上部の埋土は、砂粒の異なる層がレンズ状に堆積をしている(ラミナ状堆積)。放射性炭



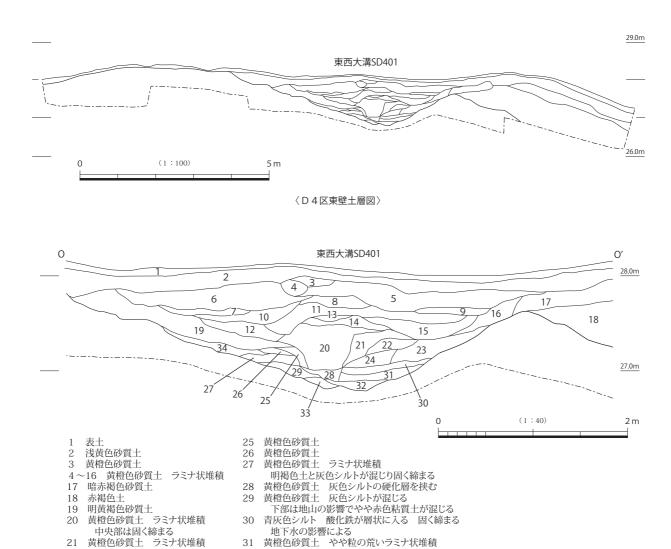
第124図 東西大溝 SD401・溝 SD403 土層図 (1:40)

黄橙色砂質土

黄橙色砂質土 ラミナ状堆積

23 明褐色砂質土

22



〈大溝部分土層拡大図〉

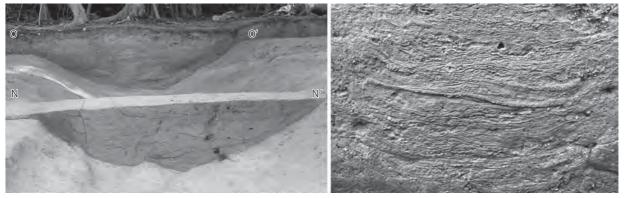
第125図 D4区東壁土層図(上)・拡大図(下)

灰色シルト 固く締まる 黄橙色砂質土 灰色シルトが混じる

32

33

明褐色砂質土

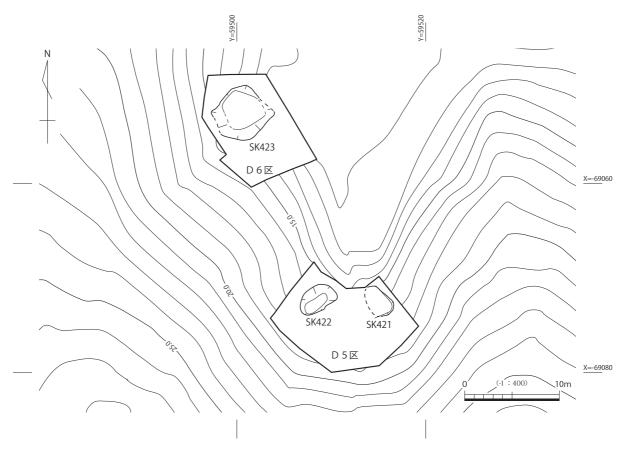


第126図 東西大溝 SD401 左:土層写真(東から) 右:ラミナ状堆積(20層)

素年代測定では、溝底部の有機物より11世紀中頃~13世紀初頭と示され(第7章第1節)、路面との重複の関係から、道路廃絶後に造られたと考えられる。

(2) 丘陵斜面D5区・D6区の遺構(第127~130図)

丘陵北斜面の谷部の奥にD 5 区 (90㎡),その北西にD 6 区 (120㎡) の 2 つの調査区を設けた。D 5 区から炭焼土坑 2 基 (SK421・422),D 6 区から伏せ焼きによる炭焼土坑 1 基 (SK423) を確認した。土坑の底面および壁面が被熱し赤色化した痕跡があるものや,埋土中に多量の炭を含むことから,炭焼土坑と推測できる。



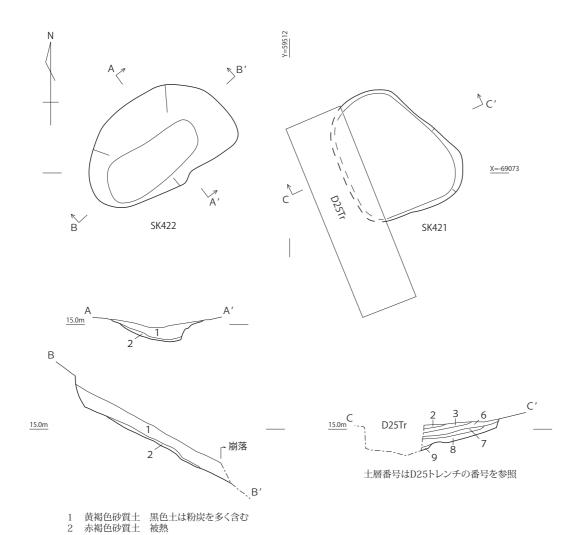
第127図 D5・D6区調査区全体図(1:400)

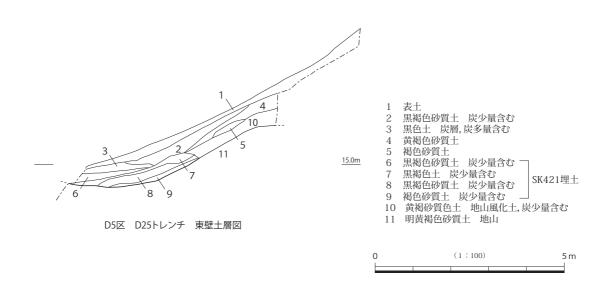
炭焼土坑 SK421 (第128図)

D5区の土坑2基のうち東側のもの。標高約15m~16mに位置する。掘方の平面形は楕円形と推定できる。長軸は等高線に直交するよう掘られた炭焼土坑である。土坑の規模は、推定で奥行き3.5m,幅約3m,最深部での深さ約0.7mである。埋土には微細な木炭片や粉炭を多量に含んでおり、特に8層黒褐色砂質土中には5cm大の木炭片を多量に含んでいた。土坑底面の一部が被熱し赤色化していた。

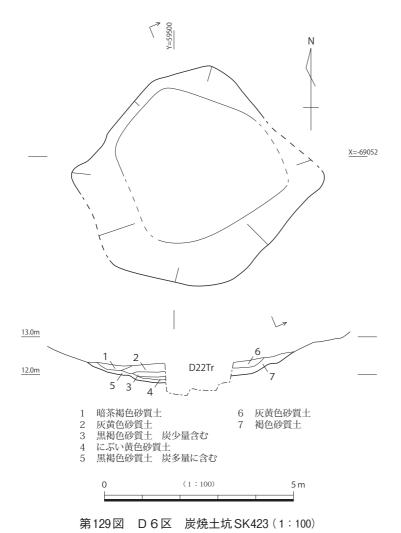
炭焼土坑 SK422 (第128図)

D5区の土坑2基のうち西側で標高約 $13.5\sim16$ mに位置する。掘方の平面形は楕円形である。 SK421と同様に長軸は等高線に直交する。土坑の規模は奥行き4m、幅が2.5m、最深部で0.4mであ





第128図 D5区の遺構(1:100)





第130図 炭焼土坑 SK423調査状況 (南東から)

る。埋土中には粉炭を多量に含んで いた。土坑底面は被熱しやや赤色化 していた。

炭焼土坑 SK423 (第129図)

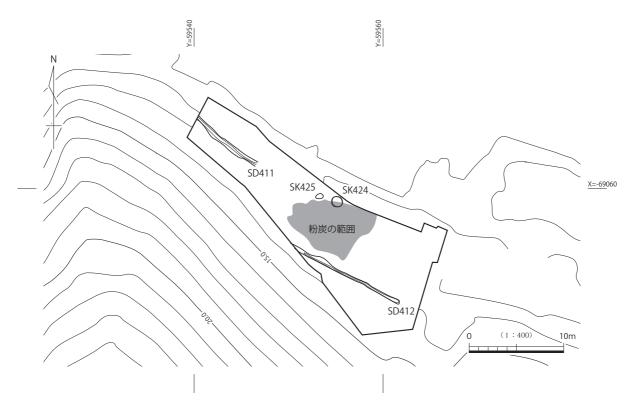
D6区北部にある土坑。標高約12~14mに位置する。不整な方形平面で一辺5m~5.5m、最深部で深さ0.5mである。平面形が歪であるのは急斜面で、調査時にすでに遺構が流出していたためであると考える。土坑埋土の最下層(5層)に微細な炭化物の堆積がみられ、その上に黄色砂質土(4層)が被っており、3層は微細な炭化物を含んでいる。

D5区・D6区の炭焼土坑からの出土遺物はなく、時期の特定に至らなかった。そのため、D5区D25トレンチとD6区D22トレンチから炭化物を採取し放射性炭素年代測定を行った。その結果、D5区D25トレンチ3層が11世紀中頃~12世紀中頃、6区D22トレンチ5層が9世紀後半~10世紀後半、3層は11世紀中頃~12世紀初頭の年代値を示した(第7章第1節)。

これらのことから、炭焼土坑が機 能した時期は、平安時代の可能性が 高いと考えられる。

(3)丘陵裾部D7区の遺構(第131~134図)

D7区はD丘陵北側斜面裾部で5区よりさらに東に位置し、標高約11.5~14.5mに290㎡の調査区を設けた。調査地は東から西に緩やかに下がる平場であり、遺構は溝SD411、SD412の2条と、土坑 SK424、SK435の2基、さらに調査区中央で粉炭面の広がりを確認した。第20図D33トレンチ東壁土層図 (第1章第1節26頁) によると、4~7層までは遺物が少量出土するものの遺構は見つからなかった。



第131図 D7区調査区全体図(1:400)



第132図 溝SD412調査状況(北西から)

8層は粉炭の層が広がっており、10層は8層より炭化物の量が少ない状況であり、ともに上面で遺構を確認した。それ以下では炭化物を含んでいる層もあるが、遺構・遺物の確認はできなかった。

溝SD411は調査区の西端に位置し、長さ8m、幅約0.4~0.6m、最深部で0.4mを測る。埋土中から古墳時代中期の土師器が1点出土している。

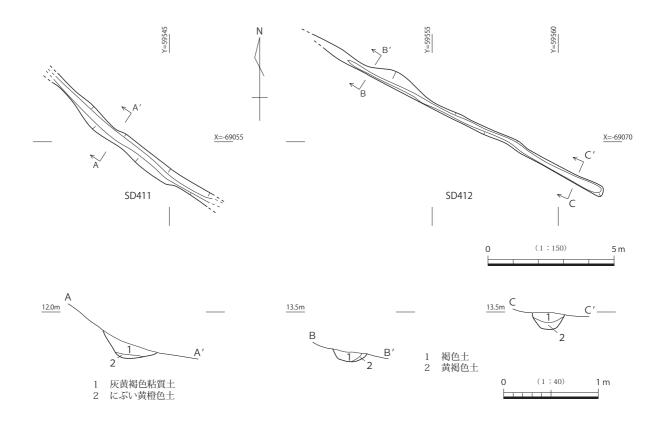
溝SD412は長さ13 m、幅約0.3 m、最深部で0.5 mを測る。 溝の中には土師器の細片と $3\sim5$ mm大の炭の細片を含んでいた。

土坑SK424の平面形はほぼ正円で、直径 $1.1\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.15\,\mathrm{m}$ を測る。遺構埋土中に $1\sim2\,\mathrm{cm}$ 大の炭細片が混入していた。

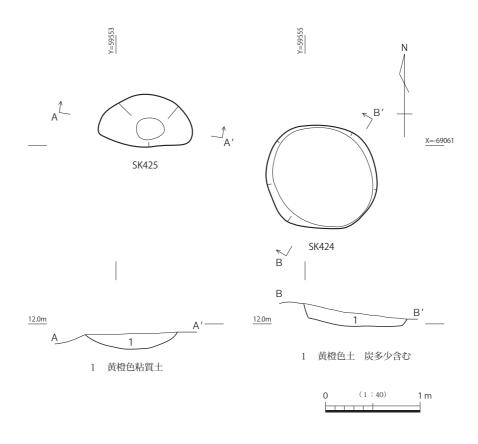
土坑SK425の平面形は楕円形で東西軸1.0 m, 南北幅0.6

m, 深さ0.2 mを測る。SK424と同様に遺構埋土中に1~2 cm大の炭細片が混入していた。

調査区のほぼ中央で確認した粉炭の広がりは、東西約9m、南北約6mで、中心部で0.2m程度の厚みがある。出土遺物がなく、時期の特定には至らなかったので、粉炭層から炭化物を採取し放射性炭素年代測定を行った結果、11世紀前半から12世紀の年代値が得られた(第7章第1節参照)。



第133図 D7区 溝SD411・SD412(1:150) 断面図(1:40)



第134図 D7区 土坑SK424・SK425 (1:40)

第2項 遺構出土遺物

(1)丘陵尾根D1~D4区の遺構出土遺物(第135図 図版67·68)

尾根上の調査区において、土地造成、道路構築に関する遺構から出土した遺物は少なく、図化できたのはいずれも小片である。以下、道路造成後の地山上面、盛土内、そして波板状凹凸面の順に、出土した遺物の概要を示す。なお、側溝からは遺物は出土しなかった。

<切土法面>

尾根頂部に平坦面を造成するために切り崩された切土法面で、土師器の破片が集積した状態で出土 した。破片は極めて細かく、全形を復元できたものはなかったが、坏と皿の細片で、口縁部の形態か ら少なくとも10個体以上が集積されていたと考えられる。

坏は3個体を図示した(1~3)。いずれも口縁部が外反ないし外傾して立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。内外面ともナデ調整でヘラミガキは観察できない。全面に赤色顔料が塗られている。

5は1~4と同じく切土斜面から出土した須恵器の壺である。全形は不明だが、くびれた頸部と丸 く膨らんだ胴部をもつ直口壺だろう。両面ともに回転ナデで仕上げられている。出雲5期以降の資料 と考えられる。

<盛土>

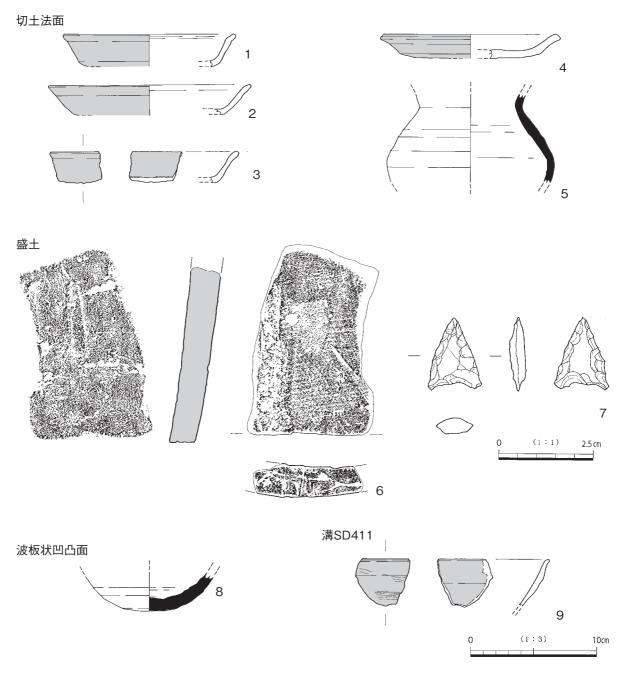
6はD3トレンチ南拡張部で、崩落した盛土とともに出土した平瓦である。広端部の破片で、凸面は格子目タタキののちに補足的なタタキとナデ、凹面は広端部側にケズリが施される。また凹面には模骨痕、広端部にはワラ座痕が残る。隣接する三井Ⅱ遺跡の瓦類と同様の特徴を示すことから、7世紀末~8世紀初頭の資料と考えられる(巻末付論)。

7は盛土直上で出土した石鏃である。石材は安山岩で、凹基無茎式である。弥生時代の石鏃と考えられ、土地造成の際に混入したものであろう。

<波板状凹凸面>

(2)丘陵裾D7区の遺構出土遺物(第135図 図版68)

D7区の遺構からはまとまった遺物の出土はなかったが、1点を図化した。9は溝SD411から出土した土師器の椀と考えられる口縁部片である。器壁は直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部のみ



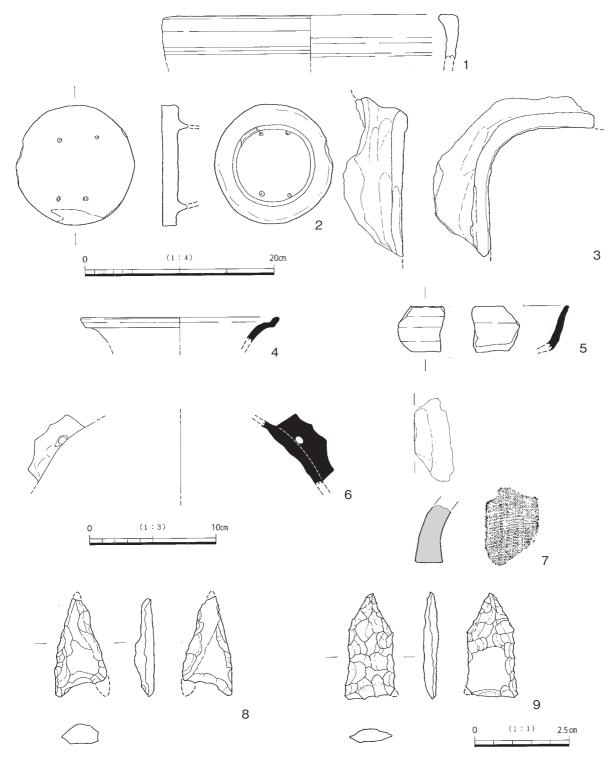
第135図 D丘陵 遺構出土遺物(1:3, 7のみ1:1)

外側に肥厚する。内面はナデ、外面はハケメで調整し、その後に赤色顔料で彩色する。古墳時代中期 前半頃の土師器と考えられる。

第3項 包含層出土遺物

(1)丘陵尾根D1~D4区の包含層出土遺物(第136図 図版67·68)

D1~D4区の遺構に伴わない遺物は、表土層とその下の黄色砂質土層、および旧表土中に含まれていた。丘陵尾根調査区では、包含層出土遺物についても道路遺構の造成・機能時期に密接にかかわ



第136図 D1~D4区 包含層出土遺物(1~3は1:4, 4~7は1:3, 8・9は1:1)

る可能性があるため、出土層位ごとにまとめて報告する。

<麦土層> 古墳時代終末期から近世までの遺物が出土した。須恵器片のような古相の遺物は小片で 残存状態が悪く図化できなかったため、中世以降の遺物 3 点を図化している。

土師質土器 第136図1は火鉢と考えられる口縁部片,2は焼台で,円孔には針金片が残存している。 正確な時期は不明だが,1,2については近世以降の遺物と推測される。また,3は移動式竈の焚口 片で、庇の有無は不明だが、胎土は密度が高く、中世土師器とは異なるものである。

<黄色砂質土層> 古墳時代終末期から古代にかけての須恵器片が出土している。

須恵器 長頸壺(4)と坏(5)がある。4は外反する口縁部で、端部は上方に屈折する。5は、坏体部の小片である。口縁部の特徴から、古墳時代終末期から飛鳥時代の、大谷編年出雲7期と考えられる。 **〈旧表土〉** 弥生時代中期から古代の土器、土製品、石器が出土した。

須恵器 第136図6は双耳壺の肩部片である。耳は山形で、中央に円孔が穿たれる。9世紀と考えられる。

石器 8,9は安山岩製の石鏃である。8は凹基無茎式,9は平基無茎式で平面形が五角形を呈する。 また,図化はしていないが,旧表土からは弥生土器片も出土しており,他丘陵と同様に丘陵上に弥生 時代の遺構が存在していたと推定される。

瓦 7は丸瓦の小片である。凸面は磨滅により調整は不明だが、凹面には布目が残る。側面はヘラケズリ調整、凹面に面取りの痕跡はない。南方の三井Ⅱ遺跡の瓦窯では瓦が多数出土していることから、この瓦も同時期(7世紀末~8世紀初頭)のものと考えられる。

(2) 丘陵斜面 D 5 · D 6 区の包含層出土遺物 (第137図 図版67 · 68)

丘陵斜面のD5・D6区は、急な斜面ということもあって出土遺物は極めて少ない。弥生時代中期から奈良時代前半までの土器、土製品、石器が中心である。ここでは弥生時代の遺物2点と奈良時代の遺物1点を図化した。

弥生土器 2は広口壺である。頸部までしか確認できなかったが、口縁部はほぼ完形に復元できる。 小型品で、頸部外面には凹線とそれを軸とした有軸羽状文が施される。

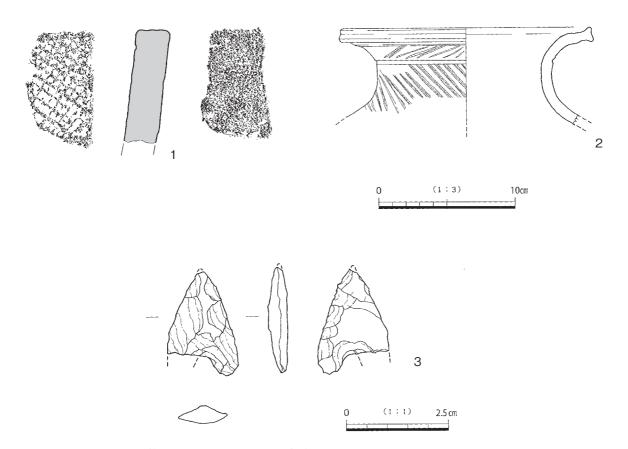
石器 3は安山岩製の石鏃で、凹基無茎式である。杉沢遺跡で出土した石鏃の中では、大型の部類に入る。

瓦 1は平瓦の小片で、狭端部が残る。凸面は格子タタキ、凹面は不鮮明ながら布目が残る。

(3)丘陵裾部D7区の包含層出土遺物(第138図 図版67・68)

丘陵裾部D7区では、弥生時代から奈良時代の遺物が出土した。その中心は古墳時代後半から奈良時代である。ここでは、古墳時代以降の土師器6点、須恵器5点に加え、弥生時代の石器1点を図化した。

土師器 $1 \sim 4$ は土師器の甕である。いずれも残存状況が悪く,胴部下半まで残るものはない。 1 、 3 は口縁部が外湾するのが特徴である。 1 は胴部上半まで残っており、長胴の甕に復元できそうであ



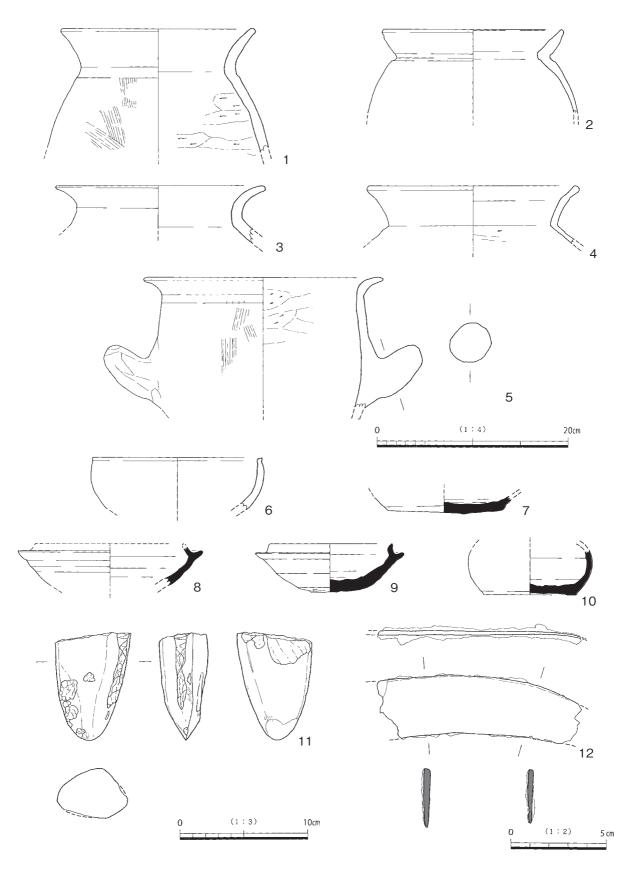
第137図 D5・D6区 包含層出土遺物(1:3, 3のみ1:1)

る。2は短い口縁部が外側に肥厚し、頸部には強いナデが施される。一方、4は、口縁部が肥厚せず、直線的に立ち上がる。いずれも摩滅が顕著だが、外面はハケメ、内面はヘラケズリによって調整されている。5は甑である。把手を含む上半部が復元できた。6は土師器の椀で、器壁は緩やかに内湾し、口縁端部がわずかに肥厚する。いずれも古墳時代後期に属するものと考えられる。

須恵器 7~10は須恵器である。7は坏または皿の底部で、底部は回転へラ切りによって切り離され、高台は付かない。8・9は坏身である。8は口縁端部と底面を欠くが、比較的長いかえりが内傾・外反して立ち上がる上、口径は12cm程度で小型化の様相が見られない。内外面ともに回転ナデ調整である。完形の9は口径9.5cmの小型品で、底部外面のみ回転へラケズリ、そのほかは回転ナデを施す。また10は小型の壺とみられる底部片で、底部外面には粗いヘラケズリが施される。須恵器の年代は、8が出雲4期、9が出雲6a期で土師器の年代と整合する。また、7・10は詳しい時期の特定が難しいが、出雲7期以降のものと考えられる。

石器 11 は磨製石斧の刃部である。先端は丁寧に研磨され、部分的に使用痕と考えられる擦痕が認められる。弥生時代のものだろう。

鉄製品 12は鉄鎌である。先端部および基部を欠くが、本来は刃渡り10cm前後の曲刃の鎌であると考えられる。錆化が進んでおり、表面が部分的に剥落しているが、断面形は逆三角形で、A丘陵北斜面出土の鉄鎌(第32図-5)より鋭い刃部が形成されている。包含層出土のため正確な時期は不明だが、同一層からは古墳時代後期から奈良時代前半期の遺物が出土した。



第138図 D7区 包含層出土遺物(1~4は1:4,6~11は1:3,12は1:2)

第4項 小結

D丘陵の調査では、第1項にある道路遺構について、①幅9mの直進性を意識した大規模な造成工事、②波板状凹凸面、③両側側溝、④出土遺物、⑤放射性炭素年代測定結果などから、奈良時代の官道すなわち山陰道、『出雲国風土記』の道程条に記された正西道と考えられる。

上記の道路遺構の特徴についてそれぞれ以下に記す。

①道路造成の特徴は直進性・水平性を意識しながら幅を確保し、尾根上という限られた空間を利用し、切土と盛土を組み合わせた大規模なものである。側溝の心々間は約9mあり、道路幅員を表す。路面は固く締まった砂質土である。盛土と地山の間に軟弱な旧表土層があるが、造成の際はそれを除去せずに盛土をしている(第119図)。

②波板状凹凸面は、水分を含むとぬかるむ旧表土層に対する路盤改良の目的で施工されたと考える。道路の主軸に対し直交方向に溝を掘り、砂質土を充填し、路盤の補強を図り、かつ水分を吸収させたと考えられる。

また、波板状凹凸面の溝は軟弱な旧表土層部分だけではなく、安定した地山部分と硬く締まった盛土部分の一部にも掘り込まれていることから、地盤改良の工法として、ある程度広い面積に施工したと考えられる(第119図)。この波板状凹凸面の由来については、牛馬歩行説、枕木説などいくつかの説があるが、杉沢遺跡においては、路盤の補修強化によるものと考えられる。

③南北両側の側溝は浅いながらも、見つかった範囲内では連続しており、また、埋土はラミナ状に 堆積することから、幅員を示すだけではなく路面の排水機能を持つことを確認した。

④出土遺物では、同一個体の須恵器片3点が、波板状凹凸面の溝部分で地山の底にめり込んだ状態で見つかった(図版13)。この3点は聴または小型の壺の底部で、出雲5期以降のものと考えられ、何らかの理由で混入したものが、転圧の際にめり込んだ可能性がある。なお、波板状凹凸面の調査例の中には、土器片や小石などを埋土に意図的に混ぜ込む例もあるが、杉沢遺跡においては、土器片の出土が1ヵ所にとどまるため、意図的なものかどうかは確認できなかった。また、切土法面から出土した土師器片の年代は、古墳時代終末期から奈良時代前半ごろと考えられる。

⑤放射性炭素年代測定結果は、第7章第1節で触れるが、上記年代と矛盾のない結果である。 以上の特徴は、奈良時代の官道の要件を満たしており、今回確認した道路遺構を山陰道の一部と考え た根拠である。

道路遺構と重複関係にある大溝SD401は大型の水路だが、なぜ尾根上に造られたかは不明である。 単なる排水目的ではなく、農業用水、かんな流しの方法を用いた土砂運搬などが想像できる。少なく とも3回以上掘り返した形跡があることから、水とともに大量の土砂が運ばれたと推測できる。最終 的に溝が埋まり廃絶された後に、幅は狭くなるが再び道路として利用されたと考えられる。

D5・D6区の3基の土坑は伏せ焼きによる炭焼き土坑である。遺構から出土した遺物がほとんどなく時期が特定できなかったので、放射性炭素年代測定を行った結果、D5区SK421の3層からは11世紀中頃~12世紀中頃の年代値をえた。また、D6区SK423のように平面規模が5mを超える大

型炭焼土坑は、おおむね11世紀から16世紀の時期におさまるという(鳥取県埋蔵文化財センター2013)。 SK421でも、年代測定の結果は、5層が9世紀後半~10世紀後半、3層が11世紀中頃~12世紀初頭の値となり、この年代観と一致する。

さらにSK423は土坑の北と南では炭の堆積状況や覆土の堆積状況に違いが見られることから、複数回操業するために造り替えが行われた可能性が考えられる。

D7区は東から西に緩やかに下る平地である。溝2条,土坑2基の遺構を検出したが,遺跡の性格は明らかにできなかった。

遺構からの出土遺物はSK411埋土の古墳時代中期の土師器 1 点のみであり、時期の特定は難しいが、遺構面直上からは、弥生時代から奈良時代の遺物が出土し、その大部分は古墳時代後期のものであった。したがって遺構面が形成された時期は古墳時代後期以降の可能性が高いと考えられる。

また、調査区中央の粉炭層については、放射線炭素年代測定の結果、11世紀前半から12世紀中頃の年代値であった。D5・D6区の炭焼きの操業年代とほぼ一致することから、D7区に炭の保管場所があった可能性が考えられる。

(景山真二・江角 健・景山このみ)

【参考文献】

古代交通研究会 2000 『古代交通研究』 第10号

島根県教育委員会 2000『下山遺跡(1)―製鉄関連遺構の調査―』志津見ダム建設予定地埋蔵文化財発掘調査 報告書 7

島根県教育委員会 2009『大志戸Ⅱ鈩跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 17

鳥取県埋蔵文化財センター 2013『下市築地ノ峯東通第2遺跡』一般国道9号(中山名和道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V, 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書49

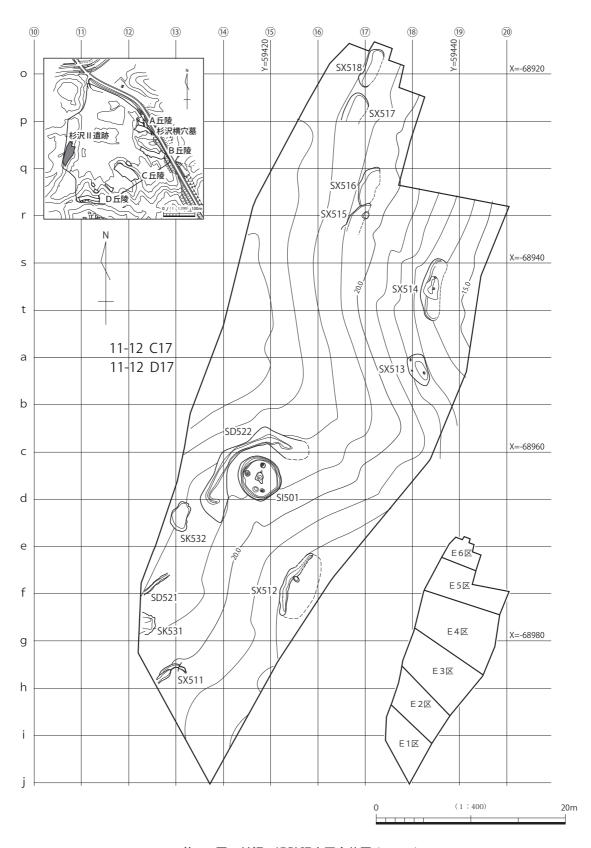
東出雲町教育委員会 2008『古城山遺跡』

斐川町教育委員会 2004『八斗蒔 I 遺跡発掘調査報告書』

福岡市教育委員会 2002『高畑遺跡-第18次調査-』

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006 『渋ヶ谷遺跡群』

第5章 杉沢Ⅱ遺跡の調査



第139図 杉沢Ⅱ遺跡調査区全体図(1:400)

杉沢Ⅱ遺跡は、調査地西側に位置し、南北方向に伸びる舌状丘陵の東側斜面に広がる遺跡である。 試掘調査の結果、東側斜面の約1,450㎡に調査区を設け、発掘調査を実施した。調査区は南端をE1 区、北端をE6区としている。調査の結果、弥生時代の竪穴建物跡、加工段、溝、土坑が合わせて 12基、古墳時代の加工段が1基見つかった。基本層序は、表土-黄褐色土-灰色土-地山の順である。 遺物包含層は黄褐色土、灰色土で、灰色土は丘陵中腹以下に認められる土層である。

第1節 遺構

(1) E1区の遺構(第140·141図 図版26)

調査区南端に位置するE1区では、加工段1基、溝1条、土坑1基を確認した。いずれも標高20~22mに位置する。

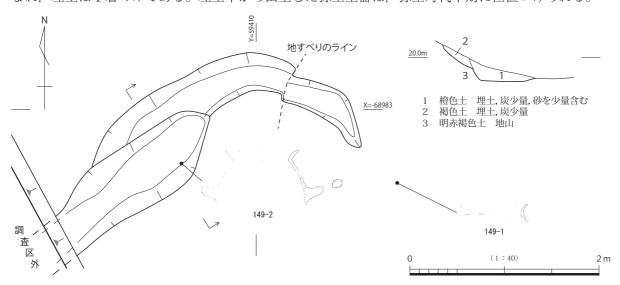
加工段SX511 (第140図 図版26)

E1区南端に位置する。遺構の南端部は調査区外に延びているため全体の平面形は不明だが、南北方向に延びる緩やかなコの字状の溝と平坦面からなる加工段である。長軸約3.5 m, 短軸約2 m, 壁体の高さは約20 cmである。壁体沿いの溝は幅50~70 cmを測り、2本が重複して加工段を形成している。柱穴は確認できなかった。なお、遺構東端では小規模な地滑りが生じている。

埋土は2層である。2層は古い溝、1層は新しい溝の埋土である。このうち、1層底面で1~2個体の土師器片が集積して出土した。また、平坦面からも土師器、須恵器の小片が出土しているが、いずれも摩滅が激しい。遺物の年代から、加工段SX511は古墳時代後期の遺構と考えられる。

溝SD521 (第141図)

E1区西端の標高22mの位置にある。西端は調査区外、東端は試掘トレンチの中に延びており、全形は把握できない。規模は、長軸2.7m、幅30~50cmで深さは約10cmほどである。地山に掘りこまれ、埋土は1層のみである。埋土中から出土した弥生土器は、弥生時代中期に位置づけられる。

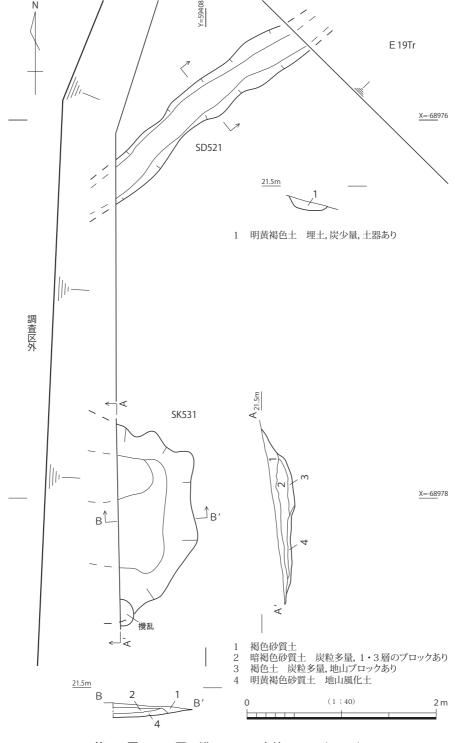


第140図 E1区 加工段SX511(1:40)

土坑 SK531 (第141図)

E1区南西隅で見つかった性格不明の土坑である。遺構の西半分が調査区外に延びているため全体の形状は不明だが、いびつな円形と推定される。南北に約2m、東西に約1.9mの範囲に広がる。深さは最深部で約30cmあり、埋土は3層に分層できる。

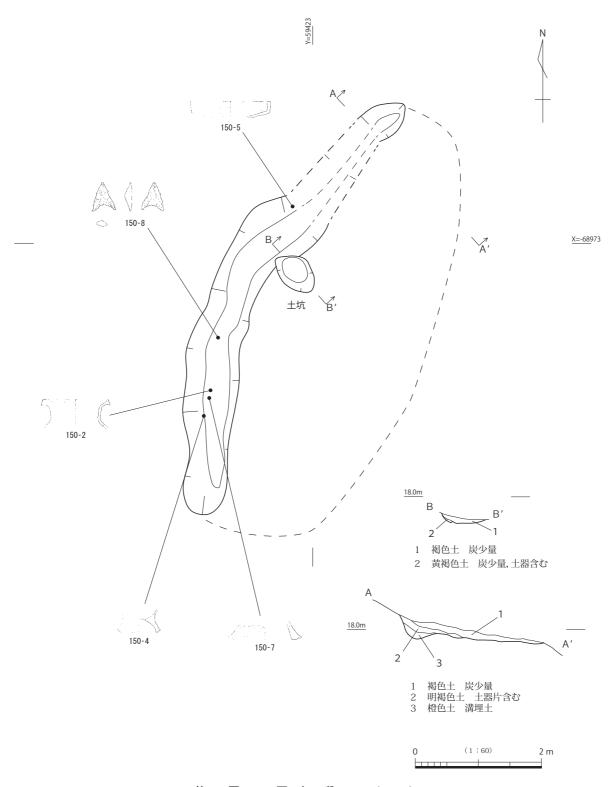
1・2層から弥生土器の甕と考えられる小片が出土している。また2層には打欠石錘も含まれていた。出土遺物から、弥生時代中期の遺構と考えられる。



第141図 E1区 溝SD521・土坑SK531(1:40)

(2) E 2 区の遺構 (第142·143図 図版26)

E2区は、ほぼ真東に面した斜面である。ここでは、加工段1基、溝2条、土坑1基が確認された。なお、溝のうち上段に位置する溝SD522は遺構の大半が3区に伸びているため、3区の遺構の中で詳述する。



第142図 E2区 加工段SX512(1:60)

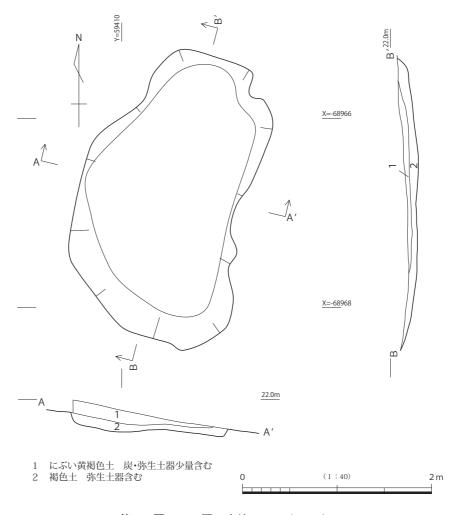
加工段SX512 (第142図 図版26)

E2区東端から一部E3区に延びる加工段である。長軸は約7.5 m, 短軸は最大で2 mを測り, 緩やかな弧状の壁体溝と平坦面からなる。壁体溝は幅50~100 cmで, 深さは最大で約30 cmを測る。平坦面は3 m幅程度が残存しているが, 貼床層は確認できない。その中央やや北よりには, 浅い土坑が1 基掘り込まれている。

埋土は3層に分層でき、そのうち褐色を呈する1層から赤色顔料が塗布された弥生土器の高坏が出土した。出土遺物の特徴から、弥生時代中期後葉の遺構であることが分かる。

土坑 SK532 (第143図)

E2区西端に掘りこまれた不定形の土坑である。長軸約3m, 短軸約1.6mを測り, 深さは最深部で25cm程度と浅い。埋土は2層に分層でき, どちらの層からも弥生土器が出土している。出土した土器は復元もままならない小片ばかりで, この土坑に伴うものというより, 斜面の上部から土器を含んだ土が流れ込み埋没した可能性が高い。ただし, 含まれる遺物は弥生時代中期後葉のものに限られるため, 土坑も同時期の遺構と判断できる。



第143図 E2区 土坑SK532(1:40)

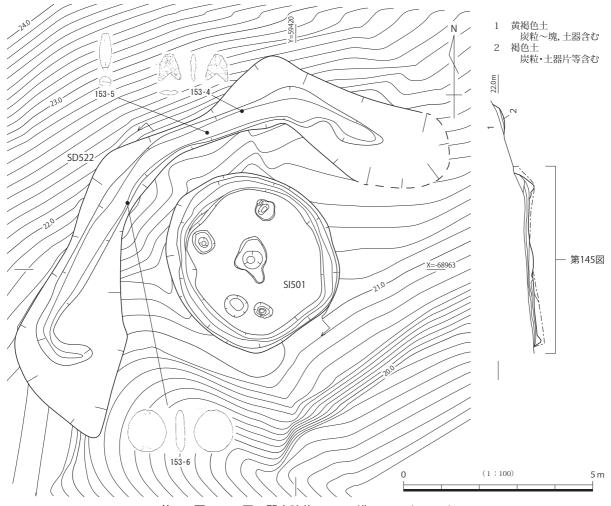
(3) E 3 区の遺構 (第144·145図 図版 4·26)

E3区は、丘陵が一部東方に張り出した箇所の南東にあたる。標高21~22m付近の緩斜面で、竪 穴建物跡1棟とそれに伴う溝1条を確認した。

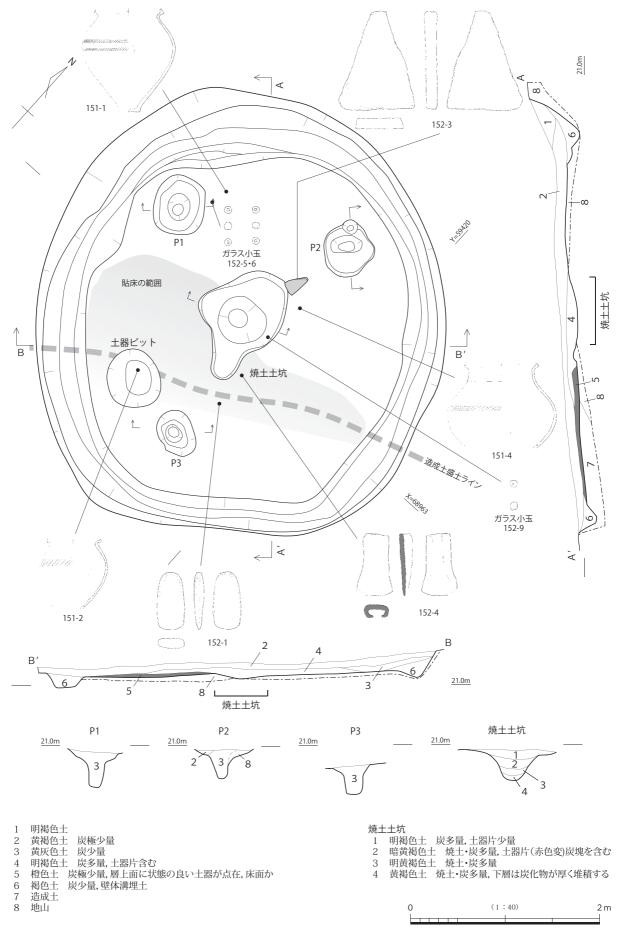
竪穴建物 SI501・溝 SD522

調査区の中央よりやや南に位置する一連の遺構で、竪穴建物 SI501 は杉沢 II 遺跡で唯一全形が確認できた竪穴建物跡である。その東側斜面上部には、建物跡を囲うように溝 SD522 が巡る。遺構の断面を観察すると、斜面の掘削と盛土によって平坦面を作り出し、その上に建物を築いたことが分かる。

竪穴建物 SI501 は直径約4.5 mの円形で、内側に幅約30 cm、深さ約30 cmの壁体溝が伴う。柱穴は3基あり、1基を欠くものの、配置から4本柱の竪穴建物であると推定できる。柱穴の規模は、P1が長軸64 cm・短軸54 cm・深さ40 cm、P2が長軸60 cm・短軸54 cm・深さ30 cm、そしてP3が長軸50 cm・短軸40 cm・深さ32 cmである。柱穴内の埋土は1層のみで、明確な抜き取り痕は確認できていない。また柱穴間の距離は2 mを測る。このほか、床面中央には不定形な焼土土坑、P3の東隣にはほぼ完形の弥生土器(第151図2)が入った土器ピットがある。焼土土坑は、長軸120 cm・短軸90 cm・深さ34 cmを測り、2~4層に熱を受けて変色した土や炭化物が多量に含まれていた。遺物は少ないが、安山岩製の不明石器(第152図2)が出土している。



第144図 E3区 竪穴建物 SI501・溝 SD522 (1:100)



第145図 E3区 竪穴建物 SI501 (1:40)

遺構内の埋土は6層に分層できる。このうち5層は貼床層と考えられ、遺構床面の西半分を中心に確認し、その上面からは、弥生土器の壺や砥石が出土した。また、削り出しの地山が床面となっている東半分では、地山直上の2層で弥生土器とガラス小玉が共伴して出土している。さらに同じ2層からは磨製石斧、袋状鉄斧が出土した。出土した土器は弥生時代中期後葉の特徴をもつ。

また溝SD522は、幅1.2~3.0 m、北端から南端の長さは約12 m、深さは15~30 cmを測る浅い溝である。埋土は2層に分層でき、主に1層中と2層上面で弥生土器、打欠石錘、有溝石錘、黒曜石製石鏃が出土している。こちらも、竪穴建物と同じ時期の遺物が出土している。

(4) E 4 区の遺構 (第146図 図版27)

E4区は、丘陵が東へ張り出した部分の北に位置する。遺構は加工段2基で、いずれも斜面下方の標高17~18mの位置に築かれる。

加工段SX513

加工段SX513は、E4区の東部に位置する。平面は楕円形で、規模は長軸 $3.4 \, \mathrm{m}$ 、短軸 $2 \, \mathrm{m}$ 、深さ $90 \, \mathrm{cm}$ を測る。また、西側にめぐる壁面に $2 \, \mathrm{a}$ 、平坦面に $1 \, \mathrm{a}$ のピットがある。いずれも浅く、柱痕も確認できなかったが、柱穴の可能性もある。

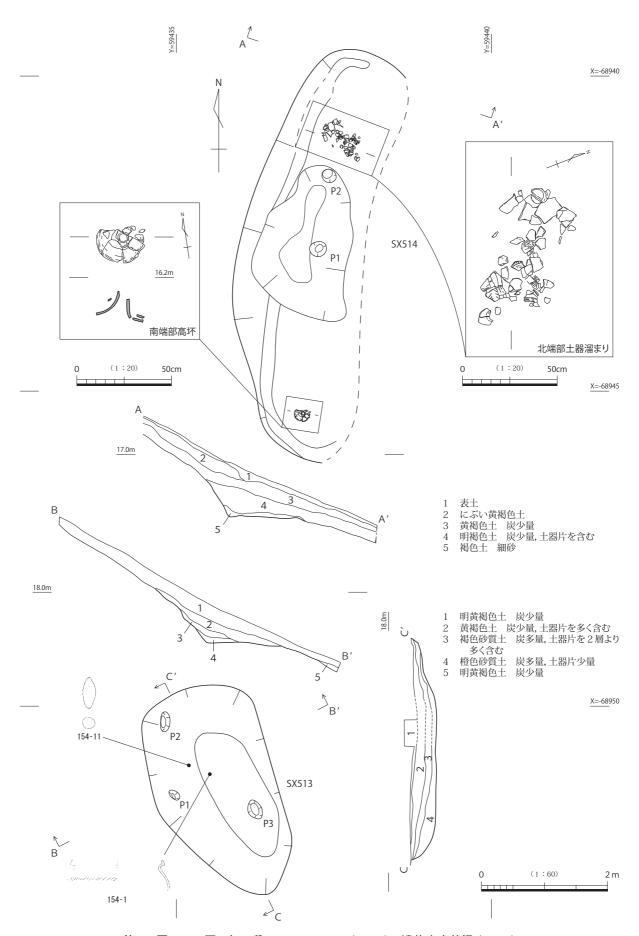
埋土は3層からなる。3層すべてから弥生土器が出土しており、特に2層に多く含まれていた。完 形に復元できるものはないが、破片には摩滅した様子があまりない。加えてE4区は斜面上部に遺構 が確認できなかったので、当遺構や、次に示す加工段SX514の周辺に多くの土器が存在した可能性 もある。

なお、遺物の時期はすべて弥生時代中期後葉である。

加工段SX514

加工段SX513の北約5 mに位置する。長軸約6.6 m, 短軸約2.2 mを測り,西側にある壁体の高さは約30 cmである。壁体の平面形は緩やかな弧状で,壁沿いに幅20 cm前後の浅い壁体溝が掘られる。中央には南北方向に約2.2 m,東西方向に約1.6 mの浅い落ち込みがある。この落ち込みの性格は不明だが,その内部には柱穴と考えられるピットが2 基掘られている。P1は直径25 cm,深さ30 cm,P2は直径20 cm,深さ32 cmを測る。いずれも埋土は1層で,P2 から弥生土器の小片が出土している。柱痕は確認できなかった。

加工段SX514では、遺構の北端で土器溜まりが、南端で立位の高坏がそれぞれ出土している。前者は、少なくとも5個体以上の弥生土器片が集積しており、完形品は含まれない。甕や広口壺、高坏など大型品が多いのが特徴である。このような大型の弥生土器は、杉沢 II 遺跡では加工段SX514でしか確認できない。また後者については、高坏が床面に据えられたような状態で出土したものである。坏部は失われているが保存状態は良く、こちらも北端の土器溜まりと同様に大型品である。なお、北端・南端ともに土器の周囲に土坑などは認められなかった。



第146回 E4区 加工段SX513·SX514(1:60) 遺物出土状況(1:20)

SX514は遺物の出土状況に特徴がある遺構だが、平坦面の多くが失われ、柱穴と考えられるピットが2基のみという状況では、建物が建てられていたかどうか判断するのは難しい。

(5) E 5 区の遺構 (第147図 図版27)

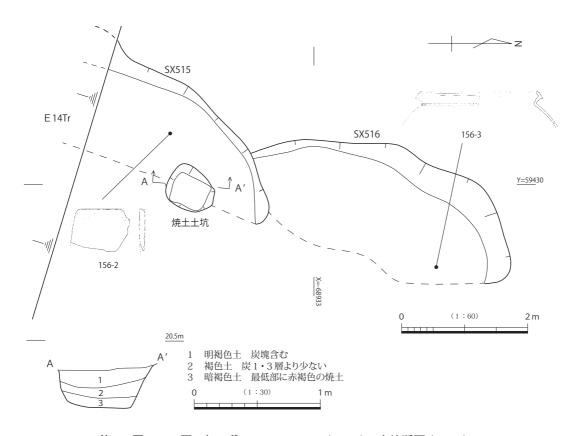
E5区はE4区の北に位置し、南東向き斜面に2基の加工段が築かれていた。遺構の標高は20~21mを測り、その上下の斜面には遺構は存在しない。

加工段SX515

加工段SX515は、E5区中央からやや南寄りに位置する。試掘トレンチにより遺構の南端が失われており、現状で長軸約3m、短軸約1.8mを測る。深さは約50cmあり、平面形は半月形と推定される。埋土は5層あり、3~5層で弥生土器、石包丁の未製品と考えられる石器が出土している。土器の時期は弥生時代中期後葉である。

平坦面に柱穴は確認できなかったが、北端から約1mのところに焼土を伴う方形土坑が掘り込まれていた。方形土坑は、長辺約80cm、短辺約60cm、深さ約30cmを測り、埋土は3層に分層できる。最下層の3層は、多量の炭化物を含む。底面や側面には被熱により地山が赤く変色した箇所が多く見られた。

この土坑内からは遺物の出土がなく、炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、紀元後7世紀の値を示した(第7章第1節)。E6区包含層から7世紀の須恵器が数点出土しているので、その時期の遺構とみてよいだろう。



第147図 E5区 加工段SX515・SX516(1:60) 土坑断面(1:30)

加工段SX516

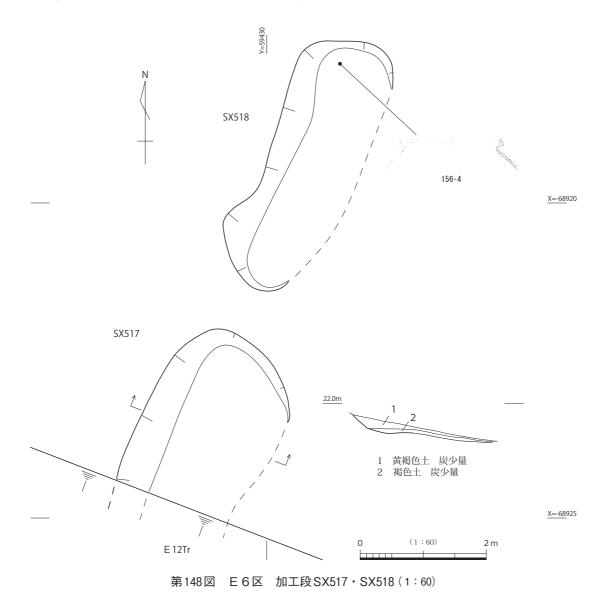
加工段SX515の北に位置する。遺構の南端に加工段SX515の北端が重複し、現状では長軸約4m、短軸約2mを測る。深さは約40cmで、平面形は加工段SX515と類似した半月形である。柱穴や壁体溝は確認できない。埋土は2層に分けられ、主に下層から中期後葉の弥生土器が出土している。

(6) E6区の遺構(第148図 図版27)

調査区北端のE6区では、斜面上部の標高21~22mにおいて加工段2基を確認した。

加工段SX517

E6区の南西で確認した。遺構の南半分が試掘トレンチ内に位置しており、全形は不明だが、おそらく楕円形と推定される。確認できた規模は長軸約3m、短軸約2.2m、深さ20cm程度である。埋土は2層に分層できた。1層は周辺の包含層と同じ土層で、炭化物を含む2層が堆積したのち、加工段SX517を含んで堆積したと考えられる。遺物は、地山直上で弥生土器片が1点出土している。高坏の坏部片で、おそらく弥生時代中期後半のものだろう。



151

加工段SX518

加工段SX517とは約70cm隔てて北にある。長軸約4.3 m, 短軸約1.4 m, 深さ約30cmを測り, 平面形はややいびつな隅丸方形である。平坦面で柱穴等は確認できなかった。

埋土は2層に分層できた。下層と地山直上から弥生土器が出土している。特に遺構北側に土器の出 土が集中していた。出土した土器は弥生時代中期後葉のものである。

第2節 遺構出土遺物

(1) E1区の遺構出土遺物(第149図 図版59)

加工段SX511 (第149図1・2)

加工段SX511から土師器の甕,甑が出土した。風化が著しく,復元・図化できたものは2点である。 1 は甕の口縁部である。口縁はゆるやかに内湾して立ち上がるが,端部がやや肥厚する。また,頸部内面は,胴部にヘラケズリ調整を加えることではっきりとした稜線を作り出している。 2 は甑で,口縁部から把手が付く肩部までが復元できた。調整は風化により不鮮明だが,把手部分を胴部に貼り付け,ナデにより接合していることが断面から観察できる。杉沢遺跡 D 丘陵 D 7 区からは, 2 とほぼ同形の甑が出土している。 1 ・ 2 ともに古墳時代後期の遺物である。

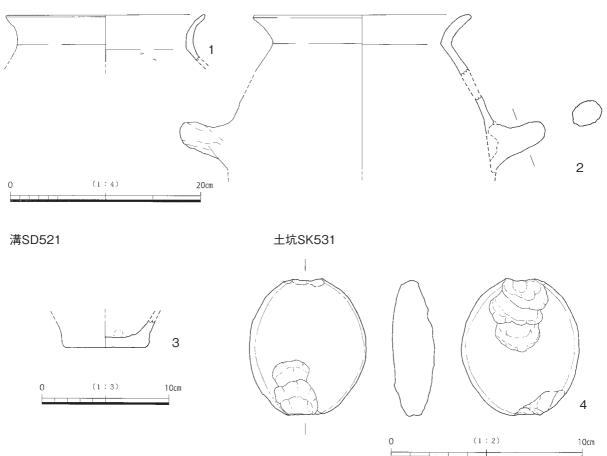
溝SD521 (第149図3)

溝SD521の底面から遺物が数点出土した。弥生土器の甕と考えられる破片があるが、図化できたものは1点のみである。3は弥生土器の底部で、全体が風化しているが外面にはナデ、内面には指オサエの痕跡が確認できる。正確な時期は不明だが、安定した平底であるため、弥生時代中期の資料と見られる。

土坑 SK531 (第149 図 4 図版59)

土坑SK531は埋土の上層から土器と石器が出土した。土器はいずれも弥生中期後半の特徴が見られ、器種としては甕が認められるが、小片のため図化はできなかった。図化したのは打欠石錘(4)である。扁平な円礫の両端に、打ち欠きを作っている。磨痕や緊縛・使用による擦痕は確認できなかった。

加工段SX511



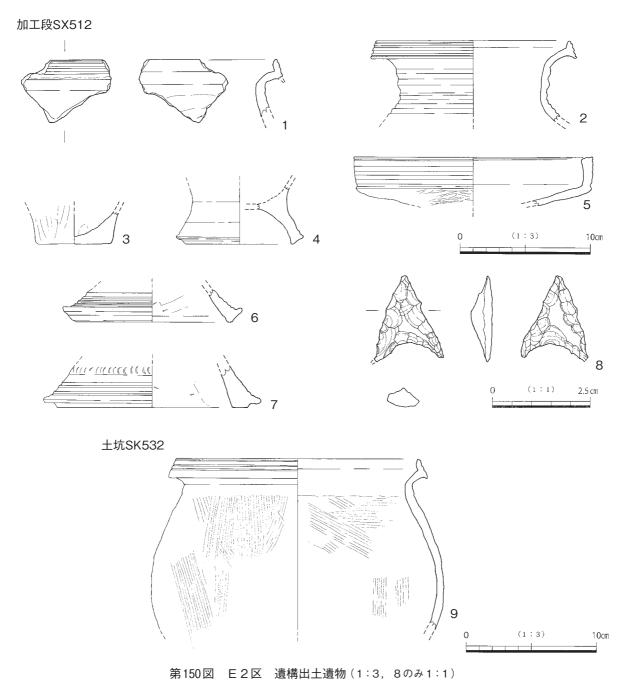
第149図 E1区 遺構出土遺物(1・2は1:4, 3は1:3, 4は1:2)

(2) E 2 区の遺構出土遺物 (第150図 図版56~58·60)

加工段SX512 (第150図1~8 図版57·58·60)

加工段SX512からは弥生土器の甕, 壺, 高坏と石器が出土した。ここではそのうちの弥生土器7点, 石器1点を図化した。

1は甕の口縁部片である。断面T字状の口縁端部に4条の凹線文が施される。2は小型の壺で、口縁部から頸部の一部が残存している。こちらも口縁端部は1と同じである。また、頸部には少なくとも7条以上の凹線が引かれていると考えられる。3・4は底部である。3は甕または壺の底部で、外面にはヘラミガキが残る。また4は台付壺の、底部から台部にかけての破片である。5~7は高坏。5は坏部片で、垂直に立ち上がる口縁の外面および端部に平行沈線が施される。また外面にはミガキが観察できる。6・7は脚端部で、いずれも端部外面には平行沈線が引かれている。7は平行沈線に加えて小ぶりの半裁竹管文が1列巡る。弥生土器はすべて弥生時代中期後葉の特徴をもつ。8は黒曜石製の石鏃である。凹基無茎式で、中央に素材面が残る。



MIOOE EEE AMEELAN (I O, OVO.

土坑 SK532 (第150 図 9 図版56)

土坑SK532は、遺構の中央部から弥生土器の甕が多く出土したが、いずれも小片で、上部からの 転落や風化による摩滅が激しいため復元・図化できたものは1点に留まった。9は口縁部から胴部上 半が残存していた。平行沈線が施された口縁端部はT字状だが、下端の張り出しは控えめである。内 外面にはハケメがよく残る。弥生時代中期後葉から後期初頭のものと考えられる。

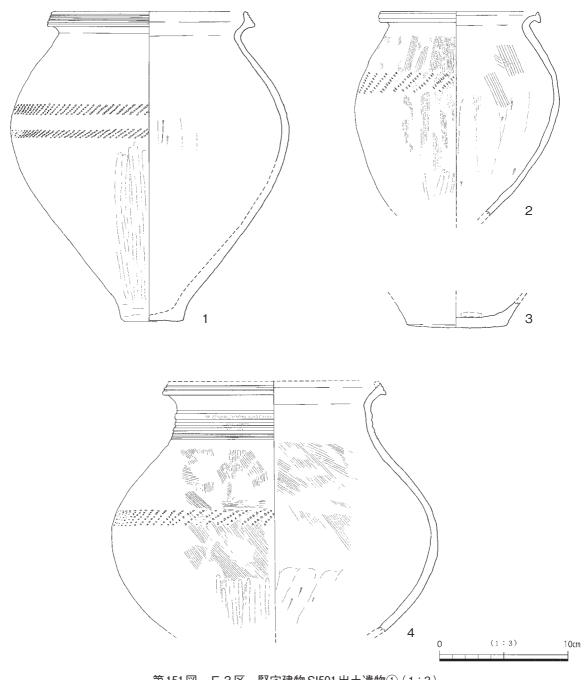
(3) E 3 区の遺構出土遺物 (第151~153図 図版4・56・58~60)

竪穴建物 SI501 (第151·152図 図版 4·56·58~60)

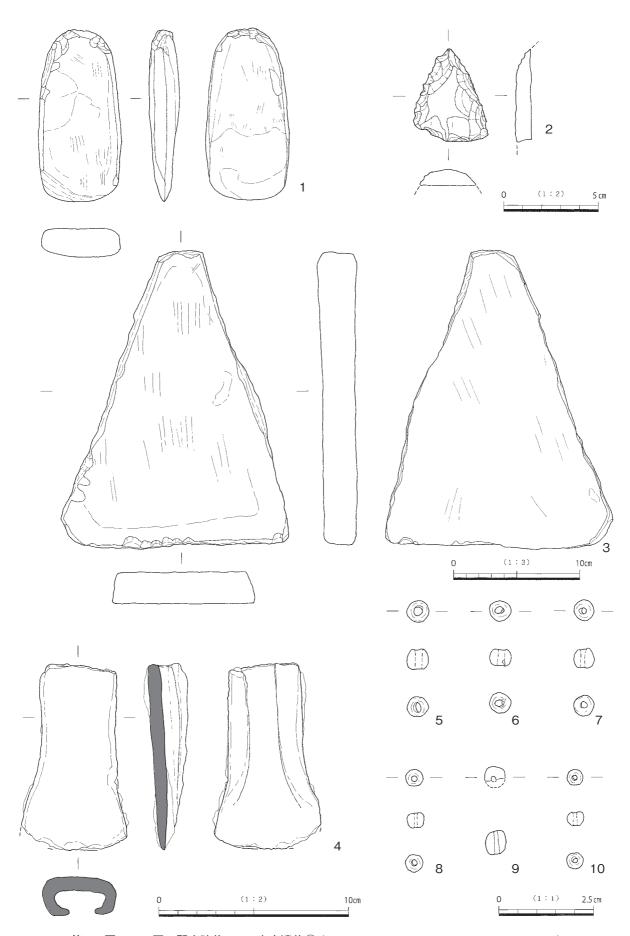
竪穴建物 SI501では、床面直上および床面に近い埋土中から遺物が出土した。弥生土器の甕、壺、

石器のほか, ガラス小玉, 袋状鉄斧が出土し, いずれも土器の特徴から弥生時代中期後葉に位置付け られる。以下、図化したものについて詳述する。

第151図1・2は弥生土器の甕である。いずれもほぼ完形の状態で、1はガラス小玉2点とともに 2層中から出土した。口縁部は上方に拡張した上に4条の凹線文を巡らせる。胴部の中位からやや上 が張り出し、そこに2列の列点文がめぐる。均整のとれた形態の土器である。摩滅が激しく、調整は 判別しにくいが、頸部外面はナデ、胴部下半はヘラミガキ、内面は胴部中程にヘラケズリの痕跡があ る。また2は、土器ピットから出土したものである。口径12cm程度の小ぶりの甕で、器壁の歪みが 顕著で底部を欠く。内外面ともにハケメが主体で、1よりやや古い可能性がある。上下にわずかに拡



第151図 E3区 竪穴建物 SI501 出土遺物①(1:3)



第152図 E3区 竪穴建物 SI501 出土遺物② (1・3は1:3, 2・4は1:2, 5~10は1:1)

張した口縁部に2条の凹線文を、肩部には幅広の列点文を施す。4は壺である。器高が小さく、胴部が大きく張り出した形状である。口縁端部は欠損しているものの、上方に拡張され、2条以上の凹線が施される。また内外面調整は2と同様ハケメ調整が主体で、外面下半にヘラミガキ、内面下半にヘラケズリが加わる。頸部に5条の凹線、胴部に列点文が巡る。3は底部で、床面直上で出土した。4とは別個体である。

石器は3点を図示した。第152図1は扁平片刃石斧と考えられる。出土時は2つに割れており、基部が竪穴建物SI501の2層、刃部がE1区包含層で出土した。扁平な石材を整形したもので、長さ13 cm、刃部幅6.2cm、厚さ1.4~2.7cm、重さ342gを測り、基部は丸く仕上げられる。2は中央の焼土土坑から出土した安山岩製の不明石器である。長さ5 cm、幅8 mm程度で、縁辺はすべて細かく剥離されている。片面は複数の剥離が加えられるが、もう片面は平坦で、垂直に割れたと考えられる。焼土土坑からの出土だが、熱を受けた痕跡は見られない。第153図3は大型の砥石で、竪穴建物SI501のほぼ中央の床面に据え置かれていた。長さ23 cm、最大幅18 cm、厚さ2.5 cmを測る砂岩製の砥石である。表裏ともに擦痕が観察できるが、使用面と考えられる表面(第152図3、左)は使い込まれて中央が窪んでいる。

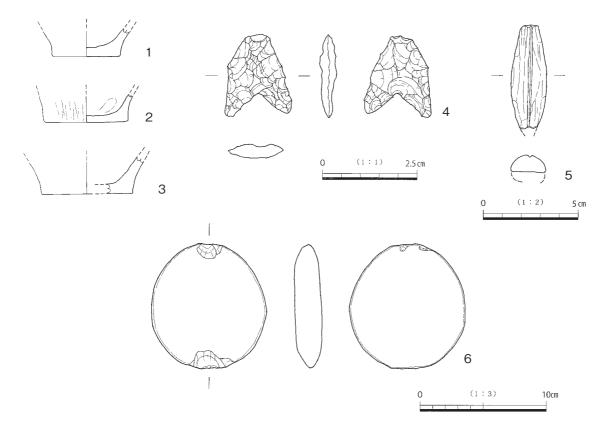
4は鍛造の袋状鉄斧である。長さ9.4cm, 刃部幅6.2cmの小型品で, 平面形は, 袋部から刃部に向かって幅が広がる撥形である。袋部は完全に閉じず, 断面形態は楕円形を呈する。また, 厚さは袋部から刃部にかけてあまり変化がなく, 刃部はあまり鋭くない。4は竪穴建物SI501の床面に堆積する2層中から出土した。

 $5\sim10$ はガラス小玉である。直径 $4.0\sim5.9$ mmと大きさにばらつきがあるが、いずれも透き通った 濃青色で、コバルトを着色料としたカリガラスである(第7章第3節)。また孔に並行する気泡の伸び が認められることから、引き伸ばし法による成形である。ガラス小玉はいずれも遺構床面に近い埋土 中から出土し、埋土を全て水洗いしたが、この6点以外には確認できなかった。共伴した土器の特徴 から、島根県内で出土したガラス小玉としては最古の資料となる 1)。また袋状鉄斧についても建物跡 出土資料としては県内最古級である。

溝SD522 (第153図 図版7·59)

溝SD522は、2層ある埋土のうち、上層から遺物が出土している。弥生土器の甕やその底部片、石器があるが、土器は風化が著しく、3点の図化に留まった。

第153図1~3は弥生土器の底部である。同遺構から出土した甕の口縁部を見ると、端部の凹線文や内外面のハケメ調整など中期の特徴が認められることから、これらの底部も同時期の遺物であろう。しっかりとした平底で、外面をナデやミガキ、内面をナデや指オサエによって仕上げる。4は黒曜石製の石鏃である。全面を丁寧な剥離で仕上げている。5・6は石錘である。5は有溝石錘で、縦方向に半裁された状態で片面を欠く。軟質の石を丁寧な研磨で紡錘形に成形し、糸をかけるための溝を長軸に沿って四方に彫りこんでいる。「九州型」²⁾に分類される石錘であり、今回の調査では、唯一の出土例である。6は打欠石錘で、扁平な円礫の両端を打ち欠く。端部以外に加工痕はない。



第153図 E3区 溝SD522出土遺物(1:3, 4は1:1, 5は1:2)

(4) E4区の遺構出土遺物(第154·155図 図版56~60)

加工段SX513 (第154図 図版56~60)

加工段SX513からは、およそコンテナ1箱強の弥生土器、土製品、石器が出土した。確認できる 土器の器種には弥生土器の甕、壺、高坏等があり、ここでは、弥生土器10点、土製品1点、石器1 点を図化した。

第154図1~3は甕である。1は、くの字に近い口縁端部の外面に3条の凹線文が引かれる。内外面ともにハケメ調整が施され、肩部に列点文が巡る。2はT字状の口縁端部で、上方に拡張した端部外面に4条の凹線文が施されている。外面にはハケメ調整が残る。3は口縁部から肩部の破片で、大型の甕であろう。摩滅により不明瞭になっているが、上方に拡張した口縁部には2条の凹線文、頸部には刻目を入れた貼付突帯文が巡る。4は壺である。口径は15cmに満たず、小型品に復元できる。口縁端部は上方に張り出した、4条の凹線文を巡らせている。頸部にも凹線文が引かれるものだろう。5~7は甕または壺の底部である。5・6は底部径が10cm近く、大型品の底部と考えられる。溝SD522出土の底部片(第153図1~3)と同様、しっかりとした平底が特徴である。8・9は高坏である。8は坏部。口縁部がやや内傾して立ち上がる形態は杉沢遺跡でも多く出土するタイプだが、口縁部外面に凹線が使用されず、わずかに口縁端部が肥厚する点が他と異なる。坏底部は欠損しているものの、充填された底部の一部が観察できる。9は小型の脚端部で、脚端部近くに三角形の透かし孔を4方向に施している。10は蓋の天井部と考えられる。把手となる部分がナデによって作り出され

ている。11は有溝土錘である。紡錘形で、4本の溝が十字に彫られており、溝状遺構SD522出土の有溝石錘(第153図5)に類似した形状である。杉沢遺跡B丘陵でも、大きさは異なるものの、類似した有溝土錘がある(第64図12)。

12は砥石である。台形をしているが、欠損しているため本来の形は不明である。砥面は1面のみで、その他の面は欠損した面と考えられる。また短辺には細かい打撃を加え、丸く加工している。

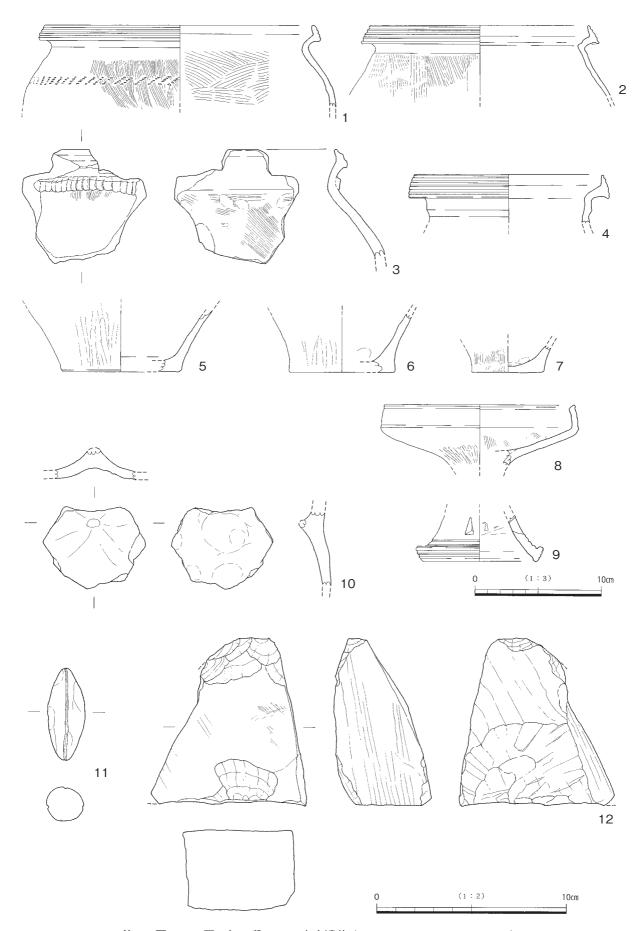
加工段SX514 (第155図 図版56~60)

加工段SX514は、杉沢II遺跡で唯一土器溜まりが形成されていた遺構である。遺物量もコンテナ 2~3箱におよび、弥生土器、石器が含まれていた。確認できる土器の器種には甕、壺、高坏、鉢が ある。ここでは、復元できた土器8点と石器1点を図示する。

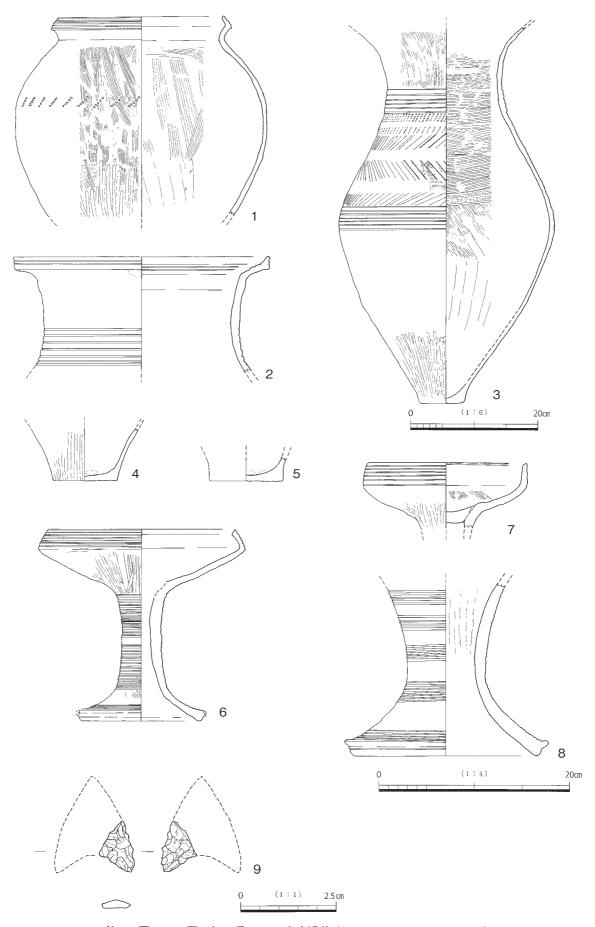
第155図1は甕である。器高は30cm弱と推定され、杉沢Ⅱ遺跡で出土した甕の中では大型品である。器壁は総じて5mm程度と薄く、内外面には精緻なハケメが残っている。肩部には列点文が1列施されている。口縁端部はくの字状で、下方へわずかに張り出す。外面には4条の凹線文がある。2・3は大型の広口壺である。3は口縁部を欠くが、ほぼ全形が復元できた。胴部はあまり張らず、上半を凹線文、羽状文、列点文で飾る。外面調整は上半がハケメ、下半はヘラミガキだが、胴部下半は摩滅により不明瞭である。内面は、下半にヘラケズリと斜め方向のハケメを加え、胴部上半は横方向のハケメを丁寧に施す。2は口縁部から頸部までが復元できた資料で、3よりやや小ぶりである。口縁端部がほぼ直角に外反し、上方に拡張した端部外面に凹線文が巡る。口縁部内面に2条、頸部に7条の凹線文が引かれる。器面が摩滅しており、調整は不明である。4・5は甕または壺の底部である。4には丁寧なミガキの痕跡が残る。

6~8は高坏である。6は完形に復元できた資料で、坏部は口縁端部が内傾して立ち上がり、外面に6条の凹線が引かれる。内面調整は磨滅により不明だが、外面はヘラミガキ調整で仕上げている。脚部には17条を単位とする凹線文が上下2段に引かれ、裾部にも5条の凹線文が施される。全体的に丁寧に製作された印象を受ける。7は坏部のみが復元できた。口縁端部はゆるやかに直立あるいは内傾して立ち上がる。端部外面に6条の凹線が引かれ、外面はミガキ、内面はハケメで調整されている。8は大型の脚部である。加工段内南端の地山直上において立位で出土した。脚柱部は6のように円筒状ではなく、坏部に向かって大きく広がる形状である。外面には、4~7条を1単位とする凹線文が5列引かれている。また脚端部は肥厚し、その外面に凹線が1条巡る。内面にはケズリが施されるが、摩滅によって下半の調整は不明である。9は黒曜石石鏃の基部である。表・裏面ともに丁寧な剥離が加えられる。

加工段SX514の遺物は、土器の特徴から弥生時代中期後葉に位置付けられる。



第154図 E4区 加工段SX513出土遺物(1~9は1:3,10~12は1:2)



第155図 E4区 加工段SX514出土遺物(1:4,3は1:6,9は1:1)

(5) E 5 区の遺構出土遺物 (第156図 図版59)

加工段SX515 (第156図1・2 図版59)

加工段SX515からは弥生土器の甕と石器が出土した。そのうち弥生土器 1 点,石器 1 点を図化した。 1 は甕で,口径 25 cm,復元器高 40 cm弱を測る大型品である。加工段 SX514 出土の甕 (第156図-1) と類似した形態で,上方に張り出し,凹線文が施された口縁端部をもつ。器面は内外面ともハケメ調整で,頸部に刺突文,肩部に列点文が巡る。 2 は石包丁と考えられる石器である。風化により,加工痕や使用痕等は不明である。

加工段SX516 (第156図3 図版59)

弥生土器のみが2点出土している。そのうち図化に耐えるものは1点のみであった。3は大型の甕の口縁部で、口径は27.8cmを測る。口縁端部は、加工段SX515出土甕(1)と同様に上方へ大きく張り出し、端部外面に4条の凹線文が施される。内外面はハケメ調整により仕上げられ、頸部に半月状の刺突文が1列刻まれている。

(6) E 6区の遺構出土遺物

加工段SX518 (第156図4 図版59)

加工段SX518では、埋土中および地山直上で弥生土器の甕の破片が数点出土している。4は甕の口縁部である。口縁端部は上方に拡張されたくの字状で、内傾して立ち上がる。端部外面には、はっきりとした凹線文2条が施され、器壁の内外面はハケメで調整される。

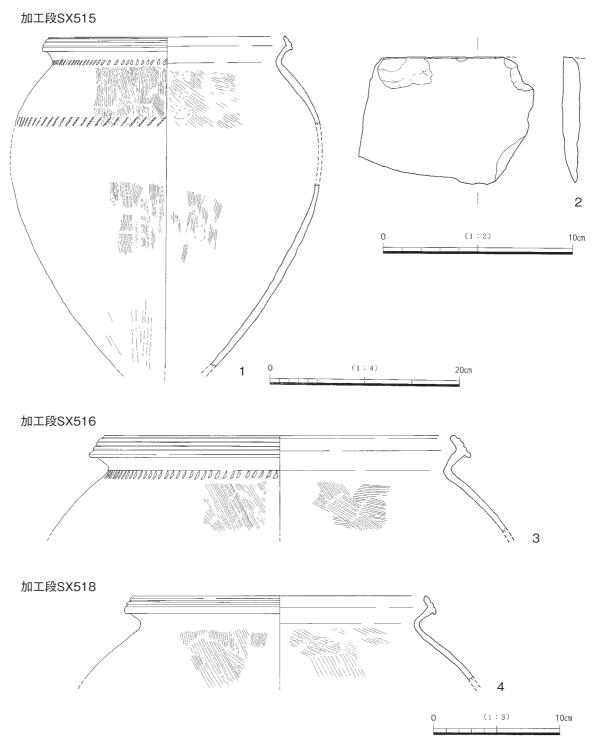
第3節 包含層出土遺物

(1) E1区の包含層出土遺物(第157図 図版56·58~60)

主に地山直上の包含層 (E20トレンチ11・12層) から須恵器, 土師器, 弥生土器, 石器が出土している。 **須恵器** $1 \sim 3$ は坏蓋である。口径は $12.5 \sim 15.5$ cm前後, 輪状つまみとかえりをもち, 外面はヘラケズリで調整される。大谷編年の出雲 6 d 期に位置付けられる資料である。 4 は無蓋高坏で, 坏部はゆるやかに内湾して立ち上がる椀状を呈する。脚部には2 方向の透かしがあり, 片方は三角形, もう片方は縦方向の筋のみの透かしである。また, 脚端部はわずかに肥厚し, 1 条の沈線が引かれる。4 は, 坏蓋 3 点より古い, 出雲 $5 \sim 6$ a 期に位置付けられるだろう。

弥生土器 $5\sim7$ は弥生土器の高坏で、いずれも大型と推定される。5 は坏部下半から頸部の破片である。坏部底面は欠損するが、接合の痕跡が見てとれる。頸部には少なくとも 9 条の凹線が巡り、頸部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。 $6\cdot7$ は脚端部で、ともに径20 cm近い大型品。6 には 10 条、7 には 8 条の凹線が引かれ、7 は肥厚した端部外面に 2 条の凹線がある。また、6 は外面に赤色顔料が塗彩されている。

石器 8・9は石鏃である。8は安山岩製大型鏃で、基部が大きく抉られる。また9は黒曜石製の小



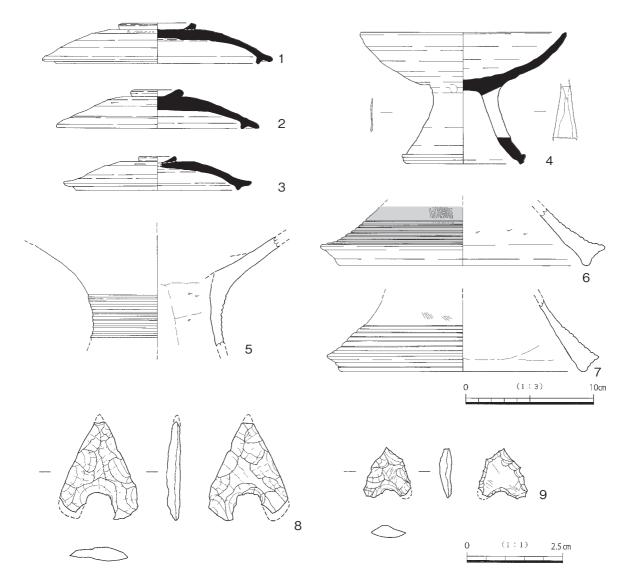
第156図 E5・E6区 遺構出土遺物(1は1:4, 2は1:2, 3・4は1:3)

型品。片面の縁辺部だけを加工して作り上げている。

(2) E 2 区の包含層出土遺物 (第158図 図版58~60)

E 2 区では、地山1 · 2 層上 (E 18 トレンチ3 · 4 層) から弥生土器、石器が出土した。

弥生土器 1は小型の甕である。口縁部は上方に大きく拡張したT字状で、端部外面に3条の凹線が



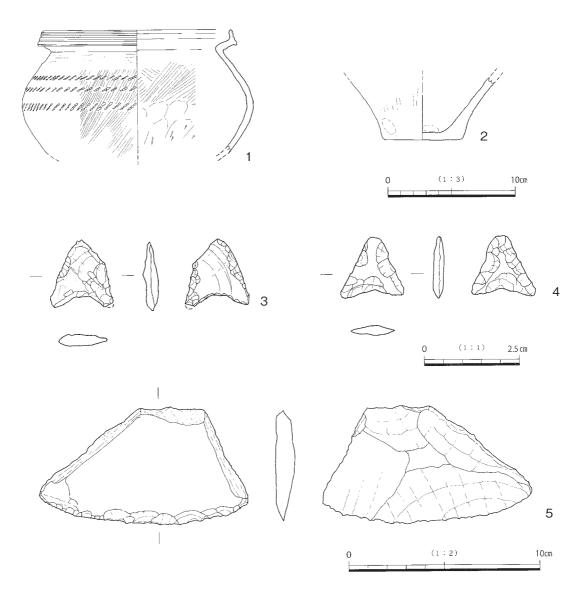
第157図 E1区 包含層出土遺物(1:3,8・9は1:1)

施される。胴部は内外面ハケメ調整ののち、胴部上半に3列の刺突文が巡る。胴部は強く湾曲して底部に向かってすぼむ。底部は欠損しているが、胴部の形態から台付甕である可能性が考えられる。2 は底部で、器壁は外反して立ち上がる。1とは別個体である。

石器 3・4は石鏃である。3は黒曜石製,4は安山岩製で,いずれも正三角形に近い凹基式鏃である。5は石包丁である。刃部はゆるく湾曲し,刃部は細かい剥離調整によって整形されている。細かい剥離が加えられる面(第158図4左)は平滑で,原石から板状に剥離した面と考えられる。一方裏面は,3回ないし4回の大きな剥離痕がみられ,粗く仕上げられている。

(3) E 3区の包含層出土遺物 (第159図)

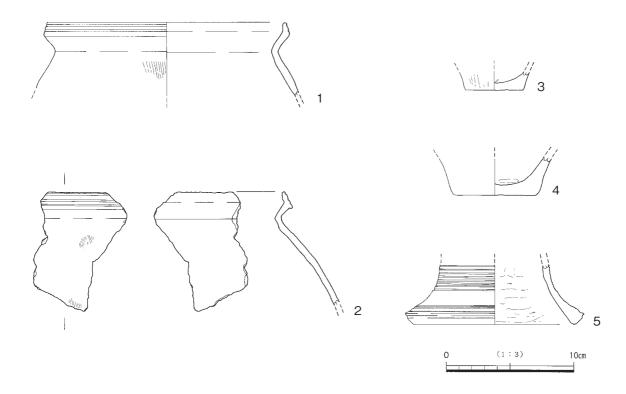
E3区の包含層から出土した遺物は弥生土器と近世以降の陶磁器である。このうち, 弥生土器5点を図化した。



第158図 E2区 包含層出土遺物(1・2は1:3,3・4は1:1,5は1:2)

弥生土器 第159図1・2は弥生土器の甕の口縁部である。いずれも、竪穴建物SI501から7m北の尾根上で出土した。口縁部の形態から、少なくとも3個体の甕が同じ場所で壊れたことが分かるが、土器溜まりとは言えない出土量・出土状況であるため包含層出土遺物に一括した。1は頸部の屈曲が比較的緩やかで、口縁端部は上方に拡張される。端部外面には2条の凹線が施される。また2は口縁部が丁字状で、3条の凹線が巡る。これらはいずれも外面をハケメ調整、内面をナデ調整で整えているが、風化により明確には観察できない。いずれも弥生時代中期後葉~後期初頭と考えられる。

また、竪穴建物 SI501より下方の包含層から出土した弥生土器 3 点を示す。 3・4 は底部片。 3 は竪穴建物 1 の覆土中、 4 は盛土中から出土した。いずれも平底の小~中型の甕または壺の底部であろう。 5 は高坏の脚端部である。端部は肥厚し、外面に複数条の凹線文が施される。内面はケズリ調整の痕跡が残る。この 3 点についても、時期は弥生時代中期後葉ごろと考えられる。



第159図 E3区 包含層出土遺物(1:3)

(4) E 4 区の包含層出土遺物 (第160図1~3 図版56·60)

E4区では、加工段SX513·SX514が築かれた斜面中腹以下で弥生土器片と石器が出土した。

弥生土器 $1 \cdot 2$ は甕である。いずれも口縁端部がT字状を呈し,その外面には4条の凹線が施される。 1 は内外面に明確なハケメ調整が認められる。また 2 は,大型品と考えられ,頸部に刻目の入った貼付突帯が巡る。

石器 3は小型の砥石である。部分的に欠損しているが、ほぼ完形に近い状態で残存している。砥面は6面で、使用により中央がくぼみ、擦痕も観察できる。

(5) E 5区の包含層出土遺物 (第160図4・6)

E5区と次項で示すE6区では、包含層からの出土遺物はわずかであった。

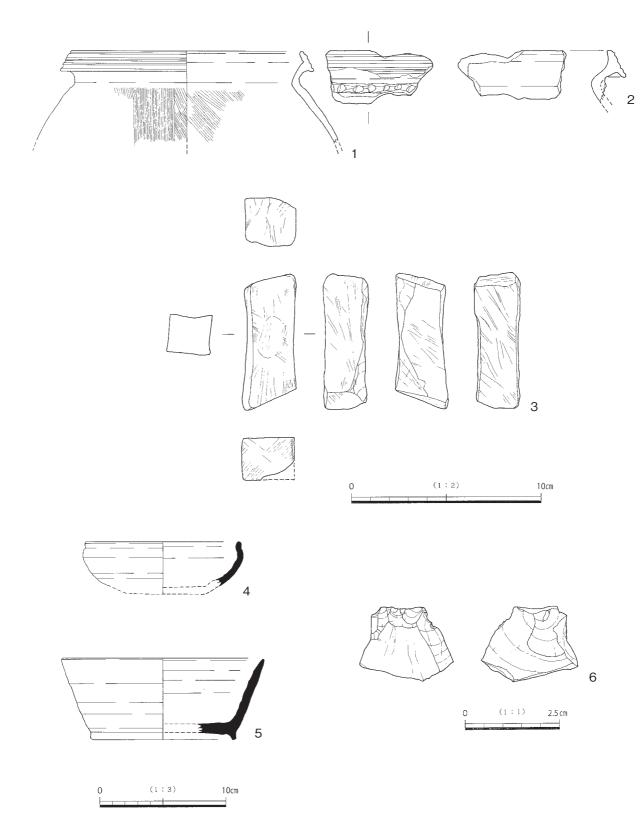
須恵器 4 は坏身である。口縁部に向かって緩やかに内湾して立ち上がり、まるくおさめられた端部が短く外反する。出雲国府第2型式(7世紀末~8世紀第1四半期)に相当する。

石器 6は黒曜石の剥片で、加工した痕跡はない。

(6) E6区の包含層出土遺物(第160図5)

E6区の包含層からは1点の遺物が出土した。

須恵器 5 は坏身である。器壁は口縁に向かって直線的に伸び、底部には高台が付く。出雲国府第5型式 (8世紀後半)の資料である。



第160図 E4・E5・E6区 包含層出土遺物(1:3, 3は1:2, 6は1:1)

第4節 小結

杉沢Ⅱ遺跡では、南北に伸びる丘陵の東斜面に弥生時代集落が広がるという調査成果が得られた。 出土遺物の時期は、前述した杉沢遺跡B・C丘陵と同じく弥生時代中期後葉に集中し、杉沢の谷を挟んだ東西の丘陵に集落遺跡が展開したこと分かる。遺構配置に関しては、調査区中央で東に向かって張り出す尾根を境に南の一群、北の一群に区分できる(第139図)。ここでも、丘陵の基部(杉沢Ⅱ遺跡の場合南側)側に円形の竪穴建物跡、先端側に加工段が分布する様子が看取でき、竪穴建物と加工段群の位置関係は杉沢遺跡B・C丘陵と共通する部分がある。一方、遺構密度が低く、柱穴の存在や出土遺物の量をもとに建物の有無を復元すると、南群・北群とも2基程度となり、1単位に最大5~6棟の建物が存在していた可能性がある杉沢遺跡とは大きく様相を異にする。

また最大の成果は、中期後葉の竪穴建物跡からガラス小玉と袋状鉄斧が出土した点である。どちらも島根県内では最古級の資料となり、出雲地域における舶載品の流入時期の遡上を示す資料として重要な発見となった。

(景山このみ)

【註】

- 1) これまで島根県内では、弥生時代後期前葉に築かれた順庵原1号墓第1主体出土のガラス玉類が最古とされている(島根県古代文化センター2005)。
- 2) (下條1984) において定義された「九州型石錘」は、弥生~古墳時代を通して確認され、弥生時代中期後葉~ 後期に盛行期を迎える。玄界灘を中心とした分布を示すが、日本海沿岸では若狭湾沿岸まで広がることが 分かっており、当資料もその一端を示す可能性がある。島根県内では、出雲~安来市域を中心に出土が確 認されている(内田2013)。

杉沢Ⅱ遺跡の溝SD522出土の「九州型石錘」(第153図-5) は、紡錘形で長軸方向に複数の溝を彫り込む大型ⅡB類(下條1984) である。同遺跡の加工段SX513出土土錘(第154図-11) は、大型ⅡB類の模倣と考えられる。なお出雲市内では、山持遺跡、青木遺跡で同類の石錘が出土している(島根県教育委員会2005, 2006)。

【参考文献】

内田律雄 2013「日本海の九州型石・土錘」『寒暖流の考古学 I 』 第 4 回海洋考古学会研究会資料集 海洋考古学会・瀬戸内考古学研究会

大賀克彦 2002「島根県下のガラス製品」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡― 9 総括編―』 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22

島根県教育委員会 2006『青木遺跡 II』(弥生~平安時代編) 国道431号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書 3 島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ』島根県古代文化センター調査研究報告書 28 下條信行 1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』第 29 号 島取県埋蔵文化財センター 2011『金属器』青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 6 和田清吾 1997「土錘・石錘」金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』第 5 巻 雄山閣

第6章 杉沢横穴墓群の調査

第1節 調査の概要

第1項 調査の経過

(1)過去の調査について

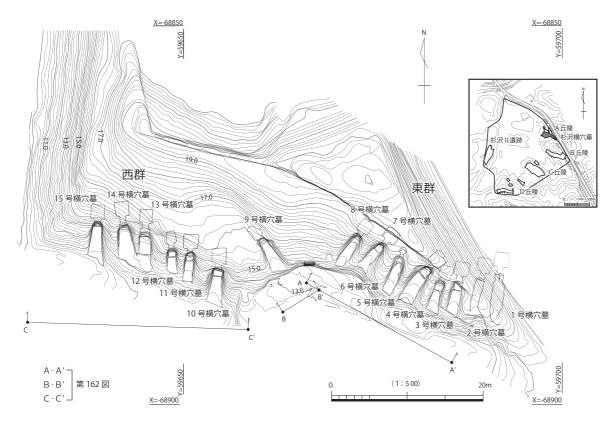
杉沢横穴墓群は、出雲斐川中央工業団地予定地内における東側丘陵 (A丘陵) に位置しており、丘陵南側の斜面に築かれている。この横穴墓群は、市道杉沢線の工事中に初めて確認され、その存在が明らかとなった¹⁾。発見されたのは横穴墓3基で、平成7年 (1995) に斐川町教育委員会によって発掘調査がなされた (第1次調査)²⁾。

そして平成14・15年 (2002・2003) には、「斐川中央工業団地」造成に伴って再び斐川町教育委員会が調査を実施し、新たに12基が確認された。詳細に発掘調査が実施されたのはそのうちの2基で、その他は横穴墓の部分的な調査・確認にとどまり、先に調査された3基との関係性は判然としなかった (第2次調査) 3)。なお、その後に丘陵北側の斜面も調査されており、加工段や弥生時代中期後葉の土器・鉄製品などが検出されている (第4章第1節)。

(2) 今回の調査経過と概要

今回の出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う杉沢横穴墓群の発掘調査(第3次調査)では、これまでに確認された横穴墓を対象に、平成24・25年(2012・2013)において発掘調査を実施し、過去2回の調査成果を含めた杉沢横穴墓群の全体像の解明と、その総括を行なった。平成24年10月29日から調査を開始し、翌年の2月20日に調査を一旦終了した。平成25年5月8日から調査を再開し、翌年3月14日に全ての調査を終えた。なお、発掘調査と併行して各横穴墓の内部や丘陵全体の3次元計測を実施しており、その成果の一部として、第162図や図版10において3次元計測データから作成したオルソ画像を掲載している4)。

また現地での発掘調査を進めるとともに、既に消滅した第1次調査分の3基について、当時の図面・写真などの資料をもとに残りの12基との位置関係を照合する作業を行なった。照合作業の結果、それらは一連の横穴墓群であることが判明し、杉沢横穴墓群は合計で15基の横穴墓群であったと確認した。さらに現地表面より下にも横穴墓が存在する可能性が考えられたため、丘陵斜面に沿って地表面から数メートル下まで重機掘削による確認を行なったものの、その存在は認められなかった。丘陵の西側は昭和42年(1967)の島根県畜産試験場斐川分場建設の際に削平されており、横穴墓が西側にも連なっていた可能性は否定できないが、現況では、杉沢横穴墓群は15基の横穴墓で構成されていたと考えてよい。各横穴墓の名称については、第3次調査に合わせて新たに設定し、本文中でもその名称を用いている(第161図)。なお、斐川町教育委員会によって調査された横穴墓については、主に当時の写真・図面などをもとに整理・検討して報告している。



第161図 杉沢横穴墓群全体図(1:500)

第2項 杉沢横穴墓群の立地と構成(第161・162図 図版8・9)

横穴墓群が構築された丘陵の地山は砂岩系の布志名層であり、この周辺地域一帯の基盤層となっている。地山を詳しく観察すると、海浜の甲殻類などによる巣穴の化石がまばらに確認でき、人間が生活する遥か以前にはこの地が海浜であったことを示唆する⁵⁾。

15基の横穴墓は全て丘陵南側に構築され、大きく見れば一連の横穴墓群として把握できるが、全体図からその空間的配置を見てみると、東群の $1\sim8$ 号横穴墓と西群の $10\sim15$ 号横穴墓の 2 つに分かれている。その中で 9 号横穴墓は東群・西群の間に位置し、単独で存在している印象を受けるが、位置関係からここでは便宜的に西群として扱うことにしたい。

杉沢横穴墓群では、3次元計測で取得したデータによって横穴墓群を正面から見たオルソ画像を作成した(第162図)。これをもとに各横穴墓の床面の高さを比較すると、東群の横穴墓は16~19m前後、西群は9号横穴墓を除いて概ね11~13m程度に収まっている。開口方向は東群の横穴墓が南西方向に開口し、西群は9号横穴墓のみ南東方向に開口するが、その他はほぼ南に向かって揃って開口するため、正面から見ると非常に整って精美な印象を受ける。そのため、杉沢横穴墓群は両群内においてある程度まとまって整然と構築されていたことが予想されよう。

次節では、各横穴墓の調査成果について、過去に実施された調査(第1・2次調査)と今回の調査(第3次調査)を総合して報告する。なお、横穴墓の加工痕については、山陰横穴墓研究会(同1995)で提案された工具・加工痕跡の内容を参照して記述を行った。



第162図 杉沢横穴墓群正面図 (オルソ画像) (1:200)

第2節 調査の成果

第1項 東群の調査

(1)1号横穴墓(第163·164図 図版29·61)

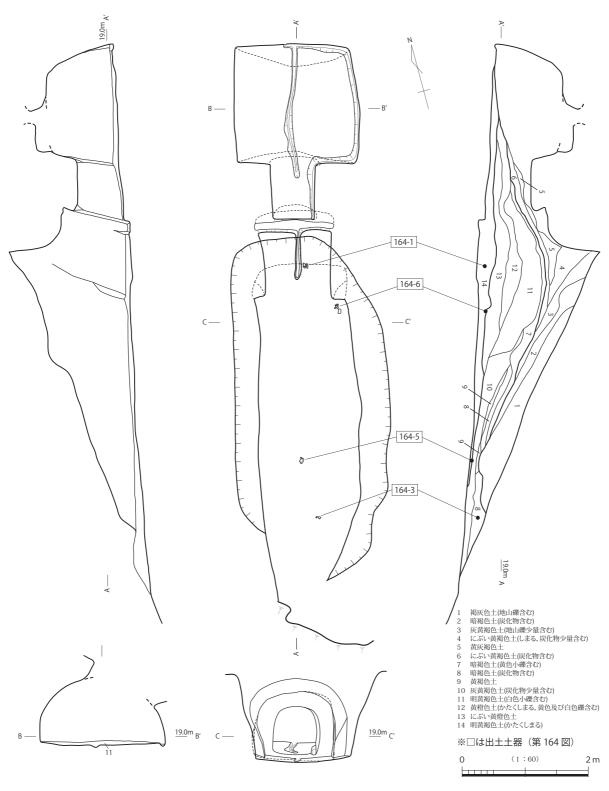
1号横穴墓は横穴墓群全体の東端に位置し、市道杉沢線の法面工事の際に初めて発見され、第1次調査において発掘調査が実施された。開口方向はS-15°-Wで玄室床面の標高は約18.9mである。

前庭部 前庭部の奥行きは5.2mで、幅は羨門側では1.44m を測るが、前庭端部がやや狭く0.98m程度であり、平面形は概ね縦長長方形である。

羨 道 奥行きは1.05m, 幅は1.07m, 高さは1.02m を測り, 平面形は正方形に近い。断面形態はアーチ形である。

閉塞部 閉塞石などは残っていないが、床面には閉塞石などを嵌め込んだと思われる奥行き18cm、幅129cm、深さ8cmの溝が掘られていた。

玄 門 玄門の平面形は縦長長方形,断面形態は台形に近いアーチ形であり,奥行きは0.89m,幅は0.68m,高さは0.73mを測る。玄門床面は羨道床面に比べて8cm程度高くなる。また,玄門の右壁床面には傾斜の緩い溝が掘られ、玄室壁沿いの溝と連なっている。



第163図 1号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

玄 室 玄室床面は奥行き1.92m, 奥壁側の幅は1.84m, 前壁側の幅は1.86m を測り, ほぼ正方形の平面形である。奥壁は内傾して天井部まで立ち上がり, 天井形態はアーチ形であったと推測される。床面から天井部までの高さは1.11m である。玄室中央には幅11cm, 深さ10cm程度の溝があり, 玄門から連なる溝と壁沿いに連結して玄室の右側に屍床を設ける形となっている。

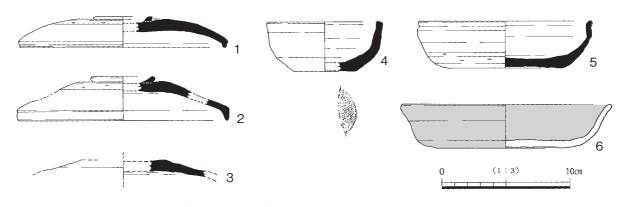
加工痕跡 天井部は一部削平されているが、玄室内には各壁に削痕が残され、平滑に仕上げられている。その他、前庭部の壁面には構築当初の掘削痕跡を示す横走りの稜線が数条残存していたことが、第1次調査時の写真(図版29)から読み取れる。

土層堆積状況 床面全体に堆積する14層はよく締まっており、その上面は追葬などに伴う1次進入面であったと思われる。その上に堆積する7~13層は1次進入後の埋土であったと考えたい。2次進入面は7層上面であり、その後の埋土が4~6層であると思われる。1~3層は堆積土であろう。遺物出土状況 前庭部・羨道の床面や、床面上に堆積する14層中から須恵器の蓋坏(1・5)と土師器の皿(6)が出土しており、前庭部での墓前祭祀に伴う遺物であると考えられる。8層からは須恵器の坏蓋片(3)が出土し、2次進入時の際の遺物であると判断できる。その他の須恵器蓋坏2点(2・4)は出土層位不明ではあるが、いずれかの進入時に伴うものと推測される。なお、1・2は2号横穴墓下から出土した破片と接合した。

出土遺物 (第164図 図版61) $1\sim5$ は須恵器である。 $1\sim3$ は須恵器の坏蓋で, $1\cdot2$ は輪状つまみを持ち,天井部外面に回転ヘラケズリを施す。3 も同様に輪状つまみを持つと思われる坏蓋の破片である。4 は復元すると口径8.0 cm,底径4.7 cm,器高3.8 cmの小型の坏身であり,底部外面に回転糸切り痕が認められる。5 は坏身で口縁部先端が外側に屈折し,胴下半部には回転ヘラケズリが確認できる。底部内面は器面が磨かれたように滑らかで凹凸がなく,硯として使われた可能性が高いと思われる。

6は土師器の皿で、口縁がやや外反する。摩滅が激しいが内外面に赤彩が認められる。

時 期 初葬の明確な時期を示す遺物は確認できなかったが、前庭部での墓前祭祀が行われた時期 は、出土遺物の特徴や出土状況から出雲 $7\sim8$ 期 $^{6)}$ 頃(7世紀末 ~8 世紀前半)と考えられる。

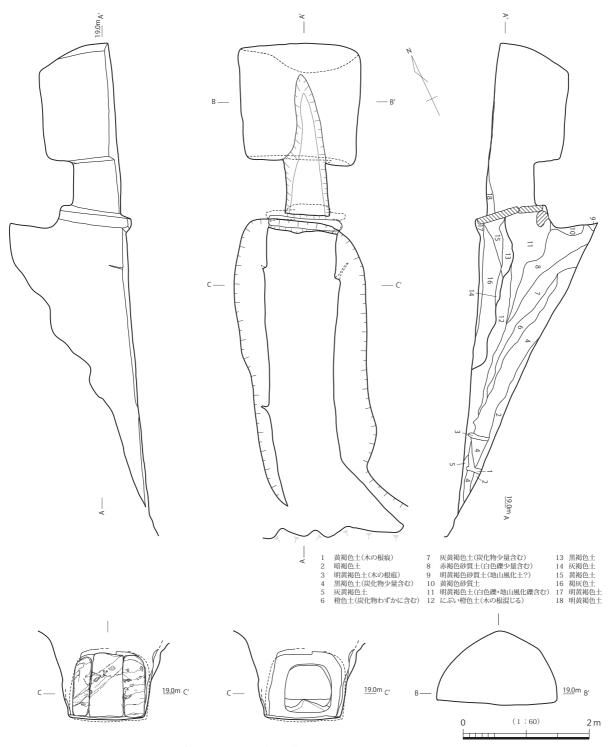


第164図 1号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

(2) 2号横穴墓(第165·166図 図版29·61)

1号横穴墓の西側に隣接し、1号横穴墓と同様に第1次調査で発掘調査が行われた。開口方向は S-25°-Wをとり、玄室床面の標高は概ね18.8mとなっている。

前庭部 奥行きは4.19 m, 幅は羨門側で1.24 m, 前庭端部側で1.84 mを測り, 平面形は縦長長方形である。 **羨 道** 奥行き0.67 m, 幅1.11 m. 高さ1.12 m であり, 平面形は横長長方形, 断面形はアーチ形である。



第165図 2号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

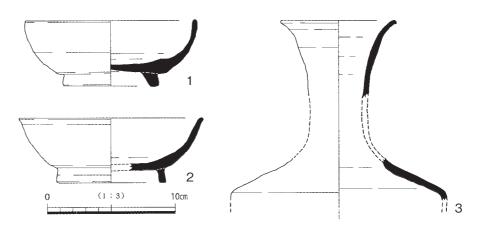
羨門の両袖は他の横穴墓に比べて幅狭であり、また緩やかな「ハ」の字状になっている。

閉塞部 凝灰岩製と思われる 3 枚の切石の閉塞石が確認された。床面に掘られた奥行き 38 cm, 幅 124 cm, 深さ 10 cmの溝に据えられている。石はそれぞれ $10 \sim 15$ cm程度の厚みを持ち、中央の石が幅 54 cmと最も幅広で、右側が幅 35 cm, 左側が幅 26 cmと続く。高さは右側の石からそれぞれ、99 cm, 102 cm, 94 cmである。これらは大きく動いた形跡はなく、閉塞状態を保っている可能性が高い。

玄 門 平面形は縦長長方形,断面形は台形に近いアーチ形で,奥行きは0.85m,幅0.65m,高さ

0.75m を測る。床面の 壁際から中央へと擂鉢 状に掘り窪められて いる。

玄 室玄室の平面形は概ね正方形であり、
奥行き1.86m、前壁幅1.72m、奥壁幅1.99m、
高さ1.15m である。天井部にはわずかに棟線



第166図 2号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

の表現が見られるものの不明瞭であり、ここではアーチ形と考えたい。奥壁は内傾しながら丸みを帯びて天井部まで立ち上がるが、前壁は垂直気味に立ち上がっている。なお玄室中央から玄門にかけての床面には溝が掘り込まれ、玄門側に向かうにつれて徐々に広がって玄門の擂鉢状の掘り込みとつながる。玄室内の排水用と考えられるが、屍床を左右で区別する意味合いの可能性もある。

加工痕跡 玄室内は各壁に削痕が確認でき、荒掘りや成形時の凹凸を丁寧に削っているようである。また、調査当時の写真(図版29)から前庭部の壁面に掘削時の横走りの稜線が残存することが分かる。 土層堆積状況 閉塞石によって玄室・玄門が閉塞されており、その状況を反映するように玄室内には埋土や流土が認められない。しかし、玄室内から遺物が出土しておらず、初葬時から閉塞状況のままであるのか、あるいは追葬などの際に再び閉塞されたものかは判然としない。玄門には18層がわずかに堆積しているが、これは閉塞石の間隙から流入したものであろうか。初葬時の閉塞状態を保っているとすれば、前庭部・羨道の床面上に堆積する13~17層は初葬時の埋土であったと判断でき、再閉塞されたのであればその際の埋土であろう。いずれの場合でも、その後に墓前祭祀などの再利用があったと見られ、その面は13・14・16層上面であったと思われる。11・12層はその後の埋土であろう。5~10層は自然堆積したものであると思われる。また2層からは弥生土器の底部小片が出土しており、2・4層は客土であった可能性が高い。

遺物出土状況 玄室内から遺物は出土せず、初葬時を保っているとすれば副葬品は伴わなかったということになる。追葬後に再閉塞されたと考えれば、その際に初葬時の遺物や堆積土を全て外へ掻き出したものと理解できよう。なお、2号横穴墓下の斜面周辺からは、須恵器の坏身(1・2)や長頸壺(3)が出土しており、これらは墓前祭祀に伴うものが転落、あるいは掻き出されたと考えられる。その他、小片のため図化できなかったが、赤彩された土師器片を確認した。

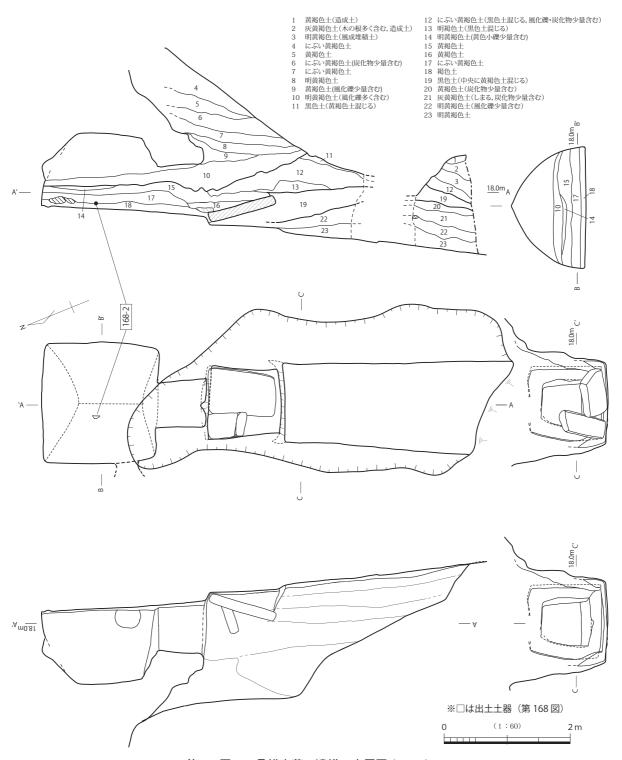
出土遺物(第166図 図版61) 1・2は須恵器の高台付坏身で、1の高台は緩やかに「ハ」の字に開くが、2はほぼ直立する。3は須恵器の長頸壺で復元口径は8.8cmを測り、外反する口縁部とやや扁平な肩部を持つ。

時期 玄室内は閉塞状態を保っていたが遺物の出土はなく、初葬の時期は不明である。墓前祭祀の時期は、出土遺物から見ると出雲7~8期頃であったと思われる。

(3)3号横穴墓(第167·168図 図版30·61)

2号横穴墓の西側にあり、1・2号横穴墓と同様に市道杉沢線工事の際に発見され、第1次調査では玄室から前庭部の奥側周辺までが調査対象となっており、第3次調査では前庭部の調査を実施した。開口方向はS-22°-Wで、標高は玄室床面で約17.9mを測る。

前庭部 奥行きは3.21m であり、幅は現存する前庭端部側で1.48m、羨門側では1.24m を測る。羨道 から前端部にかけて緩やかに広がり、平面形は台形である。



第167図 3号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

羨 道 羨道床面は前庭部から段が付いて8cm程度高くなる。玄門側にかけてやや幅が広がるが、平面形は縦長長方形に近い正方形であり、奥行き1.15m、幅1.06mを測る。天井部の大部分が削平されているが、高さは1.08m 程度で床面と天井部の四隅が角張っており、断面形は正方形に近かったと推定される。

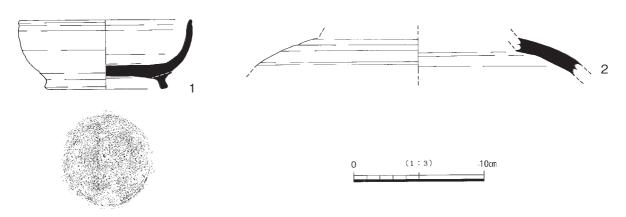
閉塞部 掘り込まれた溝は存在しないが、玄門と羨道との間には高さ11cmの段が形成されていた。 その手前に凝灰岩製と考えられる大小2枚の切石があり、前庭部側に倒れ込んだ状態であった。これ らは閉塞石として据えられていたと考えられる。大小2枚の石はそれぞれ幅64cm、高さ108cmと、幅 30cm、高さ60cm程度であり、15cm程度の厚みがある。石が倒れ込んだ下には土層が介在しているた め、それらの堆積後に手前に引き倒されたと考えられる。

玄 門 平面形は正方形, 断面形は縦長長方形に近い台形である。奥行きは0.76m, 幅は0.75m で, 高さは0.8m を測る。

玄 室 奥行きは1.85m, 幅は奥壁側で1.85m, 前壁側で1.68m を測り, 高さは1.2m である。平面形は正方形であり, 天井形態は妻入りテント形である。奥壁は内傾して天井部まで立ち上がり, 前壁はやや傾斜がきつい状態で立ち上がっている。なお, 奥壁には掘り込みが確認されたが, 後世のものであると考えられる。一方, 左壁には隣接する4号横穴墓の玄室と連結する穴が確認されているが, 横穴墓構築時に連なったのか, 後世に穿たれたものかは不明である。

加工痕跡 玄室内の一部は削られているものの, 当時の調査写真 (図版30) からは削痕が確認できるため, 丁寧に仕上げられていると思われる。前庭部の壁面には掘削痕跡が確認でき, 幅20~40cm前後の間隔で横走りする稜線が4条程度残される。稜線は下部ほどその間隔が狭い傾向にある。

土層堆積状況 前庭部の床面上に堆積する20~23層は初葬後の埋土および堆積土で,20層上面付近から須恵器の坏身(1)が出土しているため,20・22層上面で墓前祭祀が行われたと推測される。また,閉塞石が手前に引き倒される以前に堆積したと思われる19層はその後の埋土,あるいは堆積土で,閉塞石を倒した2次進入面は19層上面であると考えられる。そのため,倒れた閉塞石上面を覆って堆積する15~17層は2次進入後の埋土であった可能性がある。なお,玄室床面上に堆積する18層は,初葬時の埋土か,2次進入後の埋土かの判断が難しいが,遺物を含まず層中に地山礫などを含んでいるため,後者であったと考えたい。11~13層は2次進入後の埋土,あるいは堆積土である。土



第168図 3号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

層の堆積状況を見ると、 $11 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 15$ 層上面で進入を受けている状況が確認でき、2次進入面を示していると思われる。10層はその後の埋土の可能性がある。 $3 \sim 9$ 層は2次進入以後に自然堆積したものであろう。 $1 \cdot 2$ は市道工事の際の造成土であると思われる。

遺物出土状況 玄室内の17~18層中から須恵器の壺と思われる破片(2)が出土した。前庭部では、 上述のとおり20層上面付近から須恵器坏身(1)が出土しており、墓前祭祀に伴うものであろう。

出土遺物(第168図 図版61) 1は須恵器の高台付坏身である。底部外面に回転糸切り痕があり、高台は「ハ」の字状に開く。2は須恵器の壺の肩部と想定される破片で、外面にはカキメが一部に残る。時期 初葬の時期は不明であるが、墓前祭祀の時期は出雲8期頃であろう。

(4) 4号横穴墓(第169~171図 図版32・61)

4号横穴墓は第2次調査時に確認されて前庭部の一部が調査されたが、横穴墓の上部には別の掘削・埋戻し痕跡があり、第1次調査の際にその存在が確認されていた可能性がある。玄室の一部から 羨道部にかけての天井部が崩壊して風化が進んでいたが、それより下は概ね良好な残存状態であった。S-17°-Wに開口しており、玄室床面の標高は約17.3mである。

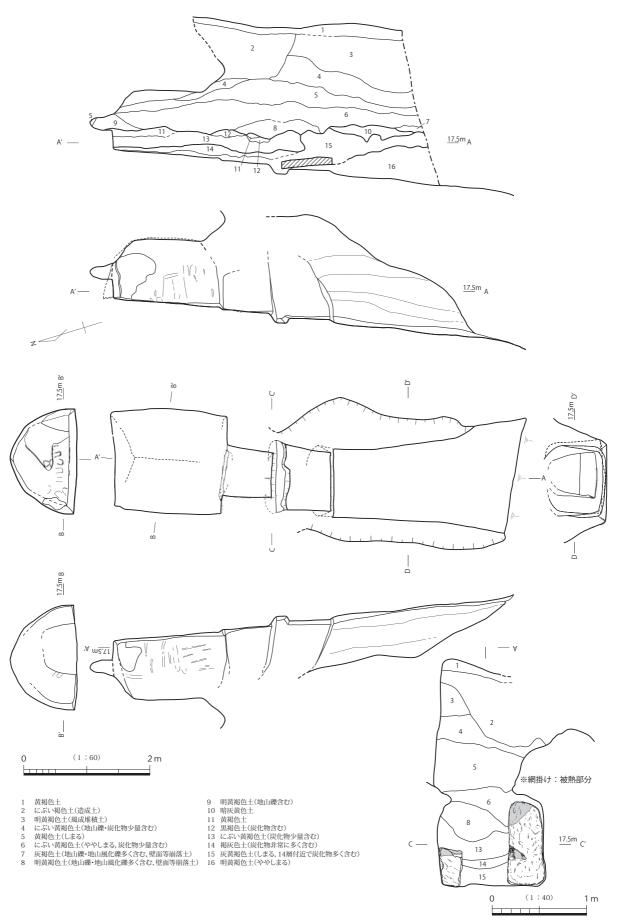
前庭部 奥行きは2.86m, 幅は羨門側で1.1m, 前庭端部側で1.83m となり, 平面形は台形である。前庭端部付近は地表面の風化が激しく, 凹凸が顕著である。

羨 道 奥行き 0.64m, 幅 1.02m であり、平面形は横長長方形となる。天井部が削られて欠損しているため確実ではないが、高さ 0.97m 程度で断面形はアーチ形であったと推測される。

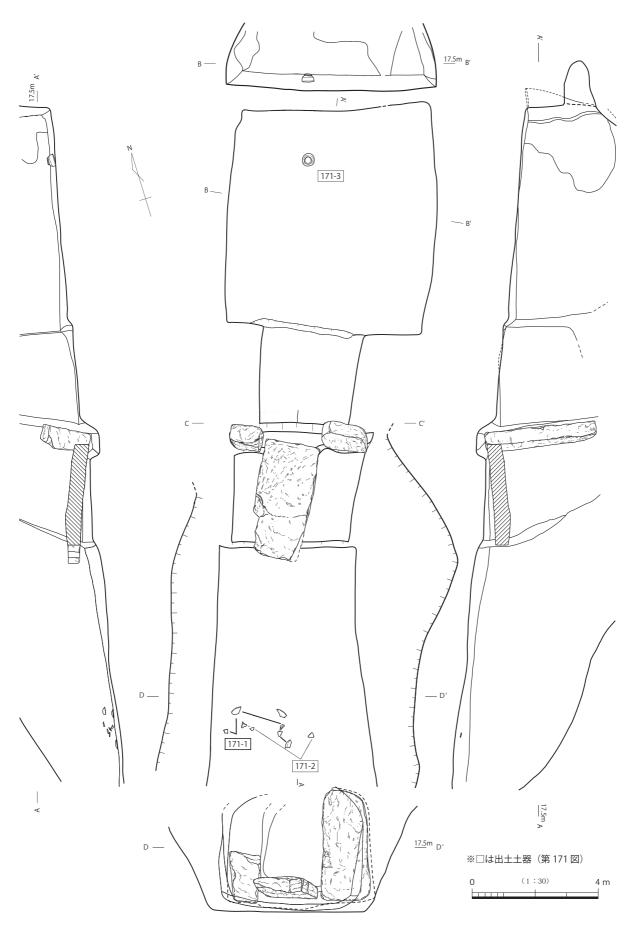
閉塞部(第170図) 大・中・小の3枚の切石が確認でき、中央の大型の石は幅45cm、高さ92cm、右側の中型の石は幅36cm、高さ88cm、左側の小型の石は幅24cm、高さ38cmを測る。厚さはそれぞれ概ね10~15cm程度である。これらの石を床面に掘られた奥行き30cm、幅114cm、深さ14cm程度の溝に嵌め込んで閉塞していたと思われる。しかし、良好な閉塞の状態を保っているのは右側の石のみで、中央の石は手前に引き倒され、左側の石は上部が折れて欠損した状態である。また、左右の石の表面には被熱した痕跡が認められる(第169図右下)が、倒れている中央の石の表面には被熱痕跡がないことから、初葬以後に中央の石を引き倒して進入した際に被熱したことが分かる。左側の石は破面にも被熱痕跡があり、被熱時には既に上半部が失われた状態であったと思われる。なお、中央・右側の石と左側の石とでは肉眼観察でも両者の石材に違いが見受けられたため、石材鑑定を実施したところ、右側はガラス質凝灰岩、左側は流紋岩自破砕溶岩であることが判明した(第7章第4節)。

玄 門 平面形は奥行き 0.77m, 幅 0.76m の正方形で、羨道から見るとやや東に振っている印象を受ける。羨道と同様天井部が崩壊しており、高さは不明である。

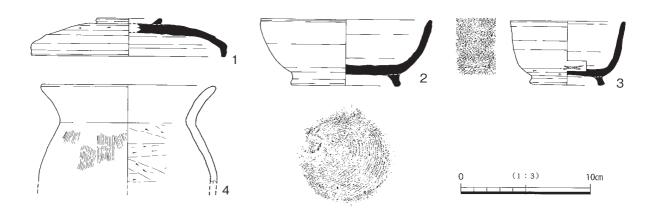
玄 室 奥行きは1.77m, 幅は前壁側で1.53m, 奥壁側は左隅が一部削られているが, 概ね1.53m 程度の幅であったと考えられ, 平面形は縦長長方形である。前壁付近までの天井部は崩壊しているが, その奥は表面の風化が激しいものの残存しており, 高さは1.06m 程度で, 天井形態は妻入りテント形である。内部の壁面は大きく改変を受け, 左右の壁には概ね幅40~60cm程度の穴が存在し, それぞれ隣接する3・5号横穴墓の玄室とつながっている。各玄室の位置関係から, 4号横穴墓は3・5号



第169図 4号横穴墓 遺構・土層図(1:60, 1:40)



第170図 4号横穴墓 閉塞石・遺物出土状況(1:30)



第171図 4号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

横穴墓の後に築かれたと推測されるが、これらは玄室の成形段階で連結したのか、後世の所産なのかは判然としない。また奥壁には幅75cm、奥行きが42cm程度の掘り込みが存在しており、これは後世に穿たれた可能性が高い。

加工痕跡 天井部は風化が著しいが、玄室内の各壁には加工痕が観察できる。荒掘り・成形段階の幅 10 cm程度の円刃痕や、斜め方向と縦方向の仕上げの削痕が確認される。前庭部の壁面には概ね20~40 cmの横走する稜線が2~4条確認できる。

土層堆積状況 16層は羨道から前庭部の床面直上に堆積しているが、層中から須恵器の坏蓋(1・2)の破片が出土しており、初葬以降に墓前祭祀が行われた際の埋土と考えられる。その後に中央の閉塞石を引き倒しており、1次進入があったことを示している。残りの左右の閉塞石には被熱痕跡が残存し、また埋土である14・15層には多量の炭化物が含まれていたため、1次進入時に何らかの理由で火を使用した痕跡を示すと考えられる。14・15層上面が2次進入面であり、10~13層はその後の埋土であったと考えられる。なお、14・15層中の被熱に伴うと見られる炭化物について、地点が異なる2点のサンプルの年代測定を実施したところ、どちらも11世紀中頃から12世紀中頃の年代が得られた(第7章第1節)。従って、これらは1次進入以後の時期を示す可能性が高い。3次進入面は10~13層上面である。7~9層は3次進入時に横穴墓の壁面などが崩落したものと推測されるが、その後に堆積した3~6層は地山の風成堆積土で層中の粒子が比較的均一で細かく、3次進入以降に自然堆積したと考えられる。その3・4層を削っている2層は市道杉沢線工事などの造成土で、掘削された後に再び埋め戻された層と考えられる。1層は堆積土であろう。

遺物出土状況(第170図) 完形を保った出土遺物は総じて少ないが、玄室床面直上から完形の須恵器の坏身(3)が逆位状態で出土した。初葬に伴う可能性も否定できないが、後述する前庭部出土の須恵器とほぼ同じ時期であり、その時期の追葬に伴って据えられたと考えられる。前庭部では16層中の床面付近の位置から須恵器の破片が散乱した状態で出土し、接合すると須恵器坏蓋・坏身(1・2)がそれぞれ1個体分に復元できた。前庭部での墓前祭祀において使用された際に破砕され、その場に散布されたと思われる。注目されるのは、坏蓋(1)が14号横穴墓出土の破片とも接合した点である。4・14号横穴墓はそれぞれ東群・西群に属し、互いにかなり離れた距離に位置するため、単なる混

ざり込みとは考えにくい。なお、14号横穴墓でも同様に前庭部で須恵器片が散乱しており、墓前祭祀が行われたと考えられるが、これら資料の接合関係から互いの横穴墓で墓前祭祀が同時に行われたことを示唆するのみならず、破砕した須恵器を複数の横穴墓に分けて意図的に散布したという具体的な祭祀行為までも見通すことができる。

出土遺物 (第171回 図版61) $1 \sim 3$ は須恵器蓋坏で,1 は輪状つまみを持つ坏蓋であり,天井部外面に回転ヘラケズリを施す。 $2 \cdot 3$ は高台付坏身で,2 は底部外面には回転糸切り痕が観察でき,高台は「ハ」の字に開く。3 は口径8.6 cm,底径4.8 cm,器高4.8 cmとやや小型である。底部外面には回転ヘラケズリが施されるほか,ヘラ記号が見られ,高台は「ハ」の字状になる。

4は土師器の甕で、胴部外面にハケメ、胴部内面にヘラケズリが確認できる。

時期 追葬や墓前祭祀の時期は、遺物の特徴から出雲7~8期頃と想定される。閉塞石を引き倒した1次進入の時期は、年代測定の結果から、少なくとも11世紀中頃から12世紀中頃より前である可能性が高いことが判明した。

(5) 5号横穴墓(第172~175図 図版33・62)

第2次調査の際に前庭部の発掘調査が実施され、それ以降露出していた前庭部壁面はやや風化が進んでいた。第3次調査の開始時に埋没していた羨道から玄室にかけては残りがよく、全体的にしっかりとしたつくりである。開口はS-43°-W方向であり、標高は玄室床面で17.1m程度である。

前庭部 奥行き4.16m, 幅は羨門側で1.59m, 前庭端部側で1.84m となり, 比較的広い前庭部が設けられて平面形は台形となる。正面から見て全体的にやや東に湾曲している。

羨 道 羨道は奥行き0.94m,幅1.12mであり,横長長方形の平面形である。天井の一部が削平されて残っていないが,高さは概ね1.08m程度であったと想定できる。玄門近くでは入隅が角張っており、断面形は正方形を意識して造られたと考えられる。羨門の袖幅は広くてしっかりとしており、また前庭部との境界に高さ20cmの明瞭な段が構築されている。

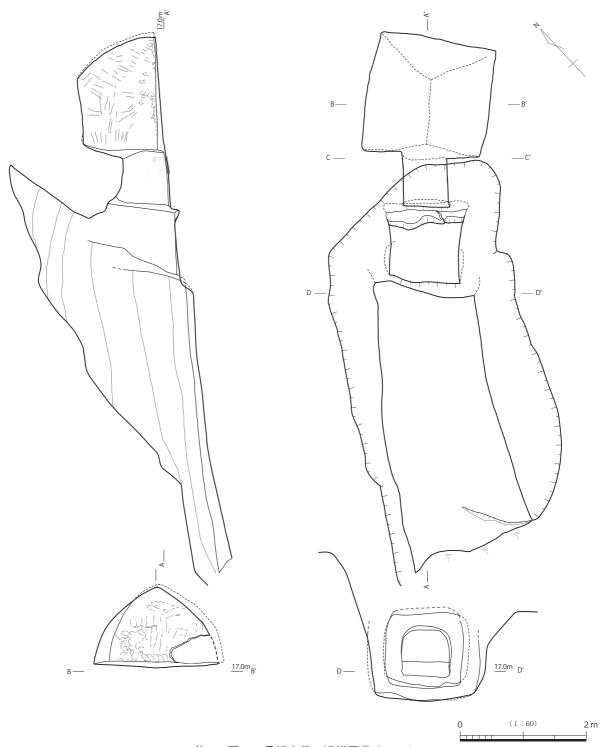
閉塞部 閉塞石などは残存していないが、それらを嵌め込むために掘られたと思われる奥行き $32\,\mathrm{cm}$ 、幅 $127\,\mathrm{cm}$ 、深さ $7\,\mathrm{cm}$ の溝が確認できる。

玄 門 玄門は奥行き 0.81m,幅0.74mで高さは 0.75mである。平面形はほぼ正方形の形状となる。 断面形については、入隅が角張っていないが正方形を指向したと思われ、隅丸の正方形となる。

玄 室 奥行きは1.86m, 幅は奥壁側で1.84m, 前壁側で1.85m を測り, 高さは1.27m である。平面 形は正方形であるが, 玄門側から見て全体的に軸が東へと振られてやや歪な印象を受ける。天井形態 は妻入りのテント形で, 壁の立ち上がりは前壁が垂直気味であるのに対して, 奥壁は内傾して緩やか に立ち上がる。なお, 右壁には4号横穴墓の玄室と連結する穴が存在する。

加工痕跡 玄室の各壁ともに天井から下半部辺りまで幅10cm程度の仕上げ調整の削痕が斜め方向に施されている。床面付近には成形段階のもと思われる平刃痕が確認できる。また、前庭部の壁面には掘削痕跡を示す横走りの稜線が6条程度確認でき、概ね幅30~60cm程度の間隔を持つ。

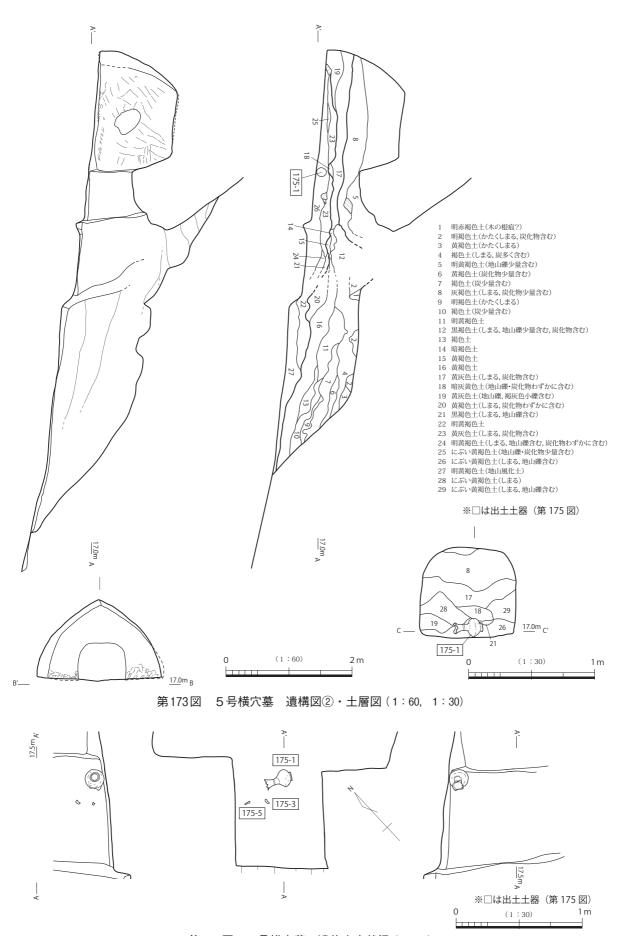
土層堆積状況 玄室から羨道の床面直上には26層が堆積しているが、玄室入口付近で須恵器の長頸



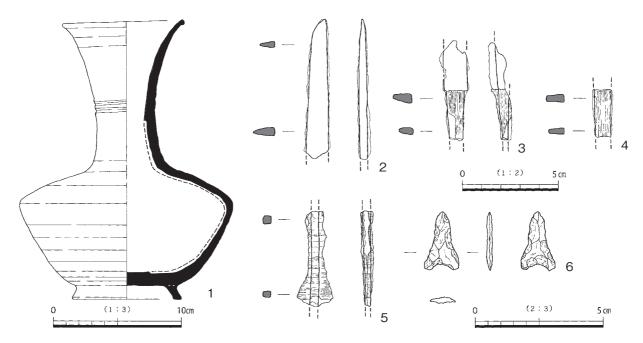
第172図 5号横穴墓 遺構図① (1:60)

壺 (1) が床面直上から出土しており、それが据えられた段階の埋土であったと思われる。 $21\sim25\cdot27$ 層も同時期の埋土であった可能性が高い。それらの上面が追葬などによる 1 次進入面であったと想定され、 $17\sim19\cdot28\cdot29$ 層は 1 次進入後の埋土であろう。 $12\cdot17$ 層上面は 2 次進入面で、 $5\cdot8$ 層はその後埋土、あるいは堆積土である。 $1\sim4\cdot6\cdot7\cdot9\sim16$ 層も埋土、または堆積土である。12 層は 2 次進入以前のものであるが、それ以外の土層の堆積時期は判然としない。

遺物出土状況 (第174回 図版62) 玄門の床面直上からは、ほぼ完形の須恵器の長頸壺(1)が倒れた



第174図 5号横穴墓 遺物出土状況(1:30)



第175図 5号横穴墓 出土遺物実測図(1は1:3,2~5は1:2,6は2:3)

状態で出土しているが、初葬に伴うとの確証を得ない。閉塞石などが残存していないため、追葬に伴って据えられた可能性が高いと考えられる。また、玄門の26層上面からは刀子 $(2\cdot 4)$ 、23層中からは刀子(3)と鉄釘(5)が出土しており、初葬以降に玄室内部から掻き出されたものであろう。その他、8層中からは石鏃(6)が1点出土した。

出土遺物(第175図 図版62) 1は須恵器の高台付長頸壺で、口径9.3 cm、底径7.2 cmで器高は21.6 cm を測り、肩部は比較的扁平で頸部に2条の沈線を持つ。底部外面は回転ヘラケズリを施し、高台は「ハ」の字状に開いている。

 $2\sim5$ は鉄器である。 $2\sim4$ は刀子であり,2 は刃部のみで残存長が7.2cm,刃幅が1.3cmである。3 は刃先と茎端部を欠き,残存長が5.2cm,刃幅が1.3cmである。4 は茎部の一部と思われ,残存長は2.5cmである。 $3\cdot4$ の茎部には木質が残る。5 は鉄釘で全体的に木質が付着している。

6は安山岩製の凹基無茎石鏃で弥生時代の所産であろう。

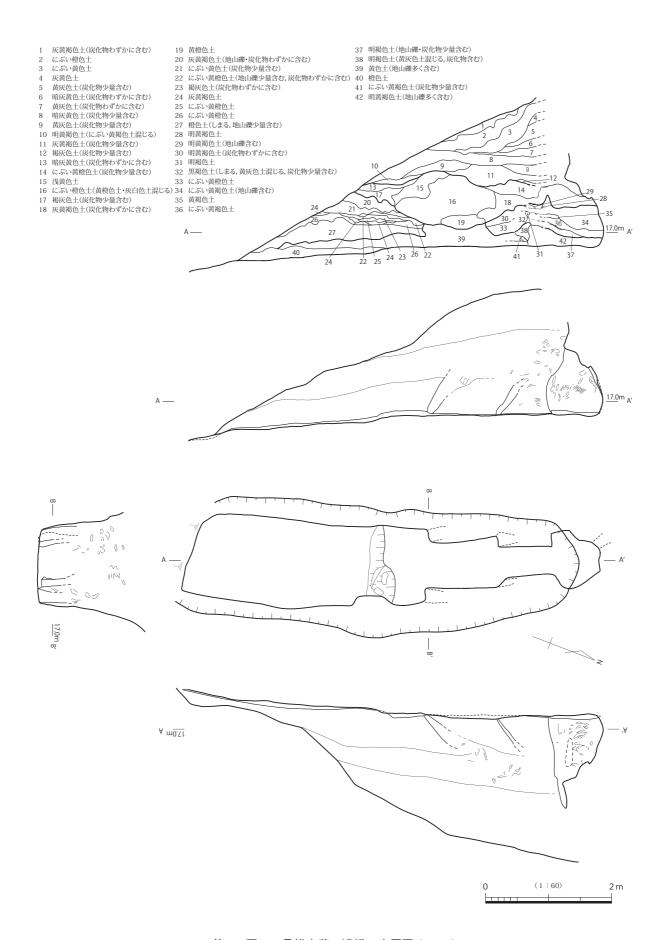
時 期 明確な初葬の時期は不明であるが、追葬の時期は出土遺物から見ると出雲7~8期頃であると考えられる。

(6) 6号横穴墓(第176図 図版34)

5号横穴墓と同様に第2次調査で一部が調査され、羨道まで掘り進められていた。玄室内部は狭小で壁面に荒掘り・成形痕跡が顕著であるため、造墓途中の横穴墓と推測される。なお、玄室手前から羨道の天井部は完全に崩壊していた。玄室床面の標高は16.8mで、開口方向はS-21°-Wである。

前庭部 奥行き3.79m,幅は羨門側で1.14m,前庭端部側で1.19mを測り,平面形は縦長長方形となる。前庭部中央よりやや羨道側の位置に7cm程度の段が設けられている。

羨 道 天井部が崩壊し、断面形態は不明である。羨門の一部は残存しており、比較的しっかりとし



第176図 6号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

た羨門であったと考えられる。羨道の奥行きは1.10m,幅は0.75mで、平面形は縦長長方形である。

閉塞部 閉塞施設の痕跡は確認できなかった。

玄 門 奥行き 0.82m, 幅 0.46m で平面形は縦長長方形である。天井部が崩壊しているため, 断面形態は分からない。

玄 室 現行で奥行き 0.71m,幅は 0.89m,高さは 1.06m である。玄室前壁が一部成形されているものの,玄室自体は非常に狭く,掘削途中段階の様相を示している。そのため平面形や天井形態は判然としない。なお,玄室左壁には地山の摂理面から生じたと思われる縦の細い割れ目が 7号横穴墓へと伸びている。後述する 7号横穴墓の玄室内の右壁に確認される掘り込みと連結する可能性がある。

加工痕跡 造墓途中の横穴墓であり、玄室内には荒掘り・成形段階の幅10~20cm程度の円刃痕が残されている。また羨道から玄室にかけての天井部が崩壊しているが、崩壊した後に付けられたと見られる円刃痕が玄室入口付近や羨道の崩壊面に確認できる。これは造墓当時、玄室内部が完成する前に何らかの理由で崩壊が起こり、その後に再度加工を施したことを示唆する。また、玄室がほとんど掘られていない段階にもかかわらず、羨門や玄門の袖はある程度成形されていることから、この横穴墓では一旦玄門まで形を整えた上で、最後に玄室を掘り進めるという掘削工程が想定できよう。なお前庭部の掘削痕跡を示す壁面の横走り稜線は2条確認されたが、他の横穴墓に比べて数が少ない。その幅は概ね40cm程度である。

土層堆積状況 玄室床面上の42層は地山礫を多数含み、玄室構築段階の掘削土であったと思われ、玄室掘削の途中で作業が終了したことが推測できる。 $38\sim41$ 層はその段階の埋土であった可能性がある。土層の堆積状況から $38\cdot39\cdot42$ 層上面が1次進入面であり、 $20\sim37$ 層はその後の埋土、もしくは堆積土であると判断できる。 $20\sim22\cdot28\sim30\cdot34\cdot39$ 層の上面が2次進入面であると考えられ、その埋土は $13\sim19$ 層で、 $13\sim16$ 層上面にも進入があった可能性がある。 $1\sim12$ 層は堆積土であろう。遺物出土状況 6号横穴墓からの出土遺物は確認できなかった。

時期遺物が出土していないため、横穴墓の掘削時期は不明である。

(7) 7号横穴墓(第177·178図 図版35·62)

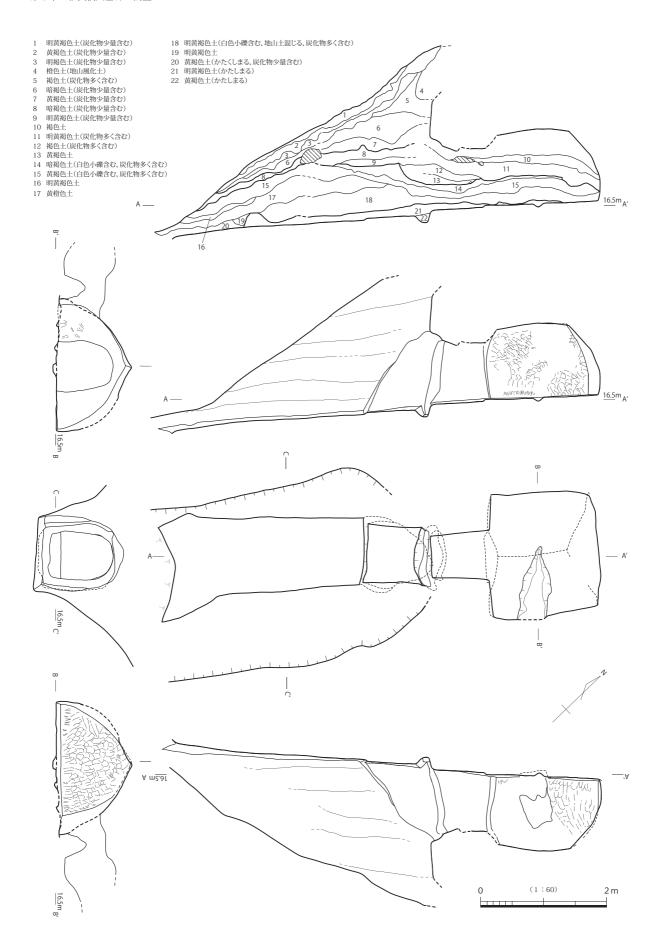
7号横穴墓は第2次調査の際に発掘調査が実施されており、第3次調査の開始時には既に開口した 状態であった。玄室床面における標高は16.5m、開口方向はS-44°-Wである。

前庭部 前庭部は奥行き3.03m, 幅は羨門側で1.07m, 前庭端部側で1.5m であり, 前庭端部付近はや や東に湾曲する形になっている。平面形は前庭端部のみが大きく広がる台形状である。

養 道 奥行き 0.76m, 幅 0.87m で平面形は正方形に近い。高さは 1.3m で断面形態は縦長のアーチ形となる。また羨門の袖が他の横穴墓と比べて幅狭である。

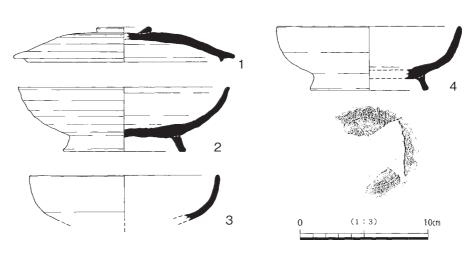
閉塞部 玄門手前には奥行き29cm,幅104cm,深さ10cmの溝が床面に掘られており、閉塞石などを 嵌め込んでいたと考えられるが、それらは確認できなかった。

玄 門 奥行き0.92m, 幅0.72m, 高さ0.96m である。平面形は縦長長方形である。断面形は縦長のアーチ形である。



第177図 7号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

玄室 奥行き1.76m,幅は奥壁側で1.75m,前壁側で1.92mを測り,平面形はやや台形に近い正方形である。高さは1.17mで天井形態は妻入りテント形であり,奥壁が緩やかに立ち上がるが,前壁の立ち上がりは直立に近い。玄室右壁には,縦



第178図 7号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

60cm, 横48cm程度で奥行きが140cm程度まで確認できる横穴が存在し、玄室内を横断する地山の摂理面に沿って6号横穴墓側へと続いている。6号横穴墓側に向かうにつれて狭小となり、全体を確認することはできなかったが、前述のように6号横穴墓の玄室内で見られた摂理の割れ目とつながる可能性がある。この穴には加工痕などは確認できず、人為的なものかどうかは不明である。

加工痕跡 玄室内の各壁に加工痕がよく残っており、比較的短いピッチで主に幅10cm前後の斜め方向の削痕が残り、丁寧に仕上げが行われている。床面付近には成形時のものと思われる円刃削痕が残る。また前庭部の壁面には掘削時の横走り稜線が5条確認され、その幅は20~60cm程度に収まる。

土層堆積状況 玄室内から前庭部までの床面直上に堆積する21・22層は固く締まっており、初葬、あるいは墓前祭祀後の埋土であろう。1次進入面は21層上面であり、19・20層はその際の掻き出し土の可能性がある。1次進入後の埋土は14~18層であり、14・15層上面が2次進入面の可能性が高い。その後玄室内から羨道にかけて10~13層が堆積しており、2次進入後の埋土ではないかと推測される。9層は2次進入に伴う掻き出し土で、8層は埋土である。3次進入面と思われる8層上面の堆積は羨道付近で止まっており、玄室まで進入することがなかったと思われる。6・7層は3次進入後の埋土、1~5層は堆積土である。

遺物出土状況 正確な位置は不明であるが、前庭部手前や床面上に堆積する $20 \cdot 21$ 層から須恵器の 蓋坏 $(1 \sim 4)$ が出土している。前庭部での墓前祭祀に伴うものであろう。その他、弥生土器片や赤彩を施した土師器片が確認されたが出土地点不明であり、また小片のため図化し得なかった。

出土遺物(第178図 図版62) 全て須恵器の蓋坏である。1は輪状つまみのある坏蓋であり、口縁部内面にかえりが付く。天井部外面に回転ヘラケズリが施される。2は高台付坏身で内外面ともに回転ナデが強く施され、外面の凹凸が著しい。底部外面にはヘラ切り痕が確認でき、その後ナデが施されている。高台は「ハ」の字状に大きく開く。1と2はセットである。3は坏身の口縁部片である。4は高台付坏身で底部外面には静止糸切り痕が認められる。高台は「ハ」の字状にやや広く開いている。時期出土遺物の時期は出雲6d~7期(7世紀後半~末)で、これらは墓前祭祀の時期を示していると考えられる。

(8) 8号横穴墓(第179:180図 図版36:62)

8号横穴墓についても、7号横穴墓と同様に玄室までの発掘調査が第2次調査時に実施され、第3次調査の際には既に開口していた。玄室床面の標高は概ね16.2mであり、開口方向はS-33°-Wとなっている。

前庭部 奥行きは3.79m, 幅は羨門側で0.99m, 前庭端部側で0.92m とやや幅狭である。羨門の手前付近には高さ8cm程度の緩やかな段が設けられている。床面は仕上げの調整がなされずに荒掘り・成形段階の円刃痕が残されているため凹凸が目立つ。中央の床面がやや左右に広がっているが、平面形は縦長長方形に近い。

羨 道 奥行き0.45m, 幅は0.76m であり, 平面形は逆台形となる。高さは1.09m を測り, 断面形態 はやや左右に膨らみがあり, 馬蹄形に近いアーチ形となる。羨門近くの床面には左右2ヵ所の掘り込みが確認できるが, これらは荒掘り・成形段階の円刃痕の可能性があるが, 判然としない。

閉塞部 羨道と玄門の間には閉塞石などの嵌め込みに利用された奥行き33cm,幅100cm,深さ4cmの 溝が床面に確認できる。閉塞石などは残存していない。

玄 門 奥行き 0.86m, 幅は 0.67m となり, 平面形は縦長長方形である。高さは 0.71m で断面形はアーチ形に近い隅丸台形である。

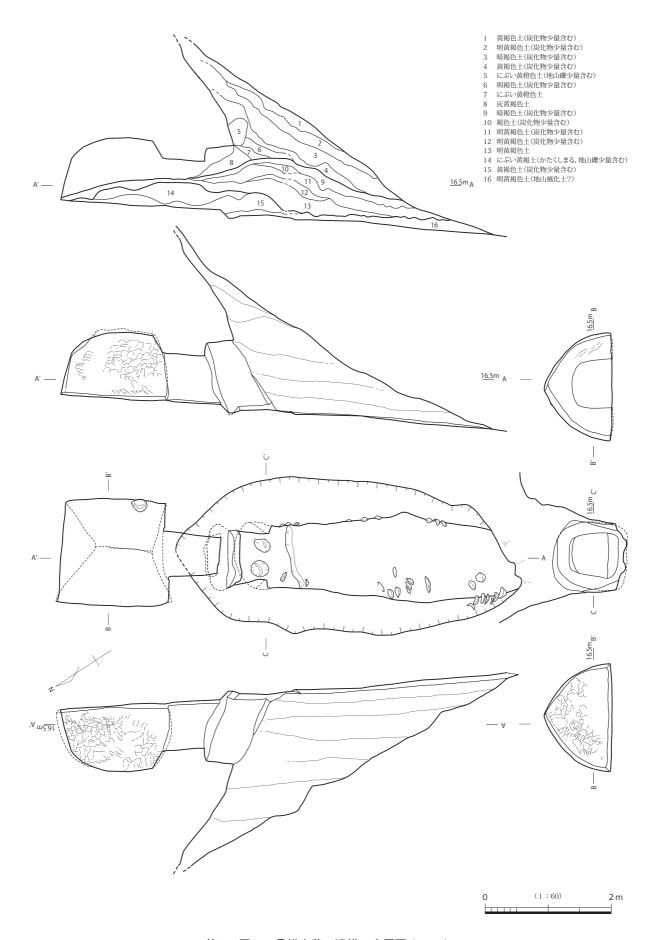
玄 室 奥行きは1.67m, 奥壁の幅は1.58m, 前壁側の幅は1.57m を測り, 概ね正方形である。高さは1.08m で、天井形態は妻入りテント形である。

加工痕跡 前庭部から玄室にかけての床面には荒掘り・成形時の10~20cm幅程度の円刃痕が確認できる。一方、玄室各壁面には仕上げ調整の削痕が多く確認でき、8号横穴墓の場合は最終的な仕上げ調整を玄室側から進めたと考えることもできる。前庭部の壁面には横走する5~6条の稜線が幅20~60cmの間隔で残され、前庭部の掘削痕跡を示している。

土層堆積状況 前庭部の床面直上に堆積する16層中から須恵器の坏蓋片 (3) が出土しており、墓前祭祀後の埋土、あるいは掻き出し土である可能性がある。 $14\cdot15$ 層は同時期の埋土であり、ここでは掲載していないが前庭部断面などの土層の堆積状況から、 $14\cdot15$ 層上面が1次進入面であったと判断した。 $9\sim13$ 層は1次進入後の埋土である。9層上面は2次進入面で、 $4\sim8$ 層はその進入後の埋土であろう。 $1\sim3$ 層は自然堆積土であったと思われる。

遺物出土状況 前述のとおり,前庭部床面直上の16層中から須恵器の坏蓋片(3)が出土した。その他,前庭部下の斜面から須恵器の坏蓋片(1・2・4)や坏身片(5・6・7)が出土している。これらは墓前祭祀に伴う遺物であると思われるが,墓前祭祀において意図的に散布されたのか,墓前祭祀後に掻き出されたのかは不明である。

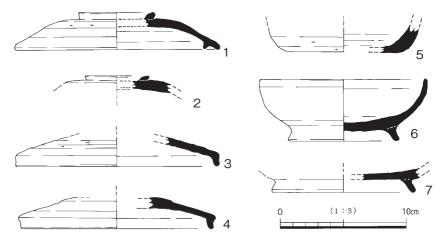
出土遺物 (第180図 図版62) 全て須恵器の蓋坏で、 $1 \sim 4$ は坏蓋である。 $1 \cdot 2$ は輪状つまみのある坏蓋で、1 は口縁部内面にかえりが付き、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。2 も同じく天井部外面に回転ヘラケズリが確認できる。 $3 \cdot 4$ は口縁部片で、3 には天井部外面に回転ヘラケズリが認められる。 $5 \sim 7$ は坏身で、5 は底部外面に回転ヘラケズリが施されている。 $6 \cdot 7$ は高台が付き、6 の底部はヘラ切り後ナデが施され、高台は「ハ」の字状となる。7 は復元底径が10.8 cm であり、



第179図 8号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

高台は「ハ」の字状に大きく開く。

時期 初葬の時期は不明であるが、出土遺物から考えると、墓前祭祀の時期は出雲編年6d~8期頃(7世紀後半~8世紀前半)であろうと思われる。



第180図 8号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

第2項 西群の調査

(1)9号横穴墓(第181図 図版37)

9号横穴墓は杉沢横穴墓群の東群と西群の中間地点に位置し、単独で存在している。また開口方向もS-31°-Eとなり、横穴墓群のなかで1穴だけ異なる向きに開口する。玄室内は荒掘り・成形時の掘削痕跡が多数残されたままで不整形であり、未完成の状態であると思われる。なお、第2次調査によって前庭部と羨道の一部が調査されており、第3次調査の開始時には前庭部左壁が一部崩落して羨道から奥が埋没した状態であった。玄室床面の標高は概ね14.9mである。

前庭部 奥行きは3.45m, 羨門側の幅は1.24m, 前庭端部側で1.88m であり, 平面形は他の横穴墓と 比べてやや縦長の台形状である。

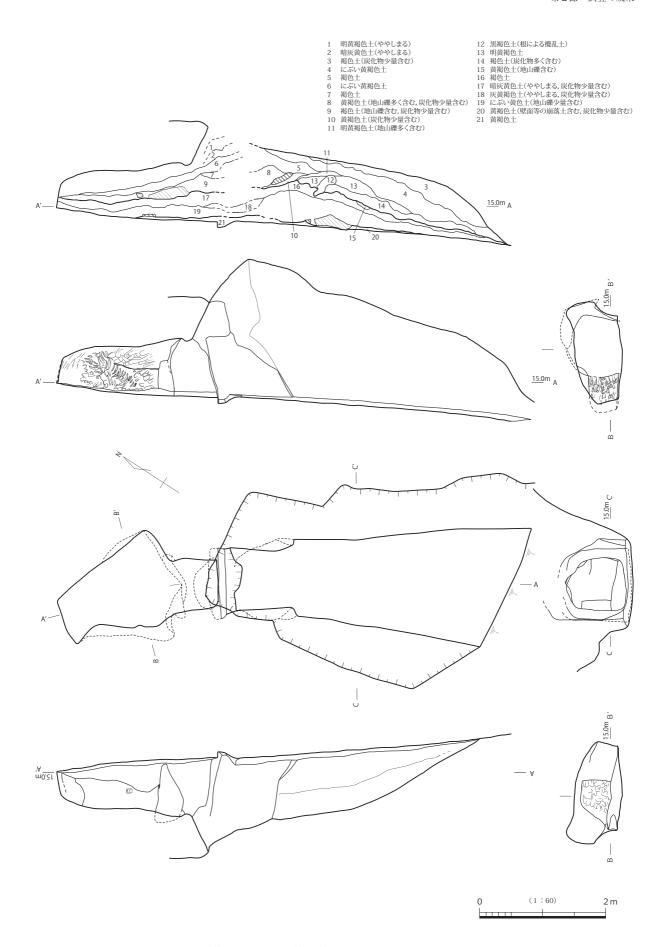
美 道 奥行き 0.86m, 幅 0.94m となり、平面形は正方形に近い。羨門の袖幅が比較的狭く造られている。天井部が崩壊しているため高さは不明であるが、断面形態はアーチ形であったと思われる。

閉塞部 閉塞石などは残っていないが、それらを嵌め込んだと思われる奥行き34cm、幅111cm、深さ10cmの溝が床面に確認できる。

玄 門 奥行き 0.75m, 幅 0.8m でほぼ正方形に近い平面形である。羨道と同様に天井部の一部が削平されており、高さは不明である。天井形態はアーチ形に近い隅丸台形であったと推測される。

玄 室 玄室内は掘削が途中段階であるためか、高さは0.77mと低く、全体的に狭小である。奥行きは1.87mであり、幅については奥壁側で0.75m、前壁側で1.54mとなり、奥壁が完全に成形されていない状態と判断される。造幕途中段階のため平面形は不整形であり、天井形態は不明である。

加工痕跡 造墓途中の横穴墓であるが、玄門まではある程度仕上げ調整が進んでいたと思われる。玄室内は狭小で多くの荒掘り・成形時の掘削痕跡が認められる。玄室左壁は崩落しているが、荒掘り時の方形の刺突痕が確認できる。玄室右壁・奥壁・前壁や天井部の奥側には、幅10~20cm前後の円刃・平刃削痕が数多く残され、成形途中の様相を示しているが、天井部の手前側は仕上げ調整時のものと思われる削痕が残存している。天井部の手前側から奥に向かって順次平滑に仕上げる途中で終了した可能性がある。前庭部の掘削痕跡としては、左壁に横走りの稜線が1条確認されるのみである。



第181図 9号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

土層堆積状況 $20 \cdot 21$ 層は床面全体に薄く堆積しており、埋土または堆積土であろう。上面には大型の地山礫があり、1 次進入面を示すものと思われる。 $18 \cdot 19$ 層はその後の埋土である。これらは全体的に締まりがない。 $15 \sim 17$ 層も同様に埋土であるが、17 層は比較的固く締まっており、それらの層の上面が2次進入面であったと思われる。なお、玄室内の17 層上面には天井が崩落した際の大型の地山礫が横たわり、10 層上面には進入の際に羨道の天井を削った痕跡を示すと思われる地山礫が確認できる。 $8 \sim 14$ 層は2 次進入後の埋土、 $1 \sim 7$ 層は堆積土であったと想定される。

遺物出土状況 9号横穴墓から遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため、横穴墓の掘削時期は不明である。

(2)10号横穴墓(第182~184図 図版38・62)

10号横穴墓は、丘陵の地山上面から深い位置に前庭部床面が掘り込まれており、地山上面と前庭部床面との高低差が大きい。また、第2次調査の際に前庭部の一部のみが調査されたが、大部分は第3次調査によって確認した。開口方向はS-6°-Wで、標高は玄室床面で概ね11.6m程度と横穴墓群の中でも比較的低い位置に造られている。

前庭部 奥行き3.62m, 幅は羨門側で1.19m, 前庭端部で2.28m となり, 平面形は台形である。床面は前庭端部に向かって傾斜するが, 風化や流水などによる浸食作用の影響を著しく受けたとみられ, 床面の凹凸が目立つ。

羨 道 奥行き 0.82m, 幅 1.16m で横長長方形の平面形である。高さは 1.24m であり,断面形態はアーチ形である。なお羨門の袖幅が狭く,前庭部と羨道の境が曖昧な印象を受けるところもあるが,前庭部との間には 7 cm程度の段が設けられており,羨道と前庭部が区別されていたことが分かる。

閉塞部 羨道と玄門の間に明確な閉塞施設の痕跡は認められなかった。

玄 門 平面形は正方形に近く,奥行き 0.83m,幅 0.81m である。床面が玄室に向かって傾斜し,玄室と玄門との間が落ち込み状になっているが、明確な掘り込み痕跡は確認できず、また床面は水分を含んで締まりがないため、浸食作用によって削られた可能性が高いと思われる。断面形態はアーチ形であり、高さは 0.88m 程度であったと想定できる。

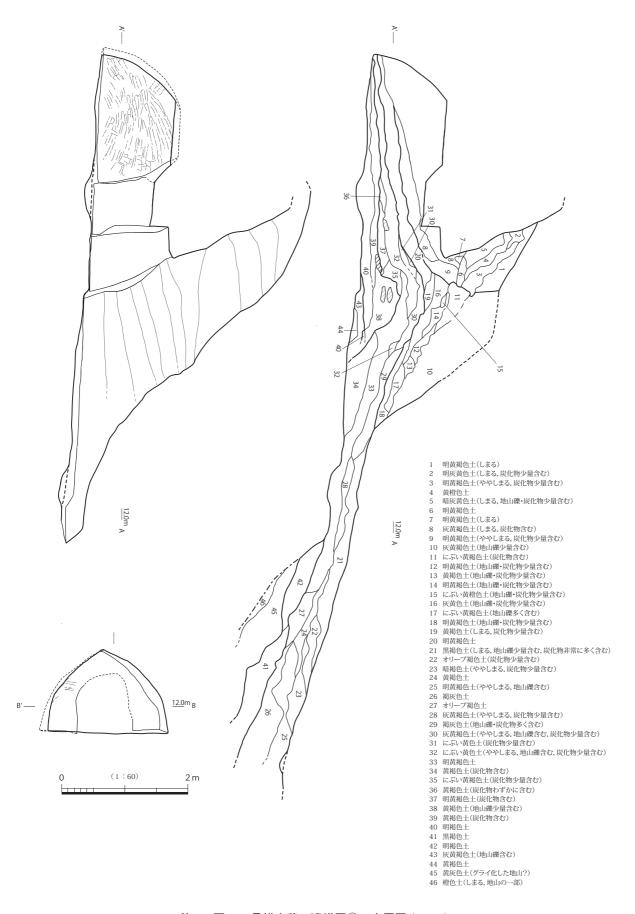
玄 室 奥行き2.06m, 奥壁幅1.81m, 前壁幅1.90mとなり, 縦長長方形の平面形である。高さは1.33mで, 天井形態は妻入りテント形である。テント形を持つ他の横穴墓と比べて天井が高く, また奥壁・前壁ともに湾曲して立ち上がっており, 天井部の棟線が比較的短い。

加工痕跡 玄室内の各壁には横から斜め方向の削痕が多数確認でき、壁面は平滑に仕上げられている。その幅は $10 \, \mathrm{cm}$ 前後のものが多い。なお玄室の天井が高く、玄室全体をドーム状に成形した後に天井部をさらに掘り上げており、出雲東部に多いドーム系の掘削技法 7 に基づいて形成され、テント形に仕上げられた可能性が考えられる。前庭部の壁面には横走りする掘削時の稜線が残されている。丘陵の地山面から深く掘り込まれているため、その数は $8 \sim 10 \, \mathrm{条程度} \, \mathrm{と他の横穴墓}$ よりも多く、間隔は $60 \, \mathrm{cm}$ を越える場合もあるが概ね $20 \sim 40 \, \mathrm{cm}$ 前後に収まっており、比較的細かく丁寧に掘削されたことがうかがえる。



第182図 10号横穴墓 遺構図①(1:60)

土層堆積状況 羨道床面に堆積している $43\cdot 44$ 層は、その堆積状況から初葬時の埋土であったと考えられる。 1 次進入面は 43 層上面で、 $38\sim 40$ 層は埋土であろう。 2 次進入面は $38\cdot 39$ 層上面で、 $41\cdot 42$ 層上面はその時の地表面であると考えられる。 $35\sim 37$ 層は掻き出し土、 $27\sim 34$ 層は埋土である。 $21\sim 26$ 層はその後の堆積土であろう。 $29\cdot 30$ 層上面は 3 次進入面であり、 $11\sim 20$ 層は埋土である。 10 層は堆積土であるが、土層の堆積状況から 10 層の堆積後に最終の 4 次進入面が確認できる。



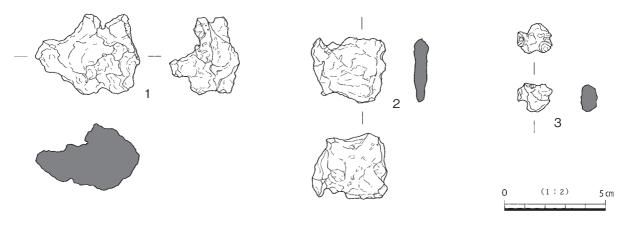
第183図 10号横穴墓 遺構図②・土層図 (1:60)

進入面は $10 \cdot 11 \cdot 16 \cdot 19 \cdot 20$ 層上面であるが、他の進入面とは異なり、前庭部の上面から縦に穴を掘るようにして狭い隙間を潜り抜けて玄室内へ進入しているため、盗掘穴もしくは動物の進入穴であった可能性が高い。 $1 \sim 9$ 層は堆積土であろう。 $45 \cdot 46$ 層は地山もしくは地山の一部である。

遺物出土状況 玄室内右壁際の39層上面付近より人骨と思われる骨片が出土した。2次進入時に伴うものかもしれないが、小片で遺存状態が悪く、部位の特定には至らなかった。その他、前庭部より 鉄滓が2点出土している(1・2)。正確な層位は不明であるが、横穴墓周辺に鍛冶関連遺構はなく、 埋葬や墓前祭祀に伴う遺物ではないかと思われる。

出土遺物 (第184図 図版62) $1 \cdot 2$ は鉄滓で、1 の破面には気泡が確認でき、磁着度3 で鉄分を含むがメタル度はHと低い $^{8)}$ 。2 は磁着度1 でメタル度はない。

時期 時期が判別できる遺物の出土がないため、初葬などの時期は不明である。



第184図 10・13号横穴墓 出土遺物実測図(1:2)

(3)11号横穴墓(第185図 図版39)

11号横穴墓は第2次調査の際にその存在が確認されていたが、第3次調査において初めて発掘調査を実施した。開口はS-5°-Wで、玄室床面の標高は約12.8mである。

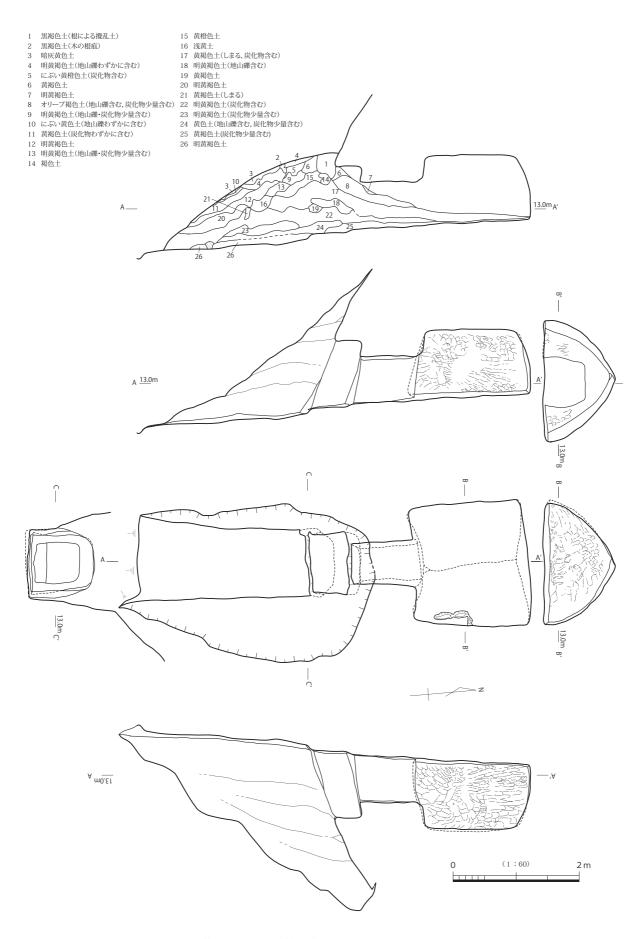
前庭部 奥行き2.67m, 幅は羨門側で1.05m, 前庭端部側で1.47m であり, 横穴墓群全体の中でも床 面積は比較的小さい。平面形は台形である。

羨 道 平面形は横長長方形で、奥行き0.56m、幅0.97m を測る。また高さは1.07m で、断面形態は 左右に若干膨らむ隅丸台形である。羨門の袖幅は狭いが、前庭部と羨道との間には6cm程度の段が設 けられ、両者の区別が明瞭になされている。

閉塞部 閉塞石などやそれらを嵌め込む溝などの明確な閉塞施設は確認できなかった。

玄 門 奥行き 1.0m, 幅 0.67m で平面形は細長い縦長長方形となる。高さは 0.74m で断面形態は正方形に近い台形である。羨道との間に 4 cm程の低い段が設けられている。玄門内の入隅には明確に稜線が認められ、方形を意識して精美に造られている印象を受ける。

玄 室 奥行きは1.8m で,幅は奥壁側で1.98m,前壁側が短く1.68m となり,平面形は逆台形に近い正方形を呈する。高さが1.12m とかなり低くなっており,天井形態は妻入りのテント形であるが,他と異なり前壁とともに奥壁も垂直気味に立ち上がり,天井の棟線が長い。



第185図 11号横穴墓 遺構・土層図(1:60)

加工痕跡 玄室内の奥壁下部に幅10~20cm程度の円刃痕が残されているほかは、主に幅10cm前後の 仕上げ調整時の削痕が各壁面に多数確認でき、丁寧に仕上げられている印象を受ける。前庭部の両壁 面には横走する掘削時の稜線が4条確認され、その間隔は概ね30~50cm程度である。

土層堆積状況 前庭部の床面上に堆積する23~26層は、初葬もしくは墓前祭祀後の埋土と考えられるが、全体的に締まりがなく、自然堆積土の可能性も否定できない。また、それらの上層は埋土もしくは堆積土であると思われるが、堆積状況からは明確な進入面の検出が困難であったため、追葬などの痕跡は判然としない。

遺物出土状況 11号横穴墓からの遺物は確認できなかった。

時期 初葬などの時期は不明である。

(4)12号横穴墓(第186~188図 図版40)

12号横穴墓も他の10~15号横穴墓と同様,第2次調査の際に確認されていたが,実際に発掘調査を行ったのは第3次調査が初めてである。全体的に狭小であり、杉沢横穴墓群のなかで最も規模が小さい。開口方向はS-2°-Eで、玄室床面の標高は概ね12.7m 程度である。

前庭部 奥行き2.04m, 羨門側の幅1.01m, 前庭端部側の幅は1.32m である。平面形は台形状となる。 地山の節理面が床面上を横断しており、その付近を中心に凹凸が目立つ。床面の最終的な仕上げ調整 がなされていない状態であったのかもしれない。

羨 道 奥行き 0.63m, 幅は 0.91m であり, 横長長方形の平面形である。断面形態は馬蹄形に近いアーチ形である。高さは 0.95m を測る。

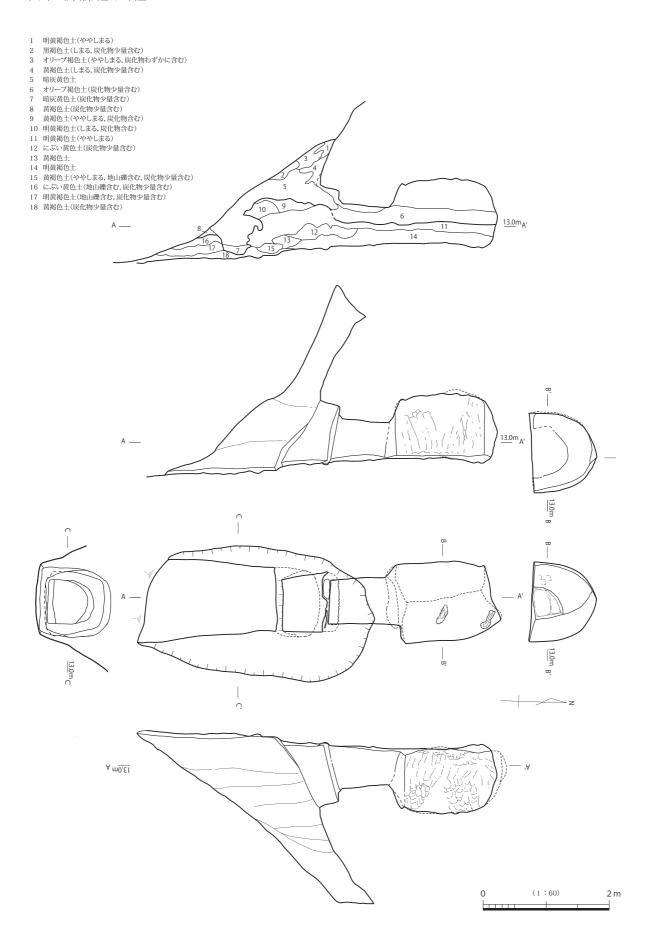
閉塞部 閉塞部には, 奥行き13cm, 幅41cm, 深さ6cmと奥行き9cm, 幅41cm, 深さ5cmの2つの溝が確認された。閉塞石などを嵌め込むための溝と思われるが, 詳細は不明である。

玄 門 平面形は縦長長方形で、幅は0.73m、奥行きが1.02m と細長い形状である。高さは0.67m で断面形態は隅丸台形であるが、隣接する11号横穴墓ほどしっかりと入隅の稜線が掘り込まれておらず、ややアーチ形に近い。

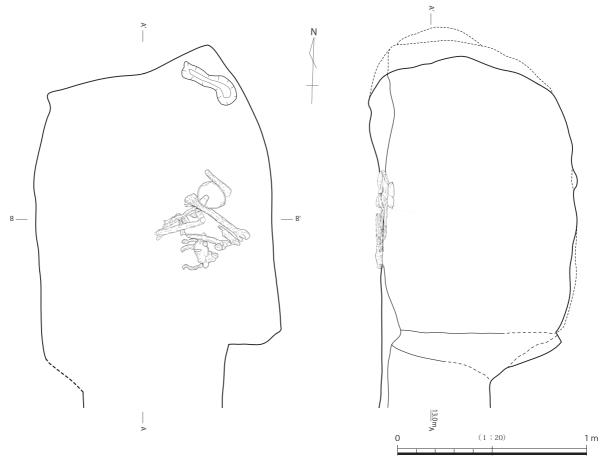
玄 室 全体的な成形・仕上げが未完成であると思われる。奥行き1.57m, 奥壁幅0.89m, 前壁幅1.26m であり, 現況では不整な縦長長方形の平面形を呈する。高さは1.03m を測り, 天井形態は掘削段階のためか, やや不整形な妻入りテント形となっている。なお, 奥壁には幅50cm, 奥行き20cm程度の三角形の掘り込みが存在するが, これは後世に掘られたものであろう。

加工痕 玄室内の各壁面は崩落,風化が進んでおり調整が確認できない部分があるものの,両側壁には概ね上から下へ縦方向に削痕が確認され,右壁の天井部付近には仕上げ調整の削痕が確認される。前庭部には間隔が20~40cm程で2~6条程度の横走りする稜線が掘削痕跡として残っている。

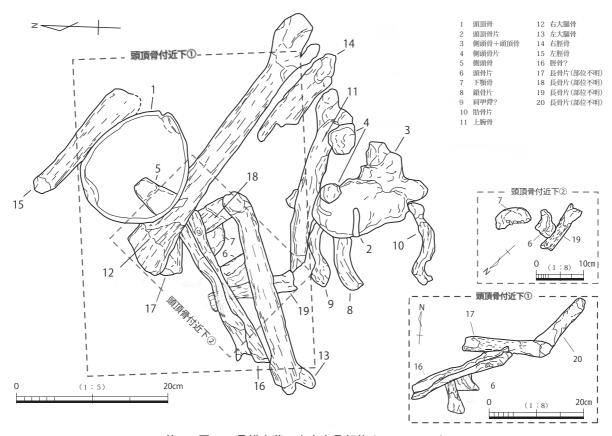
土層堆積状況 玄室床面上から人骨が出土した。帰属時期が不明であったため、年代測定を実施したところ、11世紀中頃から13世紀後半にまで下る可能性のあることが示された(第7章第1節)。そのため、少なくとも人骨が埋葬された時点では初葬などに伴う玄室内の遺物や埋土はほぼ取り除かれ、玄室内に堆積している土層はそれ以降の時期のものであると認定できる。9~18層は比較的締まりが



第186図 12号横穴墓 遺構・土層図(1:60)



第187図 12号横穴墓 人骨出土状況 (1:20)



第188図 12号横穴墓 出土人骨部位(1:5, 1:8)

ある土層が多く,人骨埋葬に伴う埋土であったと思われる。また堆積状況から, $9 \sim 11 \cdot 16 \sim 18$ 層上面は人骨埋葬後の進入面, $5 \sim 7$ 層はその後の埋土の可能性がある。 $1 \sim 4$ 層は堆積土である。

遺物出土状況 (第187図) 玄室内では床面より人骨が出土しているが、風化・劣化が進み遺存状態はあまり良好ではない。出土状況から見れば、その場で埋葬されたのではなく集骨された可能性が高いと思われる⁹⁾。なお、玄室内の床面付近の14層中からは骨粉が散見され、今回確認できた部位のほかに土壌化して既に消失した部位があったものと思われる。

出土遺物(第188図 図版40) 今回検出された人骨は概ね1体分で、確認できた部位を図示した。また年代測定の結果、帰属時期は11世紀中頃から13世紀後半の可能性が高いと思われる。その他の遺物は出土しなかった。

時 期 初葬の時期は不明であるが、出土人骨の年代測定によって11世紀中頃から13世紀後半の時期に横穴墓の再利用が行われたことが判明した。

(5)13号横穴墓(第184·189図 図版41·62)

13号横穴墓の発掘調査は第3次調査が初めてであったが、第2次調査時にその存在は認識されていた。全体的に丁寧な仕上げ調整が施されており、5号横穴墓と同様に杉沢横穴墓群の中でも非常にしっかりとしたつくりである。開口方向はS-4°-Wとなり、玄室床面の標高は12.9m 程度である。

前庭部 美門から丘陵端部までの奥行きは4.45m であるが, 前庭部には高さ12cm程度の段が設けられており, 美門から段までは奥行き2.19m を測る。段から丘陵端部にかけては, 左に隣接する14号 穴横穴墓の前庭部と連なって共有されているため, 厳密には美門から段までが13号横穴墓の前庭部として認識され, その先は14号横穴墓との共有のテラスであった可能性がある。なお美門側の幅は1.4m, 段上の幅は1.81mとなる。平面形は台形である。

羨 道 奥行き0.98m,幅は1.21mを測り,平面形は横長長方形である。高さは1.05mで,断面形態は隅丸台形となる。全体的に丁寧に仕上げられているが,羨門の天井部分が一部欠損しており,これは横穴墓の成形時に意図的に打ち欠かれたものか,それ以降に削られたものかは判然としない。

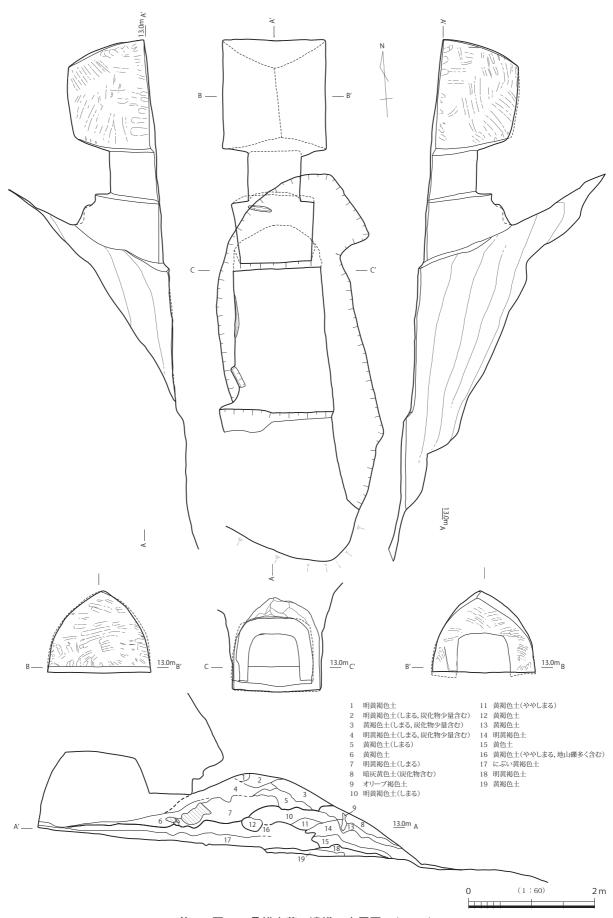
閉塞部 閉塞施設と思われる痕跡は確認できなかった。

玄 門 奥行き 0.8m, 幅 0.83m を測り,正方形の平面形である。高さは 0.74m,断面形態は隅丸の正方形となり、丁寧に成形・調整されている。

玄 室 玄室の奥行きは1.78m,幅は奥壁側で1.63m,前壁側で1.62mを測り,平面形は正方形である。 高さは1.31mと比較的高い。天井形態は妻入りテント形で,壁面は丁寧に仕上げ調整が施されて精美 な印象を受ける。

加工痕 玄室内の各壁とも横から斜め方向の幅10cm前後の削痕が多数確認され、荒掘り・成形時の 痕跡が丁寧に削られて壁面が平滑に整えられている。そのため成形時の痕跡が残っていないが、玄室 の天井が高く、10号横穴墓と同様にドーム系の掘削技法によって造られた可能性がある。前庭部の 壁面には掘削時の横走り稜線が5条程残存し、間隔は20~40cm程度である。

土層堆積状況 18·19層は前庭部の床面直上に堆積し、初葬時の埋土であったと思われる。その上



第189図 13号横穴墓 遺構・土層図 (1:60)

面が 1 次進入面の可能性がある。土層の堆積状況から $16 \cdot 17$ 層は 1 次進入後の埋土, $16 \cdot 17$ 層の上面が 2 次進入面であったと考えられる。 $8 \sim 15$ 層は 2 次進入後の埋土であろう。その上面には欠損している羨道の天井部に由来すると思われる大型の地山礫が堆積しており,その面が天井部を一部削って進入した 3 次進入面であると判断した。従って, $1 \sim 7$ 層は進入後の埋土もしくは堆積土であっと考えられる。

遺物出土状況 正確な位置は不明であるが,玄室内の床面付近から鉄滓の小片(第184図3)が出土している。埋葬に伴う副葬品である可能性が高い。

出土遺物(第184図 図版62) 3は鉄滓の小片で、長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測る。破面にわずかに気泡が観察できる。磁着はなく、メタル度もない。

時期 初葬などの時期は不明である。

(6)14号横穴墓(第190~192図 図版42・63)

14号穴横穴墓についても第2次調査時に存在が確認されていたが、第3次調査によってその内容が明らかになった。開口方向はS-6°-Eで、玄室床面の標高は12.4m 程度である。

前庭部 奥行き4.39m, 幅は羨門側で幅1.36m, 前庭端部側で2.5m となり, 平面形は台形である。右側壁に沿って幅10cm, 深さ5cm程度の溝が掘られており, 排水を意図したものと思われる。前庭部の先端は隣接する13号横穴墓の前庭部の手前と連なり, 共有のテラスが設けられる。

羨 道 奥行きは0.49m,幅は1.15mであり,平面形は横長長方形である。高さは1.1mを測り,断面 形態は正方形に近い隅丸台形である。また,13号横穴墓と同様に羨門の天井部が打ち欠かれている。

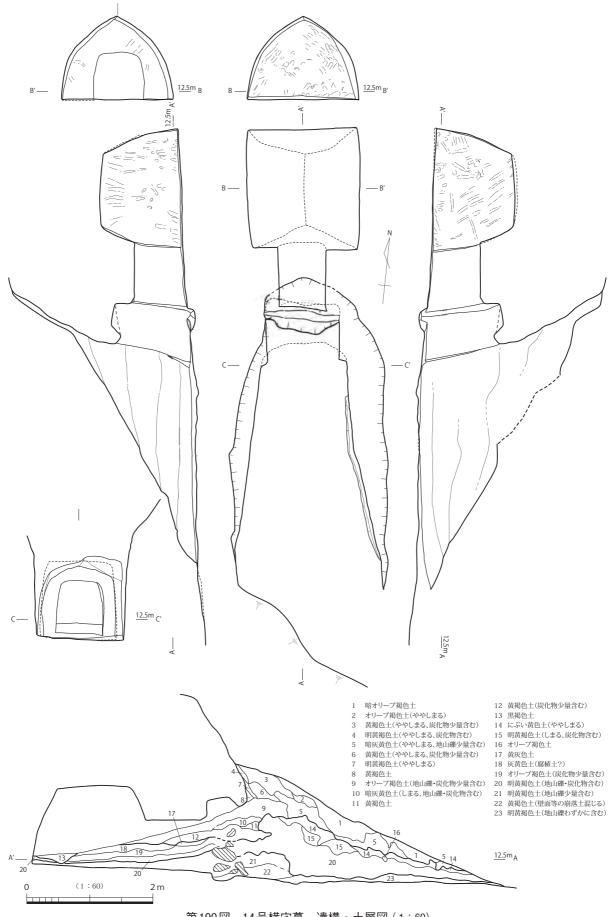
閉塞部 (第191図) 床面に奥行き 43 cm,幅120 cm,深さ 10 cmの溝が床面に掘られ、その上に大小20~50 cm程度の自然石が12個積み上げられた状態であった。積石の総高は現況で55 cm程度であり、木製の閉塞板の押さえに用いられたと推測される。前庭部ではその石の一部が床面から浮いた状態で確認されており、追葬などの進入時に積石上部の石が取り除かれたと思われる。

玄 門 奥行きは0.93m, 幅は0.75m であり、縦長長方形の平面形となっている。高さは0.8m で断面 形態は縦長長方形に比較的近い隅丸台形である。

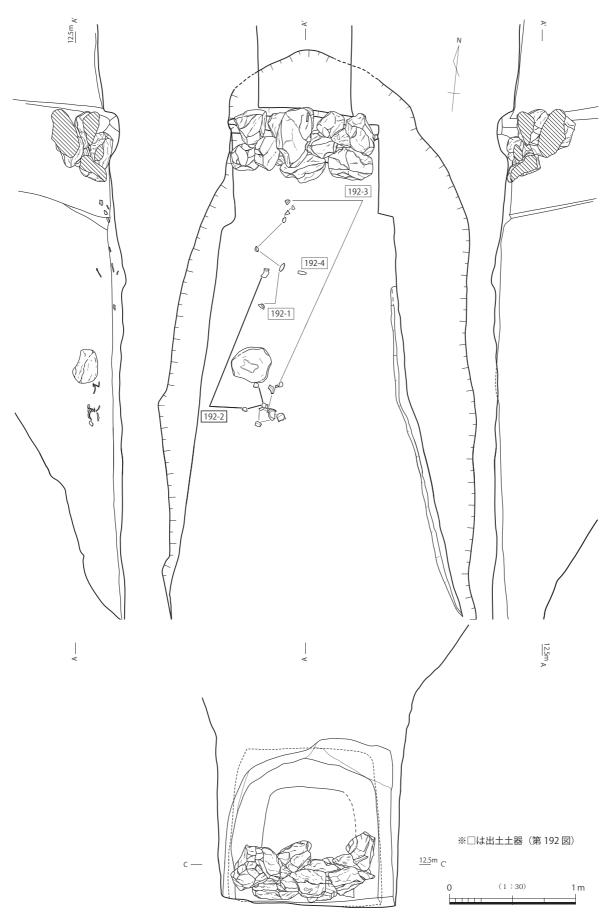
玄 室 玄室は奥行き1.9m, 幅は奥壁側で1.7m, 前壁側で1.64m であり, 概ね縦長長方形の平面形であるが, 玄室床面の中央は若干丸みを帯びて膨らむ。天井形態は妻入りテント形で, 高さは1.32m を測り比較的高い。壁面は凹凸が少なく, 丁寧に仕上げ調整がなされている。

加工痕 玄室内の各壁面は平滑に仕上げられており、幅10cm程度の削痕が観察できる。10・13号横 穴墓と同様に玄室の天井が高く、ドーム系の掘削技法で成形された可能性がある。前庭部には壁面に 掘削痕が認められ、4条の横走りの稜線が概ね20~40cm間隔で残存する。

土層堆積状況 前庭部の床面直上の23層は初葬時の埋土であった可能性があるが、全体的に締まりがなく、初葬後に自然堆積したものであるかもしれない。23層上面で墓前祭祀が行われ、21・22層はその後の埋土であったと思われる。なお、玄室内の21層中より出土した炭化物の年代測定を実施したところ、7世紀後半から9世紀後半以降に埋没したことを示す値が得られた(第7章第1節)。土



第190図 14号横穴墓 遺構・土層図(1:60)



第191図 14号横穴墓 閉塞石・遺物出土状況(1:30)

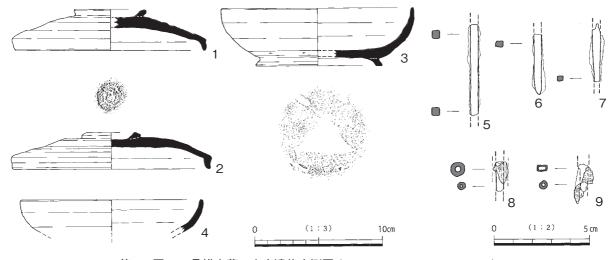
層の堆積状況と閉塞石の状況から、21・23層上面において1次進入があり、その上に堆積する14~20層は1次進入時の掻き出し土を含む埋土で、その上面が2次進入面であると考えられる。また、2次進入面には玄室奥で掘り込みが確認されるが、それは追葬または盗掘に伴う掘り込みの可能性があり、13層はその埋土である。11・12層は2次進入時の掻き出し土であろう。1~10層はその後の埋土や堆積土と考えられる。

遺物出土状況 (第191図) 主に羨道・前庭部から須恵器蓋坏の破片が多数確認され、互いに接合する 資料が多い。これらは前庭部の20層中や羨道の22層中から出土しており、出土位置や層位から初葬 以降の墓前祭祀に用いられ、破砕して散布されたと考えられる。その中で須恵器の坏蓋(1)は15号 横穴墓、同じく坏蓋(2)は4号横穴墓出土の破片と接合した。その他、鉄器も出土しており、(5~ 7)は前庭部の20層中から出土したが、(8・9)は14・15号横穴墓の前庭部周辺の排土中より確認さ れたため、正確な位置は不明である。

出土遺物 (第192図 図版63) $1 \sim 4$ は須恵器の蓋坏である。 $1 \cdot 2$ は輪状つまみを持つ坏蓋で天井部外面に回転ヘラケズリを施し,2 は天井部外面にヘラ記号が確認できる。また2の天井部内面は非常に平滑で凹凸がなく,硯として用いられたと考えられる。 $3 \cdot 4$ は坏身であり,3 は「ハ」の字に開く高台が付く。底部外面には静止糸切り痕が見られ,回転ヘラケズリを施す。4 は口縁部片のみで復元口径は14cmである。

 $5\sim 9$ は鉄器で5は鉄鏃の頸部、 $6\sim 9$ は鉄鏃の茎部であり、 $8\cdot 9$ には矢柄の痕跡が残る。

時期 出土遺物から墓前祭祀の時期は出雲7~8期頃であるが、初葬の時期は不明である。



第192図 14号横穴墓 出土遺物実測図(1~4は1:3,5~9は1:2)

(7)15号横穴墓(第193~195図 図版44・63)

15号横穴墓も第 2 次調査時に存在が確認されていたが、第 3 次調査によってその内容が新たに判明した。玄室床面の標高は約 10.8m と横穴墓群のなかで最も低い位置にあり、水捌けがあまり良くないが、それを反映するように排水施設が多く設けられている。開口方向は $S-4^\circ-W$ である。

前庭部 奥行きは4.15m, 玄門側の幅は1.25m, 前庭端部側では2.22m を測り, 平面形は台形である。 閉塞部手前から前庭部中央にかけての床面には幅24cm. 深さ7cm程度と幅8cm. 深さ3cm程度の溝 が掘られ、排水を意図したものと思われる。また、左壁床面には直径45cm、深さ7cmの円形の掘り込みが存在し、中央の溝と一連のものであったと思われる。右壁に沿った床面でも、中央から端部側に向かって幅6cm、深さ3cmの排水用と思われる細い溝が設けられている。明確な羨道は存在しないが、閉塞部手前には壁面と天井を伴う奥行き0.5m 程度の空間が設けられている。

閉塞部 奥行き17cm,幅120cm,深さ7cmの溝が掘られており、閉塞石などが嵌め込まれていたものと推測される。閉塞施設自体は確認できなかったが、前庭部の土層中には閉塞に使用されたと見られる自然石が確認された。

玄 門 奥行き 0.82m, 幅 0.82m で、平面形は正方形である。高さは 0.83m であり、断面形態はアーチ形に近い隅丸台形となっている。また、玄室から続く幅 6 cm、深さ 3 cm程度の排水用と思われる溝は、閉塞部の溝に連結する。

玄 室 奥行きは1.88m,幅は奥壁側で1.71m,前壁側で1.82mを測り,平面形は概ね正方形に近い。 高さは1.43mでかなり高く,天井形態は横穴墓群の中で唯一の妻入り家形である。なお,軒線は奥壁 と両壁面に示されているが前壁には確認できず,また軒と棟の高さに差が大きいため,アーチ系の技 法で成形されたものではないかと考えられる。なお,奥壁付近から玄門・閉塞部につながる幅17cm, 深さ3cm程度の溝が形成され、玄室内の排水を意図したものと思われる。

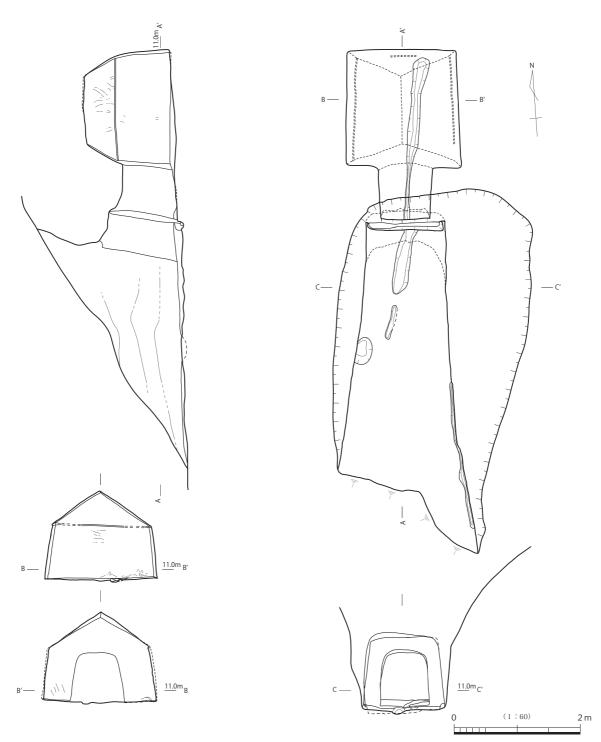
加工痕 玄室内の各壁面は風化が進んでおり加工痕跡は不鮮明であるが、比較的丁寧に仕上げ調整がなされており、各壁に仕上げ時の削痕が散見される。右壁の床面付近には成形時の平刃痕が確認できる。前庭部の掘削時の横走り稜線は3~4条確認でき、30~60cmの間隔で残存する。

土層堆積状況 38~40層は床面全体に堆積しているが締まりがなく、初葬以後の埋土または堆積土であった可能性がある。土層堆積状況などから38層上面が1次進入面と考えられ、34~37層はその際の掻き出し土であろう。その後、34層上面で2次進入があり、1次進入時の掻き出し土が一部掘り込まれて再び埋め戻されたものが30~33層と考えられる。なお32層上面には閉塞に用いられたと思われる自然石が存在し、2次進入時あるいはそれ以後に閉塞部から取り除かれた可能性があるが、判然としない。

 $20\sim29$ 層は 2 次進入後の埋土であろう。 3 次進入面はその上面であったと想定され、その場合、 3 次進入後の埋土は $11\sim19$ 層であると考えられる。その上に堆積する $1\sim10$ 層は埋土の可能性もあるが、全体的に締まりがなく、ここでは堆積土として考えたい。

遺物出土状況 (第195図) 遺物は前庭部やその手前からの出土が大半を占めている。前庭部の床面直上からは長頸壺 (7) の破片が出土しており、墓前祭祀に伴うものと考えられるが、前庭部手前から出土した破片と接合するため、一部は前庭部の手前まで掻き出された、もしくは意図的に散布されたことが想定される。前庭部の手前からは、その他にも須恵器 (1~6) や土師器 (8) が出土した。1は玄室内出土の破片と接合したが、出土層位から判断して2次進入後の埋土とともに一部が玄室内に流入したものと考えられる。4は14号横穴墓の前庭部出土の破片と接合した。しかし、14号横穴墓の前庭部から転落したのか、意図的に14・15号横穴墓に分けて散布したのかは不明である。

出土遺物 (第196図 図版63) $1 \sim 7$ は須恵器である。 $1 \cdot 2$ は坏蓋で,天井部外面に回転ヘラケズ

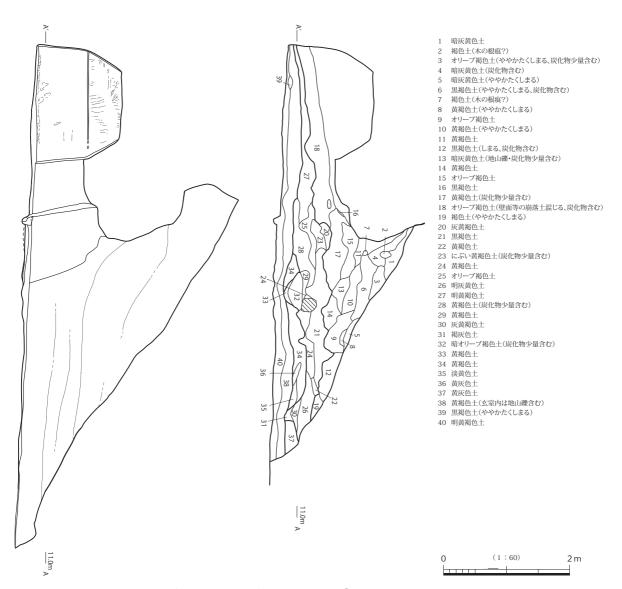


第193図 15号横穴墓 遺構図①(1:60)

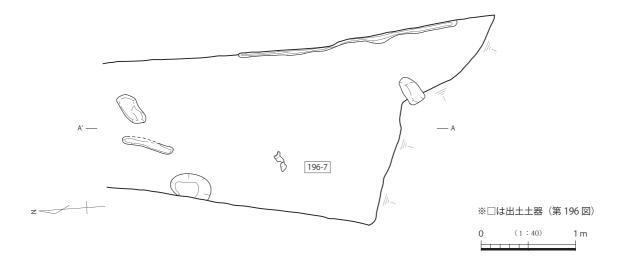
リを施す。3~6は坏身であり、3は底部外面に回転糸切り痕が見られる。4は底部外面に静止糸切り痕が確認でき、直立気味の高台が付く。5の底部外面には回転糸切り痕が残り、大きく「ハ」の字状に開く高台が付けられる。6はやや直立した高台を持つ。7は長頸壺で、口縁部から胴部にかけて残存している。

8は土師器の坏で低い高台を持つと思われ、内外面に赤彩を施す。

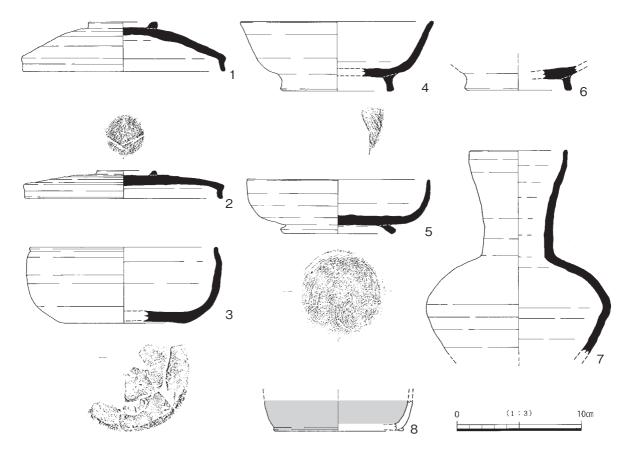
時期 初葬の時期は不明であるが、墓前祭祀の時期は出土遺物から見て出雲7~8期頃であろう。



第194図 15号横穴墓 遺構図②・土層図(1:60)



第195回 15号横穴墓 遺物出土状況(1:40)



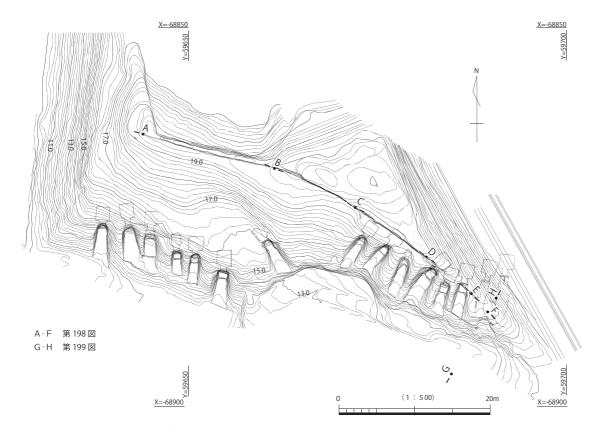
第196図 15号横穴墓 出土遺物実測図(1:3)

第3項 丘陵周辺の調査

杉沢横穴墓群が立地する丘陵尾根上には、地山上に堆積した土層があったが、大半は第2次調査の際に掘削され、第3次調査の開始時には丘陵上を東西・南北に伸びる土層(第197図)が残されていた。そのため、これらの土層の堆積状況を詳しく観察し、後背墳丘や他の遺構の痕跡、遺物の有無などを検討した。

(1)丘陵上東西土層(第198図 図版45)

検出遺構 東西土層の東側,7号横穴墓から8号横穴墓にかけての上部に位置する箇所で土坑を2基(SK104・105)確認した。土層観察での検出のため遺構の性格は不明であるが、横穴墓の直上付近に存在し、地山を掘り込んでいる点から勘案すると、横穴墓への進入を目的とした掘り込み穴の一部であった可能性が考えられる。なお、土坑内から遺物は出土していないが、年代的な裏付けを得るためにSK104・105を覆う24層の年代測定を実施したところ、14世紀から15世紀前半の年代が得られた(第7章第1節)。よって土坑が埋没した時期は中世期であり、形成時期も概ねその時期に近いものと思われる。これらの土坑が横穴墓への進入のための掘り込みであった場合、その時期は中世期であったと考えたい。その他、明確な遺構ではないが、東西ベルトの西側および中央部付近に落ち込みが2箇所(SD111・112)認められた。特筆すべきは、水成堆積に特徴的な土層を示している点であり、D

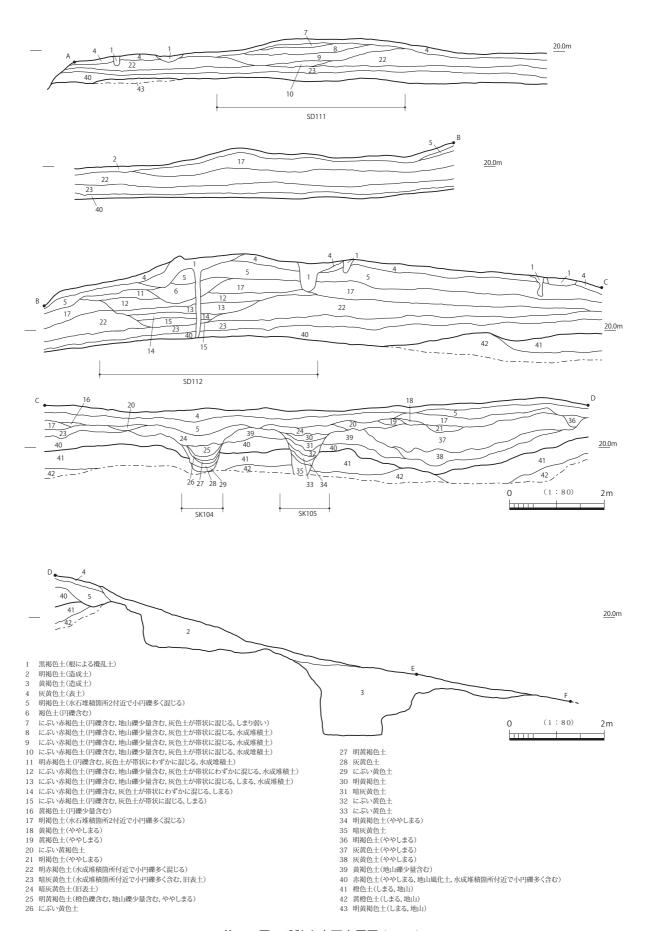


第197図 丘陵上東西・丘陵南北土層の位置(1:500)

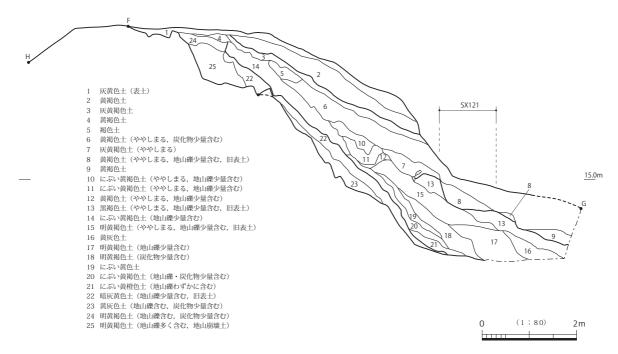
丘陵の大溝 (SD401) で見られた堆積状況と類似している。すなわち D 丘陵と同様、丘陵上にあるために自然の営為とは考えにくく、導水を意図した人工的なものであった可能性がある。しかし、その性格や目的については現段階では不明であると言わざるを得ない。なお、後背墳丘の存在は今回の調査では確認できなかった。

出土遺物 遺物は確認できなかった。

土層堆積状況 23層は丘陵を覆うように水平に堆積しており、ある時期の旧表土であると予想されたため、層中の3箇所で年代測定を実施し、概ね9世紀末~15世紀前半の測定結果が得られた(第7章第1節)。23層下の40~43層は地山、もしくは地山の風化土である。SK104・105を覆う24層の測定値は、前述のとおり14世紀から15世紀前半であり、25~35層の堆積によって埋没したのはその時期に近いと考えられる。 $18\sim21\cdot36$ 層はそれらの後に堆積するが人為的なものかどうかは不明である。また39層はSK104・105の形成以前に堆積した層であると判断できる。その他、 $37\cdot38$ 層は人為的な掘り込みに伴う埋土の可能性があるが判然としない。23層からは9世紀末から13世紀中頃の年代測定値が得られたため、 $16\cdot17\cdot22$ 層はそれより新しい時期に堆積したと考えられる。22層は風成堆積土で、22層堆積後に形成されたSD111の埋土である $7\sim10$ 層、SD112の埋土の $12\sim16$ 層は水成堆積の状況を示す。SD112の埋没後に17層が自然堆積したと見られ、その後に $4\sim6$ 層が堆積して現在の丘陵地表面が形成されたと判断できる。 $1\sim3$ 層は表土および道路工事の造成土である。



第198 図 丘陵上東西土層図(1:80)



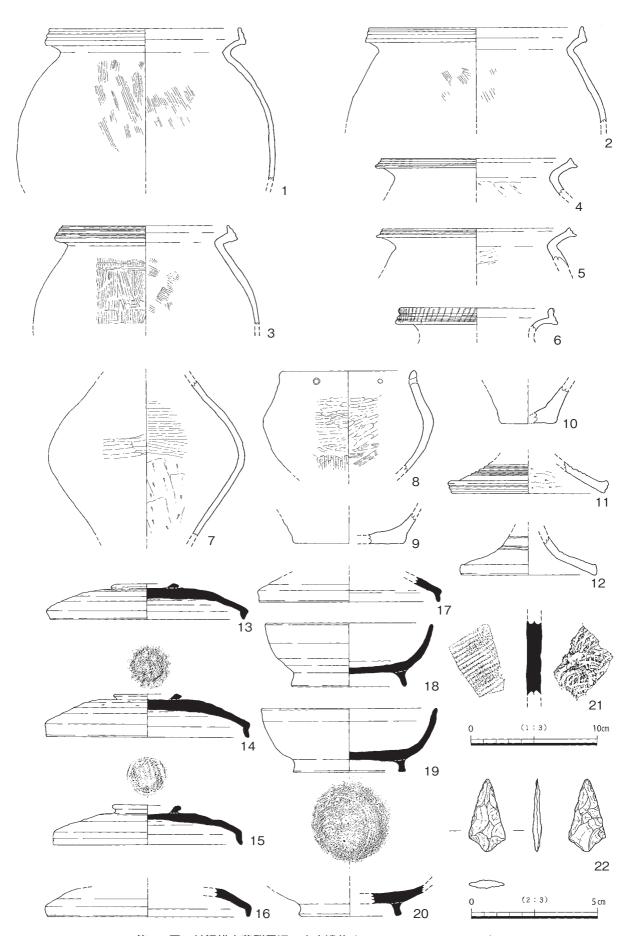
第199回 丘陵南北土層図(1:80)

(2)丘陵南北土層(第199図 図版45)

検出遺構 明確な遺構の痕跡は読み取れなかったが、丘陵中腹あたりで掘り込み (SX121) を確認した。旧地表面である13層を明確に掘り込んでおり、平坦面を作出しようとした人為的なものである可能性がある。また15層も同様に掘り込まれた可能性があるが判然とせず、それらの性格については不明である。

出土遺物 13層中から須恵器坏身の口縁部小片が出土したが、口縁部の形状や色調・胎土などから 1号横穴墓出土の出雲8期頃の坏身(第164図4)と同一個体の可能性が高いと考えられるため、ここでは図化していない。

土層堆積状況 土層の堆積状況から現地表面を除く旧表土面が3面確認できた。地山直上には地山の崩落土(25層)があり、23・24層も同時期に堆積したと思われる。その上に旧表土と考えられる22層が堆積する。これらの状況と周辺の3・4号横穴墓の土層の堆積状況を勘案すると、両横穴墓の2次進入時前後の旧表土であったと推測される。13~21層は自然堆積土であろう。旧地表面は13層上面であり、その層中から上述の須恵器片が出土している。この面はSX121によって削られており、8層はその後の堆積土であろう。また、15層が掘り込まれたとした場合、10~12層はその後に堆積したと考えられる。3~6層はその後の自然堆積土であると思われ、3層は旧表土であるが比較的新しい時期のものであろう。その後2層の堆積を経て1層の現表土面が形成されたと考えられる。



第200図 杉沢横穴墓群周辺の出土遺物(1~21は1:3,22は2:3)

第3項 杉沢横穴墓群周辺の出土遺物 (第200図)

第2次調査では、杉沢横穴墓群の調査前に周辺で試掘調査などが実施されており、比較的まとまった遺物が出土している。正確な調査地点は不明であるが、杉沢横穴墓群出土の遺物と接合する個体が 散見されるため、比較的近い地点で調査が行われていたことが推察される。

出土遺物は杉沢横穴墓群の須恵器のほかに、A丘陵北側斜面で確認された弥生土器と同時期のものが出土しており、ここでまとめて報告することにする。

 $1\sim12$ は弥生土器である。 $1\sim5$ は甕で内傾する口縁端部には $2\sim3$ 条の凹線文を施し、 $1\sim3$ の胴部内外面にはハケ調整, $4\cdot5$ の胴部内面にはヘラケズリが施される。 $6\cdot7$ は壺であり,6は2条の凹線を施したのちに斜位の刻目文をめぐらせる。7の胴部外面はヘラミガキ,内面の胴下半部はヘラケズリ,胴上半部はハケ調整が施される。8は無頸壺で口縁部下に穿孔が見られる。胴部外面はヘラミガキ,胴下半部内面はハケ調整,胴上半部内面はヘラミガキが施される。 $9\cdot10$ は甕または壺の底部である。 $11\cdot12$ は器台の脚部である。11は裾部外面に6条の平行沈線文,端部外面には2条の凹線文が施される。内面はヘラケズリが観察される。12は裾部外面に3条以上の平行沈線文を持つが,全体的に磨滅しており,調整は不明である。時期は $1\sim3\cdot6\cdot11\cdot12$ が概ね松本編年第V-2様式, $4\cdot5$ が松本編年第V-1様式に比定できると思われる。 $7\cdot8$ は松本編年 $V\sim V$ 様式頃であろう。

 $13 \sim 21$ は須恵器である。 $13 \sim 17$ は坏蓋で $13 \sim 15$ は輪状つまみを持ち,天井部外面にヘラケズリを施す。 $14 \cdot 15$ には静止糸切り痕が観察できる。13 の天井部内面は凹凸がなく非常に滑らかで,硯として用いられたと思われる。14 は部分的に平滑でやや凹凸が残るが,その可能性がある。 $16 \cdot 17$ は口縁部のみの破片である。 $18 \sim 20$ は高台付坏身で,19 の底部外面には回転糸切り痕が残る。18 の高台はやや「ハ」の字状に開くが,19 の高台は直立している。20 は若干「ハ」の字状に開いた高台を持つ。21 は小片で判然としないが,甕または瓶の胴部片であると思われ,外面には叩き目,内面には当て具痕が確認できる。須恵器の時期としては,概ね出雲 $7 \sim 8$ 期に属すると思われるが,21 はそれ以前の可能性もある。

22は安山岩製の凸基有茎石鏃で、弥生時代に属すると思われる。

第3節 小結 杉沢横穴墓群の調査成果のまとめと検討

第1項 調査成果のまとめ

杉沢横穴墓群は各横穴墓の位置関係から東群と西群の2つに分けることができ、合計で15基の横 穴墓を確認できた。東群は丘陵斜面の標高16~19m付近に立地して開口方向は南西に向き、西群は 標高11~13m 前後で概ね南方向に開口しており、それぞれまとまりをもって整然と造墓されている。 横穴墓群は固い岩盤ではなく砂岩系の布志名層に掘られているが、比較的残りがよく安定して残存し ていたため、これまでの調査で多くの成果を得ることができた。第3節では前節での調査成果をまとめ (第8表)、その内容について整理しつつ、そこから見えてくる検討課題にも触れておきたい。

(1) 横穴墓の形態について

杉沢横穴墓群は、15号横穴墓のように明確な羨道が見られないものもあるが、その他多くの横穴墓が羨道と玄門を有する2重構造であり、杉沢横穴墓群の大きな特徴となっている。これらは古墳時代後期から終末期にかけて意宇郡・島根郡(現在の松江・安来市域の一部)など出雲東部の横穴式石室に採用される石棺式石室の影響を受けて成立した「意宇型」横穴墓(桑原・丹羽野1987)の構造に類似する。

杉沢横穴墓群には広い前庭部が設けられ、 $1\sim 4\cdot 7\cdot 8\cdot 14\cdot 15$ 号横穴墓では前庭部やその周辺から須恵器が出土しており、墓前祭祀の場として用いられたと考えられる。

羨道・玄門は比較的しっかりと造られており、平面形は正方形や縦長長方形、横長長方形など多様であるが、断面についてはアーチ形や隅丸台形が多い。また、羨道と玄門の間には多くの横穴墓で閉塞施設用の溝が設けられている。玄室内の壁面には仕上げ調整の加工痕が多く残され、丁寧に仕上げられていたことが分かる。平面形についてはやや不整形なものも含まれるが、正方形になるものが目立つ。 $4\cdot10\cdot12\cdot14$ 号横穴墓は縦長長方形であるが、大きく縦長となるものはなく、どちらかというと正方形に近い。

玄室の天井形態については、15号横穴墓のみが家形で $1\cdot 2$ 号横穴墓はアーチ形、その他形態が不明な $6\cdot 9$ 号横穴墓を除いて $3\sim 5\cdot 7\cdot 8\cdot 10\sim 14$ 号横穴墓がテント形と多数を占めている。玄室内は丁寧に仕上げ調整が施されているため、明瞭な成形痕は残っていないが、テント形の多くがアーチ系の掘削技法を踏襲して造られたと想定される。一方で、10号横穴墓は玄室全体をドーム状に仕上げた後に天井部を掘り上げて棟を作出しているため、ドーム系の掘削技法に基づくテント形であると考えられた。 $13\cdot 14$ 号横穴墓も明瞭な屈曲部分は認められないが天井が高く、10号横穴墓と同様の技法で形成された可能性がある。

(2) 閉塞施設・埋葬施設について

閉塞施設について、2~4号横穴墓では閉塞石として2~3枚の切石が用いられていた。4号横穴墓については、使用されている石材が異なる可能性があることから石材鑑定を実施した結果、ガラス質凝灰岩と流紋岩自破砕溶岩であることが分かった(第7章第4節)。2・3号横穴墓の閉塞石は直接確認できていないため正確には不明であるが、写真から判断すると凝灰岩系の可能性が高い。

一方、14号横穴墓では12個程度の自然石が閉塞部に残され、15号横穴墓でも閉塞に使用されたと思われる自然石が前庭部の土層中から見つかっている。これらは、実際には木製の閉塞板の押さえに使用されていたと推測される。その他、 $1\cdot 5\cdot 7\sim 9\cdot 12$ 号横穴墓については閉塞部に溝が掘られており、閉塞石などが据えられていたものと推察される。

埋葬施設は杉沢横穴墓群ではあまり目立たず、1・2号横穴墓でわずかに屍床が確認できた。

第8表 杉沢横穴墓群の法量・形態一覧

(m)

Г	\neg			前		庭	羡道					玄門					玄室						88	(m)
		標高	全長	長	端部幅	奥	長	幅	高	平	断面形	長	幅	高	平面形	断 面 形	長	前壁幅	奥壁幅	高	平面形	天井部	開口方向	埋 閉 葬 塞 施 設
		IEJ	DQ.	ð.	幅	幅	さ	184	ð.	前形	形	ð	ТР	ð.	形	形	さ	福	福	ð.	形	部	向	設設
東群	1 号	18.9	9.21	5.20	0.98	1.44	1.05	1.07	1.02	正方形	ア チ 	0.89	0.68	0.73	(縦長)	ア チ 形	1.92	1.86	1.84	1.11	正方形	アーチ形	S-15° -W	屍床
	2号	18.8	7.82	4.19	1.84	1.24	0.67	1.11	1.12	(横長)	アーチ形	0.85	0.65	0.75	(縦長)	ア チ 	1.86	1.72	1.99	1.15	正方形	ア ーチ 形	S-25° -W	切石 3 枚
	3号	17.9	7.06	3.21	1.48	1.24	1.15	1.06	1.08	正方形	正方形	0.76	0.75	0.80	正方形	台形	1.85	1.68	1.85	1.20	正方形	(妻入)	S-22° -W	切 石 2 枚
	4 号	17.3	6.34	2.86	1.83	1.10	0.64	1.02	(0.97)	(横長)	アーチ形	0.77	0.76	-	正方形	-	1.77	1.53	(1.53)	1.06	(縦長)	(妻入)	S-17° -W	切石 3 枚
	5号	17.1	8.28	4.16	1.84	1.59	0.94	1.12	1.08	(横長)	正方形?	0.81	0.74	0.75	正方形	正方形	1.86	1.85	1.84	1.27	正方形	(妻入)	S-43° -W	_
	6号	16.8	6.51	3.79	1.19	1.14	1.10	0.75	_	(縦長)	-	0.82	0.46	_	(縦長)	_	0.71	0.89		1.06	_	_	S-21° -W	-
	7 号	16.5	6.76	3.03	1.50	1.07	0.76	0.87	1.30	正方形	アーチ形	0.92	0.72	0.96	(縦長)	ア チ 形	1.76	1.92	1.75	1.17	正方形	(妻入)	S-44° -W	-
	8号	16.2	7.07	3.79	0.92	0.99	0.45	0.76	1.09	逆台形	アーチ形	0.86	0.67	0.71	(縦長)	隅丸台形	1.67	1.57	1.58	1.08	正方形	(妻入)	S-33° -W	_
西群	9号	14.9	7.19	3.45	1.88	1.24	0.86	0.94	_	正方形	アーチ形	0.75	0.80	-	正方形	隅丸台形	1.87	1.54	0.75	0.77	_	-	S-31° -E	_
	10 号	11.6	7.41	3.62	2.28	1.19	0.82	1.16	1.24	(横長)	アーチ形	0.83	0.81	(0.88)	正方形	ア ーチ 形	2.06	1.90	1.81	1.33	(縦長) 長方形	(妻入)	S-6° -W	_
	11 号	12.8	6.20	2.67	1.47	1.05	0.56	0.97	1.07	(横長)	隅丸台形	1.00	0.67	0.74	(縦長)	台形	1.80	1.68	1.98	1.12	正方形	(妻入)	S-5° -W	_
	12 号	12.7	5.46	2.04	1.32	1.01	0.63	0.91	0.95	(横長)	アーチ形	1.02	0.73	0.67	(縦長) 長方形	隅丸台形	1.57	1.26	0.89	1.03	(縦長) 長方形	(妻入)	S-2° -E	_
	13 号	12.9	5.91	2.19	1.81	1.40	0.98	1.21	1.05	(横長)	隅丸台形	0.80	0.83	0.74	正方形	正方形	1.78	1.63	1.62	1.31	正方形	(妻入)	S-4° -W	_
	14 号	12.4	8.18	4.39	2.50	1.36	0.49	1.15	1.10	(横長)	隅丸台形	0.93	0.75	0.80	(縦長)	隅丸台形	1.90	1.64	1.70	1.32	(縦長)	(妻入)	S-6° -E	自然石
	15 号	10.8	7.01	4.15	2.22	1.25	-	_	_	_	_	0.82	0.82	0.83	正方形	隅丸台形	1.88	1.82	1.71	1.43	正方形	(妻)	S-4° -W	_

※全長は閉塞部と段の奥行きを含む

(3)出土遺物について

横穴墓群からの出土遺物は総じて少なく、大半が須恵器の蓋坏や長頸壺であった。7・8号横穴墓で出土した口縁部にかえりが付く蓋坏が出雲6d期に位置づけられ、古墳時代終末期に該当すると思われるが、その他は高台が付いて底部に糸切り痕が確認される出雲7~8期頃の坏身が目立っており、奈良時代まで下る可能性の高いものが主流を占める。これらの須恵器は主に前庭部から出土しており、墓前祭祀において使用されたと考えられる。中には硯として使用されたものも見受けられ、それらの破片が互いに離れた4・14号横穴墓の前庭部から出土しており、墓前祭祀の具体的行為を考える上で興味深い。また、わずかながら赤彩された土師器の坏や皿も出土しているが、これらも墓前祭祀に伴うものであったと考えられる。

その他は少量ながら鉄器・鉄滓が確認されている。5号・14号横穴墓からは鉄鏃や刀子の出土が見られ、玄室外へ掻き出されていたものの、本来は埋葬に伴う副葬品であったと推測される。その他、5号横穴墓からは木質が付着した鉄釘も確認されている。棺釘であったと考えられ、木棺による埋葬があったことがうかがえる。10・13号横穴墓からは鉄滓が出土した。周辺に製鉄関連遺跡や遺構は見当たらず、埋葬時の副葬品や墓前祭祀に伴うものであったと思われる。

また10・12号横穴墓からは人骨が出土した。10号横穴墓の人骨は小片のみで詳細不明であるが、12号横穴墓から出土した人骨はほぼ1体分であった。第7章第1・5節で詳細に分析・検討されているが、年齢・性別は若い成年から壮年前半の男性の可能性が高く、時期は11世紀中頃から13世紀後半に属すると考えられる。

(4) 横穴墓の時期について

各横穴墓内で確認された須恵器は、その多くが前庭部周辺の床面や堆積土層中からの出土であり、墓前祭祀の時期を示していると考えられるものの、横穴墓の構築時期や初葬時期を確定できる状況ではなかった。出土土器から考えると、墓前祭祀の時期は出雲7~8期頃が中心であるが、7・8号横穴墓では出雲6d期に比定される蓋坏が前庭部から確認されている。そのため杉沢横穴墓群では、7世紀後半から墓前祭祀が開始され、8世紀前半頃まで盛んに行われたと考えられる。一方、4号横穴墓の玄室内床面から出雲7期頃の坏身が出土しており、初葬の時期を示す可能性もなくはないが、前庭部出土のものと明確な時期差が認められないため、その時期の追葬に伴う副葬品であったと考えた。同様に5号横穴墓の玄門の床面から出雲7期頃の長頸壺が確認されたが、閉塞石などが残存していないため、やはり追葬に伴うものであったと推定される。

よって、出土遺物からは横穴墓群が構築された時期や初葬の時期を示す明確な手掛かりを得ることはできなかったが、7世紀後半から8世紀前半にかけて追葬や墓前祭祀が盛行したことは明らかである。ここから横穴墓群の構築・初葬の時期を絞り込むのは難しいが、2重構造を持つ意字型の横穴墓形態がほぼ全ての横穴墓で共通しており、また西群では南西方向、東群では南に開口するようにそれぞれ同程度の高さで丘陵斜面に整然と構築されているため、長期間かけて連綿と構築されていったというよりも、ある程度の時期のなかでまとまって形成されたのではないかと予想される。今回の調査

成果からだけでは、構築・初葬時期がどこまで遡るのかは定かでないが、7世紀前半の終わり頃(出雲 6 a 期) から一部の構築が始まったとしても、概ね7世紀中頃から追葬が開始される7世紀後半よりも前(出雲 6 b \sim c 期) には、ある程度まとまって構築されていたのではないだろうか。よって杉沢横穴墓群は、この地域の古墳時代終末期の様相を示す横穴墓群として位置づけられよう。

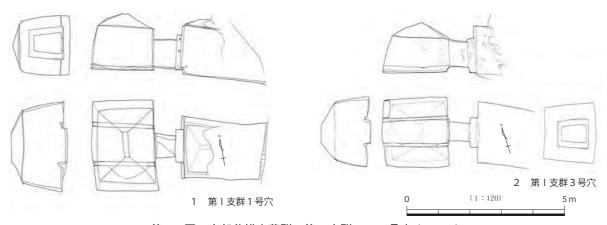
第2項 杉沢横穴墓群の形態的特徴と墓前祭祀に関する検討

ここまで杉沢横穴墓群の調査成果をまとめてきたが、その中で特に横穴墓の形態的特徴と墓前祭祀 について多くの示唆的な内容を得ることができた。これらは杉沢横穴墓群の性格を考察する上で重要 であるため、ここで詳しく検討しておきたい。

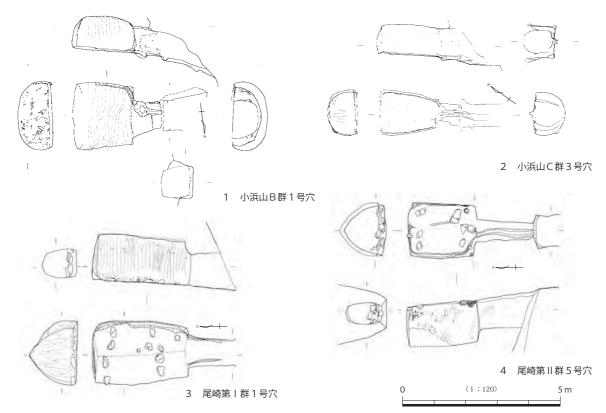
(1) 杉沢横穴墓群の形態的特徴の検討(第201・202図)

杉沢横穴墓群の形態的な特徴としては、多くの横穴墓が広い前庭部を持ち、羨道・玄門が明確に造り分けられている点であり、横穴墓群の中で15基中14基がその特徴を有する。これらは出雲東部で主に盛行する石棺式石室の影響を受けて成立した意宇型横穴墓の構造に類似する。意宇型横穴墓は石棺式石室と同様に出雲東部に主体的に分布し、広い前庭部と羨道・玄門を有して玄室の天井形態は平入りの家形を呈するものが多い。例えば、松江市大草町に所在する安部谷横穴墓群では、第Ⅰ支群1・3号穴が非常に精美な造りで、石棺式石室を模した典型的な形態を示している(第201図)。

一方、杉沢横穴墓群では、玄室の形態を見ると多くがアーチ形、もしくはアーチ系のテント形の天井形態を保持していることに注意を要する。アーチ形は出雲郡や神門郡 (現在の出雲市域の一部) など出雲西部に特徴的な天井形態であり (西尾・原田・守岡1992)、出雲市神西沖町の小浜山横穴墓群などに多く認められる (第202図1・2)。また、アーチ系テント形については、アーチ形の掘削技法から派生して形成され、例えば出雲市佐田町の尾崎横穴群に見られるように (第202図3・4) 出雲西部や、その他斐伊川中・上流域に確認されることが示されている (大谷・松山1999)。一方、出雲東部にもテント形が存在し、その多くは出雲東部で主流となるドーム形の系譜を継ぐ掘削技法であることが知られているが、杉沢横穴墓群においてドーム形の系譜を持つ天井形態の可能性があるのは10・13・14



第201図 安部谷横穴墓群 第 I 支群 1・3号穴(1:120)



第202図 小浜山横穴墓群・尾崎横穴墓群のアーチ形・アーチ系テント形の天井形態を持つ横穴墓(1:120)

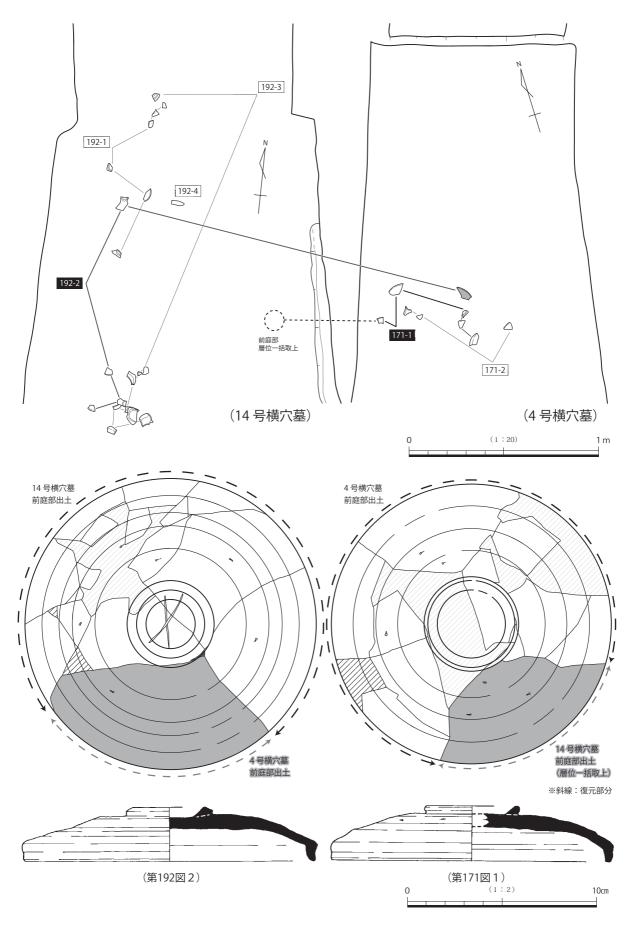
号横穴墓である。つまり、玄室内の天井形態を見ると、多くは出雲西部の特徴的な天井形態を示しているが、その一部には出雲東部の様相を反映している横穴墓もあると言えよう。

このように杉沢横穴墓群は、全体が出雲東部に特有の意字型横穴墓の形態を保持しつつも、玄室内の天井形態には出雲西部の特徴が多く採用されているという、出雲東部・西部の両方の要素を兼ね備えた折衷的な形態が顕在化することが注目される。加えて、横穴墓の中には出雲東部のドーム系のテント形の掘削技法が一部で認められる点も重要であろう。これらの特徴を東群と西群という視点で見ると、東群ではアーチ形やアーチ系テント形の天井部形態を持つ横穴墓で占められるが、西群ではアーチ系テント形のなかにもドーム系テント形の天井形態を持つ可能性のある横穴墓が散見される。つまり、横穴墓群全体では意字型横穴墓の形態を基調としつつ、東群は出雲西部、西群は出雲東部の技法を継承する人々が主導的に形成したのかもしれない。

こうした杉沢横穴墓群の形態的特徴の位置づけについては、出雲西部の横穴墓を俯瞰する中で包括的に考察する必要があり、総括(第8章第4節)でさらに詳しく検討を重ねていきたい。

(2) 硯の坏蓋を用いた墓前祭祀について

杉沢横穴墓群からの遺物の出土量は多くはないが、その中で目を引くのは硯に使用された須恵器の蓋坏が出土した点ある。杉沢横穴墓群では、1号横穴墓出土坏身(第164図5)、14号横穴墓から出土した坏蓋(第192図2)、そして杉沢横穴墓群周辺から出土した坏蓋(第200図13・14)の4点がその可能性があるものとして確認される¹⁰⁾。主に追葬や墓前祭祀に伴うもので、その際の被葬者は硯を使う役職、すなわち官人であったことが予想される。初葬の時期以後、律令期に入っても各地で連綿と横穴



第203図 4号・14号横穴墓 前庭部・羨道出土須恵器と接合関係(上 1:20, 下 1:2)

墓が利用されるが、その中で杉沢横穴墓群に葬られたのは、近隣の郡家などに奉職した官人とその家族であったのかもしれない。

また墓前祭祀との関連の中で注目されるのは、14号横穴墓の前庭部から出土した坏蓋(第192図2)である。これは破砕された状態で羨道・前庭部から出土したが、4号横穴墓の前庭部から出土した破片と接合している。さらに4号横穴墓の前庭部から出土した坏蓋(第171図1)も14号横穴墓の前庭部出土の破片と接合しており、合計で2個体分の坏蓋が別々の横穴墓から出土した(第203図)。この2つの横穴墓は丘陵の東側と西側に位置して互いにかなり離れており、破片が単なる混ざり込みではなく、同時期に行われた墓前祭祀の中で意図的に両横穴墓に散布された、という具体的な祭祀行為が読み取れるとともに、両横穴墓の被葬者間には親族や氏族といった何らかの強い結びつきがあったことを予想させる。

4・14号横穴墓の墓前祭祀は同時に行われていたことが確認できたが、その他の横穴墓における前庭部出土の須恵器も同時期のものが多く、4・14号横穴墓を含めた複数の横穴墓で同時に墓前祭祀が執り行われた可能性もある。想像を逞しくすれば、古墳時代の終末期までに整然と構築された杉沢横穴墓群は世代を越えて連綿と継承されており、律令期前後のある時期になって斉一的に追葬や墓前祭祀が行われ、その被葬者は官人であったことが推測されよう。いずれにせよ、律令期前後における横穴墓の墓前祭祀を考える上で重要な事例となってくるだろう。

(幡中 光輔)

【註】

- 1) 市道(当時, 斐川町道)の法面工事に伴う丘陵斜面の掘削中に, 西側の斜面において直径1m程度の穴が開口した。そこから内部を観察したところ, 下方に玄室の前壁が確認されたため, そこが横穴墓の玄室内であり, 開口した穴は玄室の天井部にあたることが判明した。それを受けて周辺を精査したところ, 新たに2基の横穴墓が西側に発見され, 合計で3基の横穴幕の存在が明らかになった。
- 2) 第1次調査は、平成7年(1995)3月から5月にかけて実施されており、発見された3基の横穴墓のうち1・ 2号横穴墓、および3号横穴墓の一部(玄室から前庭部の奥側まで)を対象に発掘調査が行われた。
- 3) 第2次調査は、丘陵斜面の精査によって確認された $4\sim15$ 号横穴墓のうち、主に $7\cdot8$ 号横穴墓を対象として平成 15年 (2003) 9月から 12月に発掘調査が進められたが、その他の横穴墓の一部 ($4\cdot5$ 号横穴墓の前庭部、 $6\cdot9$ 号横穴墓の前庭部・羨道、10号横穴墓の前庭部の一部)も同時に調査が実施された。
- 4) 3次元データの計測・オルソ画像の作成は、株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
- 5) 島根県立三瓶自然館の中村唯史氏のご教示による。
- 6) 須恵器の時期は大谷晃二氏の須恵器編年 (大谷1994・2001) を示しているが、比較的新しい時期のものについては、岡田裕之氏らの編年 (岡田ほか2010) を一部参照している。
- 7) ドーム系の掘削技法については、大谷・松山(1999)、大谷(2011)によって詳しく検討されている。
- 8) 鉄滓の磁着度合いについては小林 (1991) の基準を用い、メタル度は埋蔵文化財専用に整準された小型金属 探知機によって金属鉄の残留の度合いを判定しており、新潟県北沢遺跡の基準 (豊浦市教育委員会1992) に準

じている。

- 9) 人骨の出土状況や部位判別については、鳥取大学名誉教授の井上貴央氏からご教示を賜った(第7章第5節)。
- 10) 硯に用いられた坏蓋について、古尾谷知浩氏は、食器などに用いられた坏蓋が硯として二次利用・再利用された転用硯とは違い、当初から硯として出荷・使用された坏蓋硯の存在を文献史料から明確に指摘している(古尾谷2004)。しかし、両者の判別は遺物からだけでは難しく、杉沢横穴墓群の硯として用いられた坏蓋がどちらに該当するのかは不明である。

【参考文献】

出雲考古学研究会 1989「松江・安部谷横穴墓群について(下)」『八雲立つ風土記の丘』No.95 島根県立八雲立 つ風土記の丘、2-9頁

出雲市教育委員会 1995『小浜山横穴墓群』

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会、39-82頁

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8 集,平田市教育委員会,43-54頁

大谷晃二 2011「⑥ 横穴墓」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社, 149-159頁

大谷晃二・松山智弘 1999「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』田中義昭 先生退官記念事業会, 95-122頁

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究 一古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター、13-43頁

桑原真二・丹羽野裕 1987「意宇郡・島根郡とその周辺」『石棺式石室の研究 ―出雲地方を中心とする切石造り 横穴式石室の検討―』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会,230-250頁

小林信一 1991「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」『研究連絡誌』第32号 財団法人千葉県文化財センター, 1-9頁

佐田町教育委員会 1988 『尾崎横穴群発掘調査報告書』

山陰横穴墓研究会 1995「横穴墓築造に伴う掘削技法」『島根考古学会誌』第12集 島根考古学会, 15-45頁 新潟県豊浦町教育委員会 1992『北沢遺跡群』

西尾克己・原田敏照・守岡正司 1992「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究』 1 湖陵町教育委員会, 5-23頁

古尾谷知浩 2004「杯蓋硯考 ―「転用硯」概念の再検討」『名古屋大学文学部研究論集. 史学』50 名古屋大学文学部, 103-111頁

【挿図出典】

第201 図: 出雲考古学研究会 1989 より転載・加筆 第202 図 1 · 2 : 出雲市教育委員会 1995 より転載・加筆 第202 図 3 · 4 : 佐田町教育委員会 1988 より転載・加筆

第7章 自然科学分析

第1節 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群における 放射性炭素年代測定

渡邉正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)

第1項 はじめに

杉沢遺跡、杉沢横穴墓は、島根県東部の出雲市斐川町直江に立地する遺跡である。

本報では、下記の目的のために実施した、AMS年代測定について報告する。また、古代「山陰道」に関わる年代測定試料を採取するために、古代「山陰道」表面を含む断面の軟 X 線写真観察を行っている。

- ①杉沢横穴墓群12号横穴墓玄室から出土した人骨について、生存時期を明らかにする
- ②杉沢横穴墓群4・14号穴が埋まった時期を明らかにする
- ③杉沢遺跡A丘陵を構成する堆積物の、堆積時期を明らかにする
- ④杉沢遺跡 C, D丘陵で検出された遺構の時期を明らかにする
- ⑤杉沢遺跡 D 丘陵で検出された, 古代「山陰道」の可能性が高い道路状遺構の利用時期を明らかに する
- ⑥杉沢Ⅱ遺跡で検出された遺構の時期を明らかにする

第2項 分析試料について

分析試料のうち、杉沢横穴墓群に関わる試料、及び杉沢遺跡 C、D 丘陵、杉沢Ⅱ遺跡の遺構に関わる試料は、出雲市文化財課によって取り上げられ、保管されていた中から提供を受けた。その他の土壌試料は、出雲市文化財課との協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。

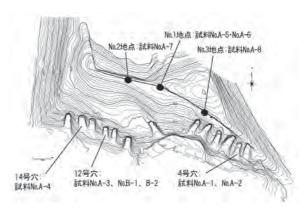
また、以下に示す平面図及び断面図は、出雲市文化財課より提供を受けた原図をもとに、作成した。

(1) 杉沢横穴墓群 A 丘陵 (第204~206図) 試料採取地点

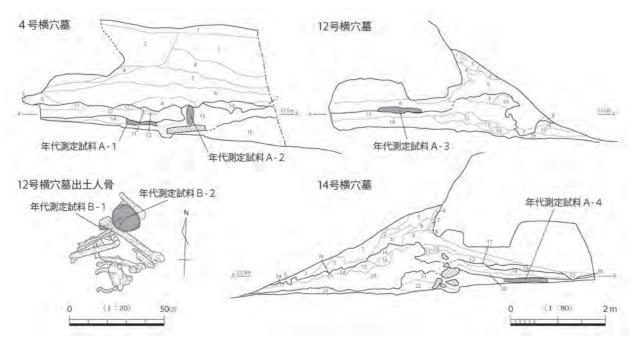
第204図の調査区平面図中に、杉沢横穴墓群および杉沢遺跡A丘陵に関わる試料採取地点を示す。

試料採取層準

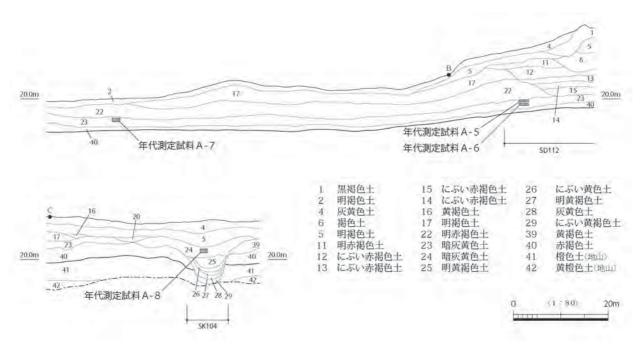
第205図に横穴墓内の堆積物中から採取されていた4試料(A-1~4)と,12号横穴墓で確認された長骨(B-1),頭蓋骨片(B-2)の採取位置



第204図 調査区平面図及び試料採取地点 (杉沢横穴墓群, A丘陵)



第205図 杉沢横穴墓群 試料採取層準 (A-1~4, B-1,2) (左上:4号横穴墓,左下:12号横穴墓出土人骨,右上:12号横穴墓,右下:14号横穴墓)



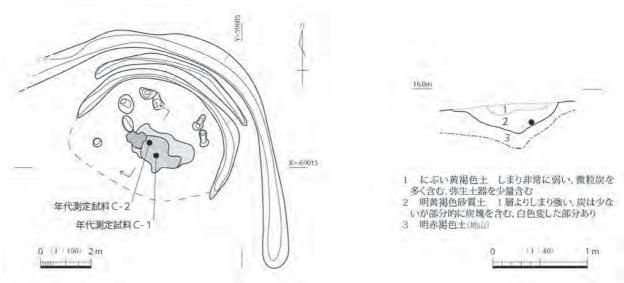
第206図 試料採取層準(A-5~7, 杉沢横穴墓群上)

を, 第206図に丘陵上で採取した4試料(A-5~7)の採取位置を示す。

(2) 杉沢遺跡 C 丘陵 (第207図)

試料採取地点

竪穴建物 SI305 (第207図) 内で、年代測定試料 (C-1,2) が採取されていた。



第207図 資料採取地点・層準(杉沢遺跡C丘陵 竪穴建物SI305)

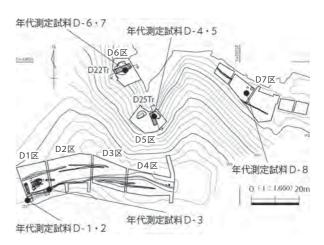
試料採取層準

竪穴建物 SI305被熱部土層断面図 (第207図) に,試料採取位置 (層準)を示す。1層で年代測 定用試料 C-1,2層の「●」付近で年代測定用 試料 C-2が、一括採取され、保管されていた。

(3) 杉沢遺跡 D 丘陵 (第208·209図)

試料採取地点

第208図の調査区平面図中に, 試料採取地点 を示す。



第208図 調査区平面図および試料採取地点 (杉沢遺跡D丘陵)

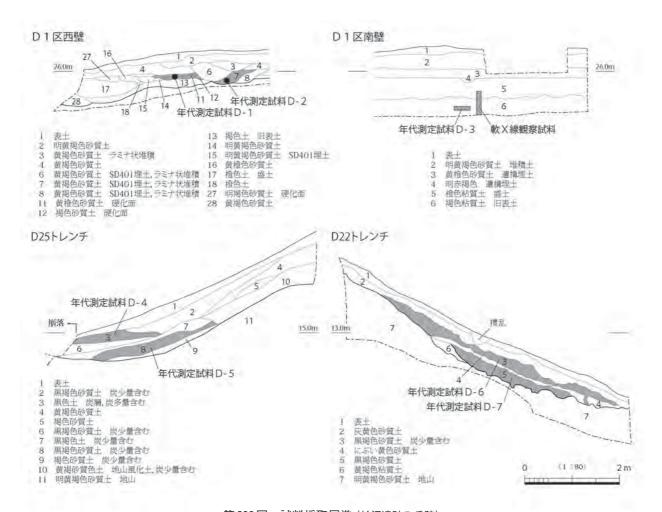
試料採取層準

第209回に、D1区西壁断面図、D2区南壁断面図、丘陵斜面のD22トレンチ、D25トレンチ 断面図を示す。D1区西壁では、「山陰道」を構成する最上部と考えられる11・12層中に狭在する有機質粘土(D-1)、「山陰道」廃絶後の溝埋土(7層)中に狭在する有機質粘土(D-2)を採取した。D1区南壁では、「山陰道」造成前の古土壌を対象として年代測定用試料(D-3)を採取したほか、同層準の記載のために軟X線写真観察を行った。D5区D25トレンチでは、3層で年代測定用試料D-4、8層で年代測定用試料D-5が、一括採取され、保管されていた。D6区D22トレンチでは、3層で年代測定用試料D-6、5層で年代測定用試料D-7が、一括採取され、保管されていた。D7区では、黒褐色土層で年代測定用試料D-8が採取・保管されていた。

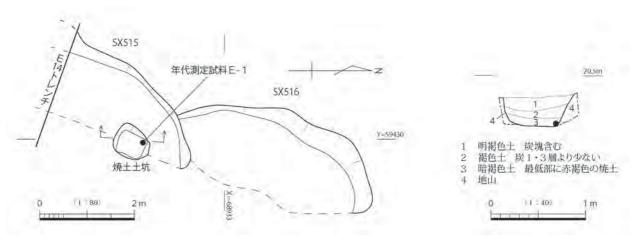
(4) 杉沢Ⅱ遺跡(第210図)

試料採取地点

加工段SX515平面図 (第210図) 中に、試料採取地点を示す。



第209図 試料採取層準(杉沢遺跡 D 丘陵) (左上: D 1 区西壁,右上: D 1 区南壁,左下: D22 トレンチ,右下: D25 トレンチ)



第210図 試料採取地点・層準(杉沢Ⅱ遺跡 加工段SX515)

試料採取層準

加工段SX515内の土坑断面図 (第210図) 内。3層中「●」付近で年代測定用試料 E-1が、一括して採取、保管されていた。

第2項 分析方法

(1) AMS 年代測定方法

古土壌については、塩酸による酸洗浄の後に二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 人骨については、コラーゲン抽出処理を行った後に酸洗浄を実施した。 14 C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.2.4 (Bronk Ramsey, 2009) を用い 11 、IntCall3 (Reymer et al., 2013)を利用した 21 。

また人骨から抽出したコラーゲンについて、Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いて TOC. TN を測定し、コラーゲンの劣化度合いを確認した。

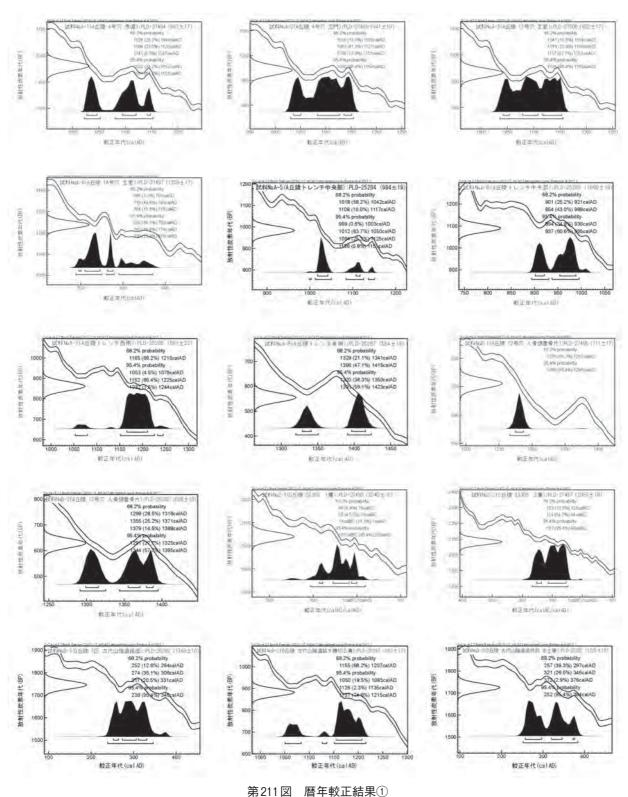
(2) 軟 X 線観察方法

試料採取、調整及び軟X線写真撮影は、渡邉 (2009) に従って実施した 3)。撮影写真は「ネガ」に相当する。撮影写真を基にスケッチを行うとともに、「土壌記載薄片ハンドブック (久馬・八木:訳監修、1989)」に準じて記載を行った 4)。

試料 コラーゲン劣化 暦年較正用年代 補正年代* 曆年較正年代 重量 (g) 試料No. 種別 出土地点ほか 1 σ曆年代範囲 遺跡名 (C/N) 2 σ暦年代範囲 AD1026-1046 (28.3%) AD1094-1120 (33.5%) 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N) A丘陵 4号横穴墓 羨道 A -1 炭化材 杉沢横穴墓郡 3.153 977 ± 17 -25.93 ± 0.23 27494 960 ± 15 AD1141-1147 (6.5%) A 丘陵 4号横穴墓 玄門 湿式篩分:106μm AD1030 1030 (13.0%) AD1083-1127 (41.3%) AD1136-1151 (13.9%) 炭化材 杉沢横穴墓郡 -25.85 ± 0.26 941 ± 19 27495 AD1041-1054 (10.6%) AD1078-1108 (25.9%) AD1117-1153 (31.7%) A 丘陵 12号横穴墓 玄室 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N A-3 炭化材 杉沢横穴墓郡 0.169 950 ± 18 -26.13 ± 0.18 932 ± 17 27505 AD695-701 (3.0%) AD688-750 (56.1%) 湿式篩分:106μm 酸洗浄(塩酸:1.2N A 丘陵 14号横穴墓 玄室 A-4 炭化材 杉沢棤穴墓群 0.608 1244 ± 18 -25.39 ± 0.20 1238 + 17 1240 ± 15 AD710-745 (49.6%) AD999-1003 (0.6%) A丘陵 トレンチ中央部 湿式篩分: 106 µm AD1018-1042 (58.2%) AD1012-1050 (63.7% A -5 古十壌 杉沢棤穴墓群 983 + 19 -24.94 ± 0.31 984 + 19 985 + 20 AD1084-1125 (25.3% AD1136-1151 (5.8% A丘陵 トレンチ中央部 329 湿式篩分:106μm AD901-921 (25.2%) AD894-930 (34.8%) A-6 古土壌 杉沢横穴墓群 1092 ± 18 -25.08 ± 0.24 1090 ± 18 1090 ± 20 25285 古土壌下部 (袋込) 酸洗浄 (塩酸: 1.2N AD954-988 (43.0%) AD937-995 (60.6%) A丘陵 トレンチ西側 湿式篩分: 106 um AD1165-1210 (68,2%) A-7 古土壌 杉沢横穴墓郡 892 ± 22 -26.84 ± 0.34 861 ± 22 860 ± 20 AD1152-1225 (89.4%) 古土壌 (袋込) 酸洗浄 (塩酸:1.2N AD1232-1244 (1.5% 湿式筛分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N) AD1320-1350 (36.3% A丘陵 トレンチ東側 A-8 古土壌 杉沢横穴墓郡 528 ± 18 -23.41 ± 0.24 554 ± 18 555 ± 20 古土壌上部 (袋込) AD1396-1415 (47.1%) AD1391-1423 (59.1% A丘陵 12号横穴墓 玄室 超音波洗浄コラーゲン抽出 杉沢横穴墓郡 27.696 -20.70 ± 0.22 AD1275-1287 (68.2%) AD1299-1316 (28.5% A 丘陵 12号横穴墓 玄室 AD1291-1325 (37.7%) AD1344-1395 (57.7%) -24.53 ± 0.19 AD1355-1371 (25.2%) AD1379-1388 (14.5%) B-2 頭蓋骨片 杉沢横穴墓郡 622 ± 18 629 ± 18 25283 BC86-79 (6.4%) C丘陵 SI305 湿式篩分: 106 µm C-1 炭化物 杉沢浩路 178 2002 + 18-22 63 ± 0 21 2040 ± 18 2040 ± 20 BC55-19 (47.5%) BC107-20 (95.4%) 27486 BC13-AD1 (14.3%) 湿式篩分: 106 µm C丘陵 SI305 BC153-136 (13.5%) C-2 炭化材 杉沢遺跡 0.287 2008 ± 19 -20.44 ± 0.21 2083 ± 19 2085 ± 20 BC167-48 (95,4%) 27487 酸洗浄 (塩酸: 1.2N BC114-54 (54.7%) AD252-264 (12.6%) 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N) D丘陵 D1区 1745 ± 20 D-1 杉沢遺跡 古土壌 1716 ± 18 -23.14 ± 0.29 1746 ± 18 AD274-306 (35.1%) AD239-346 (95.4%) 25280 古代山陰道路面 (袋込) AD311-331 (20.5%) AD1050-1083 (18.5%) AD1126-1135 (2.3%) D丘陵 D1区 湿式篩分:106µm 杉沢遺跡 -24.02 ± 0.23 D-2 古土壌 866 ± 17 882 ± 17 880 + 15 AD1155-1207 (68.2% 25281 古代山陰道路を縦断する清 酸洗浄 (塩酸: 1.2N (袋込) AD1151-1215 (74.6%) AD257-297 (39.3%) AD321-346 (26.0%) 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N) D丘陵 D1区 古代山陰道造成前古土壌 402 (袋込) D-3 古土壌 杉沢遺跡 1706 ± 18 -23.78 ± 0.27 1725 ± 18 AD372-376 (2.9%) AD1048-1087 (43.99 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N D丘陵 D5区 D-4 炭化材 杉沢遺跡 -23.54 ± 0.20 AD1123-1138 (14.7%) AD1149-1159 (9.6%) AD1039-1165 (95.4% AD67-90 (35.6%) AD100-123 (32.6%) D丘陵 D5区 湿式篩分:106 µn D-5 杉沢遺跡 0.606 1918 ± 18 -25 20 ± 0 23 1914 ± 18 1915 + 20 AD54-129 (95.4%) 炭化材 發洗浄 (塩酸: 1.2N AD1049-1085 (43.0%) D丘陵 D6区 湿式篩分: 106 µm AD1040-1109 (54.7% D-6 炭化材 杉沢遺跡 2.754 920 + 18 -25.80 ± 0.18 906 + 18 905 + 20 AD1124-1137 (11.8%) 27491 酸洗浄 (塩酸:1.2N AD1150-1162 (13.4%) 湿式篩分:106μm D丘陵 D6区 AD891-902 (14.3%) D-7 炭化材 杉沢遺跡 0.532 1161 + 17 -26.80 ± 0.21 1131 + 171130 + 15AD882-975 (95.4%) 27490 酸洗浄 (塩酸:1.2N AD920-962 (53.9%) AD1017-1050 (54.0%) AD1085-1125 (33.4%) AD1136-1151 (8.0%) 湿式篩分:106μm 酸洗浄 (塩酸:1.2N) AD1021-1044 (48.5%) AD1103-1119 (19.7%) D丘陵 D7区 杉沢遺跡 D-8 炭化材 3.996 989 ± 17 -25.84 ± 0.23 975 ± 17 975 ± 15 27492 黒褐色土層 炭化材 杉沢Ⅱ遺跡 -24.76 ± 0.20 1282 ± 17 土坑 酸洗浄(塩酸:1.2N) AD744-765 (30.9%) AD736-769 (38.0%)

第9表 AMS 年代測定結果

*1δ13C補正無年代 *2δ13C補正年代

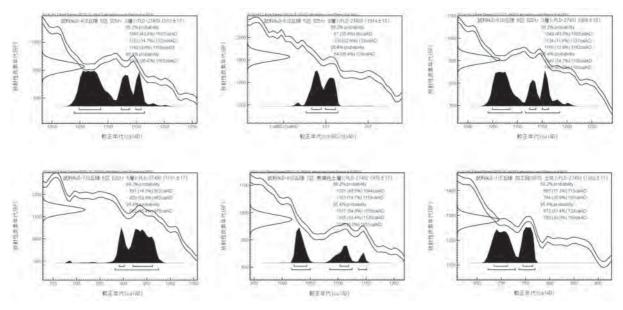


第211 凶 眉牛蚁正和未以

第3項 分析結果

(1) AMS 年代測定結果及びコラーゲン劣化判定 (C/N) (第211・212図, 第9表)

年代測定結果及びC/N を第9表に示す。第9表には, $\delta^{13}C$ 値と3種類の年代を示している。更に第211・212図に,試料ごとの暦年較正図を示す。また,C/N値として,B-1から6.11,B-2か



第212図 暦年較正結果②

ら9.14が得られた。これらはコラーゲンの値 $(2.9\sim3.6)$ に比べて高く,フミン酸等による汚染が進んでいたことがうかがえる。

(2) 軟X線写真観察結果(第213図)

第213図に実視写真、軟X線写真、解析結果を示す。また、以下に層ごとの記載を行う。

5層 造成のための盛土と考えられている。

実視では黄褐色の色調で、礫(ブロック)が顕著で、マトリクス (基質) は粘土からなる。軟X線写真では極細粒の小粒状ペッド (粒団)、細~中粒の小粒状二次ペッドが帯状に分布し、根による擾乱の痕跡と考えられる。チャンネルはジグザクのものが多く観察され、試料整形の際に盛土単位間、あるいは根による擾乱跡に沿って生じたクラックであると考えられる。一方、根跡と考えられる直線的なチャンネルは比較的少ない。また、多くの礫(ブロック)内部も不均質で、二次ペッドが観察されるのが特徴的である。

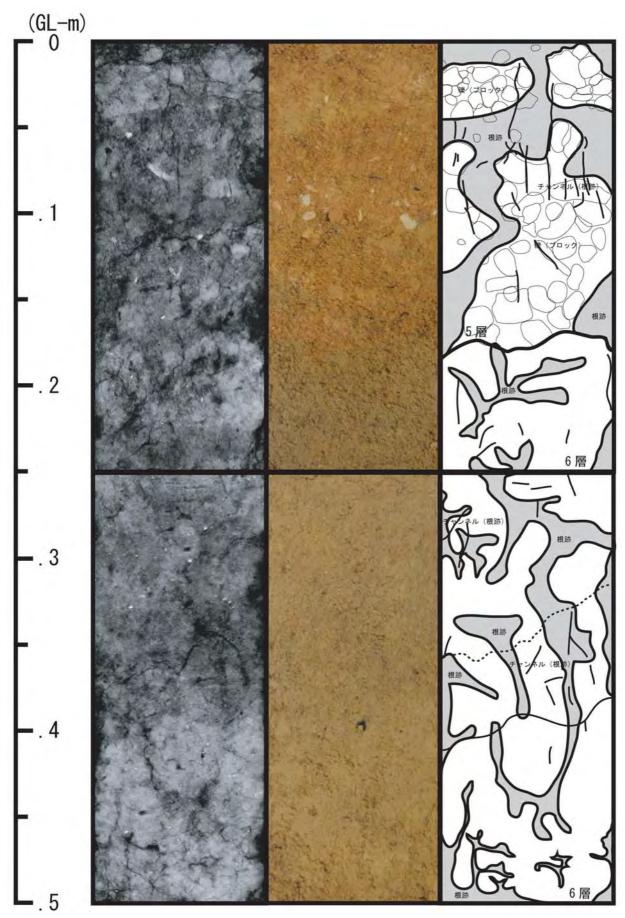
6層 造成以前の堆積層として一括されているが、軟 X 線写真観察では、3層に細分できた。更に5層同様に、6層も極細粒の小粒状ペッドから成る、色調の暗い部分が帯状に連なっており、根による擾乱の跡と考えられる。前述の年代測定用試料 (D-3) は、中部から採取している。以下に、上位から層ごとに記載を行う。

1)上部

5層との境界を太い実線で、中部との境界を破線で示した。

実視写真の上(黄灰色)下(灰黄色)で色調が異なるが、基本的には同色である。下位の実視写真で明らかなように、中部に比べ上部が明るい色調を示す。均質な粘土から成るが、中~極粗粒砂を含む。細~中粒の小粒状ペッドからなるほか、粗粒の小粒状二次ペッドも認められる。

軟 X 線写真では、中~強度に発達した中~極粗粒の小粒状ペッドが目立つが、これらは細粒の小



第213図 軟X線写真観察結果(左:軟X線,中央:実視,右:解析結果)

粒状ペッドから成ることが観察できる。また、前述のように根跡による擾乱と考えられる極細粒の小粒状ペッドが細い帯状に分布し、細い暗色帯を成している。一方根跡と考えられる直線的なチャンネルは少なく、ジグザクのチャンネルが多く観察される。これらは試料整形の際に、根による擾乱跡に沿って生じたクラックの可能性がある。

2)中部

上部との境界を破線で、下部との境界を実線で示した。

均質な粘土から成り、ごく僅かに中粒砂を含む。実視では灰黄色の色調で上部に比べやや暗く、土壌化が進んでいることが示唆される。細~中粒の小粒状ペッドからなるほか、粗粒の小粒状二次ペッドも認められる。細~中粒の小粒状ペッドからなるほか、粗粒の小粒状二次ペッドも認められる。

3)下部

中部との境界を実線で示した。

均質な粘土から成り,ごく僅かに粗粒砂を含む。実視では淡黄色の色調で,細~中粒の小粒状ペッド,あるいは極粗粒の小粒状二次ペッドが認められる。

軟 X 線写真では、実視で観察されたペッドが、中〜強度に発達していることが分かる。また、上位から連続して極細粒の小粒状ペッドが細い帯状に分布し、細い暗色帯を成している様子が観察される。これは、上方から延びる根跡と考えられる。根跡と考えられる直線的なチャンネルは少なく、ジグザクのチャンネルが多く観察される。これらは、試料整形の際に根による擾乱跡に沿って生じたクラックの可能性がある。

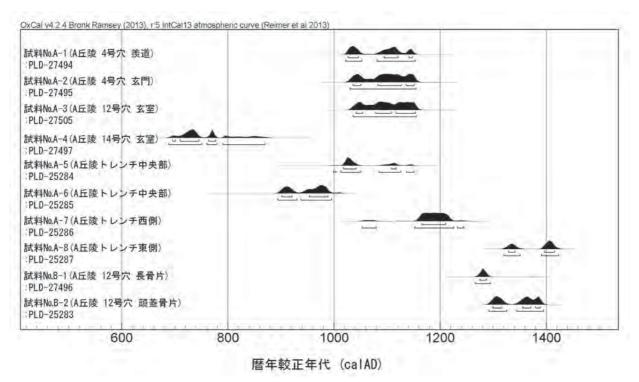
第4項 年代測定値について

(1) 杉沢横穴墓群および杉沢遺跡 A 丘陵 (第214図)

4号横穴墓 羨道 (試料No.A-1) で960 ± 15yrBP, 玄室 (試料No.A-2) で940 ± 20yrBP と, 誤差 (σ) の範囲で重なる値が得られた。羨道, 玄室は, 炭片の値であるおおよそ11世紀中頃から12世紀中頃 以降に埋まったものと推定できる。

12号横穴墓 頭蓋骨 (試料No.B-1) からは 630 ± 20 yrBP (PLD-25283): 13世紀末から14世紀末の値,重なって出土した大腿骨 (試料No.B-2) からは、 710 ± 15 yrBP: 13世紀後半の値が得られた。年代測定値の精度を示す、抽出コラーゲンのC/N はB-1 で9.14、B-2 で6.11が得られていた。両試料とも、人骨からの抽出コラーゲンの一般的な値 (2.9~3.6) に比べ、高い値である。このことは、フミン酸等による人骨の汚染が進んでいたことを示唆し、得られた年代値が実際より新しい値であることを示す。一方、玄室内から得られた炭片 (試料No.A-3) からは 930 ± 15 yrBP: 11世紀中頃から12世紀中頃の値が得られている。人骨は炭片 (試料No.A-3) を含む39層に覆われること、炭片の年代は埋まった年代より古いことから、人骨の年代はこれらの中間値である11世紀中頃から13世紀後半のものと考えられる。

14号横穴墓 玄室 (試料No.A-4) で1240 ± 15yrBP の年代が得られ、7世紀後半から9世紀後半以降



第214図 暦年較正結果の分布(杉沢横穴墓群)

に埋まったものと推定できる。したがって、4号穴、12号穴より古い時期に埋まったことが分かる。 **A丘陵上** 3層では、下部 (試料 \mathbb{N}_0 A-6) から9世紀末~10世紀末の年代が、上部 (試料 \mathbb{N}_0 A-5、A-7) からは10世紀末~13世紀中頃の値が得られた。前述のように、古土壌では試料の持つ誤差が大きく信頼度が低いとされるが、上下 (試料 \mathbb{N}_0 A-5とA-6) で矛盾がなく、上部の2試料 (試料 \mathbb{N}_0 A-5とA-7) も誤差の範囲で重なる。これらのことから、今回の測定値の信頼度は高いと考えられる。

22層 (試料No.A-8) と3層は、間に21層が存在し、接していない。このことから両者の上下関係を明らかにするために22層 (試料No.A-8) の年代測定を行ったが、22層 (試料No.A-8) と3層 (試料No.A-5、A-6、A-7) との年代測定値 2 σ の間で、重なりは認められなかった。

年代測定結果を踏まえ、両層が一連の古土壌であるとすれば、3層堆積から22層堆積に至る過程が、以下のように推定できる。3層最上部の堆積(形成)時期に土坑が掘削され、間もなく埋まった。この間、及びその後も3層の堆積(形成)は続いた。土坑を覆う部分では、凹地に堆積したことから層厚が特に厚くなった。このように、22層が3層最上部に位置すると考えると、検出された古土壌全体の形成時期は、9世紀末から15世紀前半と捉えることができる。

また、両層が全く別の層準(別の時期に堆積(形成)した)と仮定すると、3層堆積から22層堆積に至る過程が、以下のように推定できる。3層堆積(形成)後に2層、11層が順次堆積する。2層あるいは11層の堆積期間に土坑が掘削され、間もなく埋まった。その後、古土壌(22層)が形成される。22層はA丘陵全体を覆うが、10層堆積以前(2層あるいは11層の堆積時期間)に削平を受け、A丘陵東部にのみ残存した。このように、22層と3層の形成過程が別であると考えると、下位の古土壌(3層)は9世紀末から13世紀中頃に形成され、上位の古土壌(22層)が14世紀から15世紀前半を中心とした時期に形成されたと捉えることができる。

(2) 杉沢遺跡 C 丘陵: 竪穴建物 SI305

紀元前2世紀末〜紀元前1世紀中頃で2試料が重なった。出土遺物から弥生時代の遺構(竪穴建物) と考えられており、測定結果と一致した。

(3) 杉沢遺跡 D 丘陵 (第215図)

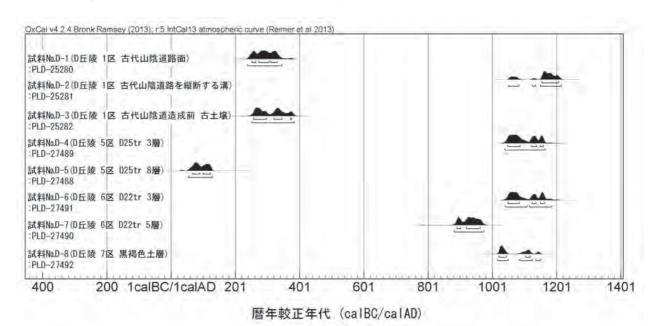
D1区(古代山陰道) 遺構下位(試料No.D-1, D-3)から得られた年代値は、いずれも3世紀中頃~4世紀中頃(弥生時代末~古墳時代前期)を示した。一方、上位の溝埋土(試料No.D-2)からは11世紀中頃~13世紀初頭(平安時代後半~鎌倉時代初頭)の年代値が得られた。

測定試料が古土壌であり、試料の持つ誤差が大きいことが指摘されるが、下位の2試料からはほぼ 同じ値が得られており、信頼度は高い(上位の値の信頼性については定かでない)。

これらのことから道路が使われた時期は、おおよそ古墳時代前期から平安時代後期の間と考えられる。

D5区(D25トレンチ,第209図左下) 地山直上の黒褐色砂質土(8層)で1世紀中頃から2世紀前半(試料No.D-5),黒色土(3層)で11世紀中頃から12世紀中頃(試料No.D-4)の年代値が得られた。いずれも弥生時代以降の地層と考えられており、矛盾のない結果であった。古土壌の場合、層厚にかかわらず形成過程が長期に亘る場合があり、同一層の上下で年代測定値に時期差が現れることがある。今回も8層が弥生時代、3層が平安時代後半と時期差が認められるが、一般的に考えられる堆積の休止、あるいは浸食だけではなく、古土壌が時間をかけて堆積していた可能性もある。

D6区(D22トレンチ,第209図右下) 地山直上の黒褐色砂質土(5層)で9世紀後半から10世紀後半(試料NoD-7), 黒褐色砂質土で11世紀中頃から12世紀初頭(試料NoD-6)の年代値が得られた。いずれも平安時代を示し、上下関係で矛盾のない結果であった。遺物が出土しておらず、堆積時期は未定であったが、両層ともに平安時代の間に堆積したと考えられる。



第215図 暦年較正結果の分布(杉沢遺跡D丘陵)

D7区 黒褐色土で11世紀前半から12世紀中頃(試料№D-8)の年代値が得られた。5区,6区上位の古土壌と年代値が重なり、これらの層が連続した古土壌である可能性が指摘できる。

(4) 杉沢Ⅱ遺跡

加工段SX515内土坑 土坑底部の暗褐色土(3層)で7世紀中頃から8世紀中頃(試料No.E-1)の年代値が得られた。出土遺物からは弥生時代の土坑と推定されており、得られた年代値(飛鳥~奈良時代)が新しかった。推定時期が正しいとすれば、根等による生物擾乱によって、上位の炭片が潜り込んだ(混入した)可能性が指摘できる。

【註】

- 1) Bronk Ramsey, C. 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 2) Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.
- 3) 渡辺正巳 2009「五丁遺跡・庵寺遺跡における堆積相の軟 X 線観察」『五丁遺跡 庵寺遺跡 I 於才迫遺跡』 一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 4) 久馬一剛・八木久義訳監修 1989『土壌記載薄片ハンドブック』博友社

第2節 杉沢遺跡建物跡の古地磁気測定とその意味

畠山唯達(岡山理科大学情報処理センター)

第1項 はじめに

考古地磁気年代推定法は以下に述べるような地球の磁場(地磁気)の特徴を用いた年代推定の手法 である。地球上のある地点における地磁気ベクトルが指す方向は一定ではなく常に変化している。そ の地域における地磁気変動をあらかじめ調べておき(標準曲線). 時代がわからない考古資料(主に炉 跡、竈跡などの被熱遺構)に記録された過去の地磁気ベクトル(残留磁化)を実験室中で測定し標準曲線 と対比することで、おおよその年代を調べることができる。対比するための標準曲線は、たとえば日 本付近の場合.広岡公夫¹⁾²⁾によって確立された。当時年代に信頼のおける約220のサイト(主に古 窯)から残留磁化方位を測定し、過去2000年分の永年変化曲線を作成した。これが現在、もっともよ く使用されている標準曲線である。しかしながら、そのカバーする時代範囲は西暦元年からの2000 年間であり、それ以前、つまり弥生中期以前の古地磁気方位データは乏しいため、標準といえるよう なものを作成することが困難である。近年筆者らは広岡曲線以降の考古地磁気データのうち考古学年 代に信頼のおけるものを追加した約680サイトのデータベースを作成した³⁾。このデータベースを用 いて日本における地磁気永年変化曲線の刷新版を作ったが、古墳時代前期(4世紀前期)以前のデータ は質・量ともに不十分で、満足のいく曲線を描くことができなかった。その理由は、須恵器以前の土 器編年があまり確立されていないこと、および、須恵器窯以前の土器窯は数が少なく保存状態がよく ないだけでなく、もともと低温で焼かれているため残留磁化の強度・安定性が閉じた須恵器以降の窯 と比べて著しく低いことによると考えられる。考古地磁気学全体の問題として、3世紀以前の地磁気 変化を調査し、標準曲線を過去へ延長することが重要である。

今回, 試料採取し古地磁気測定を行った杉沢遺跡 C 丘陵の 2 遺構は年代がいずれも弥生時代中期後葉に属し、上記の問題に重要な情報を与えることが期待された。

第2項 試料採取と分析

(1) 試料採取

2014年8月に杉沢遺跡 C 丘陵「竪穴建物 SI305 (SI02)」および「加工段 SX320 (SI03)」内のいずれも炉跡ではないかと目される被熱土床面より試料採取を行った(遺構名のカッコ内は試料採取時の仮名称)。付近の地質は中新世の堆積岩類⁴⁾の上に苦鉄質ではない土壌が乗っており、白~白褐色を示す。当時の土床面はしっかりしており、一部が熱を受け赤色に変色している。今回は両サイトにおいて赤色部 (以降、被熱床面と呼ぶ) からそれぞれ6つ、および対比用として赤色部から1m 程度離れた普通の床面 (以降、非被熱床面) から2つずつ、合計8つずつのブロック状試料 (10~15cm 角: SI02-1~8, SI03-1~8) を定方位採取した。方位づけには磁気コンパスを利用したが、付近の地質を考えて現在の

偏角値としては標準地球磁場 $^{5)}$ 6)を使用した(偏角=-7.7°)。

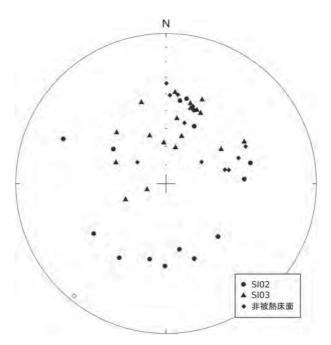
通常の竈跡等被熱床面では、須恵器窯のような密封された窯跡床面ほどではないもののごく表層は焼かれて固くなっているため、鋭利なハンマーやタガネを使用し削るように溝を掘り、そこへ石膏を流し込んで平らにした上面で定方位し採取する。しかし今回の場合は、被熱床面表面から下数10cmにかけて非常に柔らかく、「水を含んだ砂泥質」のような強度であったため、金属へラでも楽に貫入して溝を掘ることができた。試料は実験室に持ち帰ってから十分乾燥させ、上面石膏面のマークを維持するように約1.5cm角に切断した。各面の切断時には直後に石膏を塗布するよう破損や基準面の破壊に十分注意しながら加工をしたが、1ブロック(SI02-6)が破損し定方位した基準面が失われたため、測定を行わなかった。

(2) 古地磁気方位測定

各ブロックより2~3個のサブサンプル(たとえばSI02-1aはSI02サイトより採取した1番目のブロックから切り出した1つ目のサブサンプル)を作成し、残留磁化方位を測定した。はじめにパイロット試料を考古地磁気学で通常用いられるスピナー磁力計で測定したところ残留磁化強度が非常に弱いことが判明したため、交流消磁を含むすべての残留磁化測定は高感度で特に微弱な信号の試料を測定することが可能な高知大学海洋コア総合研究センターの超伝導磁力計を使用して行った。

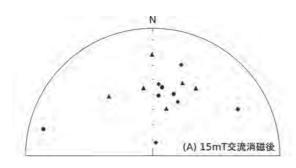
まず、15ブロック44試料について、自然残留磁化 (NRM) 方位の測定を行ったところ (第216図: 1980年代までの考古地磁気学測定ではNRM 方位を残留磁化の方位として報告することが多かった)、方位は北

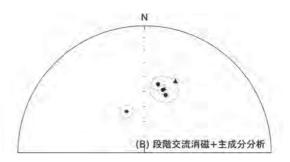
方向下向きを示すものが多いものの集中が極 めて悪いことが分かった。そこで各ブロック から1サブサンプルずつを選び、段階交流消 磁(磁気的なクリーニング)をしながらの古地 磁気方位測定を行った。途中の15mT にお ける方位の結果(第217図A:一律消磁による 二次的な磁化成分除去後の方位。考古地磁気学測 定でよく行われる)では、NRMと比べて集中 が良くなっているものの、考古遺跡からの試 料に対する古地磁気方位測定としては問題が ある。そこで、段階交流消結果の各点から主 成分分析法⁷⁾(第217図B:現在岩石や堆積物に 対して最もよく使用される解析法)を用いて抽 出した各線におけるもっとも安定と思われる 磁化方位を抽出した。安定成分が見つから ない(主成分分析における誤差角MADが10°以 上のもの)を除去し安定と認定できる残留磁



第216図 被熱床面試料および非被熱床面試料について の消磁前の自然残留磁化 (NRM) 方位

※方向は等面積投影プロット上に行っており、上部(北)からの角度は偏角を、半径方向は伏角を表す(図の淵が伏角0度=水平で中心が伏角90度=真下向)。 左下の1点(白丸は上向きを示す)を除きすべて下向きであった。



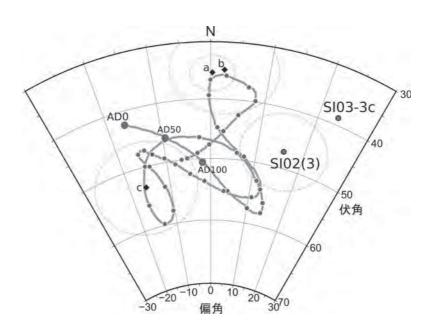


第217図

(A) 被熱および非被熱床面の15mT 交流消磁後の方位 (B) 段階交流消磁後の主成分分析による特徴的方位 ※投影は第216図と同じ。(B) の各円は主成分分析における誤差核 (MAD⁷⁾)

消磁等	試料	試料数	平均偏角	平均伏角	a 95
NRM	SI02 SI03 非被熱床面	15 18 12	140.6 7.3 30.9	85.4 60.4 60.8	25.6 25.1 44.6
15mT 消磁後	SI02 SI03 非被熱床面	5 6 4	4.8 4.5 15.2	47.1 43.1 50.6	46.9 18.7 27.8
段階交流消磁	SI02 SI03 非被熱床面	3 1 2	15.7 23.5 0.6	47.2 38.8 55.5	6.4 — 63.4

第10表 古地磁気方位と弥生時代中期後葉の地磁気方位



第218図 本研究による安定古地磁気方位と過去の研究, および地磁気変動モデルの比較

※段階交流消磁後の竪穴建物 SI305 の平均方位および加工段 SX320 (SI03-3c 試料) の安定磁化方位,広岡¹⁾²⁾による日本における過去 2000 年間の地磁気永年変化曲線(1 世紀前後のノード点について年代を示している),および筆者らが作成中の地磁気データベースに記載されている紀元前後 (便宜上 AD 0 年としている) の平均古地磁気方位 3 サイトのデータ (a= 喜志遺跡⁹⁾,b= 田能遺跡,c= 綾羅木郷遺跡¹⁾)。

SIO3-3c を除くものは複数試料の方位データから計算した95% 信頼限界 $^{8)}$ の範囲を点線で示している。

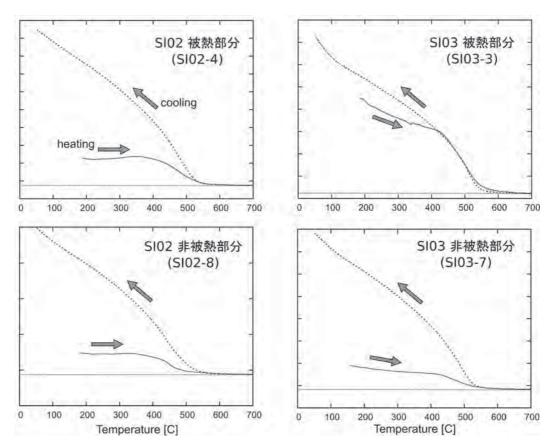
化方位が得られた試料は、竪穴建物 SI305 からは 7 サブサンプル中 3 個、加工段 SX320 からは 8 サブサンプル中 1 個 (SI03-3c)、両サイトの非被熱床面部からは 4 サブサンプル中 2 個であった。NRM、15mT 消磁後、および段階交流消磁結果の主成分分析、各方法によって得られた古地磁気平均方位等を第10表に示す。平均方位およびその 95 % 信頼限界角 (a 95) はフィッシャーによる球面上分布の統計学⁸⁾による。今回の試料の場合、成功した試料数は少ないものの、段階交流消磁による分析結果が一番まとまりが良いので、これを両サイトの代表的な古地磁気方位として報告する。

このようにして得られた残留磁化方位とこれまでの考古地磁気研究で報告された過去(紀元1年前後)の地磁気方位を比較する。第219図に竪穴建物SI305から得られた3試料の段階交流消磁による安定磁化の平均方位と、加工段SX320から唯一得られた安定磁化方位、および筆者らのデータベース中にある西暦元年(便宜的にAD0と記述)前後の考古地磁気方位データ3サイト¹⁾⁹⁾と広岡による永年変化曲線を示す。残念なことに、これら各データと標準曲線間にはおおよそ近いとはいいがたい方向の隔たりがある。前述したように、弥生時代中期の古地磁気方位はデータが質量ともに不足していると言え、今回の結果が当時の地球磁場を反映しているかどうか、あるいは以前の結果が反映しているかを断定することができない(過去の3サイトのデータは消磁をしていないNRM方位の平均で、かつ、当時使用した磁力計はスピナー磁力計と比べて感度と安定性が悪い無定位磁力計である)。この時代の正確な古地磁気方位に関する議論をすることは今後の研究に任せるが、少なくとも広岡曲線の一番初期(弥生中~後期)の方位はあまり正確なものとは言えないだろうと考える。

第3項 考察

(1)残留磁化を担う鉱物について

上記のように、杉沢遺跡 2 遺構の被熱床面に対する古地磁気学的研究では、その残留磁化が極めて弱く安定な方位を抽出するのにも困難を伴った。そこで本稿の最後に残留磁化の担い手である磁性鉱物について簡単に触れることにする。第219図は竪穴建物 SI305・加工段 SX320 の被熱・非被熱床面試料に対して、強磁場中かつ真空中にて700 $\mathbb C$ まで温度を上昇させながら磁気的応答(誘導磁化、今回の実験の場合は印加した磁場が0.3T ですべての磁性鉱物について飽和磁化の 9 割以上の応答をするので飽和磁化とみなして構わない)を調べた熱磁気分析の結果である。残留磁化測定とは異なり、含まれる磁性鉱物(磁気的性質をもつ鉱物、主に鉄の酸化物)の相対量・種類・変質を調べる実験である。昇温時と降温時にカーブの経過が異なるのは、もとにあった磁性鉱物が真空中のその温度で別のものに変質したことを示す。程度の差があるものの各図に共通するのは、昇温時の400 $\mathbb C$ 付近に肩があり、降温時には誘導磁化は昇温時よりなめらかに上昇する。ここから少なくとも2種類の磁性鉱物が各試料中に存在し、片方は400 $\mathbb C$ 付近で変質してしまう一方、もう片方は500 $\mathbb C$ 台中盤までに磁気的相転移(キュリー温度)によって磁化を失う。変化が見られる温度から前者はマグヘマイト(磁赤鉄鉱: γ -Fe₂O₃)、後者はごく微量のチタンを固溶するマグネタイト(磁鉄鉱:Fe₃O₄)であると考えるのが妥当である。土壌中のマグへマイトはもともとあったマグネタイトが常温にて酸化される途中でマグネタイトと同じス



第219図 竪穴建物 SI305 (SI02)・加工段 SX320 (SI03) の焼土部と非焼土床面から採取した試料の熱磁気分析結果 ※各測定の実験条件は昇降温の速度は10℃/分,真空度は10torr 以下である。試料は土壌表層直下から採取し数 十mg の塊状・粉末状にして測定器に投入した。なお,SI02-4,SI03-3ともに図2Bにある段階交流消磁にて 安定な磁化方位が得られた試料である。

ピネル構造を保ったまま酸化された状態の鉱物である(低温酸化10)。そのため熱に弱く,実験室内で 400 \mathbb{C} 程度までに加熱すると空気中であればヘマタイト(赤鉄鉱: α -Fe $_2$ O $_3$)になり,低真空中であればマグネタイトに還元する。低温酸化してマグヘマイトになるときに残留磁化をリセットするのかは 議論の分かれるところであるが,いずれにせよマグヘマイトの持つ残留磁化の素性は良いものとは言えない。今回の場合,マグヘマイトは被熱・非被熱部分の両方に見られることから,遺構建造時の床面土壌にもともとあったものと遺跡の埋没後に土中で生成されたものの両方の可能性がある。また,焼土面以前の土壌にあるマグヘマイトが残留していたとすると,床面が焼かれた温度は400 \mathbb{C} 程度までの極めて低いものである可能性が高い。唯一,SIO3-3 試料については,降温時の曲線と昇温時の曲線の差がしめすこの度合いが低くマグヘマイトと比較して相当量のマグネタイトが存在したことが推測され,古地磁気結果が示す残留磁化の強度・安定性と整合性がある。この試料は加工段SX320の床面被熱部のうち中心部に近く,この部分だけ回りと比べて温度が高くなるまで熱を受けている可能性が高い。

(2)考察

弥生時代中期後葉に使用されたと考えられる出雲市斐川町杉沢遺跡 C 丘陵の 2 遺構・竪穴建物

SI305および加工段SX320の被熱床面より試料を採取し、考古地磁気方位測定を行った。段階交流消磁をしながらの古地磁気測定の結果、安定と見られる残留磁化方位を両サイトから得た。両サイトの平均方位は約 10° 離れていて、過去の同時代の考古地磁気研究結果や標準曲線との整合性がなかった。また、熱磁気分析の結果より、熱を受けた部分のうちごく中心部を除く大部分は 400° と大きく超えることがなかったと推察される。

今回の考古地磁気方位測定結果より、同時代の地磁気方位に関して決定的な証拠を得ることができなかったが、今回、同時代の試料に対して前例が少なかった詳細な消磁を行い解析したことで、今後の須恵器開始以前の考古地磁気学研究に重要なデータを提供することになろう。

【謝 辞】

本研究に際して発掘調査を行い試料採取の場を与えてくださった出雲市市民文化部文化財課の皆様、およびマネジメントと試料採取を助けてくださった文化財調査コンサルタント株式会社の渡邉様に感謝いたします。本研究の古地磁気測定・岩石磁気測定は岡山理科大学および岡山大学教育学部、高知大学海洋コア総合研究センターで行いました。また、本研究は私立大学戦略的基盤形成事業の支援を受けております。感謝いたします。

【註】

- 1) Hirooka, K., 1971, Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.
- 2) 広岡公夫 1977「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」『第四紀研究』15-4,200-203.
- 3) 畠山唯達 2013, 日本考古地磁気データベース, http://mag.center.ous.ac.jp/
- 4) 産業技術総合研究所地質調査総合研究センター 2003『シームレス地質図』https://gbank.gsj.jp/seamless/
- 5) Thébault, E, Finlay, C. C., Beggan, C. D, Alken, P., Aubert, J., Barrois, O, Bertrand, F., Bondar, T., Boness, A., Brocco, L., Canet, E., Chambodut, A., Chulliat, A., Coïsson, P., Civet, F., Du, A., Fournier, A., Fratter, I., Gillet, N., Hamilton, B., Hamoudi, M., Hulot, G., Jager, T., Korte, M., Kuang, W., Lalanne, X., Langlais, B., Léger, J-M., Lesur, V., Lowes, F. J., Macmillan, S., Mandea, M., Manoj, C., Maus, S., Olsen, N., Petrov., V., Ridley, V., Rother, M., Sabaka, T. J., Saturnino, D., Schachtschneider, R., Sirol, O., Tangborn, A., Thomson, A., Tøffner-Clausen, L., Vigneron, P., Wardinski, I., Zvereva, T., 2015, International Geomagnetic Reference Field: the 12th generation, Earth, Planets and Space, 67:79, doi:10.1186/s40623-015-0228-9.
- 6) 京都大学大学院理学研究科付属地磁気世界資料解析センター 2015『国際標準地球磁場 (IGRF-12)』http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/igrf/index-j.html
- 7) Kirschvink, J.L., 1980, The least-squares line and plane and the analysis of palaeomagnetic data, Geophys. J. Int., 62, 699-718.
- 8) Fisher, R.S., 1953, Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc., A.217, 295-305.
- 9) Shibuya, H., 1980, Geomagnetic secular variation in southwest Japan for the past 2000 yaers by means of

archaeomagnetism, M.S in Osaka Univ., 54pp.

10) Dunlop, D. J, Özdemir, O., 1997, Rock magnetism, Cambridge University Press, Cambridge, 573pp.

第3節 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の自然科学的調査

田村朋美 (奈良文化財研究所)

第1項 はじめに

島根県出雲市斐川町直江に位置する杉沢Ⅱ遺跡からガラス小玉が出土した。本遺跡は標高20m前後の丘陵斜面に竪穴建物跡1基と加工段が8基確認されている。ガラス小玉は調査区南側の竪穴建物跡内から土器とともに出土した。共伴する土器は弥生時代中期後葉に帰属するもので、ガラス玉出土例としては島根県内最古に位置づけられている。

今回, 杉沢Ⅱ遺跡から出土したこれらのガラス小玉について自然科学的調査を実施した。以下, その結果について述べる。

第2項 資料と方法

(1)調査資料(第220図)

調査対象は、杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉 6点 (No.1~No.6) である。いずれも淡い紺色透明を呈し、No.5 のみ半欠品であるが、おおむね保存状態は良好である。これらのガラス小玉について、下記の方法で製作技法および基礎ガラスの種類と着色要因について調査した。

(2)調査方法

1)顕微鏡観察

製作技法を推定するため、ガラス玉に含まれる気泡の配置や形状、ガラス玉表面および孔壁面の状態および形状など、製作技法を示す痕跡に着目して、落射光および透過光下での実体顕微鏡観察をおこなった。落射光下では、ガラス表面や孔内部の凹凸、開孔部周辺の形状を観察した。透過光下では、透明感や色むらの有無、および内部の気泡の形状や配列を観察した。

2) コンピューテッドラジオグラフィ法

アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの判別を目的として、X線透過撮影法の一種であるコンピューテッドラジオグラフィ法 (Computed Radiography 法、以下、CR 法) を実施した。CR 法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート (Imaging Plate, 以下, IP) を検出系に用いる方法である。アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の方がはるかに比重が大きく、X線吸収係数も大きい。したがって、アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスを同じ条件下でX線透過撮影すると、ポジ画像で鉛ケイ酸塩ガラスがより濃い画像として得られることになる。

CR 法には、マイクロフォーカス X 線拡大撮像システム (富士フイルム社製 μ FX - 1000) とイメージングアナライザー (富士フイルム社製 BAS - 5000) を用いた。IP には BAS - SR2025 を使用した。管電圧は

50kV, 管電流は50µA, 露光時間は60秒であった。

3) オートラジオグラフィ法

本調査では、カリガラスの判別を目的としてオートラジオグラフィ法(Auto Radiography 法:以下、AR法)を実施した。IP は放射線に対して極めて感度がよく、微弱な放射線でも長時間暴露することで検出可能である。AR 法は、物質から放射される放射線をフィルムやIP に記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。カリガラスは一般に酸化カリウムを 18% 前後含有し、 40 K に由来する放射線(ベータ線)を放射している。したがって、カリガラスとソーダ石灰ガラスをIP 上に同じ時間だけ暴露した場合、得られた画像の中でより濃いものを、カリガラスとして識別することができる。

本調査では、以下の手順でAR法を実施した。まず、資料を直接上に置いたIPを、外部からの放射線を遮断するため、鉛製の遮蔽箱内に設置した。そして、遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため、IPの周辺を銅板で囲った。使用したIPはBAS-SR2025であり、暴露時間は168時間とした。また、比較のための標準試料として、日本岩石標準試料JB-1aとJG-1aの粉体圧縮ピース、およびBCR126A (IRMM (Institute for Reference Material and Measurement)標準物質)を同時に暴露した。これらの酸化カリウム (K_2O) の含有量は、それぞれ1.4%、4.0%および10.0%である。暴露後、IPを取り出し、CR法と同様にイメージングアナライザーによりスキャンニングをおこない、AR像をデジタルデータとして取得した。

4) 蛍光 X 線分析法

ガラス小玉の主要な構成成分とそれらのおおよその含有量を知るために蛍光X線分析を実施した。本調査ではエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊測定をおこなった。資料表面の非破壊測定では、風化の影響により構成元素の一部が増減するため、資料本来の化学組成を知ることはできないものの、基礎ガラスの種類や着色要因を推定することは可能である。

資料の測定箇所は、亀裂等が少なく、保存状態が良好と判断した部分を選定した。なお、測定に先立ち、土などの汚れは顕微鏡下でエチルアルコールを用いた洗浄をおこなった。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料 (CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620)を用いて補正した理論補正法 (Fundamental Parameter method、以下FP法)により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。

測定に用いた装置は、エダックス社製EAGLE III である。励起用 X 線源は Mo 管球、管電圧は、FP 法を用いた定量分析では 20kV に設定し、一部の資料については 20keV 以上のスペクトルを検出するため、50kV に設定した。管電流は $100\mu A$ 、X 線照射径は $112\mu m$ 、計数時間は 300 秒とした。なお、測定は真空中で実施した。

5)可視分光分析法

ガラスの色情報を取得するため、可視反射分光分析を実施した。測定には、日本分光製分光光度計 MV-2020 (プローブ光源内蔵) を用いた。測定波長範囲は358-968nm、プローブ光照射径は $1\,\text{mm}$ 、測定時間は $3\,\text{秒}\times10$ 回であった。

第3項 結果と考察

(1)製作技法

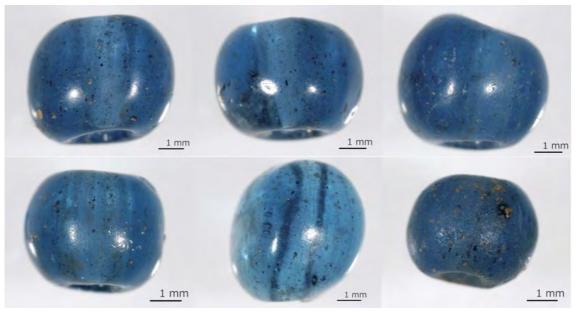
杉沢Ⅱ遺跡出土のガラス小玉は、いずれも孔と平行に並ぶ気泡列が観察されたことから、軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を製作し、それを分割して小玉を作ったと推定できる(第220図)。既往研究で「管切り法」(朝比奈・小田1954など)や「引き伸ばし法」(大賀2002)と呼ばれる製作技法に相当する。ここでは、引き伸ばし法と呼ぶ。

(2) 基礎ガラスの種類と着色要因

CR法を実施した結果、X線の吸収が特別に大きい個体は認められなかった(第221図)。したがって、本調査対象としたガラス小玉は、いずれもアルカリケイ酸塩ガラスであると推測される。

AR 法の結果を第222図に示す。いずれの資料からも強い放射線が検出されたことから、 K_2O の含有量の多いガラスであることが示された。カリガラスの可能性が高いと判断される。

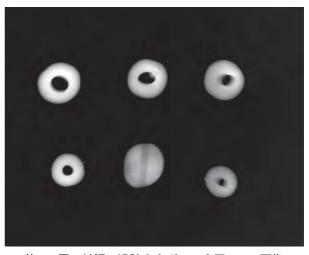
以上の結果を踏まえて、蛍光X線分析を実施した。結果を第11表に示す。杉沢II遺跡出土のガラス小玉は、 K_2O の定量値が $14.1 \sim 18.9\%$ という高い値を示し、カリウムを融剤としたカリガラスであった。この結果はCR 法およびAR 法の結果と整合的である。さらに、カリガラスの分類基準となる酸化アルミニウム (Al_2O_3) と酸化カルシウム (CaO) の含有量を検討すると、本資料は、カリガラス



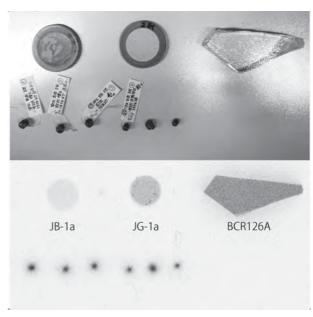
第220図 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の顕微鏡写真(倍率不同)

の中でもAl₂O₃が比較的少なく、CaO が多いタ イプのカリガラス (Group PI) (Oga and Tamura 2013) と重複するが、やや Al_2O_3 の含有量が少 ない領域に偏って分布する傾向が認められた (第223図)。なお、Group PI はコバルト着色の カリガラスに、Group PII は銅着色のカリガラ スに対応することが明らかとなっている。

本資料の着色に関与する成分としては、酸化 マンガン (MnO) を2.29~3.63%, 酸化銅 (CuO) を0.83~0.95%含有するのが特徴である。さ らに、本資料は酸化コバルト(CoO)を0.03~ 0.04%含んでいる。コバルトイオンは強力な着 色力を有するため、微量でも着色に関与してい る可能性がある。コバルトイオンによって着色 されたガラスは特徴的な可視反射スペクトルを 示すことが知られていることから(不破1938). 可視分光分析を実施したところ,530nm, 600nm, 640nm 付近に吸収を示すコバルトイ オンに特徴的な可視反射スペクトルが得られ た (第224図)。すなわち、本資料は、マンガン、 コバルト. 銅の3成分が着色要因と考えられる が、コバルトイオンのために紺色味が強く発色 していると推察される。



第221図 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の CR 画像



第222図 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉のAR画像

d.								重	量濃度	(%)							
No.	Na ₂ O	MgQ	Al:Os	SiO2	P:O	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	Ni ₀ O ₀	CuO	PbO	Rb ₂ O	SrO	Z
1	0.2	0,2	2.5	73.9	0.3	16.2	2.1	0.24	2.44	0.71	0.04	0.01	0.86	0.03	0.02	0.02	C
2	0.7	0,3	2.4	73.4	0.3	16.3	2.1	0.25	2.32	0.70	0.04	0.01	0.83	0.06	0.02	0.04	C
2	1.2	DA	21	72.0	0.3	165	20	0.72	2.70	0.68	0.03	0.00	0.83	0.02	002	001	0

第11表 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の蛍光 X 線分析結果

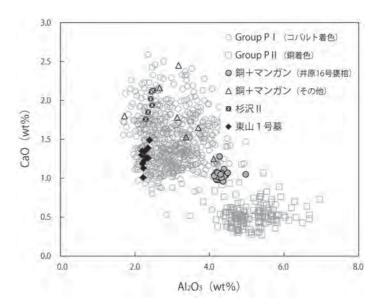
BaO 0,23 0.26 0.25 0.18 0.23 0.15

No.	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiOz	P:O	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	Ni ₀ O ₀	CuO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO:
1	0.2	0.2	2.5	73.9	0.3	16.2	2.1	0.24	2.44	0.71	0.04	0.01	0.86	0.03	0.02	0.02	0.09
2	0.7	0,3	2.4	73.4	0.3	16.3	2,1	0.25	2.32	0.70	0.04	0.01	0.83	0.06	0.02	0.04	0.11
3	1.2	0.4	2.4	73.0	0.3	16.5	2.0	0.23	2.29	0.68	0.03	0,00	0.83	0.02	0.02	0.01	0.07
4	0.5	0.3	2.3	70.1	0.3	18.9	1.8	0.20	3.62	0.90	0.04	0.00	0.95	0.04	0.02	0.02	0.08
5	0.4	0.5	2.4	74.7	0.3	14.1	1.9	0.24	3.63	0.93	0.03	0.00	0.89	0.02	0,02	0.04	0.06
6	1.3	0,5	2.5	72.6	0.3	16.6	1.9	0.23	2,42	0.70	0.04	0.01	0.83	0.02	0.01	0.00	0,11

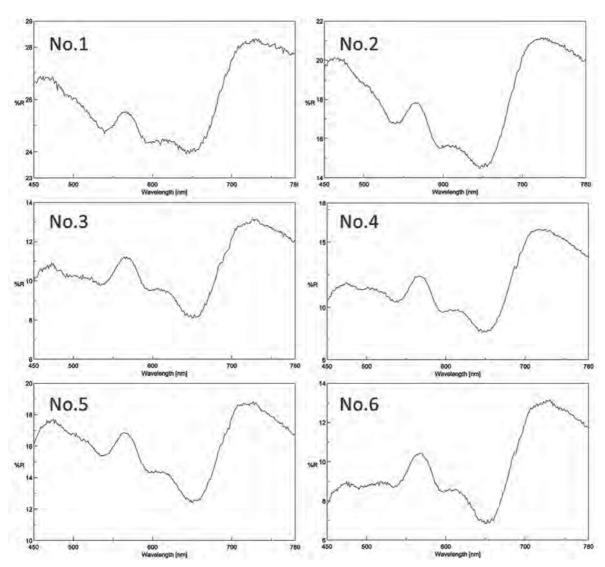
(3)考察

以上のように、杉沢Ⅱ遺跡出土のガラス小玉は基礎ガラスの化学組成の特徴からはGroup PIのカ リガラスに帰属すると判断された。しかしながら、典型的なGroup PI のカリガラスはCoO を0.5~ 1%以上含有し、コバルト原料に付随するMnOを1~2%含有する一方でCuOおよびPbOの含有 量が0.1%未満であるのに対し、本資料はCoOがやや少なく $(0.3\sim0.4\%)$ 、銅とマンガンが主要な着 色要因と考えられることから、典型的なGroup PIとは着色剤の特徴が異なることが明らかとなった。

引き伸ばし法による銅とマンガンによって複合的に着色されたカリガラス製小玉は、分析事例は少ないものの弥生時代後期前半には出現する(井原ヤリミゾ遺跡16号甕棺墓など)。ただし、井原ヤリミゾ遺跡出土品は、CuOの含有量が2%前後と多い反面、CoOの含有量が0.01~0.03%と本資料よりもさらに少なく、色調も青緑味が強い(第225図左)。基礎ガラスの化学組成

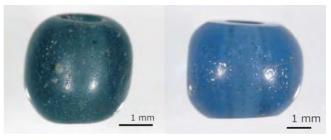


第223図 カリガラスの Al₂O₃-CaO 含有量による分類



第224図 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の可視分光スペクトル

についても、井原ヤリミゾ遺跡出土品は、Group PIとGroup PIIの中間的な領域に分布し、本資料とは異なる特徴を有する(第223図)。一方、Group PIの分布と重複する銅・マンガン着色によるカリガラスも弥生時代後期後半以降の遺跡から散発的に出土するが、いずれもCoOの含有量がさらに少ない点(0.01~0.03%)で、本資料とは異なっている。



第225図

- (左) 福岡県井原ヤリミゾ遺跡16号甕棺墓出土品
- (右) 兵庫県東山 1 号墓出土品

杉沢 Π 遺跡出土品と基礎ガラスの化学組成および着色剤の両方が類似する資料として、弥生時代後期前葉に比定される兵庫県豊岡市東山 1 号墓出土のガラス小玉85点中に10 点確認している(第225図右)。両者はCaO 量にやや差異が認められるものの、 $Group\ PI$ の中で比較的 Al_2O_3 が少ない領域に偏る点で共通する(第223図)。本資料も含め、コバルトをわずかに含む銅・マンガン着色のカリガラス製小玉の色調は一般的なコバルト着色のカリガラス($Group\ PI$)製小玉と類似しており、これまで見落とされていた可能性がある。今後は注意して分析調査を進めていきたい。

【引用・参考文献】

朝比奈貞一・小田幸子 1954「日本古代ガラス玉の成形について」『古文化財の科学』第7号,10~13頁 大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書 V 127-145頁

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』No.566, 13~25頁
不破橘三 1938「酸化コバルトを含むガラス (第1報)」『大日本窯業協會雑誌』第46集, 644~646頁
Oga and Tamura 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean International Sphere: Chemical Compositions,
Chronologies, Provenences and Trade Routes of imported glass beads in the Yayoi-Kofun Periods (3rd Century
BCE-7th Century CE), Journal of Indian Ocean Archaeology No.9, pp.34-60.

第4節 杉沢横穴墓群4号横穴墓における閉塞石の石材鑑定

渡邉正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)

第1項 はじめに

杉沢横穴墓は、島根県東部の出雲市斐川町直 江に立地する遺跡である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市文化財課からの委託を受け実施・報告した調査報告書の概報である。本報では、横穴墓閉塞石の産地同定の基礎資料として、4号横穴墓の閉塞石及び比較試料(第226図)について、岩石学的な記載を実施した。



第226図 調査地点(国土地理院地図に加筆)

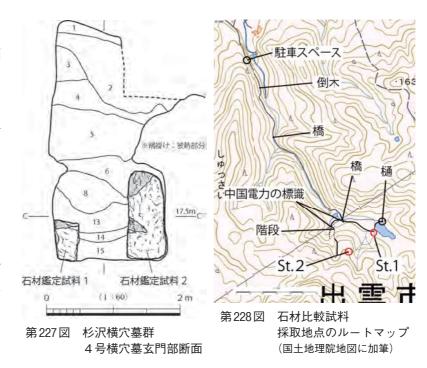
第2項 分析試料について

(1) 杉沢横穴墓群 4 号穴

4号横穴墓の玄門部断面図 (第227図) に,石材鑑定試料1 (西側閉塞石),石材鑑定試料2 (東側閉塞石)の配置を示す。両 閉塞石はそのまま持ち帰られ, 保管されていた。

(2) 比較試料採取地点

石材鑑定試料1,2との石材 比較試料を,第228図に示す St.1, St.2で採取した。また 第229図にSt.1の全景(パノラ マ写真)及び各試料(St.1-1,



St.1-2) の近景を, 第230図にSt.2の全景 (パノラマ写真) 及び試料 (St.2-1) の近景, 試料 (St.2-2) の本来の位置 (遠景) を示す (St.2-2・3 は転石)。



第229図 石材比較試料採取地点(St.1)



第230図 石材比較試料採取地点 (St.2) (左:全景パノラマ写真, 右上: St.2-2 ここからの落石, 右下: St.2-1 近景)

第3項 石材鑑定方法

岩石薄片を作成し、鉱物顕微鏡下で観察、記載を行った。記載に当たり、オープンニコル(-)、クロスニコル(+)の写真中に、確認できた鉱物名を記した。また観察結果をまとめるにあたり、島根大学総合理工学部赤坂正秀教授に終始ご指導を頂いた。

第4項 石材鑑定結果

鑑定結果を第12表の分析試料一覧に示す。また、顕微鏡写真とともに、特徴を記載する。

(1) 石材鑑定試料1(西側閉塞石, 第231図)

岩石名:流紋岩自破砕溶岩

岩石学的記載:顕微鏡下では、火山ガラスと微

第12表 鑑定結果

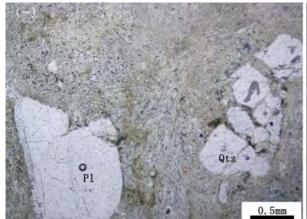
		= 15.154		
	地点	試料名	岩石名	
鑑定	4号横穴墓	1 西側閉塞石	流紋岩自破砕溶岩	
試料	玄門	2 東側閉塞石	ガラス質凝灰岩	
	St. 1	St. 1-1	流紋岩自破砕溶岩	
ししまた		St. 1-2	流紋岩自破砕溶岩	
比較		St. 2-1	流紋岩溶岩	
武小十		St. 2-2	凝灰質シルト岩	
		St. 2-3	凝灰質砂岩	

小な石英による真珠状組織を示す。1 mm程度の軽石岩片を含んでいる。斑晶は石英、斜長石から成る。石英は約0.2~0.5 mmの他形である。一部融食形や波動消光を示すものもある。斜長石は約0.4~2.0 mm で長柱状の自形~半自形である。一部アルバイト双晶・累帯構造を示す。変質により、斜長石内部にイライトが生成しているものもある。これら斑晶として観察できるものは、破砕され、割れているものが多い。軽石岩片内にはガラスと約0.2 mmの石英が存在する。

(2) 石材鑑定試料2(東側閉塞石, 第232図)

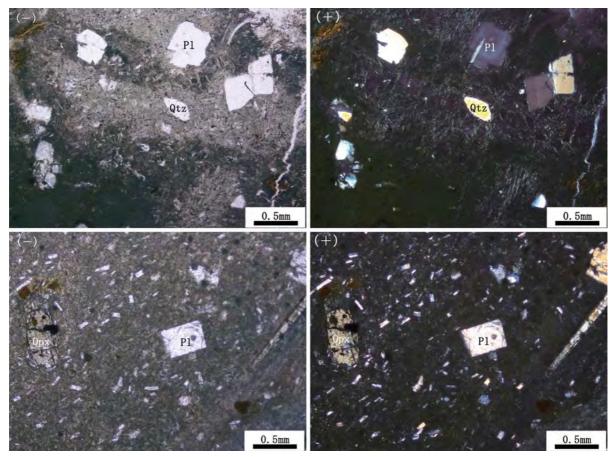
岩石名:ガラス質凝灰岩

岩石学的記載:全体としてガラス質であり、1cm程度の安山岩岩片を含んでいる。また、一部風化によるものと思われる汚濁が見られる。ガラス質凝灰岩の基質はガラス質で、結晶片は石英、斜長石から成る。





第231 図 西側閉塞石顕微鏡写真(流紋岩自破砕溶岩 Qtz:石英, PI:斜長石)



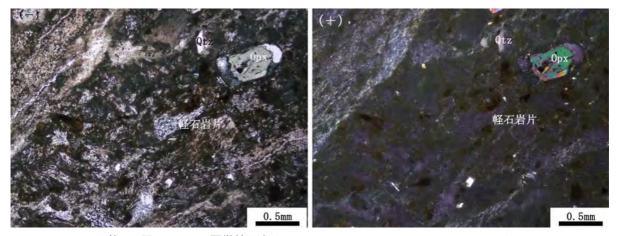
第232図 東側閉塞石顕微鏡写真(上段:ガラス質凝灰岩,下段:安山岩, Qtz:石英, PI:斜長石)

石英は約0.1~0.6 mmで波動消光が見られる。斜長石は約0.3~0.6 mmでアルバイト双晶・累帯構造が観察できる。安山岩岩片は、短冊状の斜長石の間をガラスや微晶が埋めるハイアロピリティック組織を示す。斑晶は斜長石、斜方輝石、角閃石から成る。斜長石は約0.4~2.0 mmで長柱状の自形~半自形である。一部アルバイト双晶・累帯構造を示す。集斑状になっているものもある。斜方輝石は約0.5~0.6 mmの柱状の半自形である。多色性があり、X軸では淡緑色・Z軸では淡褐色を示し、干渉色はオレンジである。角閃石は約0.3~0.5 mmの板状の半自形である。多色性があり、X軸では淡褐色・Z軸では褐色を示し、干渉色はオレンジである。

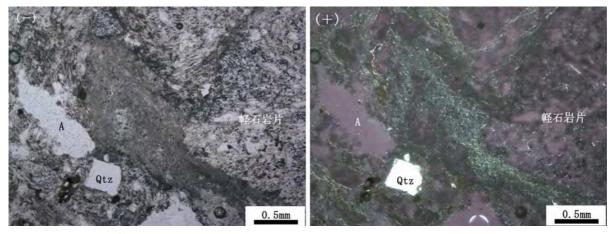
(3) St. 1 - 1 (第233図)

岩石名:流紋岩自破砕溶岩

岩石学的記載:流紋岩質の部分と自破砕の部分から成る。流紋岩質部は顕微鏡下では,隠微晶質なガラス・石英から成る石基である。斑晶は約0.1mm以下の石英で,他形である。自破砕溶岩部では,石基は隠微晶質なガラス・石英から成り,約0.4~0.7mmの軽石岩片を含む。斑晶は石英,角閃石,斜方輝石から成る。石英は約0.1~0.3mmで波動消光する。他形である。角閃石は約0.1~0.4mmの板状の他形である。多色性があり,X軸では淡褐色・Z軸では褐色を示し,干渉色はオレンジである。斜方輝石は約0.6mmの柱状の半自形である。多色性があり,X軸では淡緑色・Z軸では淡緑色・Z軸では淡褐色を示し,干



第233図 St. 1-1 顕微鏡写真(流紋岩自破砕溶岩, Qtz:石英, Opx:斜方輝石)



第234図 St. 1-2顕微鏡写真(流紋岩自破砕溶岩, Qtz:石英, A:方沸石)

渉色は緑色で、顕微鏡下で観察された斜方輝石は1粒のみである。二次鉱物として、方沸石が見られる。約 $0.2 \sim 1.0$ mmで少し汚濁している。また、軽石内部では溶結しpumice shard と呼ばれる筋が見える。

(4) St. 1 - 2 (第234 図)

岩石名:流紋岩自破砕溶岩

岩石学的記載:顕微鏡下では,隠微晶質なガラス・石英から成る石基である。約 $0.4 \sim 0.7$ mmの軽石岩片を含む。斑晶は石英,斜長石から成る。石英は約 $0.3 \sim 0.5$ mmで波動消光する。他形である。斜長石は約 $0.4 \sim 0.6$ mmで長柱状の自形である。一部アルバイト双晶を示す。二次鉱物として,方沸石が見られる。約 $0.2 \sim 1.0$ mmで少し汚濁している。軽石内部には,方沸石,石英が見られる。汚濁し,褐色になっているものが多い。また,pumice shard という繊維状の組織が見られる。

(5) St. 2-1 (第235図)

岩石名:流紋岩溶岩

岩石学的記載:顕微鏡下では、ガラス質の石基である。全体的に汚濁し褐色がかっている。斑晶は

石英、斜長石、黒雲母、角閃石から成る。石英は約 $0.1\sim2.5\,\mathrm{mm}$ の他形で、波動消光を示す。斜長石は約 $0.1\sim2.5\,\mathrm{mm}$ で長柱状の自形~半自形である。一部アルバイト双晶・累帯構造を示す。集斑状になっているもの、変質によりイライトができているものもある。黒雲母は約 $0.2\,\mathrm{mm}$ の板状の半自形である。多色性があり、X軸では淡褐色・Z軸では褐色を示し、干渉色はオレンジである。角閃石は約 $0.4\,\mathrm{mm}$ の板状の半自形である。多色性があり、X軸では淡緑色・Z軸では淡緑色を示し、干渉色はオレンジである。

(6) St. 2 - 2 (第236図)

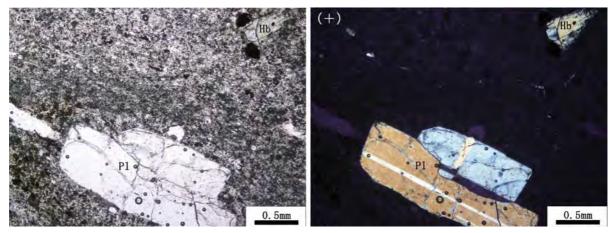
岩石名:凝灰質シルト岩

岩石学的記載: 0.1 mm以下の石英、斜長石、不透明鉱物から成る。斜長石にはアルバイト双晶が見られ、鉱物は定向配列している。炭質物による層が見られる。円磨度は角である。

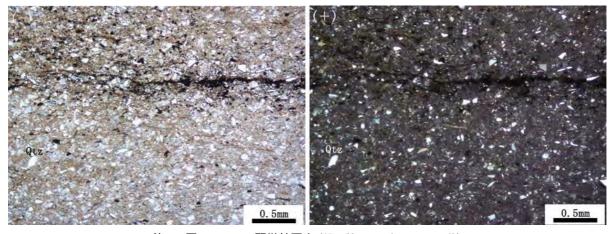
(7) St. 2 - 3 (第237図)

岩石名:凝灰質砂岩

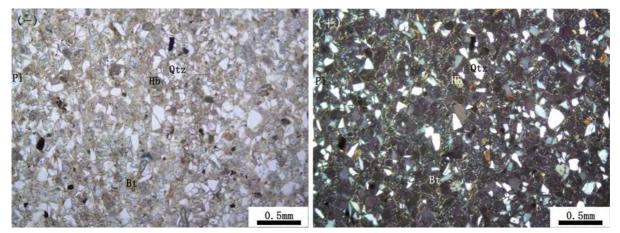
岩石学的記載:中粒部と細粒部から成る。結晶石英、斜長石、黒雲母、角閃石であり、円磨度は角



第235図 St. 2-1 顕微鏡写真(流紋岩溶岩, Qtz:石英, Hb:角閃石)



第236図 St. 2-2顕微鏡写真 (凝灰質シルト岩, Qtz:石英)



第237図 St. 2-3顕微鏡写真(凝灰質砂岩, Qtz:石英, Hb:角閃石)

である。割合は石英、斜長石が8割、黒雲母が1.5割、角閃石が0.5割ほどである。中粒部の石英は約0.1以下~0.3mmである。斜長石は約0.1~0.3mmでアルバイト双晶が見られる。黒雲母は約0.1~0.5mmで、劈開が見られる。多色性があり、X軸で淡緑色、Z軸で淡褐色である。干渉色はオレンジである。角閃石は約0.1~0.3mmで多色性がある。X軸で濃褐色、Z軸で淡褐色を示し、干渉色はオレンジである。細粒部も0.1mm以下の同じ鉱物で構成される。

第5項 閉塞石の石材産地について

前述のように、西側閉塞石は流紋岩自破砕溶岩、東側閉塞石はガラス質凝灰岩との鑑定結果になった。

楔跡など、石を切り出した痕跡が認められなかったが、St102試料には「自破砕」組織が認められ、西側閉塞石と同じ流紋岩自破砕溶岩との鑑定結果になった。1/5万地質図「今市」 $^{1)}$ によると、St1は大森層安山岩 (Oa) の範囲に入るが、岩相が異なるようである。実際には隣接して分布する久利層の流紋岩溶岩 (Kr) の分布域のようである。

一方、石切場の候補としていたSt2のSt2-1は流紋岩質溶岩であるが、「自破砕」構造は認められなかった。1/5万地質図「今市」 $^{1)}$ によると、St2は大森層安山岩(Oa)の範囲に入るが、岩相が異なるようである。実際には、St2も隣接して分布する久利層の流紋岩溶岩 (Kr) の分布域のようである。また、転石として採取したSt2-2(凝灰質シルト岩)、St2-3(凝灰質砂岩)も久利層の一部と考えられるが、詳細は明らかでない。

閉塞石に似た流紋岩質溶岩,破砕岩(凝灰岩)の分布は,斐川町南部の仏経山から高瀬山に至る範囲で,久利層の流紋岩溶岩(Kr),流紋岩火砕岩(Kp)である¹⁾。

【註】

1) 鹿野和彦・竹内圭史・松浦浩久 1991『5万分の1地質図幅「今市」」地質調査所

第5節 杉沢横穴墓群12号横穴墓出土の人骨について

井上貴央(医療法人真誠会 老健ゆうとびあ施設長、鳥取大学名誉教授)

第1項 調査の経緯

平成25年(2013)8月1日に人骨発見の報を受け、実地調査を行った。玄門から見て、玄室の中央付近より右側に人骨の集積が認められた。人骨の保存状態は不良であったが、頭蓋骨、歯、上腕骨、大腿骨、脛骨などの四肢骨が認められた。交連状態を示す骨はなく骨が集積されていたため、玄室内の骨が寄せ集められたか、白骨化した骨を古墳時代以降に持ち込まれたかのいずれかである可能性が高いと考えられた。また、頭蓋骨の位置や四肢骨の分布状況から判断して、後世の坐位での埋葬による可能性も考えられた。さらに、人骨の保存が悪くて判断が難しかったが、長管骨が多数検出されていることから、複数体の埋葬も考えられた。

同年8月26日に人骨の取り上げを行い、その後の乾燥・クリーニング・ビュートバルによる保存処理を依頼した。平成26年(2014)2月21日に保存処理が完了したので、出雲弥生の森博物館にて詳細な骨の検討を行った。また、平成27年(2015)8月27日には歯種の同定を行うため、出雲弥生の森博物館にて作業を行った。本稿では、人骨から得られた所見について概説する。

第2項 検出された人骨について

頭蓋骨は頭蓋冠の部分が頭頂部を下に向けて、検出された。頭蓋冠の矢状縫合は、内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしている。また、頭蓋冠の下部から、8点の歯が検出されている。さらに、この頭蓋冠と離れた場所から、側頭骨片、頭頂骨片、後頭骨片が検出されているが、前述の頭蓋冠とは接合できず、同一人骨かどうかは確言しがたい。

本横穴から検出されたすべての歯の歯式を以下に示す。以下に示した歯のほかに、上顎大臼歯片が 2 点検出されている。これらの歯は、その形態から判断して同一個体のものと考えられる。また、左 第一小臼歯~第二大臼歯は下顎骨に釘植した状態で検出されたものである。近傍から遊離歯として発見された第三大臼歯は、下顎骨に接合してみると未萌出の状態であり、その歯根は未完成であった。 検出された歯をみる限り、重複している歯種はないと考えられる。 咬耗はあまり進んでおらず、 咬耗 度は Martin の 0 ~ 1 度である。歯は全体的に大きい。

上肢帯の骨では、鎖骨片と肩甲骨と思われる骨片が検出されている。上肢骨では、上腕骨が1点検出されているが、保存が悪く詳細は不明である。

下肢帯の骨は検出されていない。下肢骨では、骨端部を欠く大腿骨が左右各1本ずつ検出されてい

る。また、左右の対をなすと思われる脛骨片がそれぞれ1点と詳細不詳の脛骨片が1点確認されている。大腿骨は比較的華奢で、脛骨には扁平性も認められる。

その他, 脊柱, 骨盤を構成する骨は検出されていない。なお, 骨の検出当初に長管骨に分類された 骨は、取り上げ時や保存処理中に細片化をきたしており, 骨の同定が不可能なものが数点あった。

第3項 埋葬人骨の検討

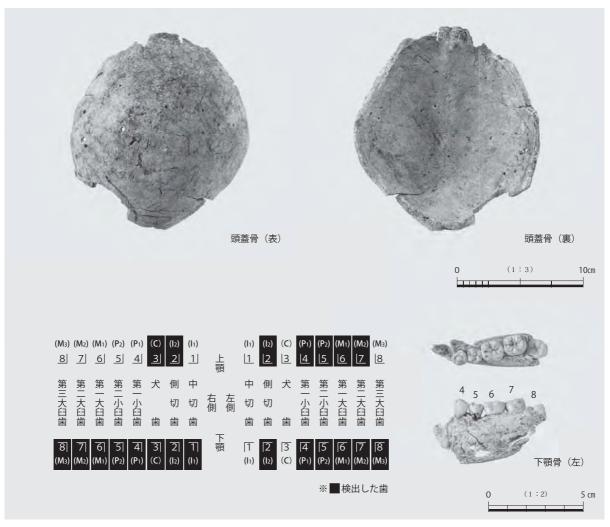
検出当初から、本人骨が古墳時代のものかどうかは疑念があったが、年代測定の結果、人骨は古代から中世(11世紀中頃~13世紀後半)のものであることが判明した。

保存処理後に、骨を詳細に検討した結果、残存する骨は1体の同一人物のものである可能性が高く、 歯や骨の形態から判断すると若い成年~壮年前半の男性骨であるものと推定された。

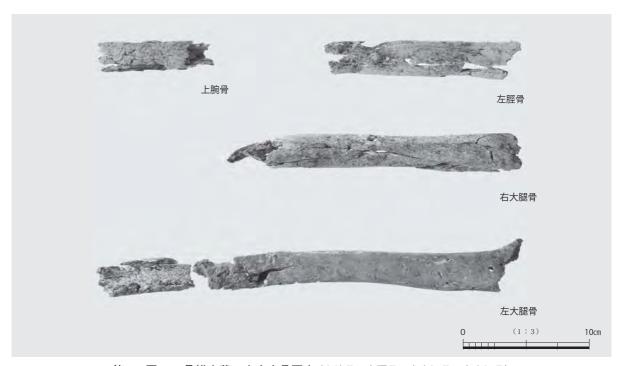
ただし、頭蓋冠の矢状は内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしており、この点だけから判断すると本 頭蓋の人骨はかなり高齢と考えざるを得ないが、伴出した下顎骨や周辺から検出された遊離歯の咬耗 はほとんど進んでおらず、若い個体であることを示している。これらの頭蓋骨や歯が同一人骨のもの と考えた場合、頭蓋縫合の癒合に関しては、本人骨が頭蓋縫合早期癒合症の所見を有しているのかも しれない。

本人骨は保存状況が悪かったため、骨の最大長を計測することができなかった。そのため、身長推 定は行うことができなかった。

稿を終わるにあたり、本人骨の発掘・検討の機会を頂いた関係各位、保存処理に尽力頂いた出雲弥 生の森博物館の皆様、調査時点から原稿の完成までお世話になった出雲市市民文化部文化財課の幡中 光輔氏に深謝申し上げる。



第238図 12号横穴墓 出土人骨写真 (頭蓋骨・下顎骨) と歯の部位模式図

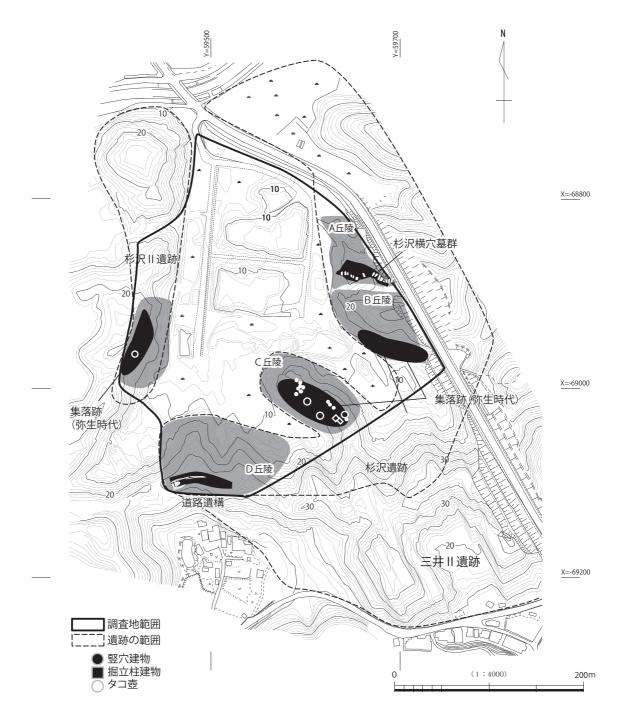


第239図 12号横穴墓 出土人骨写真(上腕骨・左脛骨・右大腿骨・左大腿骨)

第8章 総 括

第1節 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群調査の総括

第1項 はじめに



第240図 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群主要遺構配置図 (1:4,000)

西暦	時代区	分	出雲の歴史	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の消長
~紀元前 500·				
100		前期	出雲平野を中心に弥生の村が営まれる	
紀元前後	弥生時代	中期	**************************************	★ 弥生集落が出現する
100			青銅器の大量埋納(荒神谷遺跡) 四隅突出型墳丘墓が造られる 青銅器祭祀の終焉	(杉沢遺跡·杉沢Ⅱ遺跡)
200		後期	「王墓」が築かれる(西谷墳墓群)	
300		前期		
400	古墳時代	中期	出雲平野で古墳の造営開始 (大寺古墳など)	
500		後期	横穴式石室の流行出雲最大の前方後円墳造営(今市大念寺古墳)	
600		終末期	横穴墓の流行(上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群)	横穴墓群が築かれる
710	飛鳥時	代	出雲国造に命じて、神の宮(杵築大社)を 作らせる(659) 出雲国府と郡家の造営	(杉沢横穴墓群)
710	奈良時	代	出雲国造果安,神賀詞を奏上 (国史における神賀詞の初見,716) 『出雲国風土記』が編纂される(733)	山陰道が整備される(杉沢遺跡)
794.			渤海国使, 出雲国に来着(814) 出雲国正倉が焼失する(835)	
900	平安時	代	出雲国に四天王像下賜,新羅の調伏(867)	炭焼きが行われる(杉沢遺跡)
1100			源義親, 出雲で反乱(1107)	▼
1192	鎌倉時	代	出雲に新補地頭が補任される(1221~) 杵築大社,中世最後の正遷宮(宝治度, 1248) 国造出雲義孝,幕府御家人となる(1249)	
1338	室町時		後醍醐天皇宸翰宝剣代綸旨(1333) 斐伊川東流(1633・1639の洪水を契機とする)	
	江戸時 明治時	代	新川開削(1831)	
1926	大正時	15		
1945	昭和時	代	新川跡に旧帝国海軍大社基地が置かれる (1944)	タコ壺が掘られる(杉沢遺跡)

第241図 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群の消長

出雲斐川中央工業団地予定地の造成工事に先立ち、平成24年(2012)7月から平成26年8月にかけて、杉沢遺跡・杉沢II遺跡・杉沢横穴墓群の発掘調査を実施した。その結果、弥生時代から太平洋戦争末期の遺構・遺物を確認できた(第240図)。本節ではその調査成果をまとめ、時期別に概略を記す。

第2項 各時代の概要(第241図)

(1) 弥生時代中期

弥生時代の集落跡 杉沢遺跡 B·C丘陵, 杉沢Ⅱ遺跡で発見した弥生時代の竪穴建物跡, 掘立柱建物跡, 加工段, 土坑などの遺構は, 今回調査した中では最も古い時期の遺構である。出土遺物は, いずれの調査区でも弥生時代中期後葉のものが大部分を占めており, ごく短期間に廃絶したことが伺える(第4章第2・3節, 第5章)。

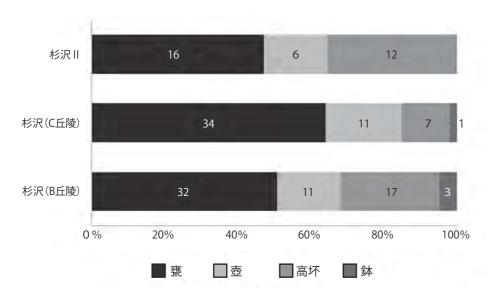
竪穴建物跡は、杉沢遺跡 C 丘陵で SI301、SI304、SI305 の 3 棟、杉沢 II 遺跡で SI501 の 1 棟を確認し、掘立柱建物跡は杉沢遺跡 C 丘陵で SB302、SB303 の 2 棟を確認している。加工段は杉沢遺跡 B 丘陵・ C 丘陵、杉沢 II 遺跡で確認した。平面形は楕円形または隅丸長方形で壁体溝と柱穴を伴うものが大半である。

これらは同時期の遺構だが、その立地や出土遺物の様相には異なる点がある。杉沢遺跡C丘陵を例に挙げると、竪穴建物SI301、掘立柱建物SB302・SB303は丘陵頂部、他の建物跡や、加工段群は斜面に位置するという差が認められる。丘陵頂部でも最高所に位置する竪穴建物SI301は、地山の岩盤を円形に掘り込んで構築されており、C丘陵のみならず他の丘陵で確認された竪穴建物と構築方法が異なる。また杉沢II遺跡の竪穴建物SI501は、1棟のみ完全な形で残っており、ガラス小玉と袋状鉄斧が出土した。弥生時代中期後葉の土器が伴うので、流入開始期の舶載品に位置付けられ、どちらも島根県内では最古級の資料となる(第5章、本章第3節)。

杉沢遺跡,杉沢Ⅱ遺跡で確認した弥生時代集落は,青銅器が大量埋納された荒神谷遺跡から西方へわずか2.8kmに存在する。有力者が居を構えた可能性は否定できないが,現段階では根拠に乏しい(本章第2節)。

弥生土器の出土傾向 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡で出土した弥生土器には甕・壺・高坏・鉢などがあり、 弥生時代中期後葉(松本編年Ⅳ-1~2様式)の器種構成を基本としている(第4章第2・3節, 第5章)。 器種別の出土割合は、いずれの調査区でも甕が4~6割、杉沢遺跡B丘陵と杉沢Ⅱ遺跡では高坏が2 ~3割、壺が2割となり、杉沢遺跡C丘陵では高坏がやや少なかった(第242図)。

高い割合を占める甕に注目すると、全調査区に共通して口径15~20cm前後の中型品が最も多く、比較的大型のものでも口径30cmに満たない。壺も、各丘陵で2~3個体出土した大型広口壺を除けば同じ傾向にある。また文様は、口縁部の凹線文、頸部の刻目貼付突帯、胴部の列点文を基本的な構成とする。壺も甕と同様の文様構成を示すが、大型広口壺に限っては、上記の文様に加えてヘラ描きの羽状文が施される。このような文様構成は、いずれも弥生時代中期後葉に出雲平野でみられる弥生土器の特徴に合致する。



第242図 杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡の器種別割合(実測分のみカウント)

なお、大型広口壺については備後北部に分布する塩町式土器との関連が指摘されている(米田 2002)。杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡でも凹線文や列点文を多用する資料が散見され、特に杉沢遺跡 C 丘陵では出雲平野の在地土器に類例のない台付鉢や小型壺が出土していることからも、塩町式の影響を受けた可能性がある(本章第2節)。

(2) 古墳時代終末期~奈良時代前半

杉沢横穴墓群 杉沢遺跡 A 丘陵南側斜面に15穴からなる杉沢横穴墓群を確認した。各横穴墓の位置 関係から東群と西群の2つに分けることができ、東群は標高約16~19mで南西方向に開口し、西群 は標高約11~13mで南方向に開口している。横穴墓群は砂岩系の布志名層に掘られており、やや軟 質の岩盤ではあるが比較的良好な状態で残っていた。

横穴墓は、多くが前庭・羨道・玄門・玄室を有する構造が大きな特徴で、出雲東部の横穴式石室 (石棺式石室) でよく見られる2重構造の形態をしており、出雲西部では極めて稀な発見例となった。 羨道・玄門の平面形は正方形や長方形など多様であるが、形態がアーチ形や隅丸台形のものが多い。 玄室の天井の形態は、テント形が15基の内10基と多数を占め、その他、妻入り家形とアーチ形もある。玄室内は丁寧な仕上げ調整が施されているものが多い。また閉塞の装置は、2・3・4号横穴墓のように2~3枚の切石が用いられたものや、14・15号横穴墓のように閉塞板の押さえに自然石を用いたものが見つかっている。

出土土器からは、横穴墓群が構築された時期や初葬を示す明確な手がかりは得られなかった。しかし、すべての横穴墓が2重構造を持つ出雲東部の意宇型横穴墓と共通した形態をもっており、西群・東群ともそれぞれ同じ高さと方向で丘陵斜面に整然と構築されている。よって短期間で構築された可能性が高く、7世紀中頃から追葬が開始される7世紀後半までに築造されたと推測される。

また、出土土器の多くは7世紀後半から8世紀頃の特徴をもつ。そこから、飛鳥時代から奈良時代に追葬や墓前祭祀が行われたことを明らかにした。杉沢横穴墓群の発掘調査は、出雲西部における古

墳時代終末期の一様相を示すまとまった貴重な資料をもたらしたといえよう(第6章.本章第4節)。

なお、12号横穴墓から発掘した人骨1体分は、放射性炭素年代測定の結果、11世紀中頃から13世紀後半に帰属することが判明し、古代から中世にかけての横穴墓の再利用を示す新しい知見となった(第7章第1・5節)。

古代道路遺構 杉沢遺跡 D 丘陵の尾根上では、東西約30 m にわたり良好な状態で残存する古代道路 遺構を確認した。道路遺構は路面の両側に側溝をもち、心々距離9 m を測る。路面は砂質土で硬く締められ、軟弱地盤を改良するための波板状凹凸面も伴う。また、尾根頂部の地山を切り、斜面に盛土を施して道路を通すための平坦面を造り出しており、意図的に直進性を指向している点も大いに注目された。さらに調査区周辺の丘陵尾根上には切り通しなどの土木工事の痕跡が各所にあり、約1 kmにわたって延びている可能性が高いと考えられる。出土土器等から、この道路遺構の築造時期は古墳時代終末期(飛鳥時代)から奈良時代前半と推定している。このような点から杉沢遺跡の道路遺構が、『出雲国風土記』 道度条の「正西道」であり、山陰道を通る古代官道の一部であると判断した(第4章第4節、本章第5節)。

道路遺構については現地保存を決定し、現在は埋戻しを行って遺構を保護している状況である(本章第5節)。今後は尾根上に延びる道路遺構の保存状態を確認する調査を行うとともに、出雲郡家の推定地である後谷遺跡や稲城・小野遺跡などを再度調査し、駅路と郡家との関連解明を目指していきたい。

(3) 近代(太平洋戦争末期)

杉沢遺跡 C 丘陵尾根頂部と南斜面からは、太平洋戦争末期に掘られた一人用の塹壕「タコ壺」を11 基確認した(第4章第3節)。調査地から南西約1.5kmには旧帝国海軍大社基地が造られたほか、基地周 辺の出西・直江地区を中心に、高射砲陣地、魚雷調整庫、弾薬庫などの関連施設が多数造られた(島根 県教育委員会2002、槙原・岡編2012)。このような戦争遺構の残存状態を記録に留めようと、聞き取り調 査を開始したところである。しかし戦後70年が過ぎ、当時を知る証言者も減り、聞き取り調査には 困難な点もあるが、戦時中の様相を後世に伝えるためにも、調査を継続的に行っていく必要がある。

第3項 おわりに

今回の調査により、第240図に示したとおりの遺構を確認し、杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡の弥生時代の 集落が広範囲に広がっていたこと、また杉沢横穴墓群から横穴墓の終焉期における東西出雲の交流の 様相について、一定の成果を得ることができた。

さらに杉沢遺跡の道路遺構については、丘陵尾根上に造られた古代道路遺構の例は全国的にも少なく貴重なため、現地保存を決定した。今後は、丘陵尾根上に約1kmにわたって延びる遺構の残存状態を確認するとともに、旧簸川郡内での路線の調査などを進めていきたい。

(景山真二)

【註】

- 1) 松本編年第Ⅳ様式期からの増加が指摘されている器台(松本1992)は出土していない。
- 2) (米田2002)で、「ボーリングピン型」の壺と表記されている広口壺である。

【参考文献】

島根県教育委員会 2002 『島根県の近代化遺産』島根県近代化遺産 (建造物等) 総合調査報告書 大社町史編集委員会 1995 『大社町史』下巻 大社町

- 槙原吉則・岡実智子編著 2012 『川の中の飛行場 西日本の前進基地・新川基地』(増補改訂版)

米田美江子 2002「第3節 搬入系遺物」『下古志遺跡—考察編—』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 出雲市教育委員会

松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005『島根県の歴史』県史32 山川出版社

第2節 出雲地域における弥生集落遺跡と杉沢集落

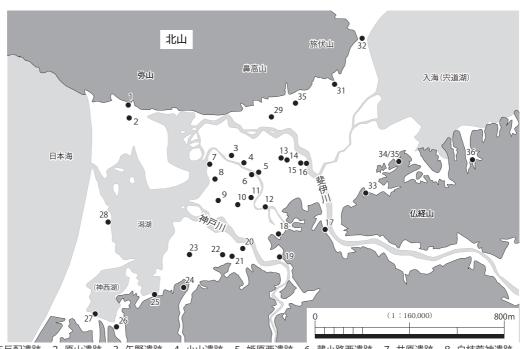
第1項 はじめに

杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡で集落が営まれた弥生時代中期は、出雲平野に多くの集落が存在し、規模を拡大した時期である。多くの集落遺跡が斐伊川西岸の平野部に営まれたが、それとは対照的に、杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡が位置する斐伊川東岸南部(斐川地域)は弥生時代遺跡の発見数が少なく、集落展開の状況は不明瞭であった。今回の一連の調査を通して、杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡に弥生時代中期後葉の集落が存在していたことが明らかとなり、斐伊川西岸地域との比較検討が可能となった。本節では、出雲平野に展開する弥生時代集落遺跡の比較を通して、杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡に営まれた集落(以下、杉沢集落)の位置付けを探る。

第2項 出雲平野における弥生時代集落研究の現状と課題

(1)出雲平野の集落遺跡研究と「拠点集落| 論

出雲平野に広がる弥生時代の集落(以下,弥生集落)に関する調査・研究は,矢野遺跡等の,斐伊川 西岸の平野部を対象として始まり,出雲考古学研究会や島根大学考古学研究室の尽力によって一定の 成果がまとめられた(田中・西尾1988)。それ以後も,出雲市内の発掘件数の増加に伴って資料が蓄積



1.五反配遺跡 2.原山遺跡 3.矢野遺跡 4.小山遺跡 5.姫原西遺跡 6.蔵小路西遺跡 7.井原遺跡 8.白枝荒神遺跡 9.壱丁田遺跡 10.天神遺跡 11.海上遺跡 12.藤ヶ森遺跡 13.中野西遺跡 14.中野美保遺跡 15.中野清水遺跡 16.大津町北遺跡 17.長廻遺跡 18.築山遺跡 19.三田谷 | 遺跡 20.古志本郷遺跡 21.田畑遺跡 22.下古志遺跡 23.知井宮多間院遺跡 24.浅柄遺跡 25.九景川遺跡 26.三部竹崎遺跡 27.西安原遺跡 28.上長浜貝塚 29.里方本郷遺跡 30.山持遺跡 31.青木遺跡 32.源代遺跡 33.後谷遺跡 34.杉沢遺跡 35.杉沢 || 遺跡 36.荒神谷遺跡

第243図 出雲平野の主な弥生時代遺跡(1:160,000)

	地域	立地	遺跡の状況	集落の時代	構成遺跡
	2020	11/6	と	未在の別し	13777-13
第1群	神西湖南岸	丘陵裾	散布地	後期~	田中谷貝塚,竹崎,三部竹崎,庭反,雲部,西安原 等
第2群	神戸川左岸	沖積平野	環濠・住居址・遺物多量	中期後葉~	古志本郷,下古志,田畑,知井宮多聞院,浅柄 等
第3群	神戸川右岸	沖積平野	環濠・住居址・遺物多量		天神,高西,海上,神門寺境内廃寺 等
第4群	斐伊川左岸	沖積平野	墳墓・大溝・遺物多量	中期中葉~	中野美保, 中野清水, 中野西, 大津町北, 斐伊川鉄橋, 太歳, 石土手 等
第5群	平野中央	沖積平野	大溝・遺物多量	前期~	矢野,姫原西,蔵小路西,小山 等
第6群	斐伊川北岸	沖積平野	墳墓・住居址・遺物多量	中期中葉~	里方,高浜,荻杼,稲岡,山持,青木 等
第7群	大社町域	山裾・砂丘	墓域・散布地	前期~	原山,出雲大社境内,修理免本郷,五反配 等
第8群	仏経山山麓	山裾・丘陵	住居址・遺物多量	中期後葉~	杉沢, 杉沢川, 後谷, 西谷, 宮谷, 平野, 氷室, 小野 等

第13表 田中(1996)における出雲平野の弥生集落群区分

第14表 各集落群にみえる「拠点集落」的性格(田中1996をもとに作成)

	地域	大規模	継続性	多量の遺物	手工業	交易品	威信財・墳墓
第1群	神西湖南岸		Δ				
第2群	神戸川左岸	0	0	0	0	0	○?
第3群	神戸川右岸	0	0	0			○?
第4群	斐伊川左岸	0	0	0	0	0	0
第5群	平野中央	0	0	0	0	0	○?
第6群	斐伊川北岸	0	0	0	0	0	0
第7群	大社町域		0		0	0	0
第8群	仏経山山麓					0	○?

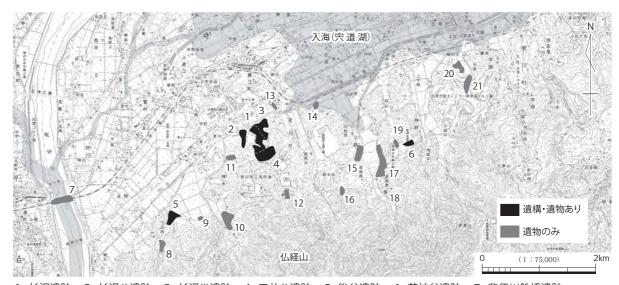
され、出雲平野における弥生集落のまとまりが見出せるようになった。

上記の調査を主導した田中義昭は、出雲平野に分布する弥生時代遺跡を、遺構・遺物の出土状況から大きく8つのグループに分類した(第13表、田中1996)。これにより、主に斐伊川西岸の平野部に規模の大きな弥生集落が展開することが示された。また田中は、弥生集落研究の中で重要な意味を持つ「拠点集落」論を提唱している(田中1976、田中2011)。田中が定義する「拠点集落」には、①集落に広がりがあり、内部に2・3の小集団が居住する(環濠が存在する場合もあり)、②集落が継続的である、③膨大な量の遺物が出土する、④手工業(土器、石器、木製品、金属製品、漆製品等)の生産拠点である、④交易品が存在する、⑤リーダーにあたる人物を示す装飾品や威信財・墳墓が存在する、という条件が付されている(田中2011)。この定義を8グループの集落群に照らしてみると(第14表)、斐伊川西岸の平野部(第2~6群)に「拠点集落」が集中し、北山山麓(第6・7群の一部)や神西湖南岸(第1群)、仏経山山麓(第8群)は前述の地域に比べて「拠点集落」の色が薄いことがわかる。

さらに、他地域からの搬入品と手工業に着目した川原和人は、搬入品、特に大陸系遺物と漆、玉類、木製品、鉄器、水銀精製等の手工業製品が複数確認される遺跡を抽出し、平野中央部の矢野遺跡、神戸川西岸の古志本郷遺跡、斐伊川西岸の中野清水遺跡、そして斐伊川東岸北部の山持遺跡を拠点集落とし、周辺にこれらを支える小規模集落が存在することを示した(川原2014)。

(2) 斐伊川東岸地域における集落論の現状と課題

上記のような研究を通して、斐伊川以西を中心とした弥生集落の展開が活発に論じられてきた。その一方で、杉沢集落が位置する斐伊川東岸南部では次の理由により集落論は停滞していた。弥生時代当時、宍道湖¹⁾の汀線は現在よりもかなり西にあり、居住域は丘陵部近辺に限定されていた。北側



1. 杉沢遺跡 2. 杉沢Ⅱ遺跡 3. 杉沢Ⅲ遺跡 4. 三井Ⅱ遺跡 5. 後谷遺跡 6. 荒神谷遺跡 7. 斐伊川鉄橋遺跡 8. 後谷Ⅵ遺跡 9. 小野遺跡 10. 氷室Ⅳ遺跡 11. 上ヶ谷遺跡 12. 直江石橋遺跡 13. 堀切Ⅲ遺跡 14. 宮谷遺跡 15. 武部西遺跡 16. 祇園原Ⅲ遺跡 17. 三絡Ⅱ-Ⅹ遺跡 18. 奥遺跡 19. 西谷・西谷Ⅱ遺跡 20. 綿田原Ⅰ遺跡 21. 大倉Ⅳ遺跡

第244図 斐伊川東岸南部 (斐川地域) の弥生時代遺跡 (1:75,000)

に広がる平野部では、当時の生活面が現地表面から $10\,\mathrm{mg}$ 下がった地中で発見されているものの 2)、調査ができないため類例を確認することもできず、議論の対象となる集落遺跡そのものが少ない状況にある (第244図)。現状で明らかに集落と判断できるのは、丘陵部近辺に位置する杉沢遺跡周辺と後谷遺跡周辺に限られる。特に、今回実施した杉沢遺跡・杉沢II遺跡の調査と、過去に行われた三井II遺跡・杉沢II遺跡等の調査成果から、これらの遺跡が位置する直径約 $1\,\mathrm{km}$ 圏内 (第244図 $1\sim4$)には、斐伊川東岸南部では今のところ唯一の明確な弥生集落が営まれていたことが明らかとなった。

斐伊川東岸南部は、青銅器の大量埋納という画期的な出来事の舞台となった荒神谷遺跡を抱える地域でもある。この地域に存在する弥生集落の特徴と、斐伊川以西の弥生集落との関係を明らかにすることは、弥生時代の出雲平野における大きな謎である青銅器埋納の様相を解明する上でも有効な材料となりうる。

第3項 集落群の比較検討

本項では、弥生時代中~後期の出雲平野に展開する遺跡を整理し、①立地、②竪穴建物跡の数と規模、そして③出土遺物の内容、という3点について杉沢集落との比較を行う。これらは、当時の生活を直接反映する要素であり、集落の規模や性格を捉える上で欠かせない。本項では、出雲平野に広がる弥生集落の地域的まとまりについては田中(1996)の区分を参考に、地形等を考慮して



第245図 地域区分

第15表 出雲平野の弥生集落(斐伊川西岸)

		遺跡	遺跡の消長主な遺構・遺物								遺跡の消長										
地域	名称	種別	立地	-	前期中葉		 	中期中葉		前葉	後期中葉		古墳 前期	居住関連	生業関連	埋葬関連	特筆すべき遺物				
I	五反配	集落跡	丘陵裾												水田関連の溝 木組		多量の木製品				
Π	上長浜貝塚	貝塚	砂丘											竪穴	1112						
I	三部八幡下	集落跡	丘陵裾																		
I	西安原	集落跡	丘陵裾											木道							
Π	三部竹崎	散布地	微高地																		
Ш	古志本郷	集落跡	丘陵裾											竪穴/井戸/ 環濠		土器棺墓 土壙墓	搬入土器/石製玉類/青銅製三稜鏃				
Ш	下古志	集落跡	微高地											竪穴/掘立柱/ 布掘/井戸/ 環濠		土壙墓	搬入土器/建築部材/ガラス小玉				
Ш	田畑	集落跡	微高地											竪穴/掘立柱/ 布掘/井戸/ 環濠			石製管玉/鉄製刀子				
Ш	保知石	散布地	丘陵裾																		
Ш	浅柄	集落跡	丘陵裾												灌漑用大溝						
Ш	九景川	集落跡	丘陵											溝		土器棺墓					
Ш	知井宮多聞院	集落跡	微高地												貝塚						
IV	矢野	集落跡	微高地											大型区画溝	貝塚		多量の前期土器/搬入土器/石器類/木製品(未成品 石製玉類/ガラス小玉・丸玉				
IV	姫原西	集落跡	微高地											掘立柱/溝 井戸/木橋 護岸施設			搬入土器/多量の木製品/ガラス小玉				
IV	小山	集落跡	微高地											溝							
IV	蔵小路西	集落跡	微高地											区画溝/井戸	井堰/杭列		多量の木製品				
IV	中野美保	集落跡	微高地											溝/井戸		土壙墓 貼石墓 四隅	碧玉製玉類				
IV	中野清水	集落跡	微高地											溝			搬入土器/絵画土器/鋳造鉄斧				
IV	中野西	集落跡	微高地																		
IV	大津町北	集落跡	微高地											溝							
IV	長廻	集落跡	丘陵											竪穴/加工段 溝							
IV	藤ヶ森	集落跡	微高地																		
IV	藤ヶ森南	散布地	微高地																		
IV	白枝荒神	散布地	微高地											溝		土壙墓	搬入土器/絵画土器/玉類原石/勾玉未成品 ガラス管玉?				
IV	白枝本郷	散布地	微高地																		
IV	壱丁田	散布地	微高地														建築部材/鳥形木製品				
IV	井原	集落跡	微高地											溝		土壙墓?					
IV	築山	集落跡	微高地											竪穴/溝							
IV	三田谷I	集落跡	丘陵裾											竪穴/溝		方形周溝墓					
IV	三田谷川	集落跡	丘陵裾																		
IV	善行寺	集落跡	微高地											竪穴?/溝							
IV	海上	散布地	微高地												杭列/矢板列		多量の木製品				
IV	小畑	集落跡	微高地													土壙墓?					
IV	天神	集落跡	微高地											竪穴?/溝		土器棺墓 土壙墓	多量の木製品/石製管玉				
IV	里方本郷	集落跡	微高地											溝							
IV	高岡川	集落跡	微高地				L														

 R例
 遺構・遺物ともに集中
 遺物が少なく遺構が不明瞭 または 遺物のみ少量出土

 遺構・遺物がやや集中 または 遺物のみ集中(遺構なし)
 遺構なし,遺物ごく少量 または なし

第245図に示す I ~VIの地域に区分した。また、検討の対象とした集落遺跡の集成を第15・16表に示した。

		遺跡						遺跡	亦の消	肖長					主な遺構・遺物					
地域	名称	種別	立地	_	前期中葉	1	前葉	中期中葉	1		後期中葉	-	古墳 前期	居住関連	生業関連	埋葬関連	特筆すべき遺物			
v	青木	(墓域)	微高地													土壙墓 墳丘墓 四隅	搬入土器/銅鐸飾耳片			
v	山持	集落跡	微高地											竪穴/掘立柱 布掘/溝	木製品 水漬遺構		搬入土器/多量の木製品/鉄製ヤリガンナ 鉄製刀子/石製勾玉/管玉未成品/ガラス小玉			
v	門前	集落跡	丘陵裾																	
v	左皿	散布地	丘陵裾																	
v	源代	散布地	微高地																	
v	美談神社	散布地	丘陵裾																	
VI	後谷VI	散布地	丘陵裾																	
VI	後谷	集落跡	丘陵裾												杭列					
VI	杉沢	集落跡	丘陵											竪穴/掘立柱 加工段/溝 ピット列		土壙墓 (古墳前期)	搬入土器?/鉄製鎌/鉄製鑿			
VI	杉沢Ⅱ	集落跡	丘陵											竪穴/加工段 溝			袋状鉄斧/ガラス小玉/九州型石錘			
VI	杉沢Ⅲ	集落跡	丘陵											竪穴/溝						
VI	三井Ⅱ	集落跡	丘陵											竪穴/溝						
VI	堀切Ⅲ	散布地	丘陵裾																	
VI	直江石橋	散布地	丘陵裾																	
VI	上ヶ谷	散布地	丘陵裾																	
VI	小野	散布地	丘陵裾																	
VI	氷室IV	散布地	丘陵裾																	
VI	武部西	散布地	丘陵裾																	
VI	祇園原Ⅲ	散布地	丘陵																	
VI	奥	散布地	丘陵裾																	
VI	三絡Ⅱ	散布地	丘陵																	
VI	三絡V	散布地	丘陵裾																	
VI	三絡X	散布地	丘陵裾																	
VI	宮谷	散布地	丘陵裾																	
VI	大倉IV	散布地	丘陵				П													
VI	綿田原I	散布地	丘陵裾																	
VI	西谷	散布地	丘陵裾																	
VI	西谷川	散布地	丘陵裾																	
				_							1000	 	市岸あ		//) (+ 勘右:		すべての弥生時代遺跡を示した。			

第16表 出雲平野の弥生集落(斐伊川東岸)

※斐伊川東岸南部(地域 VI) は散布地も含むすべての弥生時代遺跡を示した。



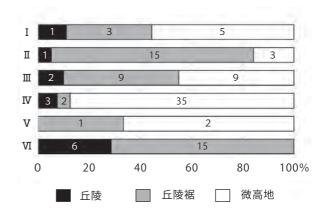
(1) 立地の比較

弥生集落の立地は、丘陵部、丘陵裾部、微高地の3ヵ所に大別できる。出雲平野では、多くが丘陵部の少ない地域Ⅲ・Ⅳに分布しており、平野部の微高地に展開する集落が数・面積ともに卓越する。この2地域は、丘陵部のように地形による居住域の制約が比較的少ない上、斐伊川・神戸川の二大河川やそこから派生する小河川、平野西部から日本海に及ぶ潟湖など、水辺に近く、湿地が広がる土地であったと考えられており(中村2010)、古志本郷遺跡、下古志遺跡等からなる古志集落(地域Ⅲ)、矢野遺跡、小山遺跡、姫原西遺跡等で構成される四絡集落(地域Ⅳ)のような大規模集落の存在に裏付

けられる。

杉沢集落をはじめとする丘陵部の集落は総じて小規模で、地域 I・Ⅲ・Ⅳの一部、Ⅱ、Ⅵに分布する³⁾。丘陵中腹から裾部にかけての緩斜面に集落が営まれることが多く、小丘陵の斜面を加工し、建物を構築する。

立地の比較を通して見えてくるのは、立地の 違いによって集落の規模と継続期間が異なると いうことである。微高地には、多量の出土遺物 や大規模な環濠・区画溝を伴う集落遺跡が集中



第246図 集落遺跡の地域別立地 (グラフ内のアラビア数字は遺跡数)

する。水辺に近接した微高地の集落では、水害に備えた灌漑技術の発達を背景として長期経営かつ大規模の集落が集中的に形成されたと想定できる。一方、丘陵部の集落では、地形的制限から微高地のように広範囲の集落経営は困難であり、近接する丘陵やその裾部で小規模なまとまりを形成していたと考えられる。杉沢集落でもその様子が看取でき、短期的で小規模な集落として展開したと推測される。

(2) 竪穴建物跡の比較

出雲平野において、竪穴建物跡が確認された事例は未だ多いとはいえない。出雲平野を中心に竪穴建物跡の変遷や地域性を検討した高橋智也は、出雲の東部(松江・安来市域)・西部(出雲市域)を問わず、古墳時代前期には平面形の主流が円形(A系統)から方形(B系統)へ変化するが、特に出雲西部では東部と比較して早いタイミングで方形へ転換することを指摘した。また、90%程度の壁体溝保有率を示す出雲東部に対して、出雲西部では保有率が50~80%で、地域性の一つとして捉えられるとしている(高橋2003)。今回、竪穴建物跡の比較から杉沢集落(杉沢皿、三井Ⅱ遺跡を含む)の特徴を見出すため、高橋によってまとめられた出雲平野の竪穴建物跡集成をもとに検討を行った(第17表)。

まずは、竪穴建物が築かれた場所である。第17表に示すとおり、現在発見されている竪穴建物跡 58棟のうち、43棟は地域 $\mathbb{I} \sim \mathbb{V}$ の微高地、残る15棟は地域 $\mathbb{I} \in \mathbb{V}$ の微高地、残る15棟は地域 $\mathbb{I} \in \mathbb{V}$ の微高地の竪穴建物検出遺跡はいずれも大規模集落であり、竪穴建物以外の遺構や遺物も高い密度で存在している。

一方丘陵部では、遺構自体が斜面に築かれているため、崩落により失われた可能性も十分考えられるが、(1)で示したように、丘陵部に立地する集落は小規模なものが多い点を考慮すると、出雲平野全体に占める丘陵部の竪穴建物築造数は相対的に少なかった、と考えることもできる。ただし、丘陵部で竪穴建物跡が確認された杉沢遺跡(中期)、長廻遺跡(後期)では、遺構の築造密度は高いと言える⁴⁾。

次に竪穴建物が築かれた時期について見てみよう。築造時期は、中期中~後葉、後期前半、後期後半、終末期~古墳時代初頭に分けられる。それぞれの時期の建物数は20棟、14棟、11棟、13棟を数え、

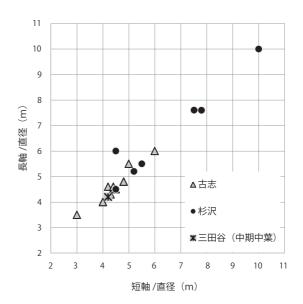
第17表 出雲平野の竪穴建物跡比較(高橋2003をもとに作成)

地域	遺跡名	立地	遺構名	平面形態 高橋(2003)分類※	長軸/直径 (m)	短軸(m)	時期	柱穴数	壁体溝	住居内 土坑	貼床
I	上長浜貝塚	砂丘	SI01	BII			弥生後期後半		×	×	
			A区 SI01	BII			弥生後期前半		×		ĺ
			A区 SI02	BII	4.6	4.2	弥生後期前半	4	×		ĺ
			A区 SI03	ΑΙ			弥生後期後半		×		
			A区 SI04	?			弥生後期前半			0	
			B区 SI01	A III			弥生後期前半	1~	×		0
		平野部	B区 SI03	ВІ	5.0	4.2	弥生終末~古墳初頭	4?	×	0	
	下古志	微高地	B区 SI04	ВІ	4.3	4.1	弥生終末~古墳初頭		0	×	
			C区 SI01	BII	3.5		弥生中期後葉	4	×		
			C区 SI02	BII	3.7		弥生後期後半	2~	×		
			D区 SI01	ΑI	4.8		弥生中期後葉	4?	×	0	-
			G⊠ SI01	ΑI	3.6		弥生後期前半	4?	X	×	-
			G⊠ SI02	BII	4.9		弥生後期後半	4:	0		—
		mz ÷r						4	0	×	—
	田畑	平野部 微高地	竪穴住居跡 SI01	ΑI	4.0		弥生中期後葉	4	×	^	
		以同心		ΑΙ		4.4	弥生後期前半	4			-
			出雲市 SIO1	AI	4.6	4.4	弥生中期後葉	4	X	0	
			出雲市 SIO2	BII	5.5	5.0	弥生中期後葉	4?	X		-
Ш			出雲市 SIO3	BII	4.3		弥生中期後葉	0	X	×	-
			E⊠SI03	ΑI	6.0		弥生中期後葉	4?	×		-
			E区SI05	ΑI	4.0		弥生中期後葉	2	0	×	
			E区SI06	ΑI	4.8		弥生中期後葉	4	0	0	
			E区SI07	ΑI	4.5		弥生中期後葉	4	0		
			HII区SI01	B ii	5.0	4.4	弥生後期前半	4?	0	0	i
		TT 807 47	J区SI02	B ii	5.2	(4.0)	弥生後期前半	4	×		ł
	古志本郷	平野部 微高地	J区SI03	A III	7.5		弥生後期前半	7	×	0	
		以问心	J区SI04	B ii	7.5	7.5	弥生終末~古墳初頭	4	0	0	0
			J区SI05	BII			弥生後期前半		0		
			J区SI06	BII	5.5		弥生後期前半	4?	0	0	
			J区 SI07	BII	5.0		弥生後期前半	4?	0	0	
			K 1区 SI03	ВΙ	3.5	3.0	弥生中期末~後期初頭			0	ſ
			K 2区SI07	ΑI	6.0		弥生終末~古墳初頭	4~5		0	0?
			K 2区SI08	BII	5.3	4.8	弥生終末~古墳初頭	4		0	
			K 2区SI09	BII	4.6		弥生終末~古墳初頭	4	0	0	0
			K 2区SI10	ΑI	7.2		弥生後期前半	4	0?	0	
			SI10	ВІ	4.9	4.7	弥生終末~古墳初頭	4	×	×	
			SI11	B II	5.5	5.5	弥生後期後半	4	0	×	
			SI12	B ii	6.2	6.0~	弥生後期後半	4	×	×	
			SI12	AII	8.2	6.0~	弥生後期後半	4	0	×	
	三田谷I	丘陵裾	SI14	BII	6.0	0.0	弥生後期後半	4?	×	×	—
			SI18	AII	5.6			4:	×	0	
			SI20	BII	4.6	4.4		4:	×	0	—
IV			SI07		4.0	4.4		4	×	0	—
				AI		4.2				_	
			SI01	BII	4.3	4.2	弥生終末~古墳初頭	4	0	0	
			SI02	BII	4.5		弥生終末~古墳初頭	4	0	0	-
	長廻	丘陵	SI03	BII	3.6	4.0	弥生後期前半	4	0	0	
			SI01	BII	3.8	~4.0	弥生中期末~古墳初頭	4	0	0	0
			SI02	BII	5.6	3.4	弥生終末~古墳初頭	4	0	0	-
			SI03	BII	3.6	?	弥生終末~古墳初頭	4?	0	0	-
V	山持	平野部 微高地	SI01	BII	4.4	3.2	弥生後期末	0	×		
			杉沢線 SI01	ΑΙ	10.0		弥生中期後葉	4	0	0	
	杉沢	丘陵	C丘陵 SI301	ΑΙ	5.5		弥生中期後葉	4	0		<u> </u>
	12//\	工权	C丘陵 SI304	Α?			弥生中期後葉		0	0	i
			C丘陵 SI305	ΑII	6.0	4.5	弥生中期後葉	4?	0	0	0
VI	杉沢Ⅱ	丘陵	E丘陵 SI501	ΑI	4.5		弥生中期後葉	4?	0	0	0
	杉沢Ⅲ	丘陵	SB01	ΑI	7.6		弥生中期	4~	0	0	
	12/1/5111		00-1区 SB01	ΑI	7.6		弥生中期	11?	0	0	
	三井川	丘陵			5.4	5.4~	弥生後期~古墳初頭	4	0	0	
	_# II	山俊	00-1⊠ SB02	BI		J.4· V			_		
1	ı		00-4区 SB01	ΑI	5.2	1	弥生中期?	4?	0	0	ı

※ A I (円形), A II (楕円形), A III (多角形), B II (方形), B II (円形寄り隅丸方形), B ii (方形寄り隅丸方形)

中期後葉段階の建物築造数がやや突出する。

その中期後葉に焦点を絞ると、建物跡は杉沢集落と地域Ⅲの古志集落(下古志遺跡・古志本郷遺跡・田畑遺跡)で発見されており、杉沢集落は計8棟、古志集落は計11棟の竪穴建物跡が調査された。同時期に存在したこれら2つの集落の建物跡のうち、規模が明らかな資料(杉沢7棟、古志11棟)を比較すると、古志集落と杉沢集落には規模の分布域に差があることが分かる(第247図)。また、中期後葉の建物跡に中期中葉に遡る三田谷 I 遺跡の建物跡 1 棟を加えた19棟の平均は長軸・直径5.2mとなる5)。この平均値を基準にすると、三田谷 I 遺跡と古志集落の



第247図 中期後葉の竪穴建物規模比較

建物規模は平均値周辺に集約する一方、杉沢集落は7棟のうち6棟が平均値以上の規模をもつ結果となった。古志集落と杉沢集落の間には立地の違いがあるが、その違いに建物規模が左右されたと想定することもできる。だが、同じく丘陵上に展開する長廻遺跡(後期末~古墳時代初頭)で確認された竪穴建物跡は長軸・直径4m前後の小規模なものに限られる。加えて、後期に入ると微高地の遺跡でも平均値を大きく上回る建物跡も見つかっており、建物規模の大小が立地に起因するとは言いがたい。現状では、中期後葉に限って、杉沢集落に大型建物を築くだけの需要が生じていたと推定しておく。

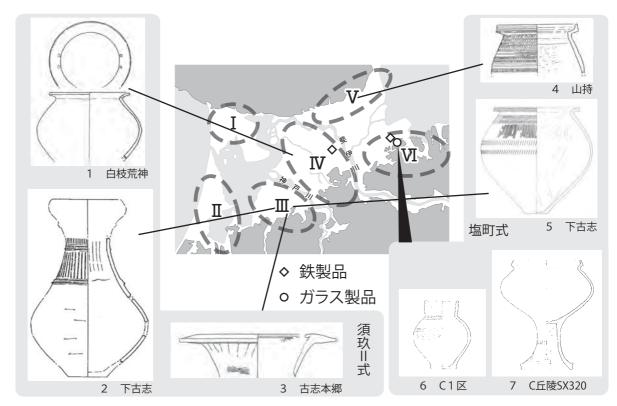
また建物の構造を見ると、高橋が指摘するように微高地の壁体溝保有率は中期後葉で30%程度に留まるが、杉沢集落では100%である。これについては、長廻遺跡でも同様の傾向がみられるため、壁体溝の有無については時期に関係なく立地が要因となっている可能性が高い。

以上のように、杉沢集落に築かれた竪穴建物は、中期後葉という時期において平均を上回る規模を 有する点が第一の特徴と言えよう。

(3)出土遺物の比較

最後に、遺物について検討する。ここでは特に、弥生時代中期以降に見られる、搬入品や模倣品に 焦点を絞る。

出雲平野では、平野部微高地の大規模集落を中心として、中国山地山間部、吉備、西部瀬戸内、九州北部、さらに朝鮮半島南部から搬入された、あるいは影響を受けた遺物が出土している。その大半は弥生時代後期後半以降にもたらされたものだが、杉沢集落が営まれた中期後葉前後に遡ると、中国山地山間部(現在の広島県北部)の塩町式土器、九州北部の須玖田式土器に影響を受けた土器が確認できる(第248図)。これらの胎土や製作技法、文様等からは、生産地のものとは異なる特徴があることが指摘されており⁶⁾、直接生産地から運ばれたものではないと考えられるが、中期後葉に中国山地や九州北部といった地域との直接的・間接的繋がりが形成されていることは間違いない。土器以外の遺物からは、中野清水遺跡(地域IV)で出土した中期中葉~後葉の鋳造鉄斧⁷⁾、杉沢集落で出土したガラ



第248図 中期後葉段階の搬入品と出土地域 (土器の縮尺は1:6,6のみ1:12)

ス小玉と袋状鉄斧の存在から九州北部との繋がりを伺うことができる。特に杉沢Ⅱ遺跡のガラス小玉は、インド南部~東南アジアを生産地とするグループのカリガラス(第7章第3節,田村2015)に分類され、九州北部を介して出雲平野にもたらされた可能性が十分に考えられる。

(5) 小結

集落遺跡の立地,竪穴建物の規模と出土遺物の3項目について,出雲平野の集落遺跡と杉沢集落を 比較した。この比較を通して見えてきた杉沢集落の特徴をまとめておく。

杉沢集落は、丘陵地の限られた斜面に一定のまとまりをもって展開する。特に杉沢遺跡B丘陵・C 丘陵の調査成果から、竪穴建物等が中期後葉に密集して築かれていたことが推測でき⁶⁾、その竪穴建 物が同時期の平均値以上の規模を誇ることは大きな特徴と言える。出土する土器が弥生時代中期後葉 に限られると言っても、集落内の遺構の築造時期には多少の時期差があると考えられるので安易な判 断はしかねるが、竪穴建物とそれに伴う複数の加工段を短期間のうちに築き、いち早くガラス玉や鉄 器という舶載品を入手し得た集団が斐伊川東岸南部(地域VI)に存在したのは確実といえる。

一方で、杉沢集落は後期初頭には廃絶されている。中期後葉のうちであっても、遺構には建て替え 痕跡や被熱痕跡等が見られるものは非常に少ない。さらに、砥石や石斧、石鏃等の石器類は各丘陵で 出土しているにも関わらず、これを加工した痕跡⁷⁾はなく、長期間の定住を伺わせる資料は皆無と いってよい。

第2項で示した拠点集落の条件を参照した時、杉沢集落は集落経営の継続性や墳墓、手工業生産に

ついて極めて希薄であり、拠点的とは言えない。しかし、搬入品を複数保有している点を評価すれば、 拠点的な大規模集落から一時的に派生した集落であった可能性を挙げることができる。この点を踏ま え、次項で出雲平野における集落の消長を分析し、杉沢集落の位置付けを考えてみたい。

第4項 出雲平野における弥生集落の消長と杉沢集落

出雲平野の弥生集落は、中期後半に爆発的増加を見せ、古墳時代前期に至るまで発展を続ける。第15・16表に示すように、斐伊川西岸では、中期中葉以降、居住地となる平野が広がる地域Ⅲ・Ⅳを中心に、拠点となる大規模集落とそれに近接する中・小規模集落が継続的に営まれた。これに対して平野部縁辺の地域 I・Ⅱ・Ⅵでは、各時期を3期(前葉・中葉・後葉)に細分したうちの2期以上にわたって継続した居住が確認できる集落は少ない。出雲平野の場合、集落の消長に現れるこのような地域差は立地に起因するものが大きいと考えられ、水稲耕作などの生業や手工業、広域交流の発達には開けた平野部が適していたために長期経営の集落が栄えたことは間違いない。その平野部の縁辺に存在し、小規模なまとまりからなる丘陵部の集落は、地形的制約のため長期的な居住には適していなかったと推測され、一時的な「短期居住集落」として存在していた可能性が高い。

杉沢集落も、丘陵部の集落にみられる短期居住の傾向から外れることなく、中期後葉という限られた期間の居住痕跡しか残されていなかった。しかし、杉沢集落では丘陵部の、特に地域VIにおける他の集落とは遺構密度や遺物の内容・出土量に大きな差が認められ、地域VIの中でも突出した短期居住集落に位置付けることができる。

弥生時代中期後葉、荒神谷の地に青銅器が埋納され、出雲における青銅器祭祀は遅くとも後期初頭には終焉を迎えたと考えられている。この重要な画期に、祭りの場から直線距離にして約2.8kmという近接地に営まれた短期居住集落が杉沢集落であった。両者の関係を積極的に評価すると、青銅器埋納に関係した集団が杉沢集落の構築と関わっていたと推測することもできる。しかし、これには大きく2つの検討課題があると考える。ひとつは短期居住した集団がどこから来たか、そしてもうひとつは、青銅器埋納を行った集団がどこに存在したかという問題である。これらの問題を議論し、様相を明らかにするためにはまだ資料が不十分である。さらに地域VIには、丘陵部・平野部ともにまだ見ぬ弥生集落が残されている可能性もある。今後はさらなる資料増加に期待するとともに、これまで蓄積された資料の精査を進め、弥生時代の出雲平野を捉えていくことが課題である。

(景山このみ)

【註】

- 1) 本節における「宍道湖」は、汀線が現在より西(出雲市国富町付近~斐川町直江付近)にあったと考えられる弥生時代当時の状態を指す。
- 2) 斐伊川を横切るJR山陰線の鉄橋工事中に発見された斐伊川鉄橋遺跡(第244図7)では、現在の川床から約7m下の層中で弥生土器・古式土師器が出土した。遺構は確認されていないが、この深さに遺跡が存在す

る可能性を示す資料である(出雲考古学研究会1980)。

- 3) 丘陵地に展開する集落は、その大半が丘陵裾部の緩斜面に位置する。弥生時代の出雲平野では、杉沢集落のように丘陵上や丘陵斜面を主体に遺構が展開する事例は極めて少なく、長廻遺跡(地域IV)、大倉IV遺跡(地域IVI、散布地)に見られる程度である。一方、出雲東部(松江・安来市域)では、特に弥生後期以降、丘陵部に営まれる集落が複数確認されている。後期前葉の例として、安来市大原遺跡、松江市山守免遺跡などがある(島根県教育委員会1988)。
- 4) 特に丘陵部において、加工段の中に竪穴建物跡であった可能性を残すものが多くある。今回は、明確に竪 穴建物と判断できる資料に限って分析を行ったが、加工段を含んだ場合、建物遺構の密度は微高地よりも 高くなる可能性がある。
- 5) ここでは、円形建物の直径と方形建物の長軸の数値を用いて、建物規模の平均値を導いた。
- 6) ここでは、斜面の崩落により築造当時の形態を残さず、「加工段」として検出された遺構は除いた。 ただし、加工段の中でも、複数の柱穴や壁体溝を伴い、確実に建物が建てられていたと考えられる遺構を 加えると、各丘陵の斜面に5棟以上の建物が併存していた可能性がある(杉沢遺跡B丘陵:6棟、C丘陵:8棟、 杉沢Ⅱ遺跡:4~5棟と推測)。
- 7) 今回の調査では、木器の出土はみていない。石器加工については、黒曜石等の剥片がわずかに出土しているが、いずれも単発的な出土に限られ、集中した加工場は見いだせなかった。

【参考文献】

出雲考古学研究会 1980『古代の出雲を考える 2 西谷墳墓群』

出雲考古学研究会 1986『古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡Ⅱ』

出雲市教育委員会 1991 『遺跡から見た古代の出雲』

川原和人 2014「第Ⅱ部 弥生時代 第1章 集落の地域的特質」『出雲の考古学』同成社

山陰考古学研究集会 2003『山陰の集落遺跡―弥生時代後期から古墳時代前期の集落像―』第31回山陰考古学研究集会事務局

島根県教育委員会 1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』

島根県教育委員会 1988『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡 (門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡 VI K区の調査』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 X VII, 第 2 分冊, 232 頁。

島根県教育委員会 2006『中野清水遺跡(3)白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化 財発掘調査報告書7

高橋智也 2003「出雲における竪穴建物跡小考一弥生時代から古墳時代の平面形態―」『山口大学考古学論集: 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会

田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の考察」『考古学研究』第35巻第1号 考古学研究会

- 田中義昭 1996「第3章 中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開」『出雲神庭荒神谷遺跡』第1冊本文 編 島根県古代文化センター・島根県教育委員会
- 田中義昭 2011『弥生時代集落址の研究』新泉社
- 田中義昭・西尾克己 1988「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』No.4 島根大 学山陰地域研究総合センター
- 田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』(95) 物質文化研究会
- 中村唯史 2010「第1節 弥生堰の立地と古地理」『矢野遺跡』自然科学分析・考察編(第4分冊) 出雲市の文化 財報告10 出雲市教育委員会

【挿図出典】

- 第248図1~4 島根県教育委員会 2006『中野清水遺跡(3)白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予 定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 第248図5 出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調 査報告書』

第3節 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉の流入経路

第1項 はじめに

杉沢 II 遺跡では、調査区のほぼ中央に位置する弥生時代中期後葉の竪穴建物 SI501 からガラス製の小玉 6 点が出土した (第5章)。今回の発見により、弥生時代後期前半の順庵原 1 号墓 (邑智郡邑南町)の出土資料 1)を最古としてきた島根県内におけるガラス製品の歴史の始まりが、一段階引き上がることとなった。

本節では、杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉出土の意義を、中国地方を中心とした西日本のガラス製品の 分布から考え、流入経路の復元を試みる。加えて、ガラス小玉を保有した杉沢Ⅱ遺跡の位置付けを考 察する。

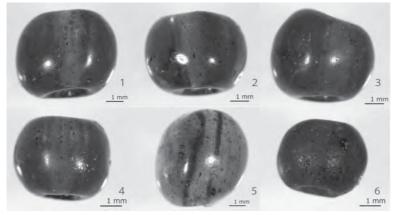
第2項 杉沢Ⅱ遺跡のガラス小玉

(1) ガラス小玉の詳細

杉沢Ⅱ遺跡におけるガラス小玉の出土状況および実測図は第5章, 自然科学分析の結果については 第7章第3節に詳述しているが、ここで改めて内容を整理しておきたい。

出土したガラス小玉 6 点は,直径 $4.3 \sim 5.9$ mm,厚さ $3.5 \sim 6.5$ mm,孔径 $1.0 \sim 2.3$ mm を測る。いずれも標準的なガラス小玉の法量の範疇に入るものだが,強いて細分するとすれば,直径 6.0 mm・厚さ 5.0 mm 以上を測る一群(第249図 $1 \sim 3 \cdot 5$)と直径 5.0 mm未満・厚さ 5.0 mm未満の一群(同図 $4 \cdot 6$)に分けられる。玉の表面はわずかに風化しているものの比較的良好な残存状況にあり,半裁した状態で出土した5 を除けば、目立った傷もない。

成分分析の結果, 6点はいずれもアルカリケイ酸塩ガラス系のカリガラスで, 酸化マンガンと酸化銅, わずかな酸化コバルトによって透明度の高い濃青色に着色されたことが分かった。また製作技法については, 顕微鏡観察によって孔に沿って列状に並んだ気泡が確認され, 管切り法, 引き伸ばし法による製作であることが指摘されている(第7章第3節)。



第249図 杉沢Ⅱ遺跡出土ガラス小玉(撮影 奈良文化財研究所)

第18表 ガラス小玉の法量

	直径	厚さ	孔径	挿図
1	5.9	5.5	2.0	152-5
2	5.5	4.5	2.3	152-6
3	5.5	5.3	1.8	152-7
4	4.5	4.0	1.3	152-8
5	5.5	6.5	(1.0)	152-9
6	4.3	3.5	1.5	152-10

※単位はmm。

本節では第18表の番号を用いる。

(2)出土状況

ガラス小玉 6 点のうち,調査時に原位置を保って出土を確認したものは弥生土器の下敷きになっていた 2 点 (1,2) と中央の焼土土坑上層から出土した 1 点 (5) のみで,他の 3 点は遺構埋土の洗浄中に得られた。出土した範囲は,直径 4.5 mを測る建物跡の中央からやや北寄りの直径 1 m前後に限られる。出土状況からは意図的な廃棄の痕跡は伺えず,散乱した状態に近いため,建物廃絶時に所有していたガラス小玉の一部を取りこぼした可能性も指摘されている20。

第3項 分布からみた弥生時代ガラス玉の流入経路

(1) ガラス玉搬入経路の復元

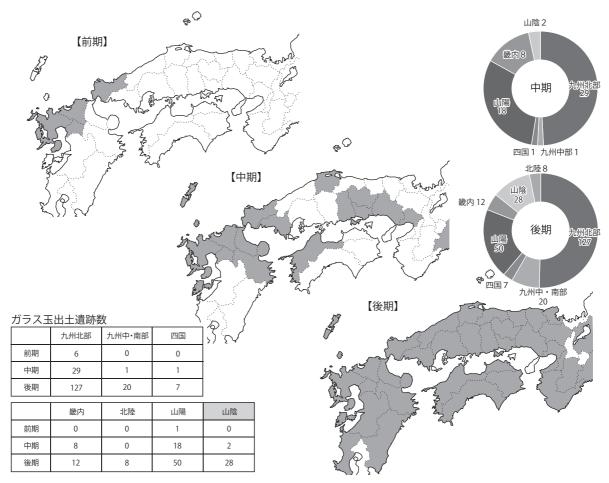
杉沢 II 遺跡のガラス小玉は、弥生時代中期後葉の遺構から出土したことにより、島根県内最古に位置付けられる資料となった。基本的に舶載品であるガラス製品やその素材を入手するためには、出雲以外の土地との交流が不可欠である。そこで、九州北部から中国地方を中心とした弥生時代のガラス玉の出土状況および遺跡分布の視点から、杉沢 II 遺跡の弥生集落にもたらされたガラス小玉の流入経路の復元を試みる。

(2) 弥生時代ガラス玉出土遺跡の変遷―西日本を中心に―(第250・251図)

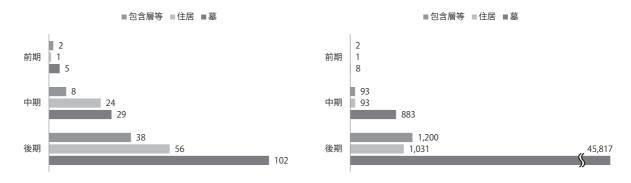
弥生時代の日本列島におけるガラス製品は、玉類を中心に西アジア、東南アジア、中国大陸等で製作され、前期末~中期初頭に九州北部にもたらされた。出現期のガラス玉は九州北部の中でも沿岸部に限られ、大半が墳墓の副葬品として出土する。

九州北部以外に分布が広がるのは中期中葉以降であり、中期後葉になって山陽・山陰地域、畿内へと分布が拡大し、わずかながら関東・東海地域にも点在するようになる。ガラス玉を出土する遺構は、墳墓が5割、建物跡が4割、その他の遺構や包含層が1割である。墳墓以外の遺構等からの出土例が前期より大幅に増加するが、ガラス玉自体の出土点数を見ると、依然として墳墓出土の資料が全体の8割を超える。この状況は、墳墓への玉類の多量副葬が始まったことによるもので、建物跡など墳墓以外からの出土点数は1遺構につき1~2点に留まるものが大半である。多量副葬は九州北部を中心とし、瀬戸内以東の地域では確認されていない。逆に瀬戸内以東では墳墓以外から出土する事例が多く、玉類の出土状況に地域性が生じている。

後期になると分布状況が大きく変化する。ガラス玉出土遺跡が日本列島のほぼ全体で確認できる上、出土点数も爆発的に増加する。中期に九州北部で始まった玉類の多量副葬の例は、西日本・東日本に点的に広がり、ガラス製を含んだ玉類が副葬品として広く浸透していることが分かる。一方、建物跡等、墳墓以外からの出土事例も中期の約5倍に増加し、出土遺跡数の点では墳墓を上回る。出土点数では墳墓出土例に遠く及ばないものの、出土遺跡数をみると中期の10倍以上に増加しており、広範囲の集落遺跡でガラス玉を保有する状況が認められる。



第250図 弥生時代各期におけるガラス玉類出土遺跡数と地域の変遷 (西日本) (島根県古代文化センター2005、藤田1997をもとに作成)

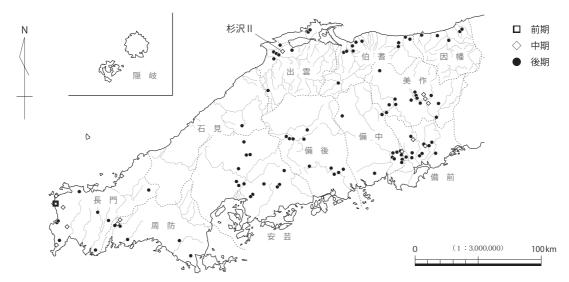


第251図 弥生時代各期におけるガラス玉類出土遺構数(左)と出土点数(右)

(3) 中国地方におけるガラス玉の拡散状況

西日本全域のガラス玉拡散状況について概観した。次は、中国地方における拡散状況を整理してみたい(第252図)。

中国地方におけるガラス玉の出現は前期末の長門西部 (山口県西端) が最古となる。(2) で触れたように、九州北部から他地域へのガラス玉分布域の拡大は中期中葉を待たねばならないが、長門西部は青銅器の分布状況³⁾からも九州北部の文化圏に含まれていたと考えられるので、中国地方の他地域と



第252図 中国地方のガラス玉出土遺跡(島根県古代文化センター2005をもとに作成)

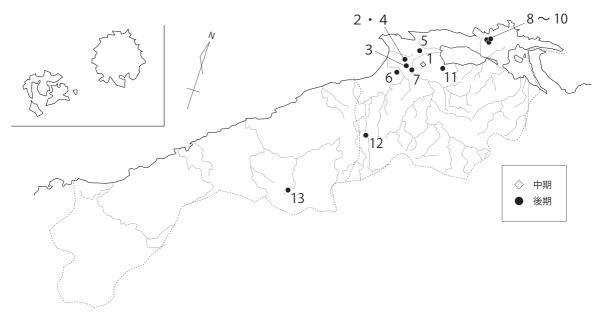
は異なる出現期の様相を示すものと考えたい。

その後中期中葉までに、長門西部に加えて備中・備前南部(岡山県南部)に小玉・管玉が出現する。 中期後葉には長門・備前・美作の山陽地域一帯と備後北部・出雲西部への流入が確認され、その多く が建物跡等、墳墓以外の遺構や包含層から出土している。山陽では、出土遺跡が主要河川沿いに点在 していることから、河川を介した流入経路が想定され、資料数が増加する後期には、特にその状況が 顕著に伺える。

一方、中国山地以北の山陰においては、中期段階では杉沢Ⅱ遺跡1例しか確認できず、ガラス玉単独で流入経路を判断するには資料が少ない。しかし前節で検討したように、出雲平野には土器を中心とする九州北部系の遺物がもたらされているので、杉沢Ⅲ遺跡のガラス小玉も日本海から出雲平野の河川を介して流入したと考えるのが妥当だろう⁴)。続く後期前葉には、山間部の順庵原1号墓に加え、いずれも備後北部の江の川水系に位置する和田原D地点遺跡(広島県庄原市)、京野遺跡(広島県北広島町)に出土例が認められるが、山陰のガラス玉出土遺跡は出雲と伯耆・因幡北部(鳥取県北部)の沿岸部が中心で、河川を介した山間部への流入は限定的であったとみられる。これに対して山陽では、中期以来、沿岸部・山間部ともに多くの遺跡でガラス玉が出土しており、流入量の多さに比例するように、中期後葉段階から活発な搬入経路が形成されたことが伺える。

第4項 杉沢Ⅱ遺跡におけるガラス小玉出土の意義

前項の検討を通して、杉沢Ⅱ遺跡には出雲地域だけでなく中国地方の中でもいち早くガラス玉が流入したことが明らかとなり、日本海沿岸のガラス玉拡散状況の様相に新たな資料を加えることができた。出雲平野では、縄文時代晩期以降、九州北部や山陽といった他地域からもたらされた文物が残され、広い交流関係が形成されたことが分かっている(本章第2節、出雲市教育委員会2001)。中期段階では、九州北部との関連を示す土器や鉄製品、そして青銅器が出土しており、九州北部との交流の中で、



第253図 島根県内の弥生時代ガラス製品出土遺跡

第19表 島根県内の弥生時代ガラス製品一覧

	遺跡名	種 別	時期	出土遺構 等		ガラス	製品の	種類		同一遺札	黄 共伴
	退砂石	性 別	时 期	出工退備 寺	勾玉	管玉	丸玉	小玉	他	玉 類	その他
1	杉沢Ⅱ	集落跡	弥生中期後葉	竪穴建物SI501				6			弥生土器 袋状鉄斧, 砥石
2	矢野	集落跡	弥生前期?~古墳前期	包含層			1	1		碧玉管玉 2 緑色凝灰岩管玉 2	
3	白枝荒神	散布地	弥生後期	土器群6		1?					
	П ТХЛЕТТ	BX 13-C		溝SD02		1?					
4	姫原西	集落跡	弥生後期末	貝塚				2			
5	山持	集落跡	弥生後期後半以降	7区⑤落ち込み状遺構				1		碧玉?管玉1	弥生土器, 砥石 須恵器, 土師器
6	下古志	集落跡	弥生後期	溝SD03(もとはSI01か)				1			弥生土器 須恵器, 土師器
				3号墓第1主体	2	26+		122+	垂40+ ?36+	緑色凝灰岩管玉27	弥生土器 棺上円礫
7	西谷墳墓群	墳墓	弥生後期後葉	3号墓第4主体		20					鉄剣, 弥生土器 棺上円礫
				2号墓中心部		1			釧3		
				包含層		1		10			
				掘立柱建物SB04				1		緑色凝灰岩管玉 1	
8	堀部第2	集落跡	沙土 夜别不	溝SD01				1			
	기파다/카 스	未准则	~古墳初頭	溝SD03		1					
				溝SD05				1			
				溝SD10		1					
9	堀部第3	集落跡	弥生後期末 ~古墳初頭	包含層	1			2			
10	南講武大日	散布地	弥生後期~古墳前半	竪穴住居SI05				1			
11	上野Ⅱ	集落跡	弥生後期	竪穴住居SI10 P15				1			
12	森	集落跡	縄文~古墳	包含層				1			
12	临床匠 1 口节	接替	弥生後期前半	第1主体				14			
13	順庵原1号墓	墳墓	沙土该别則干	第2主体		2		45			

日本海を経由するルートでもたらされたと考えることができる。

しかし現状では、墳墓を除く島根県内のガラス玉出土遺跡は長期経営の大規模な集落に限られており、「短期居住集落」である杉沢集落が大規模集落に肩を並べる規模とは言いがたい。仮に、ガラス製品のような最先端の製品を保有した集落が大規模なものに限られていた場合、杉沢集落はその例外となってしまう。本章第2節で検討したように、短期居住集落の母体となる大規模集落が杉沢集落の付近に存在している可能性を完全に否定することはできないが、現状では想像の域を超えることはない。これについては資料の増加を待ちながら、山陰地域を中心としたガラス玉の拡散状況をより詳細に分析していく必要がある。

(景山このみ)

【註】

- 1) 参考文献の(島根県教育委員会1971),(島根県古代文化センター2005)による。
- 2) 小寺智津子氏(日本学術振興会特別研究員)にご指摘いただいた。
- 3) 前期末~中期初頭の長門西部では、沿岸部を中心として細形段階の武器形青銅器が副葬品として採用された墳墓が確認でき、九州北部の影響を反映したものと考えられる(島根県古代文化センター2006, 巻末地名表による)。
- 4) 中期段階の日本海沿岸の交流ルートを示す資料として、青谷上寺地遺跡(鳥取県鳥取市)の鉄器や青銅器がある。特に鋳造鉄斧(破片を含む)は前期末段階から流入が確認でき、早い段階からルートが形成されていたものと考えられる(鳥取県埋蔵文化財センター2011)。

【参考文献】

出雲市教育委員会 2001 『遺跡が語る古代の出雲』 38~40頁

大賀克彦 2002「島根県下のガラス製品|『島根考古学会誌』第19巻 島根考古学会

島根県教育委員会 1971『島根県文化財調査報告』第7集

島根県古代文化センター 2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ―中国地方の玉製品出土遺跡集成―』

島根県古代文化センター 2006『青銅器埋納地調査報告書Ⅱ(武器形青銅器編)』島根県古代文化センター調査研 究報告32

島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 2001『ガラスのささやき―古代出雲のガラスを中心に―』平成13年企画 展図録

田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』(95) 物質文化研究会

鳥取県埋蔵文化財センター 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター 長差報告 39

藤田等 1994『弥生時代ガラスの研究―考古学的方法―』名著出版

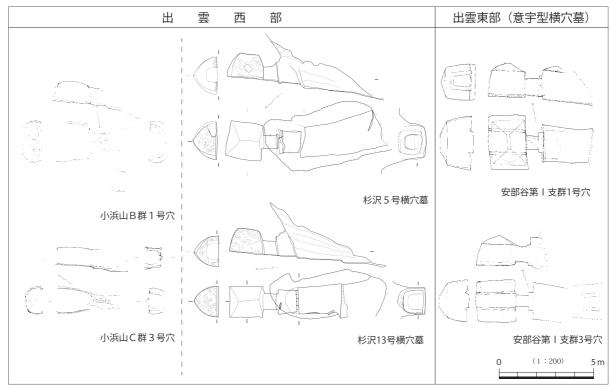
第4節 出雲西部の意字型横穴墓からみた古墳時代終末期の様相

第1項 意宇型横穴墓研究の現状と課題

杉沢横穴墓群の最大の特徴は、前庭部と玄室の間に羨道・玄門のいずれかを持つ横穴墓(第254図 左)が多い出雲西部に位置しながらも、玄室の手前に羨道と玄門が明瞭に造り分けられる形態(第254 図中央)を持つ点で、それは石棺式石室の影響を受けた出雲東部の意字型横穴墓の形態(第254図右)に類似する。またそれが横穴墓群内のほぼすべての横穴墓で共通していることも重要である。

このような特徴がまとまって共有される横穴墓群は、出雲西部では未だ確認されておらず、出雲地 方全体の中でどのように位置づけられるのかが大きな課題であり、加えて今後の東西出雲の関係性を 考察する上でも重要な役割を担うと考えられる。

そこでまずは意宇型横穴墓に関する研究状況を整理し、意宇型横穴墓の特徴を持つ杉沢横穴墓群の 性格を検討する足掛かりとしたい。



第254図 杉沢横穴墓群(中央)と東西出雲の横穴墓群(左 小浜山横穴墓群,右 安部谷横穴墓群)(1:200)

(1) 意字型横穴墓に関する研究史

意宇型横穴墓は、出雲東部を中心に展開して独自の石室構造を持つ石棺式石室の影響を受けたと考えられているが、それは山本清氏や門脇俊彦氏が山陰地方の横穴墓について、その形態的特徴を総合的に研究する中で横穴墓と横穴式石室・石棺式石室との類似性を指摘したことから始まったと言える(山本1962、門脇1980)。

その後、松江市山代町の狐谷横穴墓群の発掘調査において羨道の2重構造を持つ形態が注目され

(横山1977),安来市黒井田町に所在する高広横穴墓群の調査が実施された際には、羨道と玄門を有する横穴墓の構造が石棺式石室のものと同様の特徴を備えている点が確認されており、横穴墓の形態の変遷過程のなかで石棺式石室との関係性について議論が深められている(足立・丹羽野1984)。そうした展開を経たのち、出雲考古学研究会が石棺式石室の再整理・再検討を踏まえてその定義を明確化し、その上で石棺式石室と同様の構造を持つ横穴墓を「意宇型」横穴墓として呼称した(桑原・丹羽野1987)。

それ以降,各地で横穴墓群の調査が増加し、出雲東部を中心に意宇型横穴墓が多数確認されることと併行して出雲西部でも横穴墓の調査事例が蓄積され、出雲市上塩冶町の上塩冶横穴墓群第22支群では一部の横穴墓に羨道と玄門の区別が認められて意宇型横穴墓に類似することが指摘されている(角田・西尾1987,守岡1998)。この段階で出雲西部の横穴墓の中にも意宇型横穴墓の要素が散見されることが認識されていたと言える。

そうした中,各地で調査事例が増加する状況と相俟って出雲地方の各地域の横穴墓が集成・整理されることとなる(宍道町教育委員会1993,山陰横穴墓研究会1997,西尾ほか2007)。これらの成果によって出雲地方の横穴墓研究における基礎的資料が整備され,意宇型横穴墓についても出雲東部での具体的な展開が明示されたことは大きい。

近年では、松江市史の編纂に伴う石棺式石室を持つ古墳の集成のなかで意字型横穴墓について言及され(西尾2012)、その後に最近の調査成果を網羅した形で松江市域の横穴墓集成が実施されている(西尾・稲田2013)。その中では、同じ出雲東部の意字型横穴墓でも詳しく様相を検討すると地域ごとに差異が見い出せる点や、出現期と比べて終焉期にはその様相が不明瞭であることが指摘されている。

(2) 杉沢横穴墓群と意字型横穴墓

このように見てみると、意字型横穴墓は当初、石棺式石室との形態的比較で検討されることが多かったが、調査事例の増加とともに各地での横穴墓が集成・整理されるのに伴い、意字型横穴墓自体の形態に関する検討の機運が高まってきたと言えるだろう。その中では、今後の課題も同時に見いだされ、意字型横穴墓の地域性の検討や、終焉期の意字型横穴墓の様相解明などが示されている。

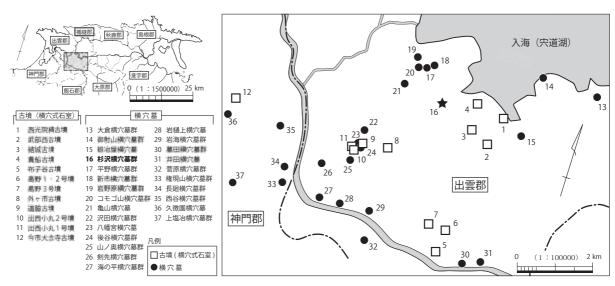
杉沢横穴墓群は、意宇型横穴墓の形態的な特徴がまとまって確認できる横穴墓群で、出雲西部における意宇型横穴墓の地域的な様相を考える上で軸となる存在であるとともに、出雲東部からの意宇型横穴墓の西方展開を検討できる好材料ともなろう。また、時期的には古墳時代終末期の横穴墓群の様相を示しており、終末期横穴墓の様相を絡めた当時の社会背景を検討することも可能となってくる。

つまり、杉沢横穴墓群の様相が示す検討課題とは、出雲西部における意字型横穴墓の形態を備えた横穴墓(群)の位置付けを明確にし、加えて東西出雲の意字型横穴墓の展開からみた当時の社会背景についても把握することであろう。

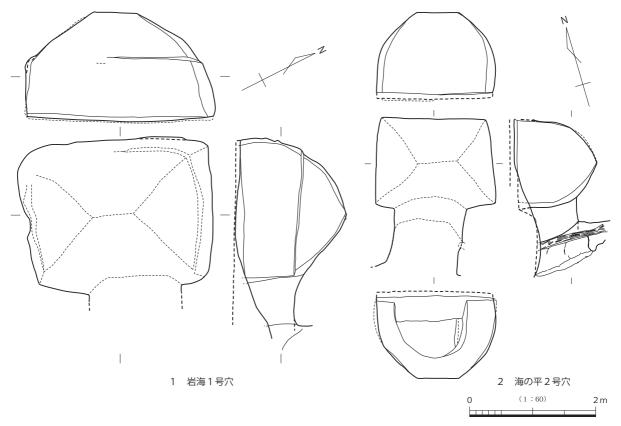
第2項 出雲西部の意字型横穴墓

(1) 斐川町周辺の横穴墓とその様相

意字型横穴墓の特徴を備えた杉沢横穴墓群の様相を明確にするために、まずは杉沢横穴墓群が所在する出雲市斐川町周辺(出雲郡南部)における横穴墓の様相を検討してみたい。杉沢横穴墓群の周辺には現在25程度の横穴墓(群)が知られている(第255図)。そのうち、発掘調査が実施されて報告されて



第255図 杉沢横穴墓群と斐川町周辺の横穴墓(群)・横穴式石室(左上 1:1,500,000, 右 1:100,000)

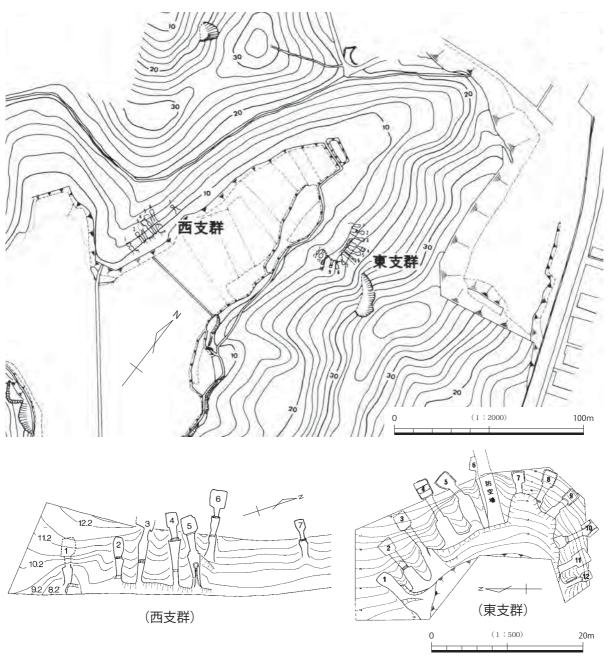


第256図 岩海横穴墓群 1 号穴(左)と海の平横穴墓群 2 号穴(右)(原田敏照氏提供原図をトレース 1:60)

いるのは御射山横穴墓群と平野横穴墓群(斐川町教育委員会1982・1983・1984)のみで、その他一部が図 化されて横穴墓の形態が把握できるのは、大倉横穴墓群、コモゴ山横穴墓群、山ノ奥横穴墓群、海の 平横穴墓群、岩海横穴墓群などである。

平野横穴墓群以外の構築時期は判然とせず、羨道と玄門が明確に造り分けられているものは見受けられない。その一方で、玄室の天井形態がドーム系寄棟家形で平入りの岩海横穴墓群1号穴や、ドーム系テント形で平入りの海の平横穴墓群2号穴が確認でき(第256図)、出雲東部の影響が色濃く看取できる横穴墓が存在している。

平野横穴墓群については発掘調査が実施され、杉沢横穴墓群と対比できる材料が揃っている。そこで、まずは平野横穴墓群の特徴を整理しながら、杉沢横穴墓群との比較を軸に検討を進めていく。



第257図 平野横穴墓群の立地(上)と西支群(左下)・東支群(右下)(1:2,000, 1:500)

(2) 平野横穴墓群と杉沢横穴墓群の比較検討

平野横穴墓群は谷を挟んで東支群と西支群に分かれており、東支群12基、西支群7基の合計19基の横穴墓が確認されている(第257図)。出土須恵器から、西支群は出雲5~6a期(6世紀末~7世紀前半)、東支群は出雲6a~b期(7世紀前半~中頃)に概ね構築されたと考えられ、6世紀末頃に先に西支群が築かれ始め、その後に東支群が形成されていったと想定できる。よって第6章で検討した杉沢横穴墓群の推定構築時期との関係で捉えると、6世紀末から7世紀前半にかけて平野横穴墓群の西支群で構築が開始された後に東支群でも横穴墓の造営が始まり、その時期と前後して杉沢横穴墓群でも一部で7世紀前半の終わり頃に構築され始め、続く7世紀中頃以降(出雲6b・c期~)にかけてまとまって形成されていった。という地域内における横穴墓群の時系列的な順序が想定できる。平野横穴

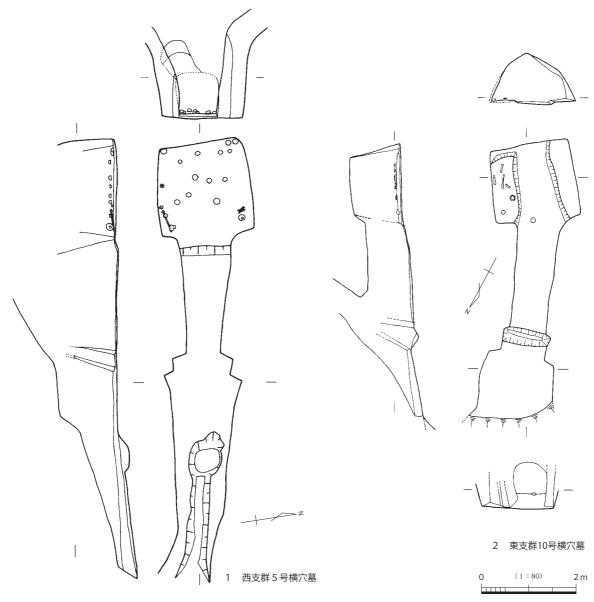
			<u> </u>	- 野	 横	穴	墓 種	 詳						—— 杉	沢	 横	穴	墓	 詳		
			羨	道	玄	門	玄	室	時	期				羨	道	玄	門	玄	室	時	期
		前	平	断	平	断	平	天	構	追葬			前	平	断	平	断	平	天	構	追葬
		庭	面	面	面	面	面	井		墓前			庭	面	面	面	面	面	井		墓前
		部	形	形	形	形	形	部	築	祭祀			部	形	形	形	形	形	部	築	祭 祀
	1 号		-	_		_			6a 期	6d~ 7期		1 号									7~ 8期
	2 号		-	_					6a 期	6d 期		2 号									7~ 8期
	3 号		-	-				\triangle	6a~ b 期	6d~ 7期	東	3 号							\triangle	7	8期
	4 号		-	-					6a 期	_	木	4 号					_			世纪	7~ 8期
東	5 号		-	-					6a 期	-	群	5 号								紀中	7~ 8期
 支	6 号	_	-	_	_	_	-	-	_	-		6 号			-		_	-	-	頃	_
	7 号	-	-	-	-	-			_	-		7 号								後	6d~ 7期
群	8 号		-	-					6a 期	-		8 号							\triangle	半	6d~ 8期
	9 号		-	-					6a 期	-		9 号						-	-	_	-
	10 号								6a 期	-		10 号							\triangle	部	-
	号		-	-		-			_	-	西	号								前半	_
	12 号		-	_	-	_		_	-	-		12 号							\triangle	?	-
	月		-	-					5~ 6a 期	-	群	13 号								<u> </u>	-
西西	号		-	-		-			5期	-		14 号									7~ 8期
	3号		-	_		-	-	_	5期	-		15 号		-	_						7~ 8期
支	号		-	_					5期	-					方 邢	室		[] IE :	方 形	7_
群	5 号								5~ 6a 期	_	Л		平 [面 ■	_	長 長 方 邢 長 長 方 邢			断	☆ 台 ☆ ァー	形	玄門・羨
	6 号 7		_	_					5期	-	例]	形	■ 傾7	来 交 刀 川 肝	美道	i I	π.		ト形	羨道・玄室
	/ 号		-	_					6a 期	6d 期				ブ 逆	台册	が が が が が が が が が は は は は は は は は は は は	i	ć	⇒家	形	للل

第258図 平野横穴墓群と杉沢横穴墓群の形態・時期の比較一覧

墓群の形態的特徴と構築・墓前祭祀の時期を杉沢横穴墓群とともに第258図に示したが、それをもとにまずは平野横穴墓群の様相について概観する。

平野横穴墓群の玄室内の形態について見てみると、天井形態ではアーチ形が西支群の主流を占めるが、東支群ではアーチ形のほかにテント形が散見される。出雲西部ではアーチ形からアーチ系のテント形が派生するが、平野横穴墓群では6a期になりテント形が採用され始めている。また、玄室床面は両支群で縦長長方形と正方形が確認でき、西支群には縦長長方形を呈するものが多いが、東支群では正方形を持つ横穴墓が優勢である。これが時間的な変化を示しているかの判断は難しいが、出雲西部では7世紀前半以降に整正家形が出現し(大谷・松山1999)、同時に精美な正方形の平面形も盛行するため、その影響を受けて東支群で床面が正方形を呈する横穴墓が増加したのかもしれない。

杉沢横穴墓群では、一部でアーチ形が存在するものの、多くがテント形を採用しており、平野横穴 墓群の東支群でテント形が採用された頃に杉沢横穴墓群でもテント形が取り入れられ、その後に群内



第259図 平野横穴墓群西支群5号横穴墓(左)と東支群10号横穴墓(右)(1:80)

で主流となったと理解したい。ただし、杉沢横穴墓群の西群10・13・14号横穴墓では、テント形の中にも出雲東部のドーム系の技法を継ぐ可能性のあるものが存在しており、玄室形態に出雲東部・西部の要素が入り混じった様相が読み取れる。なお、玄室床面については平野横穴墓群の東支群と同様に正方形が目立つ。

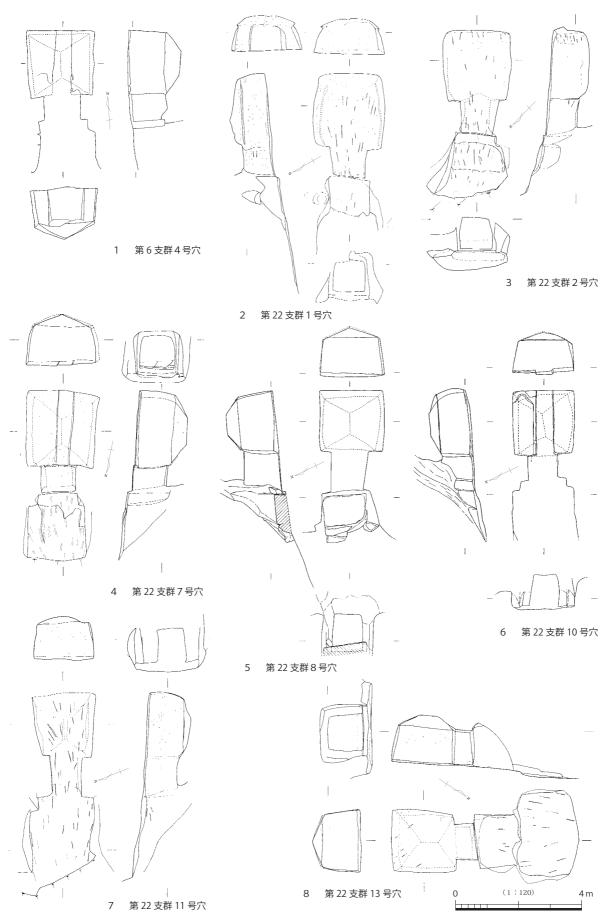
玄門形態は、平野横穴墓群では確認できる限り両支群とも断面アーチ形で縦長長方形の床面に統一されており、杉沢横穴墓群と比べて床面がかなり細長く伸びる。注目されるのは、平野横穴墓群の西支群5号横穴墓、東支群10号横穴墓において、玄門・閉塞部と前庭部との間に空間が確認でき、2重構造を示す点である(第259図)。西支群5号横穴墓は閉塞石受け専用の閉塞部であった可能性も否定できないが、東支群10号横穴墓では木製の閉塞板を嵌め込んだと思われる溝が玄門の手前に存在しており、閉塞部とは別に羨道が設けられたと判断できる。しかし、それらの奥行きはあまりなく、杉沢横穴墓群で確認できる羨道ほど広い空間は確保されていない。なお、斐川町周辺には石棺式石室の影響が看取される横穴式石室を持つ道脇古墳が存在するが、石室構造から概ね出雲5・6a期に営まれたと想定されており(坂本2012)、石棺式石室の影響と連動して出雲東部から意字型横穴墓の諸要素が平野横穴墓群に流入した可能性も視野に入ってくる。しかし、その他に石棺式石室を持つ古墳は確認できず、それ以降の杉沢横穴墓群の主な構築時期に並存したと思われるものは見いだせない。

前庭部について、平野横穴墓群の西支群では全ての横穴墓が縦長長方形で細長いが、東支群では前庭端部が広がる台形状となる横穴墓が多くなってくる。西支群における長方形で細長い形態は、玄室への通路を意識した墓道に近かったと思われるが、東支群が築かれる頃には次第に床面積が広がり、加えて構築段階からやや時期を経た須恵器が東支群の前庭部を中心に確認されるようになり、墓前祭祀が執り行われる場へと変化していったことが時期的な変遷として看取できる。この様相は杉沢横穴墓群にも引き継がれ、より多くの横穴墓で墓前祭祀が行われた痕跡が見られる。その時期を見ると、杉沢横穴墓群では平野横穴墓群よりもさらに新しい段階の須恵器が確認されており、8世紀に入っても盛んに横穴墓が利用されていたことを物語っている。

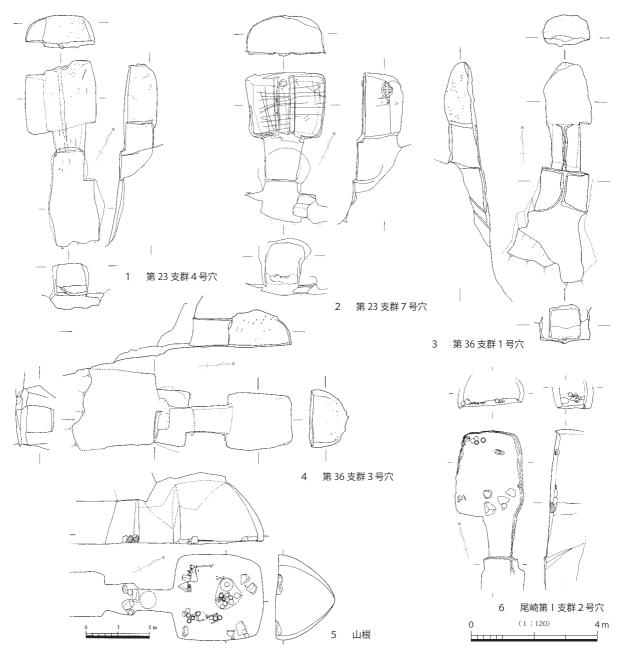
以上、平野横穴墓群から杉沢横穴墓群への時系列的な変遷を中心に比較検討を重ねてきたが、杉沢横穴墓群の様相が改めて浮き彫りとなった。最大の注目点は、杉沢横穴墓群において斉一的に表現される意字型横穴墓の形態的特徴の位置付けであるが、その成立の要因は周辺の古墳の様相からは看取できず、平野横穴墓群から杉沢横穴墓群への時期的変遷の中で、平野横穴墓群に散見された狭い羨道の空間から発展的に営まれた可能性は否めない。しかし、杉沢横穴墓群の東群におけるドーム系テント形の玄室内形態が示すように、平野横穴墓群には確認できなかった出雲東部の要素も表現されており、出雲東部の新たな影響によって顕在化した公算が高い。よって杉沢横穴墓群は、在地の地域的特質を基盤としながらも、新たに出雲東部の要素を受容し、両者を融合させて完成した表現形態であったと捉えることが妥当であろう。

(3)出雲西部における意字型横穴墓の諸相

平野横穴墓群・杉沢横穴墓群以外に出雲西部の中で意宇型横穴墓の形態的な特徴を持つものについ



第260図 上塩冶横穴墓群第6・22支群における羨道・玄門を持つ横穴墓(1:120)



第261図 上塩冶横穴墓群第23・36支群・山根横穴墓・尾崎横穴墓群の羨道・玄門を持つ横穴墓(1:120)

第20表 出雲西部における羨道・玄門を持つ横穴墓の玄室形態と時期

横穴墓名称	尓 (号穴・支群	()	羨道・玄門 の区別	玄 室 平 面 形	形態 天井部	時 構 築	期 追葬・墓前祭祀	文 献
	第6支群	4号	A	正方形	整正家形	6c‡	朝?	島根県教委1980
		1号	A	縦長長方形	アーチ系家形	5期	6c期	
		2号	A	縦長長方形	アーチ系家形	5期	6d期	
-		7号	0	正方形	整正家形	5~6a期	_	白田田松禾
上塩冶横穴墓群	第22支群	8号	A	正方形	整正家形	6c ∼	7期?	島根県教委 1980・1998
冶		10号	0	正方形	アーチ系家形	_	_	1900 - 1990
党		11号	A	正方形	アーチ系家形	6c ∼	d期?	
墓		13号	0	正方形	アーチ系家形	6a期	_	
群	第23支群	4号	A	不整方形	アーチ形	6a期	_	
	第23 文研	7号	A	横長長方形	アーチ系家形	5~6a期	_	島根県教委
	第36支群	1号	A	縦長長方形	ドーム形	6b ∼	7期?	1998
	第30 文杆	3号	A	縦長長方形	ドーム形	6c ∼	7期?	
山根横穴墓	_	_	0	正方形	テント形	5期?	_	蓮岡 1984
尾崎横穴墓群	I 支群	2号	0	縦長長方形	アーチ形	5期	6b期	佐田町教委1988

※▲は片袖のみの羨門を持つ横穴墓

ては、羨道と玄門の区別が認められて意宇型横穴墓に似ることが指摘された上塩冶横穴墓群の第22 支群10・13号穴(第260図6・8)が挙げられる。第22支群ではこれらのほか、7号穴でも同様の形態 を有していた可能性がある(第260図4)。

加えて同支群の $1\cdot 2\cdot 8\cdot 11$ 号穴では、厳密な羨道ではなく片袖の羨門が左右のどちらかにのみ存在する形態も認められ、広く見ればこれらも2重の構造を呈している点に注目したい (第260図 $2\cdot 3\cdot 5\cdot 7$)。その中には、玄門手前で閉塞石を受けるための閉塞部として造り付けられた可能性のあるものがあるが、閉塞部よりも明らかに手前に羨道が存在する横穴墓もあり、一概にそうであったとは言い切れない。このような形態は第22支群のほかに第 $6\cdot 23\cdot 36$ 支群でも認められており (第260図 $1\cdot$ 第261図 $1\sim 4$)、一部で偶発的に造られた構造ではなく、閉塞部の手前に羨道を付与しようとして発現した一形態であったと捉えたい。

その他、上塩冶横穴墓群以外では、雲南市掛合町(飯石郡北東部)の山根横穴墓や、出雲市佐田町(飯石郡北西部)の尾崎横穴墓群で羨道と玄門の区別がなされる2重構造を持つ形態が散見できる(第261図5・6)。今後、調査事例が蓄積されていく中でさら増加する見込みがあろう。

これらの横穴墓における玄室の天井形態や時期について見てみると (第20表), 天井形態は基本的にアーチ系の家形のもの多く, 出雲西部に特有の特徴を持つ横穴墓が目立つ。ただし, 上塩冶横穴墓群第36支群1・3号穴はドーム形であり, 出雲東部の様相が看取されよう。時期については, 出土須恵器から出雲5~6a期に属すると思われるものが主流であり, 平野横穴墓群が構築された時期と一致している。一方で, 出雲6b・c期(7世紀中頃)以降に下る可能性のある横穴墓も存在し, こちらは杉沢横穴墓群が主に構築された時期に比較的近いのかもしれない。これらを踏まえると, 在地の特徴を素地としながらも, 出雲東部の意字型横穴墓の要素を部分的に取り込んでいる点が出雲西部の意字型横穴墓の特徴であると言える。

このように、出雲東部の特徴である意字型横穴墓が出雲西部にもある程度展開することが分かってきた。現在のところ、まとまった意字型横穴墓の形態が横穴墓群内で多数確認される事例は杉沢横穴墓群のみで、杉沢横穴墓群よりもさらに西方では、その要素が散発的になり形態が不完全なものが目立ってくる。そうした出雲西部の様相について、次項で石棺式石室の展開を踏まえた東西出雲の動態のなかで総合的に評価することにしたい。

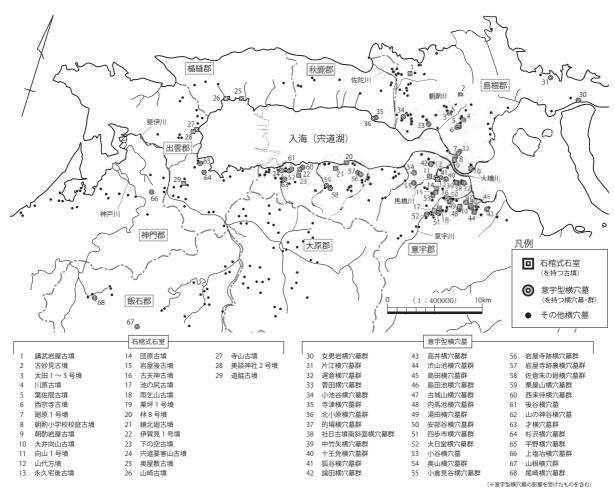
第3項 東西出雲における石棺式石室と意字型横穴墓の展開

(1) 石棺式石室と意字型横穴墓の分布状況

これまで杉沢横穴墓群の様相を中心に出雲西部における意宇型横穴墓について検討を重ねてきたが、ここでは出雲東部の様相、特に松江市域(島根郡・意宇郡中央部)の状況を取り上げ、石棺式石室を持つ古墳と意宇型横穴墓の西方展開について、前項での議論を踏まえて包括的に検討を進めていく。

まずは、出雲東部から出雲西部にかけての石棺式石室と意宇型横穴墓を有する横穴墓・群の分布状況について、第262図で確認しておこう¹⁾。横穴墓は東西出雲の全域で構築されており、出雲東部で

は石棺式石室と意宇型横穴墓が各地域で散見されるが、中心地は意宇川流域とその周辺地域であり、数多くの石棺式石室と意宇型横穴墓が密集する。そこから出雲西部へ向かうと減少する傾向にあり、松江市の宍道町周辺(意宇郡西部)までは両者がある程度確認できるが、それより西方では途端にその数を減らし、石棺式石室の影響が看取できる横穴式石室が辛うじて確認できるにとどまっている。意宇型横穴墓についても同様に確認例が少なく、杉沢横穴墓群のほかは先ほど取り上げた平野横穴墓群や上塩冶横穴墓群、山根横穴墓・尾崎横穴墓群で単発的に形態的特徴が認められるのみである。東から西へと徐々に石棺式石室と意宇型横穴墓の影響が薄れていくことが分かる。

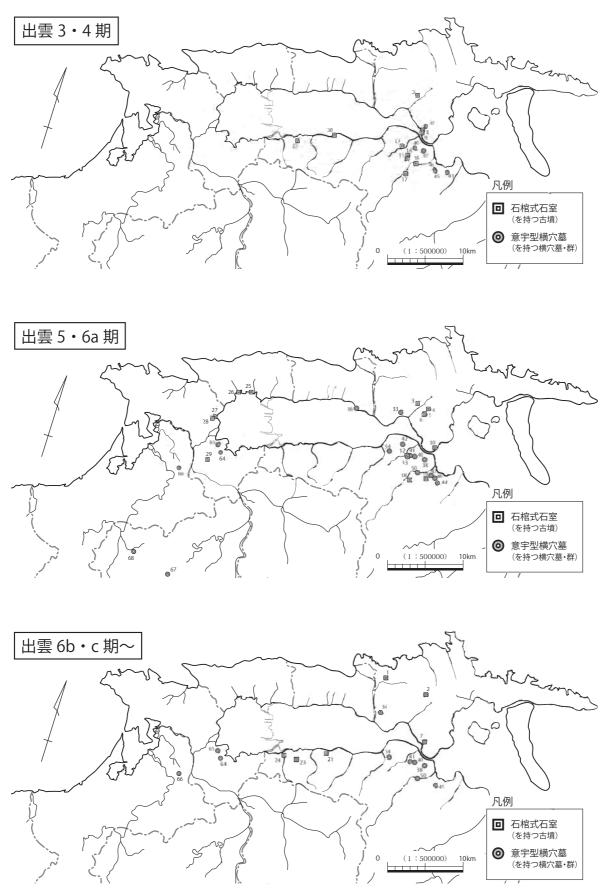


第262図 東西出雲における石棺式石室と意字型横穴墓の分布状況(1:400,000)

(2) 分布状況の時系列的変遷

石棺式石室と意宇型横穴墓の様相について全体的な分布状況を確認したが、次にそれらを出雲3・4期(6世紀後半)、出雲5・6a期、出雲6b・c期の3つの時期区分に分けて状況を整理し 2)、その時系列的な広がりを検討してみたい(第263図)。

出雲3・4期(第263図上) この時期に石棺式石室が成立したと考えられ、意宇川流域・馬橋川流域 や大橋川北岸域を中心に石棺式石室を有する古墳が数多く構築される。また、宍道町周辺にも石棺式 石室が認められ、比較的早い段階で出雲西部近くまで影響が波及していたようである。しかし、出雲



第263図 石棺式石室・意宇型横穴墓の分布状況と時系列的変遷 (時期判別ができるもの) (1/500,000)

西部では石棺式石室と意字型横穴墓が認められず、出雲西部への導入には至らない。

意字型横穴墓を有する横穴墓群は、石棺式石室を持つ古墳の近くに出現する。その展開の中心は意 字川流域ではあるが、時期不明の意字型横穴墓が宍道町周辺に点在しており、この地域でも石棺式石 室とともに営まれた意字型横穴墓もあったものと思われる。

出雲5・6a期(第263図中央) 石棺式石室は引き続き意宇川流域・馬橋川流域で盛んに営まれる一方で、出雲3・4期に石棺式石室が散見された朝酌川上流域で増加し、大橋川北岸域では減少するといった地域的な差異が生じてくる。この頃に出雲西部で石棺式石室の影響を受けたと思われる横穴式石室が出現し、出雲西部にも出雲東部の影響が波及した時期であった。ただし、これらの石室形態や構造には石棺式石室をストレートに反映したものはなく(角田・西尾1987・1989など)、東西出雲の隣接地域にあたる入海(宍道湖)の北岸地域(秋鹿郡)ではこの時期に比定される石棺式石室は現在のところ認められず、入海南岸の宍道町周辺でも明確な時期の分かるものは確認されていない。そのため、出雲東部の直接的な影響のもとに築かれたのではなく、情報として受容した石棺式石室の要素を部分的に取り込んだと解されよう。

一方, 意字型横穴墓については, 出雲3・4期に意字型横穴墓が出現した横穴墓群の中で引き続き 形成されるほかに, 石棺式石室が造営される周辺で新たに意字型横穴墓を採用する横穴墓群が顕著に 増加しており, 意字型横穴墓の盛行期と言ってよい。出雲西部でもこの頃には上塩冶横穴墓群をはじ め, 意字型横穴墓の形態的特徴を一部で採用する横穴墓が散見され, 東西出雲で意字型横穴墓が広く 展開する。しかし, 出雲西部では前項で検討したように, 意字型横穴墓の要素を取り込みつつも, 従 来からのアーチ系統の天井形態を持つなど出雲西部の特徴が優勢を占める。この出雲西部における意 字型横穴墓の表現形態は, 出雲東部から流入してきた意字型横穴墓の要素を在地の形態に部分的に取 り込むことで顕在化したと考えたい。

出雲6b・c 期以降(第263図下) この時期は石室築造の終焉期であり、それまでの状況が一変し、大橋川北岸域には石棺式石室を持つ古墳が単独で見られるが、意宇川流域からは姿を消す。対照的に朝酌川上流域や佐陀川流域、宍道町周辺など、それまでの中心地域からみた周縁エリアに点在することが特徴的である。型式学的視点から見ると、典型的な石棺式石室の形態から簡素化・形骸化した形態へと変容が生じている(赤澤・廣江1987、坂本2012など)。こうした動向の背景には、前代までの規制の緩和や畿内政権の関与を想定する見解(桑原・丹羽野1987など)や、律令体制への段階的な移行に伴う結果との見方(仁木2010)があるが、いずれにしろ既存の社会的枠組みから変容を遂げる過渡期であったことと関連すると思われる。なお出雲西部では、この時期の石棺式石室が見られず、前時期の石棺式石室の様相は引き継がれなかったようである。

出雲東部の意宇型横穴墓は、石棺式石室を造営する古墳が意宇川流域や馬橋川流域から姿を消しても既存の横穴墓群内で引き続き構築されるが、その数は少なく、またこの時期から新しく意宇型横穴墓を採用する横穴墓群も減少する。出雲西部でも意宇型横穴墓に類似した形態を見せる横穴墓群は少なくなり、石棺式石室の動向と連動していると言えよう。

(3) 東西出雲の石棺式石室と意字型横穴墓

これまで東西出雲における石棺式石室と意宇型横穴墓の分布状況を時系列的にトレースしてきたが、端的にまとめると次のように集約される。

まず、出雲3・4期に出雲東部で出現した石棺式石室と意宇型横穴墓は、宍道町周辺にまでその情報が伝播したものと見られ、続く出雲5・6a期になると、出雲東部では石棺式石室・意宇型横穴墓が盛行し、出雲西部でも石棺式石室の影響を受けた横穴式石室や、意宇型横穴墓に一部共通する形態を持つ横穴墓が出現する。しかし、その形態は出雲東部の意宇型横穴墓の要素を部分的に取り入れたものであった。その後、出雲6b・c期以降では、古墳築造の終焉に伴い石棺式石室や意宇型横穴墓は出雲東部で急速に減少し、出雲西部でもそれらの影響はほとんど見られなくなってしまう。

このようにして見ると、出雲 6 b・c 期頃を中心に意字型横穴墓の形態的特徴を持つ横穴墓を多数築いたと想定される杉沢横穴墓群の存在が改めて強調される。次項ではこれまでの議論の内容を整理し、 杉沢横穴墓群の位置づけとそこから導き出される社会背景について考察を試みたい。

第4項 意字型横穴墓と古墳時代終末期の社会

(1) 杉沢横穴墓群の出現とその背景

前項までの検討の中で,意宇型横穴墓の影響が出雲西部で確認できるのは出雲5・6a期で,石棺式石室の影響を受けた古墳も同時に出現するため,この時期に出雲東部からの一連の情報が流入し,上塩冶横穴墓群など一部で意宇型横穴墓の形態を取り入れたと考えられる。一方,杉沢横穴墓群は一部がその時期に遡る可能性もあるが,多くはそれより降る時期に築かれたと想定した。しかし,その時期には周辺地域に石棺式石室を持つ古墳が存在せず,出雲5・6a期の動向とは別の視点から考える必要がある。

杉沢横穴墓群の特質は、意宇型横穴墓の要素を群内全体で斉一的に保持し、玄室成形の技法に出雲東部の影響が見られる特徴を持つ反面、同地域内の平野横穴墓群で見られた出雲西部の特徴を多く引き継ぎ、地域内での横穴墓形態の時期的変遷のなかに位置付けられるという二面性を備えた点である。つまり、出雲東部の外来的な要素と出雲西部の在地的な要素を折衷して創出されたと考えてよいが、玄室の天井形態にドーム系の要素が認められるなど、出雲東部の特徴が色濃く反映される。

その出雲東部からの影響については、出雲5・6a期で見られた様相とやや性質が異なる。出雲5・6a期では、意字型横穴墓の影響により羨道と玄門の区別をもつ2重構造を表現する横穴墓が出現するが、羨道の空間が狭小なものや片袖の羨門のみを造り付ける横穴墓が存在するなど、出雲東部の意字型横穴墓と比べて形態が不完全であり、またその存在は各群内で単発的なものにとどまっている。

一方、杉沢横穴墓群では、ほとんどの横穴墓で意宇型横穴墓の要素を保有しており、特に西群には 羨道や玄門が丁寧に作出されて出雲東部の意宇型横穴墓と比肩するほど精美な造りとなる横穴墓もあ る。このように見ると、出雲5・6a期に出雲西部で模倣的・散発的に造られた横穴墓に比べて、出 雲6b・c期以降を主として築かれた杉沢横穴墓群のほうが意宇型横穴墓としての完成度は高く、出 雲東部で意宇型横穴墓の造営に直接携わった人々の関与をうかがわせる。すなわち、前者の時期は出 雲東部からの意宇型横穴墓の情報受容のみにとどまり、後者の時期は造墓に関わった人々の直接的な 移動・交流がその背景にあったのかもしれない。

(2) 意字型横穴墓の展開からみた古墳時代終末期の社会

では、なぜ杉沢横穴墓群に多数の意字型横穴墓が採用されたのかという問題が残るが、それは古墳時代終末期の社会背景にその一因があるように思われる。

かつて、出雲東部における意字型横穴墓は、石棺式石室を中心とした墓制の階層構造の一形態として統一的な支配秩序・規制のもとに成立・展開したと想定されており(桑原・丹羽野1987、西尾・丹羽野1991、西尾2012など)、石棺式石室を模した精美で整った意字型横穴墓が多い。一方、その頃出雲西部では、意字型横穴墓の形態の表現が一部で見られるが、出雲西部の特徴を残すものが主流を占める。石棺式石室の盛行期に東西出雲の間で一定の情報交流はあったものの、出雲東部とは異なる秩序体制のもとで存立していたためか、出雲西部には限定的な情報の流入にとどまり、意字型横穴墓の要素の一部を在地の形態に組み込むことで発現したと考えられる。

その後、出雲6b・c 期以降は出雲東部で石棺式石室を含めた石室造営が終焉を迎え、それまでの古墳社会から新しい律令体制へと転換しようとしていた過渡期であり、その大きな社会変動に対する揺らぎが様々な局面で発生していたと推察される。この時期には出雲東部の意宇川流域とその周辺では石棺式石室が消失して古墳の構築もほとんど見られなくなり、律令体制への移行を遂げたものと考えられる。それにより出雲東部で石棺式石室・意宇型横穴墓の構築に対する旧来の政治的な秩序・規制が解体し、それまで主に限定的・間接的な情報交流にとどまっていた出雲西部との直接的な交流や人々の移動が盛んになったものと推測される。それは、この時期の石棺式石室が簡素化・形骸化しながらも、かつての中心地から離れた地域に散見されることからも読み取れる。

また、この時期には前庭部での墓前祭祀が盛んに行われるようになり、平野横穴墓群や杉沢横穴墓群でもその痕跡が認められる。墓前祭祀については様々な捉え方が可能であるが、墓前祭祀の地域的検討を進めた渡邊邦雄氏は、丹後地域への大和政権の関与に伴い在地の共同体の共同性を維持するために墓前祭祀が発達したことを強調する(渡邊2004など)。こうした動向は出雲地方でも例外ではなく、律令体制へと社会が大きく揺れ動く中で、それまで地域内で構築してきた系譜的な共同性を再確認・再生産しようとする意識が働いたことは想像に難くない。

そのような状況下において、墓前祭祀の場として前庭部を広く設ける横穴墓構築の機運の高まりを受け、意宇型横穴墓の形態が一部で採用されたのかもしれない。その場合、既存の群内に追加して形成することもあれば、新たな場所に横穴墓群を構築する際に始めから墓前祭祀を執り行える横穴墓を順次造営していった状況も予想されよう。この頃には、羨道は墓前祭祀を執り行う上で必要な空間へと変容し、また意宇型横穴墓も出雲東部の支配秩序を象徴するものではなく、墓前祭祀を執り行うことが可能な横穴墓の一形態として受容されていたのではなかろうか。杉沢横穴墓群では、硯として用いられた坏蓋が墓前祭祀に使用されたものとして前庭部で確認され、その中には異なる横穴墓間で同

じ坏蓋硯の破片を分有する状況が見て取れたが、それは旧来からの地域を基盤とする氏族集団が新たな律令体制へと組み込まれても、それまでに在地で醸成された系譜関係に基づく紐帯を再確認・再生産しようとしていた姿を象徴するものであろう。

(3) 出雲西部における意字型横穴幕の展開とその意義

杉沢横穴墓群は、出雲西部で意宇型横穴墓を斉一的に有する特異な横穴墓群として目に映るが、地域内での比較検討や出雲西部での意宇型横穴墓の様相を時系列的に紐解き、出雲東部との関連性を詳しく検討すると、その出現背景が浮かび上がってきた。

すなわち、出雲5・6a期に出雲東部からの情報の受容により、出雲西部で意字型横穴墓の形態が一部出現するが、出雲東部での石棺式石室・意字型横穴墓の統一的規制によって限定的にしか流入せず、完全な形態とはならなかったと思われる。しかし、出雲6b・c期以降、段階的に律令体制へと移行するなかで、それまでの地域内における系譜的な共同性を意識的に再確認・再生産するために墓前祭祀が盛んになり、それに対応する形で前庭部が広く造り付けられた横穴墓が採用されることになる。さらに旧来の政治的な秩序・規制が解かれた出雲東部からの人々の移動・交流を含めた直接的な受容に伴い、意字型横穴墓もまた政治的な秩序の象徴ではなく、墓前祭祀を執り行うための横穴墓の一形態として受け入れられたと考えられる。出雲6b・c期以降にその多くが築かれたと想定される杉沢横穴墓群では、構築開始段階からその形態を採用したのであろう。ただ、この場合においても出雲西部に広がる在地の形態的特徴を備えた造りが随所に見られ、単純に意字型横穴墓をそのまま再現したものではないことが分かる。つまり、古墳時代後期以降の東西出雲の社会情勢が意字型横穴墓の展開として鋭敏に表出され、古墳時代終末期の社会的情勢に応じて東西出雲の諸要素が邂逅・結実したものが杉沢横穴墓群ではなかったかと評価したい。

(4)おわりに 今後の課題と展望

杉沢横穴墓群を中心とした出雲西部の意字型横穴墓に焦点を当てて議論を展開し、多くの示唆的な 内容が得られたが、同時に今後に向けての課題も浮上したため、最後にそれらについて触れておく。

出雲西部では、杉沢横穴墓群の類例が他に確認できないため、今後の調査事例の増加を待って議論の内容を検証・再検討する必要がある。加えて、出雲西部には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群といった大規模横穴墓群が存在するが、これらは出雲西部での横穴墓の様相を通史的に示しており、詳細な検討によってこの地域の横穴墓の展開や当時の社会状況の解明につながると思われる。特に上塩冶横穴墓群は、出雲5・6a期以降に一部の支群で意宇型横穴墓の要素を取り込んでおり、支群ごとに性格が異なる可能性が高い。こうした地域的な様相を丹念に整理・検討することが今後求められよう。

また意宇型横穴墓について、今回は形態の定量的な分析や型式学的検討が不十分であった。出雲東部の中でも意宇型横穴墓の形態には個体差が生じており、出雲東部の意宇型横穴墓の変遷と展開を押さえた上で、杉沢横穴墓群の位置づけを再検証し、東西出雲を捉え直す必要があるだろう。

このように、地域的様相の検討に加えて横穴墓形態の定量的分析・型式学的検討を進めることが出

雲西部、ひいては東西出雲の横穴墓や古墳時代後期から終末期の社会に関する研究の方向性の一つに なると考えられる。

(幡中 光輔)

本稿をなすにあたり,西尾克己氏,角田徳幸氏,大谷晃二氏,原田敏照氏には杉沢横穴墓群の性格 を検討するなかで様々なご教示を賜った。また,稲田信氏に松江市域の分布図の基礎データ,原田敏 照氏には斐川町の横穴墓実測原図の提供を受けた。記して感謝申し上げます。

【註】

- 1) 第262・263図の石棺式石室の分布,および出雲東部の横穴墓の分布は,主に山陰横穴墓研究会(1997),坂本(2012),西尾・稲田(2013)によって示されたデータを基礎資料とし,今回新たに作成した出雲西部の横穴墓分布と合成した。
- 2) 石棺式石室・意字型横穴墓の時期は、桑原・丹羽野 (1987), 角田・西尾 (1987・1989), 大谷 (1996・2001), 角田 (1996・2008), 山陰横穴墓研究会 (1997), 坂本 (2012), 西尾・稲田 (2013) などを参照し、大谷晃二氏の出雲編年 (大谷 1994・2001) で示している。また、出雲 6 期における細分時期は、個別の報告書・文献から判断した。なお、ここでは時期が判別可能な横穴墓 (群) のみを対象としているため、時期不明のものを含めると、やや様相が異なる部分もあろう。

【参考文献】

赤澤秀則・廣江耕史 1987「石棺式石室の構造と変遷」『石棺式石室の研究 ―出雲地方を中心とする切石造り横 穴式石室の検討―』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会、215-229頁

足立克己・丹羽野裕 1984「第6章 まとめ」『高広遺跡発掘調査報告書 —和田団地造成工事に伴う発掘調査— 島根県教育委員会。215-243 頁

出雲考古学研究会 1989「松江・安部谷横穴墓群について(下)」『八雲立つ風土記の丘』No.95 島根県立八雲立 つ風土記の丘、2-9頁

出雲市教育委員会 1995『小浜山横穴墓群』

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会, 39-82頁

大谷晃二 1996「出雲東部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室 一地域性と編年の再検討一』第24回山陰考古学研究集会 山陰考古学研究会, 20-24頁

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8 集 平田市教育委員会, 43-54頁

大谷晃二・松山智弘 1999「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』田中義昭 先生退官記念事業会、95-122頁

角田徳幸 1996「出雲西部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室 — 地域性と編年の再検討 — 』第24回山陰考古学 研究集会 山陰考古学研究会、25-29頁

角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館, 72-107頁

角田徳幸・西尾克己 1987「神門郡・出雲郡」『石棺式石室の研究 一出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室 の検討一』古代の出雲を考える6、出雲考古学研究会、251-259頁

角田徳幸・西尾克己 1989「出雲西部における後期古墳文化の検討 一横穴式石室の構造と変遷を中心として一」『松江考古』第7号 松江考古学談話会,5-42頁

門脇俊彦 1980「山陰地方横穴墓序説 ―特に四注式系横穴墓の分析と時期について―」『古文化談叢』第7集 九州古文化研究会,51-68頁

桑原真二・丹羽野裕 1987「意宇郡・島根郡とその周辺」『石棺式石室の研究 ―出雲地方を中心とする切石造り 横穴式石室の検討―』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会、230-250頁

坂本豊治 2012「横穴式石室の玄門構造からみた中村1号墳」『中村1号墳』出雲市の文化財報告15, 出雲市教育委員会, 233-256頁

佐田町教育委員会 1988 『尾崎横穴群発掘調査報告書』

山陰横穴墓研究会 1997 『第7回山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓 ―その型式・変遷・地域性―』

島根県教育委員会 1980 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』

島根県教育委員会 1998『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群第7・12・22・23・33・35・36・37支群』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

宍道町教育委員会 1993 『宍道町歴史史料集(古墳時代編I)』

仁木 聡 2010「山陰地方における後期・終末期古墳の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究 —古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター、239-257頁

西尾克己ほか 2007 『斐伊川中流域における後期古墳の様相 ―横穴式石室・横穴墓集成―』

西尾克己 2012「集成 石棺式石室と意字型横穴墓」『松江市史』史料編2考古資料 松江市,824-826頁

西尾克己・丹羽野裕 1991「山陰の横穴墓 —出雲地方を中心として—」『おおいた考古 第4集 特集・日本の横 穴墓』大分県考古学会、47-62頁

西尾克己・稲田 信 2013「松江市域の横穴墓 — 意字型横穴墓を中心として—」『松江市歴史叢書』 6 松江 市教育委員会、17-28頁

蓮岡法暲 1984「第二章 原始・古代の掛合」『掛合町誌』掛合町誌刊行会。63-109頁

斐川町教育委員会 1982『堀切神庭農道整備事業に伴う御射山横穴発掘調査報告書』

斐川町教育委員会 1983『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』斐川町埋蔵文化財調査報告3

斐川町教育委員会 1984『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』斐川町埋蔵文化財調査報告4

守岡正司 1998「XI まとめ」『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群第7・12・22・23・33・

35・36・37支群』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 島根県教育委員会. 208-224頁

山本 清 1962「横穴の形式と時期について」『島根大学論集(人文科学)』11号 島根大学. 23-37頁

横山純夫 1977 「W 総括 | 『島根県埋蔵文化財調査報告書』 第Ⅲ集 島根県教育委員会。38-46 頁

渡邊邦雄 2004 「墓前祭祀から見た丹後地域の横穴墓」 『古代文化』 第56巻第2号 古代学協会, 1-17頁

【挿図出典】

第254図左:出雲市教育委員会1995より転載・加筆 第254図右:出雲考古学研究会1989より転載・加筆 第256図:原田敏照氏提供原図をトレース 第257・259図:斐川町教育委員会1983・1984より転載・加筆 第260図1・5・6:島根県教育委員会1980より転載・加筆 第260図2~4・7・8・第261図1~4:島 根県教育委員会1998より転載・加筆 第261図5:蓮岡1984より転載・加筆 第261図6:佐田町教育委員 会1988より転載・加筆

第5節 古代山陰道の推定ルート復元

第1項 はじめに

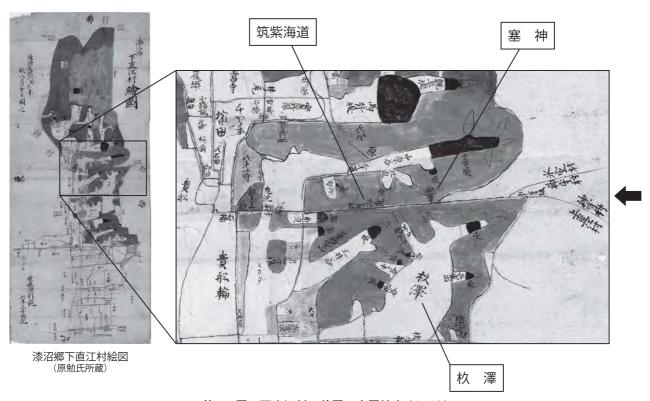
(1) 杉沢遺跡発見の道路遺構

杉沢遺跡 D 丘陵の尾根上で見つかった道路遺構は、両側に心々間距離 9 mを測る側溝を備え、直進性を志向したものであった。このことから、奈良時代に築造された駅路である古代山陰道の一部である可能性が高いと考えられる (第4章第4節)。全国的にも、発掘調査された駅路で尾根を縦断する例はないことから、本節では杉沢遺跡周辺の尾根上のルートを復元し分析を行う。

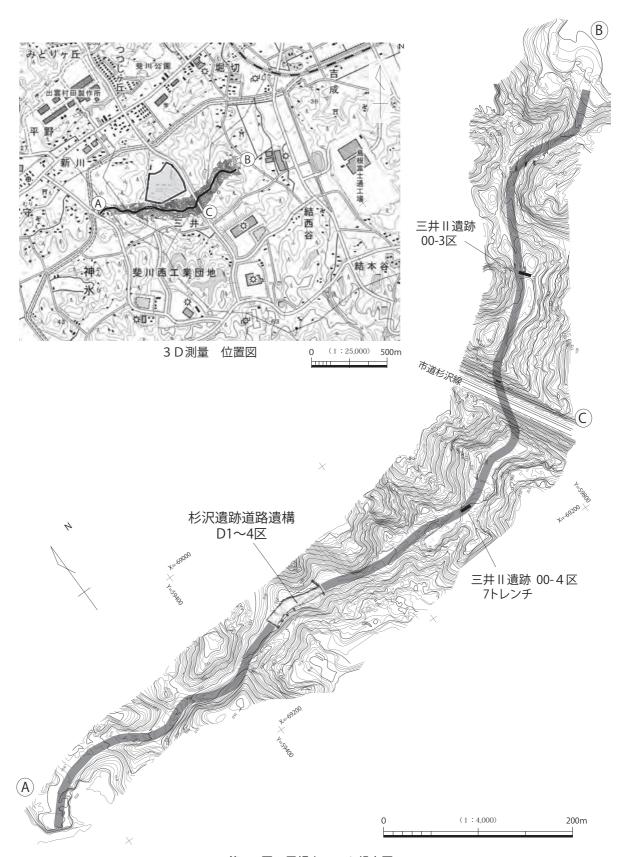
(2) 既存の研究

島根県東部の古代山陰道の推定ルートは、木本雅康が詳細な検討を加えており(木本2001・2011)、 杉沢遺跡の周辺では今回見つかった道路遺構と重なる。ルート復元の根拠の一つが江戸時代の文政6 年(1823)の『漆沼郷下直江村絵図』(原勉氏所蔵、第264図)である。この絵図にある「筑紫海道」が、 尾根上を直線的に描かれていることも古代山陰道を踏襲した結果と考えられている。この「筑紫街 (海) 道」という名称は、地元では菅原道真が大宰府へ向かう際に通ったとの伝承があることから、都から九州まで繋がる道との認識があったと考えられる。

過去の杉沢遺跡周辺の尾根上の発掘調査では、平成11・12年(1999, 2000)の調査において、明確な 遺構は検出できなかったが、時期は不明だが版築状の盛土や溝が見つかっている(斐川24)。



第264図 下直江村の絵図 右図拡大(上が南)



第265図 尾根上ルート想定図

第2項 古代山陰道のルート復元

(1) 尾根上の推定ルート

杉沢遺跡を含む丘陵尾根上の古代山陰道を復元するため、平成26年度より追加調査を行っている。 尾根上に想定される約1,000mの間について3次元レーザー測量を行い、詳細な地形図を作成した(第265図)。測量に先立ち、広範囲に下草刈りを行った結果、古代山陰道の造成工事跡と想定される切り通しの斜面等が見つかり、測量図の等高線にも表れた。

測量成果より尾根上の古代山陰道のルートを確認すると、当時の技術者が東西につながる丘陵の尾根を巧みに利用し、直進性、水平性を最大限考慮しながらルート設定した状況が伺える。

平野部ではなく尾根上を通るルートが設定されたかという点について, 地理的要素, 軍事的要素等が考えられる。杉沢遺跡は, 出雲平野に舌状に張り出した丘陵上にあり, 古代道の特徴である, 「直進性」を貫いた結果, 尾根上を通るルートが最短であったと考えることが自然であろう。

なお、尾根上の推定ルート上には三井Ⅱ遺跡があり、その調査(00-3区及び00-4区7トレンチ、第265図)においては、版築状の土層及び溝状遺構が一部確認されたが、報告書(斐川24)では古代の道路遺構であるかどうかの判断をするにはデータが不十分としている。

(2) 杉沢遺跡周囲の道路痕跡

丘陵上の杉沢遺跡を古代山陰道(駅路)が通ると確認できたので、その周囲の地形についても現地 調査を実施した。

杉沢遺跡から東へ1.4kmのところにある香取神社の北側に幅9m前後の切り通しが2ヵ所ある。こ



第266図 推定路線の空中写真 (米軍撮影1947年USA-R514-4, 46の一部)

のうち尾根の先端を一部残して道路を通した箇 所があり(第267図),その延長線は杉沢遺跡の 調査地につながる。駅路が直進性をいかに重視 したか伺える(第266図)。

西へ目を向けると、出雲郡家の関連施設として、正倉に比定される総柱建物跡などが後谷遺跡から見つかっているが、政庁域は不明である。『出雲国風土記』ではさらに西に行って斐

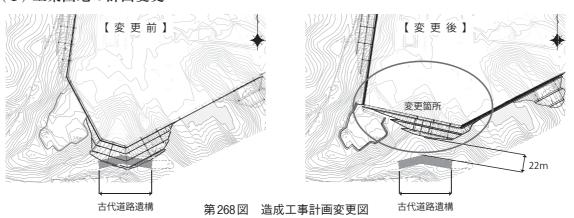


第267図 香取神社切诵し

伊川(出雲大河)に至り、神門郡家から多伎駅、石見国へとつながるが、そのルートも不明な点が多い。また、東へ向かっては、宍道駅家を経て、黒田駅家や出雲国府(松江市大草町)へと至る。出雲国府周辺では、国府跡の西 6 kmの松本古墳群(松江市乃木福富町)で切り通し状の遺構などが(島根県教育委員会1997)、揩松遺跡では側溝が見つかっている(松江市教育委員会ほか1997)。今後、古代山陰道のルートを復元するための調査を進めたい。

第3項 古代道路遺構の保存と今後

(1)工業団地の計画変更



出雲斐川中央工業団地の当初造成計画では、道路遺構の部分は掘削され法面となる予定であったが、保存決定方針を受け、文化庁からは道路遺構周辺の地形もできるだけ保存するよう指導があった。これを受け、出雲市文化財課では、遺構の北端から22mの位置を保存ラインとし、関係部署との協議を行なった。その結果、第268図に示すとおりに設計が変更され、道路遺構部分と切り通した丘陵頂部他の保存が決定した。

(2)遺構の保存

道路遺構面の保護のため、文化庁、島根県教育委員会と協議し埋戻しを行った。遺構全体が覆われるよう人力で真砂土を厚さ10cm以上敷き詰め、その上に重機で掘削土を調査前の高さまで埋め戻した。雨水による埋め戻し土の流出を防ぎ、また南側のため池・民家へその水が流れ込まないようにす





第269図 埋戻状況・シート養生(西から)

るため、 ϕ 300mmのP型U字溝を設置し、工業団地内の排水路へつないだ(第269図)。

(3) 今後の調査と課題

出雲市では、平成26年7月に「出雲市杉沢遺跡等古代道路遺構調査委員会」を立ち上げた。古代道路遺構の規模、形態等の価値を把握するための調査に関する指導を受け、平成29年度の国史跡を目指して追加調査等を行っている。平成27年度からは、延長約1,000mの丘陵尾根上を東西2区に分割し、第1期として杉沢遺跡道路遺構を含む西側650mの区間に新規3ヵ所のトレンチ調査を実施するとともに、平成12年~15年に行われた調査のトレンチ4ヵ所の再精査を行った。これらの調査成果については平成28年度末に報告書を発行する予定である。

また、課題については、古代山陰道(正西道)が杉沢遺跡を通る場合、『出雲国風土記』の記述によると、正西道(山陰道)と枉北道(きたにまがれるみち)との合流地点は出雲郡家の東の辺(ほとり)である。出雲郡家関連遺跡(小野遺跡・稲城遺跡・後谷遺跡)は杉沢遺跡南西方向にあるため(第266図)、直進性を貫いて尾根上を通した駅路と出雲郡家政庁との位置関係がどうなるのか、これも発掘調査による解明が待たれる。 (江角 健)

【参考文献】

加藤義成校注 1965 『出雲國風土記』報光社

木本雅康 2001「出雲国宍道・狭結駅間の古代駅路」『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

斐川町文化財調査報告24 斐川町教育委員会

木本雅康 2011『古代官道の歴史地理』同成社

古代交通研究会 2001 『古代交通研究』 第10号

島根県教育委員会 1997 『松本古墳群 大角山古墳群 すべりざこ古墳群』 一般国道 9 号松江道路 (西地区) 建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

島根県古代文化センター編 2015『解説出雲国風土記』

斐川町教育委員会 1996『後谷V遺跡』斐川町文化財調査報告15

福岡市教育委員会 2002 『高畑遺跡 一第18次調査 一』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006 『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』

第9章 結 語

出雲斐川中央工業団地の開発に伴い、平成11年 (1999) から開始した発掘調査は、事業の中断、そして出雲市・斐川町の合併を契機とした再開を経て、平成26年 (2014) 8月末までの足掛け16年もの長きにわたる一大事業となった。

造成予定地周辺となった斐川町直江杉沢・三井・堀切地内では、合併前の斐川町教育委員会により 複数の遺跡が調査され、弥生時代から古代に至るまで連綿と続く人々の営みの一端が捉えられてい た。そして本書に示したように、平成24年(2012)の開発再開以後、特に弥生時代中期・古墳時代終 末期~奈良時代前半のまとまった遺構・遺物(弥生集落、横穴墓群、古代道路遺構)を発見した。

弥生時代中期の弥生集落は、杉沢遺跡・杉沢II遺跡に広がる。斐川町域では、今のところ最大規模の集落遺跡となった。斐川町域に弥生時代遺跡が存在することは、荒神谷遺跡の例からも明らかだったが、集落の様相が分かる資料はごくわずかなものに限られていた。今回の成果により、荒神谷遺跡とも近接し、かつ、ほぼ同時期に位置付けられる弥生集落の存在が浮き彫りとなった。謎に包まれた青銅器埋納と当時の社会について考察するための貴重な資料が得られたといえよう。

杉沢横穴墓群では、すべての横穴墓が羨道と玄門を明確に造り分けた意宇型横穴墓の特徴をもっていた。出雲西部にありながら、出雲東部の影響を多大に受けた横穴墓群だったことが確認できた。また出土遺物から、飛鳥~奈良時代の追葬あるいは墓前祭祀が行われたことも明らかとなり、古墳時代より後の時代における横穴墓の使用を考察する上でも重要な調査例となった。

そして、杉沢遺跡 D 丘陵で発見された尾根上の道路遺構は、その稀有な立地や良好な残存状況等が注目され、古代山陰道のみならず、全国の古代道路遺構の研究にも一石を投じるものとなった。また、『出雲国風土記』に記された「正西道」にあたると考えられる重要な遺構であり、出雲市では平成25年(2013)に開発予定地の計画変更と遺構の保存を決定した。平成26年度(2014)からは調査委員会を設置するとともに範囲確認調査等を実施し、さらなる調査資料の積み上げを進めている。古代出雲の姿が記された『出雲国風土記』の世界を復元するためにも、今後の調査成果に期待したい。

以上のように、出雲斐川中央工業団地の開発に伴う一連の埋蔵文化財調査では多岐にわたる成果が 得られ、斐川地域のみならず、出雲地域の様相を明らかにする上でも大きな一歩となった。

最後に、調査に際し多大なるご理解とご協力を賜った関係機関および地元住民の皆様をはじめ、調査に関わっていただいたすべての方々に末筆ながら感謝申しあげます。

(景山真二)

付論 三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について

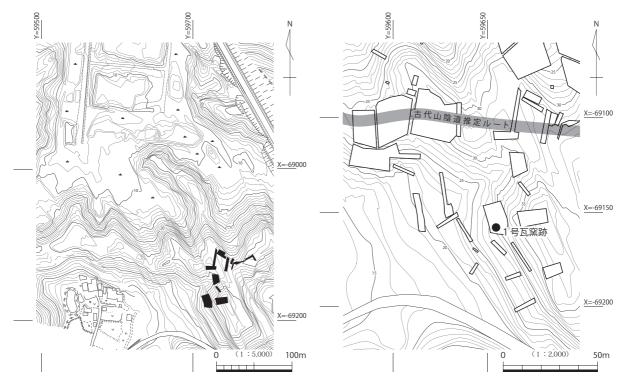
平成12~14年度(2000~2002)にかけて、斐川町教育委員会は「斐川中央工業団地」(仮称)の事前調査として、三井Ⅱ遺跡と杉沢遺跡の試掘調査(一部、本調査)を実施した(第270図)。

平成12年度 (2000) には、本書で「杉沢遺跡 D 丘陵」として報告した地区の南方で試掘調査が実施された。この15ヵ所のトレンチについては「三井 II 遺跡 00-4 区」として報告がなされており、そのうちの12トレンチで瓦窯跡の煙道が、また、その南西斜面下に位置する13トレンチで多量の瓦片が確認されるなどの成果が示された (斐川24)。

翌、平成13年度(2001)には、杉沢遺跡の中央部から西南部について、25ヵ所の試掘調査がおこなわれ(6~9月)、道路関係の遺構と推定された地点(17トレンチ)については、12月以降、さらに調査範囲を拡張して本調査が実施された(道路遺構調査区、調査時は「B地区」と呼称)。これと並行して、前年度に確認された三井 II 遺跡瓦窯跡(1号瓦窯跡)の周辺部での試掘調査も実施された(21~38トレンチ)。瓦窯跡本体の推定位置での調査はおこなわれなかったが、トレンチ12ヵ所、道路遺構調査区(本報告「杉沢遺跡D丘陵」東方)および踏査区域(「A地区」と呼称、33トレンチと35トレンチの間)で瓦片が出土した。さらに、37トレンチでは横穴墓群の存在も確実となった。なお、13年度には瓦窯跡の分布状況を確認するために磁気探査調査もおこなわれた(第270・272図)。

平成14年度(2002)には、杉沢遺跡中央部の北向き斜面が本調査となり(調査時「C地区」と呼称)、弥生時代の集落跡や古墳時代後期の遺構などの調査が進められた(調査は平成15年度(2003)に継続、未報告)。

このように、平成12・13年度(2000・2001)には、出雲西部地域で最初の瓦窯跡の調査が進められ



第270図 三井Ⅱ遺跡1号瓦窯跡関係の試掘調査位置図(左 1:5,000, 右 1:2,000)

ていたが、調査の契機となっていた工業団地開発が平成16年度(2004)に中断されたため、瓦窯跡や 出土瓦については報告がなされないまま、放置される事態となった。

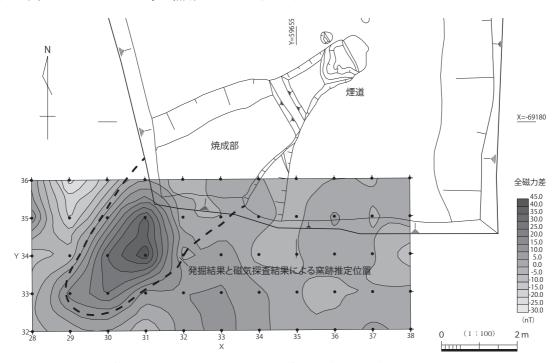
その後、平成18年(2006)に開館した荒神谷博物館では、常設展示「出雲の原郷」において三井Ⅱ遺跡出土の軒丸瓦(図版16-1)を陳列した。瓦当面下端に三角形の突起を作り出した「水切り瓦」(松下1969)である。神門寺境内廃寺(出雲市塩冶町)に代表される、出雲西部地域に特徴的な瓦であるだけでなく、「水切り瓦」の故郷たる広島県北部(備後地域)との関係を物語る重要な考古資料でもある。

三井 II 遺跡の軒丸瓦は、三次市寺町廃寺や大当瓦窯跡の軒丸瓦 (FIB型式) と同笵であり、近年、活発に議論がなされている (小林2014、妹尾2005・2007・2011、花谷2010、日浦2015)。しかし、議論は軒丸瓦に限定されている。それは瓦窯と瓦の全容が未報告だからだ。出雲西部と備後との交流史を解明するため、三井 II 遺跡の瓦の全体像を把握することは重要であり、それは古代道路遺構や周辺の官衙遺跡の評価にも大きな意味をもつであろう。本報告書で当該資料を扱う所以である。

以下では、まず試掘調査の概要と出土瓦の内容を示し、関連資料を提示して三井Ⅱ遺跡出土瓦のもつ意義を考えてみたい。

第1節 試掘調査の概要 (第270~272図 図版71 第21・22図)

杉沢遺跡 (第4章)の南辺には東西方向に延びた丘陵があり、その尾根筋に沿って推定古代山陰道が縦走する (第8章第5節)。この東西方向の丘陵から南方に派生する小丘陵は、三井 II 遺跡の西端にあたっている (第270図)。先述のように、この丘陵の頂部には、平成12年度に15ヵ所で (1~13トレンチ、2・2・2・3トレンチ含む、(斐川24))、13年度には、18ヵ所で試掘調査がおこなわれた (21~38トレンチ)。まず、12トレンチの1号瓦窯跡について述べる。



第271図 1号瓦窯跡実測図と磁気探査成果の合成図(1:100)

第1項 1号瓦窯跡 (第271図)

平成12年度(2000)の12トレンチで煙道と窯体の一部が確認された、地山刳り抜きの窖窯である。調査時に窯跡と認識されず(斐川24 57頁)、床面に調査が及んでいないこと(同51頁)から、1号瓦窯跡は窯体幅約2mの窖窯であること以上の情報はなく、床に階があるかどうかも不詳。

翌2001年には、ほかにも窯跡があるかどうかを確認するため、磁気探査およびレーダー探査による調査がおこなわれた 1)。その結果、①試掘調査で窯体の一部が確認されている窯跡は、斜面方向に延びており周囲よりも高い値(全磁力差)を示す。磁気異常の形状は窯跡に沿っているものと考えられる。全磁力差は $20\sim40$ nT (ナノテスラ)である。②確認されている窯跡以外の場所では、全磁力差は ±10 nT 以下である。本調査地には、窯体の一部が確認されている窯跡以外は存在しないものと推測する、と報告された(業務報告書5頁)。

①の状況は業務報告書に添付された「図 4-4」に示されており、それを浄書したのが第271図である。 1 号窯跡の煙道から全磁力差20nT以上の範囲までの距離は、約10m である。

第2項 試掘調査における瓦の出土傾向(第272図 第21表)

出土瓦は、トレンチごとに軒丸瓦、丸瓦、平瓦等に分類し、種類ごとに点数と重量を計測した。その中から詳細な観察が可能な資料を抽出した。その結果、出土した瓦はおよそ3,300点、375kgと集計できた。当然、1号瓦窯跡を中心に分布しているが、そこから離れた地点にも分布している。ここ

70 I S — T E ZON FVINING EN L'ON EX								
群	調査区名	規模 (㎡)	瓦出土点数	出土重量 (g)	概要			
	12トレンチ	141	12	1,996	1号瓦窯跡煙道 (既報告)			
[13トレンチ	3	29	5,694	1号瓦窯跡灰原 軒丸瓦・鴟尾 (既報告)			
	23トレンチ	17	5	1,440	鴟尾 須恵器·土師器少量			
I	28トレンチ	20	1	290	瓦·須恵器各1点			
	26トレンチ	21	565	118,219	1号瓦窯跡の下方 軒丸瓦・鴟尾・窯構築材あり			
	小計	202	612	127,639	3.0点·632g∕㎡			
	32トレンチ	28	1,992	182,450	単一層から多量出土 軒丸瓦・鴟尾			
п	33トレンチ	60	408	377,726	平瓦多量 摩滅した流れ込み資料 鴟尾			
	34トレンチ	26	8	1,635	須恵器(出雲6期以降)共伴			
	35トレンチ	34	22	1,630	平瓦のみ			
	A地区	360	195	18,180	表面採取 (面積は概数) 鴟尾			
	小計	508	2,625	241,621	5.2点•476g∕㎡			
	24トレンチ	2	1	680	須恵器·土師器少量			
	25トレンチ	4	2	115	須恵器·土師器			
	36トレンチ	18	16	1,120	平瓦のみ			
ш	37トレンチ	280	10	700	横穴墓確認トレンチ。多量の須恵器に少量の瓦が混在			
	38トレンチ	22	18	1,235	横穴墓は未確認だが 多量の須恵器			
	B地区	1,300	18	1,815	古代道路関係(面積は概数)			
	小計	1626	65	5,665	0.04点·3.5g∕㎡			
	9トレンチ	141	5	199	鴟尾			
総計 2477 3,307 375,124								

第21表 三井Ⅱ遺跡試掘調査出土瓦数量表

では、1号瓦窯跡の南西の一画に設定された12・13・23・26・28の各トレンチを「I 群」、瓦窯西方の谷部に設定された32~35トレンチおよびA地区を「II 群」、そしてさらにその西北に位置する36~38トレンチおよびB地区と24・25トレンチを「III群」として報告する(第21表,第272図)。

I 群では、1号瓦窯跡の灰原想定位置に設定された $13\cdot 26$ トレンチでの出土量が突出している。この2つのトレンチで、594点・123.9 kgが出土した。点数・重量とも I 群全体の97% に達する。 I 群全体では、1 ㎡あたり破片数にして3.0点、重量では631.8gの瓦が出土したが、 $13\cdot 26$ トレンチに限れば、1 ㎡あたり破片数25.8点、重量5,163.0gもある。重量でみれば、1 ㎡ごとに平瓦が1 枚ずつ出土した勘定になる。

Ⅱ群は、1号瓦窯跡の北側にある東西方向の谷部に位置する。そのうち「A地区」としたエリアは表面採集だけなので、 I 群との単純な比較はできないが、1 ㎡あたり破片数で5.2点、重量では47.5gが出土している。破片数で I 群を超えるのは、細片化した資料が多いためであろう。 II 群では、32トレンチでの出土量が突出し(破片数・重量とも76%)、この調査区に限れば、1 ㎡あたり破片数71.1点、重量で6,516.1gにもなり、I 群の13・26トレンチを上回る。平成13年度の磁気探査の範囲はここに及んでいないが、32トレンチが 1 号瓦窯跡とは別個の瓦窯跡の灰原に位置していることは疑いようがない。 I 群・II 群とも軒丸瓦や鴟尾の断片が出土しており、製品の違いは認められない。

Ⅲ群は、横穴墓群の周辺地区である。この横穴墓群は、出土須恵器から出雲4期から5期(6世紀末から7世紀前半)に築造されている。瓦生産が横穴墓への追葬に関係するかどうかが問題だが、横穴墓の本体が調査されていないので、これは将来の課題である。

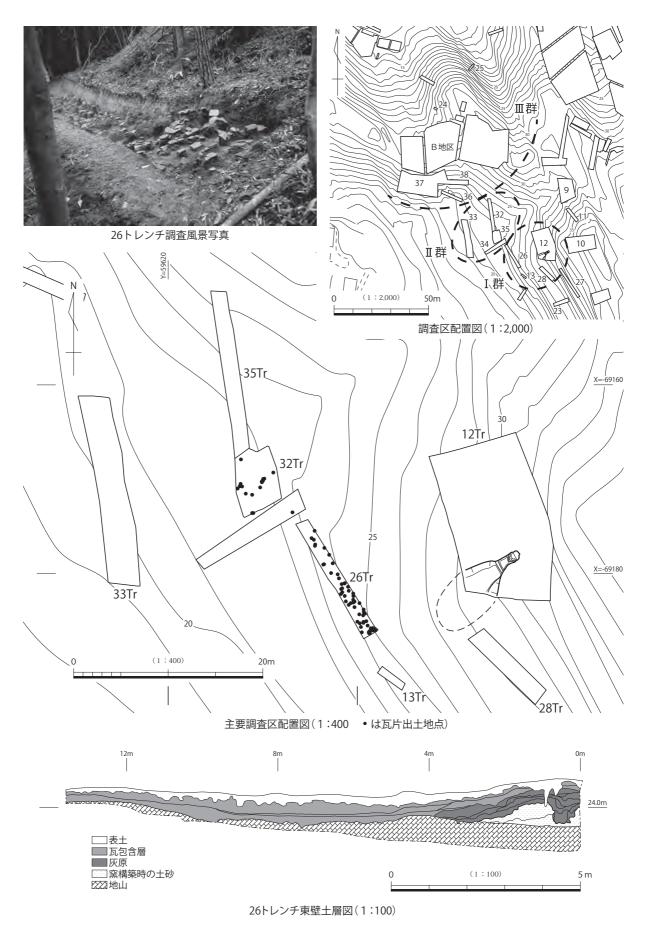
第3項 瓦を多量に出土した調査区について (第272図 図版71)

前項で示した I 群の26トレンチと、Ⅱ 群の32・33の各トレンチでは、400点から2,000点に近い瓦 片が出土した。本項では、これら3つのトレンチについて概要を示す。

(1) 26 トレンチ

1号瓦窯跡の焚口の想定位置に直交するよう設定された南北方向のトレンチ。長さ14m,幅1m。 瓦窯本体の確認はできなかったが、南東端部には窯構築時に発生したと推定される地山由来の土砂 の堆積(第272図)や、灰原と考えられる土層の堆積(第272図)が認められた。土層の堆積を 見ると、トレンチ南東隅から4m付近までには、北側の谷に向かって傾斜する灰原が形成される。そ の北西側、4~10m付近まで平坦面が形成されている。関係する遺構はなかったものの、灰原の北 側に作業面が設けられていた可能性はある。また、この平坦面の下層には硬く締まった平坦な土層が あったので、瓦の搬出路や通路として機能していたとも考えられる。瓦片は包含層から出土し、瓦窯 本体に近い灰原に集中している。

出土遺物の中には、熱を受けたことによってガラス質が析出した平瓦片がある。表面には須恵器の 底部と考えられる環状の痕跡が観察できることから、窯の構築材あるいは置台に転用されたものであ



第272図 三井Ⅱ遺跡調査区配置図(1:2,000)および26・32・33トレンチ平面図(1:400), 土層図(1:100)

トレンチ・	平瓦		丸瓦		軒丸瓦		計測その他(鴟尾・磚・窯材)		非計測	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
26	219	72,802	37	7,050	7	780	23	17,423	279	20,164
32	283	78,725	12	1,350	4	145	5	450	1,688	101,780
33	147	24,380	1	55	0	0	2	421	258	12,420
小計	649	175,907	50	8,455	11	925	30	18,294	2,225	134,364
百分比	87.0	86.4	6.7	4.2	1.5	0.5	4.1	9.0	総計	
			計測分	合計	746	203,581	2,965	337,945		

第22表 26・32・33トレンチの瓦集計表

ろう (図版71-a)。また、26トレンチからは変形した須恵器が数点出土しており、須恵器窯としても機能していたらしい (図版71-b)。

(2)32トレンチ

26トレンチの北西 3 mに位置する方形のトレンチ (6 m×5 m) である。瓦片はトレンチの西半に集中していた。出土した瓦の 9 割は平瓦で、凹面または凸面が面をなすように敷き詰められた状態で出土した。

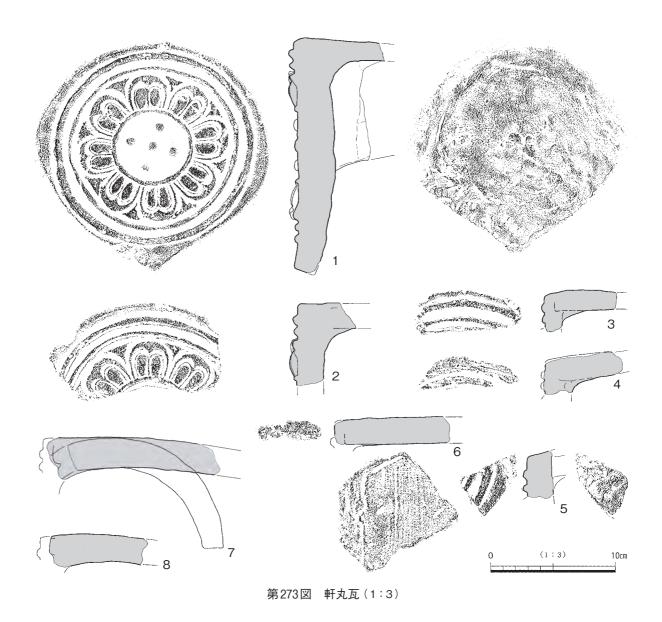
(3)33トレンチ

32トレンチから斜面を 2 m程度下った位置に設けられた、長さ 20m、幅 3 m ほどのトレンチである。調査区としては谷部の最も低いところにある。瓦はトレンチ北西部の平坦面上から集中して出土した。32トレンチと同様にほとんどが平瓦であったが、破片が小さく、かつ全体的に摩滅が著しい。谷部に廃棄された瓦が転落し、再堆積したものであろう。

(4) 3つのトレンチから出土した瓦の構成 (第22表)

 $26\cdot 32\cdot 33$ トレンチは、最も多量の瓦を出土した調査区である。その種類は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、 鴟尾、磚その他がある。この3調査区に出土瓦によって、三井 II 遺跡で生産された瓦の構成比を知る ことができる。計測は、分類できたものと不可能なもの(第22表で「非計測」と表示)にわけておこなっ た。これによると、平瓦が点数・重量とも計測できた資料の86~88%を占めており、丸瓦の13倍(点 数比)あるいは20.8倍(重量比)に及ぶ。平瓦と丸瓦の1個体重量の差を考慮しても、平瓦の多さが極 めて顕著である。

これが、①平瓦を葺いたのちに丸瓦を並べるという瓦葺きの手順の差が反映されたと考える。のか、②平瓦を熨斗瓦とみて、棟瓦の構成と考えるのか、だが、大型の鴟尾が合わせて焼かれていることを考慮するならば、②はやや考えにくいかもしれない。ただ、①の類例を知らない。



第2節 三井Ⅱ遺跡の瓦磚類 (第273~280図 図版16・68~71)

出土瓦磚類について既報告分を含めて報告する。調査区(26トレンチ)出土須恵器も図示する。

第1項 軒丸瓦(第273図 図版16・68)

軒丸瓦は、外縁部だけの小片を含めて6点が出土した。ほかに瓦当部との接合部とわかる破片が2点ある。神門寺境内廃寺1型式とは同紋だが異笵であり、備後寺町廃寺(三次市)などと同笵である。

第273図1は、瓦当部が完全に残る資料。瓦当部の下端を尖らせた「水切り瓦」(松下1969)であり、 紋様は圏線紋縁複弁八弁蓮華紋。大きく平坦な中房に、1+4の蓮子をおく。外側の蓮子は、ほぼ間 弁に対応する位置にある。中房周囲の圏線はやや太い。丸みの強い蓮弁は、弁端に三角形の反転表現 はあるものの、照りむくりは弱い。複子葉はやや大型で、細い輪郭線をともなう。間弁は小さい楔形 である。内外区をやや太い圏線で区画し、その外側に太い圏線を1条巡らせる。 寺町廃寺などとの同笵関係の前後については諸説あったが(花谷2010, 妹尾2011, 小林2014), 日浦 裕子氏の見解(日浦2015)を鉄案とする。

瓦当裏面は、ユビオサエのあとをナデ調整。丸瓦接合部の内面は、瓦の周に沿ったナデ。瓦当側面は未調整でカセ型の圧迫痕が残るようにみえる。丸瓦部は約5cmが残り、内面接合粘土は少量。丸瓦先端の加工手法は不明。丸瓦凸面はタテナデ調整。瓦当径18cm。26トレンチ出土。

2は、蓮弁3弁が残る弁区から外縁部の破片²⁾。丸瓦部が残っており、瓦当紋様に対する丸瓦接合位置は第273図1と一致する。1号瓦窯跡の西方にある13トレンチ出土。

 $3\sim6$ は、外縁部のみが残る資料。5 は丸瓦の側辺位置と判明するが、ほかは部位を特定できない。 4 は、丸瓦凹面をわずかにヘラケズリするようだが、 $3\cdot5$ は凹面のヘラケズリはなく、6 の丸瓦部 凹面には布圧痕が残る。 $1\sim6$ のすべてに共通するが、瓦当面と丸瓦部凸面との断面形は、ほぼ直角 をなしており、凸面側の接合粘土はごくわずかであるか、あるいは丸瓦端面の凸面側に面取りのヘラ ケズリがありそのくぼみに接合粘土を張り付けるか、のどちらかであろう。刻み目は観察されなかっ た。 $3\sim6$ ともに26 トレンチ出土。

7と8は、瓦当面を欠損した丸瓦接合部の断片。丸瓦先端の加工手法は十分には判明しない。7は B地区出土、8は26トレンチ出土。

第2項 丸瓦(第274図 図版68)

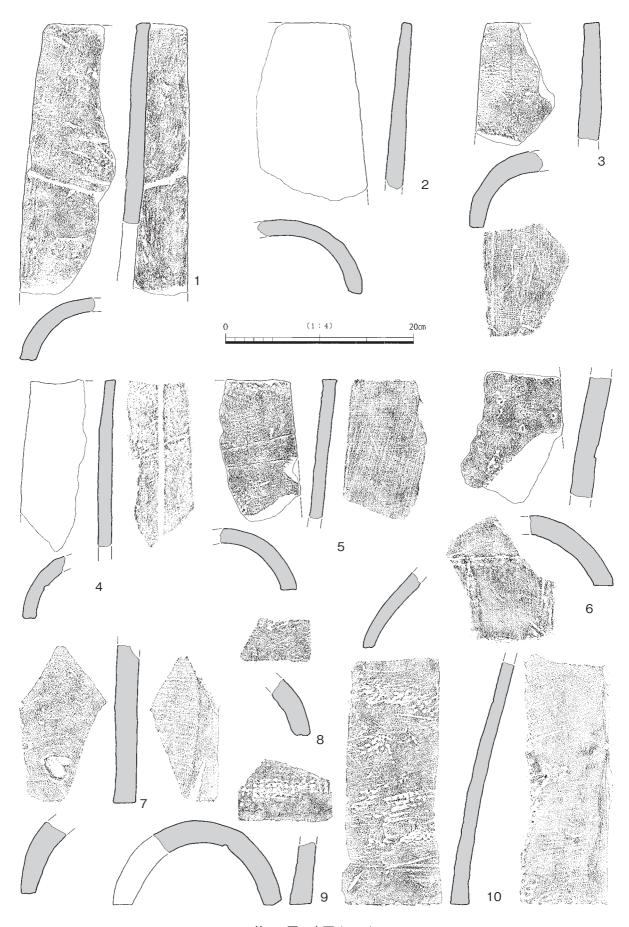
すべて行基丸瓦(無段式)であり、玉縁丸瓦(有段式)は1点も確認しなかった。また完形品は出土 しなかった。

 $1\sim5$ は狭端を含む破片、 $7\sim10$ は広端を含む破片。凸面は格子叩き目をヨコナデ調整でほぼスリ消す。叩き目は、木目平行直交刻線叩き板にほぼ限られた。凸面調整にはわずかに板ナデ調整がある(5)。側面調整は、破面調整をしない a 手法 $(4\cdot8\sim10$ 、大脇 1991) または、破面だけをヘラケズリする b 手法 $(1\cdot3\cdot5\cdot7)$ だが、截面とも調整する c 手法 (6) もまれにある。

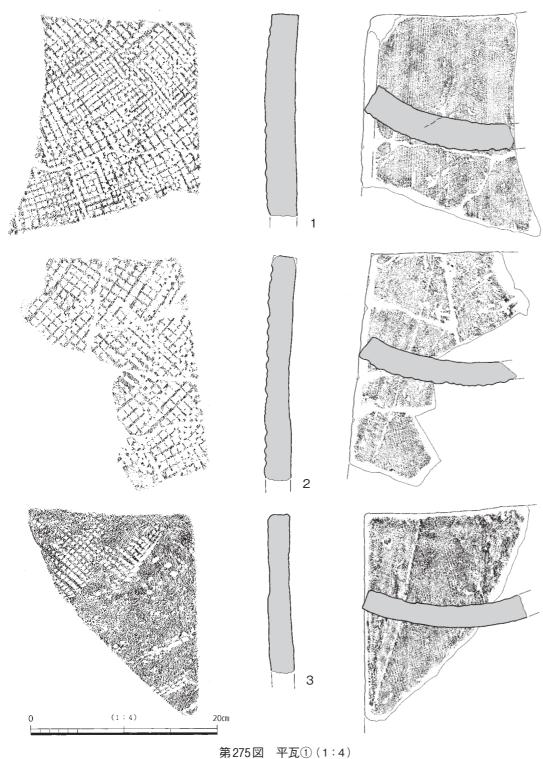
凹面は基本的に未調整で、側辺沿いに面取りのヘラケズリを加えるものが多い。模骨は一木のもので、糸切り痕を残す粘土板巻き付け作りである。3のように狭端部凹面を狭く面取りするものもあるが、ないものが多数を占める。4は、分割界線と実際の分割位置とがずれたものであろう。6は、凹面に丁字形の布袋の綴じ合せ痕を残す。9の復元径は約18cm。10は、凹面に布袋の綴じ合せ痕があり、そこで割れている。変形して扁平になっている。

第3項 平瓦(第275~277図 図版69)

平瓦は、凸面に調整のないA類と、ヨコナデ調整を加えるB類とに分類できる。ともに糸切り痕と 粘土板合わせ目がある粘土板桶巻き作りである。ただし、A類の布袋綴じ合せ痕(第275図2)と、B 類のそれ(第276図1・4、第277図1・3)は同一の可能性が高く、瓦製作具を共有する瓦工人(あるい

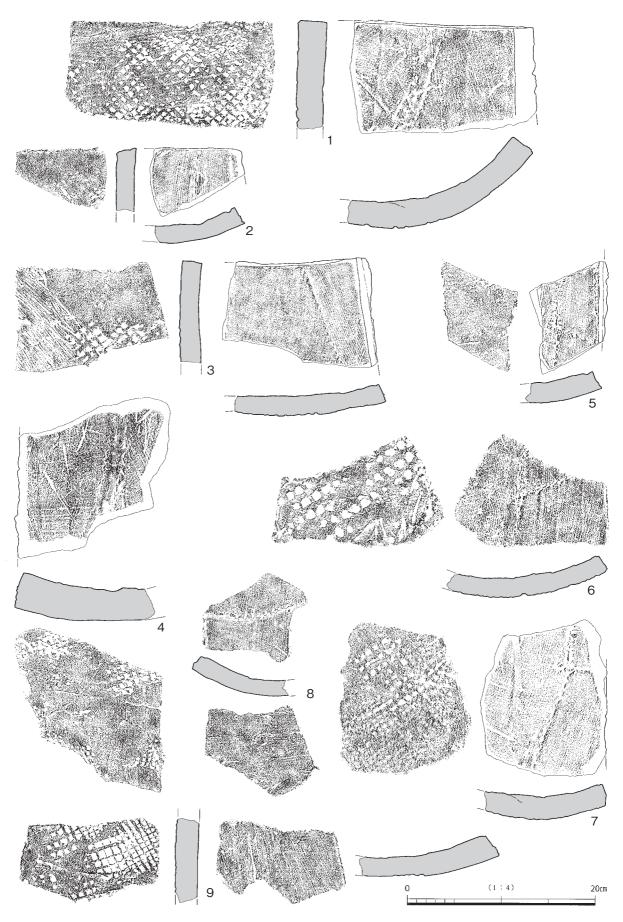


第274図 丸瓦(1:4)

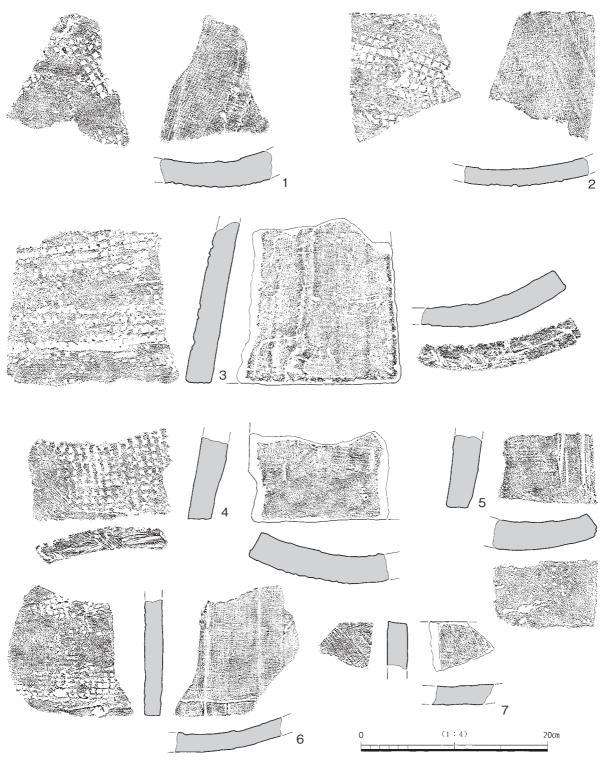


は瓦工人グループ)の違いに繋がるとまではいえない。側面調整は、破面調整のない a 手法が80%と 卓越する。広端部凹面に面取りのヘラケズリを欠くものが多く、狭端や側辺の面取りごく稀。

第275図1・2は、格子(木目平行直交刻線)叩き目を残すA類平瓦。叩き板は同一である。叩き目 は叩き締めの円弧を描く。ともに側面調整をおこなわないa手法。凹面の狭端や側辺にも面取りのへ ラケズリはない。1には、粘土板合わせ目Sがあるが、接合部にもナデなどの調整はなされていない。 2の凹面には、布袋の綴じ合せ痕がある。綴じ合わされた布端を、布袋の内側で逆時計回り方向に折



第276図 平瓦②(1:4)



第277図 平瓦③(1:4)

り、それをまつり縫いで留め付けている。1・2とも、狭端や側辺に沿った面取りはない。

第275図3および第276・277図は、B類平瓦。凸面にヨコナデ調整を加えることを除けば、A類との違いはあまりない。

第276図1・4は、凹面に同じ布袋綴じ合せ痕をもつ。第276図1には粘土板合わせ目Sがある。第276図2の狭端部凹面には、ダーツ (つまみ縫い)の圧痕がある。3は、凸面に無紋の叩き板による

補足叩きの痕跡が細かな筋状の圧痕として残る。凹面には布袋綴じ合せ痕があり、側辺には分割界線が残る。 $5\sim8$ は、凹面にT字状綴じ合わせ痕が残る断片。6の叩き目は7より大きいので叩き板が違うだろう。6と8には分割界線が、7には粘土板合わせ目Zがある。9の凸面には、格子の大きさが異なる2種の叩き目が重複する。また、粘土板合わせ目Zがある。

第277図1・3の凹面には布袋綴じ合せ痕がある。第275図2や第276図1・4と同一であろう。 4の広端面には、藁座の痕跡³⁾がある。

第277図7は、大きな長方形の叩き目。数はごく少ない。

第4項 鴟尾(第278~280図 図版16·70)

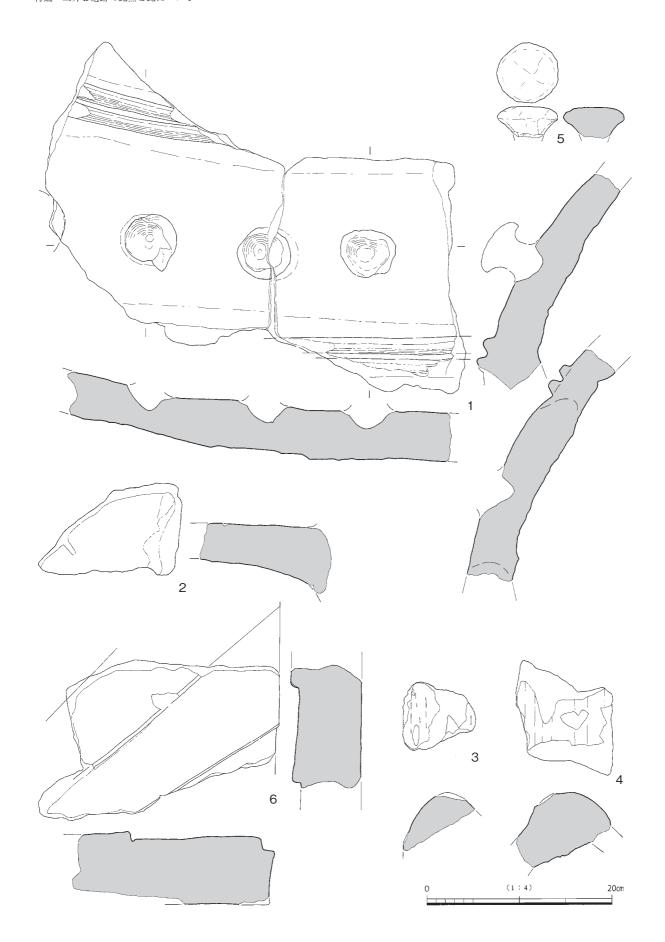
三井Ⅱ遺跡瓦窯跡からは、胴部側面に笠形珠紋を並べる特異な鴟尾が出土している。旧報告(斐川24)で器種不詳とされた鴟尾片(PL.74-33,34、PL161)も再報告する。鴟尾は破片総数40点前後あり、赤褐色軟質のものと灰色硬質のものがある。前者を第278図に、後者を第279・280図に掲げた。

第278図1は、胴部左側面の大型の破片。側面には、2条一対の貼り付け突帯が上下2段(約18cm 間隔)にあり、その中間の側面に笠型の珠紋が並ぶ。この破片では、珠紋はおよそ9cm間隔に並ぶが、すべて脱落している。同じ焼き質の笠形珠紋は1点しかない。5がそれで、直径5cm。鴟尾の胴部側面にくぼみを作って、別作りの笠形珠紋を指し込み、基部に粘土を補って固定している。

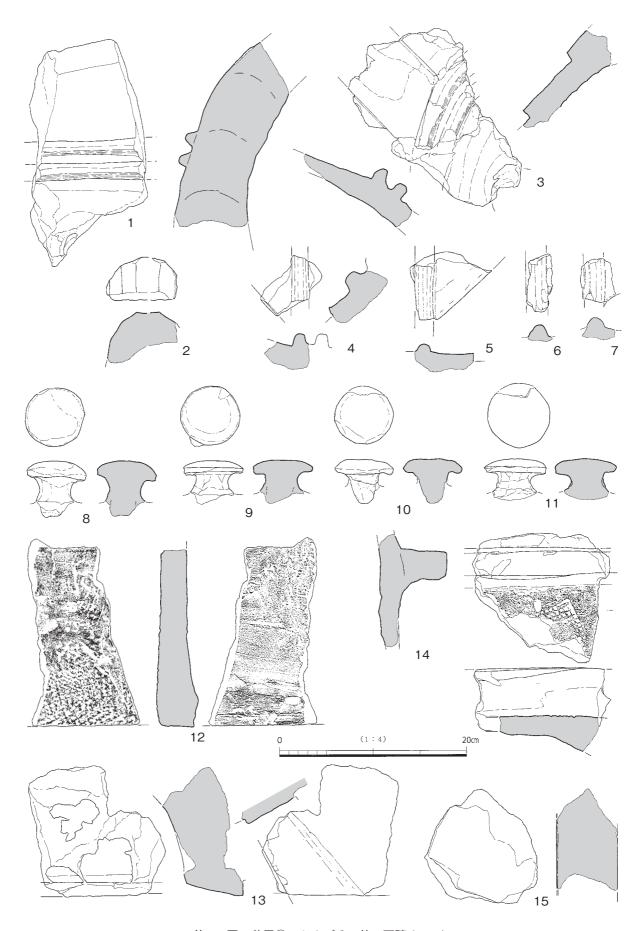
- 2は、胴部右側面の破片。外面の右端に突帯に沿ったナデの一部と思われるタテ方向のナデがあり、 内面に腹部との取り付きがある。内面はヨコ方向の粗いユビナデ調整である。
 - 3と4は、背稜の破片であろう。断面形が違うのは付いていた部位が異なるからか。
- 6は、右側面の鰭部の破片。粘土の貼り付けとヘラナデによって外側だけに正段形を表現する。段は幅 $5\sim7\,\mathrm{cm}$ で、直線的である。鰭部端面には段を作らない。

第279図1~11は、灰色で硬質の鴟尾の破片。

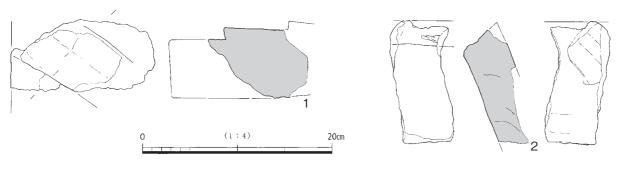
- 1は、胴部右側面の破片。破片中央に2条一対の突帯があり、その下方に笠形珠紋の脱落痕跡がある。胴部の意匠は焼きの甘い第278図1と同じである。背稜に近い破片の上辺部分が他の部分よりも暗色に発色する。鉄分の多い粘土が薄く貼り付けられたのであろう(図版16)。
 - 2は、背稜部の一部と思われる。ヘラケズリとナデ調整で明瞭な面が形成されている。
- 3は、胴部から鰭部にかけての左側面の断片で、頂部に至る湾曲部分のもの。破片の右端に笠形珠紋の脱落痕跡がある。縦帯は、2条で幅はやや狭いが高い。鰭は正段型で一部にヘラケズリがある。鰭部の内面は斜め方向の粗いユビナデで雑な仕上げである。鰭部の厚さ約2.5~4 cm。
 - 4~5は、鱶部の破片。4は左側面、5は右側面にあたる。ともに外面はヘラケズリとナデ調整。
- 6 · 7 は縦帯の断片。 7 は、破片の右下に縦帯とは斜交する切込みが残っている。降り棟の取りつきを示す。半円形や弧状の透かし穴の一部かもしれない。
- 8~11は、笠形珠紋の部品。筒状の粘土塊の一端をユビで広げ、さらに周囲に粘土を加えて笠形を形成している。頂部は丁寧にナデ調整されており、笠形の周囲は最終的にはヘラケズリで円く整え



第278図 鴟尾①(1:4)



第279図 鴟尾② およびその他の瓦磚(1:4)



第280図 鴟尾③(1:4)

られている。鴟尾本体に差し込まれる基部は鈍く尖っており、その周囲に接合時の粘土が残る。

第280図は、鴟尾と推定される資料。1は、左側面の鰭部の断片か。外面には、約6cm間隔で正段型が並ぶ。厚さが7cmほどあるので、第278図6と同様の部位とも思われるが、第278図6では粘土の積み上げ痕跡がほぼ水平でしかも内外面とはほぼ直角なのにたいして、第280図1は内外面と45度くらいの角度で斜交する。なお、破断面も含めて被熱して一部ガラス化する。

2は、破片の下端に剥離面があるので、図のように斜めに立ち上がる部位である。鴟尾であれば頂部の鰭の断片ということになるが、第279図3などに比べるとかなり分厚い。また、図では表現できていないが、端面に段があるように見える点も、本窯跡の鴟尾資料の特徴と合致しない。

第5項 磚およびその他の瓦製品(第279図 図版71)

第279図12~15は、磚あるいは種別不明の瓦製品。

12は、直線的な端部がわずかに分厚く作られた板状の瓦製品。表面に格子叩き痕があり、内面はナデ調整。磚の一種か。

13は、板状の部分に幅3cm、高さ3.5cmの突帯を張り付けた瓦製品。板状部分は平板ではなく、図の右側が分厚い。突帯の付く面には、格子叩き痕がある。板状部分の四周はすべて破損していて原形をうかがうことはできない 4)。

14は、断面が台形状の瓦製品。全体の形は不明だが、三面が残っている。一つの面(図で下側)はほぼ平坦な面をなしている。他の一面(左側に図示)は、わずかに湾曲する面をヘラケズリで形成している。残る一つの面(右側に図示)は、一見、平坦面だが、ヘラケズリで浅い段を作り出す。磚の一種か。15も厚さ5cmほどの磚の破片だが、片面に直線的なヘラのあたりがあり、片面に段を作っている可能性もある。

第6項 窯構築材に転用された瓦(図版71)

平瓦や鴟尾の断片の中には、焼成後に付着した粘土が焼けて硬化したものや、破面が二次的な火を 受けて硬化変色したものがある。これらは、瓦窯の構築材に利用されたものとみてよい。ただし、12 トレンチで発掘された1号瓦窯跡は、壁体に粘土などを貼り付けた状況が認められたとの報告はない。 とすると、これらの構築材は窯壁の全体ではなく、焚口などごく一部分に限って使われたのであろう。

第7項 出土瓦の特徴と鴟尾の系譜

以上、三井Ⅱ遺跡の出土瓦の詳細を示した。出土瓦の特徴を列記すると、

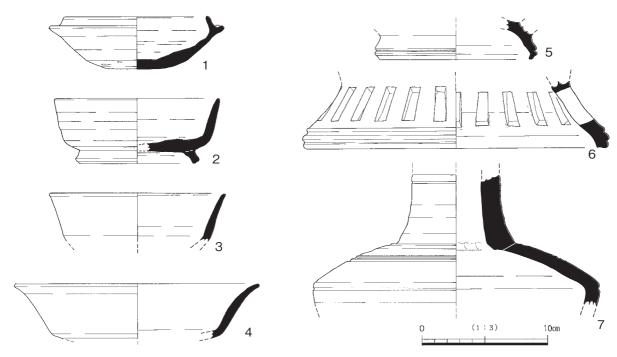
- ① 軒丸瓦は神門寺境内廃寺1型式と同紋だが異笵で、備後・寺町廃寺と同笵である。
- ② 神門寺境内廃寺にあるような、下端に突起を備えた三日月形軒平瓦(後述)はない。
- ③ 平瓦は側面調整を省略する a 手法が卓越する。平瓦出土量が丸瓦の10倍以上ある。
- ④ 山陰に類例のない鴟尾がある。

以上の特徴から、三井Ⅱ遺跡の瓦窯は神門寺境内廃寺に附属しない、と結論してよいと考える。

ここで、三井Ⅱ遺跡の鴟尾について少しばかり検討を加える。最近、久保穣二朗氏が山陰地域の鴟尾を網羅的に集成した研究を発表した(久保2015)。久保氏は、山陰の鴟尾を因幡・伯耆・出雲東部に分布する山陰型鴟尾、因幡・伯耆に少数ある胴部無紋鴟尾、伯耆・斎尾廃寺の蓮華紋帯鴟尾、そして石見の珠紋帯鴟尾に分類し、その変遷をたどるという、画期的な成果を示した。この久保氏の成果に照らしてみても、三井Ⅱ遺跡の鴟尾は山陰にまったく類品をみない存在である。だが、松下正司氏の教示によって備後・上山手廃寺(三次市向江田町)に、類似した鴟尾があることを知った。2条一対の突帯、正段形の鰭部、笠形珠紋、など上山手廃寺の鴟尾は、三井Ⅱ遺跡の鴟尾と共通する要素が多い。だが、笠形装飾の取り付け手法には若干の差があることや、突帯および鰭部正段形の作出手法は三井Ⅱ遺跡の鴟尾の方が丁寧なものであること、など相違点も見いだせる50。三井Ⅱ遺跡の鴟尾が、備後の三次地域からの影響下に成立したことは疑いないが、その詳細は今後の調査にまちたい。軒丸瓦の同范関係だけでなく、鴟尾からみても三井Ⅱ遺跡での瓦作りは備後の直接的な技術移植により始まったことは確実である。だが、その系統はその後の出雲に根付くことはなかったようである。問題は、三井Ⅱ遺跡の瓦が供給された寺院はどこか、それは何かだが、この点は本論の最後に検討してみたい。

第8項 須恵器 (第281図 図版71)

第281図1は、蓋杯の身(杯H)。立ち上がりはやや内傾するがしっかりしており、底部にはヘラケズリがある。出雲4期。2は、高台の付く有蓋の杯身(杯B)。体部は直立ぎみで、高台は高い。底部に静止糸切り痕がある。3・4は、体部と底部の境に稜線が走る稜椀。3は直線的だが、4は大きく外反する体部である。5は、低圏足円面硯の脚部。海がごく一部残る。6は、圏足円面硯の脚部。長方形の透孔をもち、脚端部に2条の沈線がめぐる(山中編2003)。7は長頸壺。頸部から胴部上半の破片で、頸部には2条一対の沈線、頸部には細く鋭い突帯、肩部には3条一対の沈線がある。胴部は算盤玉形に張っている。沈線や突帯が多用されることから、金属製品を模したものであろう。



第281図 須恵器(1:3)

第3節 関連資料の再検討

出雲西部、つまりほぼ現在の出雲市域には、三井Ⅱ遺跡瓦窯跡の複弁水切り瓦のほかに、神門寺境内廃寺⁶⁾(出雲市塩冶町)に2型式2種、壱丁田遺跡(出雲市白枝町)に1型式1種、稲城・小野遺跡(出雲市斐川町出西)に1型式1種の複弁蓮華紋水切り瓦が確認されている。壱丁田遺跡例は神門寺境内廃寺2型式と同笵だが、稲城・小野遺跡例は「寺町廃寺式」複弁蓮華紋ではあるが、神門寺境内廃寺例・三井Ⅱ遺跡例いずれとも別笵である。本節では、三井Ⅱ遺跡以外の水切り瓦などを検討する。

第1項 神門寺境内廃寺の軒瓦 (第282~287図 第23表)

神門寺境内廃寺の軒丸瓦は、梅原末治が最初に資料紹介をおこない (梅原1952)、その後、松下正司氏が寺町廃寺など備後との関係を論じた (松下1969)。遺跡地は、1982~1984年に範囲確認調査がおこなわれ概要報告がなされた (川上・西尾ほか1983・1984・1985) ので、これを受けて、松下氏があらためて検討を加えた (松下1985) ほか、妹尾周三氏が年代観などを再検討した (妹尾1993)。その後、周辺の開発にともなう神門寺附近遺跡の調査が続いて資料も増加した。

神門寺境内廃寺の軒瓦は、軒丸瓦4型式と素紋三日月形軒平瓦がある。

(1) 軒丸瓦の型式 (第282図 第23表)

軒丸瓦4型式の特徴をまず示しておく。

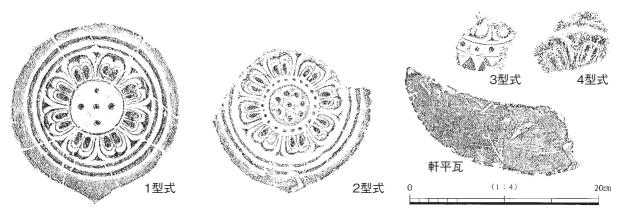
1型式:複弁八弁蓮華紋。平坦でやや大きな中房に1+4の蓮子をおく。蓮弁は盛り上がりがやや 大きく、弁端は反る。子葉の周囲に輪郭線がある。間弁は三角形で中房に届かない。内外

虹亚

		軒半瓦					
	1 型式	2型式	3型式	4型式	計		
1~3次	14(1)	6(1)	1	0	21(2)	4(1)	
付近Ⅱ	2	0	0	0	2	0	
付近Ⅲ	21	6	1	1	29	10	
合計	37 (71.2%)	12 (23.1%)	2 (3.8%)	1 (1.9%)	52	14	
※1~3次の()は採集品。合計には含めない。「付近Ⅱ」は曽田2010,「付近Ⅲ」は須賀2013を示す。							

第23表 神門寺境内廃寺出土軒瓦型式別一覧





第282図 神門寺境内廃寺出土軒瓦一覧(1:4)

区の圏線の外側に太い圏線1条がめぐる。外縁は平縁。瓦当の下端に突起がある。

2型式:複弁八弁蓮華紋。低く突出した中房には1+6の蓮子がおかれ、周囲に小粒の珠紋⁷⁾が並 ぶ。蓮弁はやや扁平だが、弁端は反る。子葉の周囲には輪郭線がある。間弁は細く長く、 基部が中房に届く。内外区の圏線の外側を圏線がめぐる。瓦当下端に突起がある。

3型式:単弁八弁蓮華紋(弁数は推定)。弁端の切れ込んだ扁平な蓮弁に水滴形の子葉をおく。中房 の形状や蓮子数は不明。外区は内縁に珠紋帯、斜縁の外縁に内向する凸鋸歯紋を並べる。

4型式:複弁八弁蓮華紋(弁数は推定)。蓮弁は照りむくりが乏しい。細長い子葉には輪郭線がある。 中房は不明。内区より一段低くなった外区には圏線がめぐる。

(2) 軒丸瓦1型式(第283·284図 図版16)

神門寺境内廃寺で最も出土量の多い軒丸瓦である。側面の瓦当面沿いに幅1-2mmのバリ状の凸 線がある (第283図, 第284図3・6など)、瓦当上端にカセ型合わせ目の段差がある (第283図1)、そし て調整痕跡が認められないにもかかわらず側面が平坦な例があることなどから、瓦笵は側面にかぶら ない型式で、これに左右分割型のカセ型を組み合わせて瓦当部を成形した、と推測できる。

瓦当紋様と丸瓦接合位置との関係を検討するため、仮に蓮弁を時計回りにA~Hと名付けると(第 283図1) 接合位置は次の4パターンとなる。

パターン1: 蓮弁Aが12時方向 $^{8)}$ に位置 (第283図1, 第284図1~4・6)。

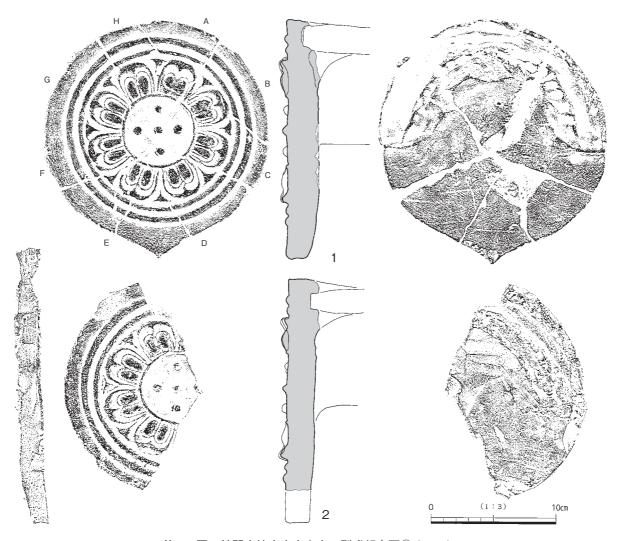
パターン2: 蓮弁Aが6時方向に位置(第283図2)。

パターン3: 蓮弁Aが3時方向に位置(須賀2013, 第32図10·11)。

パターン4: 蓮弁Aが9時方向に位置(第284図5)。

丸瓦の接合手法は、多くが次のような手法をとる。まず、丸瓦のはまる溝「接合溝」を、おそらくユビかへラを使って瓦当裏面の上端に入れて、そこに丸瓦を差し込み、凹面側のすき間に対して瓦当成形粘土をユビオサエで押し込む。凸面側も同様であろう。そして、凹凸両面に少量の接合粘土をあてて丸瓦を固定する(第283図1)。丸瓦広端は、凹凸両面にヘラケズリのあるもの(第283図1、14図4)、凸面側にヘラケズリのあるもの(第284図7)、ヘラケズリのないもの(第284図6)がある。ヘラケズリのないものは稀である。また、丸瓦広端に刻み目を入れたものはない。なお、丸瓦は行基丸瓦である。これと違った接合手法をもつものが1例ある(第283図2)。瓦当裏面の丸瓦接合位置に放射状の刻み目を入れ、凹凸両面をヘラケズリした丸瓦を指し込み、ユビオサエをしないで、そのまま接合粘土をあてて固定する、という手法である。この1点のみは、須惠質の硬い焼きであり、他とは焼成の具合が違っている。)。

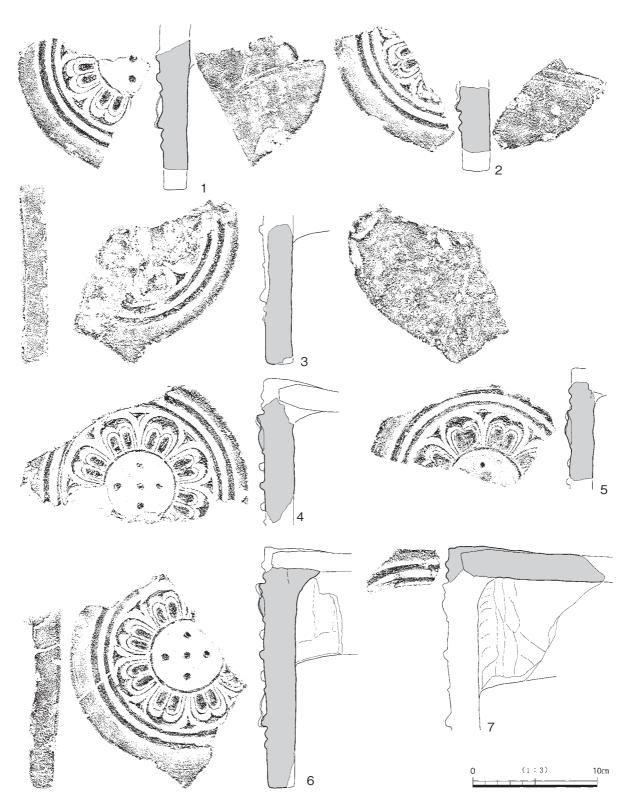
瓦当裏面はほぼ平坦になるようにナデ調整で仕上げられている。瓦当裏面の下半部に、ナデ調整の後、板で叩いた痕跡を残すものが目につく(第283図 $1\cdot 2$ 、第284図 $1\cdot 2$ など)。



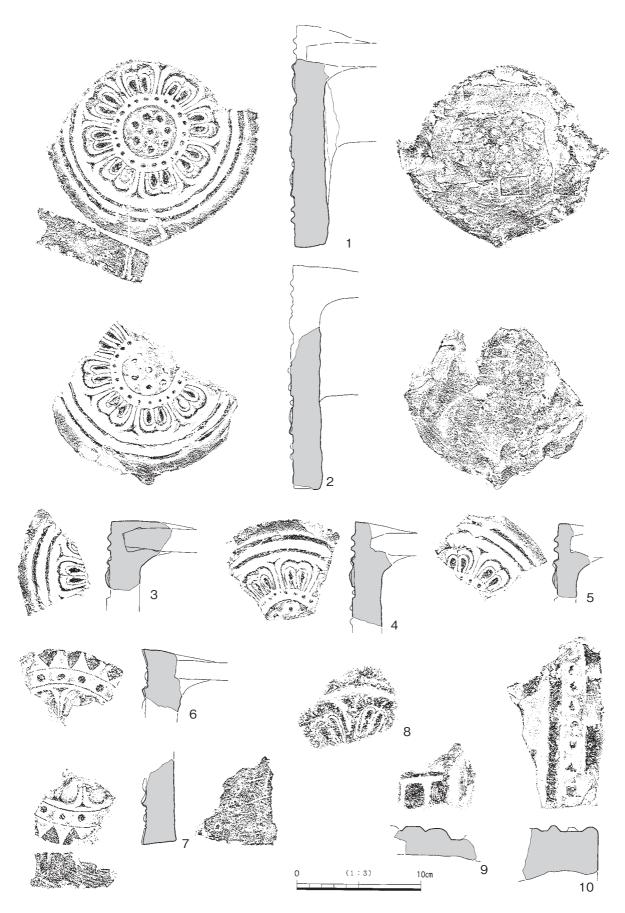
第283図 神門寺境内廃寺出土1型式軒丸瓦①(1:3)

(3)2型式(第285図1~5)

1型式と同様の輪郭線をともなう大振りの子葉をおいた複弁蓮華紋で、外区の圏線紋も共通するが、中房の形と蓮子数、その周囲の珠紋帯、そして長く伸びて中房につながる間弁などが違う。瓦当の下端に突起をもつ「水切り瓦」である。



第284図 神門寺境内廃寺出土1型式軒丸瓦②(1:3)



第285図 神門寺境内廃寺出土2型式~4型式軒丸瓦と鬼瓦(1:3)

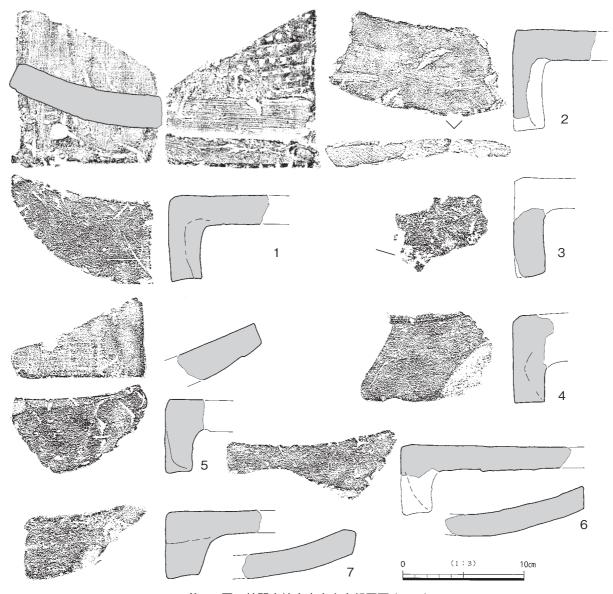
丸瓦部は、瓦当裏面の上端に付けられており、接合位置に接合溝を入れたのち、接合される 10 。丸瓦広端には、凹凸両面側にヘラケズリがあるものの、刻み目はない。内外面とも接合粘土は少量である。瓦当紋様と丸瓦の取り付け位置は一定であり 11 、1型式のように 90° ずれることはない。

瓦当裏面には全体に浅い叩きの痕跡がある。それを、タテ方向にナデ調整した後、瓦当裏面周囲をナデ (第285図1・2) またはヘラケズリで調整する。裏面瓦当側面はナデまたはヘラケズリ調整だが、調整の及ばない部分には木目圧痕が付いている (須賀2013,53頁第33図16)。よって、カセ型作りとみてよい。

(4) 3型式(第285図6・7)

これまでの調査で2点出土している。 蓮弁の中央に紡錘形の子葉を1個置いた単弁蓮華紋である。 間弁は中房に届いているようにみえるが、中房部分を残さないので詳細は不明。

丸瓦の接合痕跡を残す資料(第285図6)と瓦当下半部の資料(7)があるが、同じ蓮弁と珠紋・鋸歯紋と判断できる。瓦当紋様に対する丸瓦取り付け位置が90°あるいは180°ずれるのだろう。



第286図 神門寺境内廃寺出土軒平瓦(1:3)

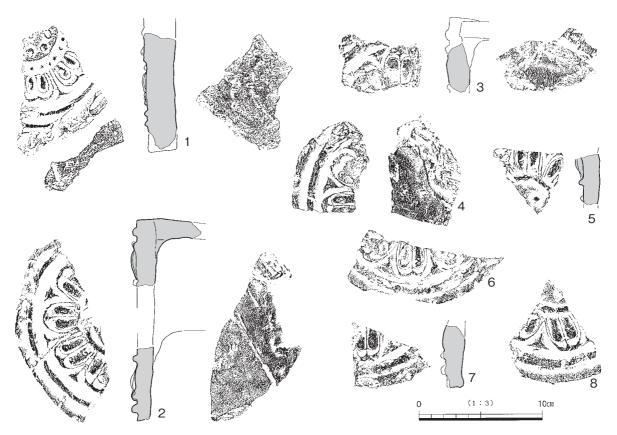
6の丸瓦剥離部をみると、丸側先端は深くは差し込まれておらず、瓦当成形粘土のナデッケがない。 また、丸瓦広端部に刻みの痕跡もない。7は、瓦当下半部にあたる破片で、側面に調整痕跡がなく、 カセ型の圧痕である斜めの木目圧痕が観察できる。瓦当裏面の調整はヘラケズリである。

(5) 4型式(第285図8)

1点しかなく、瓦当紋様以外に多くのことを知ることはできない。間弁は楔形である。

(6) 軒平瓦(第286図)

神門寺境内廃寺には、三日月形の無紋軒平瓦が存在することは報告していたが(花谷2010)、最近の出土資料に、瓦当下辺中央に小さな三角形突起が作出されている破片があるとわかり、まさに「水切り瓦」であることが判明した。第286図3は突起を残す資料であり¹²⁾、2は三角形突起が欠損した資料である。これらの軒平瓦は、粘土板桶巻き作りの平瓦が素材で、分割後に叩きによって広端部を直角に折り曲げ、粘土を貼り足して瓦当部を形成している。4は凹面から瓦当面に布圧痕が連続し、5も瓦当面ぎりぎりまで布圧痕がある。瓦当成形のための粘土の貼り足しは裏面側の場合(1・2・4)と、瓦当面側の場合(5・6)があるらしい。瓦当の平面形は木型によっており、瓦当面下面(顎面)に木目圧痕が明瞭に残る(1・2)。軒平瓦瓦当の成形手法としては、類例を知らない特殊な技法である。なお、瓦当の厚みが大きい個体は平瓦部の凸面側に粘土を貼り付けて瓦当面を形成したとみられる(7)。この資料は側辺の横断面形も1・5・6などとは違っている。



第287図 壱丁田遺跡の軒丸瓦(1)と稲城・小野遺跡の軒丸瓦(2~8)(1:3)

(7)鬼 瓦(第285図9・10)

境内地の調査で、鬼面紋鬼瓦の断片が2点出土している。周囲に珠紋を並べた鬼瓦である。近傍では、市内上塩冶町の長者原廃寺に鬼面紋鬼瓦があるが、異笵である。奈良時代後半のものであろう。

(8) 小 結

以上、神門寺境内廃寺の軒瓦について概要を記した。主要な軒丸瓦は、1型式と2型式であり、胎土や焼成のぐあいからすると、軒丸瓦1型式と素紋軒平瓦がセットになることが推測できる。軒丸瓦1・2型式は、7世紀末から8世紀初頭前後のものと推測され、これらが神門寺境内廃寺の創建瓦である。軒丸瓦1型式は、三井Ⅱ遺跡や寺町廃寺の軒丸瓦に酷似するが異笵である。また、下端に突起をもつ素紋軒平瓦は出雲でもまた備後にも類例が知られていない。その系譜が気になるところである。神門寺境内廃寺では、鬼面紋鬼瓦は出土しているものの、三井Ⅱ遺跡例のような鴟尾の破片はこれまで確認できていない。鴟尾の存否は今後の課題としたい。

第2項 壱丁田遺跡の軒丸瓦(第287図)

壱丁田遺跡(出雲市白枝町)は、神戸川下流部の右岸低地部にある。弥生時代、飛鳥奈良時代、そして中世期の遺跡である(坂本2008)。神門寺境内廃寺2型式同笵軒丸瓦が1点出土している。

第287図1は、須惠質硬質の瓦当部片で、下端の突起を残す資料である。突起部はヘラケズリされるが、側面にはカセ型の木目が明瞭に残る。裏面はナデ調整である。

第3項 稲城・小野遺跡の「寺町廃寺式 | 軒丸瓦 (第287図)

出雲郡家推定地の稲城・小野遺跡(出雲市斐川町出西)からは、比較的多量の瓦が発見されている。

稲城・小野遺跡には掘立柱建物跡などがあるほか,「杯蓋硯」(古尾谷2010, いわゆる転用硯)も多数 出土している。また, その西方では, 郡家に附属する倉庫群と推定される礎石建総柱建物跡が発見されている(後谷遺跡, 宍道2006)。

稲城・小野遺跡の瓦磚類は、軒丸瓦、丸・平瓦、鴟尾があり、軒丸瓦は3種類に分類できる(花谷ほか2014)。1型式と2型式は「上淀廃寺式」の単弁蓮華紋で、3型式軒丸瓦が「寺町廃寺式」の複弁蓮華紋(推定八弁)である(第287図2~8、出土総点数は9点)。

第287図2は、4弁が残る瓦当片。複弁の蓮弁は三井Ⅱ遺跡例や神門寺境内廃寺1型式に比べてや や長く先が少し尖り気味である。間弁は三角形状で、先端がわずかに延びるものもある。内区の外側 に圏線が1条だけめぐるのが、稲城・小野遺跡3型式の特徴である。瓦当は薄く、裏面ナデ調整、側 面はヘラケズリ調整。一部残った丸瓦部は、凹面に布圧痕がない行基丸瓦(稲城・小野遺跡丸瓦I類) である。丸瓦の剥離面には、丸瓦広端部の藁座痕跡が転写されている(第287図4も同じ)。丸瓦部の 接合位置は、瓦当の上端にある(2~4)。

この遺跡から出土した丸瓦のほとんど(破片数で98.9%, 重量で98.2%)¹³が、模骨を用いない粘土紐 巻き上げ技法(「泥状盤築」技法、大脇1991)の丸瓦 I 類である。同じ丸瓦は軒丸瓦 1 型式にもともなう。 出雲国内では来美廃寺(松江市、林2007)に少量が確認されている。

中房蓮子の残る資料が第287図5しかないため、蓮子数は確認できないが、おそらく1+4とみて よかろう。

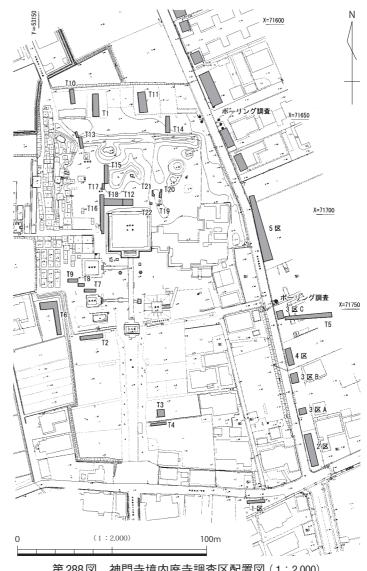
なかに、1点だけ(8、採集資料)瓦当の下端にごく小さな三角形突起を削り出した資料があって、 稲城・小野遺跡3型式軒丸瓦が、瓦当紋様だけでない瓦当部の形状という点でも「寺町廃寺式」(寺町 廃寺FIB型式)の系譜を忠実に体現していることが判明する。

第4項 関連瓦資料についての小結

以上、本節では三井Ⅱ遺跡以外のいわゆる「水切り瓦」資料を再検討しつつ資料紹介した。神門寺 境内廃寺2型式軒丸瓦が1点だけの壱丁田遺跡を除くと、三井Ⅱ遺跡が瓦窯跡、神門寺境内廃寺が

寺院跡、稲城・小野遺跡が推定官衙遺 跡. と各々の遺跡の性格が異なる。ま た. 近接する3遺跡の複弁蓮華紋軒丸 瓦は、いずれも別笵である。くわえて、 神門寺境内廃寺には素紋軒平瓦がある が、三井Ⅱ遺跡と稲城・小野遺跡には それがない。鴟尾についても、三井Ⅱ 遺跡の鴟尾は備後・上山手廃寺例との 深い関連がうかがえたが、稲城・小野 遺跡の鴟尾は須惠質焼成の山陰系鴟尾 である(久保2015)。

このように、出雲西部で「寺町廃寺 式|軒丸瓦を出土する遺跡の瓦の様相 は、けして単純なものではない。この 点をさらに考究しようとする時、唯一, 寺院跡と確認される神門寺境内廃寺の 遺跡としての内容が大きな問題となる。

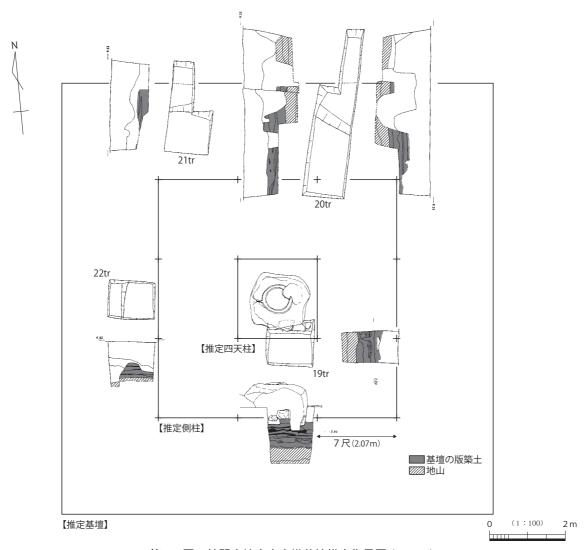


第288図 神門寺境内廃寺調査区配置図(1:2,000)

神門寺境内廃寺については、1982年(昭和57)から1984年にかけて範囲確認調査がおこなわれたが、その伽藍についてはこれまで十分な検討がなされたとは、いい難い状況である。そこで、概要報告などによりながら、伽藍について再検討してみたい。このことは、出雲西部地域の古代仏教伝来のあり方を考えるうえでも意味があるはずだ、と思うからである。

第5項 神門寺境内廃寺の伽藍(第288~290図)

現在の神門寺境内は、おおむね南北210m、東西120m ばかりの平行四辺形の寺地となっている(第288図)。門前の東西道路(市道塩冶1号線)から、80m ほどの参道が真北に延び、そこに仁王門が建つ。仁王門の北東に鐘楼、北西には東面する弘法堂があり、弘法堂の南には塩冶判官高貞の首塚と伝わる五輪塔がたたずむ。仁王門の北50mには南面する本堂が位置し、その南西には東面する観音堂がある。本堂の東側が庫裏である。本堂背面にも広い境内地があり、その西側を墓地が占めている。その墓地の一画に塩冶氏所縁と伝わる宝篋印塔が立っている。



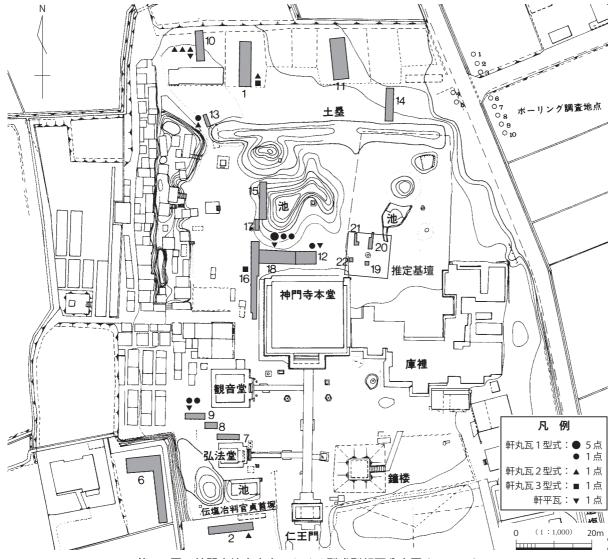
第289図 神門寺境内廃寺塔基壇推定復元図(1:100)

1982年度(昭和57)から3年にわたった範囲確認調査は、この境内地のほぼ全域をカバーしたものだった。神門寺境内廃寺の伽藍配置に言及した論説は、寡聞にして知らない。範囲確認調査の3年次 (1984年)には、神門寺庫裏北側にある礎石の周囲にトレンチ4つ (19~22トレンチ)を設けて調査がなされた。まず、この調査成果を再検討する。

概要報告(川上・西尾1985)では、次の諸点を指摘・確認した。

- ①庫裡裏の礎石は原位置を保つ。
- ②この礎石は版築された基壇に据わる。
- ③基壇を塔のものか金堂のものかは判断しがたいが、礎石の大きさから塔の心礎とみることもできる。 この30年前の調査はこの遺跡について実はかなり重要な成果をあげている。

まず礎石だが、図面から測るに差し渡しで1.6m、高さ1.4m のほぼ直方体形の巨石であり、上面に柱座を削り出し、その周囲に排水溝を穿っている。排水溝は、西へ水を落とす仕掛けになっている。さらに、根石にも径 $0.4\sim0.6m$ の石が使われている。これらのことから、心礎とみるのが妥当であろう (第289図 14)。



第290図 神門寺境内廃寺における型式別軒瓦分布図(1:1,000)

この心礎周囲の版築土は、心礎脇の19トレンチでは、基盤層(地山)の明茶褐色土(哑層)・黄褐色砂(IX層)の上に約70cmの厚さで確認されている。淡赤褐色土(IV層)や堅い灰褐色粘質土(Ⅲ層)・茶褐色粘質土(VI層)を間に挟んだ、暗茶褐色粘質土(VI層)や黄褐色砂質土(IV層)からなる版築土、と報告されている。

版築土は、心礎心から北側で $5.7m(20\cdot 21 \land \nu \nu + \nu)$ 、西側で $4.2m(22 \land \nu \nu + \nu)$ の範囲に広がることが確認されている。版築土を構成する土層は、基本的には $19 \land \nu \nu + \nu$ と変わりない。

北側への広がり 5.7m を 2 倍すると、基壇の一辺長は約 11.4m と推定復元できる。 $20 \sim 22$ トレンチでは、基壇外装の痕跡を見出せていないから、基壇規模はこれより若干大きくなる可能性はある 15 。この規模は奈良時代の塔基壇としてはほぼ標準的なものである。基壇方位はほぼ正南北とみてよい。

箱崎和久氏によると、発掘調査によって判明する日本の古代寺院118例 (国分寺を除く) の塔基壇の 平均規模は11.7m (39.1尺) である。ちなみに、寺町廃寺 (広島県三次市) の塔基壇規模は、11.1m (38尺) である (箱崎2012)。この基壇に建っていた塔を、標準的な四天柱を備えた方三間とみると、初層の塔 身規模の平均は21.0尺という (箱崎2012 747頁)。神門寺境内廃寺の塔もこの規模が一つの候補で、図 上で割りつけてみるときれいに収まる (第289図) ¹⁶⁾。

次に、伽藍配置を考えてみたい。これには軒瓦の出土状況17)が推測資料となる(第290図)。

塔基壇を確認した4つの調査区 $(19\sim22$ トレンチ) から軒瓦は出土していないが,型式別に分布状況を検討すると,まず,軒丸瓦1型式は,塔心礎西方の18トレンチから7点,その東に隣接する12トレンチからも1点出ている。総出土数14点の約6割(出土調査区不明を除くと8/11=73%)がこの2ヵ所に集中する。したがって,塔基壇の西方に瓦葺建物があったと推定できる。軒丸瓦3型式も18トレンチ西の16トレンチから出土した。軒丸瓦1型式は,このほか,境内北の調査区 (13トレンチ) から1点、本堂西南の9トレンチから2点が出土している。

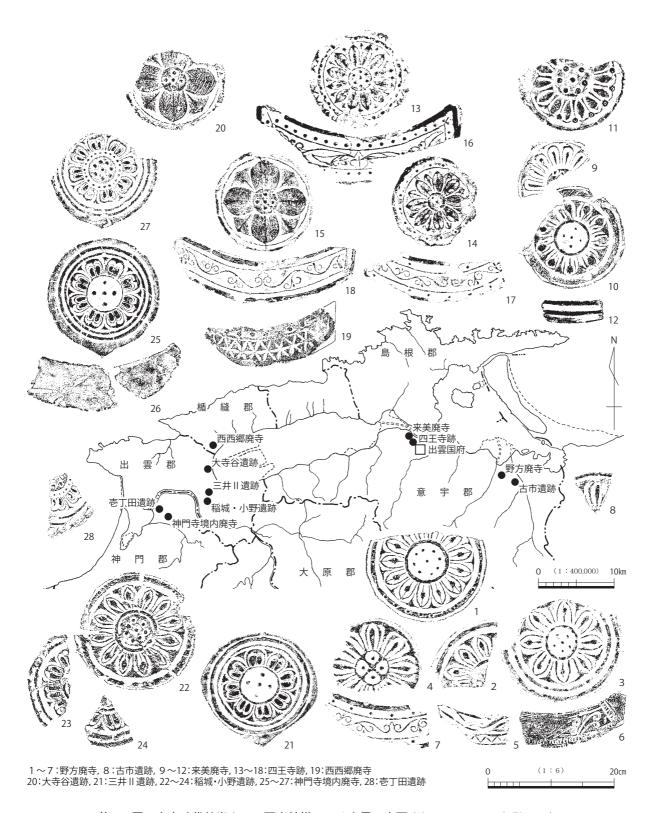
これに対して、軒丸瓦2型式は境内北側に設けた調査区に分布の中心がある。境内地西北隅の調査区(10トレンチ)から3点、その東の1トレンチと南の13トレンチから各1点、計5点(71%)が出土した。また、境内地南部の調査区(2トレンチ)からも1点出土している。これらのことから、塔基壇の北西(つまり塔基壇西方の推定瓦葺き建物の北側)にも、別の基壇建物が推定できそうである。古代寺院の一般的な伽藍に則すと、塔基壇の西方には金堂が、金堂の北側には講堂が配置されるから、この神門寺境内廃寺の伽藍配置として、法起寺式伽藍配置を一案として提起したい。

なお、軒丸瓦1型式が現境内地中央部に分布するのに対して、軒丸瓦2型式はその周辺に分布するようにみえる。出土点数が少ないために確定的ではないが、金堂や塔よりも講堂などの建設時期(瓦葺きでの)は遅れるから、これが軒丸瓦1型式と2型式の時期差と関連する可能性もあろう。

第4節 おわりに 一古代における出雲西部への造瓦技術の移植とその展開

2000年 (平成12) から2001年にかけて発掘調査されながら、ほとんど未報告であった三井 II 遺跡の 瓦窯跡関係資料を報告し、あわせて関連資料の提示をおこなった。三井 II 遺跡の軒丸瓦に関しては、 日浦裕子氏が論証したように、第1段階:寺町廃寺、第2段階:大当瓦窯跡、第3段階:三井Ⅱ遺跡、の順に瓦笵が移動しており、第1段階と第3段階の瓦工人が同一とみられることから、彼(あるいは彼ら)が范型とともに備後から出雲へ移動したと考えられる(日浦2015)。

今回は、これに加えて三井Ⅱ遺跡の鴟尾資料を示した。同じ意匠の鴟尾は備後・上山手廃寺(三次



第291図 奈良時代前半までの瓦当紋様にみる出雲の東西(地図1:400,000, 拓影1:6)

市)にある。寺町廃寺には、鰭部の段形が一致しないものもあるが、鰭部が正段形の鴟尾もある。ただし、笠形珠紋の存否が不明なので、寺町廃寺の鴟尾との関係は、今後に期するところが大きい。それでも、山陰地域に類似の鴟尾が存在せず(久保2015)、備後に類品が存在することの意義は強調しておきたい。三井Ⅱ遺跡瓦窯の成立に、備後からの瓦笵および瓦工人の移動という直接的関与が推定されてきたが、その蓋然性はいっそう高まったといえよう。古代の出雲西部で「寺町廃寺式」軒丸瓦が展開し、稲城・小野遺跡のような官衙遺跡にまでそれが普及した背景を明確にできたと考える。

三井Ⅱ遺跡の瓦と神門寺境内廃寺の瓦は、類似点は多いものの、軒丸瓦の同紋異笵関係、軒平瓦の存否などによって、別個の瓦群として理解すべきだ。平瓦の側面調整に関しても、三井Ⅱ遺跡では破面調整を省略した a 手法が卓越するのに対し、神門寺境内廃寺では破面をヘラケズリ調整する b 手法が卓越する点で違いがある。神門寺境内廃寺は三井Ⅱ遺跡の瓦供給先ではない。

神門寺境内廃寺の瓦では、今回、素紋軒平瓦に三角形突起が存在することを示した。軒平瓦も「水切り瓦」だったわけである。問題は、その系譜であり、今のところ寺町廃寺では厚手の平瓦(鹿見ほか1980 第10図9、鹿見ほか1981 15頁8)が軒平瓦とされており、神門寺境内廃寺のような軒平瓦は見出されていない。出雲で軒平瓦が創作されたとは思えないので、今後、寺町廃寺や上山手廃寺の瓦調査が進展するのを待ちたい。

遺跡としての神門寺境内廃寺が十分に研究されていないと感じていたので、塔跡の存在を強調し、 さらに法起寺式伽藍配置を提起した。寺町廃寺の伽藍配置が、発掘によってやはり法起寺式と判明し ていることからみると、備後から出雲西部に伝えられたのは、単に造瓦技術だけではなく、寺院建築 や地割など総合的な造寺技術だったと推測して過たないものと考える。

このように備後との密接な関連のもとで古代の出雲西部では、「寺町廃寺式」瓦が展開した。これを出雲東部と比較してみよう(第291図)。東部の意宇郡の寺院では、安来市野方廃寺(『出雲国風土記』教昊寺推定地)¹⁸⁾ や松江市来美廃寺(山代郷北新造院跡)など「上淀廃寺式」あるいは細弁蓮華紋が主流である(第291図1~4,8,9~11)。「のぞき花弁風」の単弁蓮華紋軒丸瓦を採用した松江市四王寺跡(山代郷南新造院跡、13~15)でも、軒平瓦には野方廃寺同笵品を採用する(7,17)など、寺院間のつながりが強い。軒平瓦についても、奈良時代前半に出雲西部では唐草紋軒平瓦は全く展開しておらず、出雲市西西郷廃寺(楯縫郡沼田郷新造院)の特異な軒平瓦(19)を示すことができるにとどまる。

このように、瓦当紋様を比較すると東西差は明瞭ではあるが、それでも四王寺跡軒丸瓦 II 型式 (15) の同笵品が出雲郡に属す出雲市大寺谷遺跡にあり (20, 花谷・高屋2012)、稲城・小野遺跡の軒丸瓦 1 型式 (22) は野方廃寺 I 型式 B (2) と同笵である (妹尾2005) など、東西間にも瓦の同笵関係があり、両地域が、けして対立的な存在ではなかったことはわかる。このような状況は、古墳時代後期の石室や石棺からうかがえる東西の地域差 19) と通底する部分である、といえよう。

さて最後に三井Ⅱ遺跡の瓦窯跡の性格にふれて稿を終わりたい。三井Ⅱ遺跡瓦窯跡の北側丘陵上には、古代山陰道(『出雲国風土記』にいう「正西道」)が走っている(本書第8章第5節)。「官道」である山陰道が、どこまで日常物資の輸送に使われたのかは別に議論をすべきことではあろうが、瓦の輸送に車が使用されたことは、次の木簡にも明らかである。

平城京二条大路路面の北側に掘られた濠状遺構SD5300から出土した木簡(「二条大路木簡」No.4537)には、「佐貴瓦山司」からの瓦輸送について次のように記される(奈文研2006)。

- 右佐貴瓦山司 進上瓦一千二百枚 男瓦六百枚/女瓦六百枚 載車九両 =
 - = 男瓦両別百五十枚/女瓦両別百二十枚

 \bigcirc

 \bigcirc

•上丁山下知麻呂 天平七年十一月卅日史生卜「長福」[]

車1両に,「男瓦」(丸瓦) は150枚(4両),「女瓦」(平瓦) は120枚(5両) を積載して,合計9両の車で1200枚の瓦を運んだと記す(=は連続することを,末尾の○は穿孔を示す)。枚数の違いは丸瓦と平瓦の重量差によるものである。

瓦窯の近傍に道路があれば、瓦の運送に好都合だったであろう。では、どこへ運ばれたか。 それは、『出雲国風土記』に記載のある出雲郡河内郷新造院だったと推定する。

河内郷新造院の所在地について、かつては岸崎時照『出雲風土記抄』を基本的に継承する加藤義成の研究など、記載の里程からの解釈によって、出雲市上津町上乗寺附近を推定していた(加藤1981)。その後、寺院跡や出土瓦に関する考古学的な検討が進み、出雲市上塩冶町長者原廃寺を推す意見が出た。しかし、里程との齟齬が著しかった。近年は、1986年に出雲市斐川町阿宮で発見された天寺平廃寺を考える説も出ている(野々村2002)。上津町上乗寺附近は考古学的証左がまったくなく、また、長者原廃寺も天寺平廃寺もこれまで出土した軒瓦の年代を、733年(天平5)の風土記成立時期にまで遡らせることはできない。

上津町上乗寺附近説にしても天寺平廃寺説にしても、河内郷新造院の郡家からの里程を「正南一十三里一百歩」(約7km)とすることを一つの論拠とする。だが、細川家本ではその距離を「正南三里一百歩」とし(沖森ほか2005)、島根県古代文化センター本でも同じ記載(野々村編2014)であり、河内郷の郡家からの距離と同じ距離を掲げる補訂本系の河内郷新造院の里程は疑問である。だが「三里一百歩」=約1.8km に寺院跡があるかといえば、未発見である。

それでも、三井Ⅱ遺跡瓦窯跡で焼かれた一群の瓦は、7世紀末ころの年代とみられるから、天平5年当時の大領日置部佐宜麿の祖父・日置部布彌が造営したとされる「河内郷新造院」にふさわしい。新造院の遺跡は、今後、探求に努めるとしても、三井Ⅱ遺跡瓦窯跡は「河内郷新造院瓦窯跡」として保存顕彰していくべき重要な遺跡である。

(花谷 浩)

【註】

- 1) 斐川町教育委員会文化財課の委託により、応用地質株式会社中国支社(広島市佐伯区皆賀3-1-30)が実施した「斐川中央工業団地造成に伴う試掘調査(磁気探査)業務」の報告書によると、磁気探査範囲は1,370㎡。調査範囲について2m格子の杭を設定し、あらかじめ金属探知機によって鉄製のゴミを除去したのち、1mの格子状に磁気探査を実施した。使用機材は、アメリカ・GEOMETRICS社製のセシウム型磁力計G858G。
- 2) (斐川24) PL.73-25, PL.158-25。
- 3) 平瓦製作用の桶を載せる回転台に留め付けてある輪状の藁の圧痕。桶に巻いた粘土円筒が回転台にくっつ

かないための装置。

- 4) 三次市上山手廃寺には、長方形板状の短辺に三角形の切欠きをいれ、一面に突帯を貼り付けた隅木蓋瓦がある(桑原1980 15頁第8回、図版第9下)。ただし、上山手廃寺例は全体が板状であり、三井Ⅱ遺跡の例とは違いがある。この資料の存在は、松下正司氏のご教示により知った。
- 5) 上山手廃寺の鴟尾は、1978年から1980年にかけて広島県教育委員会がおこなった範囲確認調査で出土している(桧垣・桑原1979、桑原1980、嶋田1981)。1978年度の第1次調査では鰭部らしき鴟尾片が出土したが(桧垣・桑原1979 図版15b)、出土トレンチは不明。1979年度の第2次調査では、講堂跡基壇南辺を確認した1トレンチから鴟尾片が出土した(桑原1980 図版4a)。さらに、1980年の第3次調査では、講堂跡基壇の北西隅を確認した1トレンチから笠形珠紋が出土したが、「異形土器」とされ「土師質の土器であり、なんらかの器種のつまみの部分と思われる。」と報告された(嶋田1981 12頁第11図15・16、図版8)。

その後,三次市教育委員会が1996年と2005年に発掘調査した出土瓦の中に,鴟尾片6点があり,これらについて,2015年12月16日に資料調査をおこなった。

96年出土品は腹部の破片(47×23cm)。鰭部との接合部が剥離している。外面に紋様はない。

05年出土品は、頭部、胴部から鰭部、鰭部など計5点がある。

頭部の破片は、背稜部に近い上部の断片。表面はヘラケズリ調整されて紋様はない。

胴部から鰭部の破片は、2条一対の突帯(縦帯)を境にして外側に正段形の鰭部(7段分)があり、突帯の内側には円形の剥離痕跡が6cm間隔で3つ並んでいる。剥離痕は胴部の表面にそのまま貼り付けた状況を示していて、刻み目やくぼみはない。笠形珠紋が付いていた痕跡とみてよかろう。

繋部の破片は、表面に正段形(7段分)を作り出している。端面はほぼ垂直になり、表面とは鋭角を作っている。裏面には段形はない。

このほか、縦帯部の小破片と部位不明の破片がある。

これらの鴟尾は、基本的な紋様の構成要素は三井Ⅱ遺跡の鴟尾とほとんど共通する。ただし、正段形を作るのにヘラケズリをしないこと、笠形珠紋を貼り付けるだけで埋め込むような手法を採らないことが違いとしてある。

なお、寺町廃寺の鴟尾は4点が報告されている。実見したのは金堂跡東側 (W 3区2T) から出土した金堂 所用の鴟尾 (鹿見ほか1980 24頁第12図、図版11-14) で、鰭部の浅い逆段形を削り出しで形成する。縦帯は2条一対だが、粘土紐は1本だけでその上面をくぼませて2条に見せている。貼り付け位置には浅い下書き 線がある。妹尾周三氏によれば素弁軒丸瓦と同じ胎土という。

他の3点は,正段形の鰭部の内側に2条一対の突帯をもつ破片(鹿見ほか1980 23頁第11図10,図版11-10)と,逆段形を表現した鰭部(鹿見ほか1980 23頁第11図11,図版11-11)である。後者は突帯部が欠損し下書き線が見えているようだ。3点目は,講堂跡東南隅から出土したもので,2条の突帯を削り出した破片(鹿見ほか1981 19頁第8図14,図版13-14)。

上山手廃寺と寺町廃寺の鴟尾に資料調査にあたっては、三次市教育委員会の友廣美和氏・桑原隆博氏、 三次市文化財委員の上重武和氏、東広島市教育委員会の妹尾周三氏、のお世話になった。

6) 神門寺附近遺跡出土瓦も一括する。

- 7) 珠紋数は23だが、うち2個(9時方向にある)はごく小さく隣の珠紋との間隔も狭いので、割り付けだけで珠紋の数に入れない方がよいのかもしれない。
- 8) 正確には、神門寺境内廃寺1型式軒丸瓦の場合、12・3・6・9時の各方向に位置するのは間弁であり、 パターン1の場合蓮弁Aは12時方向の右隣(時計回り方向)にずれている。他のパターンも同様である。
- 9) これ(第283図2)と第283図1を比較すると、前者の瓦当面に自然釉がかかっていることもあって笵傷の多寡ははっきりしないが、蓮弁のシャープさは第283図2が優っている。ただ、軟質の個体でも第284図4のように蓮弁がシャープで、かつ丸瓦凹面に沿ってユビオサエ痕跡が並ぶ資料もあるので、接合手法の違いが製作段階の前後に対応するものかどうかは、今後の検討課題。
- 10) 丸瓦部を大きく残す資料はないが、丸瓦の出土傾向から判断して、行基丸瓦が接合されるとみてよい。
- 11) 瓦当面の笵傷によって判定した。笵傷は (須賀 2013 53 頁第 33 図) に示されたものよりももっと多いが、その 配置は一定である。
- 12) (須賀2013) には未掲載。軒丸瓦1型式と誤認したらしい。
- 13) (花谷2014) 表1を参照。
- 14) (川上・西尾1985) 29・30 頁図 24 を一部改変のうえ、基壇縁と推定礎石位置・柱筋を加えた。
- 15) $20 \sim 22 \, \text{トレンチのいずれでも}$, 版築土の外側は, 明褐色土 $(20 \cdot 22 \, \text{トレンチ II } \mathbb{B})$ あるいは淡褐色土 $(21 \, \text{トレンチ II } \mathbb{B})$ が深く入り込んでいる状況となっている。あるいは、基壇外装の抜き取り痕跡なのかもしれない。
- 16) 初層一辺長21尺, 柱間7尺(約2.07m)で柱位置を割り付けてみると(289図), 北側柱の東から2つ目が20トレンチ南西部に位置することになる。20トレンチの東壁土層図は整然とした水平方向の版築土層を示すのに対し, 西壁土層図の様相がやや異なるのは, 礎石の据え付け掘形の断面が反映されているからであろうか。成否は将来の調査を俟ちたい。
- 17) 丸平瓦の点数と重量も重要だが未集計なので、割愛する。
- 18) 野方廃寺の軒瓦の組合わせについては(花谷2016)を参照のこと。
- 19) 出雲東部の出雲型石棺式石室と組合せ式家形石棺, に対し西部には横穴式石室と刳り抜き式家形石棺が卓越するが, 両者の間には交流の状況もうかがえ, 対立的ではないと考える説が有力である (角田2008, 坂本編2012)。

【参考文献】

池田満雄 1983「神門寺付近出土の軒丸瓦について」『神門寺境内廃寺 — 第1次発掘調査概報 — 』出雲市教育委員会、17~20頁

上原真人 1998「西西郷廃寺出土の幾何学紋軒平瓦について」『山根垣古墳・西西郷廃寺』平田市埋蔵文化財調 査報告書,第6集,平田市教育委員会,17-28頁

梅原末治 1952 「古瓦についての一二の覚書」 『史迹と美術』 22-8

沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉 2005『出雲国風土記』山川出版社

角田徳幸 2008「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館, 72-107頁

加藤義成 1981『修訂 出雲国風土記参究』今井書店(改訂3版,初版は1957年,1962年改訂増補)

川上稔・西尾克己ほか 1983『神門寺境内廃寺―第1次発掘調査概報―』出雲市教育委員会

川上稔・西尾克己ほか 1984 『神門寺境内廃寺―第2次発掘調査概報―』出雲市教育委員会

川上稔・西尾克己ほか 1985『神門寺境内廃寺』出雲市教育委員会

久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『調査研究紀要』 6,鳥取県埋蔵文化財センター,27-65頁

桑原隆博 1980『上山手廃寺発掘調査概報(2)』広島県教育委員会

小林新平 2014「中国地方における造瓦工人集団の展開 一いわゆる水切り瓦の事例 —」『考古学研究』第60巻 第4号、考古学研究会、43-61頁

近藤 正 1957「備後・寺町廃寺址と二三の寺院址に関する一つの試み」『歴史考古』 1, 歴史考古学研究会, 11-15頁

近藤 正 1968「『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』 2, 雄山閣 (のち『山陰古代文化の研究』近藤正遺稿集刊行会, 1978, に所収)

坂本豊治 2008 『壱丁田遺跡 (2次調査)』都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調 査報告書,出雲市の文化財報告3,出雲市教育委員会

坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告15, 出雲市教育委員会

鹿見啓太郎ほか 1980 『備後寺町廃寺 一推定三谷寺跡第1次発掘調査概報―』広島考古学研究会

鹿見啓太郎ほか 1981 『備後寺町廃寺 一推定三谷寺跡第2次発掘調査概報―』三次市教育委員会

鹿見啓太郎ほか 1982 『備後寺町廃寺 一推定三谷寺跡第3次発掘調査概報―』三次市教育委員会

嶋田 滋 1981『上山手廃寺発掘調査概報(3)』広島県教育委員会

宍道年弘 2006「後谷遺跡と風土記」『出雲の考古学と『出雲国風土記』』学生社, 187-202頁

須賀照隆 2013『神門寺付近遺跡Ⅲ 高西遺跡』出雲市都市計画道路医大前新町線 3 工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 、出雲市の文化財報告 23 、出雲市教育員会

妹尾周三 1993「寺町廃寺式軒丸瓦の伝播―備後寺町廃寺と出雲神門寺境内廃寺―」『島根考古学会誌』第10集 (10周年記念特集号)、島根県考古学会、105~124頁

妹尾周三 2005「山陰に広がる上淀廃寺式軒丸瓦―伝播と寺院の造営―」『考古論集』川越哲志先生退官記念論 文集,川越哲志先生退官記念事業会,557-578頁

妹尾周三 2007「瓦当文様と瓦生産」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集,同刊行会,765~777頁

妹尾問三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質 一古代寺院から見た地域間交流とその背景―」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター, 167-183頁

曽田辰雄 2010『神門寺付近遺跡Ⅱ』出雲市都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発 掘調査報告書2,出雲市の文化財報告13,出雲市教育員会

奈良文化財研究所 2006『平城京木簡 三 一二条大路木簡 一一』奈良文化財研究所史料第75冊

箱崎和久 2012 「古代寺院の塔遺構」 『文化財論叢Ⅲ』 奈良文化財研究所学報第92冊, 奈良文化財研究所創立60 周年記念論文集, 719-786頁

野々村安浩 2002「『出雲国風土記』所載の「新造院」をめぐって」『来美廃寺』「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書、風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 13、島根県教育庁埋蔵文化財センター、101~106 頁

野々村安浩編 2014『島根県古代文化センター本 出雲国風土記』島根県古代文化センター

花谷 浩 2010「古代寺院の瓦生産と古代山陰の領域性 一出雲西部を中心に一」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター, 289-296頁

花谷 浩 2013「瓦礫陶拾遺 その3」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第3集, 29-63頁

花谷 浩 2014「山代郷南新造院跡 (四王寺跡) 再考」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第4集. 11-24頁

花谷 浩 2016「『出雲国風土記』に記された寺院と瓦」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社

花谷 浩・髙屋茂男 2012「出雲国意宇郡山代郷南新造院跡と出雲郡大寺谷遺跡の同笵瓦について」『しまね ミュージアム協議会研究紀要』第2号、しまねミュージアム協議会、19-37頁

花谷 浩・平野芳英・原 俊二 2014「楯縫郡と出雲郡の古瓦 ―収蔵瓦の再評価―」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第4号、しまねミュージアム協議会、17-27頁

林 健亮 2007『山代郷北新造院跡』史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡(来美廃寺)発掘調査報告書,島根県教育委員会

日浦裕子 2015「備後国から出雲国への造瓦工人の活動に対する再検討 ―寺町廃寺FIB型式を対象に―」『島根考古学会誌』第32集,島根考古学会、41-50頁

桧垣栄次・桑原隆博 1979『上山手廃寺発掘調査概報(1)』広島県教育委員会

古尾谷知宏 2010『文献史料・物質資料と古代史研究』塙書房

松下正司 1969「備後北部の古瓦―いわゆる水切瓦の様相」『考古学雑誌』第55巻第1号

松下正司 1985「いわゆる水切り瓦の出土遺跡と様相」『神門寺境内廃寺』出雲市教育委員会、33~39頁

松下正司 1993「水切瓦再考」『考古論集』塩見浩先生退官記念論文集

柳浦俊一 2002『来美廃寺』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13. 島根県教育委員会

山中敏史編 2003『古代の陶硯をめぐる諸問題 一地方における文書行政をめぐって一』 奈良文化財研究所

【付記】

第283~287図の拓本と実測図は、今回、新たに作成した。第285図1のみ、島根県立八雲立つ風土記の丘所蔵品である。

杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡 試掘調査・範囲確認調査出土遺物(土器・土製品)

挿図番	· 号	図版		出土位置		器 種		法量(cm))			
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第13図	1		B10Tr			甕 (弥生土器)	18.8	_	(4.5)		ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第13図	2		B10Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	5.0	(2.1)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ オサエ	
第13図	3	47	B10Tr			高坏 (弥生土器)	17.2	_	(5.7)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ ヘラミガキ	凹線文,煤付着
第13図	4		B12Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	7.4	(2.0)	外面 内面	ナデ オサエ	
第13図	5		B13Tr		地山直上	甕 (弥生土器)	16.0	_	4.6	外面 内面	ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第13図	6	47	B13Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	12.4	(3.3)	外面 内面	ナデ 摩滅により不鮮明	
第13図	7		B18Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	5.0	(2.6)	外面 内面	ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第13図	8	6	B19Tr			甕 (弥生土器)	22.6	_	(23.8)	外面 内面	ナデ ハケメ	凹線文, 貼付突帯文+刻目, 列点文
第13図	9		B19Tr			甕 (弥生土器)	_	_	(9.0)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文, 列点文
第13図	10	6	B19Tr			小型壺 (弥生土器)	9.4	_	(10.0)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,列点文, 円孔5ヵ所あり
第13図	11		B19Tr			広口壺 (弥生土器)	_	_	(8.0)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文, 列点文
第13図	12		B19Tr		黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.3	(6.5)	外面 内面	オサエ ナデ ハケメ ナデ	
第13図	13	47	B19Tr			高坏 (弥生土器)	_	_	(5.5)		ハケメ ヘラミガキ ハケメ ナデ ヘラミガキ	凹線文,刻目
第18図	1	47	C4Tr	加工段中段	中層	甕 (弥生土器)	24.2	_	(5.0)		ハケメ ナデ ナデ	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第18図	2	47	C4Tr		中段 下層	高坏 (弥生土器)	17.8	_	(6.7)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文, 刺突文, 底部円盤充填
第18図	3	47	C3Tr		中段 上層	高坏 (弥生土器)	_	_	(13.0)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文,刻目
第18図	4		ClTr		2層	高坏 (弥生土器)	14.0	_	_	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第18図	5		C1Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	4.8	(2.1)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第18図	6	6	C8Tr			甕 (弥生土器)	12.8	_	(12.4)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文,煤付着
第18図	7		C8Tr	加工段	埋土	甕 (弥生土器)	14.8	_	(5.3)	外面 内面	ハケメ ナデ ナデ	凹線文
第18図	8		C15Tr			甕 (弥生土器)	19.0	_	(11.02)		ナデ ハケメ 摩滅により不鮮明	凹線文,列点文
第18図	9	47	C15Tr		下層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.2	(7.0)		ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ	煤付着
第18図	10		C3Tr		2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.8	(2.6)		ナデ オサエ	
第18図	11		C16Tr			甕 (弥生土器)	18.3	_	(6.2)		ハケメ ナデ ナデ?	凹線文
第25図	1		E1Tr			坏蓋 (須恵器)	10.0	_	(1.25)		回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ナデ	
第25図	2		E1Tr		表土	鍋? (土師器)	_	_	(4.0)		ナデ オサエ ナデ	
第25図	3		E2Tr		灰褐色土	壺 (須恵器)	_	_	(2.3)		回転ナデ 回転ナデ	
第25図	4		E3Tr			鉢? (陶器)	_	13.0	(4.1)		回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	外面に釉
第25図	5		E18Tr			坏蓋 (須恵器)	_	_	(1.7)		回転ナデ 回転ナデ	輪状つまみ
第25図	6		E18Tr			甕又は壺 (弥生土器)	_	10.0	(4.8)		ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第25図	7		E4⊠			甕又は壺 (弥生土器)	_	9.2	(2.4)		ヘラミガキ ナデ ナデ	
第28図	1	47	谷部4Tr		暗褐色 粘質土	小型甕 (土師器)	11.9	_	(5.7)		ハケメ ナデ ヘラケズリ ハケメ ナデ	
第28図	2		谷部4Tr		暗褐色 粘質土	竃 (土製品)	_	_	_		ハケメ ナデ ヘラケズリ ハケメ ナデ	煤付着

挿図番	号	図版		出土位置		器種	1	法量 (cm)	ı	調整備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高	神 金
第28図	3	47	谷部4Tr		暗褐色 粘質土	竜 (土製品)	_	_	(18.3)	外面 ハケメ ナデ 内面 ヘラケズリ ナデ? 媒付着
第28図	4	47	谷部4Tr		暗褐色 粘質土	電 (土製品)	_	_	(8.4)	外面 ハケメ ナデ 内面 ヘラケズリ ナデ
第28図	5	47	谷部7Tr		灰色土 (排土)	坏身 (須恵器)	_	6.0	(2.5)	外面 回転ナデ 底部回転ヘラ切り 内面 回転ナデ後ナデ
第28図	6	47	谷部7Tr		灰色土 (排土)	甕 (土師器)	190	_	(8.2)	外面 ハケメ ナデ 内面 ヘラケズリ ナデ
第28図	7	47	谷部7Tr		灰色土 (排土)	甕 (土師器)	19.6	_	(7.0)	外面 ナデ 内面 ヘラケズリ オサエ 強いナデ
第28図	8		谷部7Tr		灰色土 (排土)	甕 (土師器)	19.4	_	(8.6)	外面 ハケメ ナデ 内面 ヘラケズリ ナデ
第28図	9	47	谷部7Tr		灰色土 (排土)	椀 (土師器)	12.0	_	(5.7)	外面 回転ナデ 内面 ナデ ヘラミガキ

杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡 試掘調査・範囲確認調査出土遺物(石器)

挿図都	16号	図版		出土位置		器種	石材		法量 (cm)		重量(g)	備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	位于 1里	11 17	長	幅	厚	里里(g)	VIII →5
第18図	12		調査前 北側斜面		砂利層	砥石		9.6	6.8	3.7	202.79	
第25図	8		E14Tr			砥石	砂岩	16.1	7.4	6.0	887.66	

杉沢遺跡 A 丘陵北斜面 出土遺物 (土器)

挿図番	号	図版		出土位置		器 種	1	去量 (cm)		調整	備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種 別	口径	底 径	器高	柳 淮	VIII →5
第32図	1	6	A3Tr	土坑 SX102		甕 (弥生土器)	11.8	_	(15.8)	外面 ナデ? 内面 ヘラケズリ ナデ	凹線文
第32図	2	6	A3Tr	土坑 SX102		甕 (弥生土器)	_		(7.7)	外面 摩滅により不鮮明 内面 摩滅により不鮮明	刻目文
第32図	3		A3Tr	土坑 SX102		甕又は壺 (弥生土器)	_	10.2	(3.2)	外面 ハケメ ナデ 内面 ヘラケズリ	煤付着
第32図	4	6	A3Tr	土坑 SX102		壺 (弥生土器)	_	-	(5.8)	外面 ナデ 内面 ナデ	凹線文,列点文
第32図		6 (A-7)	A3Tr	土坑 SX102		甕 (弥生土器)	_	-	_	外面 ナデ 内面 ヘラケズリ ナデ	凹線文,刺突文

杉沢遺跡A丘陵北斜面出土遺物(鉄器)

挿図番	番号	図版		出土位置		器種		法量 (cm)		備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	谷 俚	長	幅	厚	
第32図	5	6 · 65	A3Tr	土坑 SX102		鎌	23.0	5.1	0.8	鍛造、素環頭鉄刀の転用か
第32図	6	6 · 65	A3Tr	土坑 SX102		鑿	9.9	1.3 ~ 3.15	基部 5mm 刃部 7mm	

杉沢遺跡 B 丘陵出土遺物 (土器・土製品)

挿図番	片 号	図版		出土位置		器 種		法量 (cm))			
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第52図	1		B1⊠	加工段 SX201	埋土2層	薨 (弥生土器)	_	5.0	(22,2)	外面 内面	ヘラミガキ ヘラケズリ	列点文,煤付着
第52図	2		B1⊠	加工段 SX201	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.1	(8.2)	外面 内面	ヘラミガキ オサエ ハケメ	
第53図	1	49	B2⊠	加工段 SX202	1層	無頸壺 (弥生土器)	10.8	_	(9.0)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ	凹線文, 円孔1ヵ所
第54図	1	48	B2⊠	加工段 SX203	埋土2層	甕 (弥生土器)	15.2	5.2	24.6	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文, 列点文
第54図	2		B2⊠	加工段 SX203	埋土2層	甕 (弥生土器)	17.6	_	(15.0)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ハケメ ナデ ヘラミガキ	凹線文, 列点文, 煤付着
第54図	3		B2⊠	加工段 SX203	埋土2層	蹇 (弥生土器)	18.0	_	(11.1)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ	凹線文, 列点文
第55図	1		B2⊠	加工段 SX204	埋土2層	甕 (弥生土器)	21.6	_	(9.0)	外面 内面	摩滅により不鮮明 オサエ ナデ ハケメ	凹線文
第55図	2		B2⊠	加工段 SX204	埋土2層	蹇 (弥生土器)	16.6	_	(5.3)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第55図	3		B2⊠	加工段 SX204	埋土2層	甕 (弥生土器)	_	_	(6.9)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文
第55図	4		B2⊠	加工段 SX204	埋土2層	悪又は壺 (弥生土器)	_	6.0	(5.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第55図	5		B2⊠	加工段 SX204P15	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.4	(3.9)	外面 内面	ミガキ ヘラケズリ オサエ	
第55図	6		B2⊠	加工段 SX204	埋土2層	悪又は壺 (弥生土器)	_	5.3	(2.5)	外面 内面	オサエ ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	
第55図	7	48	B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	甕 (弥生土器)	18.4	_	(19.9)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,列点文,煤付着
第55図	8		B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	甕 (弥生土器)	16.0	_	(10.0)	外面 内面	ハケメ ナデ 摩滅により不鮮明	凹線文,列点文,煤付着
第55図	9		B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	甕 (弥生土器)	19.8	_	(5.2)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第55図	10	5	B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	小型甕 (弥生土器)	11.6	_	(12.1)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ オサエハケメ	凹線文, 列点文
第55図	11		B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.3	(2.2)	外面 内面	ナデ 摩滅により不鮮明	
第55図	12		B2⊠	加工段 SX205	埋土2層?	高坏 (弥生土器)	16.6	_	(4.2)	外面 内面	ナデ ヘラミガキか? ナデ	
第56図	1		B2⊠	加工段 SX206	埋土 1~2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.9	(5.3)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	煤付着
第56図	2		B2⊠	加工段 SX206	埋土 1~2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.7	(3.9)	外面 内面	ヘラミガキ後ナデ ヘラケズリ オサエ	
第56図	3		B2⊠	加工段 SX206	埋土 1~2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.0	(4.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第56図	4		B2⊠	溝 SD221	埋土	甕 (弥生土器)	19.3	_	(5.4)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第57図	1		B3⊠	加工段 SX207	埋土	甕 (弥生土器)	18.6	_	(5.9)		ナデ ヘラケズリ ナデ	貼付突帯文+刻目
第57図	2		B3⊠	加工段 SX207	埋土	蹇 (弥生土器)	_	_	(8.2)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文,列点文
第57図	3	50	B3⊠	加工段 SX207	埋土	広口壺 (弥生土器)	16.0	_	(6.2)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第57図	4	49	B3⊠	加工段 SX207	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	10.5	(5.4)		オサエ ハケメ ナデ オサエ	
第57図	5		B3⊠	加工段 SX207	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.0	(6.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第57図	7		B3⊠	溝 SD222	埋土4層	高坏 (弥生土器)	21.2	_	(5.5)		ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	凹線文
第58図	1		B3⊠	加工段 SX208	埋土	高坏 (弥生土器)	_	_	(8.4)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文,底部円盤充填
第58図	2		B3⊠	溝 SD222	埋土4層	高坏 (弥生土器)	_	15.3	(3.0)		ナデ ナデ	凹線文
第59図	1	50	B4⊠	加工段 SX210	埋土1層	甕 (弥生土器)	10.8	_	(14.9)	外面 内面	オサエ ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ハケメナデ	凹線文
第59図	2		B4⊠	加工段 SX210	埋土1層	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.9	(1.5)	外面 内面	ナデ オサエ?	煤付着
第59図	3		B4⊠	加工段 SX210	埋土1層	高坏 (弥生土器)	25.8	_	(7.0)	l .	ナデ ヘラミガキ? ナデ	凹線文,刻目

挿図番	号	図版		出土位置		器 種		法量 (cm))		SB	£±: -₩.
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調 整	備考
第59図	4		B4⊠	加工段 SX210	埋土2層	高坏 (弥生土器)	_	12.9	(2.9)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ	凹線文
第60図	1	48	B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕 (弥生土器)	15.0	_	(12.0)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文
第60図	2	48	B5⊠	加工段 SX211	埋土	広口壺 (弥生土器)	33.4	_	(31.0)	外面 内面	オサエ ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文,列点文,羽状文
第60図	3	48	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	広口壺 (弥生土器)	26.4	_	(12.5)	外面 内面	ハケメ ナデ? ナデ	凹線文,刻目
第60図	4		B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.5	(7.5)	外面 内面	ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ヘラミガキ 底部は強いナデ	
第60図	5		B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.0	(2.9)	外面 内面	ヘラミガキ? オサエ	煤付着
第60図	6	49	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	高坏 (弥生土器)	22.2	_	(6.6)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ ヘラミガキ ナデ	凹線,底部充填,赤彩
第60図	7	50	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	高坏 (弥生土器)	19.6	_	(5.5)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文, 刻目
第60図	8	49	B5⊠	加工段 SX211	埋土	鉢 (弥生土器)	12.4	_	(6.8)	外面 内面	摩滅により不鮮明 ナデ	凹線文, 全体的にゆがみあり
第61図	1		B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕 (弥生土器)	14.8	_	(11.5)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第61図	2		B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕 (弥生土器)	15.6	_	(7.5)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第61図	3	48	B5⊠	加工段 SX211	埋土	広口壺 (弥生土器)	_	_	(16.4)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文, 羽状文
第61図	4	49	B5 ⊠	加工段 SX211	埋土	短頸壺 (弥生土器)	_	_	(14.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文
第61図	5		B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	9.4	(4.5)	外面 内面	オサエ ハケメ ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	
第61図	6		B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.3	(7.5)	外面 内面	ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第61図	7		B5⊠	加工段 SX211	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.7	(5.6)	外面 内面	ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ	
第61図	8		B5 ⊠	加工段 SX211	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.4	(3.5)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ オサエ ナデ	
第61図	9	49	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	高坏 (弥生土器)	_	9.9	(10.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ナデ	凹線文,円孔1列, 坏底部円盤充填
第62図	1		B5 ⊠	加工段 SX211	埋土	甕 (弥生土器)	19.0	_	(12.5)	外面 内面	摩滅により不鮮明 ナデ?	凹線文, 列点文
第62図	2		B5 ⊠	加工段 SX211	埋土	薨 (弥生土器)	_	_	(6.5)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ オサエ ナデ	列点文
第62図	3		B5 ⊠	加工段 SX211	埋土	壺 (弥生土器)	13.4	_	(4.5)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第63図	1	48	B5 ⊠	加工段 SX212	埋土	薨 (弥生土器)	13.6	_	(20.2)		ハケメ ナデ ナデ?	列点文,底部焼成後穿孔, 赤彩?
第63図	2		B5⊠	加工段 SX212	埋土	薨 (弥生土器)	18.6	_	(16.4)		ハケメ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,煤付着
第63図	3	50	B5⊠	加工段 SX212	埋土	甕 (弥生土器)	20.8	_	(2.3)		ナデ ナデ	凹線文,斜行線文
第63図	4		B5⊠	加工段 SX212	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.6	(3.0)		ヘラミガキ オサエ?	
第63図	5		B5⊠	加工段 SX212	埋土	高坏又は鉢 (弥生土器)	18.8	_	(5.7)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文
第64図	1	48	B5⊠	加工段 SX213	埋土	薨 (弥生土器)	23.2	_	(10.7)		ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第64図	2	50	B5⊠	加工段 SX213	埋土	甕 (弥生土器)	21.9	_	(3.6)	外面 内面	ナデ? ナデ?	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第64図	3		B5⊠	加工段 SX213	埋土	薨 (弥生土器)	18.2	_	(8.7)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第64図	4		B5⊠	加工段 SX213	埋土	短頸壺 (弥生土器)	5.7	_	(2.1)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第64図	5		B5 ⊠	加工段 SX213	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.3	(2.0)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ?	底部に簀子状の圧痕あり
第64図	6		B5 ⊠	加工段 SX213P5	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.4	(5.5)	外面 内面	ナデ? ヘラケズリ?	
第64図	7		B5⊠	加工段 SX213	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.5	(3.3)	外面 内面	摩滅により不鮮明 摩滅により不鮮明	

挿図番	- E.			出土位置				法量 (cm)	\			
掲載図	番号	図版 番号	地 区	遺構	層	器 種 別	口径	底径	器高	1	調整	備考
第64図	8		B5 ⊠	加工段 SX213	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.5	(3.6)	外面 内面	ヘラミガキ オサエ	
第64図	9		B5 🗵	加工段 SX213	埋土	高坏 (弥生土器)	15.7	_	(4.7)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文,斜行線文, 底部円盤充填
第64図	10		B5 ⊠	加工段 SX213	埋土	高坏 (弥生土器)	_	_	(3.3)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ	凹線文,底部円盤充填
第64図	11		B5 ⊠	加工段 SX213	埋土1層	高坏 (弥生土器)	_	_	(9.7)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ	凹線文,底部円盤充填
第64図	12	50	B5 ⊠	加工段 SX213	埋土1層	有溝土錘	長さ 3.0	_	幅2.0	オサニ	に ナデ	十字の溝
第66図	1		B5⊠	加工段 SX214	埋土	甕 (弥生土器)	25.6	_	(4.0)	外面 内面	ナデ 摩滅により不鮮明	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第66図	2		B5⊠	加工段 SX214	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	3.8	(8.4)	外面 内面	ナデ ナデ?	
第66図	3		B5⊠	加工段 SX214	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.2	(2.5)	外面 内面	ヘラミガキ ヘラケズリ	
第66図	4	50	B5 ⊠	溝 SD229	埋土	壺 (弥生土器)	_	_	(14.5)	外面 内面	ハケメ ナデ?	櫛描格子文, 櫛描波状文, 列点文
第66図	5		B5 ⊠	溝 SD229	埋土	広口壺 (弥生土器)	23.3	_	(2.5)	外面 内面	ナデ ハケメ	凹線文
第67図	1		B1⊠		黄褐色土	甕 (弥生土器)	18.8	_	(8.7)	外面 内面	ナデ ハケメ 摩滅により不鮮明	凹線文
第68図	1	49	B2⊠		地山直上	甕 (弥生土器)	23.2	_	(19.6)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第69図	1		B3 ⊠		表土	坏身 (須恵器)	10.4	_	(2.8)	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第69図	2		B3 ⊠		黒色土	坏身 (須恵器)	12.4	_	(4.6)	外面 内面	回転ナデ 底部 糸切り後へラで整形? 回転ナデ	
第69図	3		B3 ⊠		黒色土	坏又は皿 (土師器)	15.4	_	(2.4)	外面 内面	ナデ ナデ?	内外面に赤彩
第69図	4	49	B3 ⊠		黒色土	短頸壺 (弥生土器)	8.0	_	(14.4)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ナデ?	凹線文, 列点文, 櫛描文, 羽状文
第69図	5		B3⊠		黒色土	台付壺 (弥生土器)	_	7.5	(4.0)	外面 内面	ナデ 底部ケズリのちナデ オサエ ナデ	底部焼成後穿孔
第70図	1		B4 ⊠		黒色土	薨 (弥生土器)	13.2	_	(8.1)	外面 内面	ナデ オサエ ナデ	凹線文,煤付着
第70図	2		B4 ⊠		黒色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.2	(2.8)	外面 内面	ナデ ナデ	底部穿孔
第70図	3	50	B4 ⊠		黒色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.3	(2.6)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	底部穿孔か?
第70図	4		B4 ⊠		地山直上	台付鉢か? (弥生土器)	16.4	_	(5.6)	外面 内面	ナデ ハケメ?ナデ	凹線文
第70図	5		B4 ⊠		黄褐色土	高坏 (弥生土器)	20.0	_	(4.6)		ヘラミガキ ナデ ナデ ミガキ	凹線文,刻目
第70図	6		B4 ⊠		黄褐色土	高坏 (弥生土器)	_	14.8	(3.5)	外面 内面	ケズリ ナデ	凹線文
第70図	7	50	B4 ⊠		黄褐色土	深鉢 (縄文土器)	_	_	(4.1)	外面 内面	縄文ナデ	
第71図	1		B5 ⊠		明黄褐色土	甕 (弥生土器)	17.4	_	(12.7)		ハケメ ナデ ナデ	列点文
第71図	2	50	B5⊠		黄褐色土	広口壺 (弥生土器)	_	_	(8.3)		ハケメ オサエ ハケメ ナデ	凹線文, 円孔1ヵ所
第71図	3	49	B5⊠		黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.1	(10.6)		ヘラミガキ オサエ ヘラケズリ	
第71図	4		B5 ⊠		排土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.1	(6.5)		ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ナデ	底部充填
第71図	5	50	B5⊠		明黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.8	(4.0)		ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	底部焼成後穿孔
第71図	6	50	B5 ⊠		明黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	3.6	(1.8)		ヘラミガキ オサエ ナデ	
第71図	7		B5 ⊠		黒色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.0	(2.8)	外面 内面	ミガキ オサエ ナデ	底部焼成後穿孔
第71図	8		B5⊠		黒色土	高坏 (弥生土器)	25.0	_	(8.5)		ヘラミガキ ナデ ヘラミガキ	凹線文,刻目
第71図	9		B5 ⊠		黄褐色土	高坏 (弥生土器)	_	_	(8.8)		ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文,底部円盤充填
第71図	10		B5⊠		黄褐色土	台付鉢 (弥生土器)	18.5	8.2	9.4		ハケメ ナデ ハケメ ナデ	

杉沢遺跡B丘陵出土遺物(石器)

挿図番	· 号	図版		出土位置					法量 (cm)				
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	器 種	石材	長	幅	厚	重量(g)	備	考
第54図	4		B2⊠	加工段 SX203	埋土4層	自然石		9.4	9.6	5.7	743.57	軟質な石	
第55図	13	51	B2⊠	加工段 SX205	埋土1層	磨石+敲石		7.9	6.3	2.3	169.73	敲打痕あり,	磨面あり
第57図	6		B3⊠	加工段 SX207	埋土	自然石		13.0	11.1	8.6	1805.13		
第57図	8		B5⊠	加工段 SX208	埋土	石核	黒曜石	4.7	2.4	1.2	16.34		
第60図	9	51	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	磨石+敲石		6.9	6.5	2.5	144.06		
第60図	10	51	B5⊠	加工段 SX211	埋土上層	石包丁?		17.2	12.1	1.5	365.42		
第61図	10	50	B5⊠	加工段 SX211	埋土	石鏃	黒曜石	2.6	1.5	0.3	0.91	凹基無茎式	
第61図	11	51	B5⊠	加工段 SX211	埋土	砥石		9.1	5.3	3.0	194.23		
第64図	13	50	B5⊠	加工段 SX213	埋土	石鏃	安山岩	2.1	1.5	0.4	1.04	凹基無茎式	
第64図	14	50	B5⊠	加工段 SX213	埋土	石鏃	安山岩	2.1	1.4	0.3	0.63	平基無茎式,	先端を欠く
第65図	1	51	B5⊠	加工段 SX213P5	埋土	大型石包丁		12.9	11.8	2.2	305.54		
第65図	2		B5⊠	加工段 SX213	埋土	剥片	黒曜石	3.1	4.0	0.45	4.52		
第65図	3		B5⊠	加工段 SX213P28	埋土	剥片	黒曜石	2.5	2.7	1.0	5.56		
第66図	6		B5⊠	溝 SD229	埋土	石核	黒曜石	4.3	2.6	2.0	22.32		
第67図	2	50	B1⊠		地山直上	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.36	凹基無茎式	
第68図	2	50	B2⊠		黒色土	石鏃又は スクレイパー	黒曜石	2.7	2.5	0.4	3.16		
第69図	6		B3⊠		黒色土	剥片	黒曜石	2.2	2.1	0.4	1.80		
第70図	8	50	B4⊠		黒色土	石鏃	安山岩	2.3	1.5	0.3	1.04	平基無茎式	
第70図	9	50	B4⊠		黒色土	石鏃	安山岩	2.1	1.5	0.3	0.79	平基無茎式	
第70図	10	50	B4⊠		黒色土	石鏃	安山岩	1.7	1.4	0.35	0.68	凹基無茎式	
第70図	11	50	B4⊠		黄褐色土	石鏃	安山岩	2.4	1.4	0.4	0.84	凹基無茎式	
第71図	11	51	B5⊠		黄褐色土	敲石		6.8	5.3	3.0	161.33	敲打痕あり	

杉沢遺跡C丘陵出土遺物(土器・土製品)

挿図番	号	図版		出土位置		器種		法量 (cm))			
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第95図	1		C2⊠	竪穴建物 SI301 P2	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.3	(5.9)	外面 内面	ナデ 摩滅により不鮮明	
第96図	1	52	C2⊠	加工段 SX312	埋土1層	甕 (弥生土器)	20.4	5.8	38.0	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ ヘラミガキ	凹線文, 列点文
第96図	2		C2⊠	加工段 SX312	埋土2層	甕 (弥生土器)	26.2	_	(21.4)	外面 内面	摩滅により不鮮明 摩滅により不鮮明	凹線文, 列点文, 刺突文, 貼付突帯文+刻目
第96図	3		C2 🗵	加工段 SX312	埋土2層	甕 (弥生土器)	(13.0)	_	(6.0)	外面 内面	ナデ 摩滅により不鮮明	凹線文, 左上がり列点文
第96図	4		C2 🗵	加工段 SX312	埋土1層	甕 (弥生土器)	_	_	(2.7)	外面 内面	摩滅により不鮮明 摩滅により不鮮明	貼付突帯文+刻目
第96図	5	54	C2⊠	加工段 SX312	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	8.7	(4.7)	外面 内面	ナデ オサエ ナデ	
第96図	6		C2⊠	加工段 SX312	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.0	(4.7)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ	
第96図	7		C2⊠	加工段 SX312	埋土2層	壺 (弥生土器)	_	5.2	(6.1)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ オサエ	
第97図	1		C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土3層	甕 (弥生土器)	15.3	6.4	(27.4)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ	凹線文
第97図	2	52	C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土4層	甕 (弥生土器)	24.2	_	(22.3)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ? 摩滅により不鮮明	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第97図	3		C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土4層	甕 (弥生土器)	16.0	_	(8.2)	外面 内面	ハケメ ハケメ	凹線文,煤付着
第97図	4		C3 ⊠	竪穴建物 SI304	埋土4層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.0	(14.7)	外面 内面	ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	
第97図	5		C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.7	(4.8)	外面 内面	ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第97図	6		C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.3	(4.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ	
第97図	7	54	C3⊠	竪穴建物 SI304	埋土	壺 (弥生土器)	_	_	(5.0)	外面 内面	ハケメ 摩滅により不鮮明	羽状文,円形浮文
第98図	1	52	C3⊠	竪穴建物 SI305	埋土	甕 (弥生土器)	23.6	_	(18.2)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第98図	2		C3⊠	竪穴建物 SI305	溝3埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.3	(2.5)	外面 内面	ヘラミガキ 摩滅により不鮮明	
第99図	1	54	C3 ⊠	加工段 SX314	埋土下層	甕 (弥生土器)	19.2	_	(6.9)	外面 内面	ハケメ ハケメ ナデ	凹線文,貼付突帯文
第99図	2		C3⊠	加工段 SX314	埋土下層	甕 (弥生土器)	18.2	_	(5.2)	外面 内面	ハケメ ナデ ナデ	凹線文
第99図	3	52	C3⊠	加工段 SX314	埋土下層	甕 (弥生土器)	11.4	5.0	15.0	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文
第99図	4	53	C3⊠	加工段 SX314	埋土下層	短頸壺 (弥生土器)	12.8	_	(29.5)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ハケメ ヘラケズリ オサエ ハケメ ナデ ミガキ	凹線文,列点文
第99図	5		C3⊠	加工段 SX314	埋土下層	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.4	(6.0)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第99図	6	54	C3⊠	加工段 SX314	埋土下層	高坏 (弥生土器)	17.3	_	(5.2)		ナデ ヘラミガキ ナデ ハケメ ヘラミガキ	凹線文,刻目
第100図	1	53	C3⊠	加工段 SX315	埋土	甕 (弥生土器)	26.8	_	(17.5)		ハケメ ナデ ヘラケズリ?オサエ ナデ	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第100図	2		C3 区	加工段 SX315	埋土上層	高坏 (弥生土器)	17.8	_	(8.0)		ヘラミガキ ナデ	凹線文,底部円盤充填
第101図	1	52	C3 区	加工段 SX316	溝埋土	甕 (弥生土器)	_	5.2	(24.7)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ	凹線文
第101図	2	53	C3⊠	加工段 SX316	溝埋土	短頸壺 (弥生土器)	13.9	_	(24.7)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ハケメ ナデ	
第102図	1		C4⊠	加工段 SX317	埋土~覆土	蹇 (弥生土器)	13.4	_	(8.9)		ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文,列点文
第102図	2		C4 ⊠	加工段 SX317	覆土	甕 (弥生土器)	_	4.8	(3.1)	外面 内面	ヘラミガキ オサエ ヘラケズリ	
第102図	3	53	C4⊠	加工段 SX317	埋土	高坏 (弥生土器)	17.4	_	(5.8)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ナデ ヘラミガキ	凹線文,刻目
第102図	4		C4⊠	加工段 SX318	埋土	台付壺 (弥生土器)	_	7.2	(1.9)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第102図	5		C4⊠	加工段 SX319	埋土	甕 (弥生土器)	17.4	_	(4.8)		ナデ 摩滅により不鮮明	凹線文

挿図番	号	図版		出土位置		器 種	:	法量 (cm))		調整	備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種 別	口径	底径	器高			1
第102図	6	54	C4⊠	加工段 SX319	埋土	短頸壺 (弥生土器)	10.4	_	(6.0)		ナデ ハケメ	凹線文
第102図	7		C4⊠	加工段 SX319	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.8	(4.5)	外面 内面	ヘラミガキ オサエ ナデ	
第102図	8		C4⊠	加工段 SX319	埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	8.0	(3.7)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	
第103図	1	49	C4⊠	加工段 SX320P6	埋土2層	甕 (弥生土器)	21.6	_	(17.1)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ ハケメ	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第103図	2		C4 🗵	加工段 SX320	埋土	甕 (弥生土器)	22.8	_	(19.2)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文
第103図	3		C4 ⊠	加工段 SX320	埋土下層	甕 (弥生土器)	22.6	_	(6.2)	外面 内面	ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文
第103図	4		C4⊠	加工段 SX320	埋土	甕 (弥生土器)	_	5.0	(2.7)	外面 内面	ヘラミガキ ハケメ	
第103図	5		C4⊠	加工段 SX320	埋土	台付甕又は 台付壺 (弥生土器)	_	6.2	(2.9)	外面内面	ヘラミガキ ナデ オサエ	
第103図	6	7	C4⊠	加工段 SX320	埋土	台付鉢 (弥生土器)	15.8	11.7	25.2	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文,底部円盤充填,長楕 円形刺突文,矢板形刺突文
第104図	1		C4 ⊠	溝 SD322	埋土	甕 (弥生土器)	20.8	_	(15.8)	外面 内面	ハケメ? 摩滅により不鮮明	凹線文, 列点文
第104図	2		C4⊠	溝 SD322	埋土	甕 (弥生土器)	16.2	_	(4.5)	外面 内面	ハケメ 摩滅により不鮮明	凹線文
第105図	1	52	C1 🗵		黄灰色土黄褐 色土・砂利層	甕 (弥生土器)	19.4	_	(20.3)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ	凹線文,列点文, 貼付突帯文+刻目
第105図	2		C1 🗵		黄灰色土	甕 (弥生土器)	20.0	_	(18.1)	外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第105図	3		C1⊠		黄灰色土	甕 (弥生土器)	12.0	_	(6.5)	外面 内面	ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文
第105図	4	7	C1⊠		黄灰色土	直口壺 (弥生土器)	7.5	5.7	16.0	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文, 列点文
第105図	5		C1⊠		黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.6	(4.0)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ? オサエ ナデ	
第105図	6		C1⊠		黄灰色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.4	(3.0)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第105図	7		C1 ⊠		地山1層上	甕又は壺 (弥生土器)	-	5.4	(2.8)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ナデ オサエ	
第105図	8		C1⊠		黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.4	(2.9)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第105図	9		C1 ⊠		黄灰色土	高坏 (弥生土器)	17.4	_	(3.7)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第105図	10		C1⊠		砂利層	高坏 (弥生土器)	_	13.2	(3.1)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第105図	11		C1⊠		灰褐色 砂質土	高坏 (弥生土器)		_	(11.7)	1	ナデ ナデ 絞り	凹線文
第105図	12	53	C1 ⊠		黄褐色土	高坏 (弥生土器)	10.8	_	(13.7)		ナデ ナデ 絞り	凹線文
第107図	1		C2⊠		表土	坏蓋 (須恵器)	19.8	_	(1.8)		回転ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ	
第107図	2		C2⊠		表土	坏身 (須恵器)	12.6	9.2	2.9		回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ	
第107図	3		C2⊠		_	甕 (弥生土器)	_	_	(9.3)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	列点文
第107図	4		C2 🗵		地山直上	広口壺 (弥生土器)	_	_	(9.0)		ナデ ナデ	凹線文
第107図	5		C2⊠		表土	甕 (弥生土器)	_	_	(4.8)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ	
第107図	6		C2 🗵		_	甕 (弥生土器)	_	_	(7.5)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ オサエ ナデ	
第107図	7		C2⊠		黒色土	甕又は台付壺 (弥生土器)	_	5.6	(3.0)		ナデ ナデ	凹線文
第108図	1	52	C3 ⊠		明褐色土	甕 (弥生土器)	7.3	3.5	10.5		ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ ナデ	
第108図	2		C3⊠		_	甕 (弥生土器)	18.6	_	(9.7)		ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第108図	3		C3 ⊠		黄褐色土	甕 (弥生土器)	14.9	_	(4.5)		ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文

挿図番	号	図版		出土位置		器 種		法量 (cm))	調整	備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種 別	口径	底 径	器高	河 登	7相 考
第108図	4	53	C3⊠		地山1層上	壺 (弥生土器)	12.8	_	(7.3)	外面 ハケメ ナデ ヘラミガキ 内面 ハケメ ナデ	凹線文,波状文
第108図	5	54	C3⊠		黄褐色土	壺 (弥生土器)	_	_	(5.0)	外面 ハケメ ナデ ヘラミガキ 内面 ナデ ヘラケズリ	凹線文,列点文
第108図	6	54	C3⊠		_	壺 (弥生土器)	19.3	_	(6.8)	外面 ナデ ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ ナデ	凹線文,列点文
*1		54	C3⊠		_	甕 (弥生土器)				外面 ナデ 内面 ナデ	凹線文, 101図-2に類似
第110図	1		C4⊠		地山1層上	甕 (弥生土器)	_	7.8	(4.3)	外面 摩滅により不鮮明 内面 オサエ	
第110図	2	54	C4⊠		地山1層上	甕 (弥生土器)	_	5.4	(3.1)	外面 ナデ ヘラミガキ 内面 オサエ ヘラケズリ ナデ	底部燒成前穿孔
第110図	3	54	C4⊠		地山1層上	台付壺 (弥生土器)	_	7.4	(4.4)	外面 ナデ ヘラミガキ 内面 オサエ ヘラケズリ ナデ	底部円盤充填

杉沢遺跡C丘陵出土遺物(石器)

挿図番	 号	図版		出土位置		nn 44	II		法量 (cm)		**P / \	ett
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	器種	石 材	長	幅	厚	重量(g)	備考
第98図	3		C3⊠	竪穴建物 SI305	溝1埋土	石鏃	安山岩	2.2	1.6	0.3	0.95	凹基無茎式
第98図	4		C3区	竪穴建物 SI305	埋土	剥片	黒曜石	1.7	3.0	0.6	2.97	
第101図	3	54	C3区	加工段 SX316	埋土2層	磨石		11.7	7.2	4.5	634.81	石斧の転用石製品
第101図	4	54	C3区	加工段 SX316	床面	有溝石錘		5.5	7.1	0.5	279.49	
第101図	5		C3区	加工段 SX316	埋土上面	石鏃	黒曜石	0.2	1.3	0.25	0.48	凹基無茎式
第103図	7	55	C4⊠	加工段 SX320	埋土	大型石包丁		8.6	12.5	1.4	178.27	
第103図	8		C4⊠	加工段 SX320	埋土	大型石包丁		9.0	9.0	1.9	150.37	
第106図	1	55	C1 ⊠		黄灰色土	砥石		16.8	5.1	5.0	529.93	
第106図	2	55	C1⊠		砂利層	砥石		7.4	8.5	2.5	137.43	
第106図	3		C1⊠		黄褐色土	石鏃	安山岩	1.8	1.4	0.3	0.47	平基無茎式
第106図	4		C1区 (C14Tr付近)		表土	磨石?		12.3	7.2	4.2	560.12	
第107図	8	55	C2⊠		_	石包丁		12.2	12.0	0.9	165.22	
第107図	9	55	C2⊠	タコ壺横 (SX362)	表土	敲石		9.1	8.3	3.4	362.03	
第109図	1	54	C3区		表採	太型 蛤刃石斧		(11.3)	4.7	(0.2)	169.24	
第109図	2	54	C3⊠		黄灰色 砂質土	太型 蛤刃石斧		16.8	6.2	4.3	740.88	
第109図	3	55	C3区		黄褐色土	砥石		16.0	7.5	0.2	229.47	
第109図	4	55	C3区		明褐色土	砥石		11.0	11.1	2.0	380.00	
第110図	4		C4⊠		明黄褐色土	石鏃	黒曜石	3.2	1.4	0.5	2.27	凸基有茎式
第110図	5		C4⊠		明褐色土	石鏃	黒曜石	2.9	2.3	0.5	1.56	凹基無茎式

杉沢遺跡D丘陵出土遺物(土器・土製品)

挿図番		図版	版出土位置			器 種		法量(cm))	1		
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	種別	口径	底径	器高	1	調整	備考
第135図	1		D2区	切土法面	切土上面	坏 (土師器)	13.6	_	(2.5)	外面 内面	ナデ	内外面赤彩
第135図	2		D2区	切土法面	切土上面	坏 (土師器)	15.8	_	(2.3)	外面 内面	ナデ ナデ	内外面赤彩
第135図	3		D2⊠	切土法面	切土上面	坏 (土師器)	_	_	(2.4)	外面 内面	ナデ ナデ	内外面赤彩
第135図	4	66	D2⊠	切土法面	切土上面	坏 (土師器)	13.4	_	(1.9)	外面 内面	ナデ 底部回転糸切り ナデ	内外面赤彩
第135図	5	67	D1区	切土法面	切土上面	壺 (須恵器)	_	_	(6.8)	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第135図	8	66	D1区	波板状 凹凸面	埋土	壺 (須恵器)	_	10.0	(3.7)	外面 内面	回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ナデ	
第135図	9	67	D7区	溝 SD411	埋土	椀 (土師器)	_	_	(3.7)	外面 内面	ハケメ ナデ ナデ	赤彩
第136図	1		D4区		表土	火鉢 (土師質土製品)	31.2	_	(4.8)	外面 内面	強いナデ? ナデ	
第136図	2		D4区		表土	焼台 (土師質土製品)	長さ 12.4	_	幅2.7	外面 内面	ナデ ナデ	円孔4カ所金属の痕跡あり
第136図	3		D4⊠		表土	移動式竈 (土師質土製品)		_	_	外面	庇接合部に指による粗いナデ	
第136図	4		D4⊠		黄色砂質土	長頸壺 (須恵器)	15.6	_	(3.0)	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	内面に自然釉付着
第136図	5		D4区		黄褐色土	坏身 (須恵器)	_	_	(3.5)	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第136図	6	66	D3・4区		黒色土・ 表土	双耳壺 (須恵器)	_	_	(5.5)	外面 内面	オサエ ナデ 回転ナデ	把手に円孔1ヵ所
第137図	2	67	D5区		黒色土	広口壺 (弥生土器)	18.0	_	(6.4)		ナデ? ヘラケズリ?	凹線,羽状文
第138図	1	67	D7区		灰色土・黒色 土灰黄褐色土	甕 (土師器)	24.0	_	(13.0)		ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	
第138図	2	66	D7区		灰褐色	甕 (土師器)	18.9	_	(8.8)	外面 内面	強いナデ? ヘラケズリ ナデ	
第138図	3		D7区		_	甕 (土師器)	21.3	_	(6.0)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	
第138図	4	66	D7区		黒褐色 · 浅黄 · 灰色	甕 (土師器)	19.1	_	(6.0)	外面 内面	ナデ? ヘラケズリ ナデ	
第138図	5	66	D7区		_	飯 (土師器)	24.3	_	(13.6)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	
第138図	6		D7区		黒色土	椀 (土師器)	13.2	_	(4.0)	外面 内面	ナデ ナデ	
第138図	7		D7⊠		黒褐色土	坏又は皿 (須恵器)		9.1	(1.1)	外面 内面	回転ナデ 底部回転ヘラ切り 回転ナデ	
第138図	8	67	D7⊠		黒褐色土	坏身 (須恵器)	(11.7)	_	(2.9)	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	外面に自然釉付着
第138図	9	66	D7⊠		黒褐色土	坏身 (須恵器)	9.5	_	3.8	外面 内面	回転ナデ 底部ヘラケズリ 回転ナデ	
第138図	10	66	D7⊠		黒褐色土	小型壺 (須恵器)	_	7.2	(3.5)	外面 内面	回転ナデ 底部ヘラケズリ 回転ナデ	

杉沢遺跡D丘陵出土遺物(石器)

挿図番	号	図版		出土位置		器種	石材		法量 (cm)		重量 (g)	備考
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	命 但	1 1 11	長	幅	厚	里里(g)	7HI →5
第135図	7	67	D2⊠	切土面	赤色盛土 直上	石鏃	安山岩	1.9	1.2	0.35	0.78	凹基無茎式
第136図	8	67	D1区	_	黒色土	石鏃	安山岩	2.6	1.4	0.5	1.40	凹基無茎式
第136図	9	67	D2⊠	_	黒色土	石鏃	安山岩	2.7	0.4	0.3	1.16	平基無茎式
第137図	3	67	D6区	_	表土	石鏃	安山岩	2.5	1.7	0.45	1.25	凹基無茎式
第138図	11	66	D7区	_	黒褐色土	磨製石斧		(8.1)	5.5	3.8	203.48	

杉沢遺跡D丘陵出土遺物(瓦)

挿図番	 号	図版	器 種	出土	位置	法	量	調整手法	備考
掲載図	番号	番号	種 別	地 区	層	厚 (cm)	重量 (g)	調 笠 ナ 伝	7/11 - 45
第135図	6	66	平瓦	D2⊠	赤色盛土	厚 3.0	454.83	凹面 布目 模骨痕 凸面 格子タタキ ナデ 補足タタキ	広端ヘラケズリ、ワラ座痕
第136図	7	67	丸瓦	D4⊠	黒色土	厚 1.7	61.54	凹面 布目 凸面 摩滅により不鮮明	広端ヘラケズリ (面取りなし)
第137図	1	67	平瓦	D5区	黒色土	厚 2.3	144.49	凹面 摩滅により不鮮明 凸面 格子タタキ	狭端

杉沢遺跡 D 丘陵 (鉄器)

挿図番	音号	図版		出土位置		器種		法量 (cm)		備考
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	谷 俚	長	幅	厚	加考
第138図	12	65 · 67	D7⊠		黒色土	鎌	10.4	2.8~3.0	0.4	鍛造、先端と基部欠損

杉沢Ⅱ遺跡出土遺物(土器・土製品)

		ı			- 12				CHH/	T		
挿図番	1	図版 番号	bl. 17	出土位置	- F	器 種 別		法量 (cm)		-	調整	備考
掲載図 第149図	番号	田勺	地 区 E1区	遺 構 加工段	居 埋土1層	蹇	口径	底径	器高 (5.0)	外面	ナデ	
				SX511 加工段		(土師器)				内面 外面	ヘラケズリ ナデ ナデ	
第149図	2		E1 🗵	SX511	埋土1層	(土師器) 甕又は壺	22.0	_	(16.3)	内面 外面	ヘラケズリ ナデ	
第149図	3		E1 🗵	溝 SD521	埋土	(弥生土器)	_	6.6	(2.1)	内面	オサエ ナデ	
第150図	1		E2⊠	加工段 SX512	埋土	甕 (弥生土器)	(6.7)	_	(4.8)	外面内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第150図	2	57	E2区	加工段 SX512	溝埋土	壺 (弥生土器)	14.7	_	(5.8)	外面内面	ナデ	凹線文
第150図	3		E2区	加工段 SX512	溝埋土	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.6	(2.5)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	
第150図	4	58	E2区	加工段 SX512	溝埋土	台付壺 (弥生土器)	_	8.2	(4.4)	外面 内面	ナデ ナデ	凹線文
第150図	5		E2⊠	加工段 SX512	溝埋土	高坏 (弥生土器)	18.2	_	(3.2)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ	凹線文
第150図	6	59	E2区	加工段 SX512	溝埋土	高坏 (弥生土器)	_	11.6	(2.5)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ	凹線文
第150図	7	58	E2区	加工段 SX512	溝埋土	高坏 (弥生土器)	_	9.8	(2.2)	1 '	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文, 半截竹管文
第150図	9	56	E2区	土坑SK532	埋土1層	甕 (弥生土器)	20.7	_	(13.2)	外面内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第151図	1	56	E3区	竪穴建物 SI501	埋土2層	蹇 (弥生土器)	15.0	5.0	24.0	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ後ナデ?	凹線文,列点文,煤付着
第151図	2	56	E3区	竪穴建物 SI501 土器ピット	埋土	赛 (弥生土器)	12.2	_	(15.8)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,列点文
第151図	3		E3区	竪穴建物 SI501	埋土5層 直上	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.9	(2.0)	外面 内面	ナデ オサエ ナデ	
第151図	4	58	E3⊠	竪穴建物 SI501	埋土4層 上面	壺 (弥生土器)	_	_	(19.2)	外面 内面	ハケメ ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,列点文
第153図	1		E3区	溝 SD522	埋土1層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.2	(2.2)	1	ナデ ナデ	
第153図	2		E3区	溝 SD522	埋土1層	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.15	(2.0)	外面 内面	ヘラミガキ オサエ ナデ	
第153図	3		E3区	溝 SD522	埋土1層	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.3	(3.0)	外面 内面	ナデ オサエ?ナデ?	
* 2		59	E3区	溝 SD522	埋土1層	甕 (弥生土器)	_	_	_	外面 内面	ナデ ハケメ ヘラミガキ	貼付突帯文+刻目, 外面に赤色顔料
第154図	1	59	E4⊠	加工段 SX513	埋土3層	甕 (弥生土器)	21	_	(6.4)	1	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文
第154図	2	56	E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	甕 (弥生土器)	17.0	_	(5.5)	外面 内面	ハケメ ナデ	凹線文
第154図	3		E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	甕 (弥生土器)	_	_	(9.0)	1 '	ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第154図	4	57	E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	壺 (弥生土器)	14.7	_	(3.8)	外面 内面		凹線文
第154図	5		E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	9.1	(4.8)	外面 内面	ナデ ヘラミガキ ナデ	
第154図	6		E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	悪又は壺 (弥生土器)		8.2	(4.7)		ヘラミガキ オサエ ナデ	
第154図	7		E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	甕又は壺 (弥生土器)	_	5.5	(2.0)	1	ハケメ ナデ ナデ オサエ	
第154図	8	58	E4⊠	加工段 SX513	埋土3層	高坏 (弥生土器)	14.8	_	(4.7)	1 '	ヘラミガキ ハケメ ナデ	凹線文,底部充填
第154図	9	58	E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	高坏 (弥生土器)	_	8.9	(3.5)	外面		四線文,赤彩, 三角形の透かし4ヵ所
第154図	10	59	E4⊠	加工段 SX513	埋土2層	蓋? (弥生土器)	長さ 4.4	_	幅5.4	外面内面	オサエ ナデ	
第154図	11	7	E4⊠	加工段 SX513	埋土3層	有溝土錘 (土製品)	長さ 4.8	_	幅 1.9		- ナデ	
第155図	1	56	E4⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	赛 (弥生土器)	17.3	_	(21.0)		ハケメ ナデヘラミガキ 部分的にタタキ残る? ヘラケズリ ハケメ ナデ	凹線文,列点文,煤付着
第155図	2	57	E4⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	広口壺 (弥生土器)	26.4	_	(12.2)	-	摩滅により不鮮明	凹線文
			L									l

挿図番	号	図版		出土位置		器種		法量 (cm))			
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第155図	3	57	E4 ⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	広口壺 (弥生土器)	_	6.4	(59.5)		ハケメ ヘラミガキ ヘラケズリ ハケメ	凹線文, 列点文, 羽状文
第155図	4	59	E4 🗵	加工段 SX514	埋土2層 上面	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.7	(5.5)		ヘラミガキ オサエ ナデ	
第155図	5		E4 🗵	加工段 SX514	埋土2層 上面	甕又は壺 (弥生土器)	_	7.6	(2.5)	外面 内面	ヘラミガキ ナデ オサエ ナデ	
第155図	6	58	E4⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	高坏 (弥生土器)	19.7	12.2	(20.1)		ハケメ ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第155図	7	58	E4⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	高坏 (弥生土器)	16.4	_	(7.0)		ヘラミガキ ハケメ	凹線文,煤付着
第155図	8	58	E4⊠	加工段 SX514	埋土2層 上面	高坏 (弥生土器)	_	19.2	(18.2)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第156図	1	57	E5 🗵	加工段 SX515	埋土 1・2層	甕 (弥生土器)	24.8	_	(35.0)	外面 内面	ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文, 列点文, 刺突文
第156図	3	59	E5 🗵	加工段 SX516	埋土	甕 (弥生土器)	27.4	_	(7.5)	外面 内面	ハケメ ナデ オサエ ハケメ ナデ	凹線文,刺突文
第156図	4	59	E6⊠	加工段 SX518	埋土	甕 (弥生土器)	23.0	_	(6.5)	外面 内面	ハケメ オサエ ハケメ ナデ	凹線文
第157図	1	56	E1⊠		灰色土	坏蓋 (須恵器)	15.7	_	3.1	外面 内面	回転ヘラケズリ後ナデ ナデ	輪状つまみのナデつけ
第157図	2	56	E1 🗵		明黄褐色土	坏蓋 (須恵器)	13.0	_	3.0	外面 内面	回転ヘラケズリ後回転ナデ ナデ	輪状つまみ
第157図	3	56	E1区		灰色土	坏蓋 (須恵器)	12.6	_	2.6	外面 内面	回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ナデ	輪状つまみ
第157図	4	56	E1 🗵		黄褐色土 暗褐色土	無蓋高坏 (須恵器)	16.0	8.9	10.2	外面 内面	回転ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ オサエ	台形の透かし1ヵ所, 未貫通1ヵ所
第157図	5		E1 🗵		明黄褐色土	高坏 (弥生土器)	_	_	(8.6)	外面 内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第157図	6	59	E1 🗵		明黄褐色土	高坏 (弥生土器)	_	19.2	(4.5)	外面 内面	ハケメ ヘラケズリ ナデ	凹線文,赤彩
第157図	7	58	E1 🗵		明黄褐色土	高坏 (弥生土器)	_	18.9	(5.5)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第158図	1	58	E2 🗵		黄橙色土	台付甕? (弥生土器)	14.6	_	(9.5)	外面 内面	ハケメ ナデ ヘラケズリ オサエ ハケメ ナデ	凹線文,列点文,煤付着
第158図	2		E2 🗵		明黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.0	(5.0)	外面 内面	オサエ ナデ ヘラミガキ オサエ ナデ	
第159図	1		E3 🗵		にぶい 黄褐色土	甕 (弥生土器)	18.5	_	(5.8)	外面 内面	ハケメ ナデ ナデ	凹線文
第159図	2		E3 🗵		にぶい 黄褐色土	甕 (弥生土器)	_	_	(8.9)	外面内面	ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第159図	3		E3 🗵		にぶい 黄褐色土	甕又は壺 (弥生土器)	_	4.5	(1.4)	内面	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ ナデ	
第159図	4		E3 🗵		黄灰色	甕又は壺 (弥生土器)	_	6.4	(2.8)	内面	摩滅により不鮮明 オサエ ナデ	
第159図	5		E3 🗵		_	高坏 (弥生土器)	_	12.5	(4.5)	内面	ナデ ヘラケズリ ナデ	凹線文
第160図	1		E4⊠		にぶい 黄褐色土	甕 (弥生土器)	18.0	_	(7.2)	内面	ハケメ 強いナデ ハケメ ナデ	凹線文
第160図	2	56	E4⊠		灰褐色土層 上面	甕 (弥生土器)	_	_	(8.4)	内面	ナデ ケズリ ナデ	凹線文, 貼付突帯文+刻目
第160図	4		E5 🗵		表土	坏身 (須恵器)	12.0	_	(3.5)		回転ナデ	
第160図	5		E6 ⊠		黄褐色土	坏身 (須恵器)	15.8		6.4		回転ナデ 底部ヘラケズリ 回転ナデ	

杉沢Ⅱ遺跡出土遺物(石器)

1年四平	ž- <u>p.</u>	l		山工산學					注旦 (-)			
挿図番		図版 番号	bi. E7	出土位置	R	器 種	石 材	EF.	法量 (cm)	IF.	重量(g)	備考
掲載図	番号	田力	地区	遺構	層			長	幅	厚		
第149図	4	59	E1⊠	土坑SK531	黒色土	打欠石錘		7.3	6.1	2.2	136.97	
第150図	8	60	E2⊠	加工段 SX512	黒色土 1層上	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.6	1.04	凹基無茎式
第152図	1	59	E3区	竪穴建物 SI501	埋土2層	扁平片刃 石斧		13.5	6.6	2.3	342.09	
第152図	2	59	E3区	竪穴建物 SI501 焼土土坑	2層	石包丁	安山岩	4.9	3.8	0.7	17.00	石包丁の端部?
第152図	3	60	E3⊠	竪穴建物 SI501	床面直上	砥石		23.5	18.0	2.5	1433.62	置砥
第153図	4	60	E3⊠	溝 SD522	埋土1層	石鏃	黒曜石	1.2	1.8	0.5	1.35	凹基無茎式
第153図	5	7	E3区	溝 SD522	埋土2層	有溝石錘		5.4	1.9	0.9	7.96	九州型石錘
第153図	6	59	E3区	溝 SD522	埋土	打欠石錘		9.6	9.5	2.1	283.93	側面面取りされる
第154図	12	60	E4⊠	加工段 SX513	2層	砥石		8.8	8.2	4.3	300.49	ノミ痕?あり
第155図	9	60	E4⊠	加工段 SX514	3層	石鏃	黒曜石	1.4	0.9	0.2	0.21	凹基無茎式
第156図	2	59	E5⊠	加工段 SX515	埋土	石包丁		6.8	(9.3)	0.5	63.57	全体的に剥離
第157図	8	60	E1⊠		明黄褐色土	石鏃	安山岩	2.6	2.0	0.4	1.38	凹基無茎式
第157図	9	60	E1⊠		明黄褐色土	石鏃	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.42	凹基無茎式
第158図	3	60	E2⊠		黄色土	石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.4	0.77	凹基無茎式
第158図	4	60	E2区		明黄褐色土	石鏃	安山岩	1.6	1.6	0.3	0.42	凹基無茎式
第158図	5	59	E2区		明黄褐色土	石包丁	安山岩	10.9	6.1	1.0	78.73	刃物加工は表面のみ
第160図	3	60	E4区 (加工段3付近)		黄褐色土	砥石		7.1	2.9	2.2~2.9	65.12	提砥
第160図	6		E5区		表土	剥片	黒曜石	2.0	2.5	0.3	2.47	

杉沢Ⅱ遺跡出土遺物(鉄器)

挿図番	 号	図版		出土位置		器種		法量 (cm)		備考
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	命 俚	長	幅	厚	/相 <i>号</i>
第152図	4	4 · 65	E3区	竪穴建物 SI501	埋土2層	袋状鉄斧	9.8	3.9~5.6	0.9	数 造

杉沢Ⅱ遺跡出土遺物(ガラス製品)

挿図番	 号	図版		出土位置		種別	器種		法 量		備考
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	1里 加	荷性	直径	孔径	長	/HI -45
第152図	5	4	E3区	竪穴建物 SI501	埋土2層	ガラス玉	小玉	(径1) 5.9 (径2) 5.8	2.0	5.5	引き伸ばし法
第152図	6	4	E3⊠	竪穴建物 SI501	埋土2層	ガラス玉	小玉	(径1) 5.5 (径2) 5.3	1.8~2.3	4.5	引き伸ばし法、孔面に突起あり
第152図	7	4	E3区	竪穴建物 SI501	埋土2層	ガラス玉	小玉	(径1) 5.5 (径2) 5.5	1.8	5.3	引き伸ばし法
第152図	8	4	E3⊠	竪穴建物 SI501	埋土2層	ガラス玉	小玉	(径1) 4.5 (径2) 4.5	1.3	4.0	引き伸ばし法
第152図	9	4	E3区	竪穴建物 SI501	焼土内	ガラス玉	小玉	(径1) 5.5 (径2) —	1.0	6.5	引き伸ばし法、孔に平行して半裁
第152図	10	4	E3区	竪穴建物 SI501	埋土4層	ガラス玉	小玉	(径1) 4.3 (径2) 4.0	1.5	3.5	引き伸ばし法,表面風化

杉沢横穴墓群出土遺物(土器)

挿図番	片号	図版		出土位置		器 種		法量(cm)		Zm +ta	FART LINE
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第164図	1	61	1号横穴墓	羨道部	14層	坏蓋 (須恵器)	(15.6)		2.4	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	輪状つまみ
第164図	2	61	1号横穴墓	前庭部		坏蓋 (須恵器)	(16.0)		3.4	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	輪状つまみ
第164図	3	61	1号横穴墓	前庭部	8層	坏蓋 (須恵器)				外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第164図	4	61	1号横穴墓	前庭部		坏身 (須恵器)	(8.0)	(4.7)	3.8	外面内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ	
第164図	5	61	1号横穴墓	前庭部	14層	坏身 (須恵器)	(13.0)	(8.6)	3.6	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	坏身硯
第164図	6	61	1号横穴墓	前庭部	14層	皿 (土師器)	16.0	10.0	3.4	外面 内面	ナデ ナデ	内外面に赤彩
第166図	1	61	2号横穴墓	斜面周辺		高台付坏身 (須恵器)	(13.2)	(6.2)	5.1	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第166図	2	61	2号横穴墓	斜面周辺		高台付坏身 (須恵器)	(14.0)	(7.6)	5.0	外面 内面	回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	
第166図	3	61	2号横穴墓	斜面周辺		長頸壺 (須恵器)	(8.8)			外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第168図	1	61	3号横穴墓	前庭部	20層	高台付坏身 (須恵器)	(13.0)	(8.3)	5.2	外面 内面	回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ 静止ナデ	
第168図	2	61	3号横穴墓	玄室	17~18層	壺 (須恵器)				外面 内面	回転ナデ カキメ 回転ナデ	
第171図	1	61	4号横穴墓	前庭部	16層	坏蓋 (須恵器)	14.3		2.8	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ,14号横穴墓前 庭部出土坏蓋と接合
第171図	2	61	4号横穴墓	前庭部	16層	高台付坏身 (須恵器)	12.8	7.7	5.0	外面 内面	回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ	
第171図	3	61	4号横穴墓	玄室	床面上	高台付坏身 (須恵器)	8.6	4.8	4.8	外面 内面	回転ヘラケズリ回転ナデ 回転ナデ	胴下半部にヘラ記号
第171図	4	61	4号横穴墓	前庭部		甕 (土師器)	(13.0)			外面 内面	ナデ ハケメ ヘラケズリ	
第175図	1	62	5号横穴墓	玄門	床面上	高台付長頸壺 (須恵器)	9.3	7.2	21.6	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	沈線
第178図	1	62	7号横穴墓	前庭部	20~21層	坏蓋 (須恵器)	(15.1)		2.7	外面内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 天井部ヘラ切り後ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ、178-2とセット
第178図	2	62	7号横穴墓	前庭部	20~21層	高台付坏身 (須恵器)	16.1	8.6	5.0	外面内面	回転ナデ 底部ヘラ切り痕後ナデ 回転ナデ	178-1とセット
第178図	3	62	7号横穴墓	前庭部	20~21層	坏身 (須恵器)	(14.4)			外面 内面	回転ナデ 回転ナデ	
第178図	4	62	7号横穴墓	前庭部	20~21層	高台付坏身 (須恵器)	(14.0)	(8.5)	4.9	外面 内面	回転ナデ 底部静止糸切り 回転ナデ	
第180図	1	62	8号横穴墓	斜面周辺		坏蓋 (須恵器)	(13.7)				回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ
第180図	2	62	8号横穴墓	斜面周辺		坏蓋 (須恵器)					回転ヘラケズリ 静止ナデ	輪状つまみ
第180図	3	62	8号横穴墓	前庭部	16層	坏蓋 (須恵器)	(15.8)				回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ後ナデ	
第180図	4	62	8号横穴墓	斜面周辺		坏蓋 (須恵器)	(14.7)				回転ナデ 回転ナデ	
第180図	5	62	8号横穴墓	斜面周辺		坏身 (須恵器)		(8.8)			回転ヘラケズリ静止ナデ 回転ナデ	
第180図	6	62	8号横穴墓	斜面周辺		高台付坏身 (須恵器)	(12.8)	(8.0)	4.8		回転ナデ 底部ヘラ切り後ナデ 回転ナデ 静止ナデ	
第180図	7	62	8号横穴墓	斜面周辺		高台付坏身 (須恵器)		(10.8)			回転ナデ 静止ナデ	
第192図	1	63	14号横穴墓	前庭部 羨道	20層 22層	坏蓋 (須恵器)	(14.6)		3.1		回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ
第192図	2	63	14号横穴墓	前庭部	20層	坏蓋 (須恵器)	15.1		2.8		回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ, 天井部にヘラ 記号, 4号横穴墓出土坏蓋 と接合,坏蓋硯
第192図	3	63	14号横穴墓	前庭部 羨道	20層 22層	高台付坏身 (須恵器)	(14.8)	(9.0)	4.4		回転ヘラケズリ 回転ナデ 底部静止糸切り 回転ナデ 静止ナデ	
第192図	4	63	14号横穴墓	前庭部 羨道	20 層 22 層	坏身 (須恵器)	(14.0)				回転ナデ 回転ナデ	

挿図番	子号	図版		出土位置		器種		法量(cm)		200 +4	MI- 44
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	種別	口径	底 径	器高		調整	備考
第196図	1	63	15号横穴墓	前庭部 手前		坏蓋 (須恵器)	(15.8)		3.9	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
第196図	2	63	15号横穴墓	前庭部 手前		坏蓋 (須恵器)	15.6		2.2	外面 内面	回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ
第196図	3	63	15号横穴墓	前庭部 手前		坏身 (須恵器)	(14.6)	(10.0)	6.0	外面 内面	回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ 静止ナデ	
第196図	4	63	15号横穴墓	前庭部・ 前庭部手前		高台付坏身 (須恵器)	(15.0)	(8.1)	5.5	外面内面	回転ナデ 静止ナデ 底部静止糸切り 回転ナデ 静止ナデ	14号横穴墓前庭部出土坏身 と接合
第196図	5	63	15号横穴墓	前庭部 手前		高台付坏身 (須恵器)	(14.4)	(8.4)	4.3	外面 内面	回転ナデ 底部回転糸切り 回転ナデ 静止ナデ	
第196図	6	63	15号横穴墓	前庭部 手前		高台付坏身 (須恵器)		7.6		外面 内面	回転ナデ 静止ナデ	
第196図	7	63	15号横穴墓	前庭部	床面上	長頸壺 (須恵器)	(7.6)			外面 内面	回転ナデ	
第196図	8	63	15号横穴墓	前庭部 手前		高台付坏身 (土師器)		(10.0)		外面 内面	ミガキ ミガキ	内外面に赤彩
第200図	1	64	横穴墓群 周辺			甕 (弥生土器)	(14.8)			外面 内面	ナデ ハケメ ナデ ハケメ	凹線文
第200図	2	64	横穴墓群 周辺			甕 (弥生土器)	(16.6)			外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第200図	3	64	横穴墓群 周辺			甕 (弥生土器)	(13.0)			外面 内面	ハケメ ナデ ハケメ ナデ	凹線文
第200図	4	64	横穴墓群 周辺			甕 (弥生土器)	(14.9)			外面 内面	ナデ ヘラゲズリ ナデ	凹線文
第 200 図	5	64	横穴墓群 周辺			甕 (弥生土器)	(14.6)			外面 内面	ナデ ヘラケズリ	凹線文
第200図	6	64	横穴墓群 周辺			壺 (弥生土器)	(11.6)			外面 内面	ナデ ナデ	凹線文, 刻目文
第200図	7	64	横穴墓群 周辺			悪又は壺 (弥生土器)				外面 内面	ナデ ミガキ ヘラゲズリ ハケメ	
第200図	8	64	横穴墓群 周辺			無頸壺 (須恵器)	(10.2)			外面 内面	ミガキ ナデ ハケメ ミガキ ナデ	円孔1ヵ所
第200図	9	64	横穴墓群 周辺			甕又は壺 (弥生土器)				外面 内面	ナデ 摩滅のため不明	
第200図	10	64	横穴墓群 周辺			悪又は壺 (弥生土器)				外面 内面	ナデ 摩滅のため不明	
第200図	11	64	横穴墓群 周辺			高坏 (弥生土器)		(11.8)		外面 内面	ナデ ヘラゲズリ	平行沈線文, 凹線文
第200図	12	64	横穴墓群 周辺			高坏 (弥生土器)		(10.4)		外面 内面	摩滅のため不明 摩滅のため不明	平行沈線文
第200図	13	64	横穴墓群 周辺			坏蓋 (須恵器)	15.2		2.8	外面 内面	回転ヘラゲズリ 回転ナデ 回転ナデ	輪状つまみ、坏蓋硯
第200図	14	64	横穴墓群 周辺			坏蓋 (須恵器)	15.7		3.4		回転ヘラケズリ 回転ナデ 天井部静止糸切り 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ、坏蓋硯?
第200図	15	64	横穴墓群周辺			坏蓋 (須恵器)	14.8		3.0		回転ヘラゲズリ 回転ナデ 天井部 静止糸切り 回転ナデ 静止ナデ	輪状つまみ
第 200 図	16	64	横穴墓群周辺			坏蓋 (須恵器)	(15.6)			外面		
第 200 図	17	64	横穴墓群周辺			坏蓋 (須恵器)	(14.0)				回転ナデ	
第 200 図	18	64	横穴墓群周辺			高台付坏身(須恵器)	13.0	8.6	4.9	外面内面	回転ナデ	
第200図	19	64	横穴墓群周辺			高台付坏身(須恵器)	(13.6)	(7.7)	5.0	外面内面	回転ナデ 底部 回転糸切り	
第200図	20	64	横穴墓群周辺			高台付坏身(須恵器)		(7.4)		外面	回転ナデ 回転ナデ 静止ナデ	
第200図	21	64	横穴墓群			悪又は瓶 (須恵器)				外面	タタキ当て具痕	

杉沢横穴墓群出土遺物(石器)

挿図番	养 号	図版	出土位置			器種	石材		法量 (cm)		重量(g)	備考	
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	益 俚	1 11	長	幅	厚	里里(g)	畑 考	
第175図	6	62	5号横穴墓	玄室内	8層	石鏃	安山岩	2.3	1.3	0.3	0.57	凹基無茎式	
第200図	22	64	横穴墓群 周辺			石鏃	安山岩	2.9	1.5	0.3	0.77	凸基無茎式	

杉沢横穴墓群出土遺物(鉄器)

挿図番	挿図番号 図版			出土位置		器種		法量 (cm)		備考
掲載図	番号	番号	地区	遺構	層	帝 悝	長	幅	厚	加州一号
第175図	2	62 · 65	5号横穴墓	玄門	26層	刀子	7.2	1.2	0.4	刃部鍛造
第175図	3	62 · 65	5号横穴墓	玄門	23層	刀子	5.2	1.3	0.5	刃部〜茎部鍛造, 茎部に木質残存
第175図	4	62 · 65	5号横穴墓	玄門	26 屠	刀子	2.5	1.1	0.4	茎部鍛造,木質残存
第175図	5	62 · 65	5号横穴墓	玄門	23層	鉄釘	5.0	1.9	0.4	全面的に木質付着
第184図	1	62 · 65	10号横穴墓	前庭部		鉄滓	5.2	4.0	3.4	磁着度3, メタル度H, 破面に大小の気孔あり
第184図	2	62 · 65	10号横穴墓	前庭部		鉄滓	3.7	3.3	0.6	磁着度1,メタル度なし
第184図	3	62 · 65	13号横穴墓	玄室内	床面上?	鉄滓	1.7	1.4	0.8	磁着なし、メタル度なし、破面にわずかに気泡あり
第192図	5	63 · 65	14号横穴墓	前庭部	20層	鉄鏃	4.8	0.4	0.4	茎部
第192図	6	63 · 65	14号横穴墓	前庭部	20層	鉄鏃	3.2	0.3	0.4	茎部先端
第192図	7	63 · 65	14号横穴墓	前庭部	20層	鉄鏃	3.0	0.3	0.3	茎部
第192図	8	63 · 65	14·15号 横穴墓		排土	鉄鏃	1.6	0.7	0.7	茎部木質残存
第192図	9	63 · 65	14·15号 横穴墓		排土	鉄鏃	2.0	0.9	0.5	茎部木質残存

三井Ⅱ遺跡出土遺物(瓦・鴟尾・不明瓦製品)

100 00						.,	_	1			
挿図番 掲載図	·号 番号	図版 番号	器 種別	出土位地区・トレンチ	置 ——— 層	法 : 厚 (cm)	量 重量(g)		調整手法	側面調整	備考
第273図	1	16 · 68	軒丸瓦	26Tr	4層	瓦当径18.5 瓦当厚2.9	1,641		指ナデ 指オサエ ナデ 布圧痕 カセ型圧迫痕 ナデ ヘラケズリ?のちナデ		瓦当部完存丸, 瓦部あり
第273図	2	68	軒丸瓦	13Tr		瓦当厚2.2	395	I	ナデ		瓦当部, 丸瓦部あり
第273図	3		軒丸瓦	26Tr	6層	瓦当厚1.4	130	凹面 凸面	摩滅により不鮮明 摩滅により不鮮明		瓦当部,外縁のみ
第273図	4		軒丸瓦	26Tr	6層	瓦当厚2.6	120	四面 凸面	剥離 摩滅により不鮮明		瓦当部, 外縁のみ
第273図	5	68	軒丸瓦	26Tr	3層	瓦当厚2.1	30	回面 凸面	ナデ		瓦当部, 外縁のみ
第273図	6	68	軒丸瓦	26Tr	3層	厚 2.1	170		布目 布圧痕 ナデ タタキ ナデ		瓦当部, 外縁のみ
第273図	7		軒丸瓦	三井B 地区	3層	厚2.5	690		ナデ ナデ	С	丸瓦接合部
第273図	8		軒丸瓦	26Tr	6層	厚2.5	200		摩滅しているがナデ ヘラケズリ	с	丸瓦接合部
第274図	1	68	丸瓦	26Tr	5層	厚1.8	670	凸面	布目 格子タタキのちナデ	b	狭端
第274図	2	68	丸瓦	26Tr	4層	厚1.5	580	凸面	ナデ		狭端
第274図	3	68	丸瓦	26Tr	3層	厚2.2	360	凸面	布目 格子タタキのちナデ	b	狭端, 凹面端に面取り
第274図	4		丸瓦	26Tr	3層	厚1.4	250	凸面	布目 格子タタキのちナデ	a	狭端,分割界線
第274図	5	68	丸瓦	26Tr	3層	厚1.3	330	凸面	布目 格子タタキのち板ナデ	b	破面のみヘラケズリ 狭端部ヘラケズリのちナデ
第274図	6	68	丸瓦	26Tr	3層	厚2.3	470	凸面	布目 タタキ	С	布綴じ痕あり
第274図	7	68	丸瓦	32Tr	2層	厚2.3	390	凸面	布目 面とり 格子タタキのちヘラケズリのちナデ	b	広端、自然釉が 凸面・側面に付着
第274図	8		丸瓦	26Tr	4層	厚2.1	90	凸面	布目 布綴じ痕 粘土痕 格子タタキのちナデ	a	広端, 側面面取り
第274図	9	68	丸瓦	26Tr	7層	厚2.4	300		布目 布綴じ痕 面取り(ヘラケズリ) 格子タタキのちヘラケズリ ナデ	а	広端、端面ヘラケズリ
第274図	10	68	丸瓦	26Tr	3層	厚1.6	720		布目 面とり 格子タタキ	a	広端面ヘラケズリ、側面面取り
第275図	1	69	平瓦	32Tr	2層	厚3.1	1,740		布目 模骨痕 糸切り痕 格子タタキ (A 類)	a	狭端、粘土板合わせ目S
第275図	2	69	平瓦	32Tr	2層	厚2.7	200		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキ	a	
第275図	3	69	平瓦	32Tr	2層	厚 2.2	1,070		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ (B類)	b	狭端、布綴じ痕、まつり縫い
第276図	1	69	平瓦	26Tr	3層	厚2.9	1,030		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ (B類)	a	狭端部粗いヘラケズリ, 布綴じ痕 まつり縫い粘土板合わせ目Z
第276図	2		平瓦	26Tr	6層	厚1.9	170	I	布目 模骨痕 糸切り痕 格子タタキのちヨコナデ	a	ダーツ圧痕
第276図	3	69	平瓦	26Tr	6層	厚2.1	560		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ	a	側面付近を無紋叩き
第276図	4		平瓦	26Tr	3層	厚3.7	1,050		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ	a	
第276図	5	69	平瓦	33Tr	2層	厚2.2	220		布目 模骨痕 糸切り痕 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ	a	分割界線
第276図	6	69	平瓦	32Tr	2層	厚2.0	460	I	布目 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ	a	分割界線
第276図	7	69	平瓦	26Tr	6層	厚 2.4	760		布目 布綴じ痕 タタキのちヨコナデ	a	粘土板合わせ目Z
第276図	8		平瓦	26Tr	5層	厚1.7	250	I	布目 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ	a	
第276図	9	69	平瓦	26Tr	6層	厚2.5	430	I	布目 格子タタキのちヨコナデ	a	叩き2種類, 粘土板合わせ目Z
第277図	1		平瓦	26Tr	4層	厚 2.6	490	I	布目 布綴じ痕 格子タタキのちヨコナデ (B類)		布綴じ痕,綴じ目ぐし縫い? とめ付けまつり縫い
第277図	2		平瓦	26Tr	5層	厚1.9	400		布目 糸切り痕 格子タタキ		

挿図番	·号	図版	器 種	出土位	置	法	量	-m -trt - 1	側面	Min Iv
掲載図	番号	番号	種別	地区・トレンチ	層	厚 (cm)	重量(g)	調 整 手 法	調整	備考
第277図	3	69	平瓦	32Tr	2層	厚 2.6	1,110	凹面 布目 布綴じ痕 内面 格子タタキのちヨコナデ	а	布綴じ痕、割縫い 広端(まつり縫い)ワラ座痕
第277図	4	69	平瓦	32Tr	2層	厚3.0	560	凹面 ヘラケズリ 凸面 格子タタキのちヨコナデ	а	広端、ワラ座痕
第277図	5	69	平瓦	32Tr	2層	厚2.9	350	凹面 布目 ヘラケズリ 凸面 格子タタキのちヨコナデのちタタキ (無文)	a	広端
第277図	6	69	平瓦	26Tr	6層	厚1.9	460	凹面 布目 模骨痕 糸切り痕 凸面 格子タタキのちナデ		
第277図	7	69	平瓦	26Tr	6層	厚2.2	80	凹面 布目 凸面 タタキ		粗い格子叩き目
第278図	1	16 · 70	鴟尾	26Tr	6層	胴部厚5.2	7,310	外面 ナデ 内面 指オサエ ナデ		胴部突帯2列,珠紋接合痕4ヵ所
第278図	2	70	鴟尾	13Tr		厚4.7	930	外面 ナデ 内面 タテ指ナデ		胴部 (斐川 24) P6. 74-33
第278図	3		鴟尾	13Tr		幅8.9	685	外面 指ナデ		背稜 (斐川 24) P6. 74-34
第278図	4		鴟尾	26Tr	3層	厚 (4.0)	150	外面 ナデ		背稜
第278図	5		鴟尾	32Tr	2層	珠文径6.5	110	指ナデーナデ		笠形珠紋
第278図	6	16 · 70	鴟尾	26Tr	6層	鰭部厚7.6	2,650	外面 ナデ 内面 ナデ		鰭部正段型, 粘土積み上げ面で剥離
第279図	1	16 · 70	鴟尾	26Tr	6層	厚7.4	2,310	外面 ナデ 内面 指オサエ		胴部突带1列,珠紋接合
第279図	2		鴟尾	26Tr	5層	厚 (4.2)	95	外面 ヘラケズリ ナデ		背稜
第279図	3	16 · 70	鴟尾	26Tr	5層	鰭厚2.4	653	外面 ヘラケズリ ナデ 内面 指ナデ		胴部〜縦帯〜鰭部 二次焼成窯体構築材に転用
第279図	4	70	鴟尾	三井A 地区	表土層	鰭部厚2.5	65	ナデ		縦帯~鰭部,No.42・46と同じ焼き
第279図	5	70	鴟尾	26Tr	6層		140	ナデ		縦帯~鰭部
第279図	6		鴟尾	32Tr	2層		25	ナデ		縦帯
第279図	7		鴟尾	26Tr	6層		13	ナデ		縦帯
第279図	8	70	鴟尾	26Tr	6層	珠文径6.3	160	指オサエーナデ		笠形珠紋
第279図	9	70	鴟尾	32Tr	2層	珠文径6.3	120	指ナデ ヘラケズリ ヨコ方向ナデ		笠形珠紋
第279図	10	70	鴟尾	26Tr	6層	珠文径6.2	140	ヘラケズリ ナデ		笠形珠紋
第279図	11	70	鴟尾	32Tr	2層	珠文径6.6	120	指ナデ ヘラケズリ ナデ		笠形珠紋
第279図	12	71	不明 瓦製品	23Tr	1層	厚 2.9 基部厚 4.4	860	外面 格子叩きのちナデ 内面 ヘラケズリ ナデ		
第279図	13	71	不明 瓦製品	三井B 地区 北表採	表土層	厚 2.3 突帯厚 3.0	990	外面 格子叩きのち突帯貼り付け ナデ 内面 粗いナデ		
第279図	14	71	不明 瓦製品	三井A 地区 12Tr	1層	厚6.2	1,175	外面 ヨコヘラケズリ		断面台形状
第279図	15	71	磚	26Tr	3層	厚6.5	840	不明		
第280図	1		鴟尾か	26Tr	6層	厚7.2	787	外面 ヘラケズリ+ナデ 内面 粗いナデ		二次焼成窯体構築材に転用
第280図	2		鴟尾か	26Tr	1層	厚 4.4	411	外面 ヘラケズリ+ナデ 内面斜めナデ		

三井Ⅱ遺跡出土遺物(土器)

挿図番	号	図版		出土位置		器 種	1	法量(cm))	調整	備考	
掲載図	番号	番号	地 区	遺構	層	種 別	口径	底 径	器高	調整	VHI 15	
第281図	1	71	15工区	32Tr	2	坏身 (須恵器)	11.4		4.1	外面 回転ナデ 底部 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ		
第281図	2	71	15工区	26Tr	6	坏身 (須恵器)	12.9	9.2	5.1	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 沈線底部 静止糸切り 内面 回転ナデ		
第281図	3		15工区	26Tr	6	椀 (須恵器)	13.8		(3.8)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ		
第281図	4		15工区	26Tr	4	椀 (須恵器)	20.2		(4.2)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 外	面二次焼成?	
第281図	5	71	15工区	26Tr	6	円面硯 (須恵器)		11.9	(3.1)		状高台, 一条沈線, あり	
第281図	6	71	15工区	26Tr	4	円面硯 (須恵器)		22.4	(5.2)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 洗 台	線, 形の透かし6カ所あり	
第281図	7	71	15工区	26Tr	6	長頸壺 (須恵器)			(10.4)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 沈 ナデ オサエ 沈	線	

写 真 図 版

※遺物は、基本的に以下の縮尺で掲載した。

図版47~60・66・67

杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡の遺物…(立面)1:4 (俯瞰)1:1~1:3

図版61~64

杉沢横穴墓群の遺物…(立面)1:3 (俯瞰)1:1~1:2

図版65

鉄製品 X 線写真…1:2

図版68~71

三井 II 遺跡の瓦・鴟尾・不明瓦製品… (軒丸瓦) 1:3 (その他の瓦)1:6

須恵器…1:3

※遺物実測図との対応は図中に示した。(例:図版5 13-8は第13図8を表す)



出雲平野東部全景(南西から、トンボの中心が調査地)

2011年7月撮影



2 調査中全景 背後に仏経山を望む(北から)

2013年10月撮影



1 竪穴建物 SI305 (南から)



2 壁体溝内土器出土状況 (南から)



3 床面中央の焼土面と炭化物(北西から)



4 調査状況(南から)



加工段SX320 (南から)



2 C1区包含層(北から)

図版 4 弥生時代の竪穴建物跡と出土遺物(杉沢Ⅱ遺跡)



ガラス小玉・土器出土状況 (南東から)



1 竪穴建物 SI501 (南から)

3 袋状鉄斧出土状況 (南から)



4 竪穴建物 SI501 出土 袋状鉄斧・ガラス小玉





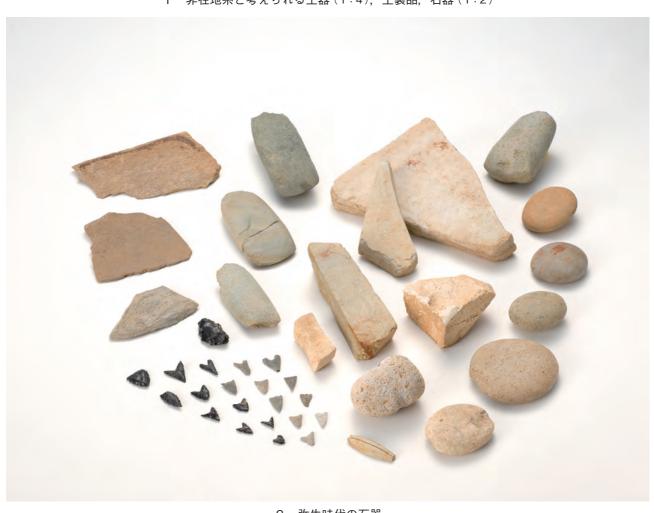
1 杉沢遺跡 B・C丘陵 範囲確認調査出土土器(1:3)



2 杉沢遺跡 A 丘陵北斜面 遺構出土土器・鉄製品 (1:3)



1 非在地系と考えられる土器 (1:4), 土製品, 石器 (1:2)



2 弥生時代の石器

図版 8 杉沢横穴墓群全景①

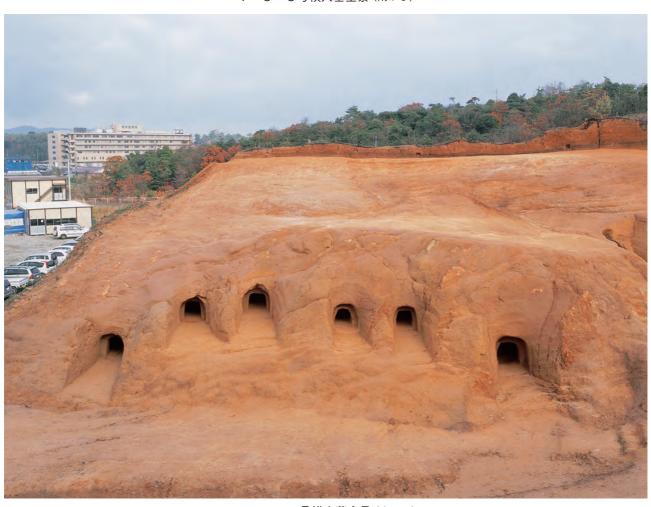


1 杉沢横穴墓群全景(1)(南から)





1 3~8号横穴墓全景(南から)



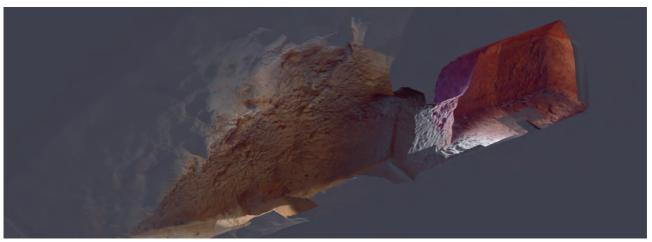
2 10~15号横穴墓全景(南から)



1 杉沢横穴墓群 出土土器



2 13号横穴墓 断面オルソ画像(南東から)



3 15号横穴墓 断面オルソ画像(南東から)



D 1 ~ D 4 区全景 (西から)

図版 12 古代道路遺構②



1 本調査前(試掘調査後 西から)



2 完掘後(西から)



波板状凹凸面 土層断面(北から)



2 波板状凹凸面 須恵器出土状況(北から)





1 路面構築過程を示す土層断面 (D2トレンチ東壁 北西から)



2 大溝 SD401 の土層堆積状況 (D4区東壁 西から)



1 タコ壺全景 (南東から)



2 タコ壺使用時の状況復元(南東から)



3 北東を向くタコ壺 (SX364 南東から)



4 南西を向くタコ壺 (SX365 南東から)

図版 16 三井 Ⅱ遺跡出土瓦・鴟尾





1 三井Ⅱ遺跡 軒丸瓦(1:3)

2 【参考】神門寺境内廃寺 軒丸瓦(1:3)



3 三井Ⅱ遺跡 鴟尾(1:4)



1 調査区全景 (上が北)



2 加工段 SX201 完掘後 (南東から)



3 加工段SX202 完掘後(南から)



4 加工段SX203 調査状況(南西から)



5 加工段SX203周辺 完掘後(南から)



1 加工段SX208・溝SD222・土坑SK231 完掘後(南から)



2 加工段SX211 完掘後(南西から)



1 加工段SX211 西半部土器出土状況(南から)



2 加工段SX211 東端部上層土器出土状況 (南東から)



3 加工段SX212 土器出土状況(東から)



4 加工段SX212 完掘後(南東から)



1 加工段SX213 完堀後(西から)



2 加工段SX213 床面ピット断面(西から)



3 加工段SX213 壁体溝内ピット断面(南東から)



4 溝SD229 完掘後(東から)



5 加工段SX214 完掘後(南西から)



1 調査区上空から北山を望む(南から)



2 調査区全景 (上が北東)



1 竪穴建物 SI301・掘立柱建物 SB302・SB303 完掘後 (南東から)



2 竪穴建物 SI301 (上が北東)



3 掘立柱建物 SB302・SB303 (上が北東)



4 加工段SX312 遺物出土状況(北西から)



5 加工段SX312 完掘後(西から)



1 加工段 SX314 完掘後 (北西から)



2 竪穴建物 SI304 段状の壁面 (南東から)

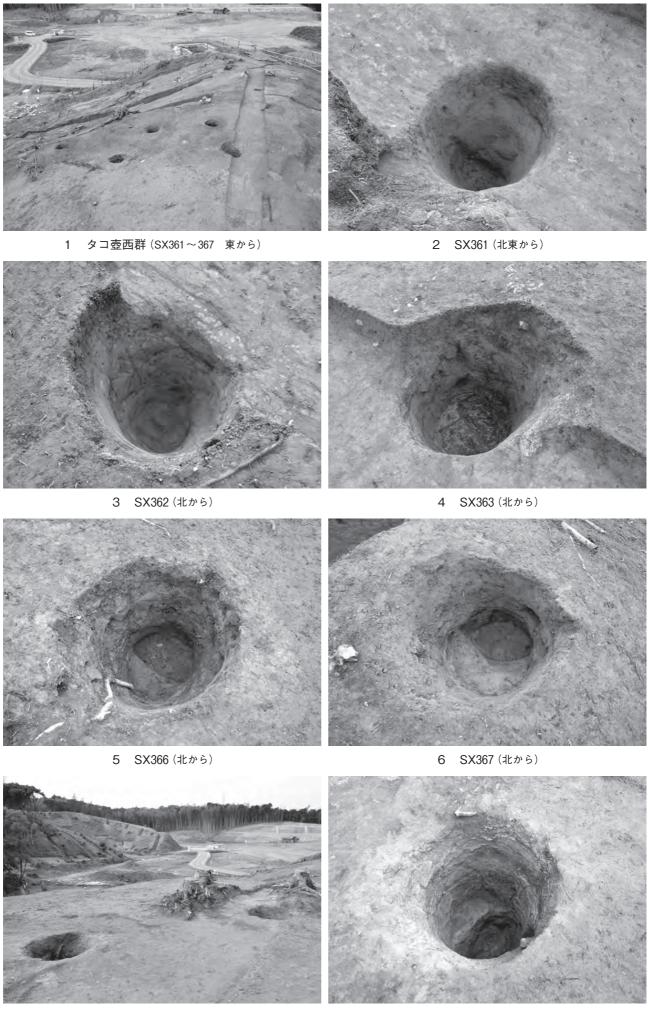
3 竪穴建物 SI304 土層堆積 (南西から)



1 加工段SX315 遺物出土状況 (南東から)



2 加工段SX320 床面ピット・土層堆積(南東から)



7 タコ壺東群 (SX368・369 東から)

8 SX369 (南西から)



1 調査地全景 (上が西)



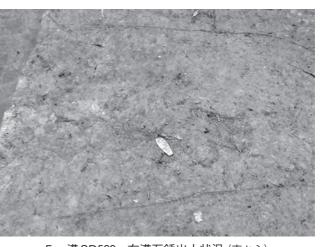
2 加工段SX511 検出状況と調査区南壁の土層(北東から)



3 加工段SX512 完掘後(北から)



4 溝SD522 完掘後(南から)



5 溝SD522 有溝石錘出土状況(東から)



1 加工段SX513 完掘後(北から)



2 加工段SX513 床面ピット断面(東から)



3 加工段SX514 完掘後(南東から)



4 加工段SX514 南端部高坏出土状況 (東から)

5 加工段SX514 北端部土器溜まり検出状況(南東から)



6 加工段SX515 完掘後(北東から)



7 加工段SX518 完掘後(南から)

図版 28 杉沢横穴墓群 1~3号横穴墓(1995年)





2 1~3号横穴墓 第1次調査前(南東から)



1 1~3号横穴墓 遠景(南東から)

3 1~3号横穴墓 完掘後(1)(南東から)



4 1~3号横穴墓 完掘後(2)(南から)



1 1号横穴墓 発見状況



2 1号横穴墓 完掘後(南から)



3 1号横穴墓 玄室内前壁・天井部



4 1号横穴墓 玄室内奥壁・天井部



5 2号横穴墓 閉塞状況(南から)



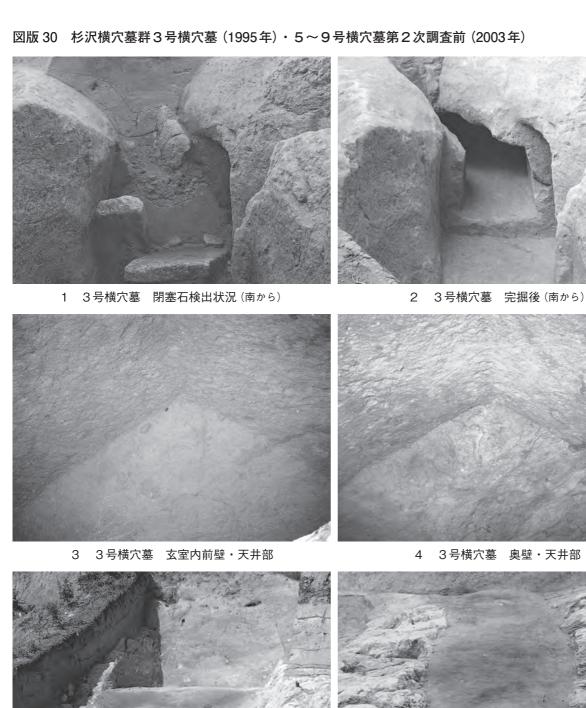
6 2号横穴墓 完掘後(南から)



7 2号横穴墓 玄室内前壁・天井部



8 2号横穴墓 玄室内奥壁・天井部





5号横穴墓 調査前(南から)



6 6号横穴墓 調査前(南から)



7 7・8号横穴墓 調査前(南から)



8 9号横穴墓 調査前(南から)



1 杉沢横穴墓群 調査前(南東から)



2 3~8号横穴墓 調査前(南から)



3 10~15号横穴墓 調査前(南から)



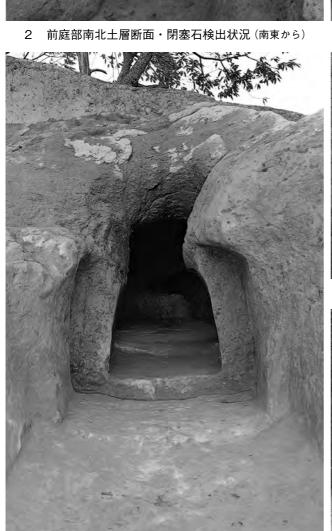
4 9号横穴墓 調査前 (南東から)

図版 32 杉沢横穴墓群 4号横穴墓



1 前庭部遺物出土状況(南から)





4 完掘状況(南から)



3 閉塞石・玄門入口東西土層断面 (南から)



5 玄室内前壁



6 玄室内奥壁・遺物出土状況

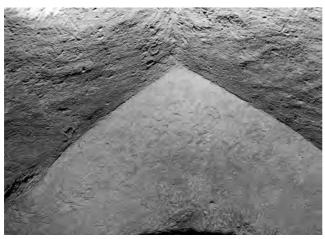
杉沢横穴墓群 5 号横穴墓 図版 33



1 前庭部南北土層断面(2003年 南東から)



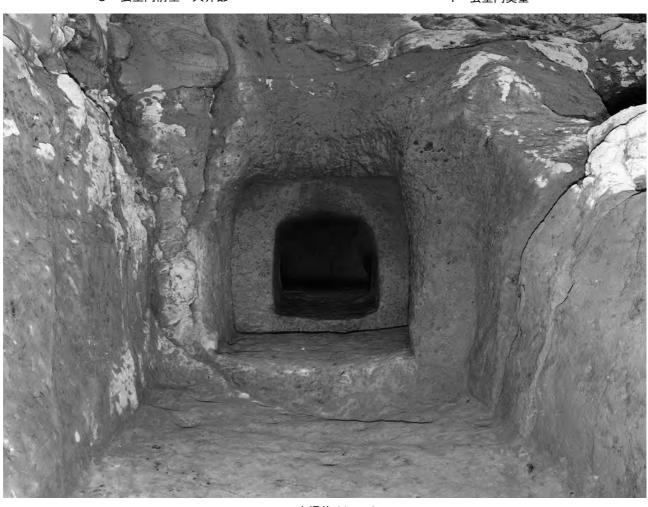
2 玄室入口東西土層断面・遺物出土状況 (南から)



3 玄室内前壁・天井部



4 玄室内奥壁



5 完掘後(南から)

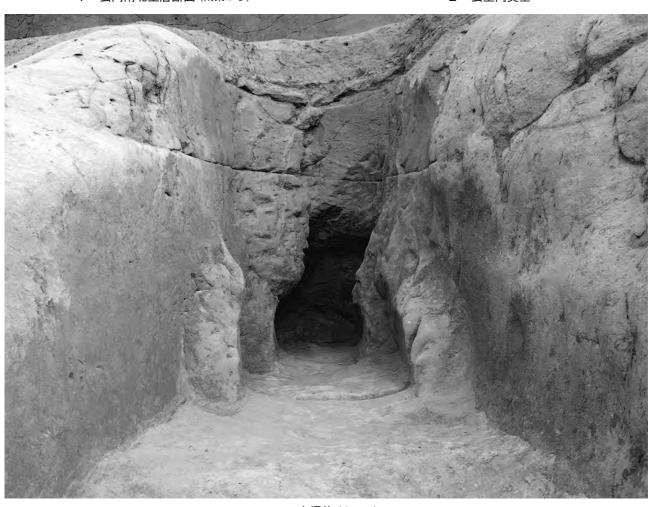
図版 34 杉沢横穴墓群 6号横穴墓





1 玄門南北土層断面 (南東から)

2 玄室内奥壁



3 完掘後(南から)

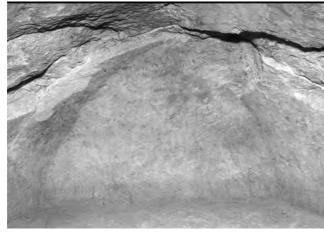
杉沢横穴墓群7号横穴墓 図版 35



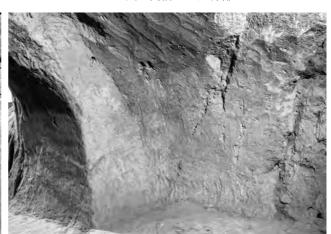
1 前庭部南北土層断面 (2003年 南東から)



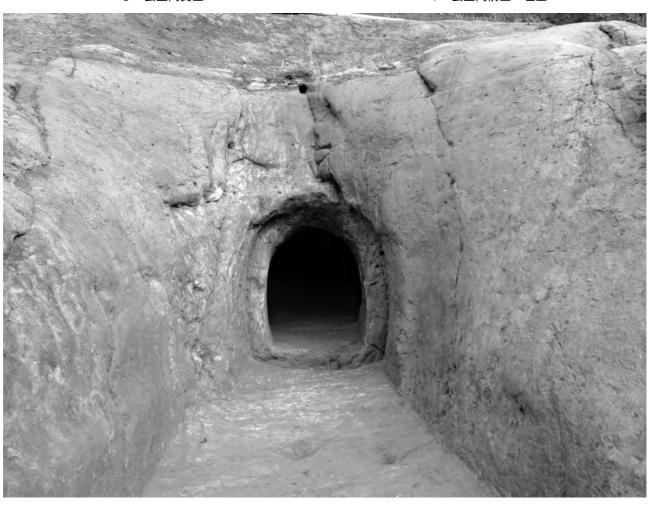
2 玄室内前壁・天井部



3 玄室内奥壁

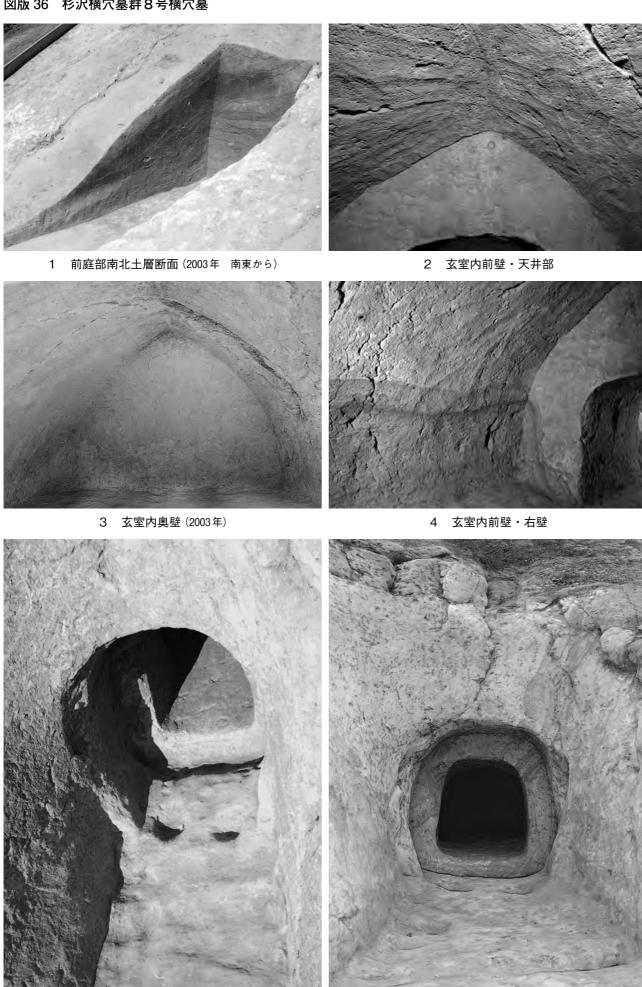


4 玄室内前壁・左壁



5 完掘後(南から)

図版 36 杉沢横穴墓群 8号横穴墓



5 完掘後(1)(2003年 南東上から)

6 完掘後(2)(南から)



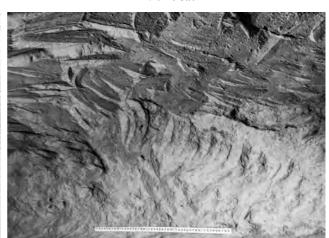
前庭部南北土層断面 (2003年 南から)



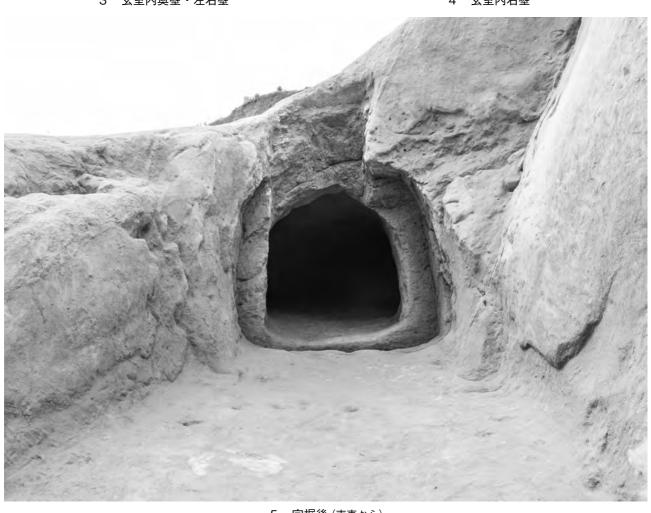
玄室内前壁



3 玄室内奥壁・左右壁

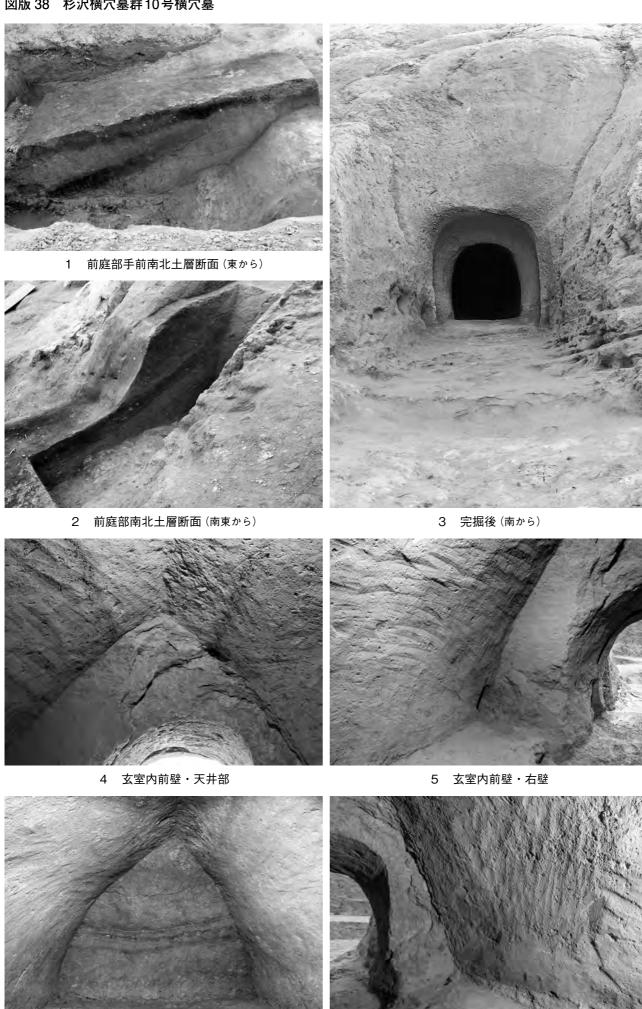


4 玄室内右壁



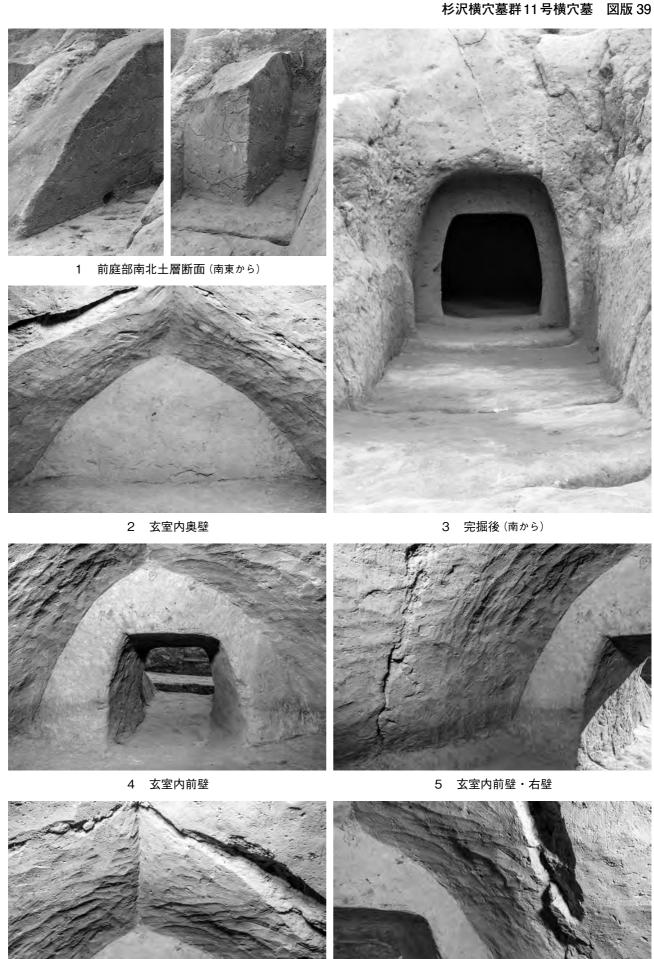
5 完掘後(南東から)

図版 38 杉沢横穴墓群 10号横穴墓



6 玄室内奥壁

7 玄室内前壁・左壁



6 玄室内前壁・天井部

7 玄室内前壁・左壁

図版 40 杉沢横穴墓群 12号横穴墓

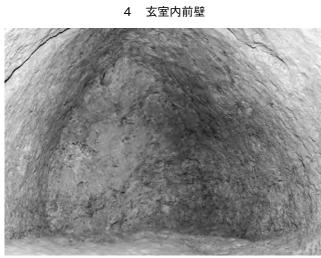


玄室内人骨出土状況(1)



3 玄室内人骨出土状況(2)



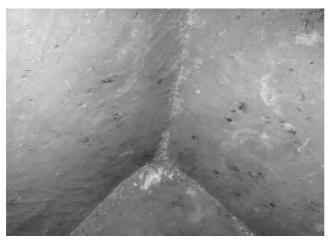


5 玄室内奥壁

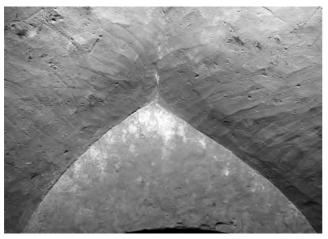


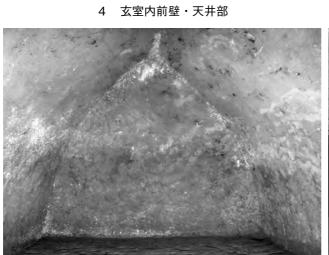
6 完掘後(南から)



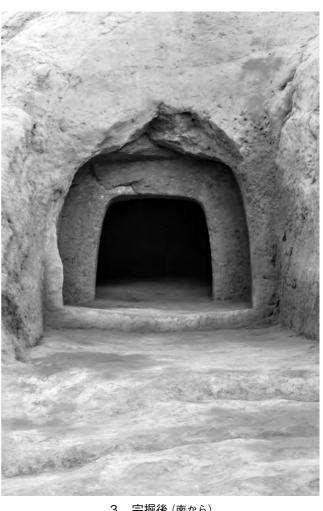


2 玄室内奥壁・天井部





6 玄室内奥壁



3 完掘後(南から)



5 玄室内前壁・右壁



7 玄室内前壁・左壁

図版 42 杉沢横穴墓群 14号横穴墓①



2 閉塞石検出状況(南から)

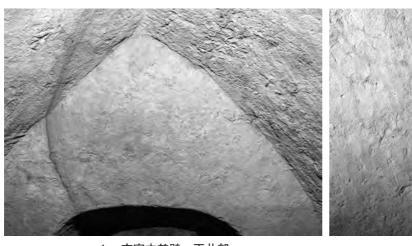


前庭部南北土層断面 (南東から)

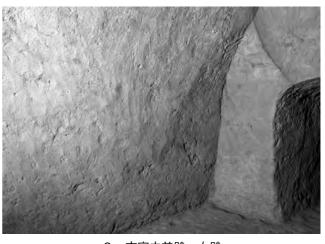
3 羨道遺物出土状況 (南東から)



杉沢横穴墓群 14号横穴墓② 図版 43



1 玄室内前壁・天井部



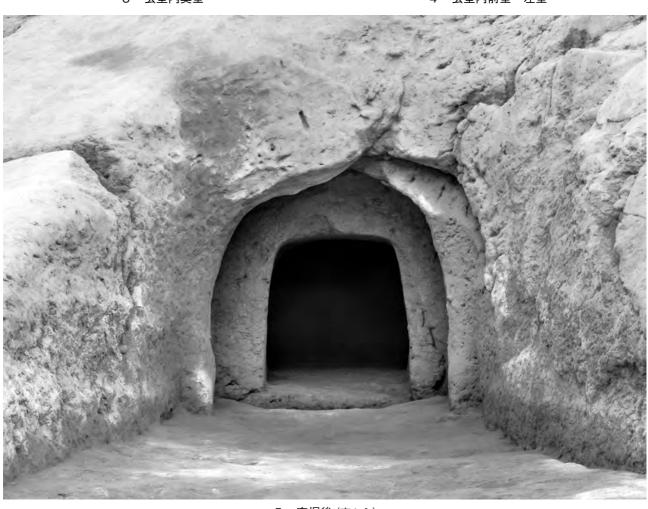
2 玄室内前壁・右壁



3 玄室内奥壁



4 玄室内前壁・左壁



5 完掘後(南から)

図版 44 杉沢横穴墓群 15号横穴墓



1 前庭部南北土層断面と遺物出土状況(南西から)



2 前庭部遺物出土状況 (南から)



3 完掘後(南から)



4 玄室内前壁・天井部



5 玄室内前壁・右壁



6 玄室内奥壁



7 玄室内前壁・左壁



1 丘陵南北土層断面(1)(西から)

2 丘陵南北土層断面(2)(北西から)



3 丘陵上東西土層断面 (南から)



4 杉沢横穴墓群調査指導会(1)



5 杉沢横穴墓群調査指導会(2)



6 杉沢横穴墓群調査指導会(3)



7 杉沢横穴墓群調査指導会(4)

図版 46 杉沢遺跡 D 丘陵 (D 5・D 6区) の遺構

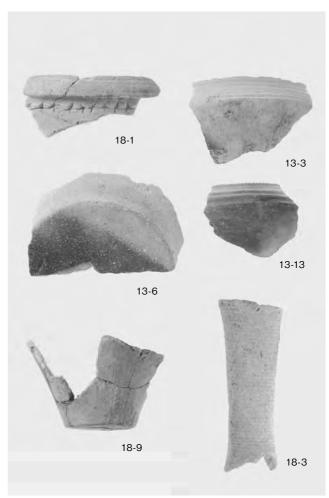


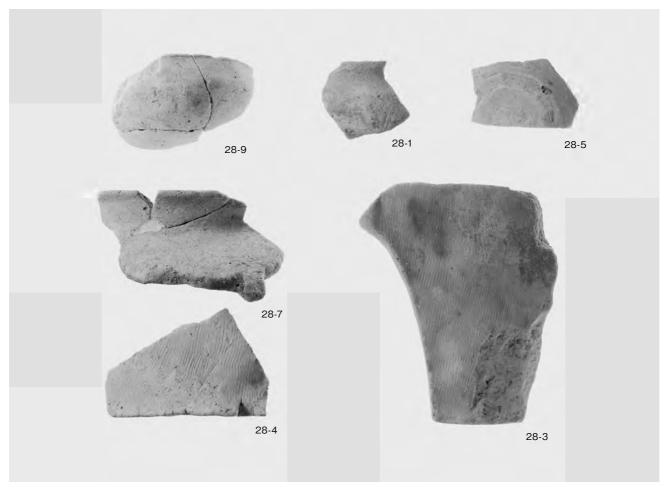
1 D5・D6区調査区全景(北から)



2 D5区 炭焼土坑 SK421 の土層堆積状況 (北西から)



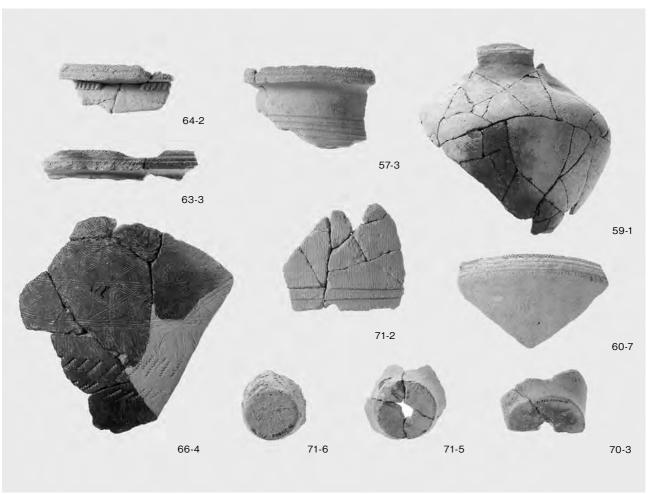


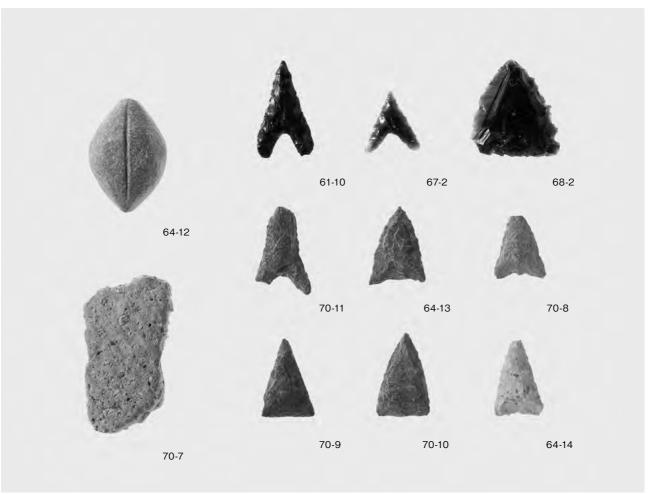


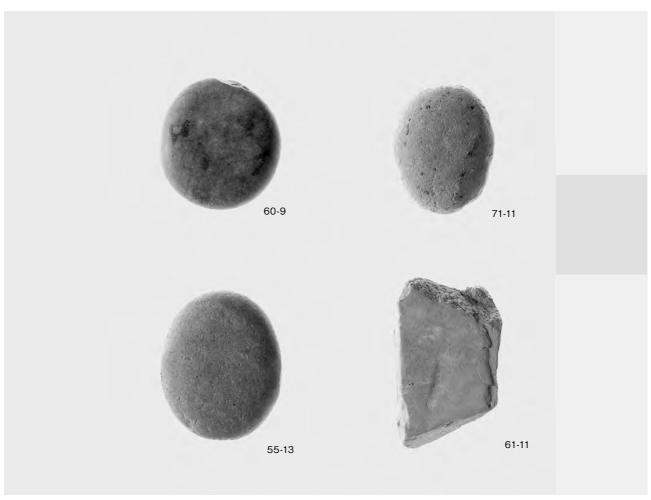


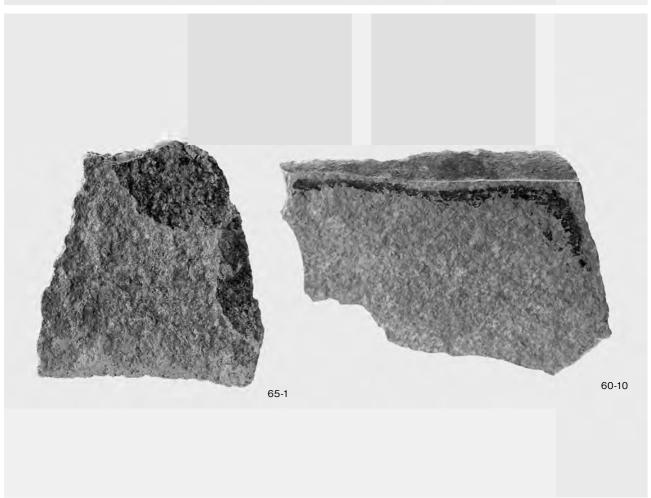


図版 50 杉沢遺跡 B 丘陵の弥生土器②・土製品・石製品①













108-1



99-3





101-1





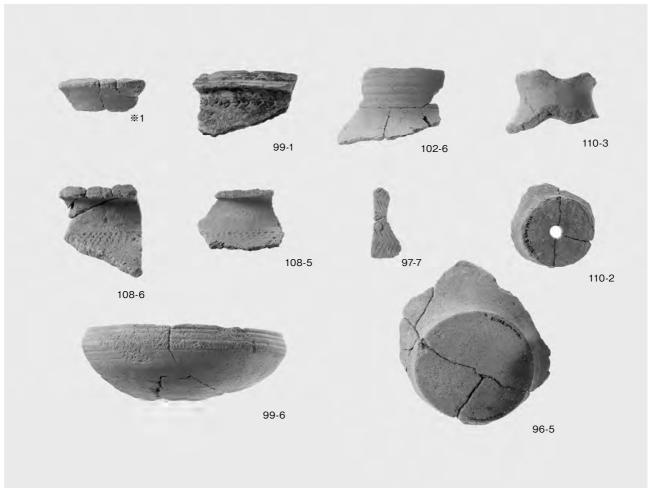


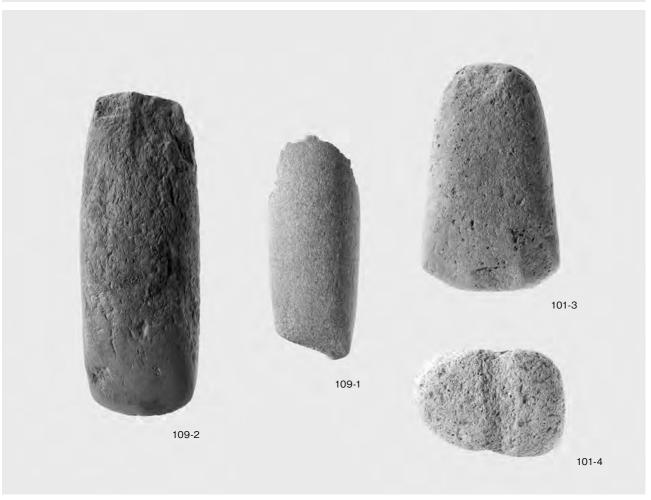




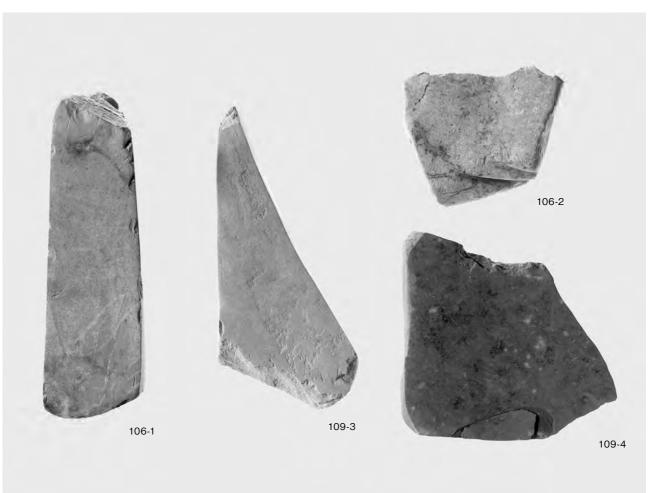


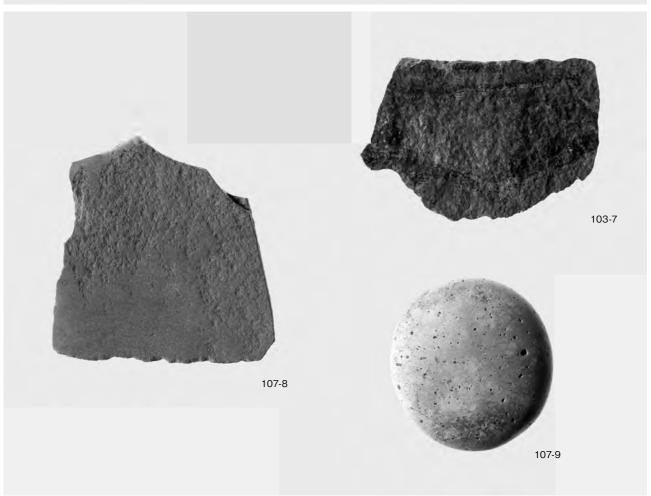






※1は実測図未掲載





図版 56 杉沢 II 遺跡の土器①





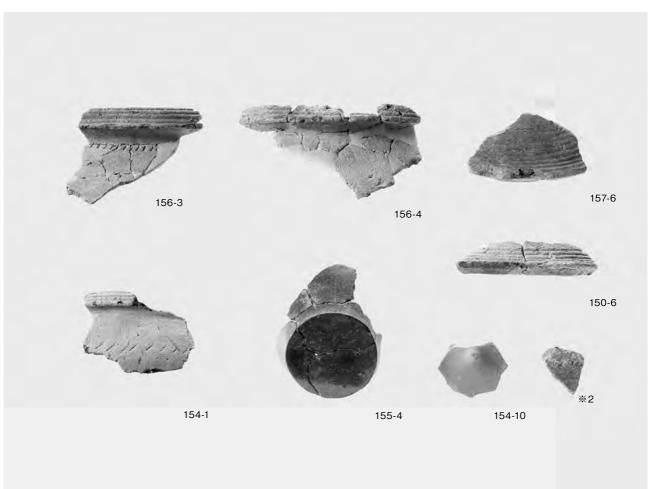


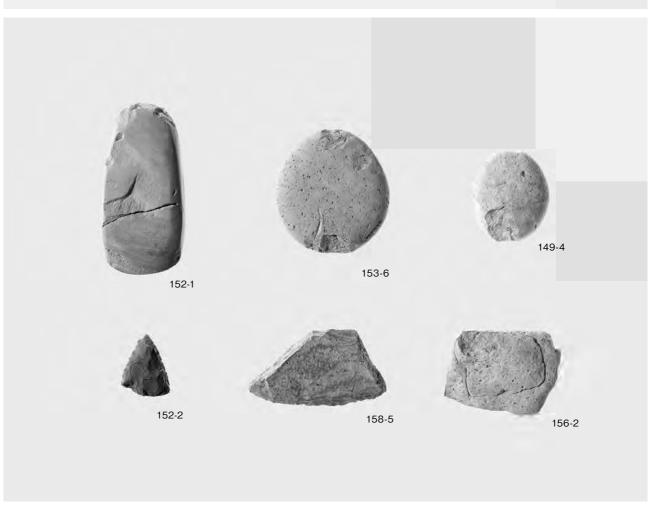
図版 58 杉沢 II 遺跡の土器③



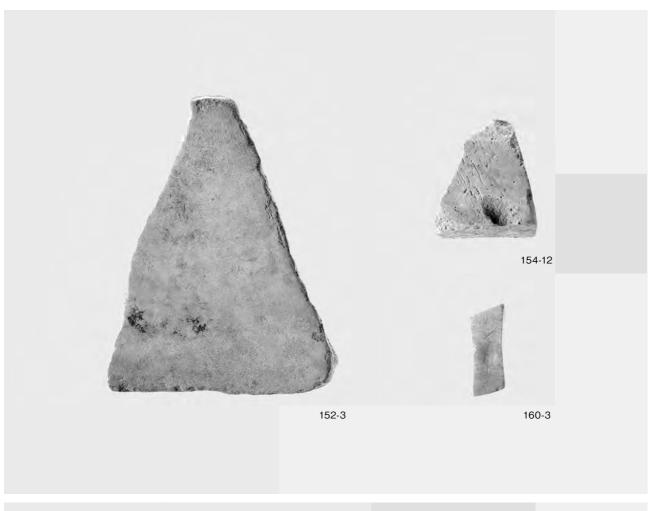


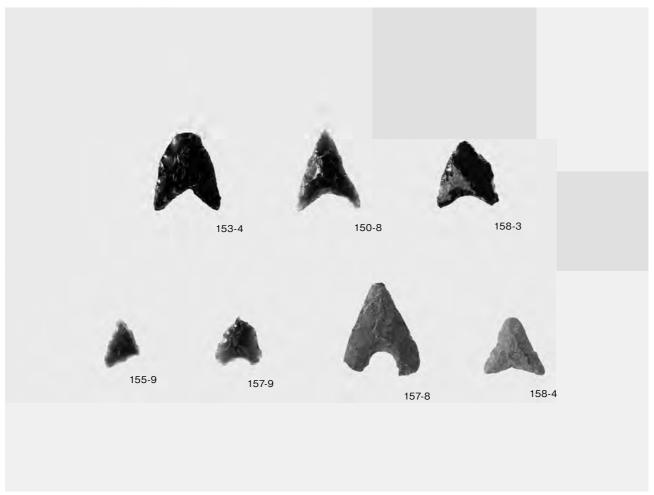






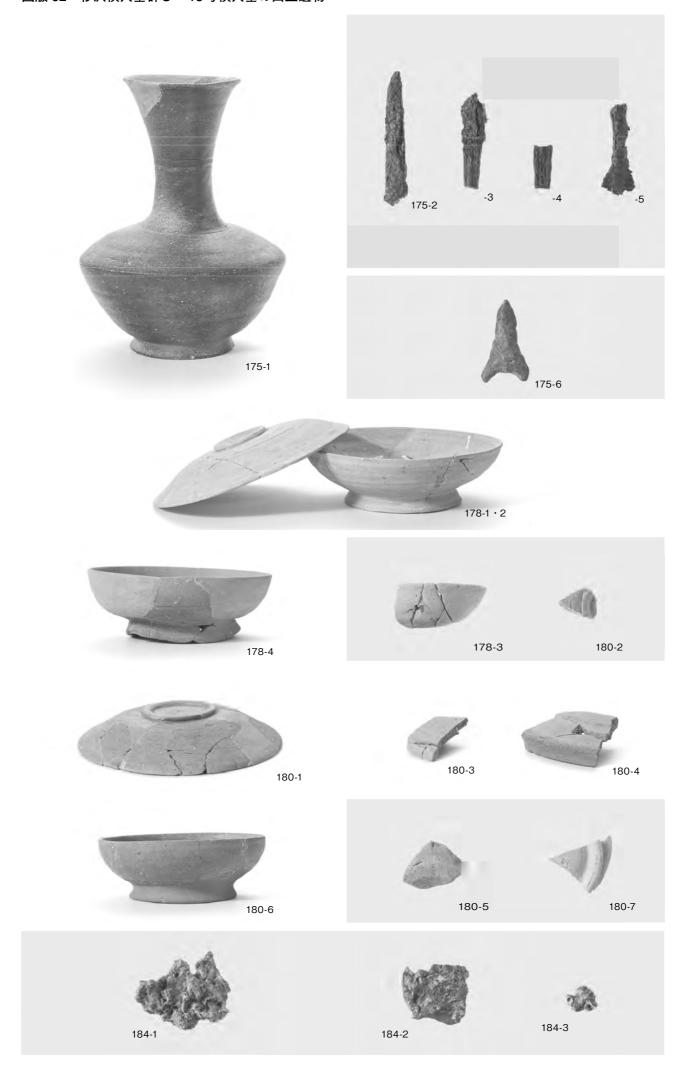
図版 60 杉沢 I 遺跡の石製品②



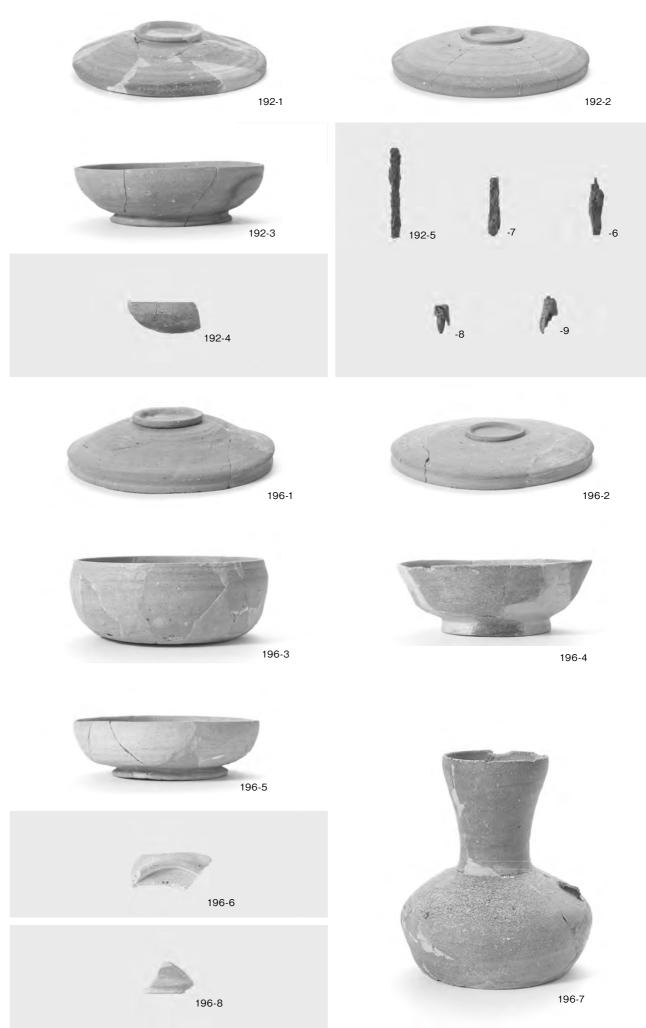


杉沢横穴墓群1~4号横穴墓の出土遺物 図版61

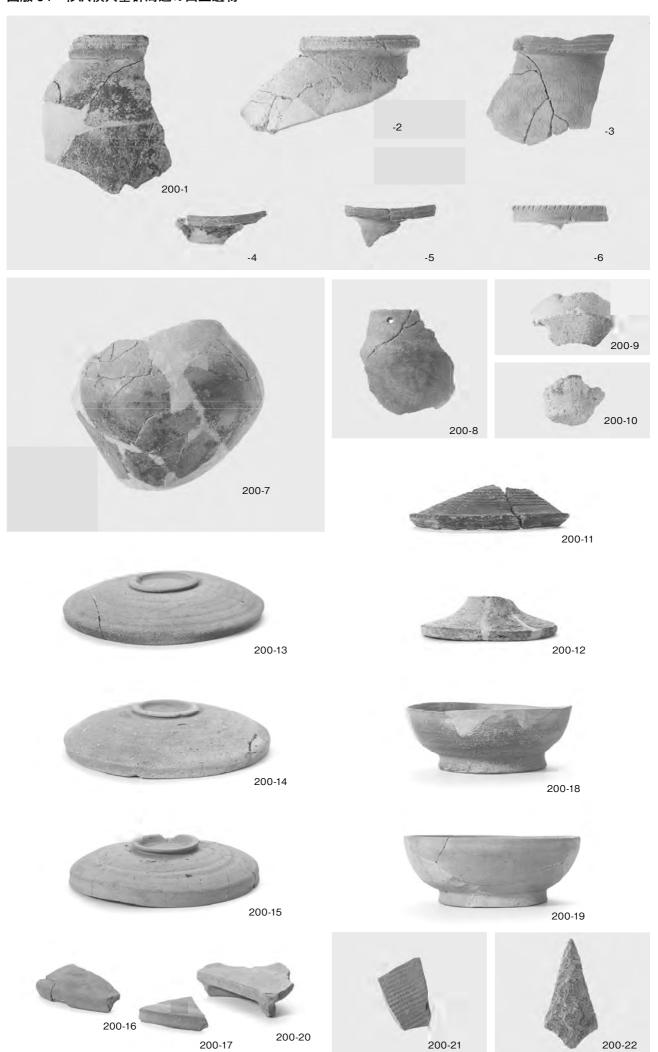


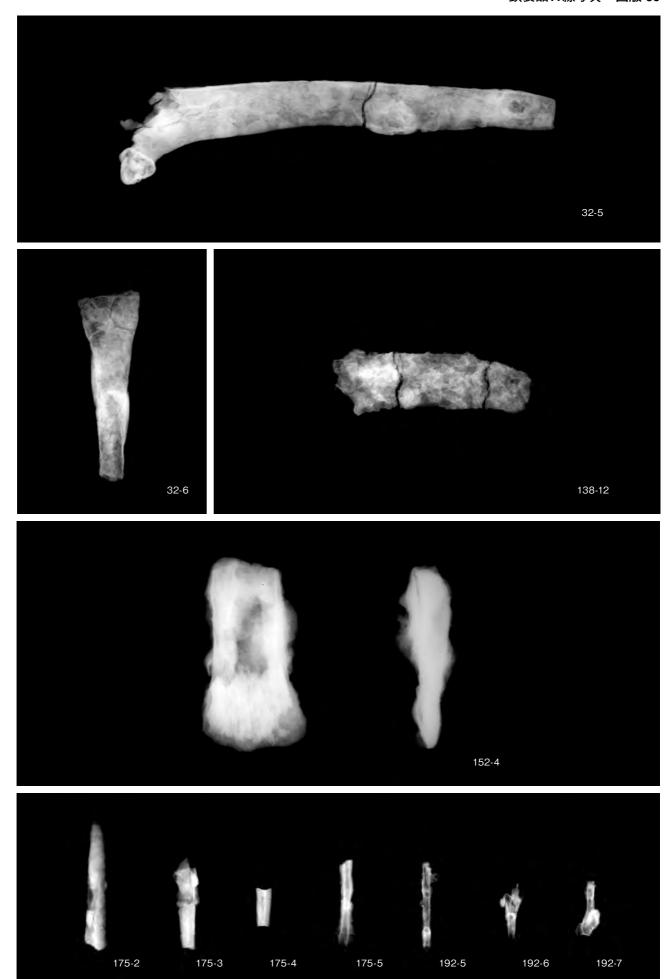


杉沢横穴墓群14・15号横穴墓の出土遺物 図版63



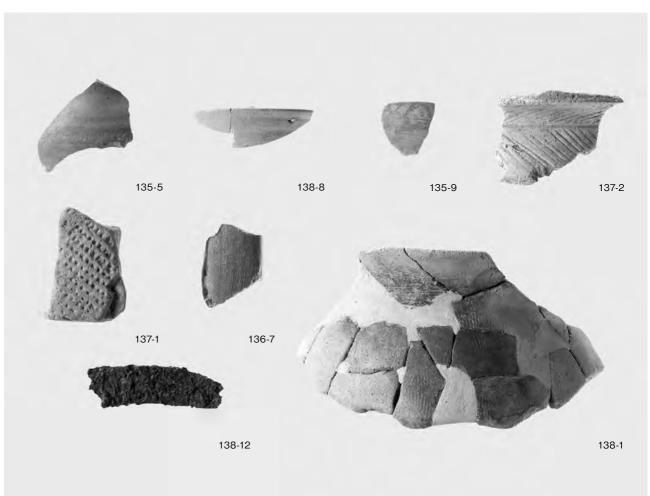
図版 64 杉沢横穴墓群周辺の出土遺物

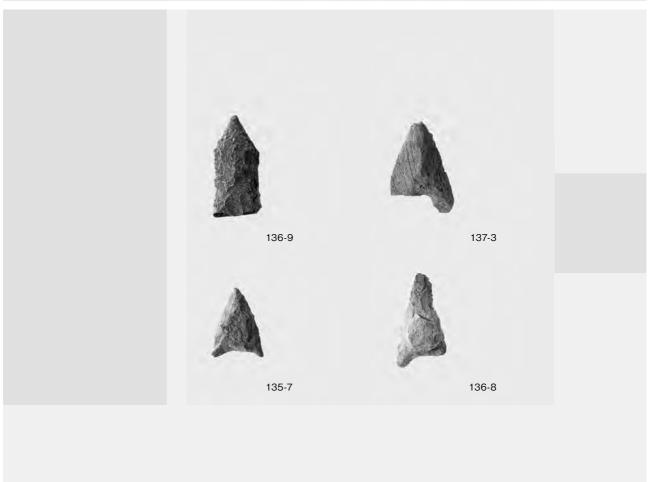


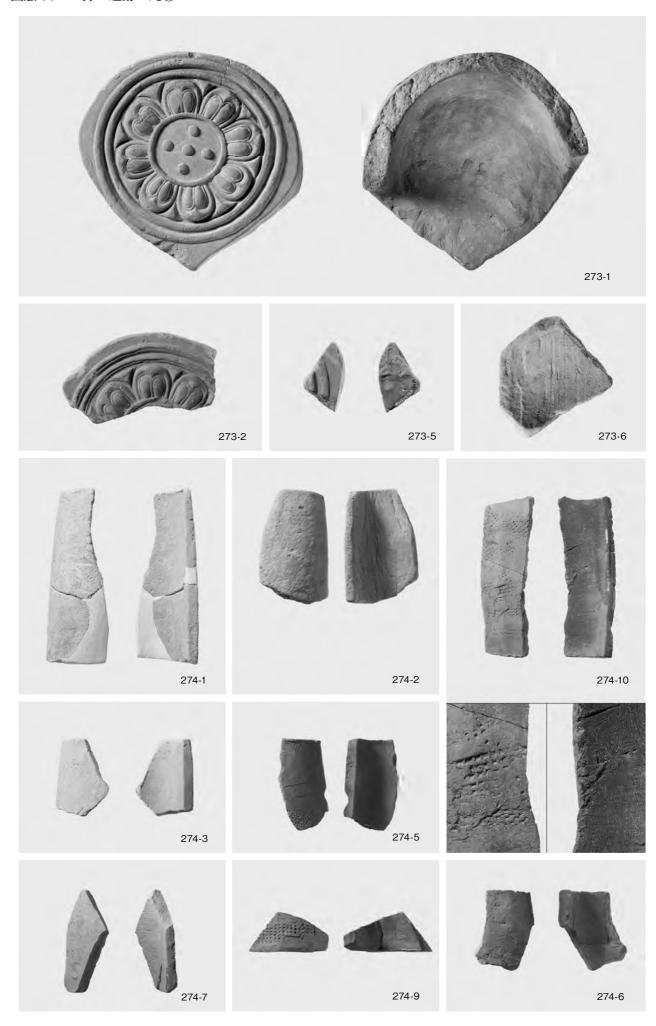


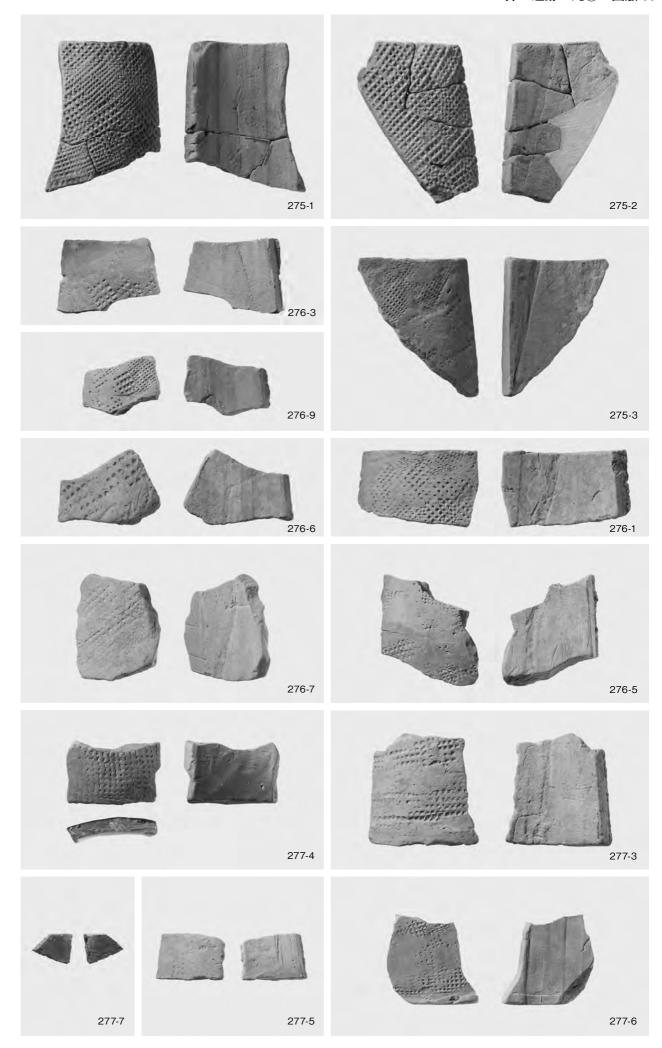
図版 66 杉沢遺跡 D 丘陵の遺物①



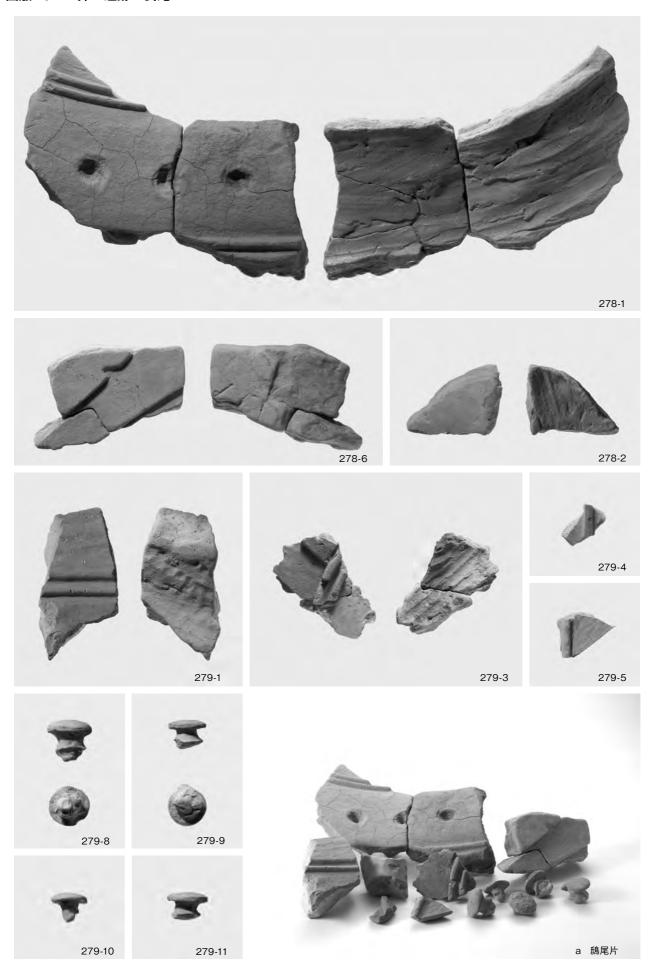








図版 70 三井Ⅱ遺跡の鴟尾







279-14











281-2



281-7



281-5





b 須恵器の焼成失敗品

報告書抄録

ふりがな	すぎさわい	せき・すぎさ	わにいせ	き・	すぎさわよ	こあなぼぐ	h						
書 名	杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群												
副書名	出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書												
巻 次													
シリーズ名	出雲市の文化財報告												
シリーズ番号	31												
編著者名	景山真二(編), 江角 健(編), 幡中光輔(編), 景山このみ(編), 花谷 浩, 佐々木歩美,												
	井上貴央,田村朋美,畠山唯達,渡邉正巳												
編集機関	出雲市市民文化部文化財課												
所 在 地	〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6893												
発行年月日	平成 28 年(2016) 3 月												
所収遺跡	所在地	コード			北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
	別任地	市町村	遺跡番号				则且炒川	柳且. 田代	朔且 /尔凶				
すぎさわい せき 杉沢遺跡	しまねけん 島根県	32203	Y206		35°	132°	2012. 7	7,000 m²	工業団地				
すぎさわ に いせき	いずもし出雲市				22'	49'			造成工事				
杉沢Ⅱ遺跡	むかわちょう 斐川町		Y209		38.98"	19.39"	~						
すぎさわよこあなぼぐん 杉沢横穴墓群													
み い に いせき	3801		Y211				2014. 8						
三井Ⅱ遺跡	外外		(島根県遺跡番号)										
所収遺跡名	種別	主な時代		È	とな遺構	主な遺物		特記事項					
杉沢遺跡	集落	弥生時代中期	胡		X建物跡 弥生土器 X柱建物跡 石器			2つの丘陵に広がる弥 生時代中期後葉の集落					
		加工段,溝, 土坑		加工段, 溝,		鉄器		跡と,尾根上に築かれ					
	散布地			須恵器, 土師器,		た「古代山陰道」と推 定される道路遺構を検							
			移動式竈, 瓦		出した。								
	交通	古墳時代終憲			須恵器, 土師器, 瓦								
杉沢Ⅱ遺跡	集落				竪穴建物跡 弥		弥生土器		弥生時代中期後葉の竪				
				加工段,溝,		石器 鉄器、ガラス小玉		穴建物から島根県内最 古段階の鉄製品・ガラ					
					_	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,		ス小玉が出土した。					
杉沢横穴墓群	横穴墓 古墳時代終末期~		横穴墓 15 基		須恵器, 土師器 鉄器, 鉄滓		ほぼ全ての横穴墓が羨 道・玄門の区別を持つ						
					人骨		「2重構造」であるこ						
三井Ⅱ遺跡	瓦窯 奈良時代前半			万.绖	1 基	軒丸瓦, 鴟尾,		とを確認した。 市内で唯一の古代瓦窯					
—) ± \∞ × × × × × × × × × × × × × × × × × ×	WK-Alduil		以上		丸・平瓦,須恵器		の調査例。備後地域と						
							深い系譜関係にあることが判明した。						
	L								~				

表 紙:レザック66 260kg

見返し:上質紙 110kg

本 文:マットコート 90kg

図 版:アート紙 90kg

出雲市の文化財報告 31

杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群

出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成28年(2016) 3月

編 集:出雲市市民文化部文化財課

〒693-0011 島根県出雲市大津町2760

TEL (0853) 21-6893

発 行:出雲市教育委員会

〒693-8530 島根県出雲市今市町70

TEL (0853) 21-6874

印刷・製本:株式会社 報 光 社